

長野県の考古学

(財) 長野県埋蔵文化財センター研究論集 I

1996. 1. 9

(財) 長野県埋蔵文化財センター

長野県の考古学

(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ

1996. 1. 9

(財)長野県埋蔵文化財センター

序

(財)長野県埋蔵文化財センターが設立されて、はや13年の年月がたちます。長野自動車道用地内の調査から始まった発掘調査は、上信越道・北陸新幹線も加えて、長野県の北半を縦断し、近年は国道事業等にも及んでいます。平成5・6年度に面積的なピークをむかえたこれらの発掘調査は7年度からは急速に縮小し、今後はその整理作業に重点が移ります。

この間、当センターも調査事務所の新設や職員の増員などにより、事業の円滑な推進につとめました。ただ、緊急を要するなかでの重要遺構・遺物の相次ぐ発見などにより、時には嚴冬期に発掘を行なわざるを得ないこともあります。日夜の奮闘によってこの事業を遂行した職員の努力は明記しておかねばなりません。

ところで、埋蔵文化財保護事業に携わるものは、国民共有の財産としての文化財たる遺跡・遺物を最善の方法で取り扱い、最大限の価値を引き出す義務があります。そのためには、通常業務に加え学問的研究を重ね、考古学および関連諸科学の学術的水準に適していくなければなりません。当センターでは、この研鑽の成果発表の場のひとつとして、「紀要」を3号まで刊行しましたが、諸事業により、しばらく休刊状態となっておりました。この論集は、当センターの発足十周年記念事業のひとつとして企画しましたが、折しもセンター発足以来の事業量急増期にあたり、執筆・編集・刊行を円滑にすすめることができませんでした。そのため、内容において時期を失してしまった点もあるうかと思いますが、職員が主に個人的に研鑽した成果を敢えて世に聞い、これまで以上のご指導をいただけるきっかけとなることを念じております。意のある点をお読み取り願います。

おわりにあたり、本書の刊行に際しご協力いただいた方々に御礼申し上げるとともに、一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成7年12月4日

財團法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐 藤 善 處

序

諸磯 b・c 式土器の変遷過程	赤旗 七	1
「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて	川崎 保	27
斜行沈線文を多用する土器群の研究	寺内 隆夫	49
大木 8 b 式の変容（上）	水沢 敦子	84
波状口縁椭形文土器を追う	神村 透	104
石器の研究法	町田 勝則	139
中部高地の弥生墳墓をめぐる—想定・92	青木 一男	172
信濃の横石塚古墳と合掌形石室	西山 克己	191
牛と馬と猪と鹿と	桜井 秀雄	222
銅鏡考	原 明芳	231
瓦塔の生産	出河 裕典	249
中世四宮莊北条における居館と用水	宮脇 正実	255
善光寺平（西南部）の中世城郭	河西 克造	276
松原遺跡を主とする昆虫遺体をめぐって	與水 太仲	328
執筆者一覧		

諸磯 b・c 式土器の変遷過程

赤 塩 仁

I はじめに

II 研究略史

III 分析の視点

IV 諸磯 b・c 式土器群の変遷とその様相

1 各土器群の変遷

2 各土器群の相互関係

3 既存式との対比

4 小結

V 展望にかえて

I はじめに

諸磯式土器が、山内清男氏により縄文時代前期後半の土器として位置付けられ（山内 1939）、約半世紀という歳月が流れている。近年、特に諸磯 b 式以降の研究が盛んではあるが、いまだ多くの課題を指摘できる。本稿では、特に変遷が不明瞭とされる諸磯 b 式から c 式への変遷過程について、若干の考察を試みた。

II 研究略史

諸磯 b 式～c 式土器は、1970 年後半からの目覚ましい資料の増加によって、その研究が飛躍的に進展し、現在の基本的な認識が確立した。従って、ここでは 1970 年代後半以降に目的を絞って研究史を概略したい。特に諸磯 c 式では、中部高地において様々な型式名が与えられ、学会を混乱させた経緯がある。筆者はその辺の事情について別稿にて整理してあるため、重複を避けたい（赤塩・三上 1993、赤塩・三上 1994）。

1970 年代後半からの資料の増加により、1980 年前後には様々な研究者による論稿が用意された。

その中で、今村啓爾氏の業績には注目しておきたい。氏の研究は、施文順序の変化を「手抜きの方向性」として捉え、特に諸磯 b 式の浮縁文の消長に主眼を置き、ある施文手法は新たな施文手法の出現に伴い、その地文として変化してしまうとするものであった。こうした視点に基づき、具体的な成果として諸磯 b 式から c 式の変遷、また c 式の 2 種分類などの成果が発表された（今村 1979、1980、1981、1982）。氏の研究は新しい分析視点の提示という面では十分に評価できるものの、反面、層位的な根拠および遺跡単位資料には欠落した。しかしながら、諸磯式土器研究者は、おおむね好意的な評価を受けてきたといえる。

時を同じくして鈴木敏昭氏、白石浩之氏、谷口康治氏らの論稿が発表され（鈴木敏 1980a

1980b、白石 1981、谷口 1980など)、諸磯b式の細分やb式からc式への移行についての分析が試みられた。それらの多くは浮線文や爪形文の消長に分析の主張が置かれ、b式の大きな流れという観点では一致した見解を示しているものの、細分基準の若干の差異から、結果的には細分案の乱立を招いた。また、c式への移行についても、今村氏の変遷觀と大きな差異を認められるものではなかった。

1980年前後以降では、鈴木敏昭氏が文様帶や文様構成などの観点から、b式からc式土器群の分析を積極的に行った。また、c式を2細分する今村編年には疑義を抱いた三上徹也氏と石原正敏氏の論稿にも注目できる。三上氏は、前期末葉土器群とc式土器群の両者に見られる文様の構成などの分析から、石原氏は、同一住居址から(古)・(新)の土器が共存する事例をあげながら、今村編年案に疑義を投じた。しかし、これらの声は大きな賛同を得ることなく現在に至っている。⁽¹⁾

このように、研究史上では1980年前後にひとつの画期をみることができ、その後はその成果を基調として分析や報告がおこなわれ、大きな意見の違いを見せず、諸磯b式や諸磯b式からc式への変遷觀、ひいてはc式土器の2細分案が、半ば既成されたように扱われてきたといえる。

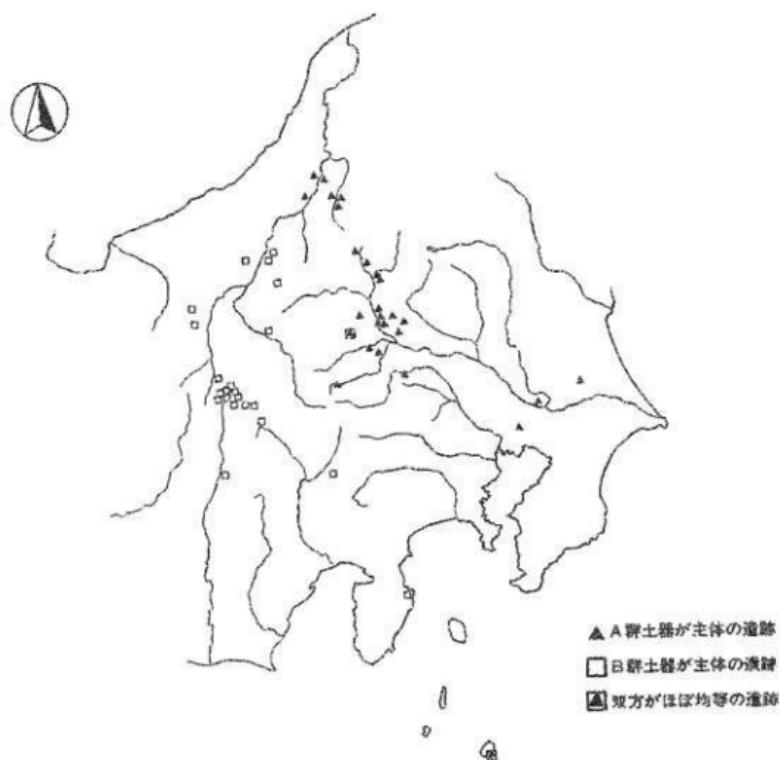
このような状況は、浮線文系土器群の消長に主眼を置いていた、今村氏の方法論の影響を色濃く受けた研究に根ざしたものとまとめることができる。

さて、これまでの研究の中では、なぜ浮線文系土器群に主眼を置くのかという批判的な姿勢は見られず、また、諸磯b式に見られる浮線文系土器、爪形文系土器、沈線文系土器相互の関係を重視した論稿も無い。しかも、特に沈線文系土器は、浮線文系土器の単なるパラエティーとして軽視されてきた風潮にある点を注意したい。鈴木敏昭氏は「諸磯b式では型式学的特徴が集約されているのは、爪形文、浮線文の土器であり、沈線文土器はそれらに準じた受け身的な変化をしたに過ぎなかつたはずである。」(鈴木敏 1980b)と述べ、この状況を端的に物語る。しかし、諸磯b式の変遷を理解するには、爪形文系土器・浮線文系土器の分析のみでは限界があると筆者は考えるのである。

また、筆者の管見によれば、今村氏が細分したc式(古)土器群と(新)土器群は、分布を重複せず、それぞれ固有の分布を示す(第1図)。図中のc式A群七器は(古)段階の土器群、B群土器は(新)段階の土器群を指す。今村氏が指摘するように古段階土器群と新段階土器群を単純に出土する遺跡は存在する。しかし、それらの遺跡は分布領域を異にするのである。つまり、今村編年c式古段階土器群を主体的に出土する遺跡は、群馬県を中心に、新潟県、千葉県⁽²⁾などに分布する。一方、新段階土器群を主体的に出土する遺跡は、長野県を中心とした中部高地に分布する。⁽³⁾

ごく一般的な型式編年の立場では、時間差とみなされる土器群の分布は重複するのが通常の姿である。しかし、今村編年c式(古)と(新)土器群の分布は異なり、それを時間差と考えることの根拠は極めて乏しいといえる様相を示す。

そこで本稿では、あらためて諸磯b式段階からc式段階の土器変遷をたどり、上述した疑問をどう理解すべきか検討することを目的としたい。



第1図 ○式A群土器とB群土器の分布

III 分析の視点

従来、諸磯 b・c 式土器の分析は浮線文系土器群の消長を基本にされてきたといえる。しかし、諸磯 b・c 式土器群には系統的に遡なる沈線文系土器群、爪形文系土器群、浮線文系土器群が並存している。言い換えれば、諸磯 b・c 式は複数の系譜を有する土器群によって構成されている。したがって、当該土器群の分析は、系譜的に連続するそうした複数の土器群を抽出し、それらの相互関係を総合的に観察する必要があると考える。

本稿では、諸磯 b・c 式の土器群をまず文様の主たる施文手法から、(1) 爪形文系土器群、(2) 沈線文系土器群、(3) 浮線文系土器群に分類し、各々の変遷過程を観察した。

また、器形を深鉢 I、深鉢 II に分類した(第9図)。深鉢 I はキャリパー状の形態をとるもの、およびその系譜を引くもの、深鉢 II は口縁部が直上あるいは外反し、バケツ状の形態をとるもので

諸磯 b・c 式土器の変遷過程



第2図 各要素の消長

ある。当該期には他の器形も存在するが、今回の観察では上記の二者に限定した。

後述することになるが、分類した主たる施文手法、器形、それに文様モチーフは、相互に強い結びつきを持っており、上記のような分類の妥当性を裏付ける。

また、変遷を辿るためにには土器群の適時的区分が必要になる。本稿では諸説①・②式を先学諸氏の研究を参考に、都合5段階に区分した(第2図)。なお、この5段階は変遷過程を便宜的に表現したもので、いわゆる型式の細分を意図したものではないことも、特にことわっておきたい。

各段階のメルクマールは以下のように概略できる。

第1段階—爪形文系土器群と沈線文系土器群により占められる段階

第2段階—浮線文系土器群が新たに出現した段階

第3段階—爪形文系土器群が消滅した段階

第4段階—深鉛Ⅰの浮線文が消失した段階

第5段階—深鉢Ⅰの器形変化と矢羽状あるいは（）状モチーフが胴部へ定着した段階

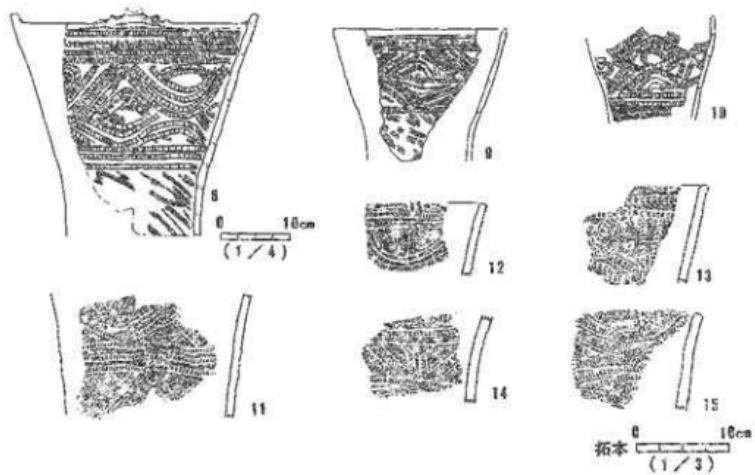
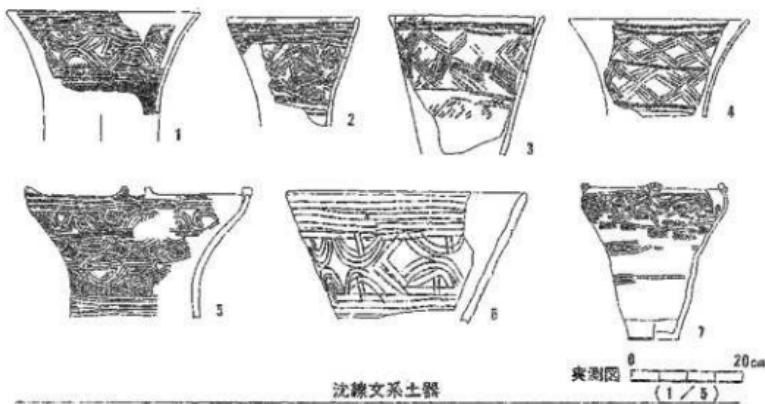
以下本稿では、各段階における、各々の土器群の内容を先ず分析する。そして、その結果を基に、第1段階から第5段階にわたり、各土器群がどのような相関性を有して変遷を遂げてゆくのか、考察を試みたい。

IV 諸磯 b・c 式土器群の変遷とその様相

1 各土壌群の変遷

(1) 爪彫文系土器群の変遷

第1段階および第2段階に認められる。第2段階をもって消滅する。



第3図 第1段階の土器様相

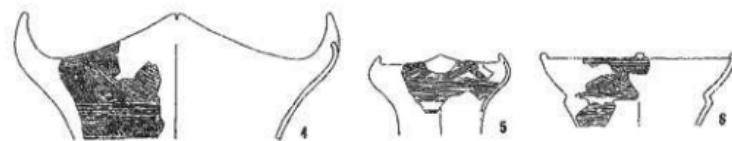
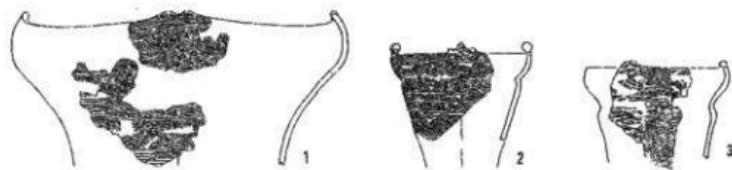
〔第1段階〕(第3図)

深鉢Ⅰの器形は認められない。深鉢Ⅱは口縁部と腹部に2~3条の連続爪形文が施文され、その間に路磧a式の肋骨文の系譜を引く鋸齒状文が施文される。腹部以下は斜縞文が施される。ものがある。

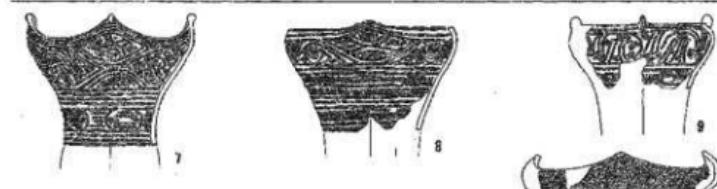
鋸齒状文は前半期には直線的であるが、後半期には徐々に文様モチーフが前線化し、崩れ始めるものがある。

〔第2段階〕(第4図)

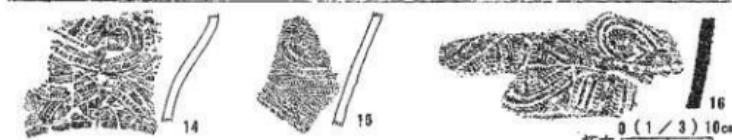
諸種 b・c 式土器の変遷過程



沈維文系土器



浮線文系土器



拓本
0 (1/3) 10cm



拓本
0 20cm

第4図 第2段階の土器様相 (1/5)

深鉢 I の器形は認められない。深鉢 II は第 1 段階と同様の文様構成をとる。鋸歯状文は一層曲線化が進み、いわゆる蕨手状文へ変化する。特に注目したいのは、蕨手状文を構成する連続爪彫文の間に生じる半隆起帯に、斜めの刻みや刺突文が施文されることである。ここに浮縁文の萌芽を見ることができる。

爪彫文系土器群はこの段階で消滅する。

(2) 沈縁文系土器群の変遷

第 1 段階～第 5 段階まで認められる。深鉢 I と深鉢 II がある。深鉢 II は鋸歯状文との相間が強く、第 2 段階の終わりまでほとんど変化せずに存在する。第 3 段階以降は鋸歯状文は施文されなくなる。また、深鉢 I には波状口縁を呈するものが現われる。第 1 段階～第 3 段階と第 4 段階～第 5 段階の間に一線を画することができる。

〔第 1 段階〕(第 3 図)

深鉢 I は認められない。深鉢 II は口縁部と胴部に 2～3 条の平行沈縁文が施文され、その間に鋸歯状文が沈縁で施文される。文様構成は爪彫文系土器と同一である。後半期には爪彫文系土器群と同様に、文様の曲線化傾向が認められるものがある。同時にそうしたものの中には、口縁部がやや内湾するものが現われる。深鉢 I の祖形と見なされる一群である。

〔第 2 段階〕(第 4 図)

深鉢 I が明確に出現し、深鉢 II との両者が並存する。両者は同様に沈縁文で文様が描出されるが、文様モチーフが明らかに異なる。

深鉢 I は第 1 段階の後半にその萌芽が認められ、時間の推移とともに口縁部の内湾度を強め、第 2 段階で明確な器形となる。口縁部の形態には、平縁と波状口縁の二者がある。平縁の場合、ほとんどが 4 単位の小突起を持ち、純粹な平縁は少ない。

深鉢 I の文様およびその構成は、口縁部と胴部に 2～3 条の平行沈縁文をもち、その間に渦巻文が施文される。文様構成は前段階の深鉢 II と同様であるが、鋸歯状文が渦巻文に変化している点に大きな相違を認める。

深鉢 II は第 1 段階と同様の文様をもつ。鋸歯状文が、深鉢 I では渦巻文に変化し、深鉢 II では残存することに注目したい。

〔第 3 段階〕(第 5 図)

鋸歯状文を持つ深鉢 II は見られなくなる。

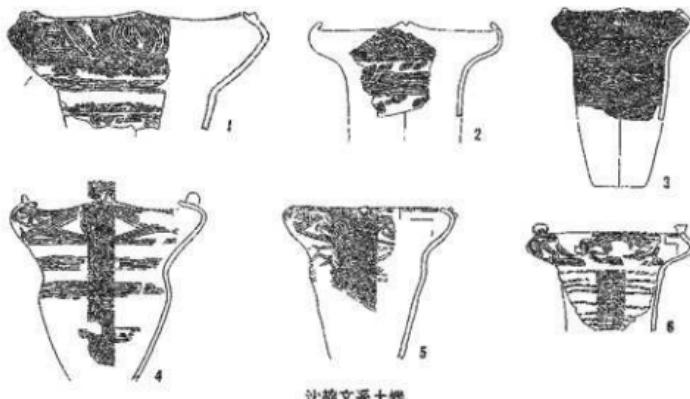
深鉢 I は口縁部の内湾度がさらに強まり、畳曲に近い形状となる。文様の構成は基本的には前段階と同様であるが、渦巻文の施文域が狭くなる傾向にある。これに伴い、当段階の終り頃には、渦巻文は小さく描かれたり、渦巻の両側の弧状の部分だけが描かれるいわゆる風車状渦巻文に変化していく。

〔第 4 段階～第 5 段階〕(第 6・7・8 図)

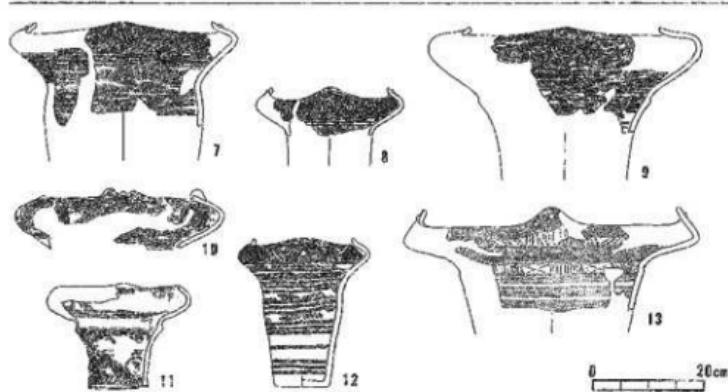
深鉢 I と深鉢 II が並存する。

深鉢 I は群馬県・埼玉県を中心とする地域に分布が集中し、深鉢 II は茨城県・山梨県を中心とし

指標 b・c 式土器の変遷過程



沈線文系土器



浮線文系土器

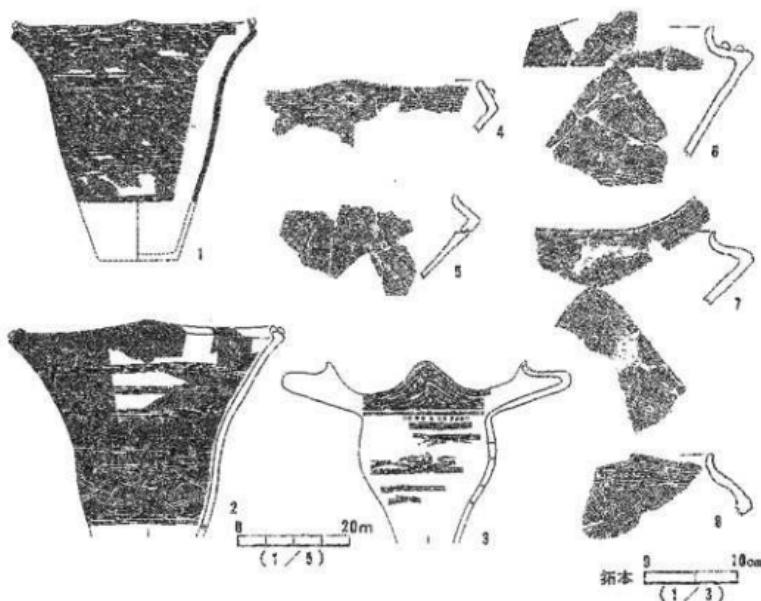
第5図 第3段階の土器様相 (1/5)

た地域に広く分布する。

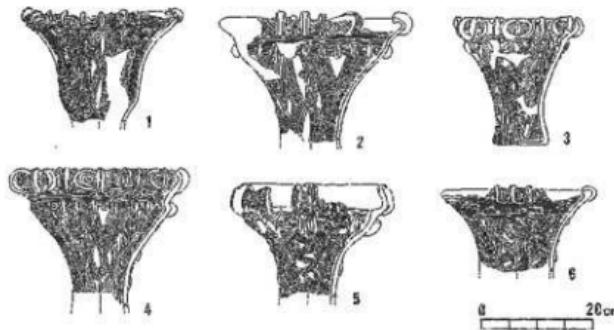
深鉢 I には深鉢 I a と深鉢 I b が存在し、第 5 段階には双方の要素を合わせ持った深鉢 I' に変化するようである。

深鉢 I a は前段階からの系譜を引くもので時間の経過とともに口縁部が屈曲→屈折→退化という変化を示し、口縁部から徐々に渦巻状の文様は影をひそめるが、新たに胸部に渦巻文が施文されるようになる。

胸部の渦巻文は、第 5 段階には () 状や矢張状の文様に変化し、深鉢 I' の胸部の文様となる。



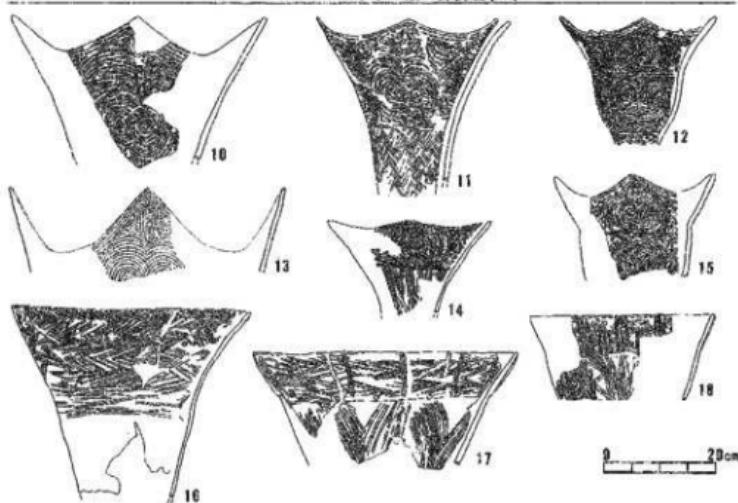
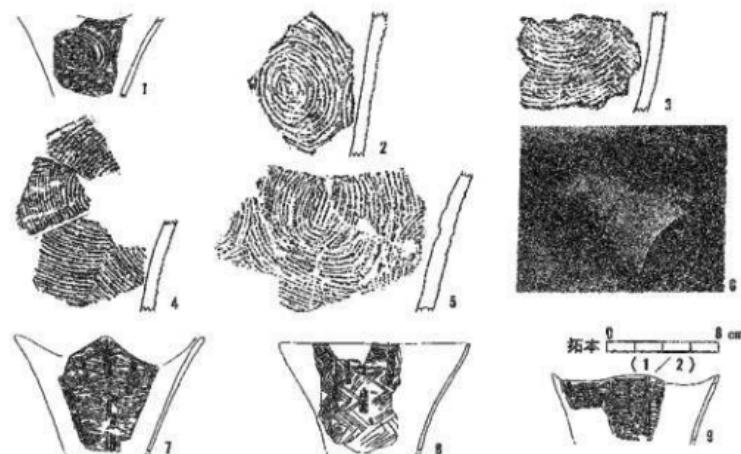
第6図 第4段階深鉢Iの様相



第7図 第5段階深鉢I'の様相 (1/5)

深鉢I bは口縁の内屈する度合いが少ない類のもので、小さな波状口縁を呈する。脚部には鉛錆文を地文として、横方向に数条の平行沈錆文が微段にわたって施される。

深鉢IIには波状口縁が出現するが、平縁も存在する。捲曲文が施文される一群と、2~3本を一単位とした神状モチーフが施文される一群の二者がある。文様描出する技法には、結節になるもの



第8図 第4～5段階深鉢IIの様相 (1/5)

とそうでないものがある。⁽⁴⁾

(3) 浮線文系土器群の変遷

第2段階に出現し、第5段階まで認められる。第2段階～第3段階までは深鉢Iの器形をとり、第4段階以降は深鉢IIの器形に変化する。

【第1段階】(第3図)

浮線文系土器群は認められない。

【第2段階】(第4図)

深鉢Iのみである。口縁部と底部に2～3条の浮線文を巡らし、その間に浮線文で渦巻文が施文される。その文様は沈線文系土器群第2段階の深鉢Iとほとんど同じであり、沈線文を浮線文に置き換えたようと思える。

【第3段階】(第5図)

深鉢Iのみである。口縁部の内湾度はさらに強まり、屈曲に近い形状を呈するようになる。鋸齒状文から変化してきた渦巻文は僅度に発達し、同時に浮線文手法の発達も頂点に達する。

しかし、後半期になるに従い、腹部の文様がせり上がり、口縁部の施文域が徐々に狭まる。これにともない、渦巻文は本来的な姿を失い、第3段階の終わり頃には矮小化したり、いわゆる風車状渦巻文に変化する。

諸機b式のメルクマールである浮線文による渦巻文の絶頂期は、そう長続きせずに衰退していく。

【第4段階～第5段階】(第8図)

深鉢IIの器形に変化する。集合条線地文を基本として渦巻文が施文されるものと、2～3本を一単位とした棒状モチーフが施文されるものの二者がある。両者とも沈線文系土器の深鉢IIと同一モチーフである。⁽⁵⁾

(4) 各土器群の段階的な変遷

第1段階から第5段階の土器変遷を簡単に整理したい。

【第1段階】(第3図)

爪形文系土器群と沈線文系土器群は、鋸齒状文が施される深鉢IIによって占められる。後半期には、鋸齒状文が曲線化し始める沈線文系土器の中に、口縁部が内湾する器形をとるもののが現われる。

【第2段階】(第4図)

浮線文系土器が新たに加わる。

文様が渦巻化した沈線文系土器群の口縁部の内湾が明瞭化し(深鉢I)、浮線文系土器群もこれに文様・器形とも同調する。

爪形文系土器群の一部は、文様は曲線化するものの、深鉢IIの器形をとる。

【第3段階】(第5図)

爪形文系土器群が消滅する。

諸磯 b・c 式土器の変遷過程

調部文様の施文域が広まるにつれ、口縁部の施文域が狭められ、渦巻文はその影響で矮小化する傾向を示す。

口縁部の内湾は眉曲に近くなる。

鋸齒状文をもつ深鉢IIはこの段階から認められなくなる。

[第4段階～第5段階] (第6・7・8図)

深鉢Iは、沈線文系土器群のみになる。

また、深鉢Ia・Ibの二つの器形が存在する。

深鉢Iaの口縁部の眉曲は眉折→退化という変化を辿るとともに、渦巻文は口縁部から姿を消し、新たに胸部に施文されるようになる。第5段階になるとこの渦巻文は、()状あるいは矢羽状のモチーフに変化する。

第5段階には、深鉢Ia・深鉢Ibが再編成される形で、深鉢I'が出現する。これらの変化は群馬県・埼玉県を中心とした地方で認められる。一方、深鉢IIには、沈線文系土器群と浮線文系土器群が存在し、両者とも、渦巻文あるいは棹状モチーフが施文される。これらの土器群は長野県を中心とした中部高地に分布する。

2 各土器群の相互関係

以上、それぞれの土器群の変遷過程を概観した。その変遷の過程は大きく二つに分離して考えることができる。それを第Iプロセス、第IIプロセスと便宜的に仮称する。

第Iプロセスは第1段階から第3段階の変遷過程である。沈線文系土器群の変化が土器群全体の変化的イニシアティブをとるような変化の過程である。あたかも、沈線文系土器群がモデルとなり、爪形文系土器群や浮線文系土器群がそれをコピーする形で変化を遂げているように見える。

第IIプロセスは第4段階以降の変遷過程である。上記のような関係が失われる器形と継続する器形が出現し、それそれが独自の文様を展開する変遷過程、と要約できる。

このように、諸磯b・c式の土器変遷は、第1段階～第3段階と第4段階～第5段階の間に、一線を画すことができると考える。以下、具体的に説明を加えたい。

第Iプロセス (第1段階～第3段階)

a キャリバー形土器・深鉢Iの出現

第1段階後半、曲線化した鋸齒状文が施文される沈線文系土器群の中に、口縁部が内湾する器形が出現する。深鉢Iの祖形と見なされる器形である。この口縁部の内湾化が、従来、浮線文系土器群との関係を取りざたされていた爪形文系土器群ではなく、曲線化した鋸齒状文が施文される沈線文系土器群に出現したこと注目したい。

第1段階の後半に出現する深鉢Iの文様は第2段階以降、浮線文という新しい文様要素を加えて、加速度的に曲線化し、渦巻文へと変化する。諸磯b式土器群を構成する重要なモチーフとなるものだからである。

なぜ、深鉢 I の粗形が沈線文系土器群の中から出現したのか。その理由として、沈線文による文様は、より曲線化し易いという点に注目したい。しかも曲線化した文様は、從來の鋸齒状文の伝統から逸脱した文様となる。文様が旧来の鋸齒状文という伝統から逸脱すると同時に、鋸齒状文=深鉢 II という伝統的な相關性からの逸脱も可能となったと考えられないだろうか。この伝統的な相關性については後述する。

いずれにしろ、新しい器形である深鉢 I は沈線文系土器群の変化の中から出現したのであり、そのことは沈線文系土器群の変容が、土器群全体を変容させる起動力として機能したことにつながる。

b 鋸齒状文から渦巻文へ（第9図）

鋸齒状文は諸磯 a 式からの系譜を引くモチーフであり、第 2 段階の終わりまで継続するが、先述したように第 1 段階の後半から直線化の傾向を見せるものが出現する。やがて曲線化した鋸齒状文は渦巻文へと変化する。

鋸齒状文の曲線化により三角形の頂点は丸みを帯び、やがて波状のモチーフへと変化する。また二重に描かれる鋸齒状文では内側の三角形が丸みを帯び、円形のモチーフに変化することは容易に想像される。円形のモチーフはやがて渦巻文へと変化し、波状の中の渦巻文という構図が完成する。

また、この過程で文様の単位数が意識されるようになる。鋸齒状文から変化した波状文は横方向に徐々に大きくなり、器面を 4 単位に分割するように施文される。諸磯 b 式土器が 4 単位で構成されることと密接に結び付く事象である。

c 器形と文様・渦巻文と篆手状文

渦巻文と爪形文系土器に施文される篆手状文の関係については、以前から関連性が指摘されているものの、その関係を積極的に評価した研究はない。

これは、渦巻文が沈線文や浮線文で表現され、深鉢 I に施文されるのに対して、篆手状文は爪形文で表現され、深鉢 II に施文されるために、両者の関係を分かりにくくしているからである。

こうした事象が生じるのは、文様の施文手法とモチーフ、器形の間に一定の規則が存在したためと考えることができる。各土器群の変遷の概観で見たように、鋸齒状文のモチーフおよび爪形文の施文手法によって表現されたモチーフは深鉢 II の器形に蘊藏される。一方、渦巻文のモチーフは深鉢 I の器形に施文される。要約すれば、〈鋸齒状文のモチーフあるいは爪形文の施文手法=深鉢 II〉、〈渦巻状モチーフあるいは浮線文の施文手法=深鉢 I〉という文様施文と器形の規則の存在が推測できる。

したがって、篆手状文は渦巻文に近いモチーフであるが、爪形文という施文手法をとるために深鉢 I ではなく、深鉢 II に施文されると考えられる。

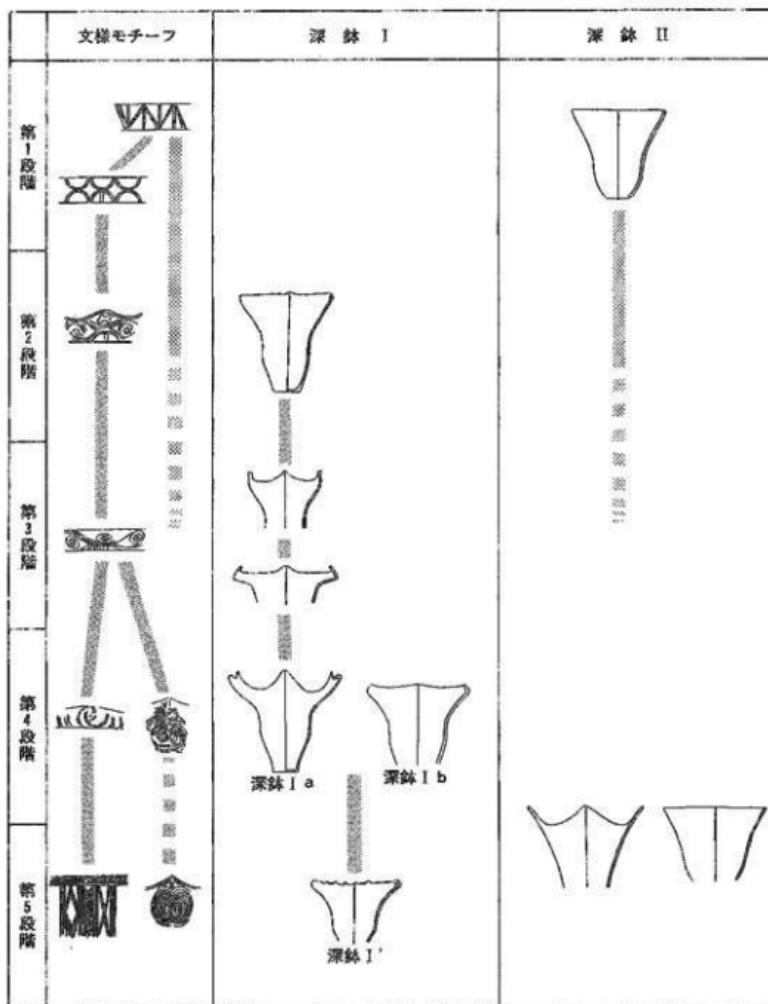
d 浮線文系土器群の成立

浮線文の起源については様々な見解があり、(1) 北白川下層 II c 式に起源を求める見解(谷口 1980) や (2) 爪形文系土器群の連続爪形文間に生じる半周起常に起源を求める見解(中島

踏破 b・c 式土器の変遷過程

1980)などをあげることができる。

筆者は浮縫文の起源を爪形文系土器群の文様に求める。連続爪形文間に半彫起帯が認められるることは既に述べたが、こうした手法はかなり早い段階から認められるものである。



第9図 器形と文様モチーフの変遷

しかし、こうした手法の出現＝浮縫文系土器群の成立とみなすことは出来ない。説明 b 式は複数の系統的に連なる土器群によって構成されており、それらの土器群の相互関係の中で浮縫文が施される土器群が整合的に整理されるとき、はじめて浮縫文系土器群の成立と考えるべきだからである。

爪形文系土器群に施される文様は徐々に曲線化するが、溝巻文ほど曲線化しない。これはおそらく、爪形文の文様は溝巻文化しようとしたが、施文手法の制約を受けて不可能であったからと考える。半截竹管を用いて溝巻文を施文する場合、必ず、半截竹管を持ちかえるか、土器自体を面臨させる必要がある。溝巻文を施文する際の大きな制約となる。したがって、爪形文系土器群に施される薪手状文は、鋸歯状文から溝巻文への変遷過程で、曲線化が進んだものの、完全に溝巻文化していないモチーフと解釈することができる。

第 1 段階の後半では、施文手法の制約はあるものの爪形文系土器群の文様は直線化の傾向を強める。こうしたモチーフを施文する連続爪形文間の大半は、斜めの刻みを施す半隆起帯になっており、中には完全に隆起線化したものもある。

この段階では沈縫文系土器群の一部は曲線化の傾向を強めている。爪形文系土器群の文様も、これを追うように曲線化の傾向を強める。しかし、施文手法の制約から、沈縫文系土器群の曲線化に追いつくことができない。もし、一層の曲線化を進めるすれば、爪形文の施文手法を捨て去る必要があったと推測するのである。つまり、爪形文を捨て、連続爪形文間に生じた半隆起帯を八形文に代用することにより、沈縫文系土器群の曲線化への道筋を闊ったと考えたい。爪形文による施文から脱却し、半隆起線文により文様モチーフを施文することで、施文手法上の制約は緩和され、沈縫文と同等の専門化を可能にした。描くべき文様モチーフをそのままに、施文手法を変化させることで、沈縫文系土器群の文様の専門化（溝巻文化）に同調することができたのであった。

第 2 段階に至り、半隆起線文は浮縫文化する。同時に、文様モチーフはより曲線化し、深鉢 I の器形に施文される。施文手法が爪形文から浮縫文へと変化することで、それまでの爪形文の手法＝深鉢 II という文様と器形の規則からの脱却が可能となり、前段階で既に規則から脱却し、文様が曲線化した沈縫文系土器に、器形まで同調できたのである。

浮縫文系土器群は爪形文系土器群から派生し、爪形文系土器群がはたしていいた役割を担ったのであろう。第 3 段階以降、爪形文系土器群が消滅するのはこの理由のためである。第 2 段階の爪形文系土器群と浮縫文系土器群の並存は、移行期の過渡的な様相を示すと言える。

e 沈縫文系土器群、爪形文系土器群、浮縫文系土器群の相互関係

爪形文系土器と沈縫文系土器の文様が極めて類似している例がある。どちらか一方の文様をコピーしたかのようである。また、両土器群の変遷過程（曲線化）も同様であると言ってよい。これは両土器群が独自に変遷するのではなく、互いに関係を持ちながら変遷したことによろう。

同様なことは浮縫文系土器群と沈縫文系土器群の間にも言える。上南原遺跡 4 号住居址出土の二例（第 4 図 4 と 10）をあげることができる。両者は浮縫文と沈縫文という施文手法の違いはあるが、文様モチーフは爪二つである。

このように異なる施文手法で表現されながら、極めて類似した文様モチーフが認められるのは、どちらかの文様モチーフが「モデル」⁽⁶⁾となり、それを異なる施文手法で「コピー」⁽⁶⁾したからだと考える。では、どの土器群の文様モチーフが「モデル」となったのか。筆者は沈縫文系土器群が「モデル」となったと考える。沈縫文の施文手法は施文が容易で、しかも変化を生じ易い。沈縫文系土器群の文様モチーフを主体に、それを爪形文系土器群、浮縫文系土器群がコピーするという関係を保ちながら、各土器群は変遷したと考える。

従来、諸職 b 式土器の研究は浮縫文系土器群を中心に行なわれ、沈縫文系土器群は浮縫文系土器群のパラエティーとして軽視されてきたことは、研究史でも述べた通りである。しかし、沈縫文系土器群は受け身的な存在ではなく、むしろ諸職 b 式ひいては c 式期にわたり、主役とも言うべき役割を果した土器群と考えられる点を強調したい。

第二プロセス（第 4 段階～第 5 段階）

a 深鉢 I の器形分化と浮縫文の消滅

第 4 段階に至ると深鉢 I の口縁部は強く唇曲し、いわゆる靴先状を呈し、頸部がわずかにくびれるようになる。これを深鉢 I a と仮称する。

深鉢 I a の文様構成は第 3 段階と同様である。第 3 段階を通して見られる頸部の施文域の拡張傾向は、第 4 段階に至りさらに顕著になる。それにともない、頸部以上の施文域は狭くなり、渦巻文はいわゆる風車状渦巻文に変化したり、小さななものに変化する。第 3 段階まで主要モチーフであった渦巻文は従属的な文様へと変化する。しかし、渦巻文は消えるわけではない。頸部に施文されるようになり、同時に前段階での単位数を崩す。

また、この段階で、新たに口縁部がわずかに内側に折れ、小さな波状を呈する深鉢 I b が出現する。深鉢 I b は第 3 段階にもわずかに認められるが、量的に安定するのはこの段階からである。

その口縁部には數条の条線が施文され、小さな波状部分に生じるわずかな三角形の隙間には円形の瘤が貼付されたり、縦方向に 2 ～ 3 条の条線が施される。頸部には網文を地文とし、横方向に數条の平行沈線が数段にわたって施される。

深鉢 I a・深鉢 I b はいずれも深鉢 I の系譜を引くものである。第 3 段階まで深鉢 I は沈縫文系土器群、浮縫文系土器群の双方に認められるものであったが、第 4 段階では深鉢 I a・深鉢 I b とともに浮縫文は施文されず、沈縫文に統一される。

浮縫文が施文されなくなった理由は器形の変化にある。つまり、口縁部の施文域が極端に狭くなり、経密化した文様が要求された結果、浮縫文という施文手法では対応できなくなったためだと考えられる。沈縫文系土器群の文様をコピーするがゆえに生じた技術的限界が浮縫文を消滅させたのである。

b 深鉢 I の変容と集合条線の発達

第 5 段階に至ると深鉢 I a・深鉢 I b は姿を消し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部がわずかに内屈する平縁の深鉢（深鉢 I'）が出現する。口縁部は矢羽状や横方向の集合条線

を地文として、棒状や耳状の貼付文が施される。胴部には器面を縦に区画するように、矢羽状や()状の集合条線文が施される。胴部のこうした文様は、第4段階の溝巻文が縱方向に広がり、定着したものである。器面に全体に、刺突をもつボタン状貼付文を施すことが多い。

深鉢I'の口縁部の文様や胴部の文様は、深鉢I'aの系譜上にあると考えられる。器形はI'bの口縁部が、平縁に変化したものと考えられる。明確ではないが、第4段階で新たに出現した深鉢I'bが祖形となり変化したものであろう。

文様は集合条線の手法が発達し、器面全体に施文される。前段階で施文された溝巻文は姿を消す。

ところで、集合条線の余白に縄文が施文されているものがある。これは第3段階までの深鉢Iの胴部に施文されている斜縞文を連想させる。第2段階からの深鉢Iの系譜的通なりを示しているものと考える。

c 深鉢IIにおける文様モチーフの変換

深鉢IIは第1段階から第3段階まで大きな変化をほとんど見せなかつたが、第4段階で大きく変化し、波状口縁を呈するものが現われるようになる。しかし、その後の変化は少なく、第4段階と第5段階を明確に区分することはできない。そして、それらは大きな溝巻文が施文されるもの（深鉢II'a）と、棒状の貼付文が施されるもの（深鉢II'b）の二者に分類できる。⁽⁷⁾

深鉢II'aは波状口縁をもち、口縁部に集合条線を地文として結節沈線文あるいは結節沈線文による溝巻文が施文されるものと、地文を持たずに半截竹管を用いた沈線文により溝巻文が施文されるものである。一つの溝巻文が大きく施文されるものと、同一方向に二対一単位の大きな溝巻文が施文されるものなどがある。前者から後者への変化を想定することができる。胴部には矢羽状や()状の集合条線を地文にボタン状の貼付文が施されるものが多い。第5段階の深鉢I'の胴部文様に類似する。ボタン状の貼付文には刺突がなく、こよりのものが二個一対で施文されることが多い。

なお、結節の浮線文や沈線文は、新しくなるに従って密になるものと思われる。

深鉢II'bには波状口縁と平縁のものがある。口縁部には矢羽状の集合条線を地文として、2~3本を1単位とした結節浮線文や結節沈線文が施文される。胴部には深鉢II'a同様の集合条線文とボタン状貼付文が施文されるものが多い。

第3段階までの深鉢Iと第4段階以降の深鉢II'aの間に見られる、文様モチーフや浮線文手法の類似は、從来から指摘されていた。しかし、器形の相違から系譜的な連続性を肯定し得ず、第5段階の深鉢I'の口縁部に見られる刻みの入った貼付文が、伸長・曲線化することで、第4段階以降の深鉢II'aのモチーフや施文手法が成立する、と考えるのが大方の見解であった。しかし、筆者は、第5段階の深鉢I'の貼付文を介在させず、第3段階の浮線文から第4段階以降の結節浮線文が成立し得たと考える。つまり、それを可能にしたのは器形の変換である。

第4段階以降に見られる溝巻文を施文する七櫛縄（深鉢II'a）の口縁部の文様と第3段階の深鉢Iの文様は地文さえ交換すれば類似している。異なるのは器形である。

第3段階の浮線文系土器群（深鉢I）では口縁部が極端に狭くなり、渦巻文を施すことが技術的に困難になる。もし、ここで渦巻文の施しに固執し、渦巻文を発展させようすれば、深鉢Iの器形では不可能である。そこで、渦巻文を深鉢IIに施すことで矛盾の解決を図った。すなわち、第3段階の浮線文系土器（深鉢I）の文様を、深鉢IIに移しかえることにより、第4段階以降の深鉢II α が誕生すると考えるのである。

第4段階以降の深鉢II α ・II β に見られる結節浮線文の文様モチーフと沈線文あるいは結節沈線文の文様モチーフの関係は、第3段階の深鉢Iに見られる浮線文による文様モチーフと沈線文による文様モチーフの関係、「モデル」と「コピー」の関係と同様である。第3段階の深鉢Iに見られた関係が、第4段階以降の深鉢II α ・深鉢II β に認められることは先述した器形の交換の傍証となろう。

d 第4段階の漸期・伝統の解体と再構成

第3段階の最終末、深鉢Iという器形も渦巻文という文様モチーフも、発展の飽和状態を迎え、そこからの脱却の必要性が生じた。そして、それまでの伝統的な要素の解体と、新しい要素を加えた再構成が必然的に行なわれた。第4段階における深鉢I bの出現、そして第5段階における深鉢I a・I bの再統合による深鉢I'の成立、深鉢Iと深鉢II α の間ににおける文様の交換（文様から見れば器形の変換）等はまさに解体と再編を如実に物語っている。

さて、注目すべきは、土器群の変化のあり方に地域差の顕現を認めることがある。群馬県を中心とした地方では、第3段階以前に認められた沈線文系土器群と浮線文系土器群に見られた「モデル」と「コピー」の関係は失われ、集合沈線文を施すした特徴的な土器（深鉢I a、深鉢I b、深鉢I'）が製作される。

一方、長野県を中心とした中部高地では、渦巻文を施す深鉢II α や棒状モチーフを施す深鉢II β が製作され、第3段階以前に見られた「モデル」と「コピー」の関係を離脱し、結節浮線文や結節沈線文・沈線文を用いて極致的な渦巻文の発達を見る。

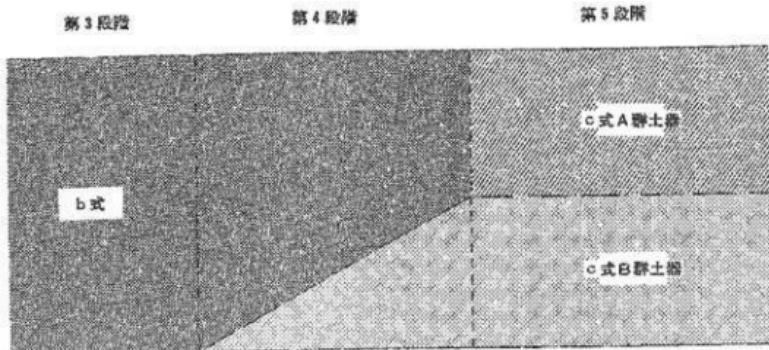
つまり、二つの地域では第3段階最終末の飽和状態から脱却する方向性が異なっていたのである。新たな方向性を模索する段階で大きな地域差が具現化したといえよう。

3 既存型式との対比

第1段階から第5段階までを現在の型式名前にてはめたい。

第1段階から第4段階に見られた、深鉢I・深鉢I a・I bを呈する土器群は諸磯b式に、第5段階の深鉢I'・深鉢II α を呈する土器群は、諸磯c式の型式内容に相当する。第4段階ではb式にあたる土器群と、c式に相当する土器群が同時に存在することになる。言い換えれば、第4段階の深鉢Iの土器群は、従来よりb式最末段階として捉えられているが、深鉢IIの土器群はc式として考えられている。

しかし、本稿での検討では、第4段階以降の深鉢IIをとる土器群は、文様モチーフや文様構成など第3段階までの深鉢Iの土器群との類似点が多いうえに、沈線文系土器群と浮線文系土器群の



第10図 諸磯 b式～c式の変遷模式図

「モデル」と「コピー」の関係が繼續している。つまり第4段階以降の深鉢IIは、第3段階の深鉢Iにその系譜を求めることができる。

第10図ではc式A群土器が第5段階の深鉢I、B群土器が第4段階から5段階の深鉢IIにあたることを示した。

c式A群土器とB群土器は、第1図の分布図が示すように、その分布が大きく異なる。このことは、第5段階の深鉢Iの土器群と、第4段階以降の深鉢IIの土器群が同一時間内に、地域を越えて存在した二系統の土器群であることを示している。

本稿の場合、第4段階の深鉢I a・I bの土器群は、現在、諸磯b式として捉えられており、第5段階の深鉢I'は諸磯c式、今村氏c式(古)とした内容にあたる。一方、第3段階からの系譜を認めた深鉢II α・深鉢II βは諸磯c式、今村氏がc式(新)とした内容にあたる土器群である。このように、第4段階に、諸磯b式土器とc式土器が同時に存在する、という一見不自然に見えるこの現象は、実際の土器の変化を考えるうえでは、考慮に入れねばならないことである。つまり、このことは、群馬県を中心とした地域では、第3段階までの「モデル」・「コピー」の関係を破棄したため、b式の型式概念に近い内容の土器(「モデル」に相当する土器)が残りやすくなつたが、中部高地地方では、満巣文をより発達させようという働き掛けがあり、そのためにc式の型式概念に近い内容の土器が作られるようになった、という背景による。

このように、中部高地地方が、若干早くc式的要素を取り入れたことで、第4段階は諸磯b式の内容を持つ土器群と、c式の内容を持つ土器群が、異なった地域で同時に存在した、まさにb式からc式への移行期にふさわしい時期だったのである。

4 小結

本稿では、諸磯b式からc式の土器群を分析・検討した結果、以下のような点をまとめることができた。

- ① 爪形文系土器群と浮線文系土器群は、沈線文系七器群を「モデル」とした「コピー」とも言うべき存在である。
- ② 浮線文系土器群の起源は、爪形文系土器群に求めることができる。
- ③ 第4段階は、b式の要素を持った土器群とc式の要素を持った土器群が、同一時間内に地域を異にして作られた時期である。
- ④ 諸磯c式A群土器は、沈線文系土器群と浮線文系土器群の「モデル」・「コピー」の関係に終止符を打つことにより、沈線手法の発達をみた。一方、B群土器は、器形を変換することにより、浮線文や渦巻文の発達をみ、「モデル」・「コピー」の関係は継続している。そして、両者は諸磯b式からの系統を追うことができる。このため、c式土器を(古)と(新)という時間的な前後関係で捉えることは出来ない。

V 展望にかえて—諸磯式後半土器変遷の背景—(第21回)

諸磯a式からの伝統 爪形文という施文手法・鋸齒状文というモチーフ・深鉢IIという器形は、極めて諸磯a式的な要素と考えることができる。しかも、それらには強い相間性が存在する。

また、沈線文系土器群と爪形文系土器群の間には、「モデル」と「コピー」の関係が存在する。

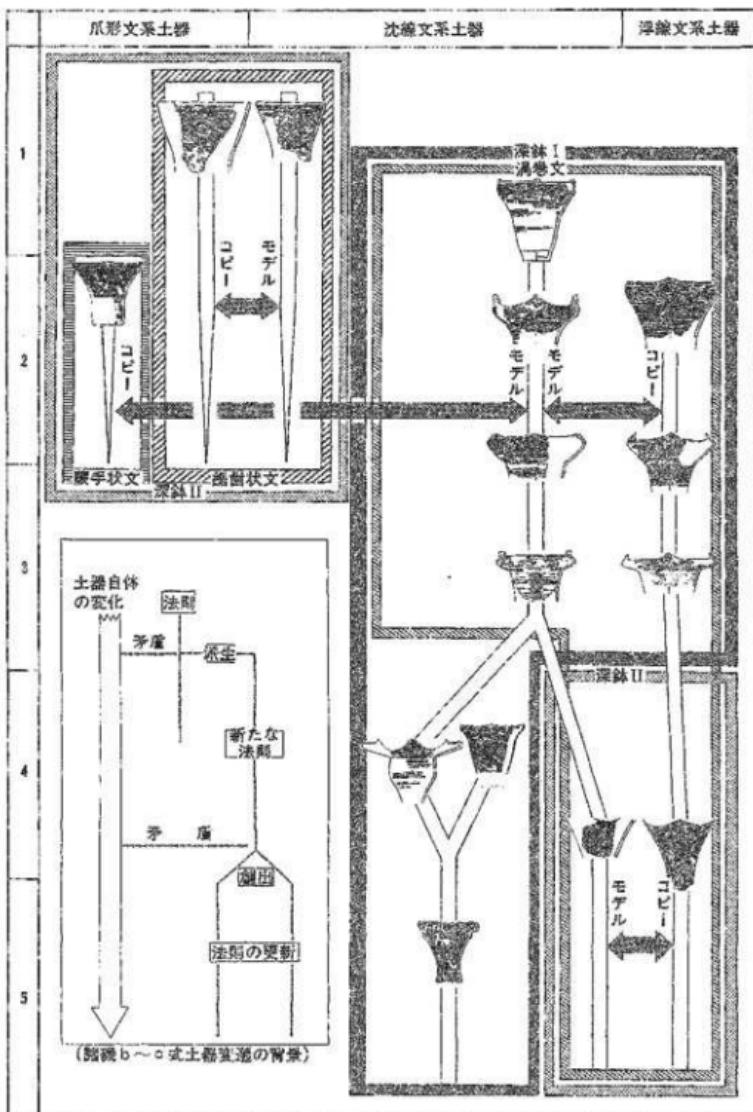
この二つの関係が、諸磯b式の前半期の根底に存在する大原則である。言い換えれば、土器製作上の「法則」と呼ぶにふさわしいものと考える。

伝統からの脱却 諸磯b式の前半期後業、この伝統的な法則から新たな「法則」が「派生」する萌芽を見る。

これを成し得たのは、沈線文系土器群であった。鋸齒状文をモチーフを持つ沈線文系土器群の一部は、次第にそのモチーフが強線化していく。それにともない、深鉢IIの口縁部は内湾化の傾向を示す。ここに新たな「法則」の萌芽を見る。沈線文系土器群を「モデル」としてきた爪形文系土器群でも、一部のもののモチーフが、それにならって曲線化の傾向を示す。しかし、旧来からの「法則」によって、深鉢IIという器形からは脱し得なかった。

爪形文系土器の自己矛盾 爪形文系土器群の一部は、沈線文系土器群にならい、曲線化する。しかし、施文手法上の制約から、沈線文系土器の曲線化(渦巻化)に追いつけなくなる。しかも、器形的にも旧来からの「法則」に縛られ、沈線文系土器を完全にコピーするのが困難になった。爪形文系土器群自体に内在していた矛盾が露呈したと言える。

爪形文系土器群の矛盾から生れた浮線文系土器群 モチーフが渦巻化し、口縁部が内湾する器形に変化した沈線文系土器群を忠実にコピーするためには、旧来からの「法則」に縛られない要素に、その狙い手を変更する道が選択された。それを負うことになったのが浮線文系土器群である。まさに、浮線文系土器群こそが爪形文系土器群の自己矛盾を解決する中で生れたと言えるものである。浮線文系土器群は、沈線文系土器群を忠実にコピーできる。ここに旧来からの「法則」の規制を全く受けない、沈線文系土器群と浮線文系土器群の関係が新たに生じる。この関係こそ新たに派



第11図 縄縹b～c式土器の変遷

生した溝巻文＝深鉢IIという「法則」である。

浮線文系土器群と沈線文系土器群の新たな「法則」が定着する頃、爪形文・鋸歯状文・深鉢IIという旧来からの「法則」も徐々に忘れ去られてゆく、あたかも爪形文系土器が、コピーの扱い手から脱落するとオーバーラップするように。

新たな「法則」の自己矛盾 ところで、新たな「法則」も宿命的な矛盾を抱えていた。

調部文様の施文域が広くなり、口縁部の湾曲が強くなるという傾向の中で、溝巻文を施文するスペースが狭くなっていた。こうした状況のなかで、沈線文系土器は文様を矮小化することで溝巻文を施文し得たが、浮線文系土器では、沈線文系土器程に、文様を矮小化することができなくなっていくのである。爪形文系土器同様の施文手法上の宿命といえる。

新たな矛盾の解決＝器形の変換と浮線文・溝巻文の破棄＝さらなる「法則」の創出 浮線文系土器群から生じた矛盾は二者択一的な解決を迫った。それまでの深鉢IIの中ではそれ以上の浮線文・溝巻文の発達は望めない。解決の方法は器形の変換か、浮線文・溝巻文の破棄のどちらかである。この状況の中で、器形を変換することにより、さらなる溝巻文の発達を試みる集団と、溝巻文・浮線文を破棄し、集合条線化をはかる集団に分化する。その後、前者では器形的な束縛から開放されたように、沈線文・浮線文により、極致的な溝巻文を施すに至り、後者では、浮線文を施す必要がなくなり、一気に集合条線化が進む。二系統に分化したものの、新たな「法則」の創出であり、それぞれの「法則」の中で新たな変化を遂げてゆく。

諸磯 b式から c式の変化の背景 このように、諸磯 b式から c式土器に見られる変化は、一つの「法則」が土器自体の変化のなかで矛盾に突き当たり、自己変革を遂げてゆく過程と捉えることができよう。自己変革の中で、新たな「法則」を創出し、それが、再び矛盾にぶつかると、さらに自己変革を行なうというパターンの繰り返しである。

自己変革とは、本文中で触れた土器群の諸要素の解体や再編などの行為である。諸磯 b式～c式の土器は、そういった行為の繰り返しによって変遷を遂げるとも言い換えることができよう。

ところで、諸磯 c式期以降前期末葉の土器群は、諸磯 b式から c式以上に複雑な変遷を遂げると考えられている。今回、本稿でとりあげた問題は、そういった複雑な土器様相の背景が一体どこに起因するのかを解く、一つの糸口になり得るのではないかと考える。

本稿では諸磯 b式から c式の土器変遷について、これまでとは異なる視点で分析と考察を試みたつもりである。視点を異にしているため、先学の成果とは様々な面で異なる結果になった。先学諸氏の御叱正、御批判を賜りたい次第である。また、昨今盛んになりつつある当該期の研究に一助となれば幸いである。⁽⁸⁾

本稿は平成元年度の函館学院大学卒業論文に加筆、修正を加えたもので、草稿執筆時には指導教官である小林達雄先生には適切な御教示を頂いた。また、三上徹也氏、中島庄一氏には事細かな御指導を頂き、その学恩によるところが大きい。さらに、上田典男氏、関根慎二氏には当該土器群の様相について有意義な御助言を頂いた。末筆であるが銘記し感謝の意とさせて頂きたい。

- 註1 筆者自身も、(古)・(新) A群器をそれぞれ主体的に出土する遺跡の広がりや(新)後寄土器群の型式内容の検討から、c式2細分案の専門的必要性を示した(赤塙・三上1993、赤塙・三上1994)。
- 註2 第1図に示した関東地方東部の遺跡では撲滅式土器に伴い、客体的に八群土器が出土している。当地方の様相を示唆することを考え、参考までに図示した。
- 註3 関東地方南部は現在のところ、量的にも質的にも複雑な様相を呈している。今後の検討課題として今回の分析からはあえて除外した。
- 註4 第4~5段落における螺鉆具の型式内容の整理は、別稿でも行ったため、参考にして頂きたい(赤塙・三上1994)。
- 註5 註4と同じ
- 註6 本稿で使う「モデル」・「コピー」の意味は以下のようない内容である。説明b式→c式の場合、「モデル」にあたる沈縫文系土器群は離れない土器群である。それに対し、「コピー」にあたる浮縫文系土器群は、沈縫文系土器群のモチーフを原形にした、離れる土器群であると言えることができる。つまり、「モデル」とは、「コピー」の文様モチーフや器形の整形というようなものであり、小林達雄氏が書く「範型の「コピー」」の「コピー」とはニュアンスを異にしている。
- 註7 註4と同じ
- 註8 近年の論稿として「説明b式土器の流派とその様相一多摩丘陵からの視点」【東京都西歴文化財センター研究論集第21号】(岩渕陽一・江戸に省三・可見道宏・小坂井幸修・中西光1992)、「説明c式土器研究への一視点」【埼玉考古】29(前田1992)、第6回総合セミナー「前期終末の諸様相」(総合セミナーの会1992)などをあげることができる。
- このうち越田氏は、b式終末からc式土器の型式と文様発展の観点からその顎型化を説き、さらに説明c式土器の口縁部に見られる経長の貼付文に注目して、本稿でのA群土器と、B群土器の深鉢II β を説明c式にあて、溝巻文をモチーフとする深鉢II α を、鶴見町式土器との組みの中で捉えようとしている。この点で筆者の認識とは大きな食い違いを見せる。深鉢II α ・II β は、いくつかの調査例から明らかに共時關係にあり、深鉢II β が深鉢II α に先行し、深鉢II α が鶴見町式に逆行するすれば、時間的な不整合を生じるようと思われる。
- 筆者もB群土器の細分の必要性を感じ、その見通しは持っている。しかし、現時点での明確な細分は差し控え、将来機会を見て触及したい。

掲載土器の出土遺跡

第4図

1 紫屋・北緯屋9号土坑	6 紫森455号土坑	11 桐原・北緯屋155号土坑
2 鈴田9号住居	7 上南原5号土坑	12 桐原・北緯屋20号住居
3 鈴田9号住居	8 紫森375号土坑	13 桐原・北緯屋20号住居
4 鈴田5号住居	9 細田9号住居	14 桐原・北緯屋20号住居
5 紫森12号住居	10 鈴田9号住居	15 鈴田5号住居

第5図

1 桐原・北緯屋5号住居	8 桐原・北緯屋20号	15 鈴田4号住居
2 桐原・北緯屋20号住居	9 桐原・北緯屋20号	16 上原第3類
3 花島山4号住居	10 上原4号住居	17 桐原・北緯屋20号住居
4 上原4号住居	11 上原12号住居	18 上原第3類
5 上原4号住居	12 上原3号住居	19 桐原・北緯屋157号土坑
6 上原12号住居	13 上原3号住居	

諸磯 b・c 式土器の変遷過程

7 塚屋・北塚屋20号住居	14 塚屋・北塚屋19号住居
第6回	
1 伊勢塚・東光寺裏5号住居	6 花鳥山4号住居
2 塚屋・北塚屋5号住居	7 塚屋・北塚屋5号住居
3 塚屋・北塚屋17号住居	8 塚屋・北塚屋5号住居
4 花鳥山4号住居	9 塚屋・北塚屋21号住居
5 花鳥山4号住居	10 花鳥山4号住居
第7回	
1 久住居並72	4 伊勢塚・東光寺裏5号住居
2 糸井宮前SJ132	5 伊勢塚・東光寺裏5号住居
3 錦治屋SB2	6 伊勢塚・東光寺裏5号住居
第8回	
1 糸井宮前SJ66	3 糸井宮前SJ77
2 糸井宮前SJ77	4 糸井宮前SJ84・85
第9回	
1 花鳥山包含層	7 花鳥山23号住居
2 武居林	8 花鳥山15・18号住居
3 武居林	9 花鳥山15・18号住居
4 武居林	10 花鳥山23号住居
5 一の塗1号住居	11 花鳥山グリット
6 有明山社第7類	12 花鳥山グリット
	13 錦治屋SB2
	14 花鳥山15・18号住居
	15 花鳥山23号住居
	16 花鳥山15・18号住居
	17 花鳥山15・18号住居
	18 花鳥山包含層

参考引用文献

- 会田 進也 1974 「扇平遺跡」岡谷市教育委員会
- 青木 義勝 1980 「北宿遺跡発掘調査報告書」浦和市考古調査会
- 赤塙仁・三上徹也 1993 「中部高地における縄文前期末葉土器群の継承」「前期終末の諸様相」縄文セミナーの会
- 赤塙仁・三上徹也 1994 「下島式・暗ヶ塚式の再提唱とその意義」「中部高地の考古学」IV 長野県考古学会
- 秋本 真澄 1992 「東大夜クズレ遺跡」伊東市教育委員会
- 井口 豊久他 1987 「西林△遺跡」「中央自動車道長野環状文化財発掘調査報告書第1」長野県埋蔵文化財センター
- 石原 正敏 1989 「諸磯c式土器再考」「新潟史学」第22号
- 南川 修 1982 「上南原」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団第10集
- 南川 修 1983 「坂屋・北塚屋」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団第25集
- 市村 鹿巳 1984 「中部地方出土の北白川下層式・同系土器群について」「信濃」36-4
- 今村 啓爾 1979 「諸磯式土器の施文工程の変遷」日本人類学会・日本民族学会第33回連合大会研究発表抄録「人類学雑誌」38巻2号
- 今村 啓爾 1980 「諸磯c式c式土器の変遷と細分」「伊豆・七島の縄文文化」武藏野美術大学考古学研究会
- 今村 啓爾 1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」「考古学研究」27巻4号
- 今村 啓爾 1982 「諸磯式土器」「縄文文化の研究3」
- 岩橋斯一・江里口省三・可見通宏・小坂井孝修・中西 光 1992 「諸磯b式土器の展開とその様相—多摩丘陵から
の視点」「東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ」

- 内田祐治他 1975 「三宅島の埋蔵文化財」伊豆諸島考古学研究会
- 岡野 釜男 1975 「平合貝塚」
- 岡田正彦他 1975 「本城遺跡」「覚山遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」開谷市その1 その2・開谷市その3「日本道路公園名古屋建設局、長野県教育委員会
- 小野正文他 1986 「家動堂 I」「柴原埋蔵文化財センター調査報告第17集」
- 金井正三他 1979 「牛乳丸山遺跡発掘調査報告書」牛乳村教育委員会
- 神村 道仙 1982 「崩船遺跡」長野県玉穂村教育委員会
- 久保常晴他 1968 「本町田」立正大学考古学研究室調査報告第1号
- 勝形敏郎他 1976 「須坂352号線埋蔵文化財発掘調査報告書」北原八幡遺跡「新潟県埋蔵文化財調査報告書第7」
- 小林 達哉 1989 「縄文土器の様式と形式・型式」「縄文土器大観」4 小学館
- 小林康男他 1982 「馬通駆逐跡」塩尻市教育委員会
- 伊藤朝一・川名庄文他 1987 「複数遺跡の調査」郷土資料33集
- 白石 浩之 1981 「麻呂遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告23「神奈川県教育委員会
- 白石 浩之 1983 「階級 b 式土器の型式細分とその問題点」「人間・遺跡・遺物」
- 鈴木 敏昭 1980 a 「第VI群土器について—諸説武土器の変遷ー」「足利遺跡」久喜市教育委員会
- 鈴木 敏昭 1980 b 「階級 b 式土器の解釈とその変遷(再考)」「土器考古」第2号
- 鈴木 敏昭 1989 「階級 b 式から c 式への土器変遷」「埼玉県立博物館紀要」15
- 鈴木 敏昭 1991 「土器群の変容一例えは、階級 b 式洋銀文土器の場合ー」「埼玉考古学論集」財団法人埼玉県埋蔵文化財活用事業団
- 鈴木 徳雄 1979 「白石城」埼玉県遺跡調査会報告書類36集
- 鈴木 徳雄 1987 「縄文式土器研究の問題点」「縄文前期の謎問題」縄文セミナーの会
- 千田 広男 1990 「猿木山遺跡」安中市教育委員会
- 開原 慎二 1986 「糸井宮前遺跡II」「群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 開原 慎二 1993 「群馬県における前堀浜水の発掘」「縄文前期終末の諸様相」「縄文セミナーの会
- 高橋 佳・中島庄一・金井正三 1976 「北信濃大崎寺遺跡調査報告」「信濃」28-4
- 谷口 康治 1980 「縄文時代前期後半の土器」「藤の台遺跡」「藤の台遺跡調査会
- 谷口 康治 1989 「階級式土器模式」「縄文土器大観」1 小学館
- 原原長則他 1983 「続ケ沢」中野市教育委員会
- 塙原長則他 1991 「立ヶ花遺跡」中野市教育委員会
- 原田明治 1973 「横浜市室ノ木遺跡」横浜考古古学会
- 十肥 孝也 1975 「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第26集
- 友野良一他 1986 「中村遺跡」中川村教育委員会
- 中島 宏 1977 「土器について」「金堀沢遺跡」人間市金堀沢遺跡調査会
- 中島 宏 1980 「階級 b 式土器について」「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告IV 伊勢原・東光寺遺跡」埼玉県遺跡調査報告書第26集
- 中村孝三郎・小林進雄・金子折男 1963 「新潟県中魚沼郡中里村泉城寺遺跡調査報告」「古代文化」第33篇
- 中村 雄雄 1979 「武居林遺跡」「階級 c 式北足立型」下栗町教育委員会
- 中村寅次・間庭 稔 1988 「大友翁北通跡」「群馬県史資料編」
- 中村寅次・三宅敦次 1988 「三崎林遺跡」「群馬県史資料編」
- 長沢 宏昌 1989 「花鳥山遺跡・水石場北通跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集
- 西村 正樹 1961 「千葉県市川市四分田東鏡井遺跡」「早稲田大学教育学部学術研究」第10号

諸磯 b・c 式土器の変遷過程

- 西村 正衛 1966 「茨城県稻敷郡浮島貝塚」『早稲田大学教育学部学術研究』第15号
- 西村 正衛 1967 「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚—東部関東における縄文前期後半の文化研究—その2」『早稲田大学教育学部学術研究』第16号
- 橋口昇一他 1956 「信濃史料第1卷考古資料編」信濃史料刊行会
- 橋口昇一他 1976 「上原」長野県教育委員会
- 羽生涼子他 1983 「福井丸北遺跡」ニユース・サイエンス社
- 羽生涼子他 1981 「伊里子貝塚遺跡」港区伊里子貝塚遺跡調査会、港区教育委員会
- 原 雅信他 1985 「清水山遺跡」群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷間孝次他 1971 「諏訪山貝塚」『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡、桜山貝塚・南連跡発掘調査報告』埼玉県連跡調査報告 8
- 津森 栄一 1956 「日本考古学講座3」河出書房
- 細田 勝 1992 「在家遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝 1992 「諸磯 c 式土器研究への一視点」『埼玉考古』29
- 村井美子他 1978 「二吉遺跡」秋川市埋蔵文化財調査報告第5集
- 三上 旗也 1987 「大洞遺跡」中央自動車道長野線押藏文化財発掘調査報告書1』長野県埋蔵文化財センター
- 翠川 審弘 1988 「銀治園遺跡」東部町教育委員会
- 武藤 雄六 1963 「信濃境龍崎遺跡出土縄文前期末の土器について」『信濃』15-7
- 武藤 雄六 1968 「長野県富士見町龍崎遺跡の調査」考古学叢刊4-1
- 茂木 由之 1988 「黒熊第5遺跡」群馬県史資料編1』
- 百瀬新治他 1976 「阿久遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5 昭和51・52・53年度』日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会
- 百瀬 新治 1985 「長野県における諸磯式土器について」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 守矢昌文他 1978 「よせの台遺跡」茅野市教育委員会
- 河西清光他 1969 「有明山社遺跡」松川村教育委員会
- 山下 康信 1986 「上大屋・橘越地区遺跡群」大胡町教育委員会
- 山内 清男 1928 「下経上本郷貝塚」人類学雑誌43巻10号
- 山内 清男 1932 「日本遺古の文化、縄文土器文化の真相」「ドルメン」1巻1号
- 山内 清男 1937 「鉢文土器型式の御院と大羽」『先史考古学』1巻1号
- 山内 清男 1939 「日本先史土器図譜第二編」
- 山口 明 1981 「縄文時代前期末葉七器群と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』39
- 山口 明 1984 「中部地方における前期末葉七器と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48
- 山根弘人他 1978 「御所遺跡」山梨大学考古学研究会

「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて

川崎 保

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| I はじめに | 3 玉斧（有孔磨製石斧） |
| II 倉輪・松原型装身具セットの各種について | 4 棒状垂飾 |
| 1 「の」字状石製品 | III 猪文時代前期の装身具のセットの意義 |
| 2 狹状耳飾 | IV まとめ |

I はじめに

縄文時代には用途が不明な石器が多い。なかでも利器ではないと推測されるもの、石棒、石劍などの宗教・祭祀的な用途に使われたとされているものは諸説紛々として、定説を見ないものが多い。

またこうした宗教や祭祀的な石器とは区別される装身具、飾玉とされるものもその用途や意義については十分解明されたとは言えない。これからとりあげる縄文時代の石製装身具（飾玉）もその研究史は古く様々な観点から主に個別に研究されてきた。しかし、その組み合わせが存在すること

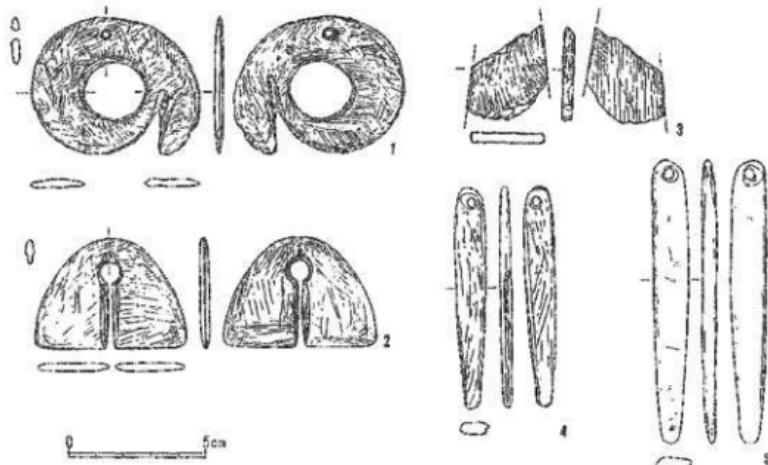


図1 倉輪遺跡出土飾玉・装身具



図2 松原遺跡出土飾玉・装身具
(縮尺約2分の1)

やさらにその意義についてはあまり考究されているとは言いがたい。よって、本稿では特にこれらが組み合わせ（セット）で存在し、その意味することについて考えてみたい。

数多くある縄文時代の装身具と想定されているもののうち本稿で取り上げるのは近年注目を浴びている「の」字状石製品⁽¹⁾をはじめとする筆者がいうところの「倉輪・松原型装身具セット」である。

1985年に東京都八丈町（八丈島）所在の倉輪遺跡第6次調査で図1のような種々の装身具と考えられる石製品が出土したことが、世に知られる最初である。しかし、後述するが当初は、変わった特殊な石製品が様々な地域や文化から倉輪遺跡にもたらされたというような考えが支配的であった。

その後、1989～91年にかけての長野県長野市所在の松原遺跡で図2のようないろいろな装身具が発掘された。

このことによって倉輪遺跡出土の装身具が単なる偶然の取り合わせではなく、組み合わせとして存在していたことが類推され、さらに筆者はこの装身具のセットを「倉輪・松原型装身具セット」と呼称したい。

そして、倉輪・松原型装身具セットの性格や意義を解明するために、まずセットの各々の装身具の研究史、考古学的基礎的な作業である所属時期、分布、地域性、石材、作成技術などについて概観したうえでセットの意味するもの、さらには石製装身具セットの研究によって縄文社会における装身具の意義を多少なりとも明らかにし、縄文社会の解明の端緒となれば幸いである。

II 倉輪・松原型装身具セットの各種について

1 「の」字状石製品

これから述べる「の」字状石製品の研究史は、1985年の東京都八丈町の倉輪遺跡の第6次調査で第2号住居跡から発掘されたことに始まる。倉輪遺跡の報告書のなかで水山昭宏は「の」字状垂飾（図1-1）と呼称した。水山は「上端の孔からみて、垂飾として利用されたことがわかる。」とし、また「抉り部の最奥は刃部といって過言でないほど鋭利である。円錐部もやや鋭利であり、刃

こぼれ状のギザギザが散見される。」ことから「装身具としての性格をもった利器の可能性もある。」としている（八丈町倉輪遺跡発掘調査報告書 1987）。

倉輪遺跡の発見後の類例は大阪府箕面市の瀬川遺跡の例（図3）がある。これは1987年に箕面市立第三中学校地盤部の遺跡分布調査で瀬川遺跡から採集され、1989年に資料紹介として報告された（飯島・中山 1989）。この報告のなかでは、「の」字状石製品という言葉で呼ばれ、中山清隆が「倉輪遺跡の装身具類について」の項でこの「の」字状石製品について論及し、中山は「の」字状石製品が棒状耳飾・棒状垂飾品とともに装身具であり、その形状を「南海産のイモガイの殻頂をヨコに輪切りにして模したものではないか」と述べている。

またこうした飯島・中山両氏の考察からさらに踏み込んで大陸との関係を主張する説も唱えられてはいる（林・絹・藤岡 1989）。

藤田富士夫は倉輪遺跡の「の」字状垂飾品は、棒状垂飾品・块状耳飾などとともに北陸の影響を考えるべきだとして、北陸の類例を紹介した（藤田 1989）。

大竹憲治は「の」字状石製品の類例を集めたうえで、青森県泉山遺跡例を除きこれらが縄文時代前期後半から末葉にかけての所産のものであり、その系譜は中山鏡を踏襲しイモガイ装身具から派生したものだとした（大竹 1990）。

イモガイの断面形を模して「の」字状石製品が作られたとする立場から、小田静夫が倉輪遺跡例を挙げ、サメ歯製穿孔品とともに南西諸島の影響であるとした（小田 1992）。

イモガイの断面形を模した装身具というのはのちの弥生時代にも貝輪や腕輪に見られるものでおもしろい着想かも知れないが、後述することになるが形状の類似だけで即南西諸島と結び付けるのはいかがなものであろう。

研究史はいまだ日が浅いが、これら先学の業績を見ると、（1）用語、（2）分布と所属時期、（3）用途、（4）系譜、といった問題点が主に考究されていることがわかる。しかし残念ながら平板名の「の」字に似た形を呈するという特殊性が強調され、藤田が北陸の影響という観点から棒状垂飾品と块状耳飾を闇扱付けたが、縄文時代前期を中心日本列島に広く分布するこうした石製品の類いの中での位置付けはなされてはいない。よって（5）同時期の飾玉や擦切技術を用いた石製品のなかでの位置付けが必要であり、こうした作業をへてはじめて用途や系譜といった問題に接近すべきであろう。

まず用語がこうした石器に有りがちではあるが多少混乱しているので整理してみたいと思う。まず倉輪遺跡の報告書では、「の」字状垂飾という言葉が用いられている（水山 1987）。これに対し飯島・中山は「の」字状石製品と述べている（飯島・中山 1989）。飯島・中山は水山のいう「の」字状垂飾という用語に対し、是非を論じていないので、推察するしかないが特に中山はこれを「装身具」であるとしながらも、わざわざ「石製品」とするのであるから、「垂飾」であるかどうかについては疑念を有しているのであろうか。

しかし同じく上端に穿孔を有す図1-4・5のようなものは「棒状垂飾品」と呼称しているので、中山の用語使用法にはあまり一貫性がない。その点水山は報告書のなかで統一する必要もあったの

であろうか「块状耳飾」「块状垂飾」をはじめとして裁身具と想定しているものは「○状○飾」と一貫しているようである。

確かに水山の表記法は一貫性がある。「块状耳飾」はすでに明治時代に墨府遺跡の発掘調査などで埋葬人骨に伴って出土した際の状況から耳飾であることは容易に推測でき(大野 1919)、用語も定着してきた。

その後の上浜田遺跡(山本ほか 1979)や根古谷台遺跡(柴木ほか 1988)などの出土例も耳飾であることを伺わせ、それ以外の用途を推測させるような出土例は筆者の管見ではあるが知られていないので、耳飾と呼称することが適当であろう。「垂飾」とされるものが块状耳飾や大珠⁽²⁾のような埋葬人骨に伴ってそれなりの部分から検出されるほどの良好な出土状況を示すものはない。よって現段階では「垂飾」とは限定せず「石製品」という用語を用いるのが無難であろうか。

小稿の本筋からは若干離れてしまうが、考古学の用語は小杉康が指摘するように「用語を問題とするとき、基本的には個別の用語だけでは取り扱えない」つまり「問題は用語の体系であり、語彙が問題の単位となるべきである。」(小杉 1992)という立場に基本的には賛成である。そして既知の形で未知の形を類推する認識方法として「~形…」という構成の用語が現今一般的であり、「の」字形石製品がより適しているかもしれない。いずれにしてもこうした裁身具と考えられるような石器の名称にも何らかの規範が必要であり、場当たり的な命名は好ましくないとは思う。しかし「の」字形石製品も「の」字状石製品言わんとする所は平仮名の「の」字に似た形状を呈する石製品であることは誤解されることはないと思われ、ここで改めれば屋上壁を架すことにもなるので、とりあえず中山・飯島のいう「の」字状石製品という語を用いることとする。

次に分布と所属時期であるが、「の」字状石製品は現在7遺跡8点知られている(表1)。この数少ない点数で分布を言うのも尾轆がましいが、九州、四国、北海道には分布を見ないが広く本州に存在していることが分かる(図3)。

さて、肝心の所属時期であるが表1に挙げた例のうち層位的な事例により時期が明らかなものは3遺跡4点のみである。松原遺跡例は2点とも前中期初頭の包含層から出土し(長野県埋文 1990)、倉輪遺跡例は前中期初頭の住居跡から出土している(倉輪遺跡調査団 1987)。また青森県泉山遺跡例は中期中葉に属するという(古市豊司ほか 1976)。いずれにしても出土例自体が少ないうえ、層位や遺構から所属時期が明らかな例はさらに少ない。つまり、層位学的な方法にのみ基づき判断するとすれば現段階では前期末葉から中期初頭に属するものが存在し、なかには中葉まで下る可能性が



図3 「の」字状石製品出土地

あるという程度の指摘に留まらざるを得ないであろう。

2. 桃状耳飾

「の」字状石製品と石材・製作技術が共通し緊密な関係にあると考えられるのが、桃状耳飾であろう。「石質や技法」が似ているということは倉輪遺跡の報告で当初より指摘されている(水山 1987)。松原遺跡でも、「の」字状石製品以外にも(図2-3~8)多くの装身具と考えられるものが出土しているが、(図2-2)の「の」字状石製品を除けば同じややすんだ緑色を呈している。⁽³⁾

また表1を参照されれば分かるように、蛇紋岩製のものが多いが、桃状耳飾にも蛇紋岩製のものは決して珍しくない(藤田 1983a)。⁽⁴⁾

次に製作技術であるが、桃状耳飾を製作する際に特徴的な技術として擦切技術と穿孔技術が挙げられよう。「の」字状石製品も巴状の突起部分作り出しは擦切技術によるものだし、⁽⁵⁾また垂飾として用いるための穴や「の」字の中央の穴も桃状耳飾に用いられているのと同様な穿孔技術によろう。⁽⁶⁾また技術とするようなことではないかもしれないが、板状に成形することも共通する特徴である。

まさに、桃状耳飾石材、製作技術が、「の」字状石製品と対比するのに最適である。さらに桃状耳飾の研究は古く、先学の成果を生かすべくここでその研究史をまとめてみたい。

桃状耳飾の所属時期・編年、起源・系譜、さらに、製作技術についても若干触れてみたいと思う。

すでに触れたように垂飾に比べ桃状耳飾は、早くから良好な出土状況に恵まれ耳飾であると推定されてきた。ただ、形状や法量から耳飾には向いていなそうなものもあり他の使用法も考究すべきかもしれない(藤田 1983a)が、すくなくとも耳飾には使用されたのであろう。

所属時期について当初は日本人種論が盛んであった当時の学風を反映してか、使用した民族と絡めて論じたものが多い。喜田貞吉は早くからアイヌ民族使用説を主張し(喜田 1918)、これに対し島居蘆蔵は大陸との関係を指摘し、その所属は大和民族のものと主張した(島居 1923)。しかしこれは必ずしも現代的な意味での縄文時代と弥生時代のどちらに属するかという年代論争ではなかったが、梅原末治の集成(梅原 1971)や谷川磐雄(谷川 1924)や藤井栄一(藤井 1930)の所説が発表されるに及んで、縄文時代とくに前期の所産であることが明らかになった。

こうして研究がさかんになるに伴い類例も多く知られるようになりそうしたなか、樋口清之が集成と形態分類さらには編年説を示した(樋口 1933)。戦後、岐阜県村山遺跡の発掘例や滋賀県安土遺跡の発掘例⁽⁷⁾を根拠に大野政雄が層位的な事例に基づかない樋口の編年説に疑義を呈した(大野ほか 1960)。そして編年研究はその後江坂篤弥が呈示し(江坂 1964)、さらに藤田富士夫が攻玉遺跡と「型式率」⁽⁸⁾という桃状耳飾の形態的な特徴を示す数値の変化から桃状耳飾の編年を明らかにした(藤田 1983b)。また近年堀江武史は、平面形態のみならず断面形態もあわせて検討すべきであるとして、前者は切り目率、後者は厚さ率として計測、算出し、最終的に総括して桃状耳飾の編年を示した(堀江 1992)。⁽⁹⁾

「の」字状石製品と倉輪・松原焼薪身具セットについて

藤田や畠江の形態分類やその数値化による研究により、块状耳飾の編年はかなり明らかになってきた。編年研究に関してはより良好な時期が分かる出土例の増加を待つべきであろう。こうした集成や編年研究とともに块状耳飾をめぐる重要な問題として系譜（起源）の問題が挙げられる。

柴田常惠が「块様の石製品」と命名した段階で既に「块」という言葉を使っており、当然のことながら中国大陸で言う「块」と日本列島の「块状耳飾」が何らかの関係を有しているのではないかということは推測されてはいた（柴田 1917）⁽¹⁰⁾鳥居も大陸の諸例（シベリアなど）を引いている（鳥居 1923）。

しかし、当時は日本の縄文時代の実年代自体が確定的ではなく、块状耳飾と中国の块との形態の類似が注目されたに止まっていたのが実状と言えよう。

こうした中、块状耳飾の集成と形態分類を行った樋口は中国の块は日本の块状耳飾のような耳飾りでなく佩玉であり使用法が異なることと日本の块状耳飾が石製であるのに対し、中国のものは玉製であることを挙げて系統的には前者は無関係であるとした（樋口 1933）。

樋口の論考以降一時めぼしい块状耳飾の研究は見られなかったが、戰後になり縄文時代の実年代解明と大陸との関係という観点から、既に縄文土器の相対年代（編年）を明らかにしてきた山内清男が块状耳飾を縄文時代としては微少ない大陸との関係を示す文物であり、縄文時代前期の块状耳飾は、中国新石器時代の青蓮崗文化の块と関連があると主張した（山内 1964）。これに対し芹沢長介は（1）放射性炭素に基づく年代決定法によれば縄文時代前期の年代と青蓮崗文化の年代とでは縄文時代前期の方がはるかに古いことや、（2）日本列島の古いとされる块状耳飾の形態と中国青蓮崗文化の块の形態が全くことなるという2点を主な根拠に無関係を類似であるとした（芹沢 1965）。

いずれにしても日本国内の問題だけでなく、中国さらには東アジアの類例について検討する必要が出てきたが、高山純が中国の块について考古資料と文献資料を組んで彼我の関係についても考察している（高山 1967）、高山は中国各地域の例を集成したうえで、「中国最古の块は揚子江流域の仰韶文化の晚期に比定される青蓮崗文化から耳飾として現れ」「形態は文様のない、断面の補太い」「材質も玉の他に瑪瑙や蠟石などがある」と指摘し、（1）块が玉製とは限らず他の石材も見られること。⁽¹¹⁾（2）文献によれば腰飾の一種と考えられるが、考古資料に基づけば戰国時代までは耳飾として使用されていた。（3）文献によれば男子が付けたようにされるが、考古資料によれば女子に装着した例がある。とまとめている。特に（1）と（2）の指摘は樋口説の根拠を否定するもので、高山は中国の块と日本の块状耳飾には何らかの関連があり、中国には垂飾も多いのにこれらの類品が日本には見られないとして、日本の块状耳飾が逆に中国に受け入れられたのではないかと予察している（高山 1967）。高山の块状耳飾日本起源という予察はともかく、芹沢のいう放射性炭素にもとづく青蓮崗文化と縄文時代前期の年代差以外には中国大陸の块と日本列島の块状耳飾の関係を否定する論拠はそれほど決定的なものではないことが明らかにされた。⁽¹²⁾

しかし日本国内の古い時期の出土例といえば富山県極楽寺遺跡（前期初頭）（小島ほか 1965）

の他にも、北海道共栄B遺跡（早堀中葉）（後藤ほか 1976）、長野県かご田遺跡（早期末）（友野ほか 1978）、長野県鹿郷B遺跡（早期末）（市沢・百瀬 1987）、神奈川県上浜田遺跡（早期末）（山本ほか 1979）、神奈川県打越遺跡（早期末）（高橋ほか 1983）などの諸例が発掘・報告されたが、こうした遺跡で中国や海外との関係を積極的に示すような出土遺物の例はない。⁽¹³⁾

また地理的に大陸に近い九州地方の例は、上田耕によると確實に古いと答うものはなく、東日本から伝播したものではないかと指摘している（上田 1981）。⁽¹⁴⁾

大陸から朝鮮半島さらに九州や日本というような伝播論（江坂 1981）に好都合な出土状況は見られないようである。⁽¹⁵⁾

日本列島内の出土状況が必ずしも大陸起源説もしくは関連説に有利ではない様相を呈しているが、安志敏は漆器、高床式建物などとあわせて中國江南地方から玦状耳飾が伝播したと主張した。特に安は中國浙江省河姆渡遺跡の玦が日本の玦状耳飾の古いとされてきた指貫形のものに類似することや河姆渡文化が、日本の縄文時代前期に匹敵するような古さであることを主な根拠にしている（安 1984）。西口も安と同様なことを指摘している。さらに中國の新石器時代の玦と日本の玦状耳飾がいずれも女性が付けるという風習が彼我に共通することを確認したが、中國では玦（イアリング）に環（ネックレス）がセットであるが、環のほうは伝わらなかったと推測した（西口 1983）。

藤田も西口と同様な根拠によって江南から富山に伝わったとしたが（藤田 1985）、中山は石製の玦の出土品が明らかでないこと、ほかに中國から伝わって来たと考えられるものがないこと、中間地域（北部九州）が古い類例を見ないことから、藤田説に疑問を投げかけた（中山 1992）。

たしかに究極的には玦状耳飾の大陸起源・系譜説は、中山の言うように直接的な証拠や伝播経路が解明されなければならないであろう。

玦状耳飾の所属時期・纏牛や起源・系譜の研究史を通じて以下のような問題点が挙げられる。①女性が耳飾として使用していた例があり共通している。②東アジアでは中國江南地方が古い。③断面形が厚手から薄手に変遷する。といった点は大陸起源説の主要な根拠であるが、逆に④伝播経路がよくわからない。特に江南から富山に伝わったとする藤田説についてはその中間地域に古い時期の出土例が知られていない。⑤直後のな伝播を示す他の文物がない。⑥さらに玦以外の装身具が見当たらないのは何故か。⑦から⑧は大陸起源説の否定的な根拠になっている。

ここまで大まかではあるが玦状耳飾の所属時期・纏牛や起源・系譜についてまとめ、上記のような問題点が存在することが明らかになった。これらの問題点についての筆者の見解は「IVまとめ」において述べたい。

つぎに、製作技術に触れてみたい。玦状耳飾など彫玉と総称される石製品の製作技術の研究は、これらの製作遺跡（攻玉遺跡とも呼ばれる）の発掘に伴い進展してきた。

主なところとして富山県板栗寺遺跡（小島ほか 1965）、長野県上原遺跡（大場ほか 1956）、有明山社遺跡（藤沢ほか 1969）などの発掘があろう。⁽¹⁶⁾

舟山・女大原遺跡資料をもとに藤森栄一は諸説式の時期に玦状耳飾の製作があったと主張した

(藤森 1930)。上原遺跡の発掘で滑石製飾玉および未製品、砾石が出土し、大器盤等は製作遺跡であることを推測した(大場ほか 1956)。

しかしこれも製作遺跡自体やその時期について専ら論じていて、肝腎の製作技術について本格的に論及したのは小島俊彰である。小島は櫛樂寺遺跡資料をもとに第1工程は「原石は円盤状に両面を磨き」、第2工程で「この円盤の中心に孔を穿つ(中略)これは両面より行われ」て、第3工程で「環の切断」をして、「切断され块状をなした製品は、角を丸めたり形を整えたりの荒仕上げが行われ、最後に磨きがかけられる」という块状耳飾の製作工程を示した(小島ほか 1965)。

寺村光暉は女大原遺跡出土の滑石製飾玉(勾玉、石環、块状耳飾、白玉、管玉、石器)とその未製品から特に偏平な玉類は「円板省荒磨一側面修正一穿孔一孔修正一仕上げ」という工程が認められ、さらに块状耳飾は「荒磨き一穿孔一形磨き(孔修正)一切れ目擦切一修正研磨一仕上げ」という工程を経るという(寺村 1967)。⁽¹⁸⁾

小島や寺村の業績を継承し、藤田富士夫は編年や工程を踏まえて製作技術について考究した、特にABCDの4種類の工程、編年は第Ⅰ期から第Ⅲ期ごとに4種類の工程の消長と変化を論じている。工程は様々であるがいずれにしても、その過程は「打撃・切裁・切削・切除・研磨の手法が巧みに使いわけられ」ているという(藤田 1983a)。

「の」字状石製品は現在未製品が知られていないので、藤田のいうような块状耳飾の細かい製作工程に対比することは難しく、工程から時期を判断するのは現段階では分からぬ。寺村や藤田が解明してきた块状耳飾などの詳細な製作技術や工程とは、必ずしも一致しているかどうか、それとも異なる部分があるのかは不明であり、その解明は今後の課題であろう。「の」字状石製品も円盤状にしてのち整形する際には擦切(切裁)技術が用いられていることは、すでに述べたように巴状の突起の又の部分に擦痕が見られることにより明らかであり、板状に薄いことや「の」字状に全体を整形するのも擦切によったであろうことは想像に難くない。おそらく彫飾のための穴や「の」字の穴も穿孔技術によるし、平面に認められる擦痕は块状耳飾と同じ研磨技術であると認められる。

つまり擦切、穿孔、研磨技術は共通している可能性は高い、これらの技術を総合した産物が块状耳飾や「の」字状石製品などである。こうした飾玉の製作技術を比較することも必要があろう。

3 玉斧(有孔磨製石斧)

块状耳飾が「の」字状石製品を語るうえで欠かせないものであることは、お解りいただけたかと思う。また、块状耳飾をめぐる諸問題の多くは「の」字状石製品などの石製装身具についても考えなければならないことであろう。

縄文時代前期に盛行した飾玉のうち块状耳飾以外のものについても考えてみたい。とくに块状耳飾はすでに述べたように名前が示すとおり耳飾りであった當然性が極めて高い。これから触れる飾玉類は、積層的な証拠(出土状況など)はないが、恐らく「の」字状石製品同様彫飾として用いられたのではないかと推測されている。

そのなかでもまず擦切、穿孔、研磨技術を用いて作られている玉斧(有孔磨製石斧)について考

えてみたい。これについては長崎元廣の優れた考察があり、本稿もこれに負うこと大であるが、名称の問題などもからめて、研究史をまず探って行きたいと思う。

さて、有孔磨製石斧の研究史を見ると樋口清之が身体装飾に関する遺物のなかで「玉飾」の項目で紹介している（樋口 1933・1940）。さらに樋口は硬玉を論じた「蝶玉考」（樋口 1940）のなかでA、B、C、D型の4種類の形態分類を行ないまたこれにあてはまらないものを「雜」とした。このうちA型式の第四類（石斧形）がこれに相当しよう。⁽¹⁹⁾ 樋口は「石斧形を是し中央又は上端に一孔を有する端平なものであつて、刃を有するものが多いため」と定義し、同時に用途についても「中には故意に刃を磨り消して居るものもあり、その用途が決して単なる斧でないことを説明している」と述べている。

また八幡一郎は「玉箆」という論考において『羊頭壁』（東方考古學叢刊）のなかに大連濱町貝塚採集資料が紹介され文中に「玉製有孔の範様のもの」という記述があることに着目、さらにその類例が「北海道や、北朝鮮、鶴東州、西エスキモー」に存在しているとした。この大連濱町貝塚採集品の酷似する例として埼玉県笑輪貝塚と福島県荒井村発見例をあげた。八幡はこの「玉箆」に関係があるのでないかというものの「長い形の有孔斧」を提示している。例として長野県上伊那郡東笑輪村（現笑輪町）長岡や小県郡赤津村（現東部町）西町上ノ坂発見品の箆を示し、孔の存在、形状がにていることから、「玉箆」との類似を指摘するが、同時に両者ともに斧であるから（刃がついているの？）区別すべきであるという（八幡 1943）。

戰後の『考古學辭典』（酒詰ほか編 1943）は「ゆうこうせきふ 有孔石斧」と呼び「繩文式の石器の一種。硬玉、蛇紋岩、橄欖石等を用い、石斧状をつく（く）り、一孔を穿ちたるもの。東北地方、東日本方面の後期の遺跡には稀にあるもので、裝飾品の一類と考えられる。」（カッコ内は筆者）が補ったと定義している。

また、野口義彦は『日本考古學辭典』で「玉斧 ぎょくふ」を「有孔玉斧・有孔玉器とも呼ばれる。磨製石斧の形態と似ているところから、かく命名された。幅平にして全体を丁寧に研磨している。刃部が石斧のように鋭利ではなく、意図的にすり減らし、上端部近くに穿孔する。利器として用いたものではなく、孔に紐を通し、垂れ玉としたものであろう。玉斧という以上、硬玉製としたものであろう。玉斧という以上、硬玉製のものを指すべきであるが、硬玉に近い色調や比喩的硬い石材を使用したものがある。これら石質を異とする壓玉を包括して玉斧という人もいるが、当然區別されるべきである。」とし、中期に出土例が知られる硬玉製大珠との関連を示唆、中國新石器時代遺跡にも類例が知られることを紹介している。また北海道の例では、使用痕があることから有孔石斧と呼ぶと述べている（野口 1962）。

玉斧（有孔磨製石斧）についての論考がすくないので辞書からの引用をあげたが、玉斧は野口の言うように日本では玉器の石材の示す範囲が狭いので、硬玉製のものに限定すべきであるというが、古墳時代の玉枕にも滑石（末永 1962）、八幡も紹介した玉箆は必ずしも硬玉ではなく蛇紋岩などを材質とするものを含んでいて、よって装身具と考えられる有孔磨製石斧は玉斧と呼称しても構わないであろう。⁽²⁰⁾

さてこの玉斧を本格的に論じたのがこの項の最初にも取り上げた長崎の論考（長崎 1984）である。長崎は「研究史」の紹介「形態分類（集成）」「年代と分布」「大陸とのつながり」「出土状況」「用途」を論じている。

長崎によると「年代」は「縄文時代前期末の諸歳期に初現して中期に盛行、そして後晩期と続き弥生時代の初期まで残存」していて、「分布」は「中部高地を中心に東日本に広く存在」し、「大陸とのつながり」では、中国の玉斧が新石器時代に始まり西周後期のころから魂主という祭祀用の玉器（瑞玉・祭玉）に変化することや八幡が玉斧との関連を観いた玉簾⁽²¹⁾が大陸と関係をもっていたことを暗示していると紹介し、さらに北朝鮮や中國に形態が類似するものがあることを指摘した。

また「用途」は非実用的な信仰的意味が内在したと述べ、弦状耳飾、管玉、小玉などの飾玉が表徵したかわりに、硬玉製大珠、小珠そして玉斧が現れたのだとした。玉斧の祖形は定角式磨製石斧であり、磨製石斧は男性の労働作業に使われたとし、中国齊連蜀文化の墓では男性に多く埋葬されていたという町田章の研究（町田 1968）を根拠におそらく男性が着用したものだと推測している。⁽²²⁾さらに有孔石斧から変化した魂主の意義を明らかにした林巳奈夫の研究（林 1969）から縄文時代の焼爐の火入れ、家屋の鑿築、予祝神事などの祭祀・儀礼にかかわったと想定した。

滑石製品や硬玉製品、定角式磨製石斧の影響、大陸との関係の想定、縄文時代の統率者、司祭者が祭祀・儀礼に佩用したとの反対の推論は、必ずしも筆者はすべて賛成ではないが、大変興味深い内容とも言えよう。

興味深いことに玉斧は「の」字状石製品を出土した長野市松原遺跡では完形品（図2-2）と破損品（図2-3）が出土し、東京都八丈町倉輪遺跡のものは破損しているがおそらく玉斧（図1-3）である。これは単なる偶然というよりも弦状耳飾同様、「の」字状石製品と関係があることの傍証にはかならないだろう。

長崎は前期の弦状耳飾などの飾玉に代わるものとして玉斧があると考えているようだが、同一人物が着用していたか否かは別として、これらがセットとして同時期に存在していて、用途や意義も相互に関連していたと見て良いのではなかろうか。

4 棒状垂節

これだけについて論じられたことはない⁽²³⁾が、棒状垂節も注目すべきものであろう。松原遺跡（図2-8）や倉輪遺跡（図1-4・5）で出土している。とくに倉輪遺跡では、図1-4の棒状垂節は第2号人骨（壮年女性？）の後頭部付近で検出されたという（水山 1987）。

松原遺跡例や倉輪遺跡例（図1-4）の方は丁寧に研磨されているためわからないが、倉輪遺跡例（図1-5）の方は両端に擦痕が残っていて、擦切技術をもちいて作成されたことがわかる（水山 1987）。

藤田富士夫によれば富山县氷見市朝日貝塚や同県朝日町柳庄貝塚に類似が見られ北陸系遺物の例ではないかと主張している（藤田 1990）。

また小丘善夫によれば（図1-5）は硬玉製のことであり、北陸から搬入されたものと考えて

いるようである（小田 1992）。

以上、「の」字状石製品、块状耳飾、玉斧と棒状垂飾は石材や製作技術も関連があり、時期・地域も重なりセットである可能性は高いと考えた。

III 繩文時代前期の装身具セットの意義

おおよそではあるが、倉輪・松原型装身具セットの有する問題点が明らかになったと思われる。

さて、この装身具のセットが何を意味し、また縄文時代（特に前期の）社会のなかでいかなる意義を有していたのであろうか。また近年飾玉や装身具個別ごとの研究は行き着くところまで到達し、膨脹した感があるのは否めない。こうした状況を打開するためにも縄文時代の飾玉・装身具を概観し、縄文文化の中での位置付けがなされる必要があろう。よって本稿ではとくに前期の飾玉・装身具を概観し装身具セットの意義を考えてみたい。

块状耳飾は統計学的な研究が進んでいるが、まだ各個体から細かい時期を考へるかどうかは是否の別れる所であろう。よって、ここでは遺構単位で時期が分かるものを長野県内の資料をもとに飾玉・装身具の流れを考えてみた（図4）⁽²⁴⁾が、この図4からだけでも飾玉・装身具は二者に大別できることがわかる。

つまり、まず第一に块状耳飾、管玉、小玉のように縄文時代前期を通じて変遷しながらも存在しているもの。もう一方は倉輪・松原型装身具セットに見られるような、「の」字状石製品、玉斧、棒状垂飾などのように盛行する期間が短いものがある。⁽²⁵⁾一概に飾玉・装身具とは言ってもその性格（恐らく意義も）は様々であることが伺える。

では、そもそも装身具のセットはいかにして成立したのであろうか。まず倉輪・松原型装身具セット以外に思いうかぶものとして栃木県宇都宮市所在の根古谷古墳跡の墓壇と推測される前期中葉黒浜式だという土坑（渠木 1988）から出土した块状耳飾、管玉、小玉の組み合わせである（図5）。⁽²⁶⁾これも倉輪・松原型にくらべればバリエーションは少ないが、根古谷古墳装身具セットと提唱すべき組み合わせである。

それでは根古谷古墳装身具セットはいかにして成立し展開したのであろうか。富山県砺奈寺遺跡（前期初頭）で块状耳飾とともに管玉や小玉が作られている（小島ほか 1965）。また根古谷古墳遺跡ほど良好な一括ではないが滋賀県安土遺跡A地点（前期前葉）や長野県内では東筑摩郡信州新町のお供平塚跡（塙入ほか 1986）22号住居跡・24号住居跡（前期中葉有尾式）

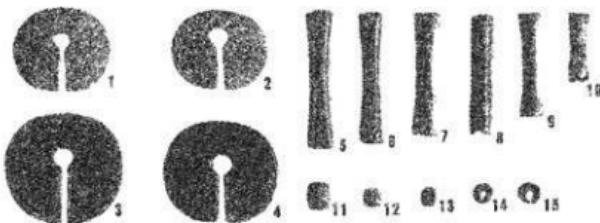


図5 栃木県根古谷古墳出土飾玉・装身具

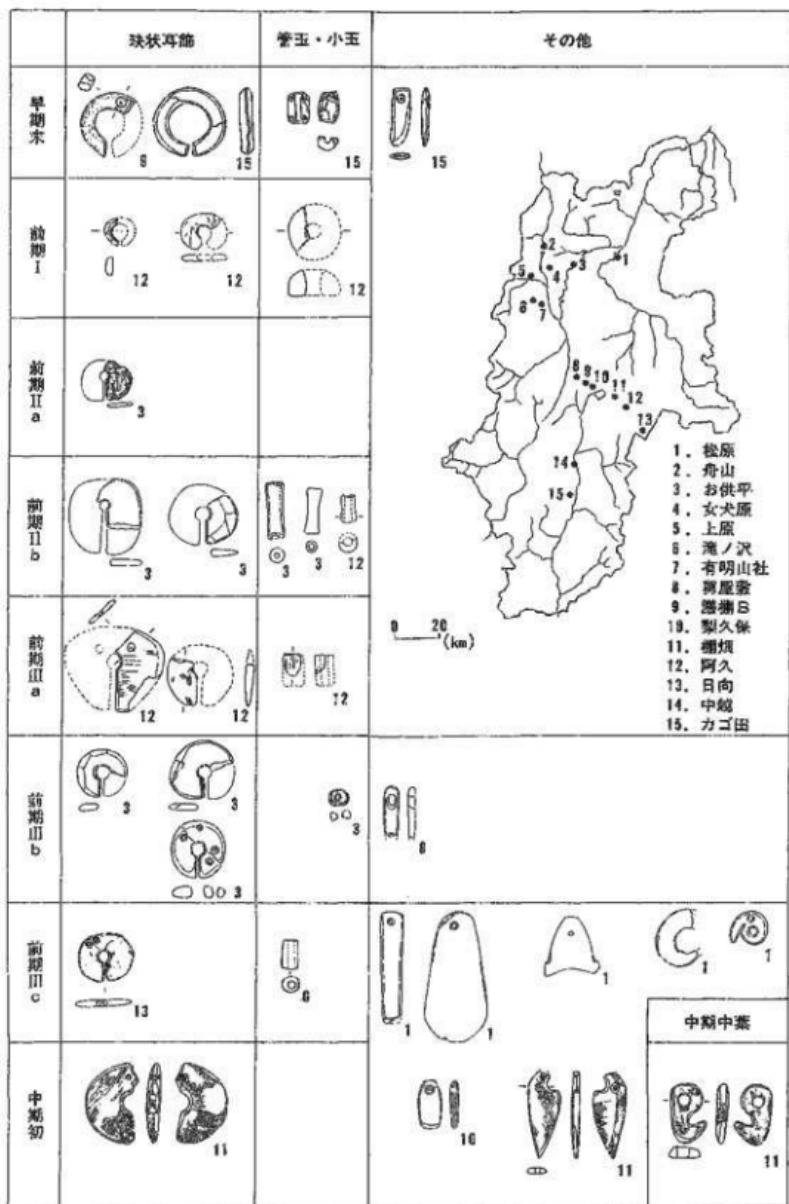


図4 長野県内出土飾玉変遷図（縮尺不同）



12号住居跡（前期後葉縄繩b式）からも珠状耳飾と管玉が出土している。

この根古谷台型装身具セットは縄文時代前期の装身具セットとしては倉輪・松原型装身具セットに比べると前者がより普遍的なものであったことが推測される。

ではこの装身具セットの基本形とでも言うべき根古谷台型にたいして倉輪・松原型のようなセットは他にはないのであろうか。

まず前期後葉に倉輪・松原型装身具セットを構成するものをはじめ様々な飾玉が出現しているので、前期後葉以後にはそれらの飾玉のなかのどれかを加えた形や根古谷台型+αというセットも想定はできる。

また、根古谷台型装身具セットとは異なるセットを構成する可能性があるものとして秋田県上ノ山II遺跡（高橋ほか 1988）などで出土している「燕尾形石製品」（図6-3）⁽²²⁾と上ノ山II遺跡には、ほかに珠状耳飾（図6-1、2）や「カツオブシ形石製品」（図6-5）などの飾玉が出土しておりこれらが組み合わさっていれば、これもセットとして成立立つかもしれない。ただ現段階では燕尾形石製品は秋田県などの東北地方日本海側に分布しており、倉輪・松原型や根古谷台型のような広く分布するものではないのかもしれない。

しかし、ここで注目したいのは、分布も離れ、時期も異なるが上伊那郡官田村所在の中越遺跡のいわゆる「岩偶」（図7）である（小池 1990）。垂飾に特徴的な上端に穿孔こそないが、中央に横切の切れ目を有し、ほぼ同じくらいの大きさである。燕尾形石製品にも穿孔しないものもままみられる。倉輪・松原型の分布と希少性を考えると両者に何らかの関係があり、岩偶を込んだ形でセットとして抽出しうる可能性もある。

以上のことから飾玉・装身具セットの変遷を考えて見ると、根古谷台型は恐らく値奈寺遺跡に見られることからおそらくとも前期初頭から成立し、なかには中越遺跡（前期初頭）のように変わったものも存在したが、飾玉・装身具セットの基本形を形成していたのであろう。その後前期後葉に倉輪・松原型の出現を見て飾玉・装身具は全盛を迎えるが（中期初頭まで）、中期に入ると減少していくようである。

では、飾玉・装身具セットはなにを意味しているのであろうか。セットとはいっても個人が一度に必ず装着するかどうかは、特に倉輪・松原

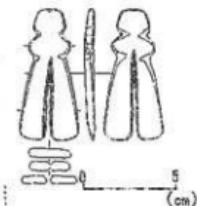


図7 中越・岩偶

型の場合よく分からぬが、筒玉・装身具セットを基準に遺跡単位で考えたとき以下のような分類ができる。

- ① 松原・倉輪型装身具セットを有する遺跡
- ② 根古谷台型装身具セットを有する遺跡
- ③ ①②以外のセットを有する遺跡
- ④ 筒玉（块状耳飾など）を単独でもつ遺跡
- ⑤ 筒玉をまったく持たない遺跡

勿論、こうした分類をし量的なものを比較すると言ってみても、発掘した時に見逃したり検出しきねたといった調査の精度の問題や倉輪・松原型のような短命なものとを同一レベルで評価して良いのかといったことが疑問とされるであろう。

よって本稿ではまず前期後葉に限ってみると、量的には①倉輪・松原型が最も少なく、②根古谷台型が続き、④そして⑤のタイプの順にならう。このことは、明らかにどの集団・個人でも保有できたものではないことを示している。つまり縄文社会の構造を反映しているためにこうした区別が存在するのではなかろうか。ただし、それは倉輪遺跡が大船の孤島にあり、松原遺跡も集落ではあるが阿久遺跡などに比べれば決して大きい集落とは言えないことからも、必ずしも大規模な集落に富が集中し、その結果筒玉・装身具セットが保有されたというわけではなさそうである。

縄文時代に「富」の存在などなしもない気もするが、縄文時代の富についても積極的な見解を渡辺仁が主張している。筆者は民族学の収集はないのでその是非については分からぬことが多いが、渡辺仁は民族学的な通例から言うと縄文社会が「狩猟階層化社会」でありその極左として、特殊専門化した実用を離れた奢侈品乃至装飾品の差別的の流通（交易）が発達していることを挙げている。さらに「身体装飾品工芸」の類例として硬玉製大珠とオオツタノハ貝製品をあげ、これらが縄文社会のスタイル・シンボル（威信獲得財）であり、これらが富者層（狩猟階級）の支配にあったという（渡辺 1990）。

ただし既に触れたようにもしも、渡辺のいうような富者層が縄文社会に存在していたとしても、それは後代の弥生時代や古墳時代とは著しく異なる在り方をしていたようである。こうした縄文時代前期の社会の構造が装身具のセットや微妙な素材の格差に反映しているのではないか。

さらに、このことは本稿では追及できなかったが、根古谷台遺跡の出土例を考えてみると、100号墓（図5-1、2）と117号墓（図5-3、4）はそれぞれ块状耳飾だけが2点ずつ、101号墓（図5-5～15）は管玉6点、丸玉2点、114号墓（図5-6）は管玉6点、小玉5点（図5-5～15）が出土している。つまり、おそらくは個人レベルでは块状耳飾+管玉・小玉という組み合わせで装飾することはなく、块状耳飾を付ける人と管玉・小玉を付ける人の二者に別れていたのであろう。これは長崎や藤田らの指摘するように块状耳飾は女性、垂飾は男性という性別を表しているのかもしれない。将来的には個人レベルでセットがどのように付けられていたか解明したいものである。

IV まとめ

まずセットとして見た飾玉・装身具の流れは、早期末まではセットがあったかどうかは今のところよく分からぬが、北海道共栄B遺跡（早期中葉）で块状耳飾以外に小玉も伴うようなので、当初より耳飾と透鈎というセットがあったかもしれない。

おそらくセットが存在するのは長野県カゴ田遺跡（早期末）からで、富山県極楽寺遺跡（前期初頭）では根古谷台型装身具セットの各々はすでに製作されているので、根古谷台型は前期初頭には成立していたであろう。

この根古谷台型を構成する块状耳飾と管玉（小玉）を併出する遺跡としては既に述べたように長野県内では女大原遺跡、阿久遠跡、お供平遺跡などでも見られ、栃木県根古谷台遺跡で良好な資料が出土している。管玉だけみても北安藤郡松川村有明山社遺跡（藤沢ほか 1969）同村荒ノ沢遺跡（前期末）（塙沢 1967）さらに、層位的には混入がみられやや不安であるが御谷市粟久保遺跡55号住居跡の例（関谷市教委 1986）なども中期まで下る可能性をしめしており、少なくとも前期を通してセットが存続していたようである。この他の長い根古谷台型に対して前期末中葉初頭に倉輪・松原型装身具セットが登場するかまだセットとして把握しきれていないが、秋田県上ノ山II遺跡などの燕尾形石製品などの飾玉も前期後葉から出現しているようである。

倉輪・松原型装身具セットを構成するもののひとつである玉斧について論及している長崎元廣の指摘するところであるが、玉斧は前期諾磯式期に出現する（長崎 1984）こと、「の」字状石製品も諾磯式以前には類品が知られないことからも前期後葉（諾磯式期）が画期になりそうである。前述の燕尾形石製品なども関連があるかもしれない。藤田も諾磯式期に關東地方で土製块状耳飾、円筒下唇式の分布する東北には三角状块状耳飾、山陰地方には石包丁状块状耳飾が見られ、地域色が強く現れると指摘している（藤田 1971）。

さて、こうして階級を極めつつあった飾玉がどうも中期以降減少するらしい。型式学的には発生の過程がよく解明されているとは言えない硬玉製大珠が入れ代わるようである（長崎 1984）⁽²⁷⁾。块状耳飾も残るようであるが、その主体は土製块状耳飾さらには耳栓にとって代わられるようである（高山 1965）が、これらの装身具が中期以降もセット関係があったかどうかは興味深い⁽²⁸⁾が、その詳細については今後の研究に期待したい。

また縄文時代の前期に入つて盛行した飾玉・装身具は块状耳飾を中心にかなり個々には研究されてきた。しかし、块状耳飾の個別の起源・系譜問題については出尽くした感も否めない。大陸の块と関係するとの説も根強いが他の飾玉と玉器が関係しているかどうかかも判断の材料になろう。

セットで考えれば、「の」字状石製品も形態から追及し、これがイモガイの断面形を模しているという中山説（飯島・中山 1989）はたしかにおもしろい旁證ではあるが、これを直ちに黒瀬文化（大竹 1990）、南西諸島系（小田 1992）とするのには幾慮ながら變容できない。

やはり藤田の研究の方向のように飾玉・装身具を生み出した製作技術・石材から北陸や中部高遠北半との関係をまずは考えるべきではなかろうか。いずれにしてもこうした飾玉・装身具は至極單

「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて

純な形をしているので、単に類似しているものを探すのであれば比較的容易であるが、個々の形狀の類似だけを根拠に起源・系譜を探究することには限界がきている。

しかし、本稿でたびたび繰り返してきたように、セットとしてこうした鉢玉・装身具をとらえ比較することによって、その意義、起源や系譜について解明すべきであろう。

文中の引用や文献などの中国の簡体字は日本の常用漢字にあらためましたので、文献や引用を参照される場合はご留意下さい。

なお文中一切の敬称・敬語を略しましたがお許し下さい。思い起こせば瀬川遺跡の「の」字状石製品を齋島政明氏に見せて頂き、西脇対名夫氏にその意義について教えて頂いたことがあり（西脇1989文献参照）、それを遠く離れた長野県で松原遺跡の「の」字状石製品に「再会」したことをきっかけに本稿はできあがりました。

また森浩一先生には、全体を通して様々なご教示を賜りました。松原遺跡資料の観察や本稿への掲載にあたっては原明芳、上田典男両氏には格別の配慮を頂き、「装身具セット」については、町田勝利氏に有益なご教示を頂いたことを感謝します。そして特に藤田富士夫氏の一連の労作に教えられること大ありがとうございました。

以下の諸氏に文献収集のご協力の他様々のご教示、ご指導をいただきましたのでお名前を挙げ謝意を表します。

河森一治 賀田 明 廣瀬昭弘 水ノ江和司 青柳泰介 大道和人 門脇秀典 富岡聖子 金 建洙
三上徹也 新津 健 赤羽義洋 前山精明 穂積裕昌 水科由紀子 石川直章 大工原豊 内堀信雄 新谷和季 長星幸二 木下哲夫 横畠 小嶋芳孝 三上徹也 徐 光輝

(表1)

番号	遺跡名	所在地	幅	高さ	厚さ	重さ	石材	文献
1	松原	長野県長野市松代東守尾	(2.9)	4.0	0.2	(3.6)	滑石?	(長野県埋文 1990)
			2.7	2.3	0.45	4.1	滑石?	(長野県ほか 1991)
2	倉輪	東京都八丈町経立	6.7	4.87	0.32	12.8	—	(倉輪遺跡調査団 1987)
3	泉山	青森県三戸郡三戸町泉山	3.4	3.0	0.3	—	結晶麻岩	(青森県教委 1976)
4	牛頭塚	福島県田村郡大越平福川	6.7	3.9	1.01	—	蛇紋岩	(大竹 1990)
5	天林北	富山県中新川郡立山町天林北	2.0	1.85	—	—	蛇紋岩	(藤田 1989)
6	瀬川	大阪府箕面市瀬川	(1.8)	(3.0)	0.27	(1.74)	蛇紋岩	(飯島・中山 1989)
7	鬼木貝塚	岡山県浅口郡船穂町鬼木	(1.6)	(4.06)	0.3	—	蛇紋岩	(大竹 1990)

幅、高、厚さの単位はセンチメートル、重さの単位はグラム、—は記載がないもの。なお欠損しているものの数値はすべてカッコで閉じてある。なお松原遺跡例の法量は筆者の測定による値であり、正式な値は報告書の刊行を待たれたい。

- 註1 築者は「の」字状石製品という用語を使うが、以下の研究史においては築者の用語をそのまま引用するので、不統一である。その是非については後述したい。また図2は（長野県ほか 1990）の掲載写真をトレースしたもので、縮尺は約2分の1にしてある。
- 註2 損傷県戸塚町所在の山鹿貝塚（永井・前川・横口 1972）など
- 註3 松原遺跡の石器の石材については、将来刊行される正式な報告書に掲られたいが、（長野県ほか 1990）によれば滑石であるらしい。
- 註4 滑石鋤の块状耳筋もおおく知られている（藤沢 1962）。
- 註5 普見によるが松原遺跡跡にも明確な擦痕が残されている。
- 註6 块状耳筋の製作技術の問題については、築者の言う擦切技術は藤田の言う「切削手法」（藤田 1983a）に含まれる。
- 註7 安土遺跡は1949年に山内清男らによって発掘された。正式報告は刊行されていないらしいが『國別考古学辞典』などによって块状耳筋などの遺物が紹介されている（坪井 1959）（山内 1999）。
- 註8 块状耳筋の型式率とは、次の式によって求められるという。切目（の長さ） \times 全長 \times 100=切目率、厚さ \times 孔側（の長さ） \times 100=厚さ率（切目 \times 孔側）、厚さ \times 孔側（の長さ） \times 100=厚さ率（厚さ \times 孔側）。断面形については西口唯一も形態の分類と編年を試みている（西口 1983）。堀江の言う厚さ率を底ちに「の」字状石製品に応用できないか、厚さ率35%以下という薄いD型が増えるのも前段後段であるので、「の」字状石製品が一例を除き0.2~0.5mmと薄いのではないか対応しているといえそうである。
- 註10 块状耳筋の最初の報告例は大野瀬外によるもので、大野瀬は「石櫛」と呼称している（大野瀬 1917）が、柴田が「説文」などを根拠に「幼稚の石製品」と呼称した。ただし、高山純によると柴田が根拠とした「説文」には块の形態的な特徴であるストリットがあるということは記されておらず、「幼稚器皿」でいう「块」という言葉も必ずしも織の一部が欠けているという意味ではないといふ（林 1973）。しかしながら、柴田が指摘するように林のいう本来の玉器たる块は、C字形をしたものではないかもしれないが、現代中国においても日本の块状耳筋と同じストリットのあるC字形をした新石器時代のものなどを块とよんでいるし、考古学的研究上の用語として定着しているし大野瀬のいう塊も適当ではないとすれば簡単には変遷できない（藤田 1992）が、中國古代文献に出て来る玉器の块と块状耳筋や新石器時代の块を使用法や意義などで容易に直結することは注意すべきであろう。
- 註11 中原でも玉器の定義は難しく、「以硬玉、軟玉、碧玉、蛇紋石、水晶、玉髓等為原料而創作的工具、裝飾品、祭器、駕馳品等」（斐綱 1986）、「現代の植物学では、玉は角閃石類の軟玉と輝石類の硬玉の総称である。そして、植物学の知識では今日のこのようないくつかの概念では遠く及ばない完全な古代には、玉は美しい石と同義義であった。（中略）本文では考古学界で行われている広義の玉器の概念、透閃石-陽起石系の軟玉やこれと関連する瑪瑙などの質が硬く、色つやは光って透明であり、研磨すると精巧で美しい遺物の総称を玉器と総称する。」（縦 1994）（筆者訳）などとやはり日本同様硬玉や軟玉以外の「硬く美しい石」も含めているようである。
- 註12 中國との関係では施麻來拾が①小さい擦修斧がある②吉瀬での出土例③大分県秋葉遺跡出土の陶高片（？）などを根拠に、殷周文化の影響を主張している（施麻來 1971）。實上歴史は青蓮闇文化が六千年前であり、日本の块状耳筋の発生時期と大体同じであること、施麻來のいう①の点や東アジア、東南アジアそして東北アジアに広く分布することから両者は無関係ではないとしている（黄 1975）。
- 註13 ただし共通B遺跡でみられる北海道の石刀鑿や擦切磨斧はシベリアと関連するという説もある（加藤 1963）（八幡 1948）。また早期には石頭块状耳筋以外に奇角盤のものが川原田洞穴（押形文）、猪牙型のものが花輪台貝塚（早期）から出土しているというが、いずれも所属時期が確定的ではない。
- 註14 鈴木寛治は南海ルート、吉浦・薩南諸島・九州という経路を想定する説（鈴木 1987）もあるが、木ノ江和

「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて

同によると西日本もしくは瀬戸内との交流の中で考えるべきであるという（水ノ江 1992）。

註15 朝鮮半島の後の出土状況は鳥居が指摘した咸鏡北道豆腐江畔や羅基洞内の貝塚に例があるとした（鳥居 1923）のはともかく小野忠明が平安北道大郡零洞里で表しているという（小野 1936）がいずれも所属時期が不明である。近年、韓国慶尚北道清道郡沙村里遺跡の発掘調査で块状耳飾が出土したとのことであるが、無文土器に伴うという（金 1990）、日本の弥生時代に相当することから検討が必要であろう。また下條信行によると「黄河流域、遼寧地方にみられた石斧、石鎌、石斧などの直線的な平面形をもつ扁平石器に対する擦切技法は朝鮮北縦で急速に姿を消し、朝鮮南部ではほぼ滅失となる。」という（下條 1987）、つまり擦切磨製石斧などは朝鮮半島や西日本には欠落しているのである。擦切磨製石斧や擦切技法の起源自体は必ずしも块状耳飾などの飾玉と関係があるかどうかは不明だが、調査者が直接を関係をもっていたこと寺村光晴らの指摘するところ（寺村 1971）であり、すくなくとも朝鮮半島および西日本にはこうした飾玉や擦切磨製石斧の生産は、あまり見られないようだ。

註16 藤田はシベリアからのルートも考えているようである（藤田 1990）。

註17 県内ではばかりに阿久遺跡でも製作過程を示すような資料が出土している（小柳 1982）。

註18 守村は块状耳飾だけでなく玉類全体の製作技術についても論及している（守村 1971）。

註19 A型式の第三類にも一部玉斧（有孔磨製石斧）に含まれるとする長崎元廣の見解（長崎 1984）もあるが、本稿では極口の図では刃がついているかわからないので長崎の言うようなものは一応玉斧から除く。

註20 有孔磨製石斧というような名称も玉斧より不適当とも思われないが、本稿ではこれらのものがいかに擦切技法によって作られた定角式磨製石斧と関連があろうと利器としてではないということ（装身具、垂飾などの利用法）を重視し、利器として用いられたものと一部区別したいので、とりあえず玉斧という用語を用いることとする。ただ長崎の言う玉斧は穿孔していなくても硬玉製のものも含めている点が筆者と異なる。既に多少述べたがこれら装身具と確定されているようなものの名称の体系化が必要であるかもしれない。

註21 玉箋という用語は八幡一郎が提唱した（八幡 1943）が内容が分かりにくく、類例も少ないのであまり用いられることがなかったようだ。その後、八幡は『日本考古学辞典』で「美麗な玉または蛇紋岩をもって、長楕円形の薄板を作り、その一端を先端にし、他端に近く小孔を穿ったもの。」（八幡 1962）と記述している。長崎は玉箋と玉斧は絶対別るのは困難であるとして、玉斧に含めている（長崎 1984）。

註22 石斧が男女両方に認讐されている例が北海道千歳市美沢Ⅰ遺跡（後期）にある（金子 1982）ので確に石斧が男性の象徴とも言えないであろう。

註23 註18で触れたが極口のいうA型類第三類のうち768（出土地は墺良鬼頭となっている）は块状垂飾のほうに入れた方がよさそうである。ただし、このようなものに先端が块状もしくは刃状に偏平にすれば、玉箋、玉斧と区別はつかない。

註24 図4の前葉Iは前期前葉（中越式期）、IIは中葉を古・新にわけそれぞれIIa・IIb・IIcは後葉でIIaが陸織a式期、IIb・IIcが陸織b式期、IIcが陸織c式から十三世紀式期といった時間幅を示している。

註25 ただし、これがすべて一括で出土したわけではない。後述するが個人単位でセットを有していたかどうかは別問題である。

註26 熊尾形垂飾は、極口流の『通玉考』のA型の第三類の769（出土地は羽前（岡山県）東田川郡となっている）が該当しよう（極口 1940）。秋田県内の出土上例としては雄物川町の根羽子浜遺跡、横手市の大島井山遺跡、南外村の山王台遺跡、田沢湖町の黒島B遺跡から出土している。绳文時代前期から中期の大木文化圏の所産であるという（高橋はか 1988）。

註27 玉斧から大珠が出現したとする説には異論も多いと思われるが、筒玉の垂飾にとって代わっていったというのはあながち検討はずれでもないと思われる。

註28 おそらく中期にも玉箋と硬玉製大珠などといったものがいかなる組み合わせを有しているか興味がわく。

(藤田 1971) また装身具は実は様々な材質のもので作られており、山鹿貝器の出土例をみても貝輪、大珠、骨角製品と種々たくさんであり、本来はこうした材質の異なるものまで含めた装身具セットの存在が明らかになれば良いのであるが、それを論じるためにはより良好な出土状況の資料が多く必要であろう。

参考文献

- (引用参考文献・五十音順・中括弧内人名は日本語読み)
- 赤羽 義洋 1983 「カゴ田遺跡」[長野県史 考古資料編 全一巻(三) 安井遺跡(南信)] 長野県史刊行会
- 金田 進 1972 「聚久保遺跡-第3・《次発掘調査報告》」岡谷市教育委員会
- 安 志敏 1984 「長江下流史文化對海東の影響」[考古] 84-3
- 斎島 正明・中山信隆 1989 「美浜市瀬川遺跡出土の「の」字状石製品」[考古学ジャーナル] 310
- 市沢 英利・百瀬忠幸 1987 「第3章第7節櫛型B遺跡」「中央官廳事道長野町郷土文化財発掘調査報告書」日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県地域文化財センター
- 上田 勝 1981 「九州における块状耳飾について」[鹿児島考古] 15
- 萬葉草花ほか編 1990 「經組」茅野市教育委員会
- 梅原 永治 1971 「史前の大口輪耳飾についての所見」[日本古玉藝術研究] 吉川弘文館
- 江坂 煙張 1964 「装身具」[日本原始美術] 2 徳間社
- 江坂 煙張 1981 「徳川織物からみた慶應時代の地域性」[地理] 9 古今書店
- 大竹 敏治 1996 「いわゆる「の」字状石製品について」[史跡] 15
- 大野 錠外 1917 「志摩飛鳥の石板に就いて」[東京人類學雑誌] 27-5
- 大野 錠外 1919 「河内飛鳥耳飾石板に就いて」[民族と歴史] 2巻2号
- 大野政雄ほか 1960 「村山遺跡」
- 大場夢雄ほか 1956 「上原」長野県教育委員会
- 小田 篤夫 1992 「恩讐を伝わった交流」[考古学ジャーナル] 352
- 小野 忠明 1938 「守綱里附近発見の块状有孔土器」「ドルメン」4-4
- 加藤 春平 1963 「石刃器について」[物質文化] 1
- 金子裕之輔 1982 「日本の美術 紀元時代Ⅱ(後期・晚期)」文化庁ほか監修 至文堂
- 喜田 真吉 1918 「河内郡遺跡被古の住民」「歴史地理」32-4
- 柴 桂芳編 1986 「中国大百科全書考古学」 中図大百科全書出版社
- 金 相亮 1990 「清遠沙付車塗漆發掘調査報告」[考古學誌] 2 韓國考古學研究所
- 黄 上強 1975 「块的研究」「國立台灣大學考古人類學刊」37-38 台湾大學
- 古市重司ほか 1976 「泉山遺跡発掘調査報告書」 岐阜県教育委員会
- 小杉 承 1992 「考古学断面小考(先史器・織文-遊牧編)-危形土製品は危なのかな?」「歴史学」85
- 小島俊彰ほか 1965 「飯塚寺遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
- 篠原秀彦ほか 1976 「共栄B遺跡」 清須町教育委員会
- 小柳 規男 1982 「椿石製品」「長野県中央道歴史文化財蔵庫発掘調査報告書-深村その5-」日本道路公团 名古屋建設局・長野県教育委員会
- 小林 康男・宮井義雄 1982 「男祖敷」 岐阜市教育委員会
- 酒井伸男・施達喜喜・平井尚志 1943 「考古學新稿」 改造社
- 柴沢 浩 1967 「佐本平北部遺跡地上的攤布廟期から中期への遷移立地」「信濃」119-4
- 塙入清樹ほか 1988 「お供平遺跡II」「長野県澤尻高等学校グランド造成に伴う郷土文化財発掘調査報告書」 岐阜県教育委員会

「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて

- 柴田 常惠 1917 「模様の石製品」『人類學雑誌』32-11
- 下條 信行 1987 「東アジアにおける擦切技法について—弥生時代擦切石器の系譜ー」『岡崎敬先生退官記念論集』上巻同原古
- 宋永 雅雄 1962 「玉枕」『日本考古学辞典』 東京堂
- 鈴木 遼治 1987 「要草原の装身具にみる地域性—块状耳飾と南海座具型腕輪を中心にー」『同志社大学考古学シリーズ由考古学と地域文化』
- 鈴木道之助 1991 「円錐石器時代入門事典 調文』柏雲房
- 片沢 長介 1965 「周辺文化との関連」『日本の考古学』II 河出書房新社
- 高橋 敦ほか 1983 「打越跡」富士見町教育委員会
- 高橋忠彦ほか 1988 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書」秋田県教育委員会
- 高山 純 1965 「縄文時代に於ける耳柱の起源に関する一試論」『人類學雑誌』73-4
- 高山 純 1967 「中國の珠」『古代学』13-3・4
- 谷川 鶴雄 1924 「块状耳飾に付いて」『考古學雑誌』14-4
- 坪井 清足 1959 「あづらーいせき」(水野清一・小林行雄編)『圓解考古学辞典』 東京創元社
- 寺村 光晴 1967 「縄文時代前期飾玉生産の一考察」『和洋女子短期大学紀要』第十二輯
- 寺村 光晴 1971 「石工(玉工)」『新版考古学辞庫』9 雄山閣
- 友野良一ほか 1978 「かご田」 越島町教育委員会
- 島居 龍藏 1923 「梅原氏の鳥取県報告を読みて」『人類學雑誌』38-2
- 島居 龍藏 1926 「先史及び原始時代の上伊那」 信濃教育会上伊那部会
- 水井昌文・前川威洋・樋口透也編 1972 「山鹿貝塚」 山鹿貝塚調査団
- 長崎 元賀 1984 「縄文の玉斧」『信濃』36-4
- 長野県・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1991 「いま信濃の歴史はよみがえる」
- 長野県埋蔵文化財センター 1990 「松原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』7
- 中山 浩司 1992 「縄文文化と大陸系文物」『季刊考古学』38 雄山閣
- 西口 陽一 1983 「写真から見た性別」『季刊考古学』第5号
- 西脇対名夫 1989 「箕面市瀬川遺跡とその時代」『箕面史学会会報』4-4
- 野口 繁樹 1962 「玉斧 ぎょくふ」『日本考古学辞典』 東京堂
- 八丈町倉輪遺跡調査班 1987 「倉輪遺跡」 東京都八丈町教育委員会
- 林 正樹・館 俊之・藤岡弘善 1989 「「の」字状耳飾のルーツ」『箕面市立第三中学校地歴部』
- 林 己奈夫 1969 「中国古代の祭玉、環玉」『東方學報』第40冊 京都大学人文科学研究所
- 林 己奈夫 1973 「佩玉と継」『東方學報』第45冊 京都大学人文科学研究所
- 樋口 清之 1933 「块状耳飾」『考古學雑誌』23-1
- 樋口 清之 1940 「垂毛考」『考古學雑誌』31-6
- 藤沢 宗平 1962 「縄文文化の潜石製品」『古代』39-40
- 藤沢宗平ほか 1969 「有明社」 松川村教育委員会
- 藤田富士夫 1971 「耳栓の起源について—筒玉の在り方と関連して」『信濃』23-4
- 藤田富士夫 1983a 「块状耳飾」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 藤田富士夫 1983b 「块状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』石川県考古学研究会会誌』26
- 藤田富士夫 1985 「縄文文化と海外の交流」『季刊考古学』12 雄山閣
- 藤田富士夫 1989 「玉」ニューサイエンス社
- 藤田富士夫 1990 「古代の日本海文化 海入文化の伝統と交流」 中公新書

- 藤田富士夫 1992 「玉とヒスイ」 同朋社
- 森嶽 宗一 1950 「块状耳飾を出せる族體式遺跡」「付表考古学全誌』2-1、2
- 堀江 武史 1992 「块状耳飾の分類と製作」其に關して』『國學院大學考古學資料館紀要』第8号
- 榎木 錠ほか 1988 「近畿山陽新石器時代墓葬考－晉進陶文化の再検討－」『関西大学考古学研究年報』2
- 町田 孝 1968 「江森省那岐新石器時代墓葬考－晉進陶文化の再検討－」『関西大学考古学研究年報』2
- 水ノ江和同 1992 「九州の块状耳飾」「同志社大学考古学シリーズV考古学と生活文化」
- 水山 昭宏 1987 「第4章第3節石製品」「東京都八丈町遺跡調査」 東京都八丈町教育委員会
- 武路 雄六 1966 「八ヶ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡－長野県飯山市富士見町日向遺跡の調査」「信濃」刊18-4
- 八幡 一郎 1943 「玉鏡」「人形學雜誌」58-8
- 八幡 一郎 1948 「日本の石器」
- 八幡 一郎 1962 「玉鏡 ぎょくへら」「日本考古學辭典」東京堂
- 山内 清男 1964 「日本先史時代概説」「日本原始美術」1 洋旗社
- 山内 清男 1969 「縄文時代京阪期の諸問題」「ミュージアム」224
- 山本 那久 1979 「上浜田遺跡」神奈川県教育委員会
- 相 嘉昌 1994 「長江下游地区史前玉器研究」「東南文化」4
- 渡辺 仁 1990 「縄文式階層化社会」 六興出版

(追記)

脱稿後、2年以上たちかなり文献や類例も増えたが、本文自体を書き直すことは出来ないとこのことなので、順を追って補足したいと思う。

まず「の」字状石製品については、以下の諸例を前山精明氏が紹介している。新潟県卷町南赤坂遺跡、天神遺跡、直福場遺跡から各1点づつ蛇紋岩製。石川県金沢市三小牛ハバ遺跡から1点（蛇紋岩製）。山梨県中道町上の平遺跡から1点。またこうした出土例を踏まえて、①糸魚川中心半径150km以内に多く見られる。②蛇紋岩が卓越している。滑石も見られる。③平面形が広域に分布するIa-Ic類に主に別れる。④卷町の南赤坂遺跡には「の」字状石製品の素材となりうる蛇紋岩の研磨跡が出土している。といった諸点を挙げ、前山氏は主たる製作地を北陸方面と考える藤田富士夫氏を支持されている。（前山精明 1994「“の”字状石製品の分布をめぐる新動向－角田山麓縄文遺跡群の事例から－」「新潟考古」）

また、「の」字状石製品に類似する資料として、北海道小樽市手宮公園下遺跡から清石製の切り込みが二つ対称に入る垂飾が出土している（石川直幸 1993 「手宮公園下遺跡」小樽市教育委員会）。神奈川県横浜市権田原遺跡からも切り込みが二つある垂飾が出土している。（横浜市歴史博物館 1995 「常設展示案内」）

块状耳飾については、群馬県安中市中野谷松原遺跡（大工原豊氏ご教示）、岐阜県岐阜市御望遺跡（内柳信雄 1994 「御望遺跡」岐阜市教育委員会）、長野県上松町水無神社前遺跡（新谷和孝氏ご教示）で墓域の中での出土状況が明らかにされる例が増えているが、装着や所有に性差などの規制があったことや他の装身具や石器との関係が伺える。（川崎 保 1994 「縄文時代前期の玉と墨」）

【同志社大学考古学シリーズVI考古学と信仰】

玉斧も、南赤坂遺跡で出土しており「の」字状石製品と組み合っていたことが伺える（前山氏ご教示）。また縄文時代中期の「刻文」のある有孔石斧が山形県で出土していて、中国大陸との関係を指摘する論文もある（浅川利一・梅本成視 1995 「山形の縄文遺跡から出土した中国古代の有孔石斧」「多摩考古」25）。

棒状垂飾は、倉輪遺跡と松原遺跡例が「有孔磨製短骨石器」と紹介されている（小林道雄・原秀三郎編 1993 「新版古代の日本⑦中部」角川书店）。また「笠状垂飾」として棒状垂飾が栃木県削田遺跡などの栃木県内の例が紹介され、いずれも蛇紋岩製で块状耳飾との関係も指摘されている（上野修一・荒川竜一 1993 「迷ぶ・割る・磨く—旧石器時代から古墳時代までの人と石のかかわりー」栃木県立博物館）。

セットについては、個別の遺構レベルでは福井県金津町桑野遺跡で大量の块状耳飾とともに管玉、笠状石製品（石笠状装飾石器とも。上野・荒川両氏が笠状垂飾と呼称するものとは異なり平面形は橢円形で、断面形は若干くぼみ、ゆるやかなU字形を呈している。）が出土しており、さまざまな組み合わせがあるようである。（木下哲夫 1993 「桑野遺跡発掘調査概要」金津町教育委員会）。また遺跡レベルで考えた時に、この桑野遺跡例も「桑野型装身具セット」とでも呼べそうである。この組み合わせは中国遼寧省阜新県查海遺跡の玉器に、块・斧・管状珠・ヒ形器が見られ、（方殿春 1991 「阜新查海遺址の発掘與初步分析」「遼寧考古学刊」1）それぞれ块状耳飾・玉斧・管玉・笠状石製品に類似している。本稿で論じている「の」字状石製品もこうした観点から彼我の比較をすべきであろう（吉林省左家山遺跡の石製装飾品と「の」字状石製品）。（福岡市立博物館 1995 「縄文時代展図録」）。

大陸との関係では中山清隆氏が東アジアの近年の例を紹介されているが、起源論を結論づけてはいない（中山清隆 1992 「縄文文化と大陸系文物」「季刊考古学」38）（中山清隆 1994 「東アジアから見た块状耳飾の起源と系譜—中国遼寧省と沿海州の例からー」「地域相研究」22）。山田昌久氏は块状耳飾を他の玉類や櫛飾りなどと合わせて畿東全体として考えるべきだという。（山田昌久 1995 「コスモポリタン『縄文人』」「縄文人の時代」新泉社）森浩一氏も同様なことを指摘している。（森浩一 1994 「東の三内丸山、西の春野ヶ里—二つの巨大遺跡」アサヒグラフ臨時増刊三内丸山遺跡）山田・森浩一氏の説には同意である。

斜行沈線文を多用する土器群の研究

—「後沖式土器」設定は可能か？—

寺 内 隆 夫

- | | |
|------------------|---------------------|
| I はじめに | VI 斜行沈線文土器の時間 |
| II 研究史 | VII 斜行沈線文土器の空間 |
| III 型式設定のための分析手順 | VIII 「後沖式土器」設定は可能か？ |
| IV 装飾の構成方法 | IX おわりに |
| V 個別装飾の形と技法 | |

I はじめに

本稿は、9年前に「斜行沈線（文）を多用する土器群」（寺内1984）と呼称した土器群（以下、斜行沈線文土器と略す）を型式として設定し得るか否かを問うものである。

1970年代以降、绳文時代中期の土器研究においては、型式設定についてある種の心理的拘束めのかかる時期が続いた。中期前葉や中葉の土器研究において乱立した型式名が混乱を招いたためである。その後、新型式名の導入は分析に先行することが少くなり、まず、各地域で大幅に増加した資料を集成し、型式名を保留したまでの位置づけが行われるようになった。

一方、こうした作業の中で、各種の系統の土器が、あらゆるレベルで複雑に絡み合っている状況が明らかになっていった。研究者の着眼点は、土器の抱えている情報の中で、特に地域間のいろいろなレベルでの動きや交流、あるいは川筋や谷毎といった狭い地域の独自性の解明に向かっていった。その複雑さは、従来の型式によって明瞭な境界を設定し、モザイク状に全国を区分することの意味を相対的に低くしていった。このため、固定的な枠組みを作ってしまい、土器の動きを説明にくくする“型式”的”の設定はさらに留保されてきたように思える。

しかし、視点を変えてみると一見装飾の独自性が見られないような土器でも、細部において独自性を示し、周辺地域の装飾を拒絶している場合が存在する。それらは、単に周辺地域との交流が少ないために装飾に変化が生じた、といった単純なものではなく、意図的に独自性強調のために、差異を顯示していると考えられる場合がある。そうした土器群を持つ地域では、組成の半数近くを周辺地域の土器が占めていたとしても、その土器群に独自性が認識できれば“型式”的”の設定が可能なのではないだろうか。今回の“型式”的”設定への過程は、固定的な枠組みを作るためのものではなく、流動する土器装飾文化の中で独自性を探索し、保持しようとする小地域の状況を明らかにするためである。その独自性の象徴として「名前」（型式名）が必要なのである。

今回取り上げる斜行沈線文土器は、研究者の認識では、勝板式（猪沢一藤内式等々）の範疇に

にいれる場合が多い。楕円形区画文の重畠などの類似点が多いため、斜行沈線文の使用などは些細な地域性でしかない、と言うとらえかたである。この点については、縁部の装飾がいかに大きな差異として力を持っているのかを明らかにしていきたい。さらに、北、南、東などの隣接地域の装飾を探り入れながら、その組み合わせの仕方でどこの地域とも異なる装飾を作り出し、装飾の根幹に觸れる構成方法にも独自性を見出せる点を証明していきたい。

II 研究史

① 勝坂式土器と異なる中部高地の土器群への関心

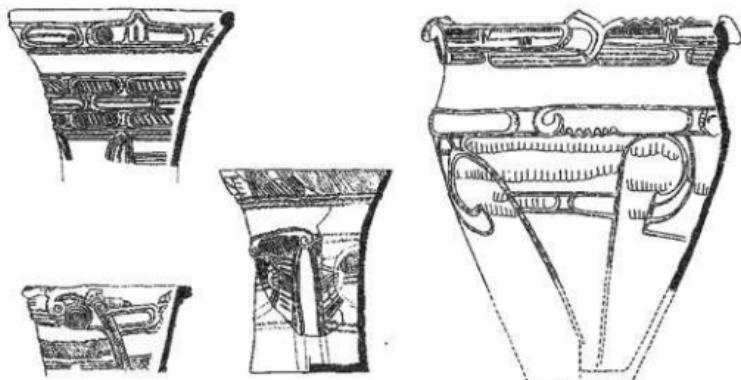
1980年代まで、斜行沈線文土器の主体的分布圏での調査が少なかったこと、あるいは平出三A土器などの個性が目立たないこともあって、ほとんど関心に上らなかった。

1983年、後沖遺跡の報告（福島1983）において、「猪沢式の特徴を残すものや猪沢式から抜け出しているものなど……いわゆる八ヶ岳南麓の新道式土器とは意を異にする傾向……新道式土器というよりも新道式併行期と呼んだ方が適切……」といった表現によって注目されたのが唯一であった（第1図）。

② 仮称「斜行沈線（文）を多用する土器群」

一方、下総考古学研究会の『勝坂式土器の研究』（下総考古学研究会1985）の共同研究において、勝坂式土器の分布域と周辺の土器を集成する中で、筆者らは、中部高地の分水嶺以北には勝坂式土器と異なる土器が存在する感触を得ていた。

この共同研究をふまえ、筆者は、1984年に角押文を持つ段階（いわゆる猪沢式）を勝坂式土器の範囲に含めることを主張し、それに平行する分水嶺以北の土器の一部を「斜行沈線（文）を多



第1図 望月町・後沖遺跡出土土器（1／9）

用する土器群」と仮称し、その特徴を示した（寺内1984）。

沈線装飾の一部に過ぎない斜行沈線文を名称に冠した理由は、分水嶺以南の土器群との差異がそこに豪華されていると考えたためである。

広義の五箇ヶ台式土器の沈線装飾は、中期中葉に移る段階で、押し引き文へと変化していった。この押し引き化は徹底して行われ、勝坂式土器や阿玉台式土器の初期の段階では、単なる沈線を探すのが困難な状況となる。押し引き文へのこだわりは、分水嶺以南の中部高地・関東・南東北地域で押し引き文が分化・発展をみせ、土器装飾の主流となることでも理解できる。

ところが、こうした押し引き化の傾向を逆に徹底的に否定したのが、中部高地の分水嶺以北に多い斜行沈線文土器であった。装飾全体の構成は、阿玉台式土器や勝坂式土器との類似性が高く、一見、違いが明瞭でない。しかし、細部の装飾要素であっても、使用頻度が高く、目に留まる沈線装飾に、こうした徹底した差異があるからには、これを前面に押し出して型式の違いを象徴させることができると考えたのである。

1986年（寺内1986）には、勝坂式土器との並行関係から、2段階以上の区分が可能なことを示し、その装飾要素のいくつかが、勝坂式土器の中に取り込まれていく過程を明らかにした。このことは、斜行沈線文土器が独自の変遷を有する時間幅を持ち、単なる偶然から生まれ、単発で消滅に向かうのではないことを証明した。もう一点は、勝坂式土器の装飾要素と考えられていたものが、実は、斜行沈線文土器に先取権があったことを明らかにし、斜行沈線文土器が勝坂式土器の一傍流でないことを示そうとした。

1988年（寺内1988）には、伴出關係から勝坂II式（新道式）に並行する段階の例を取り上げ、勝坂I式（洛沢式）からII式への勝坂式土器の装飾変化の方向性と斜行沈線文土器の変化の方向性に類似点を認め、これを、勝坂式土器からの一方的な影響とはとらえず、「同時平行」の変遷ととらえた。

また、この時斜行沈線文土器の分布図を示したが、その後、主体的な分布域については修正を行っている。すなわち、中部高地の分水嶺以北の全域で主体的となるのではなく、東信地域の一部に限られる可能性がでてきたのである（寺内1992）。

③ 斜行沈線文土器への反応

斜行沈線文土器は、勝坂式土器や阿玉台式土器の認識の仕方において、それぞれの土器の一部に入れられることが多い。植田氏（1988）や谷井氏（1991）のとらえ方がそうであり、猪沢様式や勝坂式土器の範囲で説明している（図2、3図）。

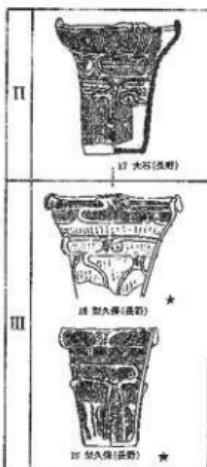
また、斜行沈線文土器を勝坂式土器から分離している例としては、「信州系土器」として表現している高橋氏（1990）などの考え方がある。

III 型式設定のための分析手順

型式をどうとらえるかについては、益々の肉体疲労が頭まで侵してい るため、考察しきれていない。そのため、ここでは手順だけを説明しておきたい。また、今回は筆者の中に型式を設定しようという意図が強く働いている点を断っておきたい。

型式を設定するにあたっては、1. 独自の装飾構成方法（背後には構造がある）を持っていること。2. 独自の装飾の形があること。3. 独自の装飾技法を持っていること。4. 独自の時間軸を有していること。5. 独自の分布域を有していること。6. 分布域内の特定地域で、器種構成の主体をなし、量的にも安定していること。以上6項目を満たすものを型式として認定したい。

また、VI. 斜行沈縞文土器の時間までは、拙稿（1984, 1986, 1988）で示した時間的位置づけの上に別けて説明を加える。空間的位置づけについては、VII. 斜行沈縞文土器の空間までは、訂正を加えた拙稿 第2図（1992）の分布略図と隣接型式を念頭に入れておいていただきたい（第4図）。



第2図 桐田鶴猪沢式土器様式変遷図
(1988)より
★は斜行沈縞文土器

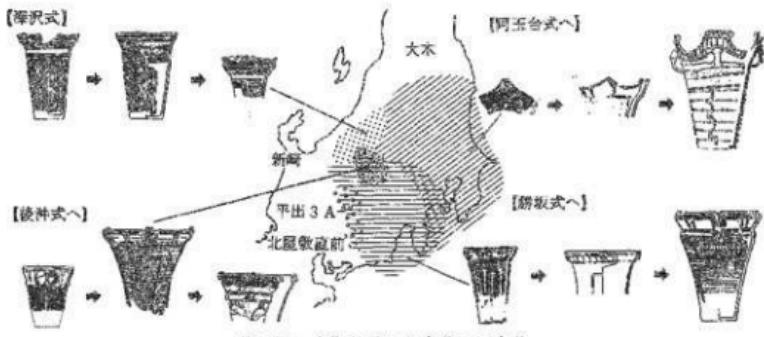
IV 装飾の構成方法

① 装飾の構成方法について
縄文時代中期の土器において、装飾の構成方法は、その背後に隠された神話的な部分と関わっていると考えられる。それによって、装飾の施される世界が、空間的に分割され（器面横位分割=文様帶）、時間的に場面が展開される（器面縱位分割=装飾単位）。さらに、特定の装飾要素が特定の位置に配置されていくと考えられる（寺内1987）。ここでは、論証不能な神話的な部分の説明は省いていく。



※第「U」字状縦齒文を中部地方特有としているが、
4は「勝板式」としている。

第3図 谷井氏のとらえ方



第4図 中期前葉から中葉への変遷

② 中期前葉から中葉への変動（第4図）

中期前葉⁽¹⁾から中葉への土器装飾の変化は、大きな転換期を示している。その理由には、1.多くの装飾要素が一時的に脱落・断絶し、2. 特定の少数の装飾要素に集約される。3. 特定の装飾要素が飛び抜けで発展し、集中的に使われる。4. 主要な装飾に隣接地域からの装飾要素導入がなされる。などをあげることができるが、その根幹をなす変化は、5. 装飾の構成方法の大きな変化にある。

中期前葉後半の装飾は、口縁部文様帶⁽²⁾下で装飾を二分するものが多く、口縁部に主要な装飾を展開させ、頸部から体部にかけては、直線的に口縁部文様帶を支えるよう、「Y」字状懸垂文などを配置した例が主流を占めていた。明らかに、装飾の中心は口縁部文様帶にあり、体部装飾はそれを支える位置づけにあったと考えられる。

中期中葉への時期には、この装飾の骨格（物語の筋道）にあたる部分での変化が起きたのである。それは、勝坂式土器などに代表される体部の懸垂文の変化にある。中期前葉でも、沈線装飾や個々の装飾要素が体部を埋めることがあった。しかし、それらを統括している装飾の骨格部分の変化は少なかったのである。体部での懸垂文の変化は、体部装飾への注目度が高まり、口縁部装飾に対してその価値が相対的に上昇したことを示している。そして、こうした動きは、五領ヶ台式土器の主な分布域である関東・中部高地地域で同時に起きている。さらに、それまで同一方向へ平行して変化が進んでいたのに対し、この時期には、各々の地域で独自の方向への動きを見せ、地域性を顕在化させていった点でも、転換期であることを示している。

斜行沈線文土器も、旧五領ヶ台式土器の分布圏にあって、転換期を迎えることになる。

③ 無面横位分割一口頸部文様帯（第5図）

五領ヶ台式土器の分布圏からは、斜行沈線文土器のほか、勝坂式土器と阿玉台式土器が差異を顕在化させていった。ここでは、この3者を比較していきたい。

この時期の分割の基本は、器形の変換線と陰線によってなされる場合が多く、口頸部文様帯はキ



第5図 斜行沈線文土器、勝坂式土器、阿玉台式土器の装飾構成

ヤリノバー形の器形から、口縁部と頸部に分離されることになる。

口縁部文様帯は、勝坂I式土器ではキャリーバー形の口縁部文様帯全体を幅広く使用し、一段の装飾を配置する(第5図中央)。これに対し、阿玉台式I類土器の場合は、口縁部文様帯を2段分割し、その上段部分のみに窓神状の区画文などの装飾を配する場合と、口縁部文様帯自身を縮狭くし、一段の装飾を配置することがある。いずれにしても、勝坂I式土器に比べ幅の狭い装飾が施用されることが多い(第5図右)。

斜行沈線文土器を見る(第5図左)と、口縁部文様帯を2段分割し、幅の狭い装飾を施す点では、阿玉台式I類土器に類似する。しかし、2段分割した両段ともに区画文などの装飾を配置することは阿玉台式I類土器では皆無である。一方、区画文を重ねさせていく点では勝坂I式土器と共通している。しかし、勝坂I式土器では口縁部文様帯を2段分割することはなく、斜行沈線文土器との違いを明確にしている。

斜行沈線文土器の特徴は、口縁部文様帯を2段に分割し、その両段に幅の狭い区画文を多用する、といった点である。このことは、基本的な文様帯の分割では阿玉台式I類土器と共通(勝坂I

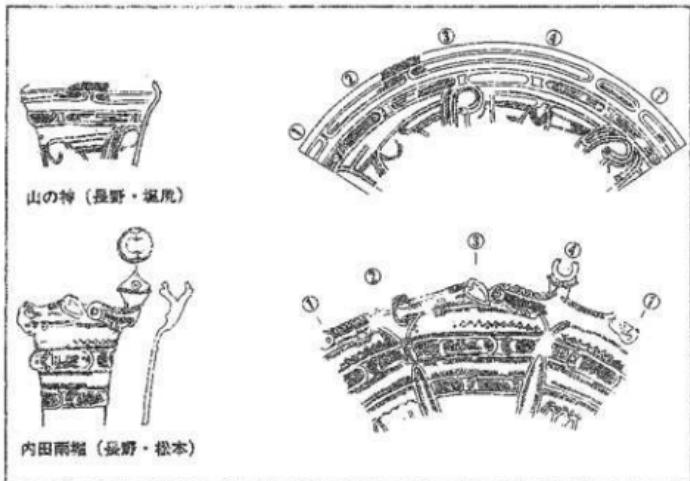
式土器との差異) し、勝坂 I 式土器に類似した区画文を持つこと(阿玉台式 I 類土器との差異)によって、両型式の中間を突く形でその独自性を保っているのである。

④ 極面横位分割一体部文様帶(第5図)

勝坂 I 式土器の場合、片流れの蛇行懸垂文は短い隆線を加えることによって区画文となっていった。その発達は、口縁部文様帶から連続する形で、頸部・体部へと重疊していく、器面を区分していくことに執着するようになる。頸部に無文帯(波状沈線などはある)が普及するのは、阿玉台式 I 類土器や斜行沈線文土器より遅れるようである。懸垂文は、相対的な価値が減少し、体部下半に残存する程度になってしまふ(第5図中央)。

一方、阿玉台式 I 類土器では、蛇行した懸垂文が口縁部文様帶とは分離して、頸部下(体部上半)からはじまることが多い。また、区画文の形成は遅れ、1条の蛇行懸垂文のほか、左右対称となる2条の蛇行懸垂文などを配置することが多い。体部全体の装飾は未発達で、懸垂文が他の幾何装飾と絡むことは少なく、懸垂文が装飾の主要な位置を占めている。

斜行沈線文土器は、ここでも勝坂 I 式土器と阿玉台式 I 類土器の特徴をうまく取り入れながら独自性を保っている。斜行沈線文土器では体部で隆線による区画文などが重疊し、勝坂式土器との類似性を示している。しかし、口縁部文様帶同様に幅の狭い区画文であること。区画文のはじまりが、口縁部文様帶から連続することは稀で、体部上半からはじまること。中央に逆「U」字状文が横位の装飾を統括する形で並んでいたり、左右対称の懸垂文が必ず付くなど。違いも大きい。体部上半から装飾がはじまり、左右対称の懸垂文が存在し、その懸垂文が重要な装飾となっている点な



第6図 斜行沈線文土器の器面継位分割

どは阿玉台式I類七器と共通する点である。

ここでも、勝坂式土器との共通点は阿玉台式土器との差異を示し、その逆もある。斜行沈線文土器は、隣接型式との差異の積み重ねによって独自性を確保しているのである。

⑤ 器面縦位分割—単位装飾（第6図）

斜行沈線文土器の器面縦位分割は、4単位を基本としており、この点に関しては隣接型式との違いを明確にさせることができない。器面の展開の仕方に細かな差異が存在すると考えられるが、展開図や展開写真の資料増加を待って検討していきたい。

V 個別装飾の形と技法

① 形と技法について

個々の装飾要素の形によって効果を見せる場合と、装飾要素のいくつかが慣用句のように組み合わされて、特有の効果を引き出す場合がある。

装飾要素に関しては、隣接型式などとの交換が頻繁に行われる反面、些細な問題と思われる部分でこだわりを見せ、独自性を強調させることができる。そこには、意識しようがしまいが、目に見えぬ伝統を引き継いでいる場合と、目の前にある隣接型式との違いを示さなくてはならない現実的な対応の問題がある。斜行沈線文の多用にその両者を見ることがある。

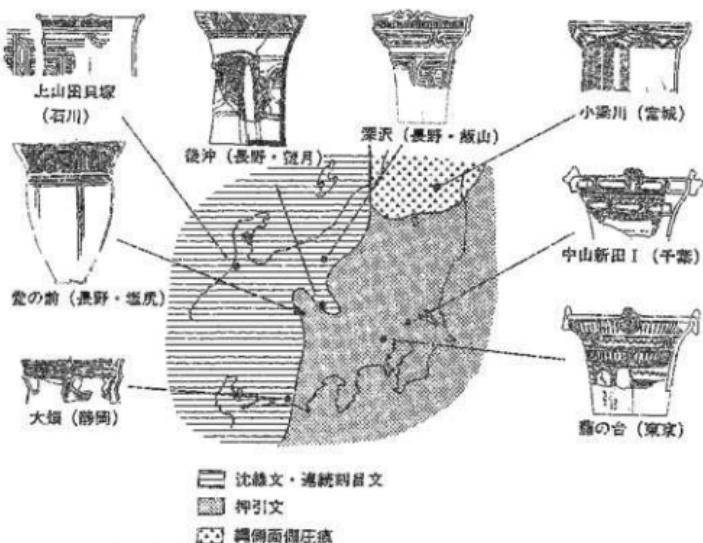
また、技法は、その形と合わせて考えなくてはならない。ここでも、目に見えぬ伝統と現実的な対応の二者が存在する。技法の場合は、形の模倣と違って、見たからといってすぐに真似できない性質を持っている。土器製作にあたって世代間で伝習され身についた技術は、なかなか放棄しにくいためである。角押文を模倣した装飾がそのことを物語っている。

② 押し引き化を拒絶する斜行沈線文土器

斜行沈線文土器の最も目立つ特徴は、区画文やその他の空間を充填する手法として斜行沈線文を使い、押し引き文を使わないことである。また、腹底にも沈線十連続刻み目文を配している。このことは、旧五領ヶ台式土器の分布圏にあっては特異な存在である。

ただ、旧五領ヶ台式土器分布圏の中だけでみるとではなく、少々視野を広げてみると、斜行沈線文土器の分布地域は、中期前葉から引き続いて沈線文を伝統的に使ってきた地域の東端にあたっている（第7図）。五領ヶ台式土器の時期においても、この地域は集合沈線文を多用する土器が比較的多かった地域でもあった。五領ヶ台式土器が押し引き化していく中で、その北西端地域で集合沈線文系の土器とのせめぎあいがあり、沈線文を選択したものと考えられる。

しかし、徹底した押し引き文の拒絶は、こうした伝統のみでは説明しづくされないものと考えられる。東信・中信地域に多量に流れ込み、影響力を強めていく勝坂式土器や阿玉台式土器を意識した上ででの沈線文選択と思われる。



第7図 基線に沿う装飾及び空間部充填装飾の地域性模式図

沈線文を伝統的に使う地域内にあっては、平出三A土器（第7図の前）が頸部以下の縦位集合沈線と区画内の波状沈線を主として、斜行沈線文や沈線+連続刻み目文の使用が認められず、斜行沈線文土器との差異を示している。また、北陸では、斜行沈線文土器にはみられない蓮華文が発達するようになる（第7図上山田貝塚）。北信地域から新潟県に分布する俗称“深沢式七器”（高橋1990）では、斜行沈線文は少なく、隆線に沿う平行沈線文が発達する。いずれも、斜行沈線文土器との発達の方向性の違いを見せていている。

③ 波状沈線文の存在（第8図）

押し引き文を拒絶する点では、斜行沈線文と同様であり、勝坂式土器のように波状沈線文を丁寧な角押文で表現することはしない。しかし、この装飾形の面白い点は、勝坂I式土器や新崎式土器に対しては独自性を示し得るが、阿玉台式土器とは共通する要素となる点である。

斜行沈線文土器の装飾には、構成方法でも認められたように、ある装飾要素に対しては、共通性



第8図 波状沈線文の地域性模式図

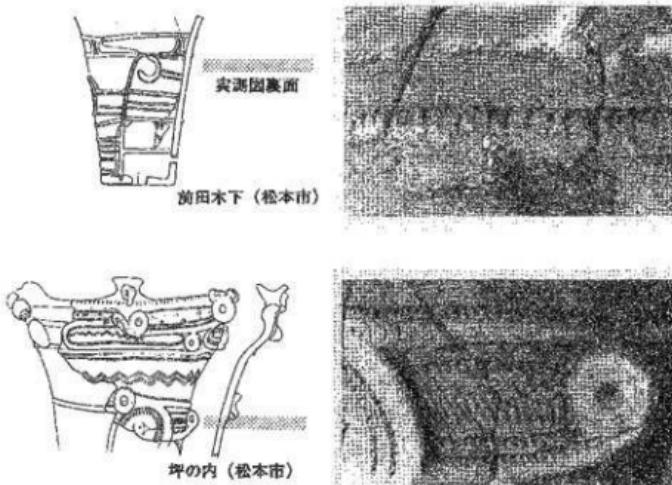
の広がりが北陸へいったり、別の装飾要素では関東へいったり、あるいは中部高地南部にいったりしている。特定地域との共通性は、他の地域との差異を示している。すなわち、斜行沈線文土器にあっては、一つ一つの装飾要素では隣接地域の全てから独自である例が少なく、各装飾要素の分布図を重ねてゆき、その集合の輪によって独自性を示し得るのである。

④ 押し引き文の模倣

沈線装飾による装飾形について2つの例を取り上げてきたが、ここでは沈線装飾における技法の面で勝板式土器や阿玉台式土器と袂を分かつ点について述べておきたい。

それは、実測図の書き方によっては角押文と見まちがえてしまう技法である。斜行沈線文土器では押し引き文を徹底的に拒絶してきた。しかし、勝板式土器との交流は盛んに行われており、押し引き文を模倣した装飾がしだいに現れてくる。それは、目立ちすぎる区画文内の充填手法ではなく、隆線に沿う装飾としてみられるようになる。

この模倣された角押文をみると、実際にはいったん沈線を引き、その内部を再度押圧、あるいは刻んでいることがわかる(第9図)。沈線の脇を刻んでいく技法は千曲川の流域で、五領ヶ台式段

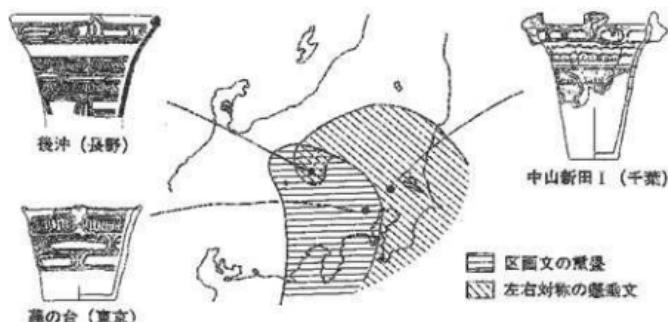


第9図 沈線内を再度刻む装飾

階から続くものである。見た目には勝板式土器の押し引き文に似せてはいるが、代々伝えられてきた装飾技法から離れることができないことがわかる。

⑤ 隆線による装飾の形(第10図)

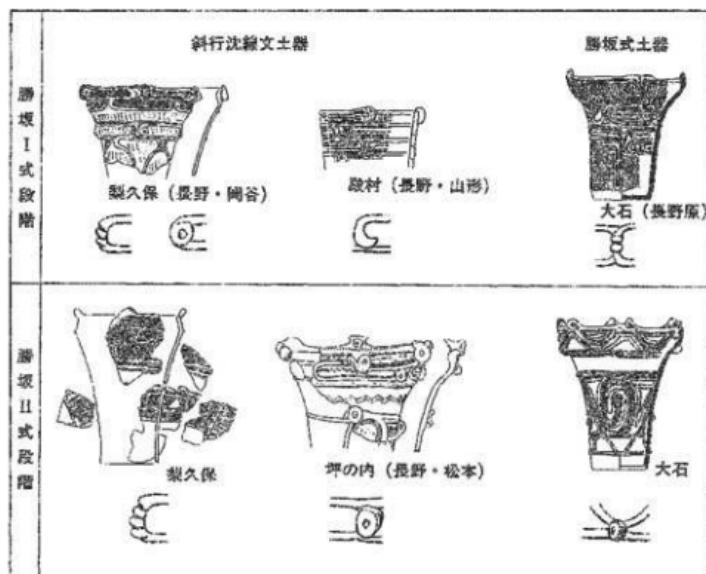
隆線装飾の多くは、区画文や懸垂文の組み合わせによって効果をあげており、前章で述べたとお



第10図 体部隆縞装飾の地域性模式図

りである。

個々の表記を見ると、区画文では、勝坂式土器に比べ、幅が狭く細長い形状が基本となっている。体部の重疊の仕方では、勝坂式土器では交互に重なっていく場合が多いのに対し、斜行沈縞文土器では、中央に逆「U」字状懸垂文を配置し、無文帯を間に置いて区画文帯が配されるものが存



第11図 区画文わき貼付文の変遷と勝坂式土器への採用

在する（第5図）。阿玉台式I類土器や仮称“深沢式土器”、新崎式土器には体部の横位区画文の発達が認められないのはいうまでもない。

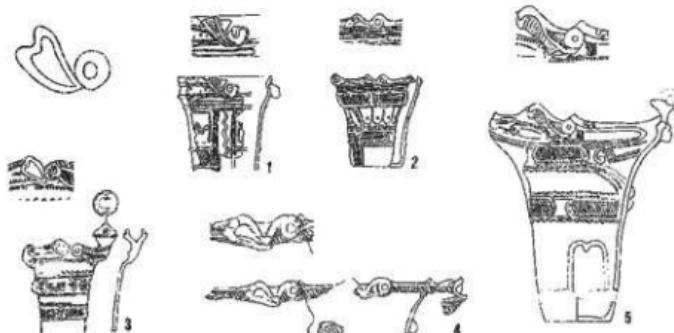
懸垂文では、左右対称となる懸垂文、逆「U」字状懸垂文のほか、逆「J」字状・「P」字状・「R」字状の懸垂文が認められる。初期にあっては、阿玉台式土器との共通性を感じられる。その後の変遷については次章で取り上げる。

⑥ 区画文縁に付く耳状の貼付文（第11図）

勝坂II式土器になると流行する装飾の一つである。しかし、勝坂I式段階では非常に稀であり、その主体は斜行沈線文土器の側にある。勝坂式土器の装飾に取り込まれてしまう例の代表的なものである。しかし、先取樋と独自性は斜行沈線文土器側にある。

⑦ 口縁部の突起、その他

このほか、勝坂式土器・阿玉台式土器には稀で斜行沈線文土器にみられる装飾として、口縁部の



1 弥生前（松本市） 2・5 牛の川（松本市） 3 内田雨堀（松本市） 4 北原（塩尻市）
第12図 口縁部で多用される突起

特殊な突起がある（第12図）。しかし、その突起が東信地域の斜行沈線文土器に存在しているか否か確認できていないため、犀川流域から北信・新潟県側の特徴となる可能性も残っている。この突起には、舌状になる隆線が必ず使われており、後に発達する技法の一つとなる。

⑧ その他の装飾

指頭圧痕文の多用が斜行沈線文土器の初期にみられる。これは、独自性を示すものではなく、阿玉台式土器やその直前型式の影響を受けているものである。このことは、中期前葉に体部を飾っていた範文を放棄したことにも関連しており、阿玉台式土器や勝坂式土器との同時並行変化を示している。

VI 斜行沈線文土器の時間

① 斜行沈線文土器の時間を見る

前章までの検討によって、斜行沈線文土器には、斜行沈線文の多用と言った明確にその独自性を主張する装飾があること。また、北信や北陸との共通性、勝坂式土器との共通性・阿玉台式土器との共通性を有しており、そのことが逆にそれぞれの調査型式との差異を示すことになり、独自性を保っていることを明らかにした。さらに、中期前葉から中葉への飛躍的変動に関しては、関東や分水嶺以南の中都高地に運動していることを示した。

ここでは、独自な装飾を持つ斜行沈線文土器が一時的に、単発的に、生まれ消え去っていった土器でないことを明らかにしていきたい。しかし、斜行沈線文土器を多量に出土し、住居址の切り合い調査も見られる後沖遺跡の資料が未発表のため、勝坂式土器との伴出関係から位置づけをおこない、それをもとに、斜行沈線文土器の生成・発展・衰退の過程を追っていきたい。

② 伴出関係から見た斜行沈線文土器の位置づけ

伴出関係を示す資料は、主に八ヶ岳周辺と松本平地域に存在する。しかし、いずれも住居址覆土においていくらかの時間縛を持つ勝坂式土器との伴出である。そのため、これらの資料から斜行沈線文土器の編年を確定することはできない。

大石遺跡第38号住居址では、斜行沈線文の生成に関わる土器が出土している（第13図）。非常に軽い胎土・白い色調から八ヶ岳西南部の土器でないことは明かである。斜行沈線文を有していないものの、平行沈線間に巡回刻みを配し、逆「丁」字状態垂文を持っている。

3個体ある炉体土器の新旧関係は判然としないが、覆土中位からは、勝坂I式の最も古い段階の土器が出土しており、覆土上層からは典型的な勝坂I式の上器がみられる。

炉体土器と覆土に斜行沈線文土器を持ち、他の大半の土器が勝坂I式土器である例としては梨久保遺跡113号住居址をあげることができる（第14図）。



第13図 大石遺跡38号住居址出土土器



第14図 梨久保遺跡113号住居址出土土器

この炉体土器が斜行沈線文土器である理由は、幅の狭い区画文盤に円形の貼付文が付いていること、懸垂文が斜行沈線文土器特有のセットである左右対称の懸垂文と逆「J」字状（あるいは「R」字状）の2者が見られることによる。覆土中の斜行沈線文土器との類似性が高く、同じ段階の土器と考えられる。その覆土中の斜行沈線文土器は、沈線がまだ細線で、体部の装飾が未発達な段階である。

判ノ木山西遺跡11号住居址（第15図）では、炉体土器と覆土に斜行沈線文土器を持ち、覆土中からは勝坂I式土器とII式の古い部分の土器が出土している。

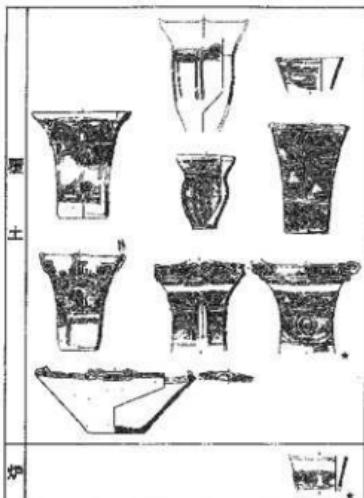
炉体土器は、すでに区画文の幅が広くなり勝坂式土器に同化してゆく雰囲気を持つ段階である。覆土中の土器は、体部の装飾が発達し、それを逆「U」字状文が統括している。斜行沈線文土器の最も発達した段階を示している。

勝坂II式土器と伴出した例には良好なもののが少ない。強いて北原遺跡1号住居址の例（第16図）をあげると、斜行沈線文がラフとなっていたり、区画文が崩れて曲隆線が主流になりかけていることがわかる。区画文と斜行沈線文を最大の特徴とした斜行沈線文土器が変形しかかる段階である。

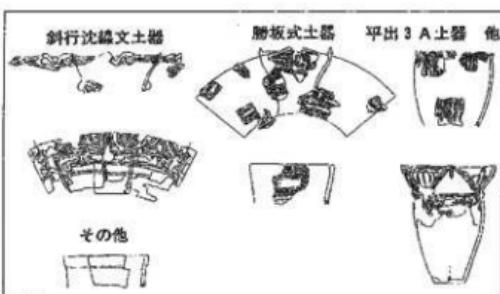
このように、勝坂式土器との伴出関係を見ていくと、斜行沈線文土器は、勝坂I式土器の最古階か直前段階あたりで生長をはじめ、勝坂I式に平行して発達し、勝坂II式段階で終末を迎えることが理解できる（第17図）。勝坂式土器との並行関係を見る限り、斜行沈線文土器が単発の土器ではなく、一定の時間幅の中で変遷を重ねていることは明かである。

③ 想定できる変遷

勝坂式土器との伴出関係から、1. 勝坂式直前からI式の古い部分、2. I式の中位、3. I式からII式の古い部分、4. II式、の4段階に区分することも可能であろう。しかし、これはあくまでも資料的な価値の低い住居址覆土での検討であり、しかも、斜行沈線文土器が間接的に含まれて



第15図 判ノ木山西遺跡11号住居址出土土器



第16図 北原遺跡第1号住居址出土土器

いた勝坂式土器主体の地域での検討であった。また、この客観的な物語の弱い4段階区分は、生成-発展-展開-衰退といった土器装飾変化の一一般的な見方（先入観）を反映したものに過ぎない点で弱みを持っている。そのため、今回は、明確な段階区分の境界を設定せず、生成から衰退までの流れの概略を説明していく。

地名	時期	五領ヶ台	勝坂I	勝坂II	勝坂山以降	時代区分
大石 9		■				1
平出 J24		■				2
大石 38		■■■				1
童の前 11		■■■				1
御旗 157		■■■	■			1
阪久須 113		■■■	■			2
牛の川 B 3		■■■	■			4
上の段 4		■■■	■			8
大石 21		■■■	■			1
羽ノ木山周 11		■■■	■			2
羽ノ木山周 1		■■■	■			1
南中島 2			■■■			2
北原 1			■■■			1
大石 19			■■■			2
雨露 A 6			■■■			1

第17図 住居内で斜行沈線文土器と併出する勝坂式土器の時期

④ 隆線装飾の変遷—区画文（第18図）

斜行沈線文土器の特徴の一つは、幅が狭く細長い横円形区画文である。

生成段階では、典型的な斜行沈線文土器の例がない（第18図1）が、区画文は口縁部文様帯を2段に分割した上段に生まれ、しだいに下方へ発達していくようである。五領ヶ台式段階では、隆線による区画文は稀であるが、東信地域には口縁部文様帯を2段に区分し、沈線による区画文を配す土器が存在する（第22図2）。

その後、区画文は体部に進出していき、その動きは勝坂式土器と連動している。ただ、頭部にいきなり無文帯を置く配置は並行する勝坂式土器と異なり、阿玉台式土器に近似している。資料の割約から、体部に区画文を配することが、斜行沈線文土器の生成段階まで遡るか否かは不明である。

発展段階には、主に体部の区画文が下方に展開し、重疊する。

展開段階から衰退段階に入ると、口縁部文様帯の2段構成の区画文が一段となったり（7）、区画文自体も幅広く主軸の短いものに変化（7、10、11）し、勝坂式土器との違いが不明瞭になっていく。さらに、区画文が崩壊していく土器も出てくる（10、12、13）。

体部文様帯では、重複していった区画文が飽和状態を迎える、区画文帯の間に無文帯（10、11）を持つようになり、それを逆「U」字状懸垂文が統括するようになる。また、衰退段階には、懸垂文が発達した曲隆線文を装飾の主体とし、その補助装飾として横円形区画文が付け足される例が現れる（12）。相対的に、区画文の重要性が低くなるようである。

⑤ 隆線装飾の変遷—懸垂文（第18図・19図）

直線的であった懸垂文が蛇行化していく過程は、勝坂式土器や阿玉台式土器と並行して起こる。

斜行沈線文土器の特徴となる懸垂文では、その生成段階から逆「J」字状、「P」字状懸垂文が生まれ、直線的な懸垂文の蛇行化がはじまる（2）。また、もう一つの特徴となる左右対称の2条1組の懸垂文は、生成段階には不明であるが、その後には見られる（3、4）。これら、特徴的な懸垂文の2者は変化をしながらも、斜行沈線文土器には不可欠の装飾となっていく。

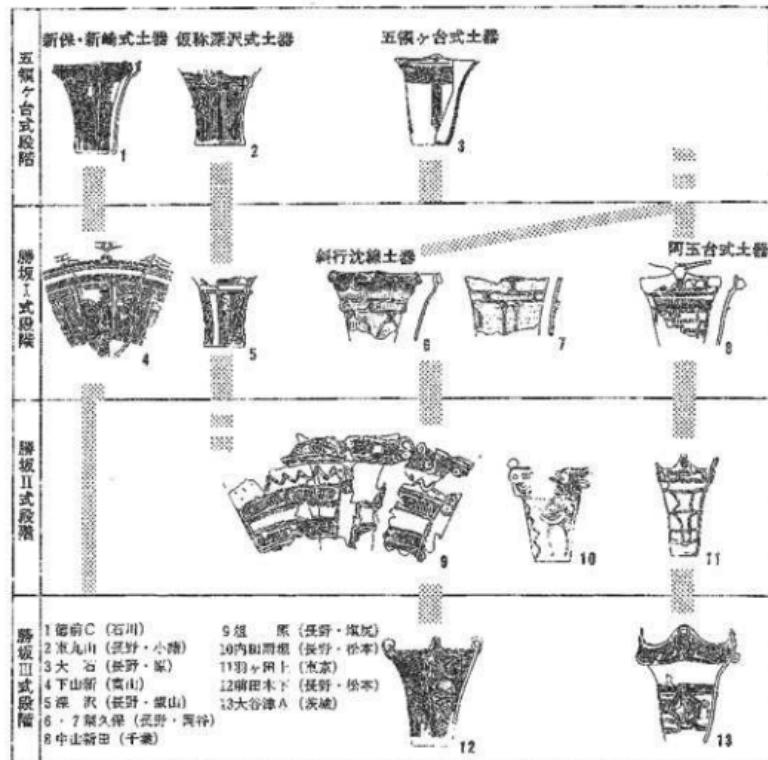


1 椿畑（茅野市） 2 大石（原村） 3・4・11 梶久保（西谷市） 5 利ノ木山西（茅野市）

6 山の神（塩尻市） 7・9・12 後沖（望月町） 8 北丘B（伊那市） 10 鎌原（塩尻市） 13 内田南堀（松本市）

第18図 隆線装飾の変遷

左右対称の懸垂文（第19図）は、その隆線貼付技法の類似から、阿玉台式土器との関係が認められる。正領ヶ台式段階の逆「U」字状懸垂文は、図案として土器製作者の記憶にあったとしても、斜行沈縞文土器展開段階に直接つながるものではない（3）。中期前葉から中葉への転換期の中で、一時に断絶する装飾は多く、この装飾も一端土器の表面からは消えたものと考えている。そして、斜行沈縞文土器の装飾が確立した段階で、新たに阿玉台式土器と類似する左右対称懸垂文と複合する形で復活したものと考えられる。しかし、発達を見せたのは明らかに斜行沈縞文土器の段階である。また、体部装飾を統括する懸垂文の使い方は、新崎式土器などにも見られ（1、2、4、5）、



第19図 各段階での体部 2 条 1組懸垂文の有無

これらとの関係も見出せない。

発展段階には、逆「J」字状などの懸垂文に隣線が加わり、「R」字状の懸垂文として発達する。さらに、展開段階から衰退段階には、円形貼付文が加わり（第18図9）、後の焼町土器の曲隣線文の祖形を思わせる装飾ができるてくる。

左右対称の懸垂文は、発達段階以降逆「U」字状懸垂文へと変化を遂げ、体部を貫き、体部装飾の統括的な存在へと発展する。この装飾は、「U」字の中央がくびれる形で焼町土器に継承されていく（第19図12）。

⑥ 沈縞装飾の変遷—斜行沈縞文（第20図）

五領ヶ台式段階、中部高地地域では斜行沈縞文が多く使われており、半裁竹管のハラ利用による平行沈縞、セ利用の單沈縞の両技法を駆使し、多くの表現効果を生み、配置も多種多様であった。

中期前業から中葉への時代変動の中で、装飾形や配置の多くは一時的に消滅し、斜行沈縁文土器の生成段階には格子目文などが多くなり、単純な斜行沈縁文に集約される。また、配置も口縁部文様帶の区画文内に限定されてしまう。

斜行沈縁文土器の生成段階には、半截竹管のセ利用の単沈線が主流となり、平行沈縁線は種になる。また、沈縁の太さは細く丁寧に施文されている。資料が少ないと断定はできないが、配置される場所は口縁部の隆線による区画文内に限定されるようである。

発展段階には、単純な斜行沈縁から、縦位施文や交互施文の例が現れてくる。

施文される位置も区画文内に限定されていたものが、

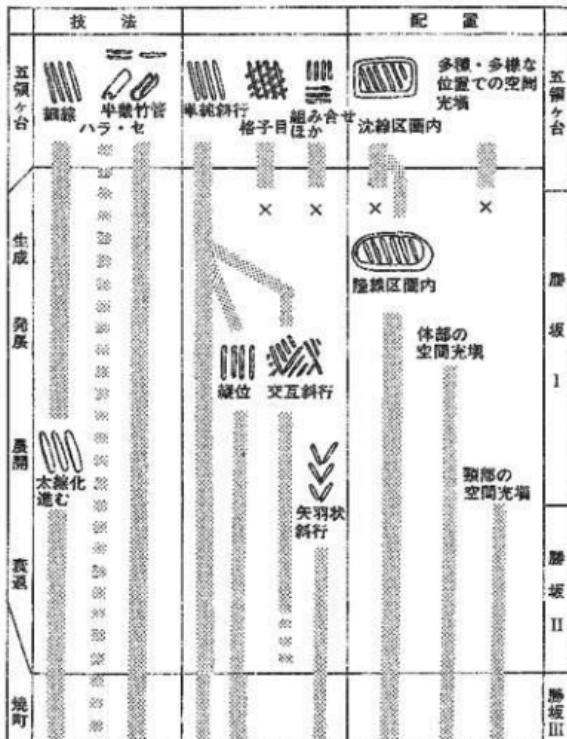
体部の空間充填に利用されたりするようになる。

展開段階には、丁寧な細線からラフな太線に変化していく。このころ、体部逆「U」字状文内で、隆線に沿って連続刻目文が沈縁に変化し、矢羽状斜行沈縁が生まれる。また、配置も頭部の空間充填など幅広く斜行沈縁が利用されるようになる。

衰退段階には、斜行沈縁文の利用が減少する傾向がみられる。焼町土器には限定された部分での使用となっていく。また、勝坂式土器へは縦位施文となった集合沈縁が採用され、発達していく。

⑦ 沈縁+連続刻目文の変遷（第21図）

五領ヶ台式段階の沈縁脇の連続刻突文には、第21図1、2の2者が存在する。1は漢東地域に多くの周辺に広がりを持ち、2は千曲川水系に多く、北陸方面にも見られる。斜行沈縁文土器には後者の連続刻目文が主に引き継がれていく。



第20図 斜行沈縁文の変遷

この装飾は、五領ヶ台式段階よりも斜行沈線文七器になってから発展し、分化していく。

連続刻目文は陸縫脇にいきなり配置されるほかは、沈縫とセットになることがほとんどである。

斜行沈線文七器の生成段階には、それまでにはなかった並行する沈縫間に連続刻みを施す例や沈縫内を再度刻む例が現れ（第18図2・9図）、その後も継続して使われる。

一般的には、沈縫に平行して連続刻みが施される場合が多い。発展段階には、この刻みはしだいにラフになってくる。また、沈縫に平行していたものが、沈縫に重なるようになってくる。

発展～展開段階には、一度引かれた沈縫の中に重ねて連続刻みを施す手法が流行しはじめる（第9図）。これは、一見すると勝坂式土器の押し引き文と見まちがえることがあり、その効果をねらった押し引き文模倣の装飾と考えられる。この装飾は、焼町土器にまで引き継がれていく。

⑤ その他装飾の変遷

沈縫菱形では、全段階を通じて波状沈線文が多く使われており、焼町土器へも継承される。勝坂式土器への採用は、斜行沈線文土器からのものと考えられる。

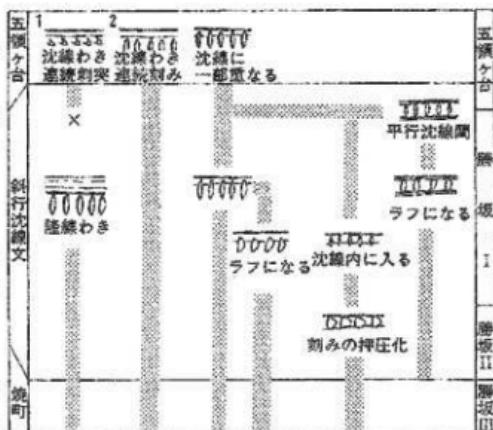
地文を見ると、五領ヶ台式段階にみられた縄文が姿を消し、その空白部は、阿玉台式「類かその直前型式から採用された指頭圧痕文で埋められる例が多い（第22図）。しかし、発展段階には、指頭圧痕文を施す土器は少なくなり、展開段階には、縄文の復活も認められる（第31図9）。

⑥ 中期前葉からの系譜と変革（第22図）

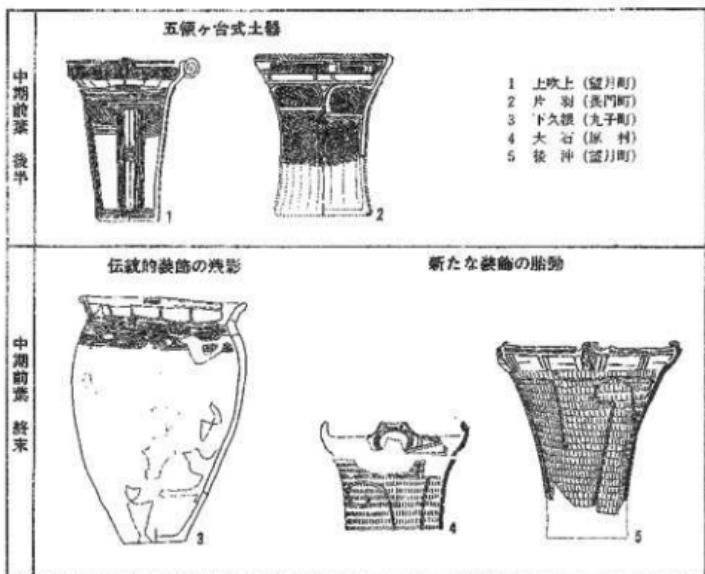
斜行沈線文土器の装飾構成の特徴は、口縁部文様帯を2段分割し、それぞれに区画文を配置すること。体部には逆「U」字状懸垂文を中心として区画文を展開したり、左右対称の懸垂文や「P」字状の懸垂文を配置することであった。

これらを前段階の五領ヶ台式段階に求めると、11段階文様帯を2段分割する手法は、千曲川水系に少數認められる（第22図2）。しかし、この地域に特に多いといった状況ではない。薄縁による区画文が安定して配置されるのも五領ヶ台式段階ではなく、体部懸垂文の施行とともに大きな変革を示している。

時代の転換期においては、それまでに価値を持っていた装飾要素のいくつかが脱落したり、特定



第21図 沈縫+連続刻目文の変遷



第22図 斜行沈線文土器へ継承される装飾

の装飾要素に集約される傾向がみられる。斜行沈線文土器への転換期では、地文における網文(2)が脱落し、斜行沈線文の多くの基節形(1)が単純な斜行沈線文に集約され、配置される場所も減少する。

細かな装飾要素の系譜の多くは、こうした変革を受けながらも、五領ヶ台式段階の千曲川水系の土器に遡ることができる。斜行沈線文を多用したり、沈線脇に連続刻みを施すこと(1)は、斜行沈線文土器の段階に入っても继续され、多用される。

このように、細部の装飾技法や形は、前段階の表現を引き継いでいるものの、それを構成する方法に大きな変化が起こっていることがわかる。また、構成の変化とともに、一時的に脱落する装飾要素が多い点も時代の変革を示している。

また、第22図で示した通り、在地の土器の装飾要素が衰退し、脱落していく中で(第22図左)、関東地域からの影響を受けたと思われる指頭圧紋文や蛇行懸垂文を持つ土器が生まれ(右4.5)、斜行沈線文につながっていく。このように、他地域の装飾要素が装飾にとって重要な位置に導入される点にも時代の変革を見ることができる。

⑩ 焼町土器への系譜と変革(第23・24図)

斜行沈線文土器の空間的な問題は、次章で詳しく述べるが、以前の検討(第4図)で斜行沈線文

土器の主体的分布域になるであろう八ヶ岳東北麓では、焼町土器が次期の主役となってくる。

斜行沈線文土器で多用されてきた斜行沈線や波状沈線は、使用頻度を下げながらも焼町土器に引き継がれていく。また、沈線内を再度押圧していく手法や、沈線脇の連続込み、「Y」字沈線を連続させてその空間に刺突文を配していく装飾、逆「U」字状懸垂文を刺突で埋めしていく手法など、沈線系の装飾のはとんどが焼町土器に継承される。

沈線装飾にみられる変革は、上記の装飾要素がしだいに減少して行くこと。そして、それまでにはほとんどなかった直線に沿って引かれる平行沈線の採用である。

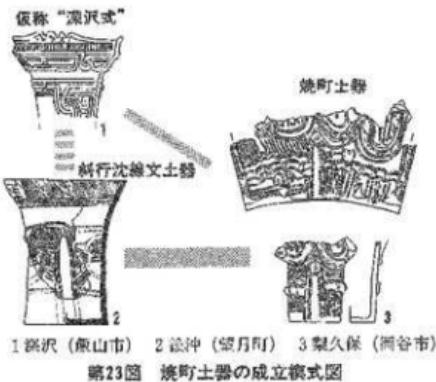
陰線花籠では、斜行沈線文土器の衰退段階から減少傾向にあった区画文が、焼町土器の段階には装飾の主体から脱落していく。それに代わって、体部の曲隆線が発達していく。焼町土器にみられる曲隆線には、必ずと言ってよいほど途中に連結部が設けられ、貼付文がつくようになっている。

体部での懸垂文の展開は、斜行沈線文土器の段階で、「P」字状・「R」字状の懸垂文が発達を見せ、区画文の脇についていた貼付文を加えて変形を重ねてきた(第23図2)。これに、千曲川下流域の土器の特徴であった連結部を有し、その脇に沈線を沿わせる豊毛文の手法が導入され(1)、焼町土器が成立したものと考えられる(3)。

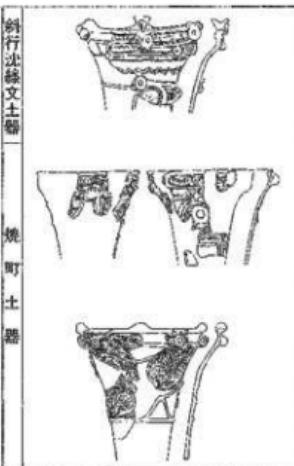
このように、細部の系統では斜行沈線文土器から焼町土器へ、多くの装飾要素が受け継がれていく。しかし、焼町土器の成立に欠かせない連結部に貼付文を有し、脇に沈線を複数沿わせる直線の発達は、斜行沈線文土器からだけでは成立しにくい。他地域の装飾を採用し、それが装飾の中心的な存在になる点。また、それによって斜行沈線文土器の特徴であった区画文が衰退する点。などに大きな変革を見ることができる。

① 隣接型式との関係

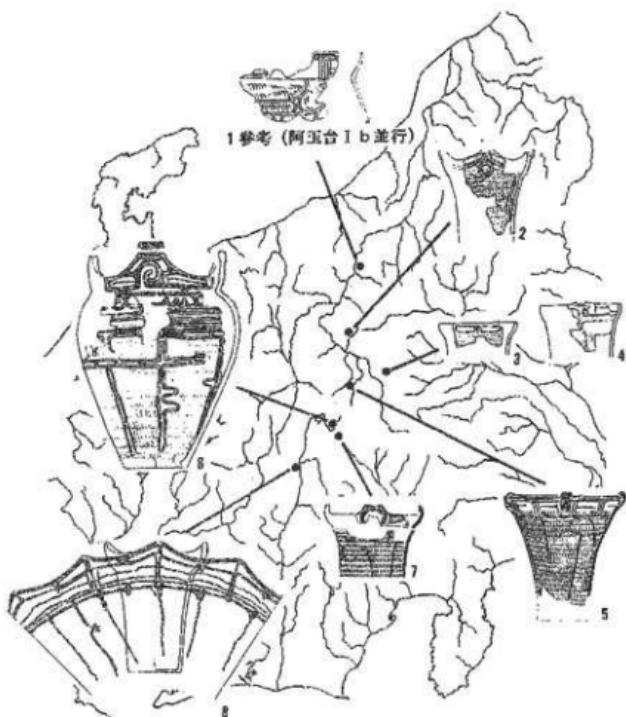
五領ヶ台式土器の分布図では、その末期に体部の直線的に口縁部に向かう装飾の基準線が動搖



第23図 焼町土器の成立模式図



第24図 坪の内遺跡における
焼町土器



1 烏ヶ沢（中野市） 2 真田中学校（出土地不明） 3・4 大星尻（佐久市）

5 後神（望月町） 6 棚畠（茅野市） 7 大石（須村） 8 月見松（伊那市）

第25図 中部高地の阿玉台 I類 a 及び直前段階に並行する土器

し、懸垂文などが蛇行をはじめる。この点では、斜行沈線文土器も阿玉台式土器や勝坂式土器と連動して五領ヶ台式土器からの脱皮をはかる。

斜行沈線文土器の生成段階では、阿玉台式土器との関係を示す要素が主導的な役割を果たす。まず、地文に指頭圧痕文を採用する（第22図4）。体部に左右対称となる2条1組の懸垂文を配置する。さらに、強いていえば口縁部文様を2分側するものが存在することなどである。細部の装飾要素としては、勝坂式土器にはみられない波状沈線文を施すことがあげられる。

千曲川流域では、阿玉台式I類土器や指頭圧痕だけを有し在地化した土器が多くみられる段階（第25図）があり、斜行沈線文土器との交流も活発であったことが予想される。

斜行沈線文土器の生成段階から発展段階の初期で、勝坂式土器との関係を示すものは、横位につながる横円形区画文の存在である。しかし、当初の区画文は、輪が狭い横長の形状を呈しており、

勝坂式土器との若干の差異を保っていた。

発展段階から展開段階では、阿玉台式土器に代わって勝坂式土器との関係を強めてゆく。体部区画文の発達、重複化が勝坂式土器と斜行沈線文土器で並行して行われる。

その後、斜行沈線文の区画文が幅広く、横方向にも短くなり勝坂式土器との区別が難しくなってくる。また、角押文を模倣して沈線内を再度押す手法などが流行する。

勝坂式土器との関係の強化は、勝坂式土器の側に斜行沈線文土器特有の装飾要素が採用されていることでもうかがえる。区画内の集合沈線文や区画文の脇につく貼付文、波状沈線文などである。しかし、余りに勝坂式土器との類似性を高めてしまったためか、斜行沈線文土器の衰退段階には、区画文が減少し、体部の懸垂文の発達した土器が主体を占めるようになる。

千曲川下流域の土器（仮称“深沢式”）との関係は、沈線文を多く使用する嗜好性（第7図）、沈線文を再度刻む手法（第31図）、などに共通性が認められる。しかし、装飾の構成方法の変化では、共通性は少ない。

この地域の土器との関係を深化させていくのは、勝坂式土器との類似性が強くなりすぎた斜行沈線文土器の衰退段階からである。この時期には、勝坂式土器に類似する区画文を減少させ、そのかわりに、千曲川下流域に発達していた連続部に貼付文を持ち沈線を複数沿わせる懸垂文の影響が強まってくる。この千曲川下流域とのつながりの強化は、その後の筑町土器の発展に大きく関わってくる。

VII 斜行沈線文土器の空間

① 量的な問題（第26図）

斜行沈線文土器を1点でも出土した遺跡をリストアップした分布図が第26図である。この簡単な図においても、斜行沈線文土器が中部高地の中でも分水嶺以北に多いことが理解できると思われる。

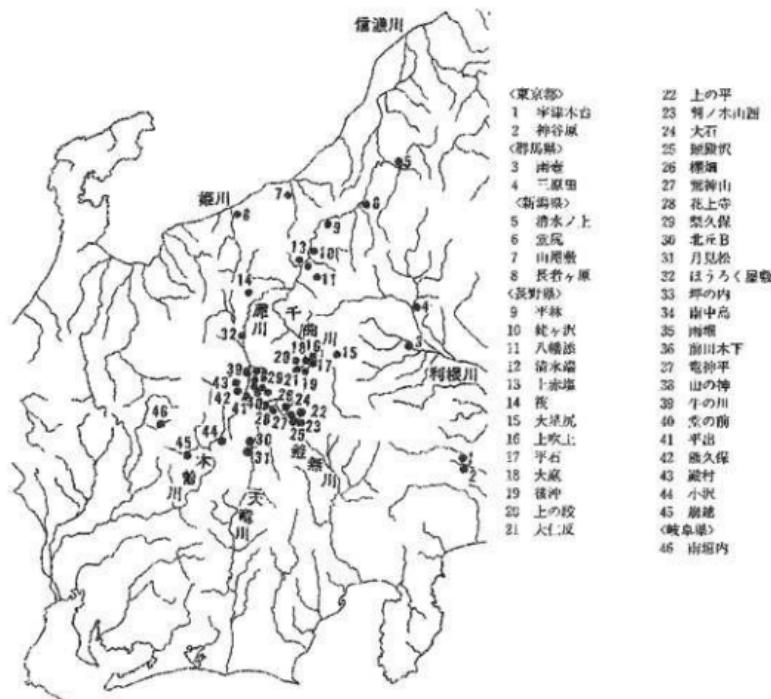
この分布図をもう少し読み込んでみよう。

南関東地域では、勝坂I式段階の遺跡が多く調査されているにも関わらず、ほとんど皆無の状態と言ってよく、まれに少量の搬入品が入ってきた程度の地域と考えられる。

山梨県側では、筆者自身の資料集成が進んでいないため検討しにくいが、諏訪湖盆地と、その南の低い分水嶺以南の出土量とを比較してみる必要があるだろう。

群馬県側では、勝坂I式土器を多量に出土する遺跡が意外に少なく、斜行沈線文土器の点数も少ない。

比較的多くの遺跡で斜行沈線文土器の出土が認められ、組成の一部を担うまでは行かないまでも、一定量の搬入品の供給が認められる地域は、千曲川・野尻湖・姫川の3ルートを持つ新潟県。西では木曾谷、南では伊那谷であろう。これらの地域では、個々の遺跡によっては製作者自身の移動も考慮にいれる必要がでてくるであろう。



第28図 斜行沈縫文土器の分布

分布の中心である長野県中央部では、調査数に隔たりがあるため、単純な出土量では比較しにくい。そこで、次にさらに細かく遺跡や住居址毎の組成比を見て行きたい。

② 組成比の問題

組成比と言っても、ここで例示するのはかなり大ざっぱなものである。というのは、現在公表されている資料がかなり限定されたものであり、いくらもっともらしい数字を並べたとしても、誤差の幅が会りに広すぎるためである。

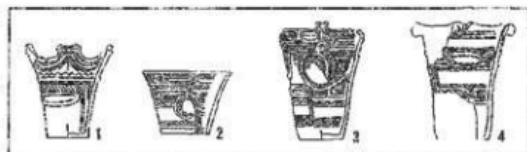
斜行沈縫文土器を取り上げはじめた当初、中部高地の分水嶺以北に主体があると想定した指摘の一つは、松本平牛の川遺跡の状況からであった。

しかし、その後の松本平地域の諸遺跡の状況を見ていくと、この住居の出方が特異な例であることがわかってきた。松本平南部では、勝坂式土器と平出三A土器が組成の大半を占め、斜行沈縫文土器は必ずしも伴つてよいほど伴出するものの、量的には少数派であることが判明した。また、松本

平から筑北地域へ向かう入り口にあたる明科町はうろく屋敷遺跡でも、斜行沈線文土器が主体とはなっていない。

さらに、北信地域に目を転じてみても、筆者が有力視していた小川村復遺跡や三水村上赤坂遺跡、中野市姥ヶ沢遺跡では勝板式土器と北信の在地の土器が大半を占め、それに斜行沈線文土器が加わると言った状況であった。たしかに、姥ヶ沢遺跡では斜行沈線文土器の比率は松本平南部より高くなっているが、組成の主体を占めるには至っていない。

次に諏訪湖盆地に目を転じてみよう。この地域では、和田鉢や大門鉢に近い梨久保遺跡や櫛加遺跡、あるいは利ノ木山西遺跡で、特定の住居址から斜行沈線文土器が多く出土する例が認められる。また、遺跡毎の斜行沈線文土器の出土量では、北信地域よりも少ないが、松本平南部と似た状況を呈している。ざっと見ると各住居に1~数個体は斜行沈線文土器が存在するのである。ところが、諏訪湖の西岸に



点数が少ないと、4以外は、それぞれ変形を受けている。

第27図 蒼神山遺跡出土の斜行沈線文系土器



第28図 長門町、上の段遺跡4号住居址出土土器

渡ると出土量が激減する（第27図）。このことは、斜行沈縞文土器の主体が諏訪湖の西よりも東に近い地域、すなわち鉢を越えた東信地域の可能性を示唆していると言えよう。

そこで、東信地域の状況を見てみたい。

この地域も資料数に恵まれていない地域である。そのため、こうした回りくどい検討を加えているのであるが……。未発表の後沖遺跡では組成のはとんどが斜行沈縞文土器で成り立っている。しかし、ここでは公表された資料から八ヶ岳東北麓に斜行沈縞文土器の主体があることを示さなくてはならない。

数少ない資料から、長門町上の段遺跡4号住居址を取り上げよう（第28図）。

この住居に廃棄・遺棄された土器を見ていくと、斜行沈縞文土器4、勝坂式土器3、阿玉台式土器1、その他、の割合になっている。これだけでは、先の牛の川遺跡のように、この住居だけが斜行沈縞文土器の多い特異な例の可能性も残されている。

しかし、景の比較的多い勝坂式土器は小型品が多く、それに対して斜行沈縞文土器には中～大型品の各種がそろっている。特に、遠距離の持ち運びに不便な大型品が斜行沈縞文土器である点は、この土器群の中では、斜行沈縞文土器が在地の土器である可能性が高い。

覆土がほとんど残っていないなかった望月町上吹上遺跡6号住居址の場合、2個体の炉体土器が勝坂式土器と阿玉台式土器であるが、覆土中の破片資料を見ると、五領ヶ台式段階の混入品を除けば、ほとんどが斜行沈縞文土器で占められていることがわかる。

以上、組成比でみていくと諏訪湖の東側と西側の比較から、東側に近いところに主体があることがわかった。そのさらに東側である東信地域の数少ない資料の検討から、若干ながら組成比に占める斜行沈縞文土器が多いこと、中～大型品が斜行沈縞文土器であること、などからこの地域に主体がある可能性を示した。

③ 技術繼承の顕著な地域

組成比から斜行沈縞文土器の主体が東信地域にあることを示した。しかし、分析資料が少ないと認め、異なる方法で斜行沈縞文土器の主体地域を探って行きたい。

それは、どの地域で前代からの技術繼承が顕著であるのか、また、次の世代に引き継がれて行くのかを見る方法である。客観的に斜行沈縞文土器が入っている地域にあっては、たとえ製作者が少數いたとしても、短期間の後に在地の伝統的な装飾技法に淘汰されてしまうからである。また、主導的な地域では、たとえ見た目には他地域の土器の影響を受けたとしても、技術の繼承は親から子へ、孫の世代へと伝えられ、変化しにくいからである。

五領ヶ台式段階の中部高地は五領ヶ台式土器の縁辺部に近く、沈縞文を多用する土器が比較的多く存在していた。沈縞文系の装飾を多く使う地域では、伊那谷を中心に平出三A土器へと変化を遂げた。しかし、諏訪湖盆から八ヶ岳西南麓の地域では、沈縞文を捨て押し引き文を選択した。これに対し、斜行する沈縞文を引き継いだのが東信地域である。この斜行沈縞文は、五領ヶ台式段階から鹿町土器段階まで、東信地域で生き続けるのである。

また、沈線に重ねるように連続刻みをほどこす手法も五領ヶ台式段階から焼町土器段階まで継続して使用される技法である。

次に、諫訪湖盆地域の状況を見てみよう。

この地域では、梨久保遺跡や櫻塚遺跡の勝坂I式の中位の段階では、純粹な形に近い斜行沈線文土器が存在している。

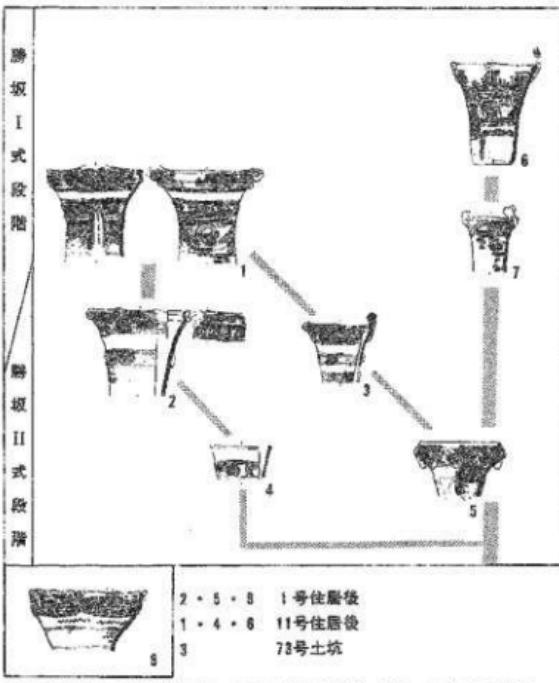
しかし、勝坂I式の新しい段階あたりから斜行沈線文土器の勝坂化がはじまっている。その状況を判ノ木山西遺跡の例をあげて見ていきたい。

第29図1は、最も斜行沈線文土器の特徴を持った土器である。しかし、この土器でも体部にいわゆる象の鼻状モチーフや三叉文といった勝坂式土器の装飾要素が入り込んでいる。

3は、体部の分帯方法と斜行沈線文を使用している点では、斜行沈線文土器であるが、口縁部文様帶には勝坂式土器特有の半橢円形+三角形区画文（兼三角文）が見られる。4では、区画文が勝坂風の幅の広い横方向に短い形になり、斜行沈線が縦位沈線に変化していることがうかがえる。さらに、5に見られるように、勝坂式土器の中に斜行沈線が残る程度になってしまう。

また、8は口縁部文様帶を2段に分帯している点だけを斜行沈線文土器から取り入れたものと考えられる。

このように、判ノ木山西遺跡では、斜行沈線文土器の発展段階で入ってきた1の土器以降、土器を製作するたびに、斜行沈線文土器の装飾は変形し、在地の勝坂式土器の中に埋没して行ってしまうのである。この例を見てもわかるように、諫訪湖盆地域では斜行沈線文土器の装飾要素の一部が残ったとしても、変形され、そして、斜行沈線文土器特有の技術そのものは繼



第29図 判ノ木山西遺跡における斜行沈線文土器の勝坂式土器化の過程

承されないのである。

松本平南部では、多少斜行沈線文土器が生き残るようであるが、勝坂式土器に淘汰されていく点では同様である。

以上、技術繼承が顕著にみられるのは東信地域であり、この地が、斜行沈線文土器の主体地域であることを間接的に示している。

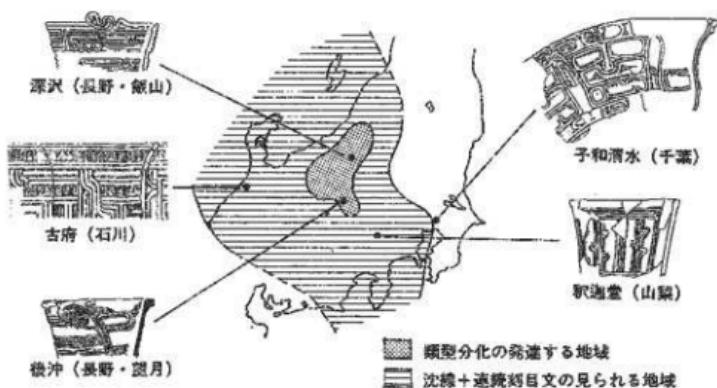
④ 装飾における分化が顕著にみられる地域

ある土器装飾文化が成立し発達をとげる過程で、その型式に特徴的な装飾はさらに分化してゆき、多種多様なバラエティーを持ち、多用されるようになる。勝坂式土器に例をとると、成立期において勝坂式土器の特徴として確立された陰線による区画文や角押文は、多用されるだけでなく、しだいにバラエティーに富んでくる。区画文は、配置される位置が広がり、形状も楕円形、長方形、半楕円形+三角形、およびそれらの組み合わせが生まれてくる。角押文の発達は、施工具の太さの異なるものの採用や、施工具先端の加工の違いにより装飾効果の分化が進んだ。

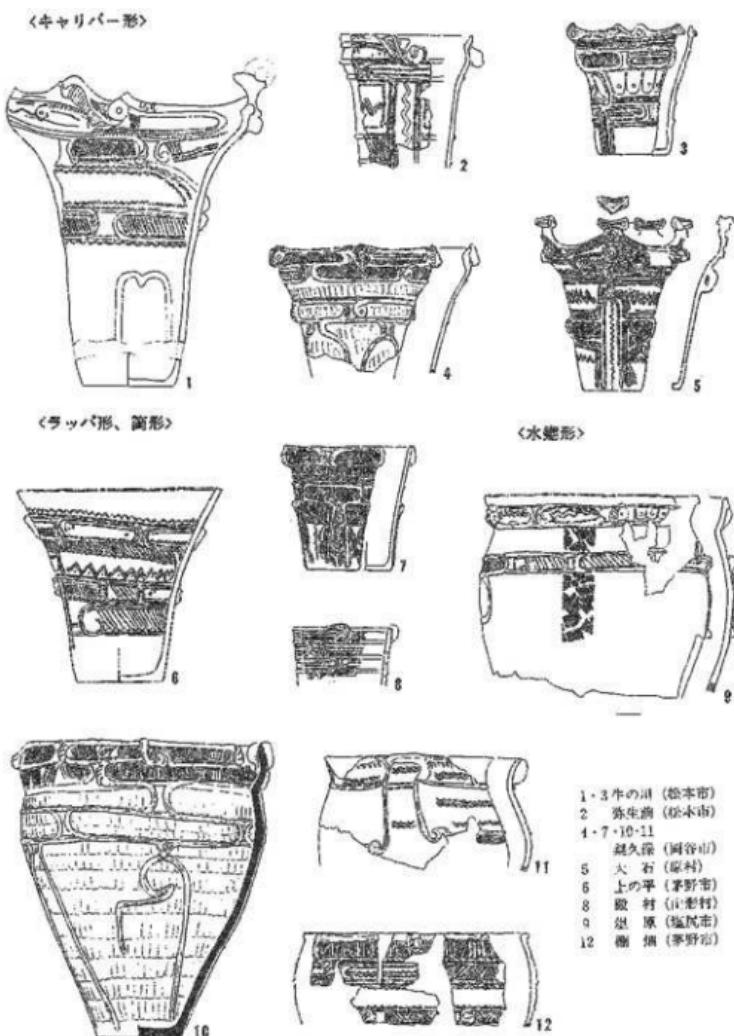
これらは、阿玉台式土器や斜行沈線文土器の影響によるものではなく、独自に装飾分化（文化）が発達して行ったもので、隣接型式との接触地域よりも、八ヶ岳西南麓などの勝坂式土器の主体地域で顕著に、そして先行して進んで行った。

このように、各型式が発達していく段階では、最も特徴的な装飾が自ら分化して、その型式内の流行の先端を摸索して行ったものと考えられる。この点を斜行沈線文土器においても検証してみたい。

最も特徴的な斜行沈線文については、施される位置が広がる程度にとどまっている。これに対して、沈線とそれに伴う連続刻目文の分化は、東北信の千曲川流域で顕著となる（第30図）。当初沈線脇を刻んでいたものが、隆線脇や平行沈線間、沈線内を刻むようになっていく。また、沈線内を



第30図 沈線+連続刻目文の分布模式図



第31図 斜行沈線文土器における器種・器形・容量の分化

押圧して角押文を模倣したものまで現れてくる。これらの多くは、勝坂式土器や阿玉台式土器にみられないものであり、千曲川流域の独自の装飾文化を示している。

以上、独自な装飾要素の分化の程度から斜行沈線文土器の主体は東信地域である可能性が高い。

⑤ 組成中における斜行沈線文土器の器種等の分化が顕著な地域

次に組成に関連して検討を進めていく。

器種や器形の分化、あるいは容量の分化は生活の上で欠かせない属性である。公表資料の少ない後沖遺跡の数個体を見てもわかるように（第1図）、ここには、斜行沈線文土器のみで深鉢形土器の大小や、口縁部文様の数種を認めることができる。さらに、水甕形の大型品も斜行沈線文土器で充実できている。このことは、生活に必要な深鉢形土器を中心とする土器組成を斜行沈線文土器だけで形成することが可能なことを示している。組成における他型式の補完關係では、斜行沈線文土器にない浅鉢形土器を勝坂式土器で補完している程度である。前述した上の段遺跡4号住居址の場合も同様である。

後沖遺跡を中心とした東信地域では、実際には勝坂式土器や阿玉台式土器を一定量組成の中に組み込んでいるが、器種・器形・容量の分化からいえば、斜行沈線文土器のみで組成を全うすることが可能なのである（第31図）。この点は、深鉢形土器とのある一器形が単独で組成に加わっている松本平や諏訪湖盆地とは大きく異なる点である。

以上、器種・器形・容量分化の程度からいっても斜行沈線文土器の主体が東信地域にある点が理解できると思われる。

VIII 「後沖式土器」設定は可能か？

多くの紙数を費やして斜行沈線文土器の独自性を検証してきた。装飾構成では、隣接型式との類似性を持ちながらも、その間隙を織り込んで独自性を示すという綱渡りを演じていた。すなわち、阿玉台式土器に対しては、勝坂式土器と類似する区画文を重疊する点で差異を示し。勝坂式土器に対しては、阿玉台式土器に類似する左右対称となる懸垂文（逆「U」字状文へ発展）や口縁部文様帯を2段構成する点で差異を示しているのである。

装飾要素においても、こうした綱渡りは続く、仮称“深沢式土器”と共に通する沈線内を割む手法は、対阿玉台・勝坂式土器用に。阿玉台式土器と共に通する波状沈線文は、対勝坂・仮称“深沢式土器”用に。勝坂式土器と共に通する横帶区画文は、対阿玉台・仮称“深沢式土器”用に。と言う形でそれぞれに差異を示し、その集合の輪が重なる部分に独自性を見いだしている。これに、斜行沈線文土器の唯一と言える独自性を示す斜行沈線文を加えている。

時間軸では勝坂I式（一部直前まで遡る）からII式に並行する間に生成・発展・衰退を通過する。五領ヶ谷式土器との差異は、陰線菱筋の発達により装飾構成にギャップを生じさせる。多くの装飾要素が一時的に脱落し、單純な斜行沈線文に集約させる、などにより大きな装飾の転換を行ってい

る。また、焼町土器との関係では、斜行沈縫文土器からだけでは焼町土器が成立せず、仮称“深沢式土器”などの手を借りる点で、大きな装飾の転換をはかっている。それは、斜行沈縫文土器の特徴である区画文変遷後に、沈縫を沿わせた曲際線の発達に示されている。

空間的な広がりにおいては、資料が少ないために検証が困難であったが、単純な量的な比較のほかに、一住居址内における組成比の差、斜行沈縫文土器に表現された装飾技法が前後の時期につながる地域の確認、独自文化の特徴である装飾の分化・発展、器種・器形・容量の分化が認められる地域の確認により、千曲川流域の東信地域に主体があることを検証した。

以上のことから、斜行沈縫文土器が隣接する他型式から独立し得る可能性を示した。そこで、勝坂式土器や猪窓～藤内式土器として発表してきた斜行沈縫文土器を、それらと異なることを匂わせた後沖遺跡の概報に致意を表し、また、斜行沈縫文土器が切り合った数件の住居址内で大半を占める後沖遺跡の状況と合わせて、「斜行沈縫文（文）を多用する土器群」に後沖式土器の名前を与えたいと考えている。しかし、後沖遺跡の資料の大半が未発表であり、また東信地域全体の資料も少ないため、今後の訂正も考慮にいれ、今回は、「後沖式土器の提唱は可能か？」にとどめ、先学諸氏のご批判・ご教示を仰ぎたい。

IX おわりに

これまで斜行沈縫文土器（後沖式土器）は、周辺地域の土器との類似性を持つがゆえに独立型式とは認められにくかった。一部にみられた装飾要素の違いは、例えば勝坂式土器の中の些細な地域性を示す要素としか考えられなかつたのである。しかし、類似する土器装飾文化間における差異は、絶対で最大限に発揮され、各々の独自性を強調する場合もある。押し引き文の拒絶は装飾要素の一部にしか過ぎないと軽視するわけにはいかない。もちろん、勝坂式土器や阿玉台式土器との決定的な型式差は、装飾構成方法にあるが……。斜行沈縫文の多用は、押し引き文（結節沈縫文・有飾沈縫文）を多用する土器群への独自性の象徴と言えよう。

また、勝坂式土器・阿玉台式土器・新崎式土器といった中湖中葉で広大な分布域を持つ有力型式に挟まれた地域の土器が、その独自性を維持するための苦惱？を斜行沈縫文土器（後沖式土器）に見ることができる。

斜行沈縫文土器（後沖式土器）は、装飾要素の何%かに勝坂式土器との共通性が見られために、勝坂式土器の範囲に入れられることが多かつた。しかし、もう少し総合的に周辺地域の土器に目を配ってみると、勝坂式土器との共通性のみを強調する必要は全く無くなってくる。斜行沈縫文土器（後沖式土器）が多方面の有力型式の各種装飾要素を少しずつ採用しているからである。特定地域との共通性は他地域との差異になる。という原則に従い、各種装飾要素の分布の論を重ねていくと、その重ねられた部分によって斜行沈縫文土器（後沖式土器）の独自性が浮き上がってくるのである。一方、どの地域とも異なる装飾要素は非常に限られているのである。

また、斜行沈縫文土器（後沖式土器）の中心地と推定される東信地域では、土器組成の半数近く

を勝坂式土器や阿玉台式土器に占められている。こうした状況下、弱小集団の独自性維持の方法と苦惱（もっと積極的に、あるいはおおらかにとらえるべきかも知れないが……）が、土器装飾要素の採用の仕方に現れている、と言えよう。この後、影響力を強める勝坂式土器に対抗する形で、区画文の使用は激減し、はめ込み式の勝坂式土器の装飾に対し、流動性を強調する焼町土器が成立する。

五領ヶ台式土器の装飾構成方法にみられる広い地域間での共通性は、その裏に、解明不能となってしまった共通の神話の構成方法が存在していた可能性がある。しかし、中期前葉から中葉にかけて、主に関東甲信で起きた経済の発展や文化の高揚は、それまでに流布してきた共通の思想（神話の構成方法）への懷疑を生じさせたようである。そして、共通の思想の崩壊は、よって立つ基盤こそ共通（口縁部と頸部以下の分帶方法、区画文を含め、変形しながらも懸垂文が全体を統括する等々）なもの、各々の地域の実状に合わせるように変形され、独自性を強めていったのである。

中期前葉から中葉にかけての各種道具類の変化や堅穴住居の構造・集落の変化を見れば、決して経済が歴史したための地域性強調とは考えられない。経済や流通が発展していく中での、集団の独自性の強調はどういった意味を持つのか。差異の強調・顕在化によって生じる対立感情の緩和はどのように計られていたのか。解明すべき問題はつきない。

本稿を草するにあたって、下総考古学研究会の例会、長野調査事務所の私的な勉強会である「おせっか」で概略を発表し、ご教示やご意見をいただいた。また、資料実見のため、各博物館や教育委員会担当者の方々に便宜を計っていただいた。ここに記して感謝する次第である。（1992. 10. 20）

脱稿後、縄文中期の土器に関する文獻や型式論に関する文献が増加し、興味はつきない。しかし、今回は、それらには触れず、10年余り前に提出した修士論文での考え方と対象に限定し、一連の拙稿（1984～1991）に区切りをつけることとする。

註1　ここでは、五領ヶ台式土器とその並行段階を中期前葉、勝坂式土器とその並行段階を中期中葉として説明を加える。

参考文献

- 櫻井 真 1988 「鬼沢上器様式」「縄文土器大観」第2巻
- 下総考古学研究会 1985 「勝坂式土器の研究」「下総考古学」8号
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系上器」「新潟県考古学試験会会報」第4号
「縄IV章 1 土器」「関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡」
- 谷井 邦 1991 「勝坂式土器の変形にかかる二三の要素」「埼玉考古学叢書」
- 堀本 順也 1988 「坊山遺跡出土の阿玉台1a式土器（前編）」「栃木県考古学年鑑」第19集
- 1990 「北関東・南東北における中期前半の土器埋相—縄文地に有筋沈線を施す土器群について—」「古代」第89号

- 寺内 隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下越考古学』7号
 1986 「绳文時代中期中葉土器の分類と検討—呉系統上器との関係を中心として—」『賀久保遺跡』
 1987 「勝坂式土器成立期にみられる共通の要素在化—勝坂型式との関係 両玉台式土器その1—」『下
 越考古学』9号
 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター
 紀要』1
 1991 「長野県上水内郡三水村・上水内郡出土の绳文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・
 62合併号
 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線—燒町土器の成立をどうとらえるか—」『長野県考古
 学会誌』67号
- 中山 真治 1992 「五領ヶ台式土器—その段階設定と系統について—」『東京考古』10
 西村 正彦 1984 「石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として」
 野村 一寿 1984 「佐原市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその発明の位置づけ」『中部高地の考古学』III
 1988 「焼町系統の土器」『绳文土器大観』第3巻
 野村一寿ほか 1988 「中期中葉土器」『長野県史 考古資料編』企1巻(4)
 1990 「4 上福集中区出土の土器」『松本市坪の内遺跡』
 桑島 邦男 1983 「第5章 縄括(結語)」「後沖縄跡」
 松村 司志 1974 「绳文時代中期初頭土器研究史」『史苑』3号
 齋 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の調査 他9篇」
 山口 逸弘 1991 「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成—群馬県の縄文時代中期中葉の二名—」『七曜考古』
 第16号

実測図等使用文献

- 明科町教育委員会 1991 「はうろく屋敷遺跡」
 燐山北高校地盤部 1966 「深沢遺跡」
 石川県立埋蔵文化財センター 1983 「高見島篠原C遺跡調査報告」IV
 茨城県教育委員会 1965 「大谷津A遺跡」「水海道都市計画事業・小堀土地区調整事業地内埋蔵文化財調査報告書」
 3
 宇ノ気町教育委員会 1979 「上山田貝塚」
 大井町教育委員会 1980 「兔戸遺跡第3地点」『京都府跡群発掘調査報告書』1
 玉村町教育委員会 1982 「南越」
 舞谷市教育委員会 1987 「花上寺遺跡」
 小川村教育委員会 1991 「茨瀬跡」
 小布施町史刊行会 1975 「清水端遺跡」「小布施町史」
 稲佐系博物館 1992 「小坂町・南垣内」「飛騨のあけぼの」展示図録
 群馬県企画局 1990 「三渓出遺跡」第2巻
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984 「龍野井遺跡第3地区 南流遺跡」
 真庭町教育委員会 1990 「四日市遺跡」
 塩尻市教育委員会 1988 「第4節 北原遺跡」「一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調
 查報告書」
 1985 「焚の前・猪沢・青木沢」

- 1987 「史跡 平出遺跡」
上越市教育委員会 1978 「2山屋敷丘遺跡」「若木地区彦勝郡発掘調査概報 昭和52年度」
高山村教育委員会 1984 「八幡浜遺跡」
立科町教育委員会 1990 「大庭遺跡」
茅野市 1986 「35 北山長塚遺跡」「75 上ノ平遺跡」「茅野市史」上巻
茅野市教育委員会 1990 「棚畠」
千葉県文化財センター 1986 「中山新田」「常磐自動車道理藏文化財調査報告書」IV
津南町教育委員会 1976 「10、堂尻遺跡」「芦場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書第二地区内
(第二次)」
富山県教育委員会 1973 「下山新道跡」
1977 「船波市羅照寺遺跡」
長門町教育委員会 1976 「片羽遺跡」
1987 「大仁反塗跡」
長門町誌刊行会 1989 「上の段遺跡」「新編長門町誌」
長野県 1982 「深沢遺跡」「長野県史 考古資料編」全1巻(二)
長野県教育委員会 1976 「大石遺跡」「長野県中央道理藏文化財包藏地発掘調査報告書 一茅野市・原村その1、
富士見町その2」
1970 「小沢遺跡」「中央本線原野・木曾福島間複線化事業地内埋蔵文化財緊急調査報告書一昭
和44年度」
1975 「笠神山遺跡」「長野県中央道理藏文化財包藏地発掘調査報告書 一飯能市その3-1」
1974 「月見松遺跡」「長野県中央道理藏文化財包藏地発掘調査報告書 一伊那市内その2-1」
1981 「頭殿沢遺跡」「長野県中央道理藏文化財包藏地発掘調査報告書 一茅野市その4、富士見
町その3-1」
1981 「弓ノ木山西遺跡」「長野県中央道理藏文化財包藏地発掘調査報告書 一茅野市・原村その
3-3」
長野県埋蔵文化財センター 1992 「大草尻遺跡」「上信越自動車道理藏文化財発掘調査報告書2」
1988 「竜神平遺跡」「山の神」「中央自動車道長野福島文化財発掘調査報告書 2」
1992 「東丸山遺跡」「長野県埋蔵文化財センター年報」8
中野市教育委員会 1983 「蛇ヶ穴」
新潟県 1983 「長者ヶ原遺跡」「新潟県史 資料編」
新潟県教育委員会 1990 「滑水上遺跡」
野沢温泉村 1974 「平林」「野沢温泉村」
八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1989 「宇津木台遺跡群13」
八王子市市田遺跡調査会 1982 「神谷原」II
羽村町羽ヶ丘上・山根坂上遺跡調査会 1981 「羽ヶ丘上遺跡」
袋井市教育委員会 1982 「大畑遺跡」
藤の台遺跡調査会 1980 「藤の台遺跡」III
富士見町教育委員会 1978 「曾利」
松本市教育委員会 1981 「松本市牛の川遺跡」
1981 「松本市内田雨城遺跡」
1990 「松本市坪ノ内遺跡」

- 1991 「松本市南中島遺跡」
1998 「松本市前田木下遺跡」
1983 「周辺遺跡 前田木下遺跡」「松本市舟小赤遺跡」
1991 「松本市弥生前遺跡」
丸子町教育委員会 1990 「下久根遺跡、二反田遺跡」
宮城県教育委員会 1987 「小栗川遺跡」
荒井町教育委員会 1990 「上吹上」
1969 「平石遺跡」
山形村教育委員会 1987 「戸村遺跡」
山梨県教育委員会 1987 「羽柴家川」

大木8b式の変容（上）

—東北、越後、そして信濃へ—

水沢教子

- | | |
|---------------------|-------------|
| I はじめに | IV 越後の様相 |
| II 大木8b式土器の研究史と一括資料 | V 信濃の様相 |
| III 大木8b式の類型提示 | VI 大木8b式の変容 |

I はじめに

深山の奥には、われわれの生活からは遙かに遠い、獣たちの通りづけた「かもしかみち」があり、尖底「土器を運ぶ人々」の道はこれを繼承し、またそれを追うための道でもあったという（藤森1967）。旧石器時代以来の広範囲に及ぶ移動生活を脱し、他者を同化する如き侵略戦争を知らなかつた、たった25万人そこそく（小山1984）の縄文中期の人々の作った工芸品が、現在に生きる者の主觀とはいえ東日本全域でかなりの類似性をもつ背景にも、その道を通て人々の頻繁な交流があつたことが想定される。そしてその頻繁な交流が結果としてどのようなカテゴリーに適合するかは、当該期社会の集団構造、更には家族制度を考察するための糸口になると思われる。

さて東北地方の縄文中期は型式内の類型がきわめて多く齊一性の乏しい大木7式、地紋毎に收れんする大木8a式が続いたあと、土器間の規格性が高く、かつ土器型式内の地域間変異の少ない大木8b式の時期となる。その類似土器は、以前は全く特徴を異にする土器群の分布圏であった東北北部や、関東地方に広がり、それぞれの地域独自の構成の一部を形成したり「大木系土器」と呼ばれるようになる。

一方、縄文王国を跨った中部高地では、曾利1式を「中期縄文文化最後の巣」として次第に装饰性を失っていくが、その中にもキャリバー器形に横巻文を持った土器や「大木系」といわれる土器が認められる。信州と東北、この空間的隔たりを越えた類似性は大木8b式期の人の動き、物の動き、そしてそれを規定した社会の動きという交流のカテゴリーで説明され得るものなのであろうか。それとも単なる他人の空想的な広域的類似性の一端にすぎないのだろうか。交流仮説を立て、仮説検証の為の分析をする前に、当然東北地方の大木式と信州の大木系そして両者の地理的な間隔を埋める土器群の検討を行い、時間的な先後関係をも含んだ型式学的な比較を行う必要があろう。

今回はまず前提としての大木8b式、間隔を埋めるに当たって最短距離である越後土器群、そして信州の大木8b式類似土器を、それぞれ順を追って一括資料をもとに比較検討することによってこの問題への第一歩を踏みだしたい。

II 大木8b式土器の研究史と一括資料

山内清男は1937年、「縄文土器型式の種別と大別、付表」によって渡島から九州までの土器型式および土器型式存否の可能性の提示をおこなった。東北地方におけるこれらの土器型式認定の基準として、宮城県七ヶ浜町の大木貝塚、青森県八戸市中居貝塚等いくつかの遺跡の発掘が山内自身により行われている。複数の地点毎に層位と型式の関係から土器型式の認定を行い配列していく過程は「關東北に於ける縄文土器」（山内1929）に示されているが、ここでは大木式、円筒土器上層式など大別型式の名称が登場するのみで、細別型式は、型式あるいは一型式としてその存在が暗示されているに止まる。ただ、「この型式の直後に所謂厚手式（加曾利Eに並行）が来る。」「B地点の発掘によって、D地点第一層、第二層のものは、所謂厚手式土器（「加曾利E」に並行）の下層に出土することが判った。」など関東の加曾利E式に並行な土器型式だけは既に広域縄年代という視点に立って認識されていたことが解る。この土器型式こそが大木8式であり、「縄文土器型式の大別と細別」の段階に至っては8a、8bの2段階に区分される。言い換えれば大木8式はその認定段階からすでに加曾利E式とかなりの類似度を持つことが認識されていたということであろう。

さて、山内清男の設定した中期大木式土器型式は現在岩手県史に掲載されている資料（小岩1961）によりその断片をかいまみることができるにすぎないため、加藤孝によって提示された大松沢貝塚出土土器（完形土器25個体）が、「全く層序による分類を認めることができるので一括の類型であろう。」という見解が示されていることから、後進の研究における標準資料としての役割を担うこととなった（加藤1956）。その後、伊東（伊東1957）、林（林1965）、馬目（馬目1975）らによって大木8b式における技法、文様、類型の組成等の記述が行われている。

1970年代に入り、高度経済成長による国土開発、交通網の整備の波に乗って多くの発掘調査が行われるようになるか、その中で弓羽茂は福島県安達郡上原遺跡第Ⅱ群、第Ⅳ群土器の検討から大木8aから9式の変遷を層位的に明らかにし、その技法の変化を検討した（丹羽1971）。これに加え宮城県では青島貝塚（加藤、後藤1975）や長者原貝塚（阿部、遊佐1978）などの発掘が行われ、大木8a式から大木8b式への移行期の様相が明らかになった。福島県では最近になって法正尻遺跡の豊富な完形土器による縄年が組まれ異なる土器を組成に含むこの地域の大木8a式から大木8b式への変遷が示されている（松本ほか1991）。ここでは大木8a式が三段階に区分されているが、長者原貝塚段階に当たるその最終段階には、口縁部は溝窪をしていない藤帯や沈線による文様、体部は沈線や半截竹管によって大木8b式より規格性の弱い曲渦渦巻文をもつ一群となる（第1図）。

その後、宮城県北部の上栗沢遺跡（宮城県教育委員会1978）、勝負沢遺跡（弓羽ほか1982）と宮城県南部の中ノ内B遺跡（伊藤、須田1987）（第8図上段）、小栗川遺跡（真山、伊藤1987）の調査によって、従来の大木8b式とそれに後続的大木9式に先行する土器群の分離が行われた。このような土器群は岩手県では大地波遺跡（相原1981他）（第7図）をはじめ柿ノ木平遺跡（高橋1982）、トロノ木遺跡（高橋1989）、上村貝塚（小田野1991）、宮城県ではその他上野遺跡（第8図（1）

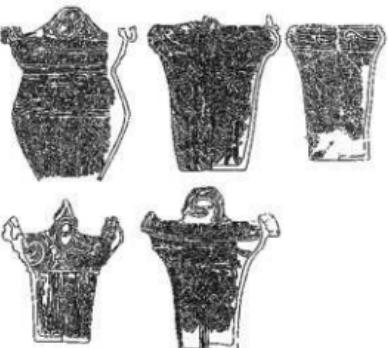
大木8b式の変容（上）

(2) (結城1989)、福島県では法正尻遺跡、天光遺跡（財団法人福島県文化センター1989）、桑名町遺跡（石本、大平他1990）（第9図）等で出土し、その分布は從来の大木8b式をトレースしている。

さて、かつて大木8b式が設定された仙台湾沿岸地域において同土器型式は勝負沢遺跡で多く出土しているが、細分の難しい遺物包含層資料であるため、組成の把握という点で現在最も良好な資料は宅地開発が進む岩手県北部に集中している。中でも大館町遺跡、大新町遺跡、柿ノ木平遺跡では大量の大木8b式土器が出土しており、この時期の様相が他地域にさきがけて最も明白となっている。それを可能にしたのは密集する住居間の豊富な切り合い関係と丁寧な住居内埋土の分層発掘である。特にこれらの報文を見てかけている八木光則はかつて中部高地の土器の編年を行う中で「遺構に確實に伴う遺物の把握に積極性を欠いた発掘、出土した土器の任意な取捨」を絶文中期土器編年が進まない原因として指摘したことがあったが、彼らの東北地方北部におけるこのような精緻な分層発掘は層位に基づく土器型式の把握を確実に押し進めるものとして高く評価できよう。

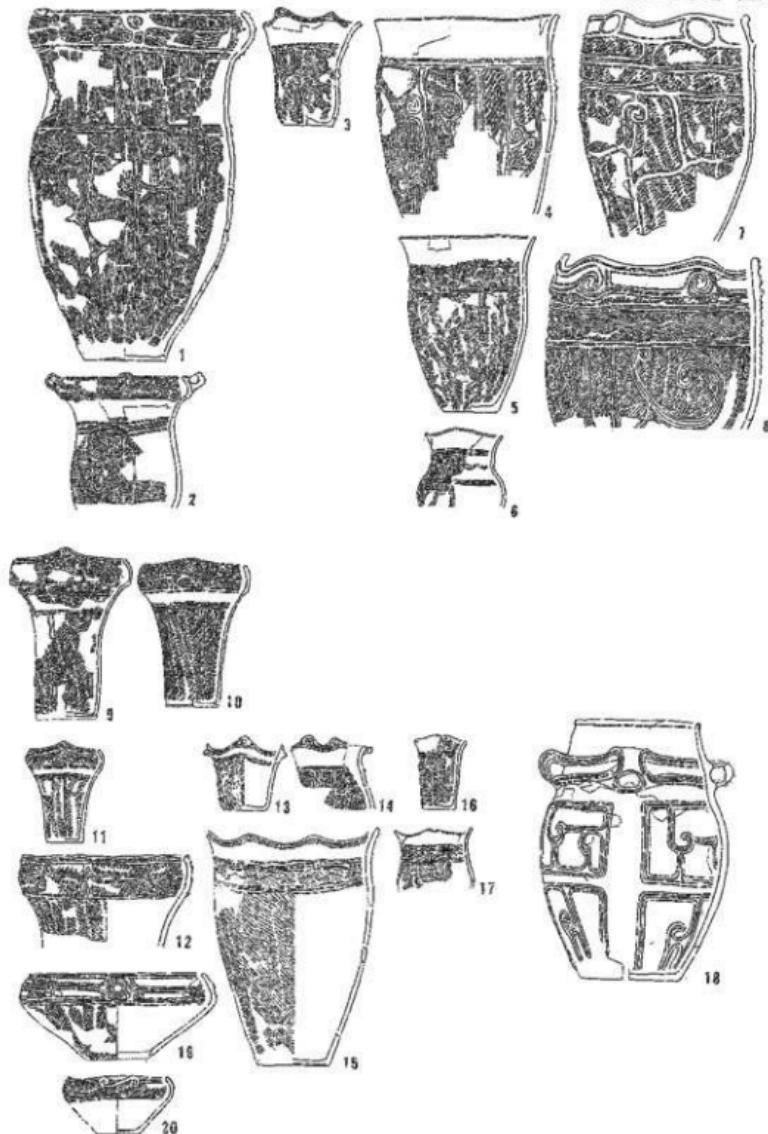
これらに基づいて大館町遺跡（八木、千田1981、1982）のRA102号住下層土器群（第2図9～20）及びRA301号住床面及びE層土器群を8b-1期、上層土器群（第2図1～8）（第3図）を8b-2期とし、また柿ノ木平遺跡遺物包含層と大地渡遺跡出土土器（第7図）等を型式学的にこれらに後続する土器群として8b-3期とする編年案が提示されている（高橋ほか1982）。

大木8b-1式と大木8b-2式は大木8b-3式とされるものよりは変異の幅が狭く共有する類型（第2図9、10、第3図3、10、11）も多いため、組成上完全に変化がおこるというよりは後者は前者に新しい要素が若干加わった程度の差を持つと認識されよう。時間的にはかなり近接していることの現れかもしれない。顕著な差異としては①大木8b-1式は体部が直線的に上がるものが多く、大木8b-2式になって体部が膨らむものが出て来ること、②体部文様は大木8b-1式は沈線による縦壓文が多くシンプルであるのに対して大木8b-2式では連続する渦巻文様（第3図1）、規格性の高い渦巻文様（同図6、14、15、16）が現れること、③体部文様は大木8b-1式は沈線文様が多いが大木8b-2式では隆沈線文の割合が高くなること（同図4、13、14、15、17、19、第2図1、3、4、7、8）があげられる。しかしながら頸部無文帯の確立の度合いに大差はない。一方宮城県では大松沢貝冢の土器群（第4図）がこの両段階のものを含んでいるようであり、他の遺跡でも層位による細分は行われていない。今回は大木8b-1式と大木8b-2式は時間差を持つことを念頭にいれたうえで、従来の大木8b式として一括して扱うことにして、広域的



第1図 法正尻遺跡SK472出土土器
(土器集成図より)

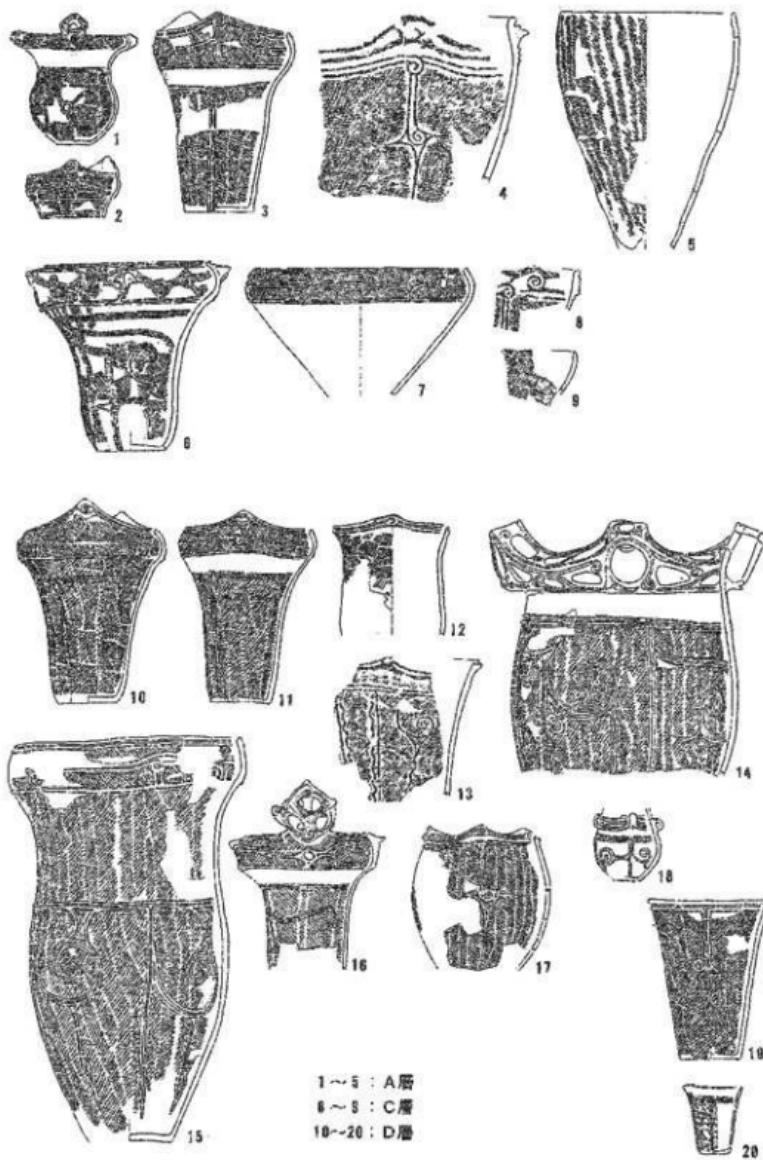
大木85式の変容（上）



第2図 大館町遺跡RA102件出土土器 S=1/10 (1のみS=1/15)

1~8 : B層 9 : C層 10~20 : D層

大木Bb式の変容（上）



第3図 大館町遺跡RA301住出土土器 (S = 1 / 12)

大木8b式の変容（上）

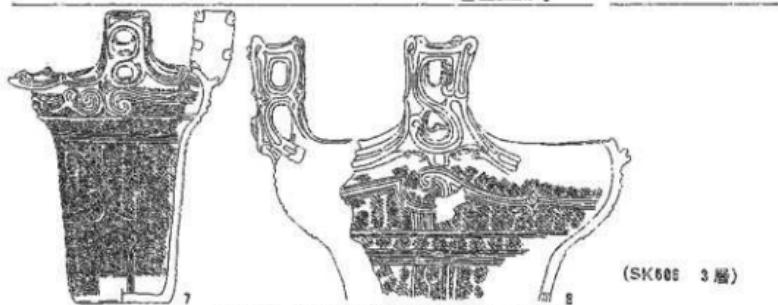


第4図 大松沢貝塚出土土器 (S=1/8) (5は再実測)



(SK429出土土器) 1～3：堆積土
4・5：底面

(SK313 1層)

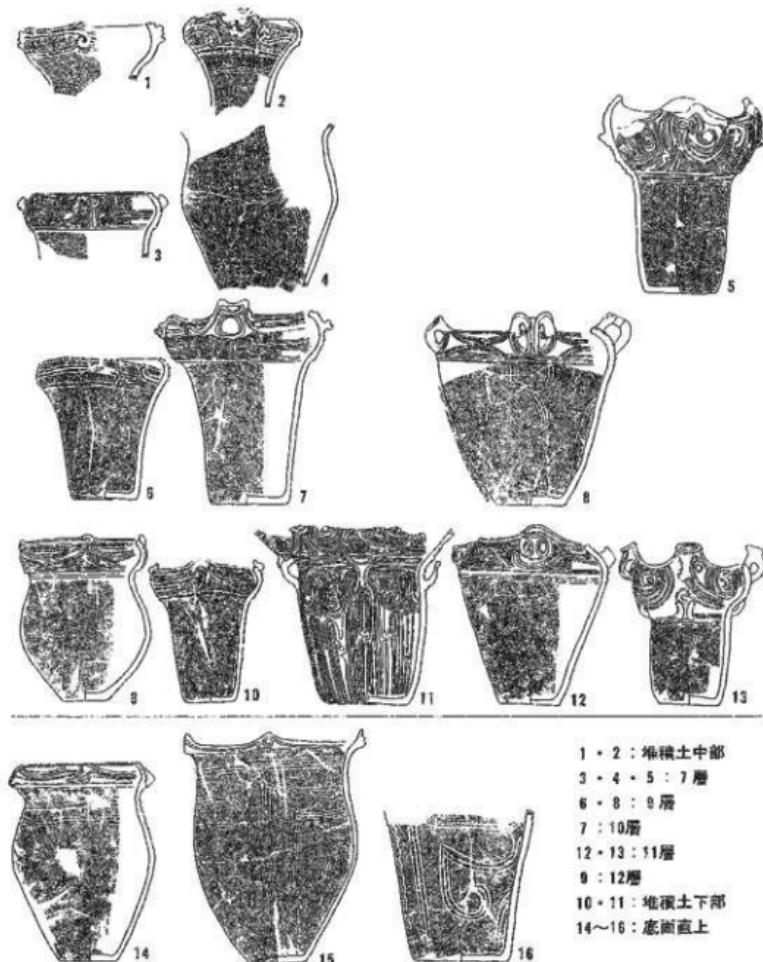


第5図 法正尻遺跡出土土器 (S=1/8)

大木8b式の腹容（上）

な出土例を待ち、綱分を考えたい。

さて大木8b-3式を大地波遺跡の床面一括資料により観察すると、4単位の突起を持ち、口縁部の溝巻が拡大したキャリバー形土器（第7図1）、隆沈線、沈線を問わず体部文様の強い連結

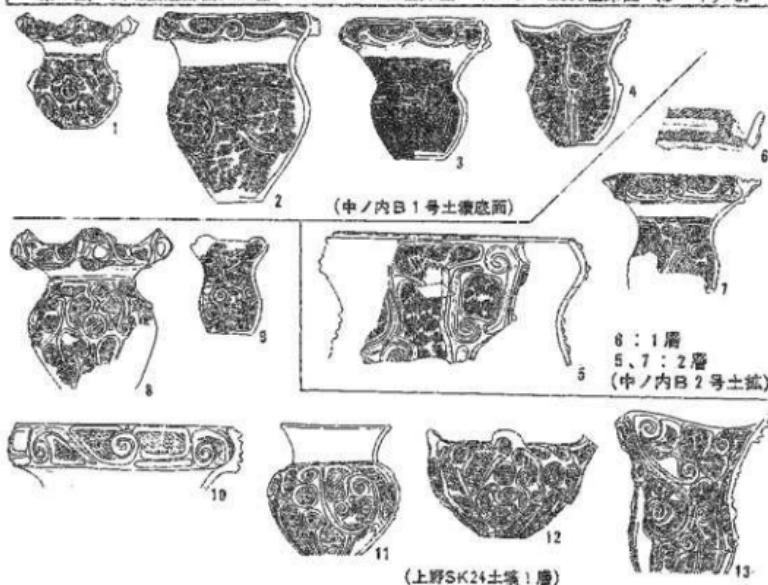


第6図 法正虎遺跡SK332出土土器

大木8b式の変容(上)

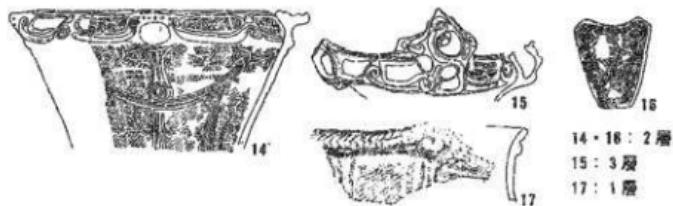


第7図 大地窯遺跡出土土器 1~3:Df08住床面 4~8:Ee69住床面 (S=1/8)

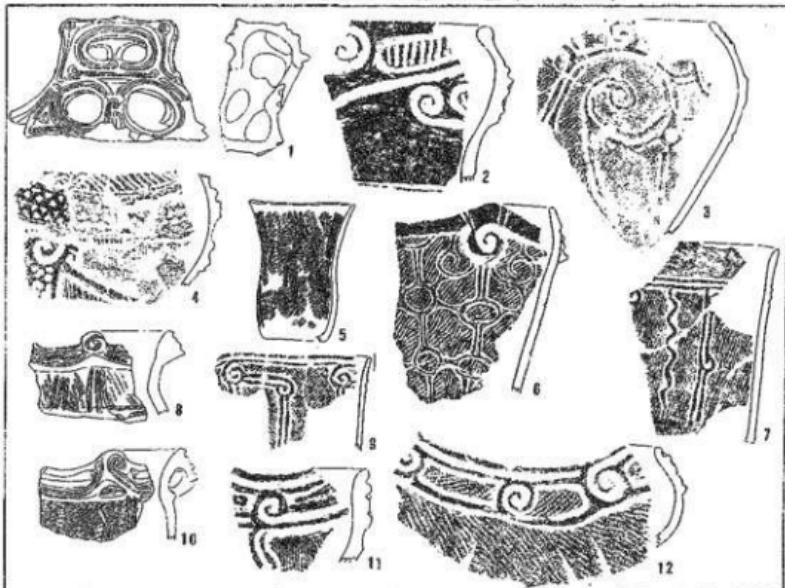


第8図(1) 中ノ内日遺跡・上野遺跡出土土器 (S=1/8)

大木8b式の変容（上）



第8図(2) 上野遺跡SK16土壌出土土器 (S=1/8)



(15号住出土土器) 1: ピット 2・3・6: 床面 その他: 埋積土
第9図 桑名郡遺跡出土土器 (S=1/8)

(同図2、3)、口縁部から底部まで隆沈線渦巻文様の展開する類型の登場（同図4～8）など前段階からの変化が大きい。特に第7図1の4単位の把手をもった類型は中ノ内B遺跡（第8図1）、上野遺跡（同図8）、桑名郡遺跡（第9図1）等の一括資料中に存在する齊一性の高い土器であり、逆にこれらの時期の同時性を示す指標となろう。

研究史によって概観された従来の大木8b式、その後続型式、そして大木9a式という3段階の変遷をもう一度岩手県史に出された山内清男の口縁部資料と比較すると「大木8B」の表示を持つ一部には明らかに大松沢貝塚に代表されるものに加えて、その後続型式が示されている。更に「大木9式」というキャプションの付けられている一群の下段にもこの後続型式と思われるものが5破片示されている。ところが『日本先史土器の輪紋』（山内1979）ではこれら後続型式は大木9式か

らは駆かれている。この土器群に関して丹羽茂は、これらが大木9式には伴わないことと縦横文様を基本とし文様の展開が横方向であることなどが大木8b式と共通することから、大木8b式の新規とする編年案を打ち出している（丹羽1989）。この後続型式を含めた2つの段階は細分の余地があるものの大木8b式の分布圏全体で共通しているため問題は後続型式の名称である。このような研究史をふまえた結合土器型式が連続する土器の時間的な変化を区分するものである以上、分析者の類似性のとらえかたに左右されよう。ただ、上深沢遺跡、梨木田貝塚出土土器を指標とする一群が既に大木9a式（林1965、丹羽1971、須藤1985）、あるいは大木9式前半期（相原1988）とされ、その経成や広域の分布が示されており、それには確実に先行するこれら後続型式に更に大木9式の名前を与えることはいたずらに型式名の混乱を助長させることになろう。また、これらは組成上は大木9a式に近くなるものの、文様要素、文様配置は大木9a式の「区画帯」よりも大木8b式の「曲流渦巻文」により強く規制されている（第11図）。このような点を重視して今回は後続型式を大木8b式新とする丹羽の区分に従い、東北、越後、信濃を通じて從来の大木8b式に並行する時期を便宜的にI段階、大木8b式新の時期をII段階として範を進めていきたい。

大木8b式は研究の中心であった岩手県、宮城県、福島県から秋田県南部、山形県、新潟県に分布し、その中に若干の地域性を含んでいるものの東北の広い範囲で認められることが解っている。そしてそれらに類似した土器は北は北海道石狩低地帯、南は北陸、関西まで及んでいる。特に円筒上層式との接触と樅木株式の成立、越後の從来大木系といわれる土器群、さらに信濃の土器群の位置づけは、型式分布の外縁における接觸変容の関係のみならず、土器型式の定義上の問題を含んでいる。これに関連して福島県立博物館の企画展「縄文絵巻」（森ほか1991）はかなり広域に縄文中期中葉の土器型式を対象にしており意義深い。このような広域比較に先立って一括資料に基づいて設定したI、II段階の大木8b式の類型の提示を次に行う。

III 大木8b式の類型提示

大木8b式の深鉢の器形には、（第10図）所謂キャリバー形のもの（A1、A2類形）、口縁部が外反（外傾）するもの（B1、B2、C1、C2器形）、体部の膨らむ桜形のものがあり用途の別が推定されるが、それぞれ第一文様帯、第二文様帯、第三文様帯⁽¹⁾による文様構成、器形の細部のちがいからABCDEの5つの類型に分類される。さらにそれらの類型の一部は大木8b式新、およびいわゆる大木9a式へ系統的変遷を遂げていく（第11図）。以下にそれぞれの類型を掲げる。

I 深鉢形土器（第11図参照）

A類型 キャリバー形で口縁部文様帯（以下第一文様帯）、頸部文様帯（第二文様帯）、体部文様帯（第三文様帯）を持つ。系統的には大木8a式から大木9a式までスムーズに変遷が追える。

I段階 蕊形では口縁部の内傾の度合、体部の膨らみ方に変異がある。体部はストレートに立ち上がるものと（A1）、膨らむもの（A2）の2形態が存在する。第一文様帯には①唇帯による長尾溝巻が横方向に開放的にめぐるもの（第2図9、10、11、第3図2、3、10、11、15、第4図

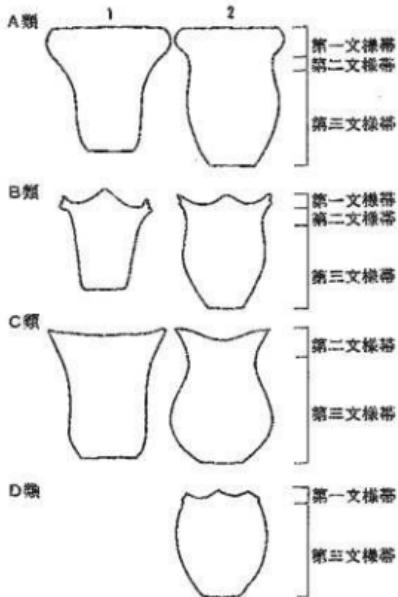
大木8b式の変容（上）

3、第5図1、2、3、4、第6図2、3、6、7、10) ②それらが相互に連結するか（第2図1、2、第3図6）溝巻の尾の部分が上端と下端と付くもの（第3図1、第4図1、第6図1）、断面三角形の突起（第3図6、16、第4図1）や透かしの入った突起（第2図2、第3図1、16、第4図3、第5図1、第6図7）が口縁部に付着するものがある。第二文様帯は一般に①第三文様帯を埋める繩文がそのまま上昇するもの、②無文帯と三本一対の沈線からなるものがある。第三文様帯は隆帯施文のもの（第2図1、第3図15）があるが、沈線のほうが圧倒的に多い。文様構成は、①縱方向の繩文のみのもの（第4図2、第6図6、7）、縱方向に二本ないし三本沈線を垂下させるもの（第2図9、10、第3図3、10、11、第5図4、第6図10）②第20図1～5に示したように一本の長尾渦巻を袋状に開んだ三本一対の沈線あるいは二本一対の隆沈線を基本単位にして、それが

横方向に曲流展開をし、更にそこから縱方向に基本単位が垂下するような定形的な展開をみせる極めて規格性をもった文様構成（以下規格渦巻文）をとるもの（第2図1、2、11、第3図6、15、16、第4図3、第5図5、第6図2）、③長尾渦巻が連結するもの（第3図1）がある。丹羽の型式学的分析（丹羽他1982）や大館町跡の層位的出土状況（大木8b-1式、大木8b-2式）によると、②の要素は①の要素よりも後れて広がることが解る。また、加曾利E式の中にはIの器形で①や②とはほとんど変わらない要素を持つものが含まれている。

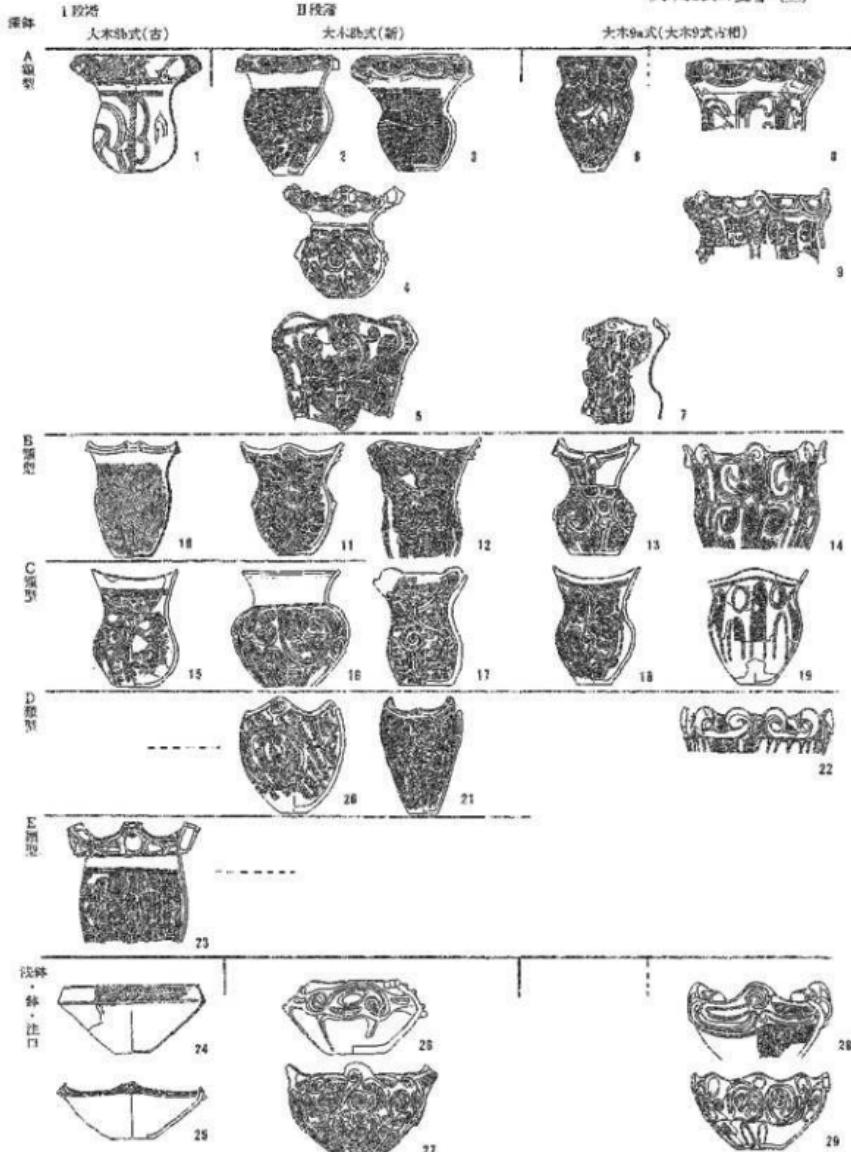
I段階（第11図2～5） 器形はA2に統一され、体部最大径はI段階より若干上になるものが多い。また口縁部の内湾の度合は弱くなる。第一文様帯の渦巻は極大し、文様帯の上下端に付き、渦巻の間に明確な区画が生ずる。I段階の透かし装飾から変化した4単位の突起のつくものがあり、地文は細沈線によるものが多くなる（第7図1、2、第9図2）。第二文様帯は完全な無文帯になるが、駆部のくびれの無い特殊な類型には無文帯を持たないものがある（第7図4、第8図14）。第三文様帯の文様は比較的大く浅い沈線か、断面が隅丸台形や三角形の隆沈線による連続の度合の強い渦巻文である。また同じキャリバー上器の中には東北南部を中心に分布し、同様の文様が口縁部から体部まで全面的に施文されているものがある（第8図5）（第11図5）。

B類型 口縁部が外反あるいは直立し、口縁部に太い墜帯がめぐるもの。器形はB1（第4図4）とB2（第4図8）がある。



第18図 大木8b式器形

大木8b式の変容 (上)



第11図 大木8b～大木8式変遷模式図 (縮尺不同)

I段階 口縁部（第一文様帯）の隆帯は普通2本で4単位か5単位等偶数単位の波状口縁の頂部に捲巻が付く（第2図3、13、14、第3図13、第4図4、6、8、第6図15）。捲巻がつかず溝のみのものもある（第4図9）。第二文様帯以下の構成およびその変異はA類型と同様である。

II段階 第二文様帯が消失し、口縁部の捲巻は体部から連結する（第8図4、13）。文様はシンプルな縱方向のもの（第8図4）、同段階のA類型と同様に追結溝巻文のもの（第8図9、13）がある。第8図16と第9図6はD類型の系列に属するがこれらと同様の文様構成を持つ。北上川上流域ではほとんどみられなくなる。

C類型 無文平縁か波状縁で、口縁部が外反あるいは直立するもの。器形はC1（第3図20）とC2（第4図5）に分けられる。

I段階 第三文様帯文様はA、B類型と同様に沈線を垂下させるもの（第2図5、16、第3図20）と規格溝巻文（第4図5）がある。

II段階 C2器形が多くその中には体部がかなり膨らむ壺形土器（第8図11）と第一文様帯がかなり狭くなったもの（第7図7）があり、大木9a式漸移相（第11図18）に近付く。またC1器形のものも存在する（第9図7）。大木9a式にかけてB類型との器形の交換がおこる。

D類型 楕形で、口縁部にはB類と同様の2本一対、あるいは1本の隆帯がめぐる。第二文様帯は無い。I、II段階を通じて東北北に多く見られる。

I段階 第三文様帯の文様は、沈線か陰沈線による簡略なものである（第3図4、17）。特に東北北部には第3図18、第2図18のような無地文に隆帯で規格溝巻文を描く土器が少数存在する。南東北では大畠貝塚例（馬日1975）のように把手を口唇部に付けるものがある。

II段階 特に北東北で多くなり第7図5、6、8、第9図3のように口唇部装飾に差異があるものの、陰沈線による捲巻の連結した特徴的な第三文様帯文様を持っている。

E類型 口縁部はやや外傾し、第一文様帯は前面が把手状に外側に張り出す（第11図23）。把手部分は、B類型の第一文様帯や、A類型の口縁に付く透かしの入った突起のように太い隆帯に溝を入れ、かなり入念に磨いている。I・II段階を通じて組成中の割合は低い。

そのほか、地文のみの漆飾（第3図5）がある。

II 浅鉢、鉢形土器（第11図24～29）

I段階の浅鉢はA類型、B類型とそれぞれ同様の第一文様帯を持ち、基本的に体部は無文である（第3図7、第11図24、25）。II段階になってもやはり深鉢と類似した文様構成をとるが鉢形を呈すようになる。類似した器形の注口土器（第11図27）も存在する。

このように定義としての大木8b式I段階の組成はA、B、C類型を中心とするが、北上川上流域ではこれらにD類型が加わり、東北南部ではB類やC類にくらべて圧倒的にA類型の比率が高くなっている。II段階では北部のD類に対し東北中部（北上川中下流域）では同様の装飾効果をもった第11図5のような土器が出現する。また北部ではC2器形のC類型が圧倒的に多くなるのに対し、南部ではC1器形が多い。一方このような組成比率上の地域間差異に対し、東北南部では火炬型土器類似土器（以下火炬土器とする）（第6図11）や冷法寺タイプという独特的の土器との共伴が

認められる。これらは全く別の型式の一類型ではなく、大木式や加曾利式を主体的に出土する地域で局部的にのみ組成をなす類型といえよう。その点でいわゆる「異系統土器」とは異なる。ただ前者は大木式土器とは文様要素、文様構成、文様表出技法を異にしており、このような特殊な土器が比較的等質度の高い大木式に伴出することは珍しい。ところで大木8a式期の例では、火焰型土器は他地域からの搬入品ではなく在地で作られた土器であることが胎土分析の結果として報告されており（上條1987、石川1989）。これらが個在的とはいえた大木式を製作していた人々が作り、使っていたところの土器のセットに含まれていたことが解った。そこで次にこの火焰型土器を同じく組成の中に持ち、この土器の在地性、独自性を学史的に強力に主張し続けてきた越後の様相を見ながら大木式分布圖の問題を考えていく。

IV 越後の様相

1. 研究史の概略

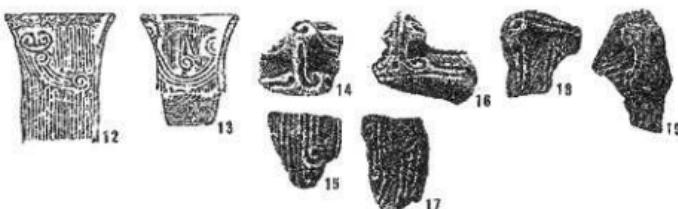
信濃川は、信濃佐久地方の山間に源を発し遠く新潟港に注ぐ最長の河川である。阿賀野川流域が大木8b式図であるのに対しこの信濃川流域は特徴的な火焰型土器を持つ馬高式の分布図といわれてきた。標識となる馬高遺跡の報告で、越後の縄文中期の土器は5期区分され（中村1958）、そのなかで馬高式に後続する型式は柄倉式とされた。その後柄倉遺跡報文（藤田他1961）で柄倉式は柄倉I（第六類）と柄倉II（第七類）に分けられるがこの柄倉式こそ越後における大木8b式類似の土器群であった。この報文は越後の縄文中期研究史の中では初期に位置づけられるものの、大木8b式並行のこの地方の土器のセットに関して、遺構に伴う一括資料を用いて言及した数少ない例として重要である。特に第二号住居床面から第六類の「A類」（第12図2、3）、「C類」（第12図9、10）と、東側内壁から「B類」（第12図8）の共存が確認され、「所謂馬高式と呼称されている」C類を含む柄倉I式の土器組成が明らかにされた。また柄倉II式はA類（第12図12、13）と、かつて斎藤秀平によって設定された塔ヶ崎式（斎藤1937）に近いとされるB類（同図14～19）からなる。更に柄倉式に後続する沖ノ原式の提示（江坂、渡辺1977）が行われ、大木8aから9a式までの型式が出版された。

さてその後この時期の土器群の様相を更に明かにし、広範な視野での編年を中心的に推し進めてきたのは寺崎啓助である（寺崎他1981、金子、寺崎1982、寺崎1989a、b）。中でも最近県内全体の縄文中期の土器群の集成を行い、小林達雄の分類（小林1988）をふまえて所謂火焰型土器の仲間（A群）、「大木式土器の影響を強く受けている土器群」（C群）、C群がより在地化して土着した土器群（B群）の3群35類型を提示した。そして大木7b式期から大木8b式期をV段階に区分し、それぞれの土器群のセット関係を示した。その結果IからIV段階はC群、V段階はB群が主体を占め、所謂火焰型土器を含むA群は常に組成の上で客観的であり、むしろ大木式類似の土器が主体であることを明らかにした。またそれらの分布については、A群は阿賀野川以南から関川、佐渡、B群は信濃川以南から関川の範囲を中心に阿賀野川まで、C群は阿賀野川以北の地域から関川までと

大木8b式の変容（上）

いうおよその傾向性を示した（寺崎1991）。氏の論考は從来、火鉢型土器という個性ある特定の土器の陰に隠れて不鮮明になっていた概期の土器群全体の構造を明らかにした画期的なものであるといえよう。また小田由美子も同様の視点に立ち、柄倉遺跡、万條守林遺跡の一括資料の提示を行っている（小田1991）。

このような研究の現状において「大木式の影響を強く受けている土器群である」とされるC群の本来の大木式との比較、位置づけ、およびB群からC群への変化の実態は本稿の主題である大木8



第12図 柄倉遺跡出土土器（S=1/8）（※14～19：1/5）

上段 第2号住出土土器

下段 12・13第7類A 14～17第7類B

b式の変容に關わって来る問題であり検討を行っていく必要がある。ここではまず、新潟県下の遺跡で出土している土器群を用いて大木8b式との比較、類型化を行い、次に、岩野原遺跡（寺崎他1981）、沖の原遺跡および万松寺林遺跡（池田、荒木他1988）の一括資料を用いてそれらの共伴関係を見ていくことにする。なお新潟県の北部は大木式土器の分布圏に含まれ、土器群の様相もほとんど変わらないため本稿での検討対象は中越、下越とする。

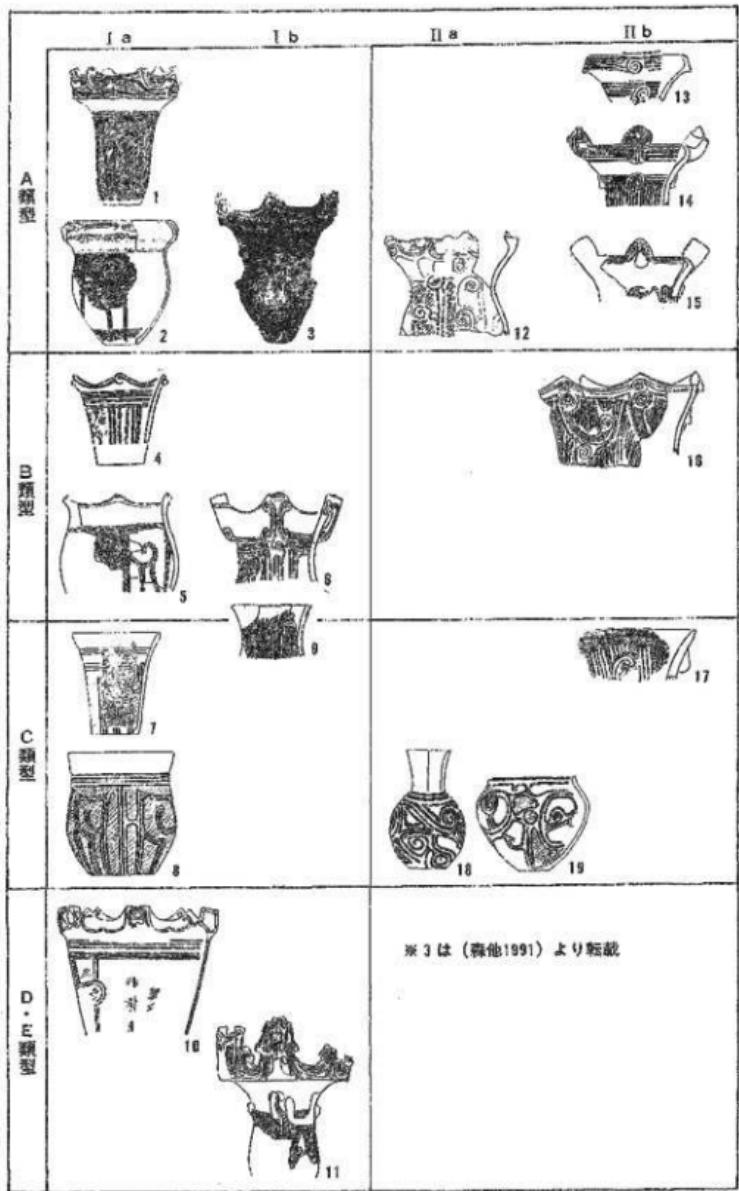
2. 類型の提示（第13図参照）

越後A類型Ia（第13図1、2）：最もポビュラーで各遺跡でまんべんなく出土する類型である。大木8b式A類型と同様体部が膨らむもの（A2、第13図2）とそうでないもの（A1、同図1）があるが、吉野屋遺跡（新潟県1983）、初倉遺跡、十三仏坂遺跡（柏崎市史編纂委1987）例等を除けば圧倒的に後者が多い。第一文様帯は縞文のものと細沈線のものがあるが、1の様な細沈線充満で器形A1のものが典型的である。東北では細沈線充満は大木8b式I段階から少數存在するが既述のようにむしろII段階になってかなり多くなる。第一文様帯の刺先付長尾渦巻は上端から発し横方向に伸び、橋状線によって下端と連結されるパターンが多い（第19図4、5）。また大木8b式E類型と同じ造りの把手を付けるものが目立つ（第12図2）。第三文様帯は縞文を地文として三本線で曲流渦巻文を描く。この文様は先に述べた大木8b式の規格渦巻文そのものであり特に越後の規格渦巻文は、縱方向の区画線プラス区画線間のJ字、逆J字状文様という更に規格性の強い構成をとっている（第12図1、第13図1）。これより以後の段階にはこのような特徴的な文様構成を持つ七器類型は存在しない。文様表出技法には、比較的太い沈線で沈線間の磨り消しのないもの、深く鋭い工具を用いた沈線間の磨り消しが発達し、また一部貼り付けを行うことによって半隆起線を表出しているもの、半截竹骨を用いているものがある。しかし文様を描く沈線部分はいずれも3本一対が多く大木8b式の規則を遵守している。このように本類型は、大木8b式A類型と比べて文様表出技法上に若干の違いがあるものの、大枠としては大木8b式A類型の地方変異の範囲で考えてよいものである。

越後A類型Ib（第13図3）：第一文様帯文様はA類型Iaに同じであるが第三文様帯の地文が矢羽根状紅沈線であり、豊沈線か一部貼り付けを行う半隆起線で3本一対の線文様を描いているもの。第一文様帯に把手、第二文様帯に、X字状把手や長尾渦巻文がつく。文様構成はIa類と同様の規格渦巻文であるが、3本沈線か2本隆沈線という大木8b式の基本文様単位がここでは崩れている。第二、第三文様帯間の区画線を持たないものもある。

越後A類型IIa（第13図12）：キャリバー形で第二文様帯が消失し、文様構成及び表出技法は大木8b式II段階A類の第8図14、第11図5に相当するもの。他、吉野屋、川久保等の遺跡でみられる。

越後A類型IIb（第13図13、14、15）：第一文様帯が狭まり、巻きが上端および下端に連結し、第二文様帯が縞文である点で大木8b式II段階のA類型に類似する。第三文様帯の地文は縱方向の深い沈線で、文様は第11図11のようなII段階の体部文様の中で簡素な方の類型のモチーフに共通する。口縁部にはIb類同様の把手や匯狀突起が付く。



第13図 越後における大木8 b式・類似土器

越後B類型 I a (第13図4、5)：大木8 b式B類型と同様の2種類の器形、三つの文様帶構成、縄文地文をもつ。第三文様帶文様は、隆沈線、半隆起線か沈線による垂直方向の区画線と区向線間の沈線（棒状工具か半截竹管）による規格渦巻文の組合せである。

越後B類型 I b (第13図6)：文様帶構成は I a と同じだが口縁部は二本の隆帯というよりも第4図9のようにむしろ溝状になっており口縁の頂部に上向きに溝巻がつくものが多い。第二文様帶にX字状把手や、渦巻文、第三文様帶に眼状突起のつくものがある。第三文様帶地文は細沈線で、文様は隆沈線もしくは半隆起線、半截竹管等による垂直方向の区画帶とその間にくり返される更に規格性の強い規格渦巻からなる（第20図6）。垂直区画帶の縁起状部分は2本あるいは3本の縁にまっすぐに伸びた長尾渦巻を組み合わせたものである。これはII段階の区画帶が2本一対であるのに対し規格性を欠いているといえよう。当類は大木8 b式B類型の系譜にあるもののかなりの変容が認められる。このような土器は中越地方（岩野原遺跡、沖ノ原遺跡、羽黒遺跡、馬高遺跡、小坂遺跡（十日町市教育委員会1961）等）で多くみられる。

越後B類型 II b (第13図16)：第二文様帶をもたず、縱方向の沈線を地文とする。文様は隅丸台形の隆沈線で描かれる。

越後C類型 I a (第13図7、8)：A類、B類よりも報告例がかなり少ないが文様、文様構成とも大木8 b式I段階のC類に一致する。

越後C類型 II a：第13図18は第11図16と同様に第三文様帶に連続の広い高い溝巻文を持つ長頭壺形土器である。19はいずれの類型に入るか不明だが文様構成は18と同様でありII段階の大木8 b式に相当しよう。

越後C類型 II b (第13図17)：口縁端部が無文であり、条縞地文に高い隆帯で長尾渦巻による文様を描く。

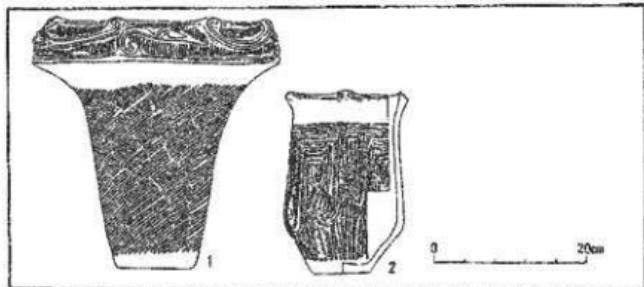
越後E類型 I b (第13図11)：口縁部に特徴的な隆帯装飾を施し、第三文様帶の地文が主に細沈線である土器。口縁部の装飾は、太い隆帯の中央に溝を入れて崩きをかける大木8 b式E類型やB類型の第一文様帶に共通する。隆帯装飾部を除いた場合、器形は口縁部が若干内側し、やはりE類型に共通する。基本的にはE類型の橋状把手を上方に向かって発達させたものと解釈される。第三文様帶文様は各類型 I b の土器に共通する。万條寺林遺跡、沖ノ原遺跡、十日町市の各遺跡等信越境に多くみられる。

その他：大木8 b式D類型と同様に樽形ではあるがE類型に類似した橋状把手が口縁部に付いた土器がある（第13図10）。

以上検討の結果、越後各類型の I a は大木8 b式 I 段階各類型の、II a は大木8 b式 II 段階各類型の、型式内変異に包括されることがわかる。一方越後各類型の I b、II b は本来の大木8 b式には含まれないものの、I b は I a に、II b は II a に比較的類似していることがわかった。次にこれらの各類型のセット関係を把握し、年代順に配列するために一括資料による検討をしていきたい。

3. 一括資料の提示

最近既報の一括資料が最も明示的に報告された遺跡に塩沢町の万條寺林遺跡（第15図上段1



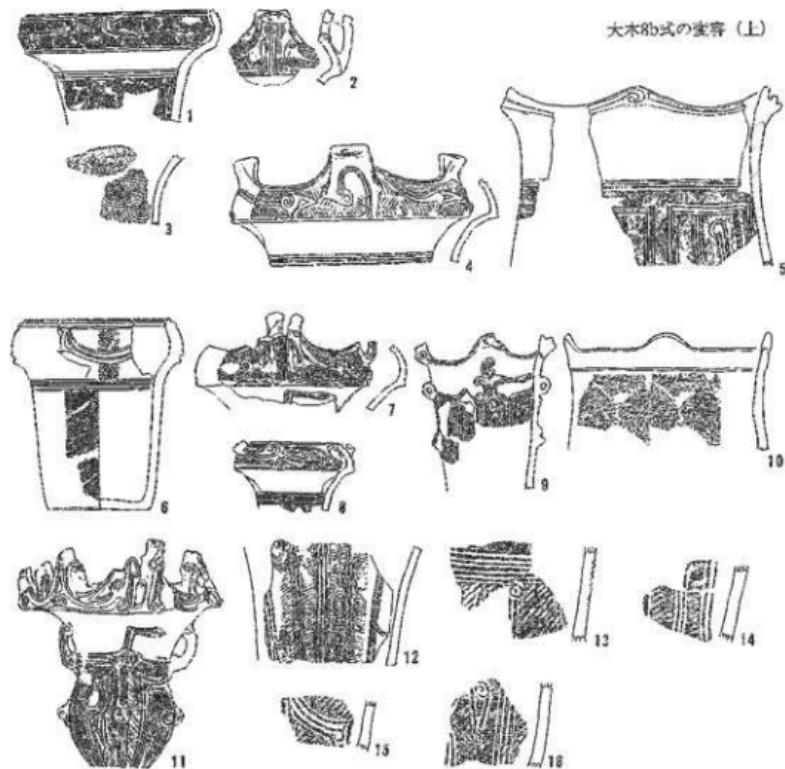
第14図 沖ノ原遺跡117号住居址出土土器

～16)がある。まず170号住居の下層からは1、2、3の土器の出土が報告されているが、特に1は第一文様帯が縄文地文の越後A類型I a、2は細沈線地文の越後A類型I aかI bである。4、5は5号住のピットおよび炉の東からそれぞれ出土したものである。5は三本の半隆起線で文様を表出し縄文を地文とするB類型I aだが、文様構成が一般的の規格溝巻文とは若干違っている。6から16は4号住出土の土器で特に6(A I a)、9(B I b)、10、11(E I b)、12、13、14は炉内焼上上からの出土、7(A I b)、8(A I b)は炉跡外周からの出土で一括性が高い。体部破片には沈線間に磨り消しの無いもの、半截竹管によるもの、隆沈線のものがある。これらの資料から、越後A類型I a、同I b、B類型I a～I b、J bの同時性が解る。12～16の体部破片は越後A類型I a、B類型I a、C類型I aの可能性がある。

非南町沖ノ原遺跡でも概期の資料が豊富に出土しているが、特に117号住居ではA類型I a(第14図1)、B類型I b(同図2)が床面遺物として報告されている。I a、I bを含むこれら一括資料は何れも火道型土器を含んでいないが、先に研究史でのべたように傍倉遺跡2号住居址ではA類型I a(第12図1、3)と火焰型土器(同図9、10)の共伴が報告されている。

長岡市岩野原遺跡でもかなりの数の住居址が検出されているが、遺物出土状態の記載がないためここでは前山の三遺跡の例と比較して出土土器間の同時性の高いと思われる106号住居址(第15図下段1～13)とそれを切っている⁽³⁾107号住居址(第15図14～19)出土土器の検討を行う。炉はいずれも石門炉であり、107号住は完全な複式炉を持つ時期の住居址よりは106号住に近接した時期であると推定される。106号住はA類型I a(1)、B類型I(2)、C類型I(3)と縄文地文、細沈線地文の土器が出土している。一方107号住からは大木8b式II段階以降土器類似土器(14、16)と越後II b(19)が出土している。また132号住居址(石門炉)とそれを切っている148号住居址(埋甕と掘り込み部を内部に持つ石門炉)では、前者は埋甕と床面上器にA類型I aを、埴土に火焰型土器およびA類型I a、B類型I aを主体とし、後者はB類型IIとおもわれる破片とA類型II以降に属する口縁部破片が見られる。各類型IIに相当する土器は下田村長野遺跡(下田村教育委員会1990)で特にまとまって報告されているが共伴関係は明確にされていないので岩野原例をもってIとIIの時間差を推定したい。

大木8b式の土器（上）



第15図 上段 万條寺林遺跡出土土器 (S=1/3 13~16: 1/5)

1・2・3: 170号土器 4・5: 5号住ビット、炉の東 6~16: 4号住

下段 岩野原遺跡出土土器 1~13: 108号住 14~19: 107号住 (S=1/3)



越後各類型のI aとI bの差異に関しては、後者の方が第三文様荷文様の巻帶化が進んでおり、岩手県における大木8 b - 1式と大木8 b - 2式の差異に見られたように後者が前者に後続する可能性が高い。ただ大木8 b - 1式にも隆帶を持つ土器は存在しておりこの差は割合の差でしかないため組成全体の検討が必要であることは先にも述べたとおりである。今回南魚沼の…括資料からはA類型I a、I b、B類型I a、I b、C類型I a、E類型の同特性が高いことが推定された。今後さらにいくつかの別跡跡の組成の検討が必要であろう。ただこれらは各類型II aの土器に伴わないこと、大木8 b式I段階の文様構成を忠実に踏襲していることから、東北の大木8 b式II段階よりはさかのほる時期に位置づけることができよう。これらに則り、小田はA類型I bが、火焔型、王冠型土器に伴わないことから、「火焔型、王冠型土器と同時期と位置づけるよりはその後続時期」とし（小田1991）、一方守崎は各類型のI bをI aが「より在地化して生産したもの」と推測し、「火炎土器様式」V段階としている（守崎1991）。現時点では、そのような傾向は否めないものであり、本段では「I aと火焔型土器」及び「I aとI b」という2つの様相が、信濃川中流域と南魚沼地方の地域差、もしくは、型式内時間差にあたる可能性があるということを念頭に置いた上で大枠で大木8 b式I段階並行としたい。一方各類型IIは今のところ確実な一括資料にはもとづかないものの各類型Iと混在することが少なく、より後続する可能性があろう。特にII bについては、大枠で大木8 b式II段階～9 a式までの並行としておき、其伴例を待ちたい。

このように越後の概期の土器は大木8 b式I段階並行、大枠でII段階並行としてきたが、最後にこれらの型式学的位置づけについて考えたい。まず大木8 b式I段階並行の土器の場合、A類型I a、B類型I a、C類型I aは文様表出技法に若干の違いがあるものを含むものの大木8 b式I段階の土器そのものである。一方A類型I b、B類型I b、C類型I b、E類型I bは鉢形、文様単位、文様構成は大木8 b式に類似するものの、地文の種類、陸沈線、半隆起線の多用、新出の要素（眼鏡状装飾、X字状記号）という細部における差異を持っている。更にI aの一部はいうまでもなく極少数とはいえ所謂火焔型土器類似土器群という一羣の大木8 b式内には存在しない類型の土器を組成として備えている。山内清男は土器型式は地方差、時間差の単位であると同時に、ある一定の組成、装飾、技法を備えた土器群として提示しており筆者も土器型式をそのような要素の複合体としてとらえている。土器型式をいかにくくりどのように土器型式名を付けたかによって何かが見つかるわけでは決してなく、その地域の土器群がどのような要素の複合体であるか、類似と差異の属性構造を確実にとらえるために土器型式がまず重要であり、それがあるからこそ次の段階での動態研究に進めるのである。それではここでみられる組成、装飾、技法の若干の差異は概期の越後の土器群を大木8 b式の地方差の範囲からくくりだすのに果して十分なのであろうか。というのは同じ東北の大木8 b式として認定されている土器群の中にも例えば北上川上流域では器形上の差異（A類型の口縁部が被状になる）、組成上の差異（D類型がかなり多い）が顕著であり、福島県の南部では組成のなかにある時刻別系統の土器が含まれるなどの「地方差」がみられるからである。そして今日一般にいわれる土器型式とはこの地方差を内在した最大公約数的なものである。もし厳密な地方差の単位毎に土器群を分けていったら一つの土器型式は独自別々の名称を持った無数

の地方小型式に分割されることになってしまう。

今回筆者は越後でのこの組成、技法、文様上の変異は最大公約数としての大木8b式の定義に含まれるものと考えるが、越後のこのような様相をもって大木8b式の第一次変容として位置づけたい。しかしながらもし資料の増加によってA類型Ia、B類型Ia、C類型Ia、火焔型土器が、A類型Ib、B類型Ib、C類型Ibと時期的に分離できるのであれば少なくともIb段階の組成は、大木8b式諸類型の定義からかなり逸脱した、変化を遂げたものとしてとらえざるをえないであろうと考える。現時点では越後の大木8b式I段階並行期の土器群は、大木8b式基本類型A、B、C、およびその変異類型越後A、B、C（各類型Ib）に大木8b式には本来存在しない類型（火焔型土器類似土器群）が加わった組成を持つ土器型式という略式的定義づけを与えることにする。もちろん単に大木8b式A類型やB類型の分布図を述べるとすれば当然越後の全域が包括される。

次に信濃川を更に遡り、この大木8b式基本類型と越後での変異類型を追うこととする。

V 信濃の様相

1. 研究史

信濃川は長野県に入って千曲川と呼称が変わる。北信濃は気候、地形ともに越後の南部に類似しているようであるが南へ下るにつれて中部高地的な様相に変化する。この地域では1970年以降の組織的な調査によって徐々に資料が増加し対象時期の様相が次第に明らかになってきた。『野沢温泉村史』（坂詰1974）および『阿ノ峯』（野沢温泉料金委1985）に掲載された阿ノ峯1、2、3次、平林遺跡の調査、『鬼無里村史』（森嶋1967a）、『更科埴科地方誌』第2卷（森嶋1978）、『信州新町史』上巻（森嶋1967b）ではいずれも出土した中期後葉の土器と越後の土器との関連が指摘されている。

それらをも含めて、北信濃の縄文中期後葉の土器に関する研究史および分野の様子は緑田弘実の論考の中で詳しく論じられている（緑田1988）。氏は中期後葉I・II期（大木8b式並行）の土器を加曾利E系、越後系⁽³⁾に分けて解説し、この時期は「北信全域が越後系に席捲される觀がある」としている。特に唐草文自体が越後とつながりが深くなるとしていることは注目される。

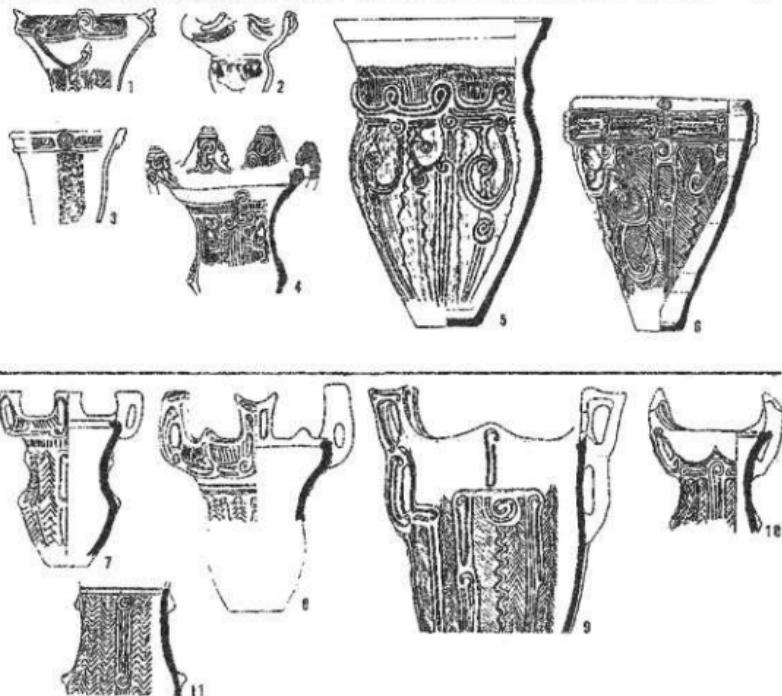
一方森崎稔は1991年の『後遺跡』のなかで住居に伴って豊富に出土したIA、IB類を基本的には唐草文系土器としながらも「一型式の概念の中では、越後中南部～北信濃に偏在する」、「類似土器の出土範囲は越後から甲斐にまで及び、その器形文様構成のあり方は、越後中南部・北信濃を核現象地帯として南下するにしたがい周辺現象を呈している」とし、これらを仮称「後式」とした。

このように研究史を概観すると縄文中期後葉の北信の土器と前節で述べてきた越後の土器との関係の深さが多く言及されていることが解る。それではこれらと唐草文系土器との関係はどうであろうか。

『中部高地縄文土器集成』（中部高地縄文土器集成グループ1979）の中で特に唐草文系土器の分布

大木8b式の変容（上）

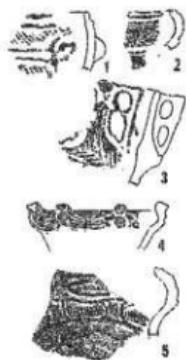
置とされる諏訪湖盆・松本平・千曲川水系の部では、唐草文系土器はI、II、III、IVの四段階に分けられている。この中で大木系（第16図1、2）、越後系（同図3、4）土器は加賀利E系とともに別系統の土器とされているが、第16図5、6等の唐草文系土器も大木8b式につながる要素である劍先付渦巻文を持つ土器とされている。すなわち大木系、越後系とそれらに類似した唐草文系土器の三者が存在するということである。このうち、1は第二文模帯に長尾渦巻を施文することで越後A類型1bに類似し、4は把手の形態に中部高地的変容がみられるものの越後B類型1bでありいずれも越後での第一次変容を遂げている。また5、6等のいわゆる唐草文様は水平方向、垂直方向の区画線、その間の曲流文様、列先文に関しては確かに大木8b式に共通するが規格渦巻文構成は更に変化している。ここでの「大木式の伝播経路は一つは越後、一つは群馬、埼玉を通っている」という指摘はこの違いを示すものであろうか。翌年米田明訓は諏訪・上伊那の唐草文土器II段階の土器組成を論ずる中で（米田1980）「第II段階を特徴づける土器」としてb種を提示したが、その中で「他の土器に多大な影響を与えていた」型式として丘型式を分類した（第16図7～11）。



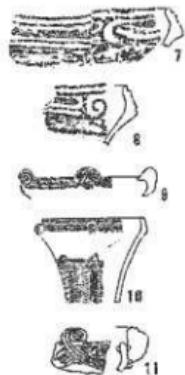
第16図 上段 中部高地の土器組成における大木系 越後系（5と1／10）
下段 米田明訓の唐草文土器II段階b種H型式

大木8b式の変容（上）

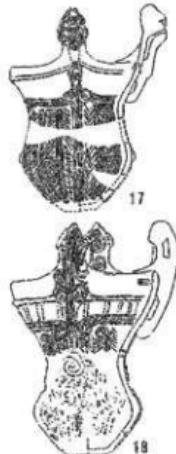
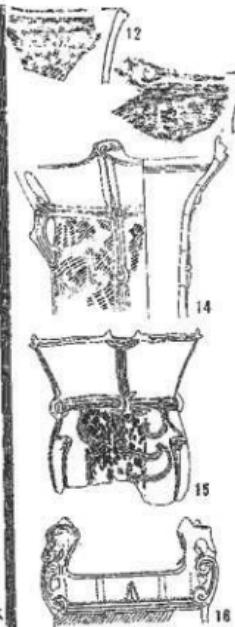
A系列



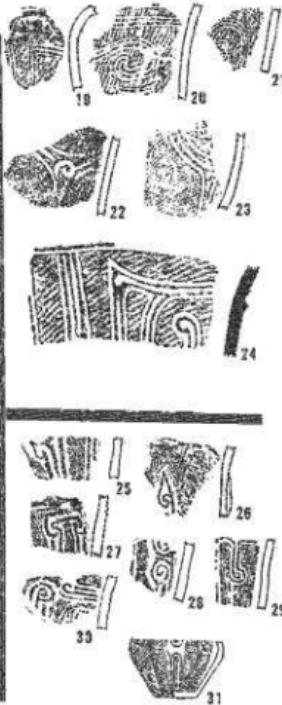
(S=1/4)
概報掲載土盤をトレース



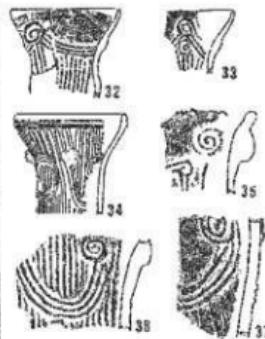
B·C 系列



序號四



その他



第17図 北信濃におけるI・II段階 (拓本 $S = 1/\sqrt{3}$)
他 $S = 1/\sqrt{10}$)

特にII型式の文様要素である「腕骨文」や把手は北信地方あるいは北陸、越後からの影響であると述べられている。すなわちII段階の土器組成の中に北信、越後、北陸からの影響を内在する土器が含まれているという指摘である。これに対し田中清文は梨久保B式は井戸尻式からの中部高地の伝統を受け継いだ最終の土器であり、II段階以降の唐草文系土器は繩文地文に大木8a、8b式に近似した双曲線文を持った土器から系統発生するものとしている（田中1984）。このような中で三上律也が施文技法、施文順位と器種組成という観点から唐草文系土器の系統を検討したことは注目される（三上1986、1988）。特に「八」字状文や曾利I式に対応するモチーフから地文へという工程が梨久保B式から系統発生したこと、主体をなすA（橢形）B（口縁が無文外反）C（キャリバー形）の三類型の変遷の提示によって、外来の要素のみに集約できない在地土器からの基本要素の繼承が明らかにされた。

さて概期の段階区分案のなかで「腕骨文」で特徴づけられる土器群と大木8b式D類型と器形、文様構成とともに大差類似した土器群の位置づけが問題になっていたが、梨久保遺跡および上木戸遺跡の住居の切り合いを基にして唐木孝雄は前者をII段階、後者をIII段階に区分した（唐木1986、1988）。この「腕骨文」という風変わりな名称を持つ文様要素は、第20図9のように二本の隆帯で直線的な長尾渦巻を描く文様で、大木8b式B類型の第一文様帶文様、II段階の垂直方向の区画線等、類似した文様は大木8b式隨所に見受けられる。ただ最も距離的時間的に近接したものは越後各類型Ibの垂直方向の区画線であろう。この要素が、規格渦巻文を伴うものであることからもこれらに関係することは今更確認するまでも無かろう。

2. 北信、中信の土器群の様相

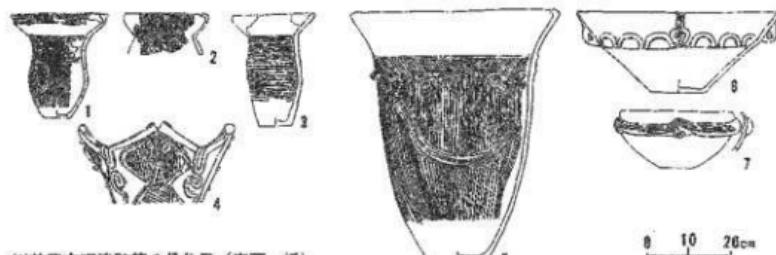
松本市前田木下遺跡（直井、平林他1984）は完形で大木8b式I段階のA類型（第18図1）が見つかっているきわめて稀な遺跡である。この土器の第三文様帶文様は第20図5に示したように、1の山形県原ノ内△遺跡や3の大松沢貝塚例に類似した、横方向の三本沈線から斜め方向に渦巻文を配する規格渦巻文である。体部の彫り込み方もほとんど東北の大木8b式と大差無い。しかしながら北信においてこのような完形品による資料はほとんど見られない。ただ、第17図22、23の平林遺跡例、24の猪崎跡例のように体部破片の中には、繩文地文に沈線で規格渦巻文を描いているものがあり、このような第三文様帶文様を持つ土器こそI段階の大木8b式土器との直接の関係を持つのであろう。一方I段階の大木8b式B類型（越後B類型Ia）は新潟県反黒口遺跡までは確認されているが信濃に入ると粗原遺跡等の類似土器を除くと消息がつかなくなる。

さて大木8b式が一次変容を遂げた越後の諸類型はどのような様態をしめすのだろうか。先に唐草文系第II段階の「腕骨文」を持った土器群と北信地方の越後系、大木系といわれる土器群の類似が指摘されてきた。次にこれらの土器を整理し、越後の諸類型との比較を行いその実態を把握したい。

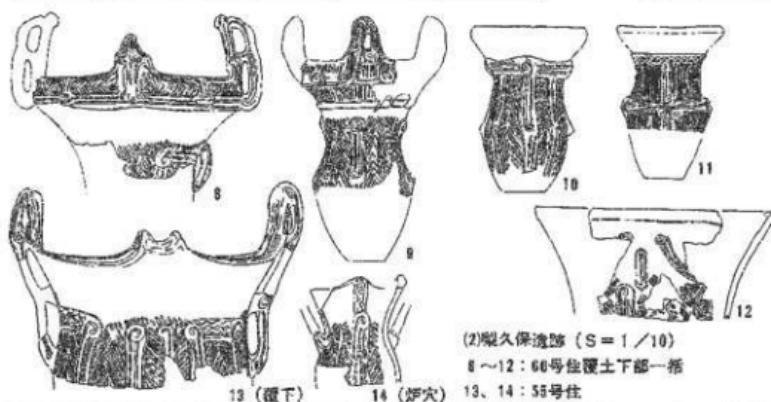
（A類型系列）：第17図の土器は1～3、12、13、19～21が津南町反黒口遺跡でその他は主に北信の出土資料である。このうち1～11は3つの文様帶を持ったキャリバー形土器で地文は細沈線であり、いずれもA類型に属する。A類型IaないしA類型Ibに相当するもの（1～5）、A類型I

大木5b式の変容（上）

b (6)、横巻が文様帶の上下端に広がるA類型II (7~10)がある。10は越後のA類型II bの第三文様帶地文と異りI bと同様の細沈線を地文に持ち、文様のみがII bと類似した垂直方向の直線的な区画線のみになっている。越後でII段階に発達する縦の沈線地文は曾利式の器形の土器（第17図32~34）にみられる。第16図7、8、第18図9、国版1もA類型I bとA類型II bの特徴を合わせ持つ。すなわちこれらは三文様帶構成をとり、第一、第三文様帶地文に細沈線を採用しており、



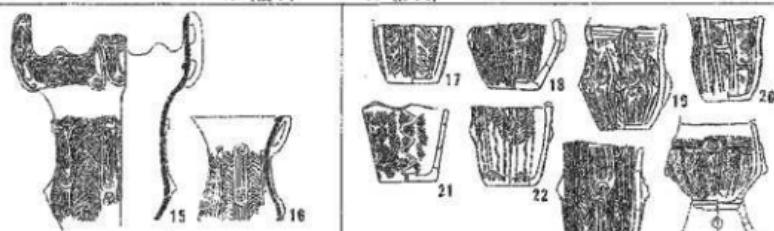
(1)前田木下遺跡第2号住居（床面一括）



(2)鷹取保遺跡 (S = 1/10)

8~12: 60号住居土下部一括

13, 14: 55号住



(3)平出達跡2号住出土土器

S = 1/10



(4)窓達跡5号住埋甌 (S = 1/8)

第18図 信濃の…括土器

口縁部にI bの大型把手、橋状線によって上端に連続する渦巻文を持つ。ところが第二、第三文様帯を区画する横方向の区画線を持たず、第三文様帯の文様は規格渦巻文でなく縱方向の腕骨文のみである。また第18図15は規格渦巻文様に近い構成ではあるが、縱方向の腕骨文の左右両側から両腕を伸ばす様に横方向の陰帯が伸びており、比較的規格渦巻文に類似したもの（第20図10）とともにこのような基本的な規格渦巻文から変化したものも認められる。これら唐草文系土器を構成するものは越後A類型I bをベースにしているが、信濃独特の文様構成である。

（B類型系列）：第17図16は口縁の頂部に溝を入れる越後B類型I bである。一方14は器形と頂部の渦巻、縦の区画線と体部文様が、15も類部の区画線、把手、体部文様がそれぞれB類型I bに類似するが、唐草文系I段階の要素である縦方向の区画線を第二文様帯に用いていること、地文が繩文であることなど異っている点もかなりある。また唐草文系土器の口縁が外反する類型の一部には第18図14のように頂部に渦巻を持ち把手をつけるもの、口縁端部に溝をつけるもの（同図13）があり全体の文帶構成とともにB類型I bに類似する。

（C類型系列）：C類型は第一文様帯文様が無文であることを定義としているがこのようなものは第17図18、第18図10、11のような曾利式や唐草文系第I段階土器、梨久保B式の器形に「腕骨文」のみを付けたもののみである。B類型も含めてことに器形に關しては三上の指摘のように唐草文系の系譜上に乗ると思われる（三上1988）。

口縁部に縦方向の過剰な裝飾をほどこすE類型I bは存在しない。

（体部破片）：第17図25～29のような細沈線地文に陰沈線で刺先を持つ渦巻文を描く破片はA類型I b、B類型I bの可能性がある。また31は直線的に長尾渦巻を垂下させており、規格渦巻を持たないA、B類型I bにあたる可能性が高い。

最後にこれらを一括資料によって検討し、時期と組成を考えたい。小川村遺跡5号住居は8個体の土器が円形に埋設されており（第18図17～24）体部文様のバリエーションを知る好例である。地文には細沈線のものと繩文のものがある。前者は縦方向の「腕骨文」を基調とし、その間を無縫による刺先付き長尾渦巻（19）、沈線と区画（18）、垂下する沈線（23）で埋める。繩文地文の土器には越後のような規格渦巻文がなく細沈線土器と同様の「腕骨文」と沈線（22）や懸垂文（21）を施す。これらは前田木下を含む大木8 b式I段階より後続し、唐草文系II段階に並行すると考えられる。

また梨久保遺跡の60号住の覆土下部（同図8～12）、55号住（13、14）の「腕骨文」土器の良好な一括資料から体部に規格渦巻文を持たないA類型I b（9）と規格渦巻文を持つA類型I b（8）、曾利式に「腕骨文」が付された土器（10、11）、繩文、「腕骨文」の付いた土器（12）が共伴していることが解る。更に55号住では、同段階のB類型I b類似土器に加曾利E II式の深鉢が共伴する。

このように信濃において散見される大木系土器の検討によって、I段階の少數の大木8 b式の存在、それらとは段階を異にし、北信まで分布する越後A類型I a、I b、B類型I bの存在が指摘された。更に唐草文系土器の組成中には越後A類型I bが変容した土器、越後B類型I bの要素を

持った土器が存在し、口縁部無文の土器を含めて大木8b式A、B、C類型の組成をかうじて跨継している。しかしながらこれらは唐草文系第II段階の土器群のいくつかの類型の中のほんの一部を構成しているにすぎない。群述は北信の資料の増加を待つべきだと思うが、北信あるいは越後の各類型Ibが南下するに従い更に変容を遂げ、唐草文系土器の中に入していくつかの要素として残ったのであろう。越後のIaと火照、IaとIbを地域差と考えた場合、IbはI段階内の段階差をもって中部高地へ伝わったことになるがそれらをI段階内の時間差と考えた場合、越後で生成されたIbはほぼ同時に唐草文土器の中にとり入れられたことになろう。

これら「腕骨文」土器の所属時期は加曾利式E式や曾利式との共作關係から一般に、曾利II式、神奈川編年の加曾利E II式に並行するとされている。唐草文系I段階に大木8b式I段階の土器が共伴し（前田木下）、唐草文系II段階の組成中に越後Ib類をベースとした土器群（腕骨文土器）が存在することが確認されたことはこの段階比定と一致する。唐草文系III期は、加曾利E III式に並行するとされているが、後者に並行する大木8b式II段階土器との共伴例の検討は今後の課題である。

以上今回は北信、中信までの唐草文系第I～II段階の土器について言及してきた。南信の土器についてはこれらとは地域差を持つことから今回はとりあげなかった。いわゆる唐草文を持つ土器の検討とともに今後の課題としたい。

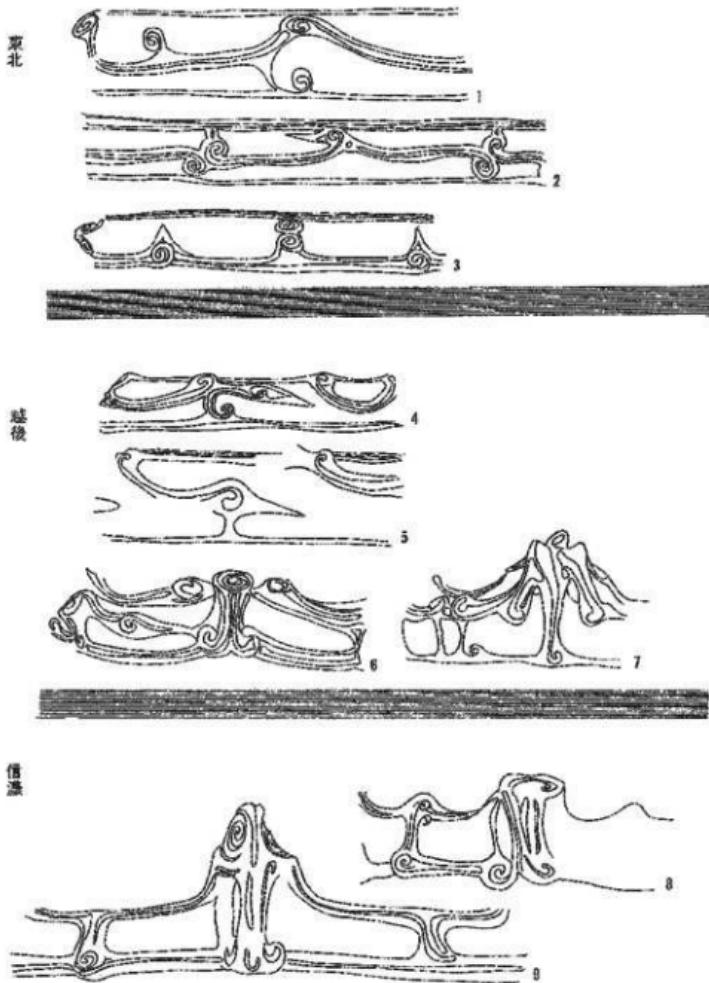
VI 大木8b式の変容

1. 東北、越後、そして信濃へ

以上岩手、宮城、福島、新潟、長野と編文中期後葉の一時期の土器群の比較を行ってきた。その中で大木8b式はまず中越地方で第一次変容をとげ更に信濃にはいり、南下するに従ってかなりの変容を遂げることが解ってきた。最後に各土器群の文様帶構成、文様単位と技法、組成を比較をし、再度位置づけを述べたい。対象時期はいずれも大木8b式I、II段階とする。

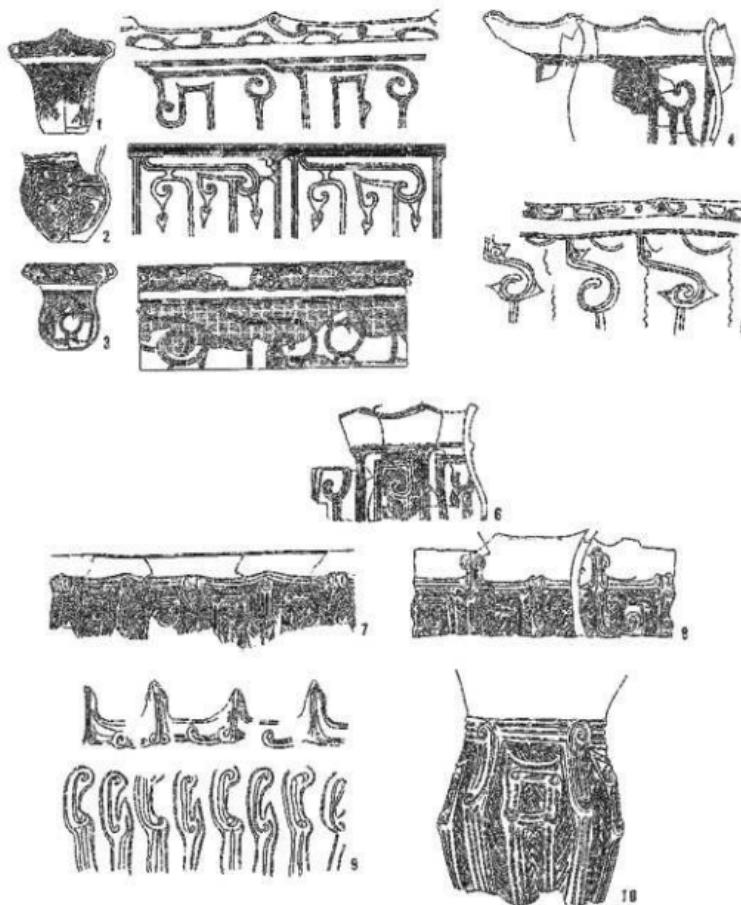
①文様帶構成 A、B類は東北、越後、北信濃ともに基本的な第一文様帶、第二文様帶の無文部と区画線、第三文様帶の構成をとる。一方中信の土器は第二文様帶中の区画線の無いものがある。

②文様単位と技法 A類型第一文様帶において、区画を作らない長尾渦巻による隆沈線文を持つという定義のうえで大木8b式I段階（越後、東北）と唐草文系II段階の信濃の土器は一致する。個々の要素では、側先付渦巻（第19図2、4）、横状把手（同図6、7、8、9、第11図E類）の類似性が高い。更に立体的に付けられる眼鏡状の突起（第19図3と9）、上方向に伸びる把手は三地域に共通した文様要素である。また第20図に示したような第三文様帶の規格渦巻文様は1～5すなわち大木8b式I段階では主に沈線で描かれるのに対し、越後のIbおよび信濃の土器は主に隆沈線で描かれる（同図6～8）という違いがある。また越後のIb類はこの規格渦巻文様と「腕骨文」状の垂直区画帯を両方持つのに対し中信では「腕骨文」のみのもの（第20図9）や規格渦巻文様が崩れたものが出現する。また地文に関しては東北の土器が主に調文であるのに対し、越後では縦



第15図 A類第一文様帶

方向か矢羽状の縹沈線（第一文様帶）と繩文（第三文様帶）、および縹沈線と縹沈線で、信濃はやはり縹沈線が多用される。第一文様帶は越後、東北ともに大木8a式では既に繩文と共に縹沈線を用いており、それらからのスムースな移行が想定される。その後両者のあいだには前者の縹沈線、後者の繩文という選択の差が生じたのであろう。一方第三文様帶の縹沈線は越後と前段階から体部に沈線を施文する伝統のある信濃に限られ、東北では極一部を除き殆ど採用されなかつた。越後の



第20図 第三文様

- | | |
|--------------|-----------------------------------|
| 1 山形県 原ノ内A遺跡 | 8 新潟県 羽黒遺跡 |
| 2 // | 7 // |
| 3 宮城県 大松沢貝塚 | 6 // |
| 4 新潟県 羽黒遺跡 | 5 長野県 ほうろく屋敷遺跡
(図版1の底面図からトレース) |
| 5 長野県 前田木下遺跡 | 4 長野県 製久保透跡 |
- (松本市立考古博物館 1987) よりトレース) 10 長野県 製久保透跡

I b の第三文様帶地文の細沈線は本来は信濃の要素であった可能性も検討する必要があろう。また第II段階の大木8b式の中には通常縦方向に回転する縄文を羽状に転がした例がみられる（第9図9）。これらは矢羽状縄沈線との同一効果を狙ったのかもしれない。

③組成 大木8b式深鉢はA、B、C、D、Eの5類型から構成され、特にA、B、Cが中心、普通的である。このような3類型中心構成に越後では火炎型土器が加わる。一方信濃では唐草文の組成中にA、B、Cの系列に相当する土器が含まれ、大木8b式のセットの遵守が推定されるが、その個々の器形は前段階の唐草文系土器の系譜上に乗るものもあり変容が窺われる。

このように概略的にはあるが越後で一次変容をした大木8b式は信濃を南下するに伴い唐草文系土器のなかの類型にすぎなくなり、特にC類は唐草文系土器の中に要素として残るのみになる。これを二次変容と考える。

2. 土器型式にかかる問題

土器型式の変容とその位置づけに関してはIV章で若干触れたがここで改めて本筋の主題である大木8b式の2つの変容を考えるために土器型式についてまとめてみたい。

山内清男は土器型式を「一定の形態と装飾を持つ一群の土器であって、他の型式とは区別される特徴を持ち、「年代差と地方差を調査する」ために設定する指標（山内1964）とした。更に「その土器型式には多少の器種があり、さらに、いくつかの類型（カテゴリー）に分けられる」（山内1969）とされている。最近大屋道則は山内のドルメン4巻6号「縄紋式文化」を読み解く中でやはり「地方差、年代差を示す年代学上の単位」であると同時に「一定の形態と装飾を持つ一群の土器で、同一の組成をもつ」ことを定義として再確認した（大屋1991）。

さて土器型式と小林行雄の様式は大枠において同様の概念であることが既に述べられているが（鈴木1981）、須藤隆は後者を解説して「形態や装飾など弥生土器の属性の組合せにみられる齊一性、高い相関こそ様式としてとらえられた型式学的概念と言える」とし、「技術、用途に分析の基盤をすえ分類を進め」ることで考古学的資料を生み出した技術的、文化的、社会的基盤をとらえることを目指すことができるとしている（須藤1986）。

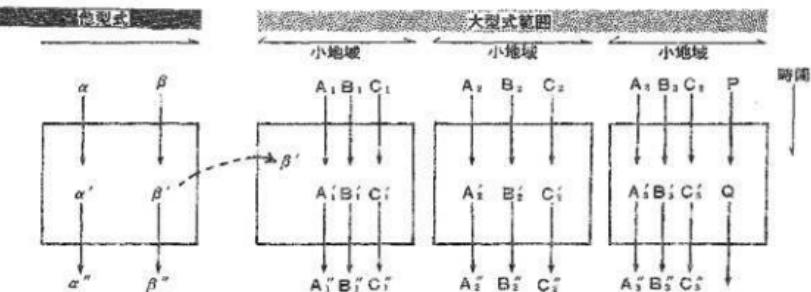
このように縄文土器型式は第一に研究者の設定する作業概念であり、一定の形態、技術を含めた装飾、組成をもった年代、地域の単位といえよう。しかしながらまずは層位という科学的な基準を持ったこのような最も小さい単位がなければ①「それを知悉して後大きな区分」を構築し、②単位同志の関係を考える段階（例えば型式Aと型式B及び、型式Bと型式Cの類似度の高さの程度の比較やその技術的、社会的、文化的背景）に達することはできないと考えられる。それらを基礎として「その土器を生み出した技術体系、その土器を必要とする生活様式、その技術や生活様式を維持する基盤である集団關係」（須藤1986）へと論を進めていくことができるのである。最近中島庄一は型式は「その時代の偉大な先学者の土器を観察するひとつの装置である」とし、優れて体系的かつ客観的に型式に対してまとめている（中島1991）。このような方向性も中島が本文中で述べている「実体化仮説」にもとづく型式学的分析の方向性といえるのではないだろうか。以上の考え方によれば筆者の型式概念を第21図に示す。

さて一方で佐原真は「様式概念はよその地域からもたらされた土器をその中に包括して用いることが多い。しかし型式概念では、併出、共存するよその土器はよその土器型式として区分することが一般的である」（佐原1970）として両者の完全な概念統一への警鐘を与えており、この点に関しては山内も「本家の分布圏から離れて発見される土器はいろいろな時期にみられる」（山内1964）として土器型式は決してある地域、時間に存在した土器のすべてを網羅する概念ではないことを示している（第21図β）。このような他型式からの情報や土器の移動からは嵌入土器のみならずかつて佐藤達夫が指摘したように折衷土器が生ずることがある（佐藤1974）。

越後のI bは越後が即ち大木式分布圏であることから折衷土器とはいはず、大木8 b式の装飾や技法を独自に組み込んだ変容形態である。一方信濃の場合は唐草文系I段階の人々が文様帯編成、装飾を受容し、土器を作ったことになり両者の意味合はかなり違っている。田中良之は折衷土器そのものに「対等ミックス型」「一方優位型」「一部技法受容型」の三つの型を示し（田中1982）、寺内隆夫は異系統土器の受け入れ方に時間的経過を加え①全く受け入れられないもの（拒絶）②次第に既成事実化していくもの（寛容—採用）③急激にとりいれるもの（採用）の三者を示した（寺内1986）が東北系土器の流入に長らく応じなかつた中部高地の人々が、越後変容類型を急速にとり入れたとしたらその背景こそ重要である。これに対し火焔型土器（第21図Q）は特定地域にのみ存在し、大木8 b式の組成の中にあるが、それのみでセットをなす独自の地域を持たないため異系統土器とは言えずかといって大木8 b式内の施文原理では説明ができない特殊な一群である。現象として、ある地域、時間で区切った最も小さい単位（第21図小地域）があり、それらの最大公約数である土器型式の空間的範囲（大型式範囲）があり、小地域にはいくつかの雜音（物、情報の混入と類型の変異^β、^④特異な土器の共伴P、Q



写真図版1 ほうろく腹巻J20号住出土土器



第21図 土器型式概念図

等）がある。今回は大型式範囲を大木8b式になぞらえているが、どこまでを一辨のものとして容認するかは研究者の目的と土器群の捉え方の如何にかかってくるといえよう。

3. 静態絵図の提起

このように大木8b式は東北、越後、信濃と距離をおくに従い2回の変容（第22図、23図）を遂げた。

ここでは東北で画一的なセット関係を以て把握された土器群が距離に反比例するように超成、類型、要素と次第に型式内の情報量を減していく様相が把握された。ただこの時期は類似した土器型式が入り乱れ、特に加曾利E式は大木8b式のA類型が発達した一群であり、組成の中に大木8b式とはほとんど変わらない文様構成を持つものを含んでいる。中部高地の土器を流入の目立つ加曾利E式とせずにあえて大木8b式の変容にそって理解してきた理由はなんといってもそれらが不完全とはいえA、B、Cの組成を持っていること、越後が大木8b式A、B、C類型の分布圏そのものであり、最も信濃の土器と類似した越後各類型Ibが極端的に生じたらしいことに基づいている。

結果として今回は一定時期の土器群を組成、文様帶、文様を中心として見ることによって土器群の静態絵図の下書きを描くことができたことになろうか。いうまでもなく幾度も用いてきた「変容」という語意は大木8b式を基礎として比較検討を行った結果、設定した属性にもとづいた大木8b式からの型式学的な距離をさして言つたものにすぎない。もしこれを大木8b式の「影響」という表現に高めるためには更に詳細な属性分析により唐草文系土器を持つ人々に採用された大木式の要素について検討すると同時に本来の大木8b式主体の地域からあるいは第一次変容のあった越後から人の移動、あるいは土器の移動を更に具体的に実証していくねばならないだろう。今後は今回手をつけた型式設定、地域差の抽出の完成後に、このような型式学的に推定される情報伝達の実体を土器の胎土分析と技術分析を組み合わせて（水沢1992）検討してゆきたい。ある土器型式が他の地域に入り文様、文様帶、超成、技法などの要素に変容がみられる例が多い。今日の資料の増加に伴って、更に多くなっていくこれらの異系統土器の分析によって土器の動きに迫ることができたらと思っている。

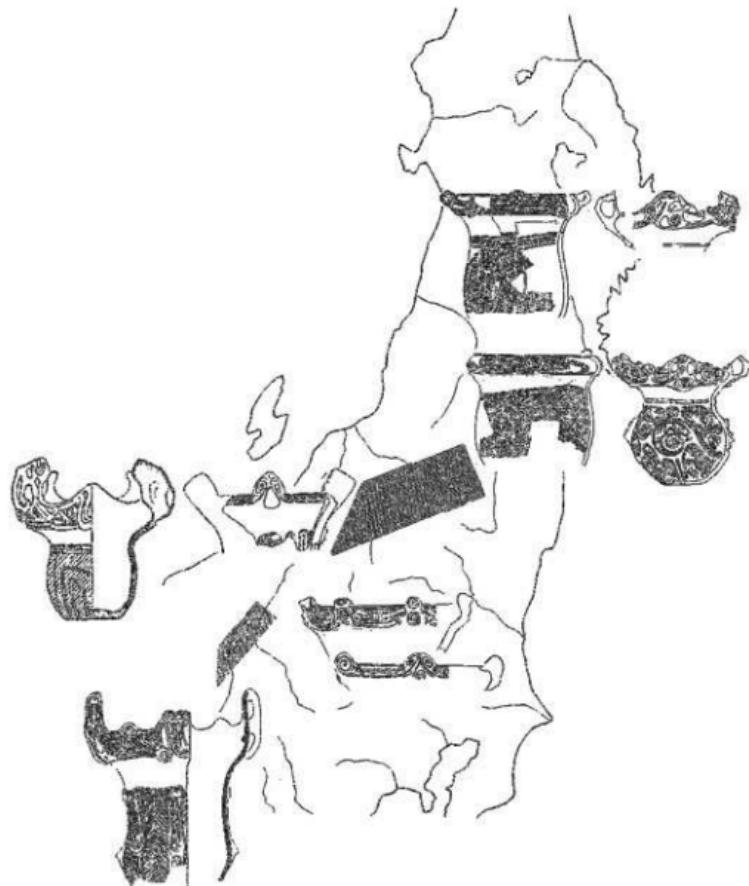
今回舌足らずであった信濃の土器については更に視野を広げ今後このような一次変容及び二次変容が示された背景を多角的な側面から検討していきたいと思っている。また大木8b式については北への変容の様相も今後論じていきたい。（1992.11.21脱稿）

（謝辞）本論文の綱文中期中後葉土器理解および大木8b式研究史は1988年に東北大に提出した卒業論文および1990年に提出した修士論文に基づいている。御指導を賜った須藤隆先生には感謝申し上げたい。また長野県の土器および新潟県の土器についてはそれぞれ三上徹也氏、綿田弘実氏、寺崎裕助氏にいろいろと御教示いただいた。更に新潟県および長野県の土器の実見にあたっては阿部恭平氏、石原正敏氏、坂沢町教育委員会、見附市教育委員会、津南町教育委員会、高橋勉氏、野沢温泉村教育委員会、山之内町教育委員会、森嶋穂氏、松本利光氏、松本市教育委員会、明科町教育委員会の皆様にお世話をになった。特に大沢哲氏からはほうろく屋敷遺跡の貴重な写真の提供をい

ただいた。深く感謝する次第である。また沢田牧氏、寺内隆夫氏、中沢道彦氏、小林正史氏、には文献収集等の面で御援助御支援をいただいた。ことに執筆を前に体を震し縦糸を余儀なくされたが、長野県埋蔵文化財センターの皆さんとの御支援をもって何とか完成にこぎつけた。末筆ながら心より感謝する次第である。また本文中研究者の皆さんの敬称は略させていただいた。

註1 本文中の第一文様帯は山内清男の「文様帯、第三文様帯は山内の「文様帯」にあたる（山内1964）。

註2 本文中には切り合ひの新旧の明確な記載はないが、図版から判断した。



第22図 大木8b式の変容



- | | | | |
|------------|----------------|-------------|---------------|
| 1 岩手県大館町遺跡 | 11 宮城県上深沢遺跡 | 21 福島県法正尻遺跡 | 31 新潟県反原口遺跡 |
| 2 " 栃ノ木平遺跡 | 12 " 鹿角沢遺跡 | 22 " 桑名郡遺跡 | 32 長野県平林遺跡 |
| 3 " 藤遺跡 | 13 " 大木原貝塚 | 23 新潟県羽黒遺跡 | 33 " 上条遺跡 |
| 4 " 西田遺跡 | 14 山形県原ノ内A遺跡 | 24 " 長野遺跡 | 34 " 笠置跡 |
| 5 " 大地渡遺跡 | 15 " 古道遺跡 | 25 " 桜倉遺跡 | 35 " 宮平遺跡 |
| 6 " 真島貝塚 | 16 宮城県中ノ内B遺跡 | 26 " 馬高遺跡 | 36 " ほうろく屋臺遺跡 |
| 7 宮城県浅部貝塚 | 17 " 大槻川・小槻川遺跡 | 27 " 岩野原遺跡 | 37 " 久保在家遺跡 |
| 8 " 青島貝塚 | 18 福島県八景渡巻遺跡 | 28 " 城ノ腰遺跡 | 38 " 弥生前遺跡 |
| 9 " 山前遺跡 | 19 " 塙沢上原遺跡 | 29 " 万條寺林遺跡 | 39 " 前田木下遺跡 |
| 10 " 大松沢貝塚 | 20 " 本富上原遺跡 | 30 " 沖ノ原遺跡 | 40 " 萩久保遺跡 |
| | | 31 " 上木戸遺跡 | 41 " 平出遺跡 |
| | | 32 " 平出遺跡 | 42 " |

第23図 大木8b式主要遺跡とB類型の広がり

第11、13、17回櫛状土器出土遺跡

掘出番号	番号	遺跡名	掘出番号	番号	遺跡名	掘出番号	番号	遺跡名
第11回	1	大松沢	第13回	1	沖ノ原	第17回	11	筏
	2	中ノ内B		2	十三石塚		12	反里口
	3	中ノ内B		3	小坂		13	反里口
	4	中ノ内B		4	森上		14	久保在家
	5	勝負沢		5	羽黒		15	翁生前
	6	柴原B		6	羽黒野高		16	宵平
	7	荒井		7	長馬		17	筏
	8	大柴川		8	羽黒野高		18	筏
	9	上澤沢		9	羽黒野高		19	反里口
	10	大松沢		10	万條寺		20	反里口
	11	中ノ内B		11	黒野		21	反里口
	12	上野		12	野		22	平林
	13	轟谷		13	長羽		23	平林
	14	大柴川		14	長羽		24	筏林
	15	大松沢		15	長羽		25	平林
	16	上野		16	羽黒		26	平林
	17	上野		17	羽黒		27	平林
	18	山前川		18	長羽		28	平林
	19	大柴川		19	長羽		29	平林
	20	貝島	第17回	1	反里口		30	平林
	21	轟		2	反里口		31	平林
	22	大柴川		3	反里口		32	西岡ノノ
	23	大能町		4	平林		33	西岡
	24	大松沢		5	平林		34	平林
	25	大松沢		6	上条		35	平林
	26	中ノ内B		7	反里口		36	平林
	27	上野		8	反里口		37	平林
	28	大柴川		9	平林			
	29	大柴川		10	平林			

註3 北陸的あるいは東北的な要素を持つ土器や塔ヶ崎式の要素を持つものと大木式的な土器を伝播経路を重視して個体「越後系」としている。

註4 βは擲入品として止まる場合と折衷土器を生じさせる場合がある(水沢1992)。

参考文献

- 相原泰二他 1981 「大地獄跡」『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-VII-』(石鳥谷・花巻地区)
- 相原泰一他 1988 「大柴川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』IV
- 秋元 寛澄 1977 「沖ノ原遺跡」津田町教育委員会
- 河野 実也 1988 「原ノ内A遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書132
- 阿部忠・遊佐五郎 1978 「長者原貝塚」南方町教育委員会
- 石本弘・大坪好一他 1990 「矢吹地区遺跡発掘調査報告6 桑名郡遺跡(第2次)」福島県文化財調査報告書第226集

大木8b式の変容（上）

- 池田亨・荒木勇次他 1988 「万歳守林遺跡」塙沢町教育委員会
- 伊東 信雄 1957 「純文式文化の変遷古代史」『宮城県史』1 pp.32~51
- 伊東 信雄 1977 「山内博士東北縄文土器編年」の成立説明『考古学研究』24-3、4 pp.164~170
- 石川 駿司 1988 「異系統土器解説へのアプローチ」『只報』42pp. 1~12
- 伊藤裕・須田良平 1987 「中ノ内B遺跡」「中ノ内A遺跡・本尾敷遺跡他一東北廣域自動車道遺跡調査報告書II-1」 pp.401~466
- 江坂輝輔・石渡寛二・島田靖久 1977 「反戻口遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会
- 江坂輝輔・渡辺誠 1977 「沖ノ源遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会
- 大沢 哲也 1991 「ほうろうく塙沢遺跡」明科町教育委員会
- 大橋惣雄他 1955 「平出」平出遺跡調査會
- 大屋 道則 1991 「型式と編年」「埼玉考古学論集」pp.39~53
- 岡本 勇 1959 「土器型式の現象と本質」「考古学手帳」6
- 小田野哲彦 1991 「上村貝塚発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小田山英子 1991 「火炎土器様式ノート」「新潟考古学講話会会報」7 pp. 1~5
- 柏崎市史編さん委員会 1987 「柏崎市史資料集」考古篇1、柏崎市史編さん室
- 加藤 孝 1956 「陸前国大松浦貝塚の研究」(一)(二)「宮城学院女子大学研究論文集」9、16 pp.63~72、139~156
- 加藤幸・後藤勝喜 1975 「宮城黒登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書」「南方町史資料編」
- 金子祐男他 1974 「森上遺跡発掘調査概報」中里村教育委員会
- 金子祐男・寺崎裕治 1982 「羽黒遺跡」見附市教育委員会
- 上條 朝宗 1987 「松戸ヶ原遺跡出土土器の胎土分析」「東京都埋蔵文化財センター研究論集」V pp.47~56
- 唐木 寿雄 1966 「5中期後葉土器の分類と検討」「梨久保遺跡」本綱岡市教育委員会 pp.462~469
- 唐木孝雄他 1988 「第3章第16節 上木戸遺跡(EUK)」「中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書」2 pp.326~464
- 川上 貴雄 1983 「ツベタ遺跡」安田町教育委員会
- 小林 真寿 1986 「第2節 久保在郷遺跡」「不動坂遺跡群II・古里敷遺跡群II」pp.11~27
- 小林 速雄 1988 「火炎土器様式」「縄文土器大観」第3巻中期II pp.234~253、303~304
- 小山 修三 1984 「純文時代」中公新書
- 熊谷 常正 1982 「岩手の土器—県内出土資料の集成」岩手県立博物館
- 小岩 来吉 1961 「上古編」「岩手県史」1
- 小杉 康 1984 「物質的現象としての搬出・搬入・模倣製作」「破壊史学」pp.160~172
- 坂詰 秀一 1974 「6 国ノ半遺跡の調査」「12半林遺跡の調査」「野沢温泉村史」pp.146~163、pp.180~212
- 佐原 真 1970 「土器の話(3)」「考古学研究」17-2 pp.86~96
- 佐藤 庄一 1981 「原ノ内A遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書36
- 佐藤庄吉・片倉信光 1958 「白石荒井掛文化層遺跡」「仙臺郷土研究」第18卷第4号 pp.15~21
- 佐藤 達夫 1974 「土器型式の実態—五箇領ヶ台と勝坂の間ー」「日本考古学の現状と課題」pp.31~102
- 下田村教育委員会 1990 「長野遺跡発掘調査報告書」
- 新谷和季他 1991 「松本市弥生前遺跡」松本市教育委員会
- 齋藤 秀平 1937 「本郷の馬糞土器」「新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯」
- 鈴木 公雄 1964 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」「考古学手帳」21pp. 1~5
- 鈴木 公雄 1981 「型式・模式」「縄文土器大成」III pp.159~164

- 鈴木信子他 1983 「荒谷A遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報57
- 筑器 隆 1985 「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』1 pp. 1~36
- 須藤 雄 1986 「弥生土器の様式」『弥生文化の研究』3 pp. 11~26
- 賀 雅之 1971 「耳环遺跡」鳥取市教育委員会
- 関雅之・岡本都栄他 1980 「岩野遺跡」柏崎市教育委員会
- 高橋憲太郎他 1982 「柿ノ木平遺跡－昭和50・51年度発掘調査報告－」福岡市教育委員会
- 高橋憲太郎 1989 「トロノ木」遺跡「宮古市教育委員会
- 高橋 保 1990 「十輪」「清水上遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第55号pp. 51~162
- 田中 潤文 1984 「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開」『中部高地の考古学』11 pp. 127~148
- 田中 良之 1982 「廣島縄文土器伝播のプロセス」『鹿島次郎博士古雅記念 古文化論集上巻』
- 中部高地縄文土器集成グループ 1979 「中部高地縄文土器集成」第1巻
- 寺内 駿夫 1986 「4中期中葉土器の分類と焼付」『柴久保遺跡』本稿pp. 456~462
- 寺内 駿夫 1987 「五個ヶ台式土器から勝坂式土器へ」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1 pp. 24~40
- 寺崎裕助他 1981 「岩野原遺跡」
- 寺崎 裕助 1989 a 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学講話会会報』3 pp. 1~7
- 寺崎 裕助 1989 b 「2編文中期の概要」『第3回縄文セミナー縄文中期の課題問題』pp. 10~36
- 寺崎 裕助 1991 「火炎土器様式について」『新潟考古学講話会会報』3 pp. 1~19
- 寺村光輔・青木重孝・関戸之他 1991 「史跡寺地遺跡」青柳町教育委員会
- 十日町市教育委員会 1961 「小坂遺跡」
- 名和道朗他 1977 「古道遺跡発掘調査報告」山形県文化財調査報告第9号
- 直井雅尚・平林裕也 1984 「松本市前田木下遺跡」松本市教育委員会
- 中島 庄一 1990~1991 「記号、型式、分類—改めて型式論を考える」(1)~(5)『東京の遺跡』28, 29, 30, 31, 32
- 中村学三郎 1958 「馬高」長岡市立科学博物館
- 中村学三郎 1966 「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・多々静治 1976 「川内遺跡発掘調査報告書」柏崎市教育委員会
- 新潟県 1983 「新潟県史」資料編1 原始・古代・考古編
- 似内啓邦・千田和文・八木光則 1988 「柿ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報－」盛岡市教育委員会
- 丹羽 康 1971 「京北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』12 pp. 1~21
- 丹羽 康 1972 「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究紀要』1
- 丹羽 康龍 1982 「3. 藤原沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』V pp. 43~306
- 丹羽 康 1989 「中越大式土器様式」『縄文土器大観』第1巻京創社、早朝、前朝pp. 194~243, 346~352
- 新潟県東北教育委員会 1985 「西ノ平」
- 柴崎祐・寺崎裕助 1990 「十二平君跡発掘調査報告書」能生町教育委員会
- 林 眞作 1965 「II編文文化の発展と地盤性」2東北」「日本の考古学」日出書房新社pp. 74~79
- 原田政信・森崎謙 1990 「円光寺遺跡」戸倉町教育委員会
- (財) 新潟県文化センター 1989 「東北自動車道新調査報告書5 天光遺跡」
- 沼島 邦男 1989 「平石遺跡」望月町教育委員会
- 福島 雅典 1999 「宗原A遺跡(第一次)」『三木ケム開連遺跡発掘調査報告』2 pp. 1~237

- 藤田亮義他 1961 「掘査」福島市教育委員会
- 森義 仁一 1967 「かもしかみち」学友社
- 藤島汇信他 1991 「城之跡遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集
- 増子正三・田中耕作 1989 「4中期後葉の土器群」『第3回縄文セミナー・縄文中期の諸問題』pp.10~36
- 松本 茂他 1991 「東北横断自効芦道遺跡調査報告11 法正尻遺跡」福島県文化財調査報告書第243集
- 松本市教育委員会 1981 「松本市内田雨堀遺跡」
- 松本市立考古博物館 1987 「展示解説」
- 馬目 順一 1975 「大畠貝塚調査報告」いわき市教育委員会
- 高山悟・伊藤裕他 1987 「小柴川遺跡」宮城県教育委員会
- 三上 徳也 1986 「若草文土器の成立とその分布」『歴史手帳』14-2pp.~27
- 三上 徳也 1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』第3巻中期II pp.84~119
- 水沢 敦子 1990 「土器型式と縄文土器の移動」『佐久考古通報』50pp.20~22
- 水沢 敦子 1992 「縄文社会復元の手続きとしての胎土分析」『信濃』44-4pp.16~34
- 宮城県教育委員会 1976 「山前遺跡」
- 宮城県教育委員会 1978 「上栗沢遺跡」宮城県文化財調査報告書52集
- 森 宇彦他 1991 「全画縄文絵巻」福島県立博物館
- 森嶋 稔 1967 a 「縄文文化中期」『鬼無里村史』pp.98~103
- 森嶋 稔 1967 b 「(三) C遺跡群官守遺跡 (30)」「信州新町史上巻」pp.206~208
- 森嶋 稔 1978 「更埴地方の縄文中期の遺跡及び遺物」「更埴地図地方誌」第2巻
- 森嶋 稔他 1991 「谷津跡」小川村教育委員会
- 八木光則・千田和文 1981 「大館遺跡群—昭和55年概報」盛岡市教育委員会
- 八木光則・千田和文 1982 「大館遺跡群—昭和57年概報」盛岡市教育委員会
- 八木光則・高橋憲太郎 1983 「柿ノ木平遺跡—昭和57年度概報」盛岡市教育委員会
- 八木光則・千田和文 1984 「大館遺跡群—昭和58年概報」盛岡市教育委員会
- 八木光則・千田和文 1986 「大館遺跡群—昭和60年概報」盛岡市教育委員会
- 山口 齐他 1992 「紫原B遺跡」三春町教育委員会
- 山内 清男 1929 「關東北における繩文土器」『史前学雑誌』1-2pp.1~30
- 山内 清男 1930 「斜行縞紋に関する二、三の観察」『史前学雑誌』2-3pp.13~16
- 山内 清男 1937 「縞紋土器類型式の綱糸と大別」『先史考古学』1-2pp.29~32
- 山内 清男 1940 「日本先史土器図譜」第IX編「山内清男先史考古学論文集」pp.25~27
- 山内 清男 1964 「縞文土器・統論」『日本原始美術1 縄文式土器』pp.148~158講談社
- 山内 清男 1969 「縞紋時代研究の現段階」「日本と世界の歴史」第1巻pp.86~97
- 山内 清男 1979 「日本先史土器の縞紋」先史考古学会
- 山ノ内町教育委員会 1967 「上矢遺跡発掘調査略報」
- 山ノ内町教育委員会 1968 「第2次上矢遺跡発掘調査略報」
- 結城 慶一 1989 「上野遺跡」仙台市文化財調査報告書第127集
- 米田 明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縞文時代中期後半の土器断片」「甲斐考古」17-1pp.1~47
- 立教大学考古学研究会 1967 「大貝遺跡の調査」「新井市史第二次調査報告」pp.1~26
- 鈴出 弘実 1988 「研究ノート北信旗における縄文中期後葉土器群の概観」「長野県埋蔵文化財センター紀要」2 pp.76~89
- 渡辺 誠 1984 「新潟県中魚沼郡津南町八反田遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会

(追記)

皮肉なことに、脱稿、提出の12日後すなわち1992年12月3日に、筆者が担当していた更埴市屋代遺跡⑤b地区の地表下4mの地点から绳文中期後葉面が発見され、翌年、翌々年に調査を行うに至った。路線内で検出された数十棟の住居の一部から、大木8b式II段階～大木9a式にかけての埋甕等の完形土器、それらの変容土器を含む、大量の大木式、大木系土器が出土し、従来の分布図の見直しを迫る状態に至っている。

結果として本論は早きに失した観もあるが、今後、これらの分析をふまえて、長野県の大木式について再考していきたい。

また、脱稿後、3年近くが経過し、各地で多くの報告が行われているが、特に、「绳文中期後半の沈縁を多用する土器群」(高橋保、1992)『新潟考古学談話会会報』10は、示唆的であることをつけ加えたい。(1995.6月)

波状口縁櫛形文土器を追う

神 村 透

I きっかけ

- II 波状口縁櫛形文土器
- III 分布

IV 研究者の考え方

- V 今後への課題

I きっかけ

昭和45年9月、長野県中央道埋蔵文化財包蔵地の調査が、中央道遺跡調査団の手によってはじまった。自分は調査主任の一人として当初からかかわり、下伊那郡、飯田市と上伊那郡飯島町の遺跡を担当した。

46年4月 上伊那郡飯島町七久保地区の調査が鳴尾天白遺跡からはじまった。この遺跡は40×40mの南面する小台地で、遺跡のほとんどが中央道用地内に入っていて、縄文時代中期後半の遺跡全容を知る最初の調査であった。10軒の竪穴住居址を検出し、その4号住居址は6号住居址に切られ直径5mの不整円形であった。炉はほぼ中央に位置し、扁平な小さな石を円形に並べ、両半分は炉石を欠いていた。この炉東側床面に炉石にそって土器の大きさで深さ7cm程の掘りこみをつくり、そこに底部を欠く土器を直立させていた。この特殊な出土状態が注目され、その土器にも注目がいった。それが波状口縁櫛形文土器であった。

52年8月 木曾郡王滝村里宮遺跡を調査した。木曾川の支流王滝川の上流にあって御嶽山の麓にある。ゆるい傾斜地にある小さな遺跡で4軒の竪穴住居址を検出した。その3号住居址から出土した唯一の突形土器が波状口縁櫛形文土器であった。

中央アルプスをはさんで木曾谷にも分布するのを知り、この土器への関心が強くなり、中南信地方の遺跡調査報告書に目を向け、資料を集めた。この文献資料を中心にこの土器について追ってみた。その途次であるが、さらに追求する一步としてまとめてみた。

全ての文献に目を通すことが困難であり、未報告のものは知ることはできないので、おちはあると思う。情報を知らせてほしい。

II 波状口縁櫛形文土器（第1図）

器形 口縁が4か所で大きく山形状（中には弧状）に波状口縁となっているのが大きな特徴である。山形状の頂部が削れているAタイプ、削れないで山形または弧状となっているBタイプの二形態がある。器高のはば中央部で細まり頸部をつくり、口頸部と胴部とをわけている。頸部から外反

してきた口縁部は波頂部の口縁が内湾気味となっているものが多い。腹部は上部に最大径をもって張りだし、底部へとすぼまっている。

文様 波状口縁の部分に隆帯で菱形に近い不整円形に区画し、その内部にも隆帯で文様をつけ、残部を縦の半截竹管による観い沈線でうめている。口縁部には隆帯による捲巻文や単に縦におろすものが多い。これら隆帯縁か間に押引き沈線をつけている。これらの区画文の下部には縦の観い沈線が頸部との間に無文部を残すように施文される。頸部には

隆帯をめぐらし、その下に波状口縁に対応するように上に開く構形文があり、やはり内部を沈線でうめている。

口縁の区画文、押引き沈線文、調部の構形文、半截竹管を強く押さえて引いた観い平行沈線文が特徴である。

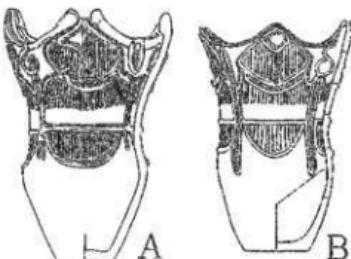
III 分布（第2図、第1表）

自分の手許にある文献によって出土遺跡を調べた。手許にないものや未報告の資料もあるので、実際はこれ以上に多いと思われる。県下では中南信地方にのみ出土し、県外では岐阜県飛騨地方に出土している。

8上木裏原遺跡、18上平村遺跡以外はすべて発堀調査によって知られたもので、しかも、そのほとんどが住居址出土であり、住居に残されるという特徴をもっている。この時期は廃絶住居への土器の施用が多くみられる。それと関係すると思う。

分布図をみると、二つの中心がある。一つは上伊那郡駒ヶ根市を中心に、もう一つは塩尻市南部を中心とする。この中間に位置する伊那市から辰野町は空白になっているが、自分が確認していないためと思われる。この二つは一つになる可能性が強く、伊那谷北半から辰野島崎を越えて松本平南端に中心をもっているといえる。この中心から四隅へ拡散している様子がうかがえる。天竜川を下って下伊那へ、上伊那から天竜川をあがるか、有賀峰を越えて諏訪へ、塩尻から塩尻峰を越えて諏訪へのいずれものルートで諏訪湖盆に入ったのが、さらに東に八ヶ岳西麓にまでいっている。塩尻からは奈良井川をくだつて明科町へ、梓川にも入って梓川村にいたっている。奈良井川をあがって鳴川村、そして鳥居峠を越えて木曾谷に入り、大桑村、王滝村に分布し、間田村長峰峠から飛驒に入り富山県境の河合村までいたっている。河合村下田遺跡では日本海岸に分布する北陸系土器と伴出しているので、富山県内への分布も考えられる。

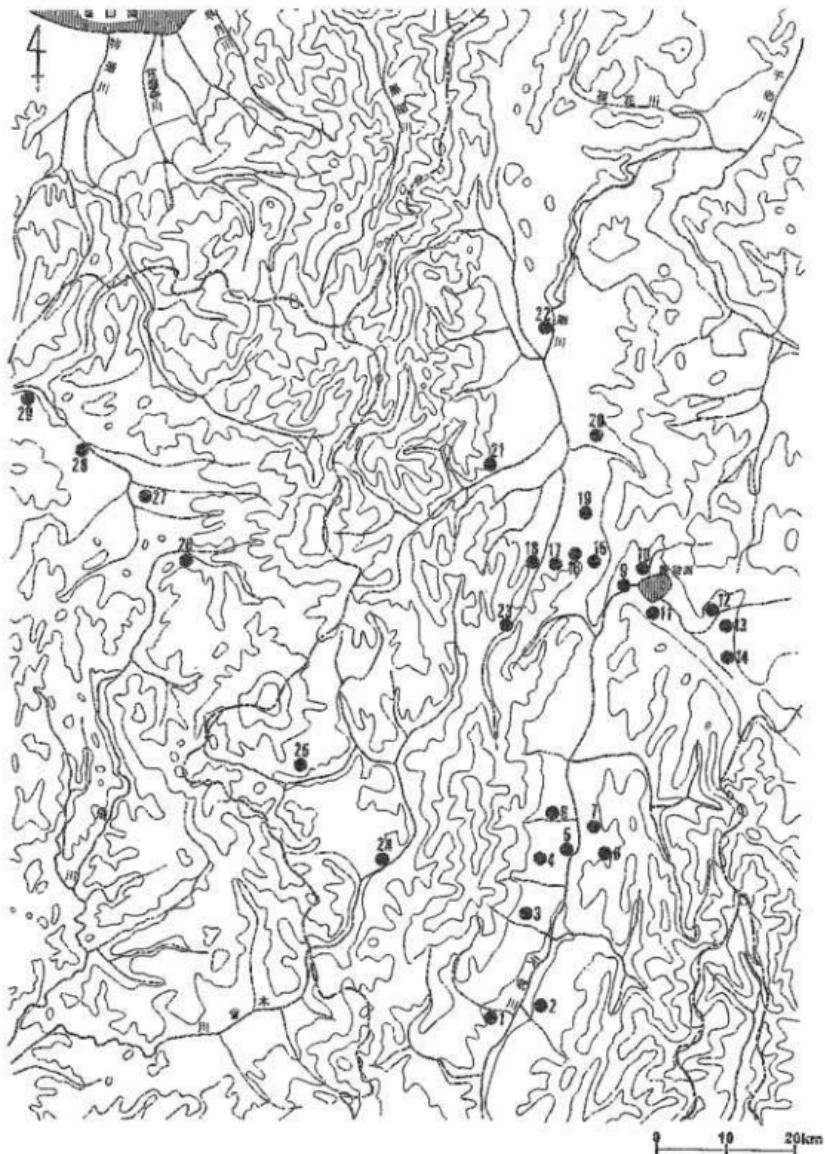
この分布からみてわかるのは、八ヶ岳南西麓に中心を持って分布する井戸尻土器文化圏とは対立し、それより古い平出II類A土器の分布圏と重なり、中期後半の磨革文土器文化圏と重なる。同時に



第1図 波状口縁構形文土器 (A・Bタイプ)

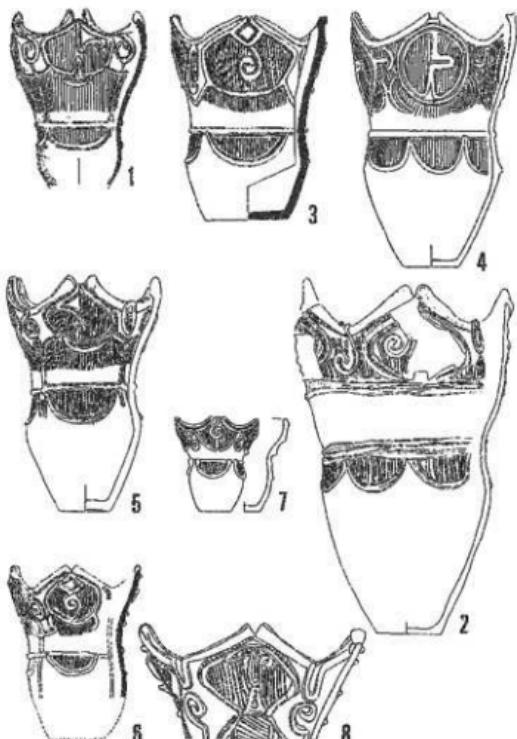
第1表 出土遺跡一覧表 (No.1と図番号同じ)

No.	遺跡名	所在地	遺構	図番	文献
1	代田	飯田市席町代田	住居址	6-5	5
2	伊久間原	下伊那郡喬木村伊久間	28号住	5-1	16
3	鳴尾天白	上伊那郡飯島町七久保	4号住	3-1	10
4	大城林	駒ヶ根市赤堀	17号住	5-2・3 6-7	11
5	丸山南	駒ヶ根市赤堀	1号住	5-4	14
6	高見原	駒ヶ根市中沢	4号住	6-6	32
7	反目	駒ヶ根市東伊那	61号住	3-2	37
8	上木裏原	伊那市西春近		7-1	3
9	長塚	岡谷市川岸	7号住	3-3	8
10	梨久保	岡谷市長池	3・4号住	5-5	9
11	荒神山	諏訪市湖南	98号住	3-4	12
12	棚細	茅野市米沢	24号住 73号住	5-6 3-5	38
13	茅野和田	茅野市玉川	西1号住	5-7	7
14	居沢尾根	諏訪市原村葛蒲沢	22号住 35号七坑	3-6 5-8	21
15	柿沢東	塩尻市上西条	6号住 11号住	5-9 6-8	24
16	焼町	塩尻市上西条	2号住 5号住	6-1 4-1	6
17	平山	塩尻市宗賀	J22号住	3-7	31
18	上平村	塩尻市岩垂		7-3	
19	前田木下	松本市寿	2号住	3-8	23
20	塙田	松本市大村	27号住	7-4	41
21	荒海綱	東筑摩郡林川村	9号住	4-2・3	15
22	ほうろく屋敷	東筑摩郡明科町	J3号	7-5 7-1・6	39
23	ヤナバ	木曾郡増川村養川	2号住	4-4	22
24	大明神	木曾郡大桑村		4-5	34
25	里宮	木曾郡王滝村	3号住	6-2	17
26	森の下	岐阜県大野郡朝日村		7-7	42
27	惣内	高山市上野	13号住	6-4・10	40
28	中野山越	岐阜県吉城郡古川町		7-8	42
29	下田	岐阜県吉城郡河合村角川	5号住 6号住 7号住	6-3 6-11 6-4	33



第2図 遺跡分布図

1代田、2伊久間原、3鳴尾天白、4大城林、5丸山原、6高見原、7反目、8上木裏原、9長
坂、10梨久保、11荒神山、12櫛堀、13茅野和田、14居沢尾根、15柿沢東、16船町、17平出、18上
平村、19前田木下、20眾田、21荒海渡、22はうろく崖敷、23ヤナバ、24大明神、25星宮、26森の
下、27坂内、28中野山越、29下田



第3図 各地出土の波状口縁柳形文土器1 (1/3)

1:鳴尾天白、2:反目、3:長堀、4:荒神山、
5:棚塚、6:居沢尾根、7:平出、8:前田木下

と区別し、平出Ⅲ類A土器の系統に位置づけた。波状口縁柳形文土器については特にふれなかつた。

1988 野村一寿は長野県の縄文中期後葉の土器を概説し(文35)、波状口縁柳形文土器についてこの時期は平縁口縁が普通であるのに波状口縁になっており、東海地方との関係で注目される、と説明し、この土器を下伊那地方の土器としてとらえ、東海地方の土器の影響で波状口縁ができたと考えている。

イ 文様について

1970 宮坂光昭は塩尻市焼町遺跡の土器(4図1、6図2、文6)で、溝文が懸垂はじめているのが目立つ、陰線文の縁には半蔵竹管による連続爪文が刻まれている、と、2つの特徴を指摘

期の曾利系土器文化圏とは対峙している。こうした事実は波状口縁柳形文土器の系統と時期を考える上で大事にしたい。

IV 研究者の考え方

ア 器形について

1970 宮坂光昭は塩尻市焼町遺跡の土器(4図1、6図1、文6)について、下側部に屈折底がつくかも知れない、とのべている。

1986 三上徹也は中部・西関東地方の縄文時代中期中葉から後葉土器への変遷をおっしゃっている(文29)。その中で柳形文土器をF形態としてとりあげた(第8図)。柳形文土器は第Ⅲ段階に発現し、曾利I式土器まで継続する、とのべている。

1986 神村透は下伊那型柳形文土器についてまとめている(第9図、文30)。柳形文土器には厚手柳形文土器と薄手柳形文土器があり、後者を下伊那型柳形文土器

している。

1971 林賢は羽谷市長塚遺跡の土器（3図3、文8）の波状口縁の所にある区画文について、変四辺形に区画されたマディカル文様が形づくられると、その特異性を指摘している。

1977 氣賀沢道は駒ヶ根市丸山南遺跡の土器（5図4、文14）を、非常にマディカルな土器である。波状口縁の下に変形人形文を配している、と区画文を人形としてとらえた。

1978 竹内稔は桜川村荒海渡遺跡の土器（4図3、文15）について、区画文内に隆帯の抽象文、区画文間は蛇をモチーフにした隆帯がとぐろをまき、脣部には立体的な人形文が手足を広げている、と説明している。

1986 三上敏也は中期中葉から後葉土器への変遷をう中で彫形文土器についてふれ（第8図）、人形文はこの器形の当初に初頭があり、変容しながら曾利I式土器（波状口縁彫形文土器）まで残ることを指摘し、彫形文について、「本器形の脣部に必ず施される『彫形文』は、中葉から後葉にかけてほとんど変化なく長期間継続された。このように寿命の長い基本文様帶も特異でありこの器形と消長を共にしたことは注目される。」とまとめている。

1988 野村一寿は県下の中期後葉土器の概説の中で（文35）、後葉の彫形文土器が中葉の勝坂期のそれと違うのは、口縁部文様帶と脣部文様帶を連絡する継ぎ縫合が定着する、と指摘している。

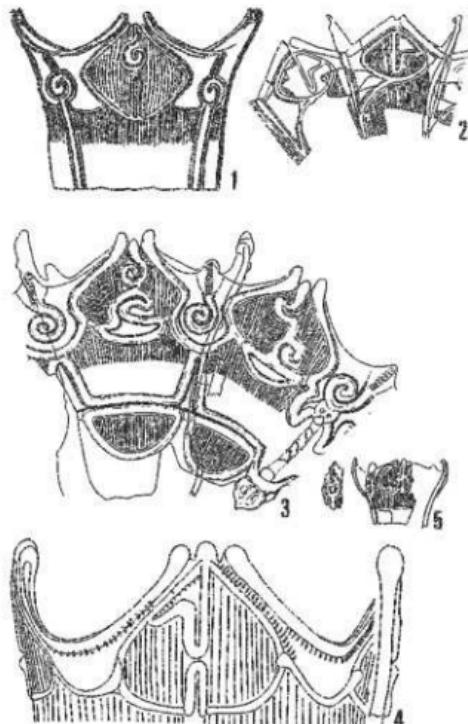
ウ 時期について

この土器について多くの研究者が時期について言及している。それを年代順にまとめたのが第2表である。これをみると大きく三通りのとらえがある。

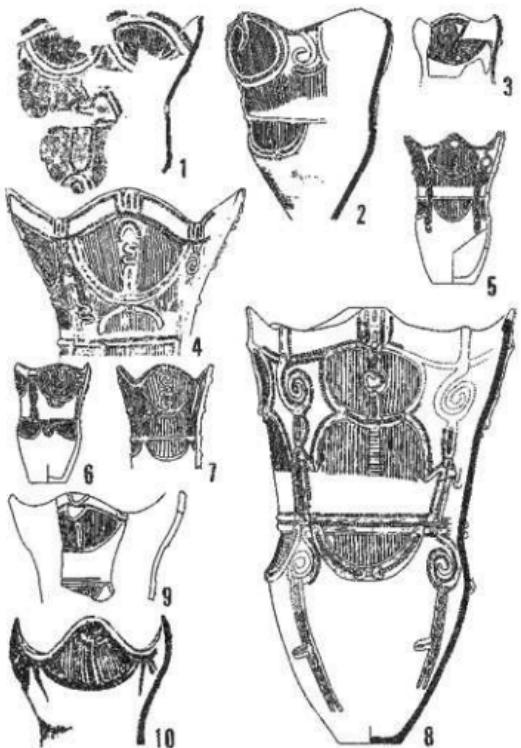
A 中期中葉の終末=井戸尻皿式

B 中期中葉から後葉への移行期（過渡期）

C 中期後葉前半=曾利I式、曾利I式併行、梨久保B式、唐草文系I期、中期後葉I期等



第4図 各地出土の波状口縁彫形文土器 2 (1/3)
1: 燐町、2・3: 荒海渡、4: ヤナバ、5: 大明神



第5図 各地出土の波状口縁彌形文土器 3 (1/3)

1:伊久間原、2・3:大城林、4:丸山南、5:梨久保、6:棚塙、7:茅野和田、8:居沢尾根、9:柿沢東、10:焼町

尻田式→横帶区画文がくずれ、彌形文はまだ残る。屈折底は殆んどみることはない。地文に継走する平行沈線文が用いられる。曾利I式→懸垂文が発達し、継走する平行沈線が文様として確立する、と説明している。この特徴が判断基準となつた。

波状口縁彌形文土器は、彌形文がみられる。縦の平行沈線がみられることと、伴出土器や屈折底のみられないこと等から、中期終末の井戸尻式III式土器に比定している。

C 中期後業Ⅰ期とする考え方は当初からみられたが、1980年以降に定着し、今日ではこの考えをとるのが普通である。しかし、研究者によって曾利I式土器（曾利I期）、曾利式土器とは区別されると梨久保B式、曾利式土器に対照して分布する唐草文系土器の最初のものとして唐草文系土器第Ⅰ期、さらに中部地方を全体的にみて中期後業Ⅰ期としたりと様々である。どれも中期中葉で

A 中期中葉の終末=井戸尻式とする考え方方は1970年代に多い。この考え方のもとになった井戸尻編年は八ヶ岳西南麓富士見町を中心とした調査の結果であった。切り合は彌穴住居址と、住居址から出土する完形土器を中心に考察された。1962年11月の長野県考古学会第一回総会で武藤雄六が発表した。この成果に立って1964年長野県考古学会第3回大会「中期縄文化諸問題」のシンポジウムがもたらされた。1965年に「井戸尻」の大冊が刊行された。この編年は長野県だけでなく日本考古学界にも大きく影響を与えた。そして一度発表されるとこれが唯一無二のものとして定着するという弊害も生んだ。

中期中葉後半の土器とその型式特徴として、井戸尻I式→横帶区画文が増加し、屈折底が発達。井戸尻II式→屈折底がさらに大きく高くふれて、その部分に彌形文がつき盛行する。井戸

はないという点では一致している。

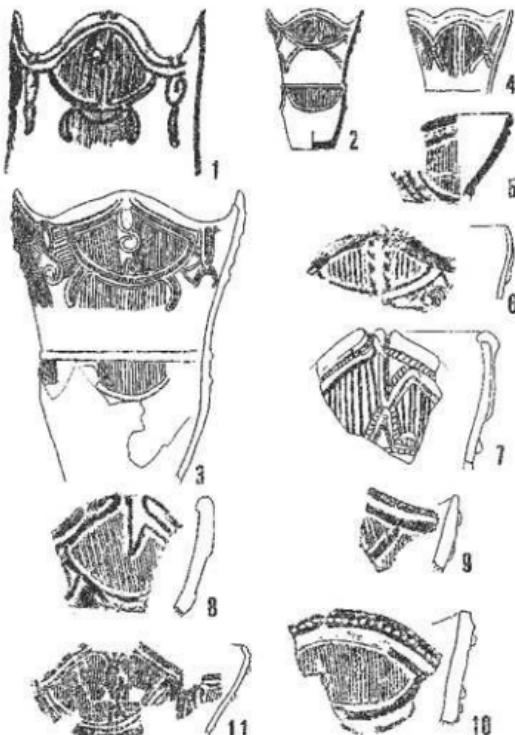
B 中期中葉から後葉への過
逸期という考えは特にこの土器
をとりあげてではないが、下伊
那に多い櫛形文土器について、
中期中葉末としたことについ
て、大勢が否定的な立場をとる
ことから過逸期を考えた。

この土器は宍形品かそれに近い形で発見されることが多く、その器形と文様で注目される。

文献の上で最初に登場するものは伊那市上木裏原遺跡の土器(7図1)で、1965年林茂樹はこの土器について、中期中葉(勝坂期)のII群退築期に入れている。胴部の櫛形文から考えたものと思われる。

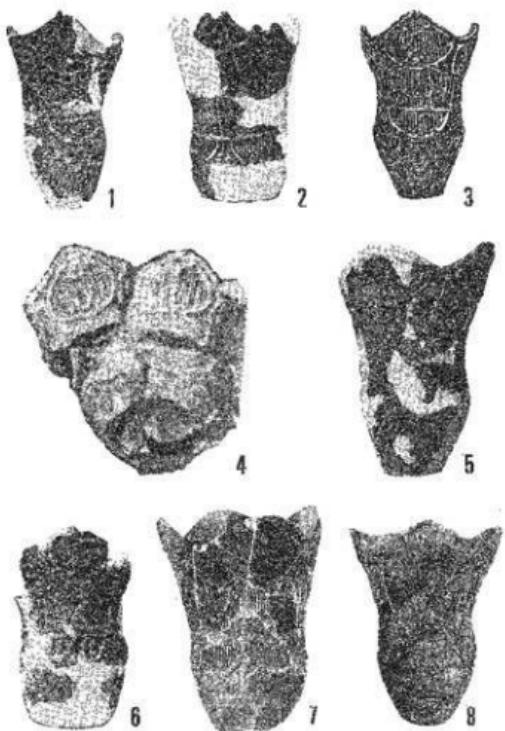
諭訪地方で最初に検出されたのは茅野市和田遺跡で、1970年の報告書で佐藤攻は中期末葉諭訪半の土器に入れている。この土器（5図7）について横形文を残すものもみられる、と説明してはとらえられていなかつ

宮坂光昭は塩尻市焼町遺跡では井戸尻III式に比定したが（文6）、2年後の岡谷市梨久保遺跡の調査では、中期後葉におき梨久保式土器を提唱した（文9）。梨久保遺跡3・4号住居址は重複していて、4号の上に3号が重なっている。この住居址覆土（底面上5~30cm）から多量の食器が出たし、30個体を図上復元または完全復元できた。住居廃絶後の投げこみ土器で、調査者はこれらの土器は3号住居址から出土したものとらえ、3号住居址を曾利I式土器、4号住居址をわずかに先行する曾利I式土器か井戸尻III式土器の頃とした。土器について、I類は施文構成から井戸尻式の影響をもつもの、II類は懸垂文の盛行から曾利式に近いものと分類した。波状口縁彫形文土器はI類A、井戸尻式土器の特徴とされる横彫文をもつ土器群に入れられている。I類ではB群（施文に



第6図 各地出土の波状口縁横形文土器4(1/3)

1: 烧町、2: 里宮、3・4・11: 下田、5: 代田、
6: 高見原、7: 大城林、8: 楠沢東、9・10: 境内



第7図 各地出土の波状口縁柳形文土器 5

1：上木裏原、2・5・6：ほろろく屋敷、3：上平村、4：塚田、7：森の下、8：中野山越

として、曾利Ⅰ式に比定される、と位置づけた。

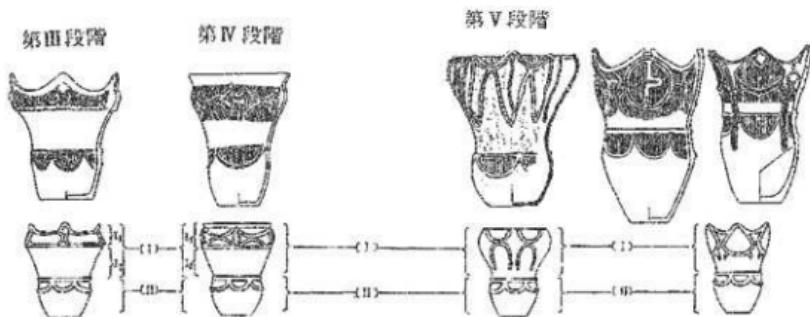
土器の出土状態、新古のある2類の中から特徴的な2群を結びつけて一型式とし、井戸尻Ⅲ式と曾利Ⅰ式との間に一型式の存在と考えながら、曾利Ⅰ式との併行を考えている。無理に中間後葉に位置づけようとしているむきが強い。古い要素というII類Aの中には柳文27のように明かに新しいのも一緒にしている。こともあり、梨久保B式は矛盾の多い土器である。

八木光則は伊那谷南部の中間後葉の土器を4期にわけている(文13)。そのⅠ期に柳形文のみられる土器を位置づけた。その中に波状口縁柳形文土器(3図1)がある。後葉にしたのは伴出土器に曾利Ⅰ式土器があるからだという。大半の土器は梨久保B式土器とは違う土器である。ここに、下伊那性の一面がもうみられていた。

末木鉱は伊那谷の土器についてまとめた(文18)。伊那谷は南北に長く、下伊那と上伊那の二つ

強い齊一性を示し、地文に縦の平行経がつき、そこに縦の帯状区画をつくり、その内部に横の平行沈線をもって充填する)が特徴ある土器で、諏訪・松本平・上伊那に分布している。柳形文土器の消滅をもって中期中葉が終るとすると、この土器は中期後葉の初期に位置する標式的な土器とされる。柳形文は古い要素を引く土器である。II類ではA・B群が特徴的で、これらも中期中葉から後葉にかけての土器と考えされていた土器である。これら2類の土器は極めて時間差の少ないので、より古い一群と新しい一群となる。井戸尻編年によると井戸尻Ⅲ式から曾利Ⅰ式に移るが、文様構成上スムーズではない。一型式の存在も予想される所である。他遺跡にある類例から中期後葉初頭に位置する土器として明確になったといえる。

II類Aと共にI類Bは区別して、中期後葉初めに位置する標式的な資料として確認され、梨久保B式



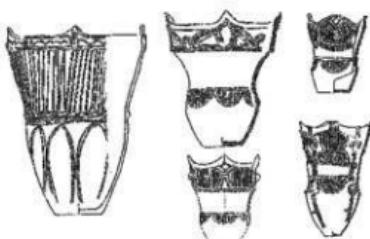
第8図 楯形文土器の変遷（三上徹也）

の文化圈が存在し、下伊那では井戸尻III式の退化型式が存在する。八ヶ岳山麓の同式と答しく考えがたく、やや後出的なもので井戸尻III末葉と考えられる。その時期は中期後葉I期とし、曾利I式よりは古い、とした。

この一群の土器は八木のI期の土器で、下伊那を特別視し、井戸尻III式の末葉としながらも、中期中葉ではないという。

長崎元広は中部高地の縄文中期後半の土器を集成したが、意識して伊那谷を除外している（文19）。その解説の中で、今まで曾利系土器としてとらえていた中南信地方の中期後半土器を曾利系土器と唐草文系土器とにわけたのが注目される。曾利系土器は口縁に沿って帯状に伸びる「横帶文」と呼ぶべき口縁文様帶と、そこから下がる胴部の腹手文が基調となり、池文に平行線文と条縞文を基本とする。また立体的な装飾がある。分布は山梨県が中心で八ヶ岳西南麓は西北端にあたる。諏訪湖盆まで強く浸透し、松本平・伊那谷には少量のみ入っている。唐草文系土器は胴部に大柄渦巻文をつけ、池文に寛括沈線による綾杉文とその変形文が基本となっている。渦巻文は東北地方に連なる文様で北方文化的な流れの中にあるといえる。分布は諏訪湖盆、伊那谷北部、松本平を核にして周辺に波及し、木曾谷から飛騨へいっている。伊那谷南部（下伊那）では分布密度が薄くなる。と説明し、どちらも伊那谷南部＝下伊那は違うというようにとらえていて、「下伊那性は意識されている。長崎は唐草文系I期に宮坂によって梨久保B式とされた一群の土器を位置づけた。そして波状口縁橢形文土器もその中に入り、これは中期前半に発達した楢形文土器の系列における最後の姿である、ととらえ、最も古い相であるとした。渦巻文につながる證拠があるとはいうものの、唐草文系のI期にこれらの土器が、曾利系I期に対比されるからといって位置づけていいものかと思う。

米田明訓は伊那谷の中期後葉の土器編年を試みた（文20）。伊那谷を諏訪・上伊那と下伊那の二地域にわけてとらえ、前者の唐草文系土器第1段階に梨久保B式をあげている。この時期は許草文のモチーフがまだ成立していない時期であり、櫛板式土器の特徴をまだ残す時期でもある。このC型式に波状口縁橢形文土器をあげている。下伊那は楢形・文様とも上伊那とは全く違い、II様式文様



第3図 平出II類A・下伊那型御形文土器・波状口縁彫形文の土器比較

帶に細隆線文による装飾があり、腹下半に横形文がみられる。これを細隆線文土器と呼び、勝坂期終末の特徴を繼承し、井戸尻式終末の特徴が伊那谷に流入して成立したものである。このように勝坂式の特徴を強く残存したのは、周辺地域土器群の手法に対して集団が甚だ拒否的な態度を示した結果だ、と説明し、下伊那に加曾利E式や東海系の土器がないのがその例証である。という。さらに、第1段階の土器と第2段階の土器には特徴的にかなり大きなギャップがある。と説明している。

文化の残存＝停滞ととらえるよりも、加曾利E式土器より古いと位置づけられなかつたのだろうかと思う。

唐草文系土器の第1期の土器が特異であることは認めながらも、この位置づけを多くの研究者は認めていた。が、田中清文は中期後葉の土器編年を検討した中で（文25）、唐草文系土器第1期の土器はII期の土器とは異質性が強く飛躍が大きいから、唐草文系土器から除くべきだ、という。田中はこの第1期の土器群を古期と新期のII期に細分し、前者を井戸尻III式の影響をうけた土器とし、時期は中期後葉1期においた。このような中期中葉の伝統をもつ土器の後、東北地方からの影響で唐草文系土器が発達したという。

諏訪郡原村沼沢尾根遺跡22号住居址からは56個体の器形がわかる土器が出土し、土器の廃絶住居への抜けまでの典型である（文21）。土器片も含めて、曾利I式土器が始んどであるが、井戸尻III式、曾利II式も少量ある。曾利系土器分布圏内の姿であるが、その中に唐草文系土器がある。波状口縁彫形文土器は（3図6、5図8）唐草文系土器深鉢に入り、器形ではD形態に入っている。この唐草文系土器の中にも新旧の要素があって、器形Dは井戸尻III式期の系統を直接引いて古手である。中でも頸部に無文帯をもつものはより古い。口縁部に縱位の隆帯をもつものも古い、という。胎土でみると曾利系土器と唐草文系土器とは違っており、地域を異にする所で製作され供給されたものである、と説明している。唐草文系土器には井戸尻III式の要素は曾利I式期まで継承され、D器形は八ヶ岳山麓では井戸尻III式ではほとんど消滅する器形である。本遺跡では唐草文系土器文化圈の影響が強いので、曾利I式土器群の中まで認められた、ととらえたおり、曾利II式土器群の中には典型的な唐草文系土器が少ない事について特に説明していないが、この期は同土器の地域差が一層濃くなる、と説明している。住居址からの出土状況をみて、曾利系土器には新旧の2分が考えられ、古い要素の土器群には曾利系が多く、新しい要素の強い土器群には唐草文系が多くなっている。この新しい段階に唐草文系土器の供給量が増大する傾向は、八ヶ岳西南麓における唐草文系と曾利系の文化圏自体の拮抗状況を物語るものといえよう。ととらえ、曾利II式期には加曾利E系の影響が明瞭である、という。唐草文系土器の古い要素の土器はどのようにとらえられるのだろう。その点がはっきりしない。

第2表 波状口縁櫛形文土器の時期

	遺跡名			文献
1965	上木裏原	林 茂 宏	中堀(勝坂期) 田村(退盛期)	文3
1970	焼町	宮 坂 光 昭	井戸尻III式(中期中葉の終末)	6
1970	茅野和田	佐 麻 攻	中葉末期前半	7
1971	長塚	林 賢	井戸尻III式	8
1972	梨久保	宮 坂 光 昭	曾利I式併行の梨久保B式	9
1972	鳴尾天白	鶴 篠 康 呂	勝坂式土器終末	10
1974	大城林	氣 賀 沢 進	井戸尻IV式	11
1975	荒神山	高 桑 後 越	井戸尻III式	12
1976		八 木 光 刃	中堀後半第1期	13
1977	丸山南	氣 賀 沢 進	井戸尻III式	14
1978	荒海渡	竹 内 稔	井戸尻III式から曾利I式移行期	15
1978	伊久間原	佐 麻 攻	中葉中葉末(移行期)	16
1978	里宮	神 村 遼	勝坂式土器終末期	17
1979		末 木 健	井戸尻III式の進化型式で曾利I式併行	18
1979		星 嶽 元 広	唐草文系Ⅰ期	19
1980		米 田 明 調	唐草文第一段階	20
1981	居沢尾根	島 四 哲 男	曾利I式に伴出する唐草文系土器	21
1982	ヤナバ	原 明 芳	井戸式期のおわり	22
1984	前田木下	平 林 彩	終本平IX期(曾利I式併行)	23
1984	柿沢東	鳥 羽 斎 彦	曾利I式	24
1984		田 中 清 文	中期後半第1期	25
1986	梨久保	造 木 幸 雄	中期後葉I期	28
1987	平出	鳥 羽 斎 彦	曾利I期	31
1987	高見原	氣 賀 沢 進	曾利I式	32
1987	下田	大 江 卓	中期中葉(井戸尻式)	33
1988	大明神	新 谷 和 孝	曾利I式	34
1988		野 村 一 海	中期後葉	35
1989		神 村 遼	過渡期	36
1990	反日	氣 賀 沢 進	中期後葉I期	37
1990	棚畠	守 矢 昌 文	中期後葉I期(曾利I式)	38
1991	垣内	田 中 彩	曾利I式	40
1991	ほうろく屋敷	大 沢 哲	曾利I式	39
1992	大村家田	高 美 俊 雄	曾利I式	41
1992		尾 間 幸	井戸尻式	42

梨久保遺跡が昭和60年まで11回調査され、その報告書が刊行された（文28）。宮坂光昭が描寫した梨久保B式土器の好資料は出なかったが、まとめの中で唐木孝雄が中期後葉土器についてふれており。中期後葉をI～IV期にわけ、I期に梨久保B式土器、II期に腕骨文を垂下させ間を縦杉状の沈線でうめるもの、III期に胴部文様に陰線で大柄湯巻文（唐草文）を描き間に斜位あるいは縦杉状の沈線文を充填するものの、とその特徴を、平行沈線文→腕骨文→湯巻文ととらえたが、II期からIII期のスムーズさにくらべると、II期は特異である。それについて、I期は先行する井戸尻式を祖型として曾利式とは異った土器群（梨久保B式）が成立する、と説明している。

三上徹也は中部地方を中心に縄文中期中葉から後葉への変遷をまとめている（文29）。土器の持つ属性のうち器形・文様・文様構成に視点をおいて検討した。波状口縁櫛形文土器はF形態に入れ、キャリバーハー状の器形をなし、「櫛形文土器」と呼称されているものである。この器形は中葉第Ⅲ段階に、平出第三類Aを祖源とし、曾利式土器まで継承される。文様は口縁部に人体文が多くみられ、曾利I式になると、1つは上半分が腕で輪をつくるように円くつながり、下半分の足が極端に短くなる。もう1つは上下の腕と足の大きさが等しくなり、上下対称となるもので、これは梨久保B式の中に主体的に残る（第8図）。脚部には必ず施される櫛形文があり、中葉から後葉にかけて変化なく、長期間継続され、このように寿命の長い基本文様単位も特異である、と説明している。まとめとして、井戸尻式土器＝中葉土器の型式内様は多様であったが、その変化に一定の方向性をもち、やがてその多様性の中から伝統的に続いた要素により曾利式という齊一化された土器となつたことが理解できた、という。

ここで気になるのは、扱かった地域が八ヶ岳西南麓におけるとしながら、その地域からはずれた諏訪湖盆や上伊那まで対象にしていること、またF形態に限ると、平出第三類Aから発生した第Ⅲ段階の櫛形文土器が初源というが、平出第三類Aは八ヶ岳西南麓の中に埋入された土器であり、第Ⅳ段階の土器も搬入品として考えられる。櫛形文土器の変遷については武藤兼六がまず指摘した（文2）。それ以後資料増加はあるが、武藤のとりあげた上器は三上とは違っており、より井戸尻式である。とくに三上のいう曾利式期のものは全く違う。三上のこの期のものは全て波状口縁櫛形文土器であり、器形・文様ともV段階のものと違っている上に、この土器は三上がいう齊一化された曾利式土器ではなく、多くの研究者が唐草文系土器に入れている搬入品の土器である。三上は唐草文土器の成立にふれ（文27）、その中で、井戸尻式がその終末に曾利式へ変化する一方、諏訪湖周辺では地域色の強い土器、すなわち梨久保B式土器として分離できうる一群の土器となつたことが知られている、ととられた。その梨久保B式の中に含まれている土器である。

仲村は櫛形文土器の中にある薄手櫛形文土器についてふれている（文36）。直接、波状口縁櫛形文土器については言及していないが、櫛形文土器には器厚の厚手櫛形文土器と薄手櫛形文土器がある、前者は勝坂系土器で八ヶ岳西南麓に分布し、後者は平出第三類Aに系譜をもつ下伊那型櫛形文土器として区別し、伊那谷、諏訪湖盆、松本平に分布するとし、両者の地域差を指摘した。この発展、継続についてはふれていない。

茅野市棚塚遺跡は縄文中期の集落の全容知る調査であった。この遺跡出土の中期土器について守

矢昌文がまとめている(文38)。中期後業の土器でも初期の土器は多くの部分で中期中業の土器群の影響を色濃く残している。その点で中業と後業を分類するに問題となる点多々あると思われる…とのべ、土器の上で安易に区別することへの疑問を投げかけており注目される。後業の土器を地文により、沈線を地文にもつ唐草文系、糸線を地文にもつ曾利系、縄文を地文にもつ加曾利E系の三系においてとらえている。波状口縁彫形文土器(3図5、5図6)は中期後業IのII群1類とし、この土器は他群に比べ器厚が薄く、胴部に彫形状の特徴的なモチーフをもち、器形も深鉢A₁しかない。中期中業IV(藤内II式)のXVII群に類似関係を求めることができる。という。XVII群はXVIII群(中期中業III 藤内I式)の平出第III類Aの器厚が中指手で胎土中に長石粒を含有する特徴に類似する一群で、口縁部と胴部に施文が行われ、胴部に彫形状の特徴的なモチーフをもつ。器形は深鉢A₁しかない。この土器は神村のいう下伊那型彫形文土器である。

V 今後への課題

波状口縁彫形文土器は特徴的な器形と文様と文様構成をもち、強い規制の中でつくられた土器である。分布(2図)からみても上伊那・諏訪湖盤・松本平南部・木曾谷に中心があり、中期中業の平出第III類A、下伊那型彫形文の分布と重なり、中期後業の唐草文系土器の分布とも重なるので、一つの系譜の中にあることは予想できる。この上に立って今後の課題は次の点があげられる。

①波状口縁頂部のあり方で、A・B 2形態に分類したが、口縁部文様帯のあり方にも差異があるのでそれを分類して細分(地域差・時間差)したい。

②伴出土器を検討することで、この土器と共に器種構成を明確にしたい。

③伴出土器の中で収入されている他系統の土器を明確にし、時間的な時期を明確にしたい。

④この土器の發出地域での伴出土器を明確にし(③とともに)、さらにこの土器がどのようなあたりで収出されているかも明確にしたい。

⑤井戸尻田式土器とのつながりが多く研究者からいわれているので、井戸尻田式土器の内容と広がりを明確にし、系統的なつながりを明確にしたい。

⑥このようにして、波状口縁彫形文土器と共に器種構成と系譜と時期を明確にした上で、この土器の次への発展というか、沿革を明確にしたい。

⑦このように特徴的な波状口縁彫形文土器が製作された必要性を、この器形そのものの系譜とともに器種構成の中からおって、この土器の存在価値を明確にしたい。

(本文は1992年の段階でまとめたものであるが、諸々の事情で刊行がおくれて今日となった。その間に新資料や関係する論文もあるが、後日の再考でふれたい。)

参考文献

番号	年	題名(論文名)	著者
1	1965	藤森栄一編 中野龍文土器の蒸器—彫形文土器の変遷と窓跡	井戸尻 信濃17-7
2	1965	武蔵産六 (林茂樹)	上伊那郡跡2歴史編
3	1965	鶴文土器	長野県下伊那郡那時代田遺跡・同松川町庚中原遺跡
4	1969	伴信夫他	湖内流域
5	1969		長野県下伊那郡市郷町遺跡調査報告書
6	1970	塙尻市教育委員会	茅野市和田遺跡緊急発掘調査報告書
7	1970	茅野市教育委員会	長綱遺跡
8	1971	岡谷市教育委員会	梨久保遺跡
9	1972	八	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告上伊那郡飯島地内その1
10	1972	長野県教育委員会	大城林・北方I・II・源原・射殿場、南原、横前新田、堀木、北原、富士山
11	1974	駒ヶ根市教育委員会	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告駒ヶ根市その3
12	1975	長野県教育委員会	御嶽神社黒宮遺跡発掘調査報告書
13	1976	八木光則	伊那谷中部繩文中期後半の土器群とその終末
14	1977	駒ヶ根市教育委員会	長野県高崎文土器集録第1集
15	1978	桝川村教育委員会	伊久間原
16	1978	西木村教育委員会	御嶽神社黒宮遺跡発掘調査報告書
17	1978	主婦村教育委員会	伊那谷中部繩文中期後半の土器群とその終末
18	1978	木本健	長野県高崎文土器集録第1集
19	1979	長崎元広	南信太尾川沿岸における縄文時中期後半の土器調査
20	1980	木田明訓	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告原村その4
21	1981	長野県教育委員会	桝川村ヤナバ遺跡発掘調査報告書
22	1982	桝川村教育委員会	松本市前田木下遺跡
23	1984	松本市教育委員会	駒ヶ根古墳・柿沢東遺跡・大原遺跡・中島遺跡
24	1984	塙尻市教育委員会	伊那谷繩文中期後半土器羣年への展開
25	1984	田中清文	天竜川流域における唐草文土器の検討
26	1985	小林守吾	磨有文土器の成立とその分布
27	1986	三上徹也	柴久保遺跡
28	1986	岡谷市教育委員会	中部・西関東地方における縄文時代中期中業上縁の変遷と後業土器への移行
29	1986	三上徹也	長野県考古学会誌51
30	1986	神村造	下伊那型彫形文土器
31	1987	塙尻市教育委員会	平山遺跡
32	1987	駒ヶ根市教育委員会	高見原遺跡
33	1987	河合村教育委員会	下田遺跡
34	1988	大桑村教育委員会	大垣神遺跡
35	1988	長野県	長野県史考古資料1-4(遺跡・遺物)
36	1989	神村造	下伊那の縄文中期文化
37	1990	駒ヶ根市教育委員会	反目、遊光、嫁村、小林遺跡
38	1990	茅野市教育委員会	棚畠
39	1991	明科町教育委員会	はうろく尾敷遺跡
40	1991	高山市教育委員会	垣内遺跡発掘調査報告書
41	1992	松本市教育委員会	松本市大村塚田遺跡
42	1992	岐阜県立博物館	因縁承認のあけほの

石器の研究法

—報告文作成に伴う観察・記録法①—

町田 勝 則

I はじめに

1991年県埋蔵文化財センターは10周年を迎えた。62年に長野県考古学会が設立されて以来、30年の歳月を重ねた結果と考えると実に長い歴史の駆け足である。82年当初は8名の調査研究員で可動したセンターも、現在では中央自動車道・上信越自動車道・オリンピック道路・北陸新幹線と相次ぐ大規模プロジェクトを担う一大組織となった。年間の調査延面積は40万m²に及び、山地・丘陵・沖積地といかなる立地条件も、集落・河川・水田といった様々な生活痕跡を、また先史器から近世に至るまであらゆる時代を手掛けている。結果として、これまでにない貴重なそして膨大な考古資料を抱え、学術的に価値ある資料を記録・保管し、学会に提供する任務が山積みされる状態となった。

ところが年間の整理対象遺跡は4遺跡ほどで、その規模に関わりなく1遺跡1名の研究員と補助員複数名の配属が最大限であり、「日本考古学・人類学史上最大の発見」と讃美された明科町北村遺跡もこうした中で整理事業が計画され実施されていった。90年には発掘の急務が1名の研究員をも駆使するまでに達し、整理の中断さえ余儀なくするに至ったのである。

本格的な整理作業の見直しは、91年長野調査事務所に整理課が設置されて以来、北村遺跡の報告文作成とともに検討され、現在もなお断続改善がなされている。92年には写真専従の研究員が配置され、整理補助員の育成と技術力の向上を計る目的で「整理作業学習会」が設けられた。第1回が遺跡調査の手順について⁽¹⁾の講習であった。

こうしたセンターの歩みの中で、阿久佐遺跡以来、膨大な量を収納する石器資料にも漸く整理の手が入り、発掘調査の合間をぬって担当研究員が配置されるようになつたのである。93年には遺物整理の手順—石器編—⁽²⁾の講習と石器研究法—報告文作成に伴う観察・記録法—⁽³⁾についての研修会が設けられ、北村以後の諸遺跡に対し整理工法の指針が示されたわけである。

本稿は以上の経緯から、埋蔵文化財の整理作業上の見地で、石器資料の観察・記録法について検討した手引きである。

- | | |
|--|--------|
| 註1 平林 彰「遺跡調査の手順について」 第1回整理作業学習会資料 | 1992.6 |
| 註2 町田勝則「遺物整理の手順—石器編—」 上田事務所内研修会要項 | 1993.1 |
| 註3 町田勝則「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法—」 第8回所内研修会資料 | 1993.3 |

II 発掘と整理

発掘では【取り上げ台帳】⁽⁴⁾の作成に始まり、材質による〈遺物の仕分け・梱包〉が行われる。発掘が終了すると冬期整理作業が実施され、図面・写真などの基礎資料が整理される。この間に雨天などを利用し、時には冬期整理と併行して〈遺物の洗浄〉〈器種の類別〉〈遺物の注記〉作業が実施され、【収納台帳】が作成されて基礎整理第1段階を終了する。本格的な整理作業は第2段階から導入され、器種ごとに基礎データ化〈属性の記録〉が実施され、【属性表】が作成される。同時に器種別に〈物体の記録〉が行われ、【実測図・写真】が作成される。この過程で基礎整理が終了し、遺物の記録化が完成、研究保管用の検索が可能となる。第3段階以降は報告文作成に入り、実際に基礎データの活用〈属性の分析〉がなされる。石器の研究には器種としての個別的視点と群(組成)としての総合的視点があり、属性値は目的に応じて解析され、【グラフ・表・分布図】としてまとめられる。すなわち分析とは、石器個々が分類作業によって機能や用途あるいは地域性・時代性を語る考古資料として、研究的価値が与えられることであり、そこに現時点での研究成果の大成が集約されるのである。第4段階はこうして導かれた研究的価値を遺跡調査の成果としてまとめる〈分析を表現する〉ことで、必要なデータを図版(トレース)し、【図版】を作成、【文章】の執筆に至る。

註④ 本文中の〈 〉は整理作業の項目である。他の記号は、長野県埋蔵文化財センター業務として【 】は永久保管される記録を、〔 〕は報告文刊行後10年間保管される記録を指す。

III 研究の手段

石器の研究手段にはa発掘・整理の成果・b資料調査・c実験の3種を挙げることができる。この内、一般的に用いられているのはaであり、時にbが併用され、cは殆ど選択されない。93年の研修会資料⁽⁵⁾ではA発掘調査に基づく研究方法とB実験に基づく研究方法に大別し、Aをさらに1発掘に関わる方法「調査法」・2報告文作成に關わる方法「整理法」に細別した。2には観察・記録法と分析法の2者があり、前者を①観察と計測・②図化と撮影・③出土状況と分布の3つに区分した。今回の報告は①に該当するものである。

IV 報告文作成に伴う研究方法

☆観察と記録法

石器のどこをどのように観察すればよいのか? 観察は特徴を導く手段であり、特徴とは石器の持つ属性である。観察可能な属性を端から列挙することは、石器の分析にとって必要不可欠な視点であり、研究の出発点である。しかしながら属性の観察が、具体的には分類作業のために行われる要素の抽出である以上、分類の目的が定まって初めて効果的に働く事項と言える。研究成果とはそ

の点を明らかにすることであり、論文がこれにあたる。では実際に資料提供を行う報告文はどうであろう。基礎整理の第2段階⁽³⁾で、属性列挙はデータの収集上必要である。しかし報告文を作成する段階では、研究成果を梗概し、闇雲に根拠のない属性値を提示することは避けねばならない。何故ならば、報告文は資料の研究的価値を集約し表現したものであって、基礎整理の検索カードを提示するものではないからである。

本論では、これまでの研究成果から分析された属性とこれから分析可能な属性を、また研究史的に記載されてきてても現時点では活用できない属性について整理する。研究成果は個別研究として発表された論文に基づき、属性をA) 積極的に記述必要・B) 記述内容に検討が必要・C) 現在は有効な活用なしの3項目で表示する。また実際例として長野県で発刊された報告文を基に、記載された属性の頻度を甲) 最も一般的で精度が高い・乙) 一般的に記載・丙) 片寄りのある記載・丁) 僅かに記載・ノ) 記述されていないの5段階で示すことにする。さらに属性の抽出にとって欠くことのできない計測方法については、石器部位の名称と計測点につき図示する。

以下、観察の視点と計測法について石器の器種ごとにまとめるが、まずは使用する機材を紹介し、その適用を整理しておく。

1. 観察の視点と器具⁽⁵⁾

A. ルーペ 石器の製作と使用の痕跡を観察する道具。製作痕跡には人工的な削離と敲打および研磨痕があり、使用痕跡には衝撃や器面の変形として微細な削離と敲打および摩滅痕・破損などがある。

例) ピクセンルーペ・コクヨメタルホールダーなど

B. 実体顕微鏡 ルーペと同様な目的で使用する道具。ただし実体顕微鏡は付属品を組み合わせることにより、一段高い性能を発揮できる。例えばレンズの組み替えにより様々な倍率で、しかも高倍率化(～×100前後)を計ることができ、描画装置を取り付ければ観察時の倍率での模写が可能となる。もちろん映像装置による画面表示や撮影装置による写真も可能である。したがって製作の痕跡よりもむしろ使用痕跡の観察に適する。

例) ニコン実体顕微鏡など

C. 金属顕微鏡 実体顕微鏡と同様な目的で使用する道具。石器表面のきめが鮮明となり、特に光沢や線状痕といった使用痕跡の観察に優れている。レンズを組み替えれば、実体顕微鏡よりも、さらに高倍率(～×400前後)な観察が可能であり、画面表示や写真撮影もできる。

例) オリンパス金属顕微鏡など

D. 走査電子顕微鏡 実体・金属顕微鏡と同様な目的で使用する道具。焦点深度が大きく、高倍率(～数千倍)化が可能。光沢や線状痕はもとより、石器表面の付着物や残留物(タール・コーングロス・コラーゲンなど)の観察に優れている。

例) JSM-5400LVなど

E. 拡大映像装置 上記A～Cまでの目的と同様。最も大きな特長は、カメラを移動すること

により資料のどんな部分でも、瞬時に画面上（モニター上）で観察できる。レンズを交換することにより倍率の操作も可能である。

例) Microwatcher VS-30H・スーパー・アイ C2847など

2. 計測の視点と器具⁽⁶⁾

- A. ノギス・キャリバー 石器の長さ・幅・厚さを計測する道具。全体の大きさ（最大値）の測定にはノギスが最適であり、機能部あるいは使用痕跡にはディバイダーを用いるのも良い。また凹石や石皿の機能部厚にはキャリバーが適する。
 - B. 定規 Aと同様目的で使用するが、計測値を実測図面から起こす場合に用いる。直定規・三角定規などがあり、テーパーゲージなどは凹部の深さを見積るのに適する。
 - C. 分度器 刃の角度を測定する道具。勾配定規を用いるのも良いが、厚紙に切り込みを入れた簡易測定具を作成しても十分適応できる。またB同様に実測図面から起こす場合は、普通の分度器でこと足りる。
 - D. 計量器 石器の重さを計る道具。石器の大小に合わせ、上皿天秤・各種の天秤計りを使い分けるのが良い。剝片石器には電子天秤が有効である。
 - E. 面積測定器・プラリメーター 石器の表面および使用面の大きさを測定する道具。磨石や石皿などの使用面の面積表示に適する。
- 例) テシプラン220Z/PZなど

註5・6 観察・計測用の器具は長野県埋蔵文化財センターで使用しているものを例示した。商品としての宣伝文書など毛頭ないので、機能が同様であればどこのメーカーでも良い。

3. 記録上の用語

観察の視点は、各器種ごと1法量・2機能部値・3製作技術・4石材の順に記述する。分類の柱である形の属性は、個別的な研究が十分に整理されておらず、観察者個人の主觀に左右される部分が多い。ひとまずは属性表の項目から除き、後日器種別の研究史をまとめる機会に要点を整理したいと思う。形態的特徴について扱った文献も今では省いている。以下、観察上の用語につき説明を与え、本題に入る。

法量とは資料全体の大きさを指し、最大の値で表示する。欠損ある場合は（ ）付けて記し、計測不能な例は（—）で示すのが良い。法量を全体値と呼称すれば、直接機能に関係する部分が機能部値となる。機能に関する部分とは、石器が道具として対象（物）に働きかける部位のことである。器種それぞれに異なる部位（先端部・刃部・磨面など）で観察し、記録を行う。観察部位の用語は器種ごとに相違があるので、各項目の中で説明を与える。機能部の観察にとって、欠かすことのできない視点に使用痕跡があり、IV-1で示した器具で観察を行なう。使用に伴う観察の種類と観察法に関しては幾つかの成果が発表されており、それらを参考にすると良い。⁽⁷⁾損傷の中で欠損（破損）については、部位としてその位置を、状況として割れ方

(力の方向)を記録する。製作技術は素材から調整加工に至るまで製作工程に関する技術一般を観察する。ただし形態の属性に関しては、今回観察表から除いたので、これに関わる製作上の属性は同様に別項で扱う。したがって製作の初期段階、素材の状態が主な対象となる。素材とは石器以前の石の状態あるいは剥片の様相を指し、採石と転石(河原石)の区分から、剥片と疊さらには縦長・横長剥片の区分までを扱う。また表皮に相当する部分として自然面の觀察を行う。一般的には原礫面を省うが、本来の意味とは別に風化面や節理面を指す場合がある。石材の觀察では基本的に岩石名(石質)を扱い、色調や構成粒子の大きさを問題にすることもある。觀察には偏光顕微鏡を使用し、組織(石基や筋脈、斑晶なども含め)の觀察から岩石名を確定する。

以上4つの視点から石器は觀察・記録される。視点の有効性については、これまでの個別研究の成果を基に最近の事例(論文あるいは報告文=発掘調査報告書)の中から任意選択し、器種ごと項目末尾に例示した。また蛇足ではあるが、石器研究上重要な文献と觀察・記録に優れた代表的な報告文を紙数の許す限り以下に示しておく。

註7 阿子島香『石器の使用痕研究』考古学ライブラリー 56	1989
S.A.セミヨーノフ・田中恭抄訳「石器の用途と使用痕」考古学研究56号	1968
阿子島香『マイクロフレイキングの実験的研究』考古学雑誌第66巻4号	1981
斎藤洋也『真岩製造器の実験使用痕研究—ボリッシュを中心とした機能推定の試み—』	
考古学雑誌第67巻第1号	1981
岡崎里美『石器使用痕ボリッシュ研究の疑問』季刊考古学第29号	1989

文献

小林辰男『縄文時代の石器研究史(一)』信濃房25巻第9・10号	1973
麻生優他『日本の旧石器文化 I 總論編』	1975
森本強化『日本の旧石器文化 5 旧石器文化の研究法』	1976
山中一郎『技術形態学と構造形態学』考古学ジャーナルNo167	1979
山中一郎『石器研究の発展』考古学基礎論第2号	1980
竹内俊樹『石器研究の方法とその見通し』考古学基礎論第2号	1980
加藤晋平・越丸俊明『図解 石器の基礎知識 I・II』	1980
角木達之助『図解 石器の基礎知識III』	1981
戸沢充利他『縄文文化の研究 I 進歩と技術』	1983
阿部朝衛『縄文時代石器研究の視点と方法』法政考古学第10号	1985
山田昌久『縄文時代における石器研究序説』『編集日本原史』	1986
竹内俊樹『石器研究法』	1989
大工原豊『縄文時代の石器研究について—石器群研究を中心として—』群馬文化第220号	1989
戸沢充利他『石器と人類文化』季刊考古学第35号	1991

報告書

宮城県教育委員会『上保沢遺跡 東北自動車道遮断調査報告書!』	1978
青森県教育委員会『絶納遺跡(2)』	1980
長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5』	1982
富山県教育委員会『北陸自動車道遮断調査報告—猪口町製5— 境A遮断石器編』	1990

新潟県教育委員会 「関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡」

1991

長野県埋蔵文化財センター 「長野県中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書II 北村遺跡」

1993

☆実践

1. 石槍・石鎌 (第1表、第1・2図)

1. 法景は槍の穂先や矢じりの大きさ（または柄の大きさ）を推定する要素であり、道具の破壊力を考察する手段である。一方で時期的な差異や用法の違いを示す場合もあり、剥片の分析値と比較することで、製作法の推定復元にも役立つと考えられる。計測する4項目いずれの属性でも比較は可能である。

長さや幅などの数値から具体的に推定される機能上の差異を説明した論考は少ない（文献1・2）。形態と時期・地域的な様相に関して扱った例（文献3～6）や出土状況の被覆を含め用法上の差異を考察した例（文献7）、剥片の法量と比較し製作方法に言及した例などがある（文献8～14）。

2. 機能部は槍や鎌が器種として成立（区別）できる要素、すなわち道具として成り立つうる製作技術上の特徴を端的に表現する部分であり、先端部を中心に基部・側刃部の観察を行う。先端部については長さ・幅・先端角・使用痕跡・再生の有無を、基部では抉りや茎の有無、それらの長さや幅（湾曲の度合い）、装着痕跡（付着物）・形態、側刃部では湾曲の度合いや形態を観察する。

先端部の・・・機能を遂行できる値で、装着の保持を推定することのできる属性。長さと幅の最大長さと幅 大値で測定する。

ex) 計測は石槍・石鎌の重心を求めて、これを通る横断面を軸とし、これより先の長さを計測する。

先端角・・・器種の大きさを規定するひとつの要素で、2つの側刃（部）で形成された先端の角度を計る。

使用痕跡・・・使用と再利用の有無を考察する手段。先端部の衝撃痕・再生行為の有無を観察する。と再生 衝撃痕には小さな破損と欠損があり、それぞれに有無と部位・種類を記録する。

基部の・・・装着法と役割力を考える要素であり、抉りや茎（あるいは突出）の有無、またそれらの長さや幅（湾曲度）を測定する。

ex) 基部末端の最大幅とこれに直行する縁分の最大長で計測する。抉りや突出の指數（長さ／幅×100）で表示してもよい。指數が-1以上を凹基、+1以上を凸基と呼ぶのが一般的である。

装着痕跡・・・装着の痕跡と接着剤などの付着物について、範囲と部位・種類を観察する。付着物では物質の鑑定（タール・漆など）が必要である。

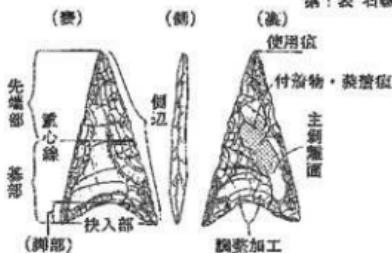
基部（側刃）・・・時期と地域の特徴を表現する部位であり、形態上の観察・種別を与える。大別として、基部の抉り指數から導かれた形態区分は最低限行いたい。

機能的な側面についての積極的な論考は殆ど行われていない。属性の観察法に関しては、先端部・抉り部（湾曲度）の計測法（文献15・16）や基部の形態的な呼称法（文献4・17）についての提示が幾つかある。使用痕跡

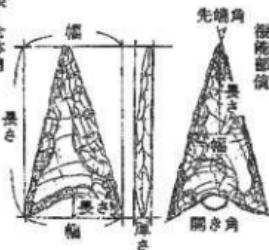
△=種類的に記述が必要 B=記述内容に検討必要 C=現在は有効な活用なし
○=機能が高い エー=一般的に記載 円=片持りある記載 ハ=確かに記載 ×=記述されない

番号	法 葉 (最大達)				被 無 部					
	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	長 さ (cm)	幅 (cm)	先端角 (度)	抉り長 (cm)	抉り幅 (cm)	茎 長 (cm)
例1	2.2	1.2	0.2	9.4	1.1	0.8	33	0.3	1.2	—
2										
A 甲										
B ×										
B 丁										
B X										
B 丙										
B 丁										
B 乙										

第1表 石器の属性表



第1図 石器部位の名称



第2図 石器の測定箇所

は審査度の実証的な観察〔文献18〕と再びに溝しての論考〔文献19〕が発表されている。また剥落痕では剥離面上の隙縫のつぶれが観察されているが、実証的な痕付けにやや乏しい〔文献20-21〕。付着物については東日本での報告文中に散見でき、詳細に固化されていることがわかる〔文献22-23〕。欠損の観察は部位を打脱石斧の方法から、状況では先上締の観察法〔文献24〕を一般的に採用している。

3. 製作法は石核および剥片の分析と一体を成すもので、素材となった剥片を読み取り、製作技術の一端を考察するものである。自然面の有無や剥片の形状（縦長・横長など）を観察する。剥片の法量とは、業材時の長さと幅（剥片剝離軸の長幅）で比較するのがよい。具体的な剥離方法（順番や切り合）については、実測図で表現できれば特に記述の必要はないと思われる。

製作法には、剥片の分析とともに加工過程を考察した例〔文献8~14〕や剥離断片の剥離性を読み取ろうとした例〔文献25〕などがある。しかし一般には石核や剥片の分析が乏しく、統括的に取り組んだ論考は少ない。

4. 石材の種類は在地であるなら入手活動に伴う仕事量を、限定期限なら交流ないしは行動の範囲を推定する要業である。したがって一般的には材の産地を問屋とするものであるが、規制や選択・嗜好性を追究していく場合には、色や質を観察する必要もある。

文献

1. 工藤竹久「北日本の石槍・石鎌について」北奥古代文化9号 1977
2. 鈴木道之助「(1)尖頭器」「四錐石器の基礎知識III 繩文」 1981
3. 上野性也「東日本周文化石器の大きさについての比較研究」考古学論誌第49巻第2号 1963
4. 佐原 善「第四章第一節 石器」柴田書店 1964
5. 神村 達「石鎌と統計(1)」長野県考古学会誌23・24号 1976
6. 佐々木利「石鎌における時間的変遷の様相—北上川中流域の繩文時代前・中期を中心として」 法政考古学第7号 1981
7. 同村道雄「繩文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」東北歴史資料館研究紀要第5巻 1979
8. 片岡 雄「いわゆるつまみ形石器について—刺孔製作工程に関する覚え書き—」 古代文化第22巻第10号 1970
9. 田中美司「繩文時代における剥片石器の製作について」埼玉考古第16号 1977
10. 町田勝則「繩文晚期有茎式鎌に関する一試論」土曜考古第11巻 1986
11. 鈴木俊成「繩文時代の石鎌について」新潟考古第3号 1992
12. 田中美司「付留 繩文時代の剥片石器製作」風早遺跡 1979
13. 寺村光晴仙「射撃場遺跡における石鎌製作工房とその考察」旗峰崎遺跡 1979
14. 鶴田典昭「宮崎遺跡の石鎌について」宮崎遺跡 1988
15. 平口哲夫「石鎌類」富田町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅰ 1987
16. 町田勝則「石器 大岡村豊沢渡跡表探の資料について」長野県考古学会誌61・62号 1991
17. 赤堀英三「石器研究の一方法—石鎌に関する二、三の試み—」人類学雑誌第44巻第3号 1923
18. 御堂島正「石鎌と有茎頭器の衝突割離」古代第92巻 1991
19. 三上徹也「繩文時代における「完成品」の概念について—石鎌を例とした考古学的資料批判の試論的実験—」繩文時代第1号 1990
20. 小池 孝「①石鎌型 阿久遺跡をめぐる諸問題」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一原村その5 1982
21. 町田勝則「第3章第3節(2) 石器」長野県中央道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書11 北村遺跡 1993
22. 佐藤信宏「神矢塚遺跡出土の石鎌」山形考古第2巻第3号 1978
23. 藤村東男「岩手県九年輪遺跡出土のアスファルト付着物について」史学第52巻第2号 1982
24. 森山公一「折断・折損による両面加工石器の復原とその変遷に関する一考察」 『中部高地の考古学』 1978
25. 河部伴人「剥離底による石鎌の分析—試論—」東京都埋蔵文化財センター紀要Ⅰ 1982

2. 石鎌 (第2表、第3・4図)

1. 法墨は鉛(おもり)としての重量・大きさをつかむことにあり、それが付けられたであろう網または絆の用途を考察する手段である。使用方法については確定なところではないが、学史を肯定すれば、時期差や用法・使用地域の違いを考える要素である。重量を中心に測定する4項目すべてで比較が可能。

使用法は有溝・須口目の縫を一般に強制具(文献2)とする。強制具(打ち欠き鉛)では強制具とする考え方(文献3)と複合性とする考え方(文献4~6)の2者があり、統一されていない。重量や大きさの数値から識別・用法あるいは時期・地域的な差異について言及した論文が多い(文献7~11)。

A=機能的に記述必要 B=記述内容に機能必要 C=機能は有効な活用なし
 甲=精度が高い 乙=一般的に記述 丙=月等りある記述 ノ=僅かに記述 X=記述されない

番号	法 署 (最大値)				機能部				素 材 自然面	製作 技術	使用 痕跡 有無	使用 方法 有無	長形 垂直性	欠損部 位	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長さ (cm)	幅外 (cm)	幅内 (cm)	深さ (cm)							
例1	3.8	2.4	1.0	16.7	55/23	-9.3	0.1	0.2	河原石	有隙	不明	-	完		
2															
	A 甲	A 甲	A X						C 丙	C 甲	A X	B X	B 乙		
	縫掛け部 (表)	縫掛け部 (側)			全体 長さ	幅 幅外	幅内	深さ	機能部 長さ						

第3図 石器部位の名称

第4図 石器の測定箇所

第2表 石器の属性表

2. 機能部は全体の法量自身がそれに相当し、縫掛け部位の要素のみを特出すべきではないが、用途を直接表現した部分として、縫掛けが予想される部位の長さ・幅・深さを計測する。

溝の長さ・・・紐の太さや長さは縫の用途を考察する手段であり、縫掛け部の全周長・溝の幅・幅・深さ
 (外側の縁と内側の底面)・深さを測定する。

ex) 全周長は実際に縫を巻いて計測するのが手早い。

使用痕跡・・・使用状況と再使用の有無を考える要素。縫づれ痕・再生加工の有無と欠損部位などを観察する。

機能部については殆ど研究されていない。縫の幅については、製作技術と歴史の関係を論じた例(抜きの深さ、度合を論じたもの)がある(文獻7)。

3. 製作技術は主に縫掛け部の作出法(打ち欠き・有溝・切り目)について区分し、自然面は素材(円錐と剝片)の区別を含め観察する。また材質とも合わせ、石製品と土製品の別を加えておくと良い。

4. 石材の種類は石楠・石鈍と同義である。

文献

1. 須辺 仁「所謂石器について、先史学に於ける用途の問題」考古学雑誌第55巻第2号 1969
2. 須辺 誠「縫文時代の遺産」 1973
3. 四柳島幸「サケ・マス諱の蓋板について」考古学研究第23巻第2号 1976
4. 須辺 誠「スダレ状圧痕の研究」物質文化26 1976
5. 須辺 誠「勝山市東部における“もじり縫み”用道具の民族調査」勝山市古官道跡発掘調査報告書 1978
6. 須辺 誠「縫み物用道具としての自然石の研究」名古屋大学文学部研究論集80 1961
7. 山本宣人「加賀における縫文時代の銅鏡について」石川県考古学新発見会々誌26 1983
8. 上野修一「福井県における縫文時代銅鏡について」福井県考古学会誌 1982

9. 田中雄夫 「石錐考」宮崎大学開学記念論文集
 10. 加藤 錠 「長野県下伊那郡上郷村发现の石錐—伊那地方の石錐（錐石錐）について」考古学の世界 2
 11. 宝珍伴一郎「10超大型錐石錐に関する二、三の考察」伊木方遺跡
 12. 渡辺 誠 「滋賀県における绳文時代の網漁法について」滋賀文化財研究所月報 1968年版
 13. 宇田川洋輔「北海道出土の特大型石錐」考古学雑誌第50巻第1号
 14. 杉浦重信 「錐石とチョウザメ」季刊考古学第25号
 15. 松岡達郎他「錐石錐考」考古学研究第24巻第1号

3. 浮子

1. 法盤は浮子（うき）としての重量・大きさをつかみ、紐または紐の用途を考察する手段である。浮子としての使用法が機能的に証明されたわけではないが、有孔や紐掛け部を持つ輕石製の資料を浮子として説明を加えておく。重量を中心に4項目で比較が可能である。時期によっては輕石でも加工の確認できない資料が多出する地域があるので、浮子と考えられる例と合わせ十分検討する余地がある。
2. 機能部は法量自身がその意味である。孔部を加え、石錐と同様に観察する。
 孔部の径・・・紐の太さは用途を推定する要素である。径（外径と内径）・深さ（孔の長さ）を測定する。
 使用痕跡・・・使用状態を考察する手段。紐すれ痕の有無と欠損の部位につき観察する。
3. 製作法は全体の整形法（打ち欠き・研磨）と孔部の作出法（形態と貫通法）について観察する。紐掛け部は石錐と同様である。
- 資料数が少ない上、機能が明確でないために論考は殆どない。整形法または立体形の違いから地域差につき言及した例がある〔文献1〕。
4. 石材の種類は、石槍・石錐と同義である。

文献

1. 加藤秀行 「6. 有孔石製石製品について」青井二丁目遺跡
 2. 米山利之助「所謂“錐石製浮子”について」古代第58号

4. 石匙（第3表、第5・6図）

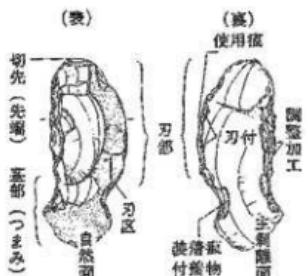
1. 法盤は作業対象としての目的物の大きさを、間接的に推定することのできる要素である。剥片の分析値と比較することで、製作法の復元にも役立つと考えられる。推定する項目すべてに比較が可能であるが、以下に示す機能部の各要素や石材観察によつては、重きの属性だけでも有効である。
- 石匙は大きさから2種あるいは3種〔文献2〕に大別されている。ただし大形〔文献1〕の盛行は時期・地域的に限定があり、断りのない限りはそれ以外の石匙を指す。法量の計測法に詳しいが、本稿では別の方法を用いたので注意されたい。
2. 機能部は石匙の構成としての成立要素で、製作技術上の特徴を端的に表現した部分でもある。刃部を中心、茎部（つまみ部）までの観察を行う。刃部では刃の歯・角度・長さと幅・刃付け・形

A = 横断的に記述必要 B = 記述内容に付記必要 C = 記述は有効な运用なし
甲 = 精度が高い 乙 = 一般的に記載 内 = 片寄りある記載 丁 = 個別に記載 × = 記述されない

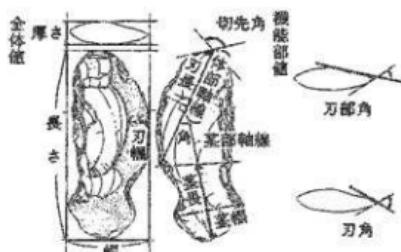
番号	法 様 (最大値)				刀 部											
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	鷺さ (cm)	刃 長 (cm)	刃 幅 (cm)	刃 付 主角	刃 付 副角	刃 字 主角	刃 字 副角	平 済	圓 済	圓 済	済形		
例1	9.5	3.5	1.0	54.7	1	7.0	1.0	片	67	58	43	41	18	外	円	凸・平
2																

△	A	X	A	X	A	X	A	X	B	X

第3表 石匙の属性表



第5図 石匙部位の名称



第6図 石匙の測定箇所

歩・加工の有無・使用痕跡と再生の有無を、茎部ではその位置・装着跡跡・加工の有無を観察する。

刀部の……直接対象物に機能する部位の値を測定する。刃の長さ (刃渡り) と幅を最大値で長さと幅計測。現実的には複数の刀部が存在することが多く、主たる刀部のみで代表させることは危険である。

ex) 刃長は刀部末端と切先頂点を結ぶ長さで求め、刃幅は刀区として成り立ち得る最大の幅で測定する。

刃の数……使用された刀部の数を計上する。

ex) 大形石匙では刃縁に対応する歯列が棟部 (背部) となるのが一般的である。

刃付け……刃先の形状 (片刃・両刃) を観察する。

刃角と……刃物の用途を考える要素。刃部として成立した時点の角度 (刃部角) と加工された刃先あるいは使用に伴い変化した角度 (刃角) を測定する。複数の刀部を持つ場合は各部分で測定。

ex) 刃縁は数cmから数十cmに及ぶため、刃角を求める場合は一般に主角（使用が最も顕著な部分=実測断面部分）と平均値（刃縁に沿って数cmごとに測定した平均）で提示するのが良い。また刃部角は一般に器体の背面（表面）と復面（裏面）により形成された角度で測定する。

刃部の形態・・・用法・用途を考える手段となる。刃縁の平面形態（外湾刃・直刃・内湾刃、さらに円刃・直刃・彎刃）と断面形態（凸刃・平刃・凹刃）を観察する。形態区分の基準は石器の基部形（指標による類別）に基づき、呼称法については磨製石斧に準ずる。

切先角・・・用途を推定する属性。切先に相当する部分の角度（2辺に挟まれた角度）を測定し、その形態を観察する。

使用痕跡・・・使用と再加工・再利用の有無を観察する手段。刃部に使用痕（光沢・線状・すい星状の凹み）を観察するとともに、加工（刃の再生）の有無、さらに欠損の部位と状況について記録する。

茎部の加工・・・石匙が刃器瓶の中から特に抽出される要素、茎部作出の有無を記す。さらに加工の仕方に類別を与えることも可能。

角度と型・・・基部の付く位置を刃部との角度によって計測し、その型（縦形・横形・中間）を記録する。

ex) 基部の最大幅を2等分する縁分（つまみ部軸線）と刃長線（体部軸線）とによって形成された角度を測定する。型は0~90度までを3分割し、30までを縦形、60までを中間形（斜位形）、90までを横形とするのが一般的である。

大きさ・・・基部の長さと幅を最大値で測定する。

被着痕跡・・・茎部の使用法から石匙の用法を考察する手段。範囲と部位・種類を観察し、合わせて付着物の鑑定（タール・漆など）が必要。

機能面での検討は使用痕研究とともに増加してきている。属性としては刃角と刃部形態を取り上げることが多い。使用痕観察では、石匙の各属性と使用痕跡の関係あるいは使用痕の種類と操作の仕方、対象物の種類と言った次元まで検討した論考（文献3~5）もある。茎部の呼称は文献6に明示されているが、現在その型を角度によって4種類（A~D）（文献5）ないしは3種類（縦型・横型・中間）に（文献3・4）区分している。また装着法は、紐が巻かれた状態で確認された山王（匯）遺跡資料の紹介（文献7）や修着材を想定した例（文献8）など、古くから検討対象となった属性である。一方、大型の石匙については機能論に関して言及した例（文献1・9・10）がある。

3.製作技術は素材獲得から製品に至るまでの過程を復元し、大型な類では打製石斧とそれ以外では石器の製作法と比較する必要がある。具体的には自然面の有無・打点の位置を記録し、素材の種類を考察する。また器種の要とも言うべき刃部に関しては、機能部の観察とともに刃の作出法や角度・刃付けに注意を払い観察を行う。

製作については大型の類に対して検討されることが多い（文献2・10）。他の石器では報告文中での分類表記は意外に多いが、積極的に刃部を取り上げた論は低調である。打点の位置と記録法については文献4に詳しい。

4. 石材の種類は考え方として石椎・石鎌と同義である。ただし大形以外の石匙では、同じ遺跡内でも石鎌と違った材質を使用することがあるので、製作技術と合わせ注意が必要である。

文献

1. 鹿島栄一「縄文中期に於ける石匙の機能的変化について」考古学新論第49巻第3号	1963
2. 上野賀久「南関東における縄文時代中期の石器—特に大形石匙について—」東京考古7	1989
3. 梶原洋「三神峯遺跡出土石匙の使用痕研究」昭和55年度 三神峯遺跡発掘調査報告書	1980
4. 梶原洋「石匙の使用痕分析—仙台市三神峯遺跡出土資料を使って—」考古学新論第68巻第2号	1977
5. 後藤泰彦「3. 刃片石器第2群」上津沢遺跡 北北西自動車道遺跡調査報告書	1978
6. 五味一郎「縄文時代早・前期の石匙—その農具としての定立—」信濃第32巻第7号	1960
7. 楠本政助「三 石製の利器」仙台市における先史狩猟文化『矢本町史』第一巻先史別編	1973
8. 中谷治字二郎「石匙に対する二・三の考察」人類学新論第40巻第4号	1924
9. 小林公明「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」信濃第24巻第4号	1977
10. 小林公明「第2節 石製農具」曾利 弘三、四、五次発掘調査報告書	1978
11. 清野謙次「候志園会市郡余市町番宿字大谷地貝塚」『日本貝塚の研究』	1969

5. 刃器 {撲器・削器・横刃型石器} (第4表、第7~10図)

1. 法量に対する考え方は石匙と同義である。

縄文時代では所謂スクレイバーの名称を適用することが一般的であるが、前時代における撲器・削器との技術的あるいは系統的な相違点を説明した論考はない。したがって用語並びに分類が非常に曖昧であるため、本稿ではこれらを刃器と総称し、本末の区分である技術的視点からの類別を用いておく。刃器には撲器・削器などの小形な部類と横刃型石器のような大形な類があり、これらから茎部(つまみ紐)作出のある例を石匙として抽出した。いずれも技術的な側面からの類別であり、これらを別の属性から種別的に検討した論考は今のところない。

2. 機能部も石匙と同義である。刃部に関して刃の数・角度・長さと幅・刃付け・形態・加工の有無・使用痕跡と再生の有無を観察する。横刃型石器では茎部に変わって、背部(棟部)の記録が必要である。

刃部の長さと幅・刃の数・刃付け・刃角と刃部角・刃部の形態・方向角・切先角(=中心角)と形態・使用痕跡と再生

ex) 方向角は剥片剥離軸線と刃長線により決まった角度で、素材剥片に対する刃部位位置を示す要素となる。中心角は撲器に対して観察される属性で、刃部の類型化に用いる。刃部の張り出しが弧状である場合、円周を投影し全体に対する弧の中心角で求める。位置とは剥片剥離軸に対して刃の付く位置を言う。

背部の加工・・模に相当すると考えられる背部につき、作出の有無を観察する。この属性は背部加工の存在によって、単なる剥片と区別できる横刃型石器に対し実施される。

表着痕跡・・・使用法を考察する手段。痕跡の範囲と部位・種類を観察し、合わせて付着物の鑑定(タール・漆など)を行う。

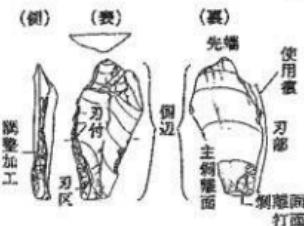
属性分析の方法と視点については文献2・3に詳しい。機能的側面での検討は先土器時代の論考に優れた例(文献1)がある。近年縄文時代でも刃角と刃部の形態についての検討例(文献4)や使用痕分析(文献5)

A=標識的に記述必要 B=測定内容に検討必要 C=現在は有効な活用なし
 甲=精度が高い 乙=一般的に記述 内=片持りある記述 丁=僅かに記述 ×=記述されない

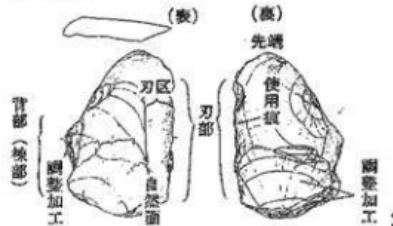
番号	法 観(幾大體)				刀 部										
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	数	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	加工	位置	方向角 刃付	刃角 平均	刃角 主角	刀部 平均	背 平均	
例1	4.2	3.5	0.5	5.2	1	2.4	0.2	○	先端	168	片	110	112	58	58
2	4.5	2.5	4.0	3.8	1	3.7	0.3	○	側邊	—	片	48	59	26	23
3	12.1	7.6	1.3	169.6	1	7.1	1.4	—	—	—	圓	33	33	31	33

番号	刀 部				背(様子) 部				欠損 部位	状況	自然面	石材	媒材	分類	備考	
	平面	面形	断面形	切角度	先端形	使用有無	痕跡	再生								
18	外	円	凹・平	135°	円	あり	光沢	○	不明	なし	—	完	—	—	ヤード	縫制
8	外	円	凹・平	/	/	あり	光沢	—	不明	なし	—	完	—	—	ヤード	縫制
C1	直	直	平・平	/	/	あり	磨耗	—	不明	なし	—	完	—	○	縫穴治	縫制

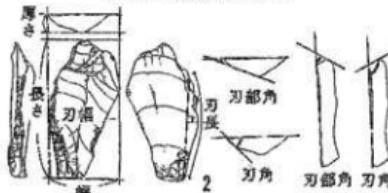
第4表 刀器の属性表



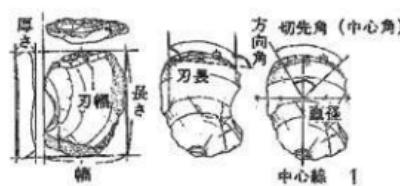
第7図 刀器部位の名称1



第8図 刀器部位の名称2



第9図 刀器の測定箇所



第10図 刀器の測定箇所

などが報告文に記述されるようになってきている。

3. 製作技術と4. 石材の属性に関するもと石匙と同義である。

製作技術については、剥片の分析と合わせ、工程の復元に言及した論考（文献6～10）がある。

文献

1. 加藤晋平他「エンド・スクレイパーについて」考古学雑誌第55巻第3号

1969

2. 山中一郎「擦器新発見」史林第59巻5号

1976

3. 阿子島香「不定形石器分析の挑戦」文化第47巻3・4号	1984
4. 国村芳雄「第3章第18節スクレイパー」上信越自動車道櫛森文化財発掘調査報告書2 黒毛牧	1991
5. 铃原洋「第IV章共生遺跡出土石器の使用痕分析」金生遺跡II (縄文時代編)	1989
6. 桥昌信「縄長柄片の切削技術とサイドブレイク」史学論叢12号	1981
7. 大塚真弘「いわゆる不定形な石器の検討」古代文化第23巻第8号	1971
8. 町田勝則「縄文晚期中葉における不定形石器の認識」史叢第36号	1986
9. 中川和哉「近畿仙台の擦器についての観察」同志社大学考古学シリーズV	1992
10. 小杉政「第3節(4)腹形削器の製作 備考別資料」真光寺・広持遺跡調査IV	1989

6. 磨石・凹石・敲石 (第5表、第11~16回)

1. 法量は原材の入手過程に関する労働・仕事量を考察する要素である。使用地に固定（置き去り）されることが常態で、その数は生業・仕事量を推定する手段となる。各属性すべてに比較が可能である。

大きさについては長さと幅に関して、時期的な変遷を検討した論考（文献1）がある。

2. 機能部には擦面（磨面）と敲打面（凹部・敲打部）が認められ、使用法を考察する要素となる。面の觀察は擦面（表裏側面）の数・形成・範囲・形状・運動方向を記録し、敲打面（表裏側面）ではその数・範囲・深さ・形状を観察する。

擦面の数・・・作業面の転移あるいは用法の転換などを考察する手段として、面数を計上し、またその大きさを測定する。

ex) 大きさの測定には単純に長さと幅で測定するのも良いが、面積を求めてことで表面積と擦面の比較が容易となる。

形成と形状・・・使用状況を考える要素として、面の形成（作業面の作出）の有無と形状（作業面の構成）を観察する。

ex) 作業面が意識的な作出であるのか、使用による変化なのかを判断する。また作業面が局所的使用なのか全面使用なのかを観察し記録する。

運動方向・・・運動方向を推定し、保持の仕方を考察する。

敲打面の数・・・擦面と同様。ただし範囲以外に、深さの属性を加える必要がある。

形状・・・敲打部は使用に基づき変形するものであり、形状を観察することにより用法を考察してゆく手段とする。

ex) 作業部の状態がどのような過程で形成されたのかを考えながら、特に打撃（衝撃）の単位を細かく観察し、形状を類型化する。例えばアバタ状であるとか済状であるとか。

転用の有無・・・他の器種からの転用について観察する。

付着物・・・使用対象物を推定するひとつの手段。付着物の有無とその種類の鑑定（ベンガラ・タールなど）を行う。

橢圓面では内部の角法に関して古くから目され、論議されてきている（文献2~9）。現在では大方が無果

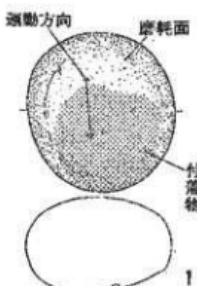
△=標識的記述必要　○=記述内容に検討必要　C=現在は有効な活用なし
 甲=特徴が高い　乙=一般的に記載　丙=片寄りある記載　丁=僅かに記載　×=記述されない

番号	法	型 (最大)	部	機能部								
				磨・擦面部				歯部(凹部)				
				位	形	長さ	幅	方	形	長さ	幅	
				表	1	6.8	6.3	?	無	1	1.7	1.4
				側	無	/	/	/	無	無	/	/
				裏	1	6.7	6.5	?	無	1	1.8	1.8
例2		8.0	7.5	4.2	318							

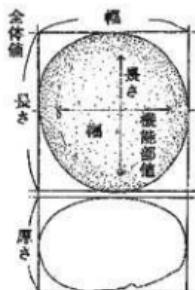
A 甲

A X

B 丙



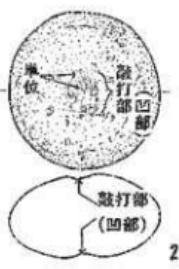
第11図 磨石部位の名称



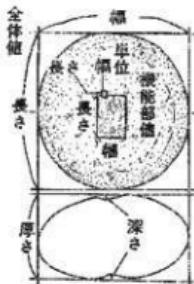
第12図 磨石の測定箇所

機能部		石 材 (未検)	分類	備考
歯部	底 部			
深さ	厚さ	(cm)	(cm)	
0.2	0.1			安山岩 (粗粒)
/	/			
6.1	0.1			

第5表 磨石類の属性表



第13図 凹石部位の名称



第14図 凹石の測定箇所



第15図 敲石部位の名称



第16図 敲石の測定箇所

類の果皮割りや石器製作に的を絞っているようである〔文献10~14〕。凹石の用途研究に関しては文献15に詳しく述べられているので参考にすると良い。使用痕の検討では文献16以後、敲打部や凹部の形状を観察し、類別と使用痕の写真を提示する報告文〔文献17・18〕が増えてきている。また出土状況の分析から器種の所属者(性別)について推定した論考がある〔文献19〕。

3. 製作は基本的に河原石をそのまま使用することが原則であるが、全体を整形加工(側面部を形成)する例も時期によっては存在するので、この区別を観察する必要がある。ただし製作に伴う

変形と使用に伴う変形は区別が難しく、地域あるいは遺跡内に考察するしか手立てではない。

製作法に関する議論的取り組んだ論考は、資料が特異な形態の場合に限り認められる（文献16・20～23）。

4. 石材の種類は殆どが在地中心であるが、入手活動に伴う仕事量を推定できる要素である。また材質（緻密～粗粒など）の観察は、作業内容及び対象物を類推する手掛かりとなる。

石材は機能と直結した属性であり、大部分の論文・報告文で扱われてきている。しかし材質の模擬については実施されていないのが現状である。

文献

1. 小林康男 「縄文時代の溝石」『中部高地の考古学』 1978
2. 新田西賞 「槽円或ハ形ニシテ小穴アル石器」『考』 東京人類学雑誌第4巻第42号 1889
3. 羽柴翠輔 「凹みある石器の用法に就き所見を述ぶ」東京人類学雑誌第4巻第43号 1889
4. 若林勝邦 「貝塚ノ貝殻ノ門ミ石」東京人類学雑誌第5巻第44号 1889
5. 坪井正五郎「ロンドン通信（凹みある石器の用法）」東京人類学雑誌第5巻第53号 1890
6. 田中正太郎「飛驒兩石世御の遺跡」東京人類学雑誌第6巻第62号 1891
7. 八木契三郎「本邦發地方より発見せる石器の種類」東京人類学雑誌第9巻第95号 1894
8. 佐藤伝蔵 「常陸國福田村貝塚発掘報告」東京人類学雑誌第9巻第100号 1894
9. 烏居嘉威 「堀火用燧縁に就いての事実日本石器使用人種ノ堀火法」東京人類学雑誌第11巻第126号 1896
10. 奥津森男 「仙台飛行場遺跡より発掘された箭物遺体について」古代文化第14巻第1号 1943
11. 中口 裕 「凹石の用途に関する一考察」石川県考古学研究会全賛10 1976
12. 能登 錠 「縄文時代の凹穴に関する考察」信濃部30巻第4号 1978
13. 被辺 説 「飛驒白川村のトムキ石」『考古学論叢』 1980
14. 桃井真亮 「石器を作るハンマー—凹石の用途について—」『考古学論考』 1982
15. 野村一介 「研究ノート・凹石研究のために(1)長野系埋藏文化財センター紀要1」 1987
16. 八木元則 「いわゆる「特殊溝石」について—中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起—」信濃部第28巻第4号 1976
17. 阿部朝衛 「第5章第3節石器と石製品」鳥居達蔵I・II 1988
18. 町田勝利 「第3章第3節(2)石器」長野県中央道長野線埋藏文化財発掘調査報告書1! 北村達蔵 1993
19. 三上敏也 「縄文時代における石器の性別分有に關する一試論—中部高地における分業と生産—基礎の与泰—」信濃部第40巻第5号 1988
20. 戸井晴夫 「第6章块入座石について」神谷誠司 1982
21. 小田静夫 「3.石器II スタンプ形石器」『縄文文化の研究7 道具と技術』 1983
22. 早川 泉 「スタンプ形石器研究述説」『縄文時代第3号』 1992
23. 石坂正・岩崎栄一 「縄文土器文化における石器群の一様相—スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として—」群馬県埋藏文化財調査事業調査研究紀要5 1988

7. 石皿・台石 (第6表、第17・18図)

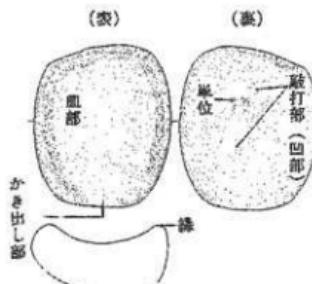
1. 法量は磨石・凹石・敲石と同様。各属性すべてに比較が可能であり、質量が最も効果的である。
論文として取り上げられたことは殆どなく〔文献1〕、大きさに関しては属性として報告文中に記録されるに留まり、それを活用した論考はない。
2. 機能部は皿部・擦面(磨面)と敲打面(凹部・敲打部)を観察する。皿部では数・形状・形成・長さ・幅・深さを計測し、擦面・敲打面は磨石と同様な視点である。
皿部の数・・・皿部は裏裏面に転移するので、その数を記録する。
ex) 通常は1面ないしは2面で構成される。
形状と形成・・・皿部は磨石などの相手を伴って実際に機能する部位であり、その形状は作業内容と頻度を考慮する手段となる。また皿部の作出法は作業内容を考慮した意識の反映であり、形成(作出)の有無を記録する。
範囲・・・・作業部としての大きさ(長さと幅・深さ)を測定し、期待できる最大の作業量・頻度、そして対象物を推定する要素とする。
ex) 大きさは単純に長さと幅で測定してもよいが、面積を求めて比較するのが良い。この場合、大きさは全体値またはこれに近い値となることが一般である。また深さに関しては、縁(外周部)と皿部の底との比高で求めるのが良い。
摩耗面の数・・・実際に磨面として機能した部位を観察し、その数を計上する。皿部の数と基本的には一致する。
範囲・・・・実際に使用された作業面の大きさ(長さと幅)を測定する。
ex) 大きさの測定は皿部の範囲と同法である。求めた面積は全体値(皿部の範囲)と比較する要素である。
- 形狀と形成・・・磨石・凹石・敲石と同義である。
運動方向・・・規則的な作業が繰り返された場合、運動の方向を観察することができる。
- 敲打部の・・・皿部以外の機能部として敲打部(凹部)がある。この属性観察も基本的に磨石・凹石・敲石と同様である。
- 使用痕跡・・・擦面(摩耗面)と敲打部につき、摩耗及び敲打の使用状況(頻度)を観察する。
また欠損の部位と状況についても記録する。
ex) 痕跡の表現に関しては、類型化と写真による記録が効果的である。
- 転用の有無・・・他の器種との供用あるいは転用の有無を記録する。
- 付着物・・・器面にある種の付着物(ススや赤色粉など)と熱を受けた痕跡が認められる場合と被熱があり、その範囲と種類を観察する。
ex) 範囲は固化(網掛けなど)によって記録するのが良い。
機能面の検討は欠損部位について類型化した例〔文献2〕の他は類型的な考察はない。ただし出土状況に関する考察は少ながらず発表されている〔文献3~5〕。
- 製作は河原石をそのまま使用する例と全体を粗削した例があり、さらに皿部を作出したものや

A=積極的に記述必要 B=記述内容に拘る必要 C=現在は有効な活用なし
 甲=記述が無い 乙=一般的に記述 丙=片寄りある記述 丁=誤りに記述 ×=記述されない

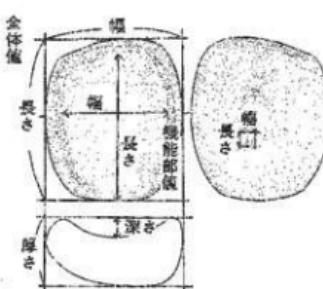
番号	法 量 (最大値)				部 位 数	機 器 部 の 様 態								
						腹 部				腰・脚 面				
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)		形 状	形 成	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	形 状	長 さ (cm)	幅 (cm)	
例1.	23.3	18.7	10.3	6.0	表 1	鍛作出	21.0	14.5	2.0	20.0	15.0	割後		
	/	/	/	/	裏	/	/	/	/	/	/	/	/	

機 器 部				欠損 部位	軽 用	材 質	石 材 (粒子)	分類	備考		
腹 部 (凹 部)											
數	形 状	長 さ (cm)	幅 (cm)	深 さ (cm)	単 位 (cm)	完形	なし	スス	粗粒全形 河原石	安山岩	(粗粒)
1	/	/	/	/	/						
9	2.3	2.0	0.3	0.2							

第6表 石皿の属性表



第17図 石皿部位の名称



第18図 石皿の測定箇所

時期によっては脚部を形成したものさえある。特に腹部の作出と脚部は作業内容と時期的・地域的な特徴を推定できる要素であり、記録が必要となる。

4. 石材の種類は磨石・凹石・敲石の考え方方に準じる。

文献

1. 安達厚三、「石皿 3.石器Ⅱ」『縄文文化の研究7 道具と技術』 1983
2. 幸出一治「縄文時代の石皿について—こわれた石皿をめぐって—」『信濃第30巻第4号』 1978
3. 須田正一「飛鳥山地に出土する石皿の機能について」『名古屋大学文学部十周年記念論集』 1959
4. 須田正一「飛鳥山地に分布する石皿の機能について」『名古屋大学文学部研究論集(史学) XXXII』 1964
5. 高本寧之「住居内出土の石皿についての考察」『神奈川考古学』 1978
6. 鈴木保彦「第二の道具としての石皿」『縄文時代第2号』 1991

8. 打製石斧 (第7表、第19・20図)

1. 機能は機能と直接結び付いた属性であり、形態的類別による差異（用途差）と時期差・地域差を考える要素である。特に長さと幅での比較は有効である。

石製石斧に関する属性分析は石の道具中、最も多くの論考が存在する。報告文においても東京都や神奈川県を中心に属性記録は半ば定期的である〔文献1～6〕。

2. 機能部は刃部及び基部（頭部・柄部）の観察を行う。刃部ではその数・刃幅・刃部角・形（平面と断面）・使用痕の範囲・方向・刃角・欠損と再生・装着痕跡につき記録する。

刃部の数・・・刃部として機能した部分、刃の数を記す。複数例は短冊形に多い。

刃幅と・・・刃部の最大幅と角度を測定する。刃部角は器種全体に対する刃部の角度、すなわち背面と腹面により形成された角度を指す。

刃部形・・・形態（平面形・断面形）には製作時と使用後の形がある。一般には後者を記録するので、使用に伴う摩耗や損傷、刃部の加工や再加工が加わっていることに注意する必要がある。

使用痕跡・・・痕跡の範囲と方向・頻度を観察する。対象物への直接的な働き掛けや使用状況を反映した属性であり、形態的類別との比較が大事。

ex) 範囲は損耗の長さと幅で計測し、方向は器種長軸との傾きを角度で示す。頻度とはその度合いのことと、遺跡内あるいは同一時期の地域内で比較する。

刃角・・・使用された刃の角度を測定する。刃には素材剥片剥離時と再生加工時の2者があり、再生剥離は刃の端部からの剥離をもって認定する。刃角は一般に刃部角よりも大きい。

欠損と再生・・・使用の用法、さらに使用場所をも考察する手段である。欠損の有無とその部位を記録し、欠損断面での状況（割れ方）について観察する。

ex) 再生は刃部の使用痕部分の観察（作り直し・剥離の有無）によって確認する。

基部は機能部を補佐する属性である。器種として機能を発揮するためには、柄に装着することが肝要で、形態と敲打痕跡・装着痕跡・付着物について観察・記録する。

形態・・・基部の形態は器種全体の形を決定する要素であり、その平面形に類別を与える。

装着痕跡・・・基部には装着結果と考えられる摩耗痕跡と側面部に着柄用と推定できる敲打痕跡と付着物の2者が観察できる場合がある。それぞれに有無と範囲を記録する。また付着物が確認できる場合も同様に記録し、その種類（タールなど）を鑑定する。

ex) 範囲は両者とも図化によって表示するのが良い。

機能部は法差の記録とともに、使用痕跡・欠損状況・再生について言及されることが多い〔文献7～11〕。春雨法および装着痕跡においてもほぼ同様であり、具体的な検討を行った例が幾つかある〔文献12～15〕。

3. 製作法は材料となる素材の区別と自然面の有無・敲打・剥離成形の形態について観察する。製作工程は時期的・地域的な差異を考察する手段である。

打製石斧の製作は報文や論考に取り上げられることが多く、様々な角度で論及が行われている〔文献16～20〕。

△=後継的に記述必要　□=記述内容に補足必要　○=理由は有効な活用なし
 甲=指摘が無い　乙=一般的に記載　丙=片寄りある記載　丁=僅かに記載　×=記述されない

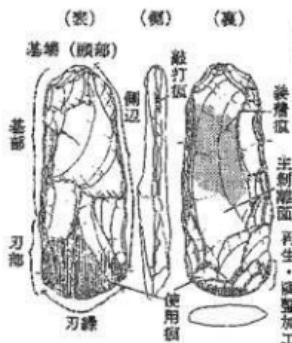
番号	法量(全体性)				刃部				使用痕跡			
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	数	刃長(cm)	刃幅(cm)	形態	長さ(cm)	幅(cm)	刃角(度)	方向
例1	12.3	4.9	1.9	155.0	1	4.8	26.0	円刃	3.7	4.2	46.5	90
2												

A 単 A-1 A-2 B-丙 B-X

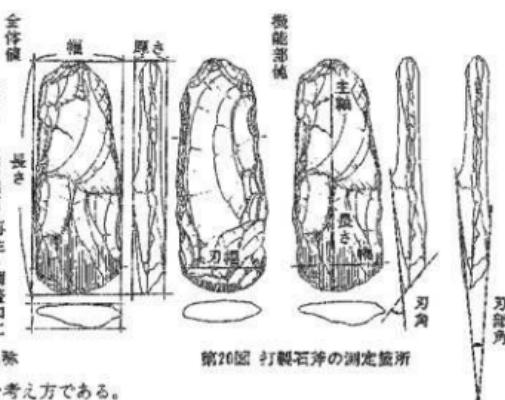
基部 形態	裏面 表面	背面 前面	側面 底面	欠損 部位	表面 状況	石材	象材	分類	備考
尖形	○ ○	-	○	- -	○	粘土岩	滑石	滑動	

C-X C-乙 C-丁 C-丙 A-甲 B-甲 B-X 甲

第7表 打製石斧の属性表



第19図 打製石斧部位の名称



第20図 打製石斧の測定箇所

4. 石材の種類は石棺・石獣と同様な考え方である。

文献

- 大山祐「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」史前学研究会小報第1号 1927
- 岩井佐男「勝坂」原報7号 1970
- 後江秀浩他「IV. 2 總文時代中期の石器」系・山 1975
- 齊藤義生「B. 3 打製石斧の観察」平山篠進路 1974
- 齊藤義生「第6節中期の石器」貫・井 1978
- 小池聰他「打製石斧について」白山学園学報 1963
- 鈴木次郎「縦文時代の圓刃式片刃打製石斧について」神奈川考古2 1977
- 鈴木次郎「打製石斧」「縦文文化の研究7 道具と技術」 1982
- 山本直人「石川県における打製石斧について」石川考古学会会報26 1996
- 小堀一夫・小島正裕「「分類形」打製石斧の系譜(後篇)」東京考古第4号 1986

11. 松村和男 「4 打製石斧について」 滋賀自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 XVI 古耕地 (1)	1983
12. 鹿山公一 「第2節4.石器類の組成とその意味するもの」 後遺跡	1991
13. 細木忠司 「第5節2.打製石斧」 桑原下立跡発掘調査報告書	1975
14. 高橋 敏 「歯根部を想定させうる打製石斧」 富士見市立跡発掘調査会研究記録 2	1982
15. 霧谷正信 「22) c 城之原遺跡の打製石斧」 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之原遺跡	1991
16. 白石浩之 「C. a 打製石斧の製作技術論」 日野吹上遺跡	1970
17. 小出勝夫 「調文中期の打製石斧」 どるめん10	1976
18. 中島庄一 「83) 石器について」 東京都多摩市和田・百草園跡、蒲川南跡	1985
19. 砂田佳弘 「恋ヶ原遺跡出土の打製石斧」 東京の遺跡 No.20	1988
20. 中島庄一 「復元された打製石斧の製作工程が意味すること」 部上たま第8号	1991

5. 磨製石斧 (第8表、第21・22図)

1. 法量は破壊力を反映し、斧の用途 (伐採・加工) を考える一つの要素である。時期的な違いを示すこともあり、すべての属性で比較が可能である。

大きさの属性から3群ないしは4群のまとまりを示唆した考察はあるが (文献1・2)、用途・所法まで含めて言及した論考はない。

2. 機能部は直接対象に働く刃部を中心に観察する。刃部の数・刃幅・刃部角・形 (平面と断面)・使用痕の種類と範囲・刃角・欠損部と状況・再生について記述を行う。それぞれの内容については打製石斧と同義である。

刃部の数・・・刃部として機能した部分、刃の数を記録する。稀に2つの例がある。

刃幅と・・・刃部の最大幅と角度を測定する。

刃部角 ex) 刃部角は刃部となり得る斧身の角度で示す。

刃部形・・・刃部の平面と断面の形態を観察する。

使用痕跡・・・痕跡には摩耗や損傷があり、その範囲と方向・頻度を観察する。

ex) 範囲は損耗の長さと幅で計測し、方向は器種長軸との傾きを角度で示す。頻度とはその度合いである。

刃角・・・使用中に研ぎ出された刃の角度を指し、一般に刃部角よりも大きな値である。

ex) 刃こぼれなど使用痕跡に伴うことが多いが、刃縁に沿う部分で計測する。

欠損と再生・・・欠損の有無とその部分を記録し、欠損断面での状況 (割れ方) を観察する。合わせて再加工あるいは転用の有無をも記録する。

基部は柄の装着法あるいは時期・地域的な形式差を推察する部位であり、形態 (平面と断面) を観察し記録する。

装着痕跡・・・斧身は柄に装着することによって機能を発揮するもので、調部及び基部の属性とともに装着して装着の痕跡と接着剤の有無を記録する。

機能的部位の属性については、文献3・4に詳述されているが、論考として追究したものは意外に少ない。以下に示す製作法と関連して言及したもののが若干ある。使用痕跡については実験的成果を発表した例 (文献5・6) や報告文中で観察結果をまとめた例などがある (文献7・8)。また装着法に関する記述では石器に鋸った痕跡を

△=強制的に記述必要 E=記述内容に拘束必要 C=記述は有効な活用なし
甲=複数が多い 乙=一般的に記述 内=片寄りある記述 丁=強引に記述 ×=記述されない

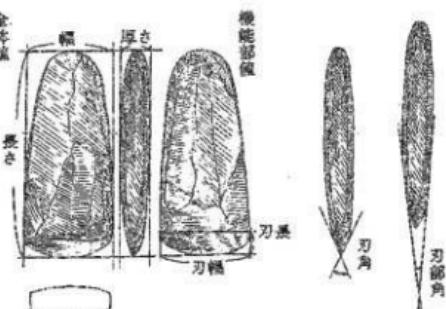
番号	寸法				刃				部				使用痕跡			
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	数	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	刃部角 (度)	平面	形態	難易度	長さ (cm)	幅 (cm)	刃角 (度)		
例1	7.2	2.1	1.0	41.0	1	6.9	3.1	15.0	円刃	凸群	0.4	2.6	45			
2																

△	X	A	X	A	X	A	X	A	X	A	X	A	X	A	X	A
使用痕跡	基部	側面	背面	側面	付着部	斜面	次	堆積物	剥離	自然面	石材	紫材	用法	分類	健等	
△	○	△	○	X	X	X	-	-	-	X	蛇紋岩	剥片?	加工斧			

第8表 磨製石斧の属性表



第21図 磨製石斧部位の名称



第22図 磨製石斧の測定箇所

確認できる場合があり、そのような例を紹介したものの〔文献9〕や縄文時代を対象としたものではないが、欠投と波形の両者を実験結果をもじて詳細に観察・記録した論考がある〔文献10〕。

3. 製作法は基準となる素材の区別と自然面の有無、敲打・剝離成形の様態につき観察する。特に石材の限定される傾向の強い本器種に於いては、製作の痕跡とその工程を観察することが重要である。紫材は標と剥片の場合には形（縦長と横長）を記録する。

製作技術については、富山県を始め、報告文中に記されることが多い〔文献1・11〕。論考としても原料の獲得から製作工程まで考察した例〔文献12〕や特殊な技法（照切）に関して扱った例〔文献12・13〕などがある。

4. 石材の種類は石槍・石鎌と同様な考え方である。

文献

1. 山木正敏 「田調査の成果」北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町福5-1 境A遺跡 石器編

1990

2. 山本正敏 「北陸における縄文時代の磨製石斧」『縄文時代の日本の文化』
3. 佐原 真 「石斧論」『考古学論集 旋祝松崎寺と先生六十三歳論文集』
4. 佐原 真 「石斧再論」『森貞次郎博士七十年紀念古文化論集』
5. 水村理耕 「縄文時代石器における機能上の実験(2)、磨製石斧」考古学ジャーナルNo50
6. 木村剛郎 「縄文時代石器における機能上の実験(3)、手斧」考古学ジャーナルNo54
7. 小池 幸 「④磨製石斧型 阿久遺跡をめぐる諸問題」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—原付その5
8. 高坂一夫他「磨製石斧 第2節縄文時代の石斧」発掘遺跡
9. 大森恵志 「小瀬沢町上平出遺跡の接着部のある磨製石斧」山梨縣考古學協會誌第4号
10. 山口成洋 「こわれた石斧—石斧破損資料の観察—」静岡県埋蔵文化財研究所研究紀要III
11. 松島吉信 「4.まとめ 石器製作技術の一様相」北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編2--
12. 阿部朝信 「第6章磨製石斧生産の様相」史跡 寺地遺跡
13. 山本正敏 「(2)馬場D遺跡における磨製石斧の製作 V調査の成果」北陸自動車道遺跡調査報告
—朝日町編3—
14. 岩野見可 「擦切痕を残した石斧の新例」考古学雑誌第42巻第2号
15. 金子拓男 「中部地方における斜刃石斧と擦痕技法」古代文化第21巻第3・4合併号
16. 赤堀英三 「磨製石斧の形態と石質との関係に就て」人類学雑誌第46巻第3号
1989
1977
1982
1970
1971
1982
1983
1991
1990
1985
1987
1987
1987
1957
1969
1931

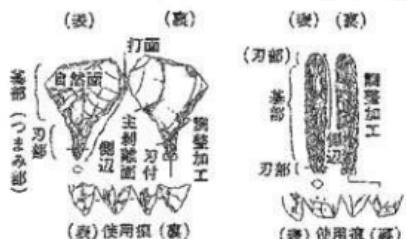
10. 石錐 (第9表、第23・24図)

1. 法量は作業能力を考える上での比較基準であり、重さの属性での比較が有効である。
大きさの視点は、報告文中では一般に記載されるが、参考として横断的に取り上げた例はない。
2. 機能部は直接対象物に作用する部位（錐部）と柄または手に保持する部位（基部=つまみ部）に区別できる。錐部は刃付け・数・長さと幅・厚さ・断面の形と円周長・使用痕の種類・範囲と方向・欠損部位と状況・再生を観察する。基部では接着痕跡と付着物について記述する。
錐部の・・・錐部としての刃の形成法を観察する。作出には平面で1側邊と2側邊加工の区別
刃付け
が、断面で片側一面と両面加工との区別がある。
- 数・・・刀として機能した錐部の數を示す。多くの場合は一つである。
- 長さ・幅・・・錐部として成形される部位の長さと幅・厚さを最大値で測定する。
厚さ
ex) 長さは一般に錐部に施された加工範囲で測定する。
- 形と円周長・・・機能部の作業を推定する手段として、断面の形状を観察し、円周長を測定する。
形状は使用により変形を伴うので使用頻度あるいは作業対象物の推定に役立つ。
- ex) 観察は対象物に接触し作用する部分とそうでない部分に対して行う。円周長は推定できる期待値で表示するのが良い。
- 使用痕跡・・・痕跡には摩耗や損傷があり、その範囲と方向・頻度を観察する。
ex) 範囲は損耗を長さで計測し、方向は線状痕の向き（右回り・左右など）で示す。
頻度とはその度合いのこと、遺跡内あるいは同一時期の地域内で比較する。

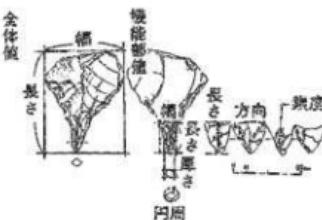
A = 機械的に記述必要 B = 表面内に検討必要 C = 記述は有効な活用なし
 甲 = 順次記載 乙 = 一般的に記載 内 = 特有ある記載 丁 = 個別に記載 × = 記述されない

番号	法 製 (最大値)				打 画		機 能 部					新規性		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	直 無	形狀 角度	刃付 平面	付 助面	数	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	円周 (cm)	
測1	2.6	2.0	0.5	1.5	○	剝面	-	2側	両面	1	1.3	1.2	0.3	0.8
2														
	C 甲	B 甲	B X						A X					C 乙
	使用 槻	被削物	付着物	大 槻	研磨	研磨	転 用	被削物	自 由	石 材	用 法	分類	指標	
	高 度 長さ (cm)	方 向	幅 度	長さ (cm)	状 態	研 磨	直 無	直 無	自 由	材 料	用 法	分類	指標	
	○ 2.0	左 右	○ -	-	完	..	-	-	無限	○ チャート	回転			
	A X	A X	A 乙	A 内	B 内	A 甲	A X							

第5表 石鎚の属性表



第23図 石鎚部位の名称



第24図 石鎚の測定箇所

欠損と再生・・・欠損の有無とその部分を記録し、欠損断面での状況（割れ方）を観察する。合わせて再加工・転用の有無を記録する。

基部（つまみ部）は機能部を補佐する属性である。器種として機能を発揮する場合には柄に装着あるいは指で保持する必要がある。したがってその形態と作出法・装着痕跡・付着物について観察する。形態・・・・・基部の形態は平面形に類別を与える。

装着痕跡と・・・鎚の使用法を推定する手段として、装着痕跡と摩擦剤の有無を観察する。
付着物

機能部に関する論述は少ない。使用痕の有無については概文に比較的多く記述されるが、具体的な数値を示した例は意外に少ない。痕跡の部位と状態から使用法を考察した例（文献1・2）や装着の仕方について論じた報文がある（文献3）。石鎚の形態と円周長については、阿蘇貝の最大値（圓周底径）からの統計が、萌生時代の資料について言及されている（文献4）ので参考にすると良い。

3.製作法は剥片剝離打面の有無と形態・剝離の角度を測定し、素材の区別と自然面の有無を観察する。石鎚と同様な石材を用いる傾向が強く、素材の選択と製作の仕方を観察することは、器種の独立を規定する要素として重要である。剝離の角度は主剝離面と打面が成す角度の補角で測定

し、素材の区別は剝片の形（概長と横長）を記録する。

製作技術が参考として述べられたことはほとんどない。素材獲得から整形加工に至るまで言及したものや、鋸部の作出法と全体形から類別を実施した論考が数例ある（文献5・6）。

4. 石材の種類は石棺・石鏡と同様である。

文献

- | | |
|---|------|
| 1. 稲葉勝彦「4. 剥片石器第3群」上深沢遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書 I | 1978 |
| 2. 齊藤英生 「石鏡一枚・牟婁郡中津川市内の遺跡を例として」愛知女子短期大学研究紀要第25号 | 1992 |
| 3. 小池 孝 「④石鏡型 阿久遺跡をめぐる諸問題」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—原村その5 | 1982 |
| 4. 鈴原晴美 「4. 石鏡」『佐世文化の研究5 道具と技術』 | 1985 |
| 5. 矢島国雄・前山耕明 「石鏡」『縄文文化の研究7 道具と技術』 | 1982 |
| 6. 町田勝利 「石鏡について思うこと」信濃第42巻第10号 | 1990 |

11. 砥石（第10表、第25・26図）

1. 法量は砥石の用法を判断する要素である。用法とはその用い方・作業動作を指し、具体的には置いて、あるいは手に持つての使用の別を示すものである。長さ・幅・厚さの属性値での比較が一般的であるが、重さのみで判断基準を示すことも可能である。

砥石と手持ち砥石の別を概念的に指摘した記述は多いが（文献1・2）、計測値を示して類別をりえた具体的な論考はない。

2. 機能部は使用および加工対象を推定する要素である。砥面は研磨により変形した部分で、その數・構成（使用状況）・方向・大きさについて観察し、合わせて欠損部位と状況・再生を記録する。特に構成と大きさの要素は対象物を積極的に推定できる属性となる。

砥面の数・・・砥石は一般に多面体であり、その中で使用された面数を計上する。各面内に存在する砥ぎ部の数（使用単位）は構成の項目で扱う。

ex) 表面と裏面が使用された場合、砥面数は2となる。

構成・・・砥面を構成する一つ一つの使用単位を観察し、その数を計上する。

ex) 面的に使用されていれば面構成であり、溝を形成していれば溝構成である。

方向・・・運動の方向を考える要素である。方向とは砥石本体の長軸に対する砥面の傾きであり、角度で表示する。

大きさ・・・加工対象物の大きさを推定する手段である。研磨の方向を考慮し、長さと幅・深さを測定する。

欠損と再生・・・欠損の部位を記録し、再生の有無を観察する。

転用・・・素材として他器種からの転用あるいは供用の有無を示す。

機能部としての延命の観察は本器種で最も重要な視点であるが、積極的な論述は少ない。砥面の構成要素には、形状の観察から磨削石斧や骨角木製品を示唆する記述が目立つ（文献3・4）。同様に研磨石器である石刃・石錐・石冠などの類については殆ど論述されていない。使用の単位については矢柄研磨器との関連から具体

A = 修理に記述必要 B = 記述内容に付随必要 C = 現在は有効な活用なし
 単一複数が複数ある記載 内記載あり記載 × = 記述されない

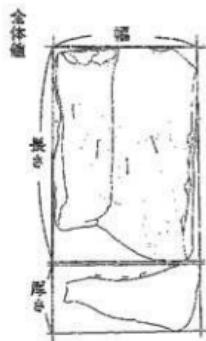
番号	法 鋸 (造大廻)				延 長 度 (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	延 長 度 (cm)				幅 (cm)			
	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)					長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)
例1	29.4	(19.8)	9.2	(6.1)	1	4面	左15	20.0	5.5	/	/	/	/	/	/	/
2																

				長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)
				長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (kg)

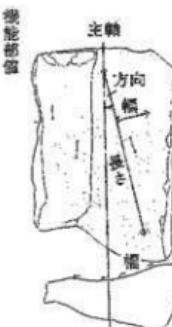
第10表 斧石の属性表



第25図 斧石部位の名称



第26図 斧石の測定箇所



的な検討があるが〔文献5〕、方向(観察)や大きさを含め一般的に少ない〔文献6〕。

3. 製作は全体の整形と延面の作り出しの有無を概観する。

未製品が存在しない点も手伝って、製作技術に関する論考は殆ど発表されていない〔文献7〕。

4. 石材の種類は磨石・凹石・敲石の考え方方に準ずる。研磨工程が材質論に左右されると考えられることから、特に粒子の大きさについて観察する必要がある。

材質と研磨の工程については文献1に詳しく記されている。

文献

1. 宮下健司「古漢城石」『韓文化の研究』道芸と技術』 1982
2. 宮下健司「日本における研磨技術の系譜」『論集日本原史』 1985
3. 岩井正五郎「西ヶ浜貝塚発掘報告書その1」東京人類学企画部編 9巻第95号 1994

4. 渡辺伸男「本邦先史石器類説」「人類学・先史学講座」19	1940
5. 加藤晋平「北京アジアの半島有縫石について」「日本民族文化とその周辺(考古編)」	1950
6. 司田勝則「2.石器」国道122号線バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 ささら(II)	1985
7. 司田勝則「延石についての覚書」史跡第12号	1987

12. 原石・石核 (第11表、第27・28図)

1. 法量は原材の入手過程(在地材の場合は入手活動に伴う仕事量を直接に、限定施設をとるものでは交流ないしは行動の範囲)を考察する要素であり、また遺跡内での道具生産の仕事量を想定する基準である。一般には重量で比較することが多いが、長さ・幅等大きさの属性でも可能である。

原石や石核は利縁でないためか、報告文中に記述されることはあるが、属性を観察して論じられることが多い。しかしながら剥片とともに石器製作技術の解明に利縁することのできる大切な資料であり、属性観察の価値は高い。近年複数作業の見直しに伴って、漸く精緻な観察が実施されるようになってきた(文献1~3)。

2. 機能的側面には打面と作業面があり、それぞれ製作法を推定する要素である。作業面とは実際に剥片が剥離された面(部分)を指し、その測定は獲得された剥片の大きさ、あるいは枚数(生産量)を推定する手段である。最終的な剥離面の計測は、限界の剥離角と剥片の大きさを知る手掛かりである。打面の観察はその数・状態・調整の有無と回数・転移の有無と回数・角度について実施し、作業面ではさらに剥離の方向・大きさ・形・角度・剥離数を加え観察を行う。

打面の数・・・剥片剥離を実施した打撃面(打面・打点)の有無と状態を観察し、その数を計上と状態とする。原則として原石には作業結果としての打面は存在しない。

ex) 状態とは自然面と剥離面の区別を示す。

調整と転移・・・調整とは打面の作り直し(再生)行為を指し、転移とは作業面の転移と一体となって起こる打面の移動を言う。それぞれに有無と回数・角度を記録する。ただし、同一打面上での打点の移動は別に扱う。

作業面の数・・・作業面は剥離作業が実施された面であり、石核を構成する面の幾つかが作業面となる場合、数と状態を記録する。

ex) 石核の正面と1侧面に剥離が認められる場合は2面と数える。状態は剥離された面が自然面であるのか剥離面であるのかを観察する。

調整と転移・・・調整及び転移は作業面に関する再生と移動であり、打面の項と同義である。

方向と角度・・・作業面を正面とした場合、打面とある角度(剥離面)を持って接する。この時打面を基本線として剥片剥離軸の方向と角度を測定する。

ex) 作業面に剥離面が5枚観察された場合でも打面が同一であれば、多少の差異はあるが、方向は1つである。また打面と剥離軸のなす角度は5枚の平均値で求める。

剥離数・・・作業面に残された剥離面の数を剥離の切り合いで読み取りながら計上する。推定できる最大の剥離数と確実に活用できる剥片の数を数える。

ex) 最大数は多くの場合、打撃数に一致する。活用できる数は剥片剥離の有効剥離枚

A = 備考的に記述必要 B = 内容に検討必要 C = 現在有効な活用なし
甲 = 横度が大きい 乙 = 一般的に記述 内 = 片寄りある記述 丁 = 個別に記述 X = 記述されない

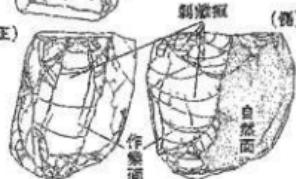
番号	法	盤(最大)			打面			作業面																		
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	露さ (g)	数	状態	横 有無	斜 有無	移 角度	数	状態	横 有無	斜 有無	移 角度											
例1		7.2	7.3	5.4	450	1	剥離面	あり	2	あり	1	180	3	剥離面	なし	あり	2	90								
2																										
↓ 甲 ↓			↓ 乙 ↓			↓ 日 ↓			↓ 月 ↓																	
↓ 作業面 ↓			↓ 剥離面 ↓			↓ 利離面 ↓			↓ 剥離技術 ↓			↓ 自然面 ↓			↓ 素材 ↓			↓ 石材 ↓			↓ 分類 ↓			↓ 備考 ↓		
↓ 甲 ↓			↓ 乙 ↓			↓ 日 ↓			↓ 月 ↓			↓ 甲 ↓			↓ 乙 ↓			↓ 日 ↓			↓ 月 ↓					
↓ B ↓			↓ X ↓			↓ A ↓			↓ B ↓			↓ X ↓			↓ A ↓			↓ 甲 ↓			↓ 乙 ↓					

第11表 石核の属性表

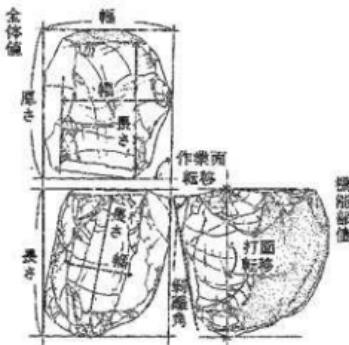
(上)



(正)



第27図 石核部位の名称



第28図 石核の測定箇所

数を推定できる。

大きさ・・・剥離された痕跡は複数にわたるが、期待できる最大の大きさと確実に剥がされた剥片の大きさを長さと幅で測定する。

ex) 剥離できる最大の大きさは作業面の大きさと一致する。剥離された剥片は最大値で記録する。

剥片の形・・・測定した剥離面の大きさの形（縱長と横長）を区別する。

剥離角・・・打面から剥片が剥離された角度を測定する。打面と作業面の接する角度を内角とし、その時の補角（剥片側の角度）を外角とする。この時の2者が剥片剥離角に相当する。

ex) 打面を基準0度とし、内角が80度であれば、外角は100度である。剥片剥離角は

どちらか一方に統一して記録するのが良いが、一般に石核では内角を、剥片には外角を用いている。

打面・作業面についての観察は、先土器時代の報文および論文に詳しい。縄文時代では各属性について横断的に言及した報文は少ない〔文献4～6〕。

3. 剥離技術は具体的な剥片剥離の方法を示すものであり、上記2・3の項目により類型を設定することができる。核は剥離回数が増すごとに全体形を変容するので、むやみに類別数を増やすべきことが得策である。何故なら剥離技術は、剥片の剥ぎ取り方を類型化するものであり、剥離回数や剥離面の転移など石核の最終的な形態を生成した点を問題とするのではないからである。

これまで剥片剥離法に関する知識は、石核や剥片などの個別資料の分析から間接的に技術内容を復原するもの〔文献8〕であったが、近年の接合資料の增加に伴い漸く具体的な事例での検討が可能となってきた〔文献1～3・7〕。現在まだ検討材料は少ないが、可能な限り検合作業を繰り返すことによって幾つかの事例追加ができる〔文献5〕。また報文では個別の属性観察を積み重ねることがやはり大事である〔文献4～6〕。

4. 石材の種類は在地なら入手活動に伴う仕事量を、限定地なら交流ないしは行動の範囲を考察する要素となる。したがって、一般的には材の産地を問題とする。

石材は黒曜石や真岩など特定産地の材に対して、法蓋や質などの観点から分布層の問題に触れた論考は数多い。

文献

- | | |
|---|------|
| 1. 後藤秀一「金剛寺貝塚採集の剥片接合資料」金剛寺貝塚 | 1980 |
| 2. 菅原弘太郎他「IV考案〔3〕 PG50の住居跡出土接合資料について」東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書V | 1980 |
| 3. 金田容広他「第V章剥片生産資料について」里浜貝塚III | 1984 |
| 4. 松藤和人「9伊木力遺跡における石器組成と剥片剥離法の変遷」伊木力遺跡 | 1990 |
| 5. 遠巣正信「(w) 石核IV章C石器」関越自動車道開保免気泡を報告書「城之越道路」 | 1991 |
| 6. 斎藤勝則「第3章第3節(2)石器」長野県中央道長野将根藏文化財発掘調査報告書II 北村遺跡 | 1993 |
| 7. 後藤秀一「縄文時代における剥片生産について」太平壁史意第4号 | 1985 |
| 8. 田中英司「縄文時代における剥片石器の製作について」埼玉考古第16号 | 1977 |

13. 剥片・碎片 {楔形石器} (第12・13表、第29～32図)

1. 法蓋は剥片剥離によって生産された素材を間接的に推定できる要素である。原石・石核として遺跡内に残された資料の限界を補い、それらに変わる資料としても有効である。原材の種類や剥片剥離の仕事量を推察することが可能。重量と個体数で表示するのが良いが、石器の素材として製作を考える上には、長さ・幅・厚さの属性での比較も必要である。

報告文での剥片記録は、1970年代後半から僅かずつ増加してきている〔文献1・2〕。観察の視点は先土器時代の方法を援用したものが大部分で、文献3・4に詳しい。

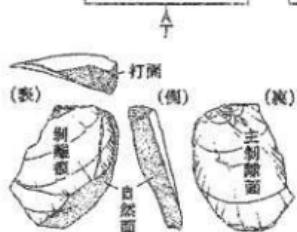
2. 打面・剥離面の観察については、原石・石核の分析と同様である。

打面では有無と状態・調整の有無と回数。

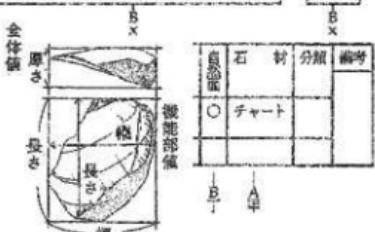
剥離面では状態・剥離痕の有無と数・長さと幅・方向を観察する。合わせて剥片の剥離角を計測し、形を観察する。

A=技術的に記述必要 B=記述内容に検討必要 C=現在実効的な活用なし
甲=精度が高い 乙=一般的に記述 内=片寄りある記述 丁=僅かに記述 ×=記述されない

番号	法 量	量 (最大値)				打 面	刺 離 面				測 定 部 位	測 定 方 法	刺離技術	
		長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)		状 態	剥 離 度 有無	剥 離 数	長 さ (cm)	幅 (cm)			
例1		4.7	3.3	0.9	15.1	1	自然面	剥離	○	1	4.3	(3.9)	114	鍛 鍛



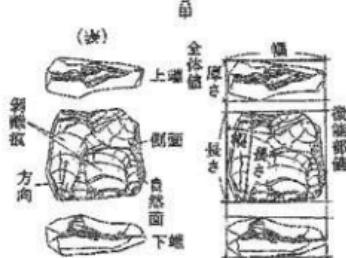
第28図 刃片部位の名称



第12表 刃片の属性表

A=技術的に記述必要 B=記述内容に検討必要 C=現在実効的な活用なし
甲=精度が高い 乙=一般的に記述 内=片寄りある記述 丁=僅かに記述 ×=記述されない

番号	法 量	量 (最大値)				奪 取 部 (上端・下端) (前面)	剥離面				測 定 部 位	測 定 方 法	刺離技術
		長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)		有 無	形 状	有 無	形 状			
例1		2.3	1.5	0.9	8.2	2	○	縦状	○	縦状	-	-	表面



第13表 横形石器の属性表

第31図 横形石器部位の名称 第32図 横形石器の測定箇所

3. 刺離技術および4. 石材の種類は原石・石核と同様に観察する。

* 沢山剥離裂紋の有無による類別は、「横形石器」として区別されてきた資料の抽出にあり、積極的にこれを石器として位置付けていくのであれば、別項で扱うのがよい。類別の視点となった上下端部(打面=加工作部)の形状および表面面の状態について観察を行う。この時観察項目は石核

や剥片と同様であるが、剥片剝離作業以外の意図的な作出の有無が目的となるため、同じ箇所を観察しても視点はまったく別となる。

端部の数・打面あるいは加撃部に相当する部位の数を計上する。

有無と形状・端部の有無とは挟み落ちとしての加撃部が存在するか否か、または欠損などによって失われていないか否かを観察する。状態は加撃部が面としてあるのか、線状あるいは点状につぶれているのかを観察する。

ex) 次態の記録は線状のつぶれと点状のそれが組み合わされれば、「線と点」の加撃部構成となる。

表裏面・表裏面の状態・挟み落ち作業に用いられた剥片の種類と作業以前の加工の有無を考察する要素として、本器種の表裏面の状態を観察する。

ex) 具体的には自然面の有無と剝離面の状況を記録する。

剝離痕の数・表裏が剝離面で構成される場合、剝離痕の数を剝離の切り合いで読み取りながらと大きさ数える。また剝離の方向および推定できる剝離痕の最大長と最大幅を測定する。

楔形石器については不明確な資料であるだけに個別的な研究は浅い〔文献1~3〕。使用痕跡からの検討〔文献4〕や使用実験からの追究〔文献5〕など積極的な論考も幾つかある。文献6の発表以降、報告文にも取り上げられることが多くなってきた。

3. 製作法に関する觀察は2の機能部属性から検討を行うのが良い。

楔形石器製作の存否は縄文時代における両面剝離痕を留める剥片類の位置付けとともに未だ流動的である。

両面打法としての技術分派が何を意味しているのかによって、性格付けも決まってくる〔文献3・7・11〕。

4. 石材の種類においても原石・石核の観察と同様である。

文献

剥片

- | | |
|--|------|
| 1. 後藤勝彦「1剥片石器の素材」上深沢遺跡 東北古物車道追跡調査報告書 I | 1978 |
| 2. 鹿島正信「(v) 剥片IV兼C石器」関越自動車道関保発掘調査報告書 城之越遺跡 | 1991 |
| 3. 竹岡俊樹「ル・ラザレ遺跡における剥片の分析」考古学雑誌第70巻第4号 | 1985 |
| 4. 竹岡俊樹「テラ・アマタ遺跡における剥片石器の分析」考古学雑誌第71巻第4号 | 1985 |
| 5. 四中英司「折断と縄文時代の剥片石器製作」石器研究二 | 1981 |
| 6. 中村昌典「縄文文化に伴う石器の研究—製作技術を中心とした基礎的研究」次世学園論第二 | 1968 |

楔形石器

- | | |
|--|------|
| 1. 横田俊雄「折断回ある石器」ふたがみ・二上山・北竜石器時代遺跡群分布調査報告 | 1974 |
| 2. 美島 忠「昔根型形削器考」長野県考古学会誌21号 | 1975 |
| 3. 萩村道雄「ピエス・エスキューについて」「東北考古学の諸問題」 | 1976 |
| 4. 桐原 伸「第2・第3・第4遺物集中地點の石器部の使用痕分析」麻敷乱木遺跡発掘調査報告書 | 1981 |
| 5. 小林博昭「バイボーラーテクニックについて」考古学ジャーナルNo.78 | 1973 |
| 6. 阿部朝衛「ピエス・エスキュー(楔形石器)」神戸型土遺跡 | 1979 |
| 7. 四中英司「縄文時代の剥片石器製作」風早遺跡 | 1979 |
| 8. 萩村道雄「ピエス・エスキュー、楔形石器」「縄文文化の研究? 道具と技術」 | 1982 |
| 9. 阿部朝衛「バイボーラーテクニックの技術的有効性について」「考古学論叢」 | 1983 |

10. 町田静則「複形石器の分類」いわき東洋文化研究第六号
 11. 宮田栄二「鹿児島県下のピエス・エスキース」南九州絶文通報No.3

1986

1990

V おわりに

開拓行為とともに歩む日本の考古学は、いかに早く調査し、報告文を作成するかに多大な労力を費やしてきた。にも関わらず今日の考古学者が、文化財としての保護と學問的な位置付けを与えられ続けているのは、文化財に対し強い興味・関心を抱く国民と確固たる意思をもった考古学研究者がいるからである。考古学研究者の大部分はいわゆる「行政内研究者」⁽⁸⁾であって、「労働者・研究者・教育者・行政官の四つの立場」の中で「自覚し、良心的な発掘と整理・研究体制を確立させよう」と努力している。

本稿はこうした「行政内研究者」に対して、考古学研究を推進する意味において、報告文作成に関する古器の観察・記録法をまとめた手引きである。地方自治それぞれの立場で適用を判断し、改善を加えて活用いただければ幸いである。

註8 小西義武「考古学と現代」『日本考古学を学ぶ(3)』

1980

中部高地の弥生墳墓をめぐる一想定・92

—長野市・光林寺裏山遺跡出土品の再検討から—

青木一男

I 想いのきっかけ

長野県埋蔵文化財センターは発足以来ここ10年間、高瀬自動車道建設の信濃北上とともに松本盆地から長野盆地・佐久盆地への調査を進めてきた。松本盆地では古代の村々を縦断する形で記録保存が行なわれ、今日、古代村落の復元・政治・経済・文化への歴史叙述追求が試みられているところもある。長野盆地でのここ5年間の調査においては、千曲川流域の自然堤防・後背湿地を高速道路は縦断し、背後の山の尾根は「土採り場」として、従来の当地では考えられない面積が記録保存されることになった。その中から新見知が得られつつあることも事実であるが、息を吹き掛けてあげるのはむしろこれからであろう。

長野盆地の調査で特記される事項として、弥生時代中期後半から後期のムラ・生産の場・墓が構造的に調査されたことである。篠ノ井遺跡の環濠のムラと後背湿地の水田（石川条里遺跡）、松原遺跡の中湖の環濠のムラと礎床木棺墓の集団墓、古墳出現期の低墳丘墓（北平1号墳）、川田条里遺跡の水田、桜田遺跡の環濠のムラ等である。⁽¹⁾一日も早い「報告書」の刊行が待たれているところである。

ここでは、日常、記録保存の調査にあけくれる中で考えている中部高地の弥生時代後半期の墓について、既出資料・遺跡『長野市・光林寺裏山遺跡』を再検討することによってレポートする。

II 長野市・光林寺裏山遺跡の検討

1・光林寺裏山遺跡の概要

当遺跡は長野盆地南部の長野市篠ノ井小笠原に位置する。長野盆地南部は大河川の形成した自然堤防・後背湿地が縦長の盆地内に発達し、その背面は急峻な山となる。「光林寺裏山遺跡」は眼下に犀川の形成した自然堤防・氾濫原を見下ろす低い馬根上に位置する。

明治35年、桑畠造成のため光林寺裏山を開拓した際、玉類・鐵器・土器等がまとまって掘り出されたとされ、今日、遺跡として周知できるきっかけとなった。出土遺物は明治36年、東京帝室博物館へ「光林寺裏山出土品」として寄贈されている。昭和47年、本村豪章氏は「長野市篠ノ井光林寺裏山出土遺物の研究」「MUSEUM」254号のなかで、東京国立博物館収蔵品の検討、現地調査、聞き取りのなかから、鐵器に古墳時代の遺物が混入しているものの、その出土遺物（第1図）の多くを無葬遺構との関連で想定し、光林寺裏山遺跡を弥生時代後期の埋葬遺跡として推察した。⁽²⁾現在

墳丘等は観察できない。当時の弥生墳墓形態が充分明らかでない墳の断期的な論議であったが出土状況が不明確なこともあります、今日まであまりとり上げられることがなかった。

本村氏の論稿によれば、明治36年、東京帝室博物館へ寄贈された遺物は蓋付小型無頸壺（1）、勾玉（4）、管玉（105）、鉄刀（1）、鉄劍（2）、鉄斧（5）である。「遺構の有無・出土状況等についての報告・記録類等は全く存在しない。」ということであるが、収入品があっても以下の事例によってかなり一括性の高い資料群としてとらえたい。

a . 「考古界」ニー10の記事によれば、

光林寺住職西沢念龍氏が同寺所有山林

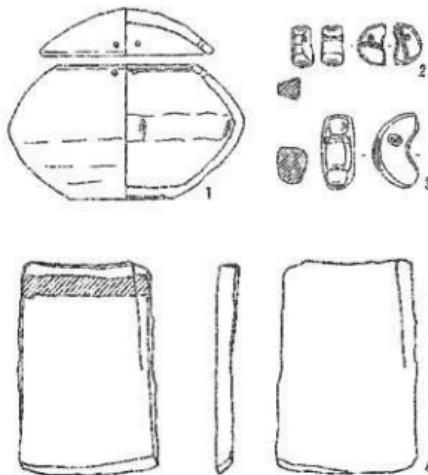
を発掘した折に出土したとされる。同寺が行なった桑畠造成の折とすれば、限られた空間での出土ということになる。

b . 本村氏によれば、念龍氏から「3代目の住職西沢・真氏は「小高くなったところからひとまとめになって出土した」との先代からの伝聞を記憶しておられる。」とのことである。

c . 挖り出された当時、住職が警察に届けているところをみると、ごく限られた空間から偶然的にまとめて出土した状況が何れ、この時点で他の遺物もまとめられて提出された可能性もある。

d . 玉類が小型土器や鉄器を作つて多量に出土した例として、佐久市・社宮町遺跡、南谷市・天王垣外遺跡例があること

e . 資料の多くが時間的に同時期の資料群であると想定されること



第1図 光林寺裏山遺跡出土品

2. 出土資料の時間的検討

同遺跡からはひとつの蓋付小型無頸壺が出土している。此器はこの1例のみである。本村氏は詳細な土器の観察から、弥生時代後期の箱消水式土器と認定し、当資料群も弥生時代後期の所産として理解した。

同蓋付小型無頸壺の特徴として、1・器高が6.2cmの小型であること。2・頸部最大径を胴中位にもちソロバン玉状をなすこと。3・丁寧なヨコヘラミガキが施され、赤色焼成されることがあげられる。

同例との類例はひじょうに少ないながらも長野市・平柴平遺跡Y4号住居址（第2図）、⁽³⁾長野

市・中俣遺跡20、27号住居址⁽⁴⁾等に散見される。いずれも弥生時代中期後半の栗林様式の土器群の組成を示す。平柴平遺跡Y4号住の組成にみられる小型壺は赤彩されたり、注口をもち栗林様式後半期の組成にみられるが、頸部以上を取り除くと同蓋付小型無頸壺と同じカタチとなる。その成形技法には共通したものがある。前者が液体を、後者が個体を収納したものと考えたいが、いずれも、収納部をソロバン玉形にするという共通点がある。無頸壺は弥生時代後期後半の箱清水様式まで数は少ないながらも見られる。長野市・四ツ屋遺跡の無頸壺⁽⁵⁾はやや大型であるが、胴部最大径は胴部上位にある。

ごく限られた資料で時期を想定することは極めて危険ではあるものの、同蓋付小型無頸壺の器形が栗林土器様式の組成に基づいていることを積極的に評価し、栗林式土器としてとらえ、その時間的位置を弥生時代中期後半としてとらえたい。なお、弥生時代後期前半の吉田式土器は資料的制約があり同蓋付小型無頸壺の残存の有無は光分明らかでない。しかしながら、弥生時代後期後半の箱清水式土器まで残存しないことは確定であろう。

同遺跡出土資料の多くを一括性の高い資料群と想定し、出土蓋付小型無頸壺を弥生時代中期後半の栗林式土器と考えたが他の資料ではどうであろうか。玉類について検討する。勾玉は硬玉製で、半円状の形態を成し、断面は稜線が明瞭に残る台形状をなす。管玉はグリータフ製34点、鉄石英製71点を数えるがいずれも径2.5~3.5mm、長さ1~2cmの細型短小をなす。これら玉類の組成は古墳出現期の北平1号墳⁽⁶⁾にもみられ、前期古墳である川柳将軍塚古墳⁽⁷⁾においても残存するものの、弥生時代中期後半の資料と併存する率が高い。

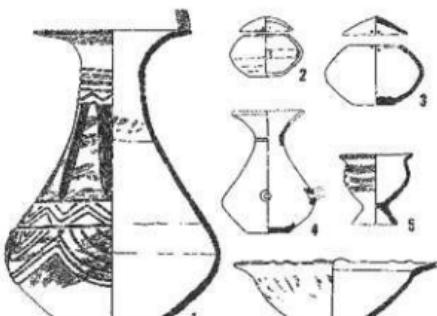
鐵器については出土資料の時間的検討をおこなう積極的な考えは持ちあわせていないが、片刃の板状鐵斧が弥生時代中期後半の栗林期に盛行する扁平片刃石斧の鐵へのコピーと考えると、資料群の時間的根拠にもなりうる。

3. 遺構の性格の検討

前述したところであるが、同遺跡の場合、一括性の高い資料群が残るだけで遺構については全く明らかでない。そこで、玉類が小型土器や鐵器を伴って出土した事例を検討し、遺構の性格を推定するものとする。

①佐久市・社宮司遺跡

千曲川の沖積高地上に立地する。昭和27年、畑作深堀りの際、硬玉製勾玉1点、碧玉製管玉10



第2図 平柴平4号住居址出土セット（1、3~8）
光林寺裏山（2）

点、鐵石英製管玉15点、板状鉄斧1点、鏡片再加工ベンダント1点、小型壺底部片1点が採集された。状況、遺構の有無は明らかではないがまとまって出土したものとされる。

壺は腹部最大径以下の底部が残るのみで文様は見られない。外面にクテヘラミカキが施される。底部の立ち上がりから弥生時代中期後半～後期前半の時間を与えることが可能であろう。他の遺物の組成を考慮するならば、弥生時代中期に位置づけたい。

②御谷市・天王塚外遺跡

諏訪湖湖岸の沖積低地を望む低平な段丘上に立地する。同段丘上には当地域の弥生拠点集落が展開する。明治40年、道路工事の際、小型壺が掘り出され、その中から多量の毛鱗が出土した。玉類の内訳は硬玉製大型勾玉4点、小型勾玉62点、碧玉製管玉152点、鐵石英製管玉132点等である。

土器は現在壺の底下半部が残るのみであるが、出土当時の記録に「直径約四寸高又約四寸の壺様のもので（略）外面に網の押し模様の如きがあり」とあり、頸部に網文の施文があったことが伺われる。底下半部の形態からも弥生時代中期に位置づけることが可能である。

③長野市・塙崎遺跡群伊勢宮遺跡⁽¹⁰⁾

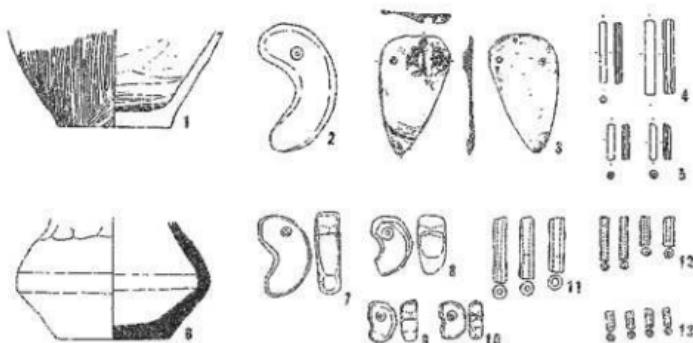
千曲川の自然堤防上に立地する。同遺跡は縄文時代晚期以来集落が展開するが、長野市教育委員会によって、弥生時代中期前半の木棺集団墓群調査されている。27基の木棺墓が調査され、そのうち8基の棺内より土器、管玉、小型片刃石斧等が出土した。2号木棺墓からは碧玉製管玉13点と筒型土製品が、21号木棺墓からは10個の小型土器と管玉2点が出土した。

④塙尾市・丘中学校遺跡⁽¹¹⁾

赤木山丘陵端部の平坦面に立地する。一辺中央部に一箇所の隣接部をもつ方形周溝墓主体部内より管玉5点、ガラス小玉110点、鐵鏃が出土した。時期は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と想定される。

⑤飯山市・須多ヶ峯遺跡⁽¹²⁾

須多ヶ峯台地の平坦部に立地する。小形不整円形の周溝墓主体部内より硬玉製勾玉1点、鐵鏃



第3図 天王塚外・社宮司遺跡出土セット（1～5：社宮司、6～13：天王塚外）

が、周溝内より壺・甕・高坏が出土した。時期は弥生時代後期後半と想定される。

①～⑤と玉類が小型土器や鉄器とともに出土した遺跡例をあげた。

社宮司・天王垣外遺跡例はその遺物組成、時期が光林寺裏山遺跡例と同様であるものの、いずれも調査的な意図がない偶然の出土であり、遺構についてはまったく明らかではない。遺構が明らかでないため、これまで同3遺跡の遺物群についてあまりとりあげ論考されることがなかった。3遺跡について若干のまとめをしてみよう。

- a・ 遺物は玉類・鉄器・土器という組成をもつ
- b・ 勾玉は硬玉製、管玉には碧玉・鈍石英製という組成をもつ
- c・ 玉類が多く、鉄器・土器は単品である
- d・ 土器は3遺跡とも各1点であり、いずれも小型の壺であった
- e・ 社宮司・天王垣外遺跡例は集落が点在する沖積微高地・段丘上に、光林寺裏山遺跡例は集落とかけ離れた低い尾根上に位置する。
- f・ いずれも発掘者は、焼土・炭化物・集石・硬化面等、遺構に関連するものを認知していない。

かつて、桐原健氏は天王垣外遺跡出土玉類をとりあげ「玉は司祭者の分身靈ともいい得られる。されば、司祭者の死に際して玉を籠めた壺が副葬されることも考えられるので、天王垣外出土ヶ處は墳墓址だったかもしれない」とし、これらの遺物群が墳墓にかかわる可能性を示唆した。⁽¹³⁾一方、岡谷市史において、戸沢充則氏は、これらの「玉宝玉」を所有できる「主体者」がいたことになる。としつつ、「共同体の宝器であった銅鏡が山の山頂や岩の陰に隠されるように埋蔵されたという状況を想定させないでもない。」とし、宝器埋蔵説をとる。⁽¹⁴⁾

光林寺裏山・社宮司・天王垣外遺跡例には1点の小型壺が多量の玉類、若干の鉄器も伴うという共通点があり、光林寺裏山例をのぞくと集落域あるいは集落に接して資料が採集されている。長野市・塩崎遺跡群伊勢官遺跡・松本市・宮淵遺跡・⁽¹⁵⁾飯山市・小泉遺跡⁽¹⁶⁾における弥生時代中期後半の集団墓（木棺墓・土槻墓群）は集落に接して展開しており、立地的には墳墓を想定してもよさそうである。玉の組成としての硬玉製管玉・碧玉・鈍石英管玉のセットも北平1号墳にいたるまで墓の副葬品となる。一方鉄器にいたっては弥生時代後期後半ないし古墳時代前期初頭の丘中学校・須多ヶ峯・猿ノ井遺跡の周溝墓⁽¹⁷⁾の主体部木棺内に鉄剣・鉄鎗等がみられることから、鉄器が墓への副葬品となつたとみて良い。小型の壺については玉をその内部に込めたか込めないかは別としても、弥生時代中期前半の塩崎遺跡群伊勢官遺跡21号木棺例をみるとかぎり、埋葬主体部内に小型壺が埋置されるらしい。我々は弥生時代中期の住居址を調査すると、しばしば、このタイプの壺の中にベンガラが込められている事象と出会う。朱がこれらの器によって棺内に持ち運ばれたことも想定できうるし、その器自体が副葬品として重要な役割を果たすかもしれない。

想定の上にさらに想定を重ねてきたが、光林寺裏山・社宮司・天王垣外遺跡例は墳墓の副葬品であった可能性がきわめて高いものと解釈をと/orみたい。さらに想像を逞しくすれば、遺物群は埋葬主体部内に込められていたものであり、木棺墓ないしは土槻墓が偶然の機会に掘り当てられ、遺

物のみが採集されたものとみたい。

III 栗林様式の墓への想定

光林寺裏山遺跡出土資料の時間的配置づけを弥生時代中期後半の栗林期にあて、遺構を木棺墓ないしは土墳墓であろうと想定した。弥生時代中期後半の墓についてはここ数年資料が増加してきている。松本市・宮潤本村・長野市・松原・飯山市・小泉・上野遺跡等である。しかし、いずれも正式報告がなされておらず詳細は明らかではない。報告範囲内において栗林様式の墓にせまってみたい。

1・弥生時代中期の墓域

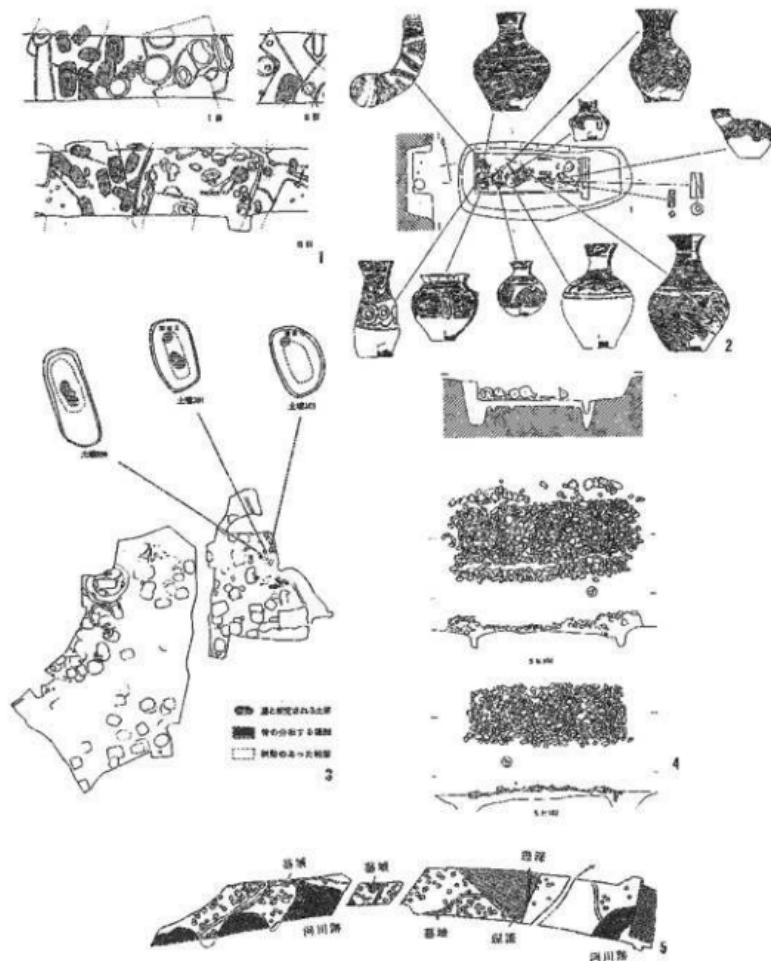
①・弥生時代中期前半の墓域

栗林様式成立以前の弥生集団墳墓群として、前述した長野市・塩崎遺跡群伊勢宮遺跡例が千曲川流域で明らかとなっている。墓域は自然堤防上に展開し、集落域に接するものと想定される。道路拡張による幅5m、長さ600mあまりの調査であり、墓域はその一部が明らかになったものであるが、調査者はI～V群の単位に区分している。墓域が散在する様子が伺える。木棺墓が主体をなし、一部に土墳墓が想定されるという。筆者は木棺墓の一部に壇床に礫を敷く礫床木棺墓があるものとみるがここではふれない。同遺跡の木棺墓を考察した千野治氏によれば各群の木棺墓には「階層差・出身差・出自差等を示すと考えられる本質的な差異は認め難い。」といい、「本遺跡の墓域群の構造は都出比呂志による分類中の墓塊単位に類似するものとらえられようか。」とし、各群を「それぞれが「世帯的なまとまり」を示す可能性が高いもの。」と考える。⁽¹⁸⁾

当集団墓は小口痕跡をもつ木棺墓群であるが、その構造・規模には隔たった違いは認められず、副葬品としての玉、石器、土器にも際立った違いは認められない。割合多くの副葬品を出土した木棺も他と同じ群の中に位置づいている。副葬品が多く認められた被葬者も千野氏がいう「世帯的なまとまり」の中に位置づくもので、そういう被葬者が集団墓の中に位置づいている様子が伺われる。さらに、当遺跡の場合、主体部ならびに墓域を区画する溝が見られないことも大きな特徴となる。そのあり方は、当地の縄文時代後・晩期の石棺墓による墓域をみるかの如くである。

②・弥生中期後半の墓域

松本市・宮潤本村・長野市・松原・飯山市・小泉・上野遺跡等において弥生時代中期後半・栗林様式期の集団墓が調査されている。木棺墓、礫床木棺墓、土墳墓等が溝をもたずに群として展開するが詳細は報告書の刊行を待たなければならない。これらの集団墓のなかで光林寺裏山・社宮司・天王垣外遺跡例のように多量の玉や鉄器を出土したという報告は耳にしない。玉があっても伊勢宮遺跡木棺墓群のように集団墓の中で位置づくものなのである。墓域の構成は弥生時代中期前半の伊勢宮遺跡例のごとく木棺墓が群集するタイプであり、その流れをくんでいるものとみられる。規模的にも他とかけ離れた墓はみられない集団墓を形成しているものと考えられる。



第4図 弥生時代中期の墳墓および墓域

1：伊勢宮、2：伊勢宮、3：宮澤、4・5：松原

2・中期の基にたいするひとつの想定

ここでもう一度、弥生時代中期後半の墓として想定した光林寺裏山・社宮司・天王道外遺跡例に立ち戻ってみたい。

社宮司、天王塚外遺跡例はその立地から集落に接した集団墓に位置づくものとして考えることが可能である。天王塚外例は標記盆地北岸地域の拠点集落域内に位置づくものであり、当集落内における集団墓内に多量の玉類をもつ墓が出現したものと考えられなくもない。集団墓内に玉類、鉄器、土器等を多用した墓の出現を社宮司・天王塚外遺跡例から想定したい。

一方、光林寺裏山遺跡例はその立地から、集落域に接しているものとは考えにくく、また、千曲川中流域の弥生中期の集団墓、後期の周溝墓等の墓域が自然堤防上の展開する例を考慮するならば、集団墓の中に位置づいているものとは考えにくい。自然堤防上から150mの比高差をもつ北平1号墳は古墳出現期の低墳丘墓であったが、單独墳であった。光林寺裏山遺跡例の墳墓も北平1号墳同様に、集団墓からかけ離れて構築された墳墓であった可能性もある。

ここで考えられることとして、中部山岳北域の弥生時代中期後半の栗林様式分布圏において、
 a 木棺墓、磯床木棺墓、土壇墓等の集団墓が構築されること
 b 集団墓内に玉類等を多用する横墓が出現すること
 c 集団墓からかけ離れる墳墓が出現すること
 が想定される。

b・cについてはいまだ確実な事例は報告されていない。また、ここで仮定的に想定したcの墳墓が北陸諸地域にみられる舟状墓的なものになるものか、東海道沿いにみられる方形周溝墓的なものになるものは想定しにくい。しかし、光林寺裏山遺跡例もそういったものの一つではないかと考えている。

IV 中部高地の墓への想い

筆者はかつて千曲川流域の周溝墓を考える中から、千曲川流域において、埋葬主体部に区画溝をもつ墓の出現を中期終末から後期前半に、いわゆる方形周溝墓の出現を後期後半に位置づけたことがあった。後者の出現の背景として東海地方の土器の移動、模倣現象と連動するものとしてとらえ、墓に見られる重要な周期として認識した。⁽¹⁰⁾

前回のレポートでは周溝墓の出現、墓域でのあり方を中心に整理を進めてきたため、中期の集団墓、その様相については手薄であった。

ここでは、想定の域を出ないものではあるが、弥生時代中期後半段階に集団墓からかけ離れ立地する墳墓を想定した。副葬される玉、鉄器は中部山岳地域で手に入るものでなく、他地域との交易等を媒介に結び付きをもった被葬者の姿が浮かび上がってこよう。小山岳夫氏によれば栗林式土器は「東日本中部の内陸部を本格的耕作農耕に導くのに大きな役割を果した土器」という。⁽²⁰⁾氏によれば、中部山岳地域の栗林式土器は北陸道、東海道地域の播磨文地域に拡散し、「動く土器」の一つである。その背景に、硬玉・碧玉・鉄石製の玉類、鉄器を入手してきた栗林式土器を携えた人々の姿が見え隠れする。交易を媒介とした行為の中から、もっとも伝統の世界が維持される墓にも変化が生じたと考えられなくもない。栗林様式終末の中に墓への大きな変化があったろうことを想定

して、憶測の上にさらに憶測を重ねた本レポートのまとめとしたい。

- 註1 長野県埋蔵文化財センター 1986年～1991年『長野県埋蔵文化財センター年報』4～8
ここ数年の調査では長野市舞ノ井遺跡群・新幹線地点の調査で弥生時代後期の墓域が明らかとなった。50基の不整円形面積墓が解説し、銅鏡・銅鏡をもつ被葬者もみられる。
- 註2 本村 奉原 1972年『長野市舞ノ井丸山寺裏出土遺物の研究』『MUSEUM』25号
- 註3 笠沢 浩 1981年『平榮平遺跡』『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- 同住居址出土資料は栗林様式の型式細分の基準資料として笠沢浩氏によって栗林式として把握された。今日に至っても栗林様式でも新規に位置づく土器と解釈し、北陸地方の戸木B式期に併行するものと考えたい。
- 註4 千野浩ほか 1991年『中俣遺跡・押鍬遺跡・権田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 註5 森崎恵ほか 1978年『更科地科地方史(原始・古代中世編)』更地教育会
- 註6 長野県埋蔵文化財センター 1991年『北平1号墳』『長野県埋蔵文化財センター年報』7
- 註7 岩崎 卓也 1981年『川柳将軍塚古墳』『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- 註8 佐久考古学会 1990年『社宮町遺跡』佐久考古4号『赤い土器を追う』
- 註9 戸尻充則ほか 1984年『岡谷市史』上巻 岡谷市史刊行会
- 註10 矢口惠良ほか 1986年『塙崎遺跡群IV』長野市遺跡調査会
- 註11 小林 康男 1983年『丘中学校遺跡』塙尻市教育委員会
- 註12 高橋 乾 1981年『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- 註13 桐原 健 1973年『信濃における弥生時代玉のありかについて』『信濃』25-4
- 註14 前掲註9
- 註15 直井 雅虎 1990年『宮淵本村遺跡』『伊勢湾岸の弥生中期をめぐる諸問題』東洋埋蔵文化財研究会
- 註16 太田 文男 1993年『第3節 稲作のはじまり』『駒山市誌』歴史編上
- 註17 脊木和明ほか 1992年『舞ノ井遺跡群(4)聖川東防地点』長野市教育委員会
- 註18 千野 浩 1981年『19. 塙崎遺跡群』『第9回三県シンポジウム東日本の弥生高列』
- 註19 肺木 一男 1991年『千曲川流域の脇溝墓発見』『長野県考古学年報』63
- 註20 小山 信大 1990年『弥生時代中期後半信州系土器の広がり』『伊勢湾岸弥生時代中期をめぐる諸問題』東洋埋蔵文化財研究会

信濃の積石塚古墳と合掌形石室

西山克己

I はじめに

積石塚古墳の研究については、明治時代以来おこなわれ、石で築かれた特殊な古墳として、ヨーロッパなどでの類例から‘ケールン’(積石塚)と呼ばれ、その研究が進められた。

そしてそれは、「大陸起源説」あるいは「環境自生説」とする2つの大きな説が論じられ、今日にいたっている。いずれにせよ、どうして石積みなのかとする疑問は古くて新しいテーマなのである。

また合掌形石室の研究は大正時代以来おこなわれ、積石塚古墳同様、特殊な石室として位置づけられた。

昭和に入り、朝鮮半島における百濟の古墳での類例が紹介され始め、これらの類例と関連づけられる方向性となり今日にいたっている。しかし、その成立や系譜についての議論はなされるものの、それについての終止符はうたれていない。

II 積石塚古墳

①日本における研究史

日本国内におけるいわゆる古墳といわれるものの多くは土でマウンドが築かれ、さらには築かれたマウンドに茅き石が用いられたものが一般的である。しかし九州地方から関東地方にいたる地域において、それぞれ地盤性を持ちながら石でマウンドを築く古墳がみられる。これが‘石冢’・‘石築’・‘積石塚’などと呼ばれたいわゆることでいう‘積石塚古墳’である。

積石塚古墳の研究史を概略的に記すと以下の通りである。

1887(明治20)年に佐藤勇太郎氏が香川県に積石塚古墳が存在することにふれられて⁽¹⁾以来、積石塚古墳への論考・資料紹介がおこなわれるようになった。

1900(明治33)年には坪井正五郎氏がヨーロッパ各地のケールン(積石塚)を参考にしながら世界の‘積石塚’についてふれられ、その中で日本の‘積石塚’についても紹介されている。その中で、日本における‘積石塚’は讃岐・阿波・相模に限られる点に注意すべきと述べられ、その形状を鰐頭形・猪鉢形・瓢形・両頭瓢形などに分類されている。⁽²⁾

1916(大正6)年、大正期に入り中國大陸・朝鮮半島での資料が紹介され始める中、笠井新也氏はこれまでの研究を整理され、石塚とは土をもって築く古墳に対し、石をもって築く古墳であるとされたが、单石塚・半石塚もあると指摘され、石塚築造の方法については、任意に不規則に積み上

げた積石塚と、表面を石垣状に築いた築石塚の二種類があることを述べられ、阿波や徳津での多くは積石塚で、腰壁での石清尾山のほとんどは築石塚であろうとされている。今までいう積石塚古墳への名称として積石塚と築石塚の呼び分けが正しいか否かは別として、同じ石によって築造されたものでも、その築造方法に二つの種類があることを指摘された意義を大きい。⁽³⁾

1924（大正13）年、矢沢順道氏は長野県内の積石塚古墳に今までいわゆる合掌形石室を埋葬施設として用いていることを紹介している。⁽⁴⁾そしてこの後、

1926（大正15）年には、岩崎長思氏⁽⁵⁾や森本六爾氏⁽⁶⁾らにより積石塚古墳の一類と考えられた土石混合墳である金鶴山古墳が紹介されている。

このように大正期に入ると長野県内における積石塚古墳や、さらには合掌形石室の研究が活発化してくるのである。

昭和に入るとさらに国内外の資料が蓄積され、積石塚古墳の起源や系譜をさぐる調査や論考がなされるのである。その代表的なものが、

1933（昭和8）年に出了された「諏岐高松石清尾山古墳の研究」⁽⁷⁾で、梅原末治氏は、豊富な前期の陶器品をもつ猫塚などを調査され、積石塚古墳の年代が古く遡ることを確認され、また積石塚古墳の出現の意義について、朝鮮半島との連鎖はさておき、その概念的思想が影響したとしても、石塚の築造を古式古墳造営の風習が盛行していた段階のものとする以上、積石塚古墳出現の主因を石が多く産出する地理的条件にあると考えられた。しかし、これに対して、

同年、笠井新也氏は積石塚古墳の出現の要因については、梅原氏の地理的条件に対して、その主因を悲憲的背景とされ、地理的条件を從因とされた。⁽⁸⁾また

同年、後藤守一氏は、同年の笠井氏の論考へのコメントをされる中で、盛土古墳と積石塚古墳は別の存在と位置づけ、その解釈の仕方にについて、「これが時代の相違か、部族の相違か、地方色かといふ點に考えて行くところに問題はあるうと思ふ。」と述べられている。また、「積石塚は其の本流をなすと考えられる西日本、殊に北九州に於いて周囲の地形と合致してゐるが、東流をなす東日本では、決して周囲の地形と合致するものではない。関東平野にあるものの如きは、周囲見渡す限りローム層の中に轟々これを築いてゐる。そして其の積石塚と併行共存して積土塚が行はれてゐるといふ事が考慮されるべきものではあるまいか。」とされている。⁽⁹⁾

1938（昭和13）年、栗谷英治氏は日本後記の記載から、信濃への高麗系渡来人と積石塚古墳の関連を想定され、その根柢として積石塚古墳の多く存在する埴科郡から上高井郡の地形が渡来人達の祖国の地形と類似しているということがあげられている。⁽¹⁰⁾

1947（昭和22）年、大場整雄氏は森本六爾氏や梅原末治氏の環境説に対し、「森本氏の説く屋根形天井石室と積石とが、不可分的関係を有するとするならば、かかる石室を有たざる積石塚に対しての説明を如何に説くべきか、前期多數の積石塚は、その數数百千に達してゐるが、屋根形天井石室を有するものはその中の一小部に過ぎない。故に石室の補強策とする積石の発生は当然撤去せらるべきであらうと思ふ。次に梅原博士の所謂地理的条件論に就いては、石塊の存在しない地方に積石塚を营造すべからざるは、常識論として異議の無い所であるが、さりとて積石塚の群集地に、同

時に土塚が保存して居り、石材が覆らるる地方では積石塚の存在しない所があり、又同じ信濃国内でも特に奥信のみに限って積石塚の分布すること等は、卓なる地理的条件のみでは説き難き様に思はれる。」⁽¹¹⁾と今後の積石塚古墳研究の方向性を示す論考を示されている。

この論考以降、長野県内の積石塚古墳に視点をあてた論考が特に増していくこととなる。

1953（昭和28）年には、水野清一氏・櫻口隆康氏・岡崎敬氏による対馬での調査の中で、対馬の積石塚古墳はその地理的位置関係から朝鮮半島における積石塚の影響もあったであろうとしながらも、その主因は地理的条件とする環境説を説かれ、香川県の吉瀬尾山古墳群での積石塚古墳を代表例として、西日本の積石塚古墳は自然地質条件下に成立する場合が多いと述べられている。⁽¹²⁾

1956（昭和31）年、栗林紀道氏は、積石塚古墳の墳丘をその築造方法によって、石塊のみによつて表された、いわゆる積石塚・内部は土であつて、上部を石塊で覆つたもの・内部は石で、表面を土で覆つたもの・石塊に土を混えたものと4分類された。この分類は今後の長野県内の積石塚古墳を研究する上での大きな指針となつた。⁽¹³⁾

1959（昭和34）年には、永峯光一氏・龟井正道氏は大正12年に紹介された鉢塚古墳を調査している。その調査はトレンチによるものであったが、1号墳・2号墳ともに盗掘を受けているようである。そして1号墳・2号墳ともに多少の変形をしているものの原形に近い形状を残すとされている。さらに鉢塚1号墳出土の鏡片や水字真製鏡・碧玉製鏡などをも検討され、その年代を5世紀代に遡ると位定づけられ、信濃における積石塚古墳の初現とされた。また鉢塚2号墳については、鐵首面金銅製帶具が百濟公州宋山黒2号墳及び5号墳や高句麗の一古墳から出土していることをあげられ、交流を示す有力な資料であろうと位置づけられている。そして1号墳の被葬者を「軍馬補給の必要に迫られた大和朝廷が、駒馬の法に長じた馬化人を信濃に配置し、牧場の開拓や馬の飼育に当らせたのではないであろうか」と想像するのである。そのような初期集団の首長の墓」とされた。⁽¹⁴⁾

1961（昭和36）年、尾崎喜左雄氏は、葺石の意義や石室及び石室的構造物の壁外側の裏込め石を置くべきものであったと考えられ、そのことについて「横穴式石室ではこの裏込め石の詰め込まれた部分の外側に封土が積まるのであるが、裏込め石が雖然と詰め込まれて、それが直接封土に接しているものと、裏込め石の外側に石が積みあげられて、石室を囲んで半卵形に、あたかも積みあげられた葺石状に整えられたものとがある。」と指摘され、横穴式石室の構造方法から積石塚古墳構造についての視点を示されている。そして「有瀬2号墳において、墳丘の内部に土を多少使用する傾向が現われたものと解し得よう。これがいすれかの繼承であるかは長野県の積石塚、殊にその横穴式石室との間に微妙な関係が存在しているのではないかろうか。」とされている。⁽¹⁵⁾

1964（昭和39）年、斎藤忠氏は西日本の積石塚古墳を「地理的環境」ということが、積石塚をつくらしめた第一義であり、最も大きい要因とみるべきであろう。」また東日本については、「一様に内境であり、時期的には後期、とくに終末期の姿相を示し、六世紀から八世紀の頃までの時期におかれる。——中略——かなり無理をして石材を運び築いた場合のものを見受けられる。」この場合、寒冷地にあるものが多く、凍りついた土を積みあげるには石を積みあげた方がやりやすいのでは、

とされている。

また、政府の方針によって大陸からの移住者を定位させ、移住した渡来人が、郷土の習俗の一基制を採用したとしても不自然ではないとされながらも、高句麗からの移住者は、ピョンヤン（平壠）遷都以降のことであり、この頃には積石塚よりはむしろ盛土墳を多くつくる風習となっている。このことをふまえると、「恐らく忘却したであろう積石塚の習俗を特に採用したとするには、よほどたしかな傍証資料をもとめなければならないのである。」⁽¹⁶⁾と述べられている。

同年、大場義雄・原嘉藤・寺村光晴・桐原健氏は、長野県東筑摩郡坂北村の安坂等軍墓古墳群の調査から積石塚古墳に方形を示す例があることを紹介され、さらに積石塚古墳の内部施設について、竪穴式石室・横穴式石室・組合式棺・合掌形石室の4種類があることを示された。そして、これらの積石塚古墳について、高句麗系渡来人の開拓を考えられている。⁽¹⁷⁾

1968（昭和43）年、大塚初重・小林三郎・下平秀夫氏は、長原古墳群内のニカゴ塚古墳を当古墳群内の初期のものであろうとされ、渡来人との関係を考えるのであれば、このニカゴ塚古墳の合掌形石室に求めるべきであろうとされている。そして合掌形石室は横穴式石室よりも先行し、また合掌形石室十積石塚古墳でないことについて、信濃での積石塚古墳をとりまく様相が単純でないことを示されている。

また渡来人との関係については、馬匹生産から渡来人葬与説と関連させられ、さらに合掌形石室から百濟系渡来人とむすびつけられた。⁽¹⁸⁾

1969（昭和44）年には、長野県考古学会誌上で、「積石塚をめぐる諸問題」が特集されている。⁽¹⁹⁾

その中で、斎藤忠氏は積石塚古墳の定義について、「墳丘は土ではなく石一山石・海岸の石・河原石などの自然の石塊、あるいは山石などを打ち碎いたもの、または切石をもって築きあげた古墳」と考えられ、また積石塚古墳の年代については、岩清尾山の古墳群を4世紀代とされ、長野の鎧塚1号墳や安坂等軍塚1号墳を5世紀代と考えられている。そして長野の地には渡来人が早くから足場を築き、8世紀以降の文献に見られる記載については、新しく後続してきた渡来人の記載で、考古学から文献内容を逆に批判することのできるものではないかとされている。

また大場義雄氏は、積石塚古墳の定義について、鷹田亮策氏や梅原末治氏の論をあげられ、石清地山のような大形の段築をもつものを石塚、長野県下のような比較的小さな礫で築いたものは積石塚といるべきであろうか、と定義について問題提示をされている。また年代については、岩清尾山や鎧塚1号墳の年代には異論はないものの、対馬や白岳や宮崎県の傍遺跡などをあげられ、新しい時期の積石塚との関係については問題としながらも、積石塚とするものの上限については弥生時代まで遡るのではないかとされている。そして岩清尾山などの例をみてみると渡来人と結びつけるよりは、日本本来の盛土墳と結びつけた方が妥当と考えられているが、安坂等軍塚1号墳については、高句麗人と結びつけたい気持が捨てきれないとされている。

三上次男氏は、「高句麗形の石築墳はもっと南の百濟地方の初期の墓制として現われることも注意する必要があります——中略——日本で積石塚的なものを大陸の影響と考えるならば、高句麗的

なものばかりでなくて、百濟や新羅における積石塚の要素というのも考える必要があるのではないか。」と述べられている。

また森浩一氏は、「実は蓮石は積石塚を造ろうという意欲の表われではないかと思うのです。」と類例を示しながら広義での積石塚古墳論を語られている。

1975(昭和50)年には小林秀夫氏が墳丘の築造面から積石塚古墳について論考されている。⁽²⁾

この中で、栗林紀遺氏が幅広い範囲まで積石塚古墳と分類されたことをその後の長野県内の研究が踏襲した結果、「土石を混じえた古墳さえも積石塚ととらえられた結果、善光寺平は極めて特殊な古墳文化を持つ地域であると考えられるところとなったのである。」と指摘されている。

そして、横穴式石室の調査例の増加から、「墳丘の築造状態にもわざに祀られる機会が多くなって来たのである。これらの面から考へても善光寺平に広く行なわれている積石塚古墳の概念も再検討されるべき時期に来ているものと思われるのである。」とされている。そして、長野市長原古墳群での調査例などから、構築方法からの積石塚古墳の検討がなされており、それをふまえて、「何が積石塚古墳かという概念を明らかにしたうえでの問題であるが、前述してきたように、それは発掘調査によってさえ2通りのものが存在していると言えよう。また表面的な分布調査では、正確な積石塚古墳の有在は確認しえないことはその調査事例が明らかにしていることである。」と指摘されている。

そして、墳丘築造から、

A型=「安坂将軍塚古墳を模式とするものであって、長野県内の積石塚古墳の中では、比較的分布の広がっているものである。その立地は傾斜面または自然地形を利用しているもので——略——」

B型=「比較的大きな10m以上の円墳で、最も多い。大室古墳群、長原古墳群、長野市松代王塚古墳群に構築されている古墳を模式とするものである。——略——」

C型=「これは10m以内の小円墳で、高さも1m前後といわれるよう非常に小型である。上高井群・辰田古墳群、長野市吉古墳群に構築されている古墳を模式とし——略——」

と3分類されている。

さらに土石混合墳については、「横穴式石室の挖え積みに行なわれている場合もあるうし、外壁施設としての葺石に行なわれる場合も考えられる。また墳丘をとりまく外縁列石も礫石のあり方として考える必要があると思う。」とされ、「土石混合墳というものが、善光寺平にのみ限定されて分布する特殊な古墳であるのか、また積石塚古墳、とりわけB型との関連の間も含めて、単なる墳丘構築の技術的あり方の差であるのかを知ることは大きな問題であると言えるのではないか。」とされている。

そしてこれまでの研究史をふまえる中で、その「起源論や高句麗文化との比較論は、善光寺平でのわずかな10数基ばかりの発掘調査事例や、先手の研究のトレースでは結論づけることができるものではありえない。」と、日本国内や朝鮮半島での調査資料の蓄積をふまえた今後の積石塚古墳研究への方向性を示したものといえよう。

1980（昭和55）年、坂祐秀一・亀井正道・杉山晋作・桐原健氏他によって、いわゆる積石塚および積石塚古墳の研究史や日本全国の地域相がまとめられた。この中で杉山氏はこれまでの研究史を簡潔にまとめられ、また桐原氏は中部山岳地方の積石塚古墳を紹介されている。⁽²¹⁾

1987（昭和62）年、西谷正氏は、大豊府柏原市茶臼塚古墳について、高句麗の積石塚古墳と共に性があり、さらにはソウルにある石村洞4号墳に近いのではないかと述べられている。⁽²²⁾

1989（平成元）年、桐原健氏は、全面的な視点から積石塚古墳についての研究史や資料を紹介され、論を進められている。その中で、積石塚古墳研究の課題として、「時が流れ、地域が広がっていくにつれ、積石塚にも形態化現象の起り得ることは、ある程度予想されるところである。私は厳密な規定よりも、石を封する外観を呈してさえおれば、積石塚の範囲に入れてよいと考えている。したがって外表施設としての墓石をもっている前期・中期の大半の古墳は、当然に積石塚なのである。」と森浩一氏の論を踏襲され、積石塚古墳の規定を広い視点でおさえられたのである。

また最後に、「積石塚研究は古墳研究の中では傍流である。概説書を開いた時、墳形や内部主体による分類はあっても、墳丘の築成にもとづいての分類は、まずは記されてはいない。概説書中に積石塚の占める位置は、ないのである。加えて、積石塚の研究法は多分に“明治闇”を引きずつて来ている。科学的な古墳研究の洗礼を受けることなしに今まで来てしまった、という感がある。」としめくくられている。⁽²³⁾

1992（平成4）年、大塚初重氏は大室古墳群に関する調査・研究を通して、大室古墳群中の「金井山丘陵をはじめ、飯城や北山丘陵の尾根上に分布する古墳のほとんどは、墳丘が積土か一部に土石混合の例である。大石・ムジナゴーロ単位支群で、最初に出現した古墳のほとんどは土を混えない積石塚であり、しかも内部主体は合掌形石室であった。その築造年代は5世紀後半にまで遡ることが確実である。」と述べられ、大室古墳群形成のあり方やその出現時期について論じられている。

また「しかし山丘の傾斜面に土壤が全くないわけではなく、墳丘の築造に亭欠くほどことはなかったであろう。それにも拘らず5世紀中葉以降の段階を迎えた時に墳丘を石積みとして、ほとんど土壤を混えずに合掌形石室を遺跡施設として採用した事実は、その大きな急激な墓制の変化に注目しないわけにはいかない。」と、述べられ、長年にわたる調査結果を前提にされた論が語られている。⁽²⁴⁾

同年、さらに大塚初重氏はここ数年調査を行っている大室古墳群での調査結果を紹介され、大室古墳群での積石塚古墳の築造開始を、各単位支群において、合掌形石室をもつものとされ、その年代を5世紀後半から6世紀初頭と位置づけられた。⁽²⁵⁾

このように日本国内における積石塚古墳の研究史を振り返ってみると、大勢として積石塚古墳の概念規定が定まっていない部分があり、その上に環境自生説や大陸起源説が重なり、また西日本の様相、東日本の様相が正確に把握されないままに現在にいたっているのではあるまいか。

しかし、小林秀太氏が言われるよう、墳丘自身の調査がある程度進み、また中華人民共和国（以下「中国」という）・朝鮮半島、特に大韓民国（以下「韓国」という）の資料が徐々に蓄積さ

れえた現在、何かしらか詰れる部分があるのではなかろうか。しかし、現実的にはまだ全体像のつかみにくいことは事実であるといえよう。

②中國と朝鮮半島（特に韓國）における研究史

まず中國側研究者による高句麗積石塚の研究をみてみると、この中國側研究者の業績や研究史については西川宏氏が要點を整理し、まとめられているので、すべてを西川氏の論文によることとする。⁽²⁶⁾

まず「高句麗の積石墓の源流」の中で、「高句麗の積石墓は、遼西の紅山文化や遼東半島にみられる積石墓の古い地域的伝統の上に青銅器時代後期に成立したものを受け継いだものとみることができよう。高句麗には積石墓と並んで封土墓もあるが、青銅器時代に両者が並存していたのか、封土墓は後世に成立したものなのか、今のところ明らかではない。」と述べられている。

そして「墳丘の問題」をとりあつかった論考を年代を追ってまとめられている。

まず1960年、解放後最初の高句麗墳墓の調査研究として陳大為氏が桓仁の積石墓の報文を発表され、この中で高句麗墓全体について最初の編年を発表されている。⁽²⁷⁾

西川氏によると、文化大革命以前は、「高句麗墳墓の形態は積石墓も封土墓も方形が主であるとみており、大型積石墓の中には円形もあるとしているが、それが最初から円形を意図したものなのか、方形が後世に崩れたもののかは證拠されていない。」とされている。

1979年、方起東・劉振華氏は高句麗の全墳墓を対象に次の2類9種に分類されている。⁽²⁸⁾

I 石墓

- ①積石石壇墓
- ②有段積石石壇墓
- ③階壇積石石壇墓
- ④階壇積石石室墓
- ⑤階段積石石室墓

II 土墓

- ①有壇封土石室墓
- ②階壇封土石室墓
- ③封土洞室墓
- ④封土石室墓

1980年、李敏植氏は集安地方での12358基の墳墓の調査をふまえられ、高句麗墓の分類と編年を示された。⁽²⁹⁾その方法については、山麓にある石壇は比較的古く、河谷や平地のものや、石壇の間にある土壇は比較的新しい傾向であるというように、石壇を土壇よりも古いとすることをふまえられて、2類9式に分類されている。

I 石壇

- ①積石墓
- ②方壇積石墓

- ③方墳階梯積石墓
- ④方墳階梯石室墓
- ⑤封石洞室墓

II 土墳

- ①方壇封土石室墓
- ②方壇階梯封土石室墓
- ③土石混封石室墓
- ④封土石室墓

1981年、藤大為氏は1960年の積石墓の分類・編年を改定され、外形と内部構造により3種に分類されている。⁽³⁶⁾

- ①円丘式積石墓
- ②階台式積石墓
- ③階台式石室墓

1983年、方起東・林至德氏は高句麗の古墓を2大別され、土墓は集安においては石墳よりも後出するとされ、さらに土石混合による墳墓のあることを指摘されている。また積石墓については、有壇・階壇と分類されているので、⁽³⁷⁾方形であることを前提にされているようである。

1984年、王承礼氏は2類9種の分類・編年をおこなわれている。⁽³⁸⁾

I 積石墓

- ①方丘状積石墓
- ②方壇積石墓
- ③方壇階梯積石墓
- ④方壇階梯石室墓
- ⑤封石洞室墓

II 封土墓

- ①有壇封土石室墓
- ②階壇封土石室墓
- ③封土洞室墓
- ④封土石室墓

とされ、高句麗における積石墓の上限年代を紀元前1世紀より更に古く、下限年代は7世紀初頭まで続き、3世紀ないし5世紀に最も発達するとされている。

同年、林至德・耿鐵蓀・傅佳欣・張雪岩・孫仁傑氏らは土墓について、4世紀に封土石室墓が出現するが、積石墓は継続し、高句麗滅亡後まで及ぶとされている。⁽³⁹⁾

1985年、方起東氏は最初の高句麗石墳を積石墓とよび、それは円形ないし複円形を呈しているが、本来の形状ではなく外形は整っていないものとされ、積石墓が傾斜地につくられることによって、積石崩壊を防ぐために墳端に大原の石を置くことから方丘式の積石墓に発達したとされてい

る。そしてこれらの年代については、出土遺物から西暦紀元前後、あるいは高句麗建国とされる紀元前37年前後と考えられている。⁽³⁴⁾

そしてこの中で石墓について以下のように分類されている。

- ①積石墓（外形は不整形）
- ②方丘式積石墓
- ③有基壇積石墓
- ④方壇積石墓
- ⑤階壇積石墓

1987年、鶴谷成氏は石墓について、次のような分類をされている。

- ①無壇石壙墓（最も簡単な形態）
- ②方壇石壙墓
- ③方壇階梯石壙墓
- ④方壁石室墓
- ⑤方壇階梯石室墓

とされ、無壇石壙墓の出現を「李嚴福氏や方起東氏の指摘に加え、——中略——高句麗政権建立以前に存在した類型の一つ。」とされている。そしてこの中で、「即ち積石墓は高句麗の民俗的葬俗で、封土墓は4世紀後半に受容した中原や南方の葬俗であるというのである。」⁽³⁵⁾と解されている。

上記の魏氏の櫻井案については田村亮一氏によって考察がおこなわれている。⁽³⁶⁾この中で、魏氏の論考について以下のように紹介されている。

「高句麗の墓では、石壙から石室へ、積石から封土へという変化はほぼ同時に進行しているが、その開始の時期には少し違いがある。前者は3世紀末ないし4世紀初であり、後者は4世紀中葉である。そして5世紀には両者が完了している。從って3世紀末～4世紀初から5世紀にいたる間に、一種の過渡的な型式である積石石室墓が出現したのである。」

以上、中國側研究者の研究史をふまえ、西川氏は「積石墓は方形ないし長方形の平面形が主流であるということが分った。——中略——円形の基壇というものは未だ報告されていないから、そのようなものはなかったとしてよかろう。ただ不整形のものがあったかどうかは問題として残る。基壇の形は方形ないし長方形であるか、壇頂部の形状はどうなっていたのか、截頭方錐台形なのか、円錐をもっていたのか。こうした点はこれまで全く記述されていない。——中略——なお石墓とか石壙とよばれる場合、それは単純に積石墓と理解することは出来ない。それは石を使用した壙墓という程度の意味で、石棚や石室をもつ封土墓も含まれているからである。果してこのような分類法は有効であろうか。壇丘の用材と内部構造物の用材とは分けて表現した方がよいのではないだろうか。」⁽³⁷⁾と、これまでの日本における積石塚古墳の概念規定への反省に相應する重要な指摘をされている。

1991年、李嚴福氏による日本での公開学術講演に先だってあらわされたものをまとめた「高句麗・嶺海の考古と歴史」⁽³⁸⁾を西川宏氏が翻訳されている。

その中で、墓安の高勾麗墳墓全体を石壇類・土壇類に二大別され、石壇類（積石塚）を5分類されている。

第1は、積石塚で1966年の統計によると、全墳墓中の26パーセントを占め、最もも多いもの一つである。（図1-1）

第2は、方壇積石塚で全墳墓の10パーセント。
(図1-2)

第3は、方壇階梯積石塚で全墳墓の3パーセント。

第4は、方壇階梯石室墓でその数はさらに少なくて、総計二十数基。

第5は、封石洞室墓で全墳墓の4パーセント。とされ、これまでの研究を簡潔にまとめられている。そして第1の積石塚は、数量が最も多く、その存在した年代も最長で青銅器時代より5世紀まで続いたとされている。

ここで日本側からの高勾麗積石塚の研究をみてみることとする。

1982(昭和57)年、田村亮一氏は、陳大海氏・李殿福氏・朱崇憲氏（積石塚を内部構造を基準に分類）

鄭輝永氏（積石塚を外的構造によって分類）らの研究史や、それぞれの問題点をふまえながら、以下のように分類されている。（36）

第1 = 右柳積石塚（大きな石で天井を構築しなかつ

たもので一種の堅穴式石室で、それぞれは時代的に並行した）

a類=単に方台形または方錐形の封丘を持つもの。（李氏I（当論に示した李氏1980年の①）
式積石塚）

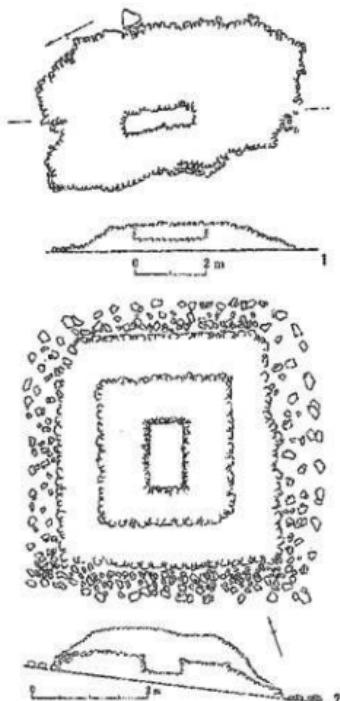
b類=方台形または方錐形の封丘の裾まわりに、1段の基壇をめぐらしたもの。（李氏II（当論に示した李氏1980年の②）方壇積石塚）

c類=数段の階段状に構築された封丘を持つもの。（李氏III（当論に示した李氏1980年の③）
式方壇階梯積石塚）

第2 = 梁造付石室積石塚（第1式に梁造の付くようなもので類例は少ない）

a類=樋室の幅がせまく、單葬用であるもの。

b類=樋室の幅が広く、本来合葬用であると考えられるもの。



第1図 1 = 積石塚（良民103号墓）

2 = 方壇積石塚（良民13号墓）

（文献・注-36より）

第3=石室積石塚（横穴式石室を有するもの）

a類=石室の天井が類円錐式になっているもの。

b類=石室の天井が平天井式になっていて、床面は地表近くに位置するもの。ほとんどの石室石塚はこの類に属している。石室は2室または3室が並列する例が多い。

c類=石室の天井が平天井で、床面は地より相当に高く、石室の幅も広いもの。（李氏IV
(当論に示した李氏1980年の④) 式方壇階梯石室墓）

とされ、さらにこれらをふまえて、「石櫛積石塚から漢道付石櫛積石塚へ、そしてさらに石室積石塚へと順次発展していったという考えには同意できないものがあるが」とされ、「石室封土墳が高句麗の古墳の中でも新しい段階に出現する墳墓型式であることは明白な事実である。従ってこの石室封土墳の石室と密接な関係をもつと思われる石室を備えた石室積石塚が、石櫛積石塚よりも新しいものであるという考え方方は、誰しもが容易に考え付くところであって、それは決して間違ひではない。」と述べられている。そして、中国側研究者の編年・分類については検討が必要であること述べられ、年代について

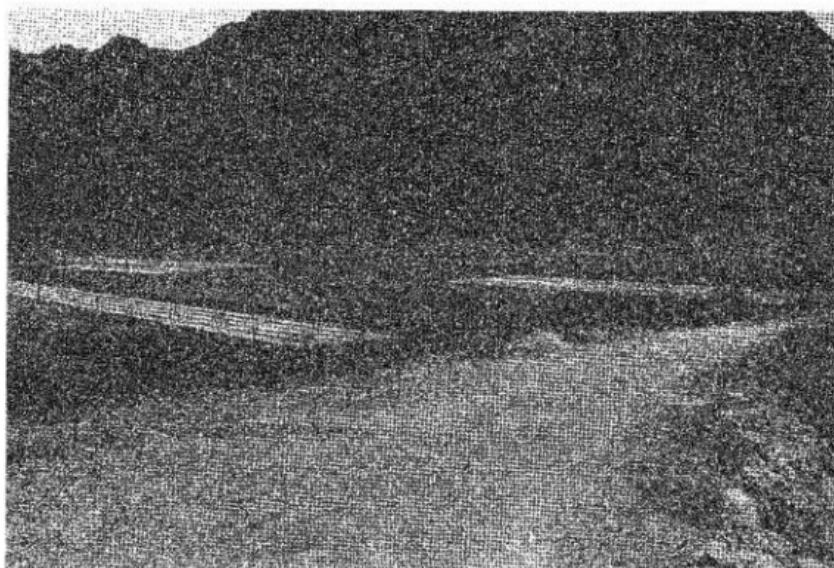
は、「筆者のいう石櫛積石塚の年代は、紀元前後頃を中心とする、ある幅をもった時間的位置を占めているといえる程度のものでしかない。一方、石室積石塚についてみてみると、そのc類の年代の一端を、太王陵や将軍塚によって、4世紀後半から5世紀初とすることはほぼ間違いないところであろう。」とされている。また「紀元前3世紀中頃から4世紀中頃に至る間のあ



第2図 中国吉林省集安の將軍塚古墳



第3図 中国吉林省集安の山城下墓区の積石塚（第塚）

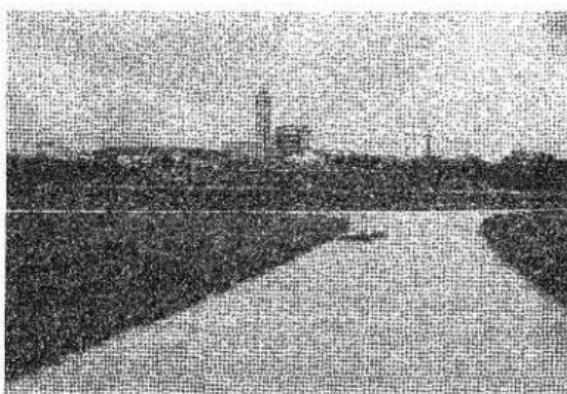


第4図 中國吉林省集安の山城下墓区の積石塚群（後ろは丸都山城）

る時点までは、高句麗の王陵は石築積石塚であった」であろうことを推測され、石室積石塚 b 項の年代については、小田富士雄氏の年代観が妥当であるとされ、5世紀前半から中頃のものとされた。

さらに類穹窿式天井をもつ石室積石塚 a 項の構築と、同穴合葬の風習の出現が——中略——その時期はおそらくとも 3世紀末から 4 世紀前半頃のこととして大過ないであろうと考えられる。」とされている。

以上は中國吉林省集安における高句麗墓（図 2・図 3・図 4）を中心とする研究であったが、次に韓国における積石塚の研究をみてみることとする。



第5図 ソウル石村洞 3号墳

韓国における積石塚の大
きな成果というと、ソウル
大学がおこなった石村洞古
墳群（図5・図6）の調査
といえよう。これは、

1975年と1983年に報告さ
れ、積石塚の構造状況も記
録されたものである。⁽⁴⁰⁾

1976年、金基雄氏は石村
洞3号墳・4号墳を新潟積
石塚と紹介され、また京畿
道楊平郡西朱面江湖里にあ
る積石塚を紹介され、川原

石を積み上げたもので、階段状に三段積みあげたものであろうと推察され、これが高句麗初期の積
石塚である先魯江流域の深貴里第75号墳・同92号墳と同じ形式とされている。⁽⁴¹⁾

1984年、金元龍氏は石村洞3号墳について、「基底部に板石をめぐらしたいわゆる基礎式である。
積石も河原石ではない山石であって、高句麗積石塚としては第二段階のものに相当し、古墳の位置
も両岸から離れた墓地であって、高句麗との共通性をみせている。」と述べられている。そして
「いわば萬江版積石塚ともいべき地方的特色をもったものといえよう。」とされている。さらに、
高句麗古墳であることは否定できないが、百濟建国者たちが高句麗から南下して造りえたとみるこ
とができる、その年代をおよそ4世紀から5世紀頃のものとされている。⁽⁴²⁾

1989(平成元)年、東漸氏によると韓国における積石塚は石村洞一帯のみならず、漢江中流域か
ら上流域にも存在し、北漢江の汝湖里の方形積石塚や岑南里・雨水里でも積石塚が分布するとのこ
とを紹介されている。また忠清北道の忠州ダム水没地域において、1981年より総合調査がおこなわ
れ、河原石(一部山石)が用いられているものもみつかっているようである。そしてさらに、江原
道の春川市中島では1辺15mの方墳で河原石を積みあげたもの、また平昌郡平昌邑磨岩里でも河原
石による積石塚がみつかっていることを紹介されている。

また漢江流域では4世紀には積石塚が出現するが、この100基以上の積石塚すべてが高句麗人の
墓とは断定しない。しかし、4世紀末から5世紀前半に高句麗が漢江下流域を領有していたと
するならばまたその被葬者の推定も異なるだろうとされ、4世紀後半には積穴式石室が当地域にも
存在していたことなどをふまえ、積石塚の被葬者については今後の発掘調査に期待せざるをえない
とむずばれています。⁽⁴³⁾

1989年、『韓国の考古学』の中で、金元龍氏は、「これら石塚の型式分類や編年などについては、
中国、北朝鮮、そして日本の研究者たちからそれぞれ提案がなされている。しかし、その分類基準
が空式壳巣的または時間的意義をもつという確証がないかぎり、積石塚の型式は細分すればするほ

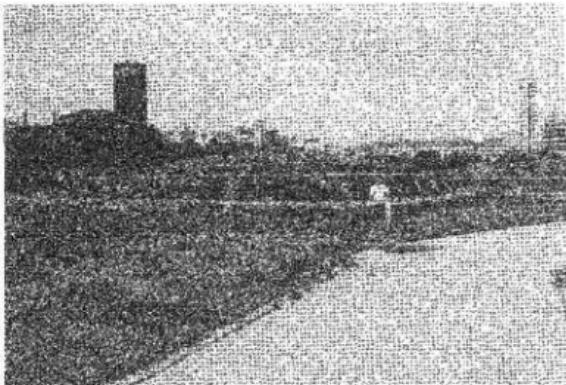
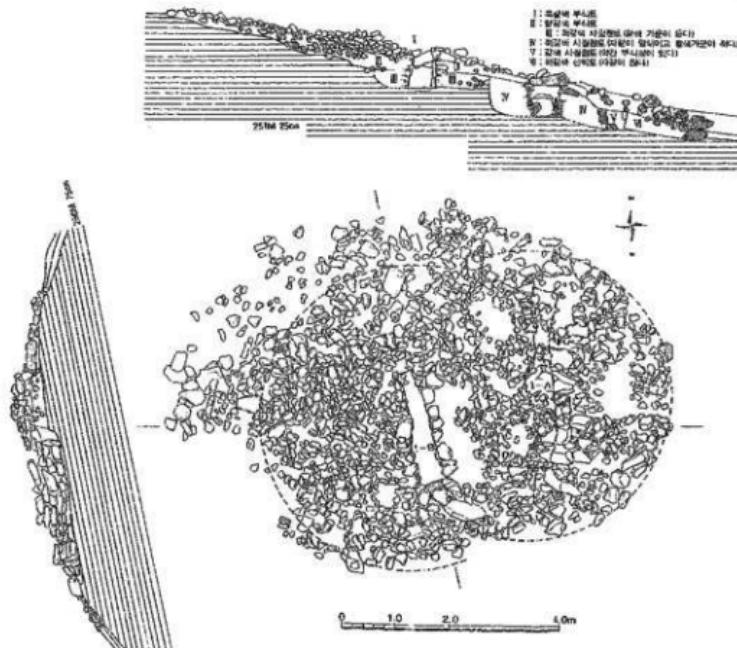


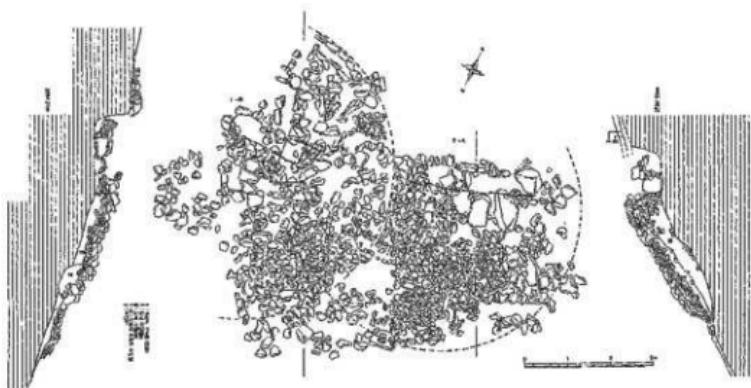
図6 国 ソウル石村洞4号墳

ど問題が複雑になり混乱するだけである。ことに南韓もそうであるが、日本の研究者たちも、積石塚の諸型式を実際に観察したり、発掘してみた経験がなく、すべて報告文献を通しての考察や理解なので、構造や外形などについて実感的理解が困難である。北朝鮮文献の文章は、われわれ韓国人にとっても往往にして難解であり、誤解しやすい部分が多いので、文献を通しての考察にはおのずから限界があると考える。」⁽⁴⁴⁾とされ、現在の積石塚研究における資料解釈とする物理的側面からの研究面での現状と、各國々の研究者の資料解釈への誤解や矛盾についての指摘がおこなわれている。できうれば各國の研究者における共同研究がなされればこの問題は解決されるようと思われる。

またこの中で、林永珍氏は「石村洞1号墳は、その上部に築造された石櫛塚から、4世紀初頭とみられる竪立短頭壺が出土していることから、3世紀中葉までさかのばるものとみられる。したがって、石村洞一帯の積石塚は、遅くとも3世紀中葉頃から築造され始めたとすることができる。このような積石塚は、5世紀に入ってからは高句麗の影響を受けた石室塚に替わりながら平地から離脱して、可樂洞・芳荑洞の丘陵地帯に築造されていたが、公州遷都以後にもソウル地区で一部繼



第7図 濟谷・多富洞古墳群1号墳（文献・注-47より）



第8図 湛谷・多富洞古墳群2号墳（文献・注-47より）

続して築造されたものと思われる。」と述べられている。⁽⁴⁵⁾

1990（平成2）年、田村亮一氏は鹿存成氏の積石塚分類に対する論考をされ、その中で「高句麗の積石塚の内部に設けられた石室をすべて同一視して取り扱ったことは問題である。」と指摘されている。また高句麗における積石塚の起源等についてもふれられている。⁽⁴⁶⁾

1991年、塩谷多富洞古墳群の調査報告が昌原大学校博物館より出された。塩谷多富洞古墳群では22基の墳墓が調査され、そのうち石室積石塚はも基調査された。

報告によると、この新羅の本郷積石塚の一系體にあると考えられる石室積石塚は、同じ慶尚北道塩谷郡の鳩岩洞古墳例のように石室を石で覆うものや、また石室上に盛土をし、さらに石で覆う構造のものであり、この構築方法を「蓋石された古墳」とするか「積石塚古墳」とするかは難しいところであるが、信濃の積石塚古墳の一類型に類似しているようにも考えられる。調査結果から、その年代は5世紀末以前にはさかはらないとされている。⁽⁴⁷⁾（図7・図8）

いずれにしても、時代によっては百濟・新羅・伽耶のそれぞれが領有する範囲のちがいはあるが、新羅あるいは伽耶地域における石室積石塚（日本の積石塚古墳に類似？するもの）の資料が調査されたことの意義は大きく、また図面や写真でみると普光寺平における小型石室・石棺をもつ積石塚古墳に類似しているようにも思われ、たいへん興味深いものである。できうれば、淡江上流の積石塚古墳とあわせてみてみたいものである。

1992（平成4）年、藤井和夫氏は石村洞4号墳を4世紀後半頃のものとされ、これらの積石塚が高句麗の影響下に出発したと述べられている。また、この石村洞4号墳の横穴式石室が百濟における最初のものと位置づけられ、高句麗において4世紀半ばごろから造られ始めたとする高句麗の横穴式石室の影響によるものとされている。⁽⁴⁸⁾

以上、概略的に韓国での積石塚に関する韓国側・日本側の研究者の論考をみてきたが、あらため

て金元龍氏の指摘されることが研究の現状を示すものと実感させられずにはいられない。

積石塚古墳の研究・論考にはこのように様々あり、これらの研究史があることをふまえつつ、いくつかの資料を紹介して高句麗・百濟・(新羅)・日本(特に中部高地の善光寺平を中心として)の積石塚古墳について検討をおこなってみたいと考える。

③信濃の積石塚古墳について

ここで日本、特に信濃の積石塚古墳についてみてみることとする。

信濃の積石塚古墳の分布をみると、大室古墳群を中心に上高井郡・埴科郡といずれも善光寺平での千曲川東岸にその集中をみせている。これまで積石塚古墳といわれてきたものは、栗林紀道氏以来、①石塊のみ・②内部は土、上部が石塊・③内部は石塊、上部が土・④石塊に土が混在、とするものを含み、積石塚古墳というものが広い範囲でとらえられていた。

私が見てきた中では、高句麗の都集安においても積石塚といわれるものの中に土石混合とするようなものが含まれているが、やはり積石塚といわれるものの基本は石塊のみによるものであった。そして横穴式石室などをつくるための石は石できちんと積みあげられ、さらには裏込め等もなされ、それを覆うように握手大・入頭大などの石が積み重ねられていた。(図9)

先にふれた中で、高句麗の積石塚に関する分類等については、李殿福氏の論⁽⁴⁾を参考にしてゆきたいと考える。

信濃での積石塚古墳については、いくつかの報告がなされているが、あえて高句麗における積石塚に類型を求めるとするならば、李殿福氏のいわれる積石墓(あえて加えれば方壇積石墓)が近いものといえよう。

しかし信濃における積石塚古墳の墳形等の詳細な調査がなされたものは少なく、確實に方形として報告されているものは東筑摩郡坂北村の安坂將軍塚古墳群での1号墳・2号墳・4号墳のみで、⁽⁵⁾その他の積石塚古墳については、「方形であろうと推測」するものばかりであるのが現状であろう。

ただし、私が集安でみてきた所見から高句麗にも方形ではなく不整形のものが存在しそうなことから、積石塚古墳は方形でなければ高句麗や百濟との関係は語れないとするこれまでの考え方ばかりではなさそうである。

ここで信濃における代表的な積石塚をあげながら分類をおこなってみたいと考える。



第9図 中國吉林省集安の積石塚・石室構築石と積石

える。

○安坂型=安坂将軍塚1号墳を典型とするもので、方形をなし埋葬施設に関わる部分、あるいは墳丘構築に関わる部分のみならず、墳丘に関わるすべてが礎によって造られているもの。そしてその立地は山の斜面および山麓にある。

例・安坂将軍塚1号墳⁽⁵¹⁾

方形・南北1辺10~11m、東西1辺8~9m、墳頂平坦部南北1辺10m、東西6m・高さ2.4~4m・竪穴式石室・山の中腹テラスにあり・5世纪代

安坂将軍塚4号墳⁽⁵²⁾ (図10)

方形・1辺15m・高さ1~3m・横穴式石室・山麓にあり・7世纪代

○菅原型=菅原王塚古墳を典型とするも

ので、円形あ

るいは円形に

近い不整形

で、安坂型同

様に墳丘に関

わるすべてが

礎によって造

られているも

ので、その周

模は15m以上

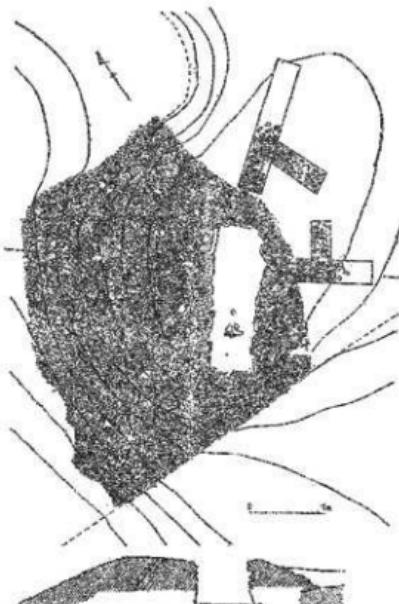
の大型のもの

である。その

立地は山の斜

面および山麓にある。

例・菅原王塚古墳⁽⁵³⁾ (図11)



第11図 菅原王塚古墳

信濃の積石塚古墳と合掌形石室

円形・直径34m・

高さ6.7m・横穴式

石室状の合掌形石

室・山麓斜面にあ

る・7世紀代(5

世紀代と考えられ

る可能性もある)

(注=円墳とされ

ているが、方形あ

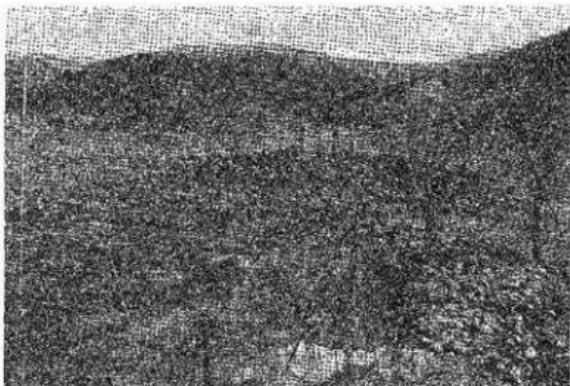
るいは円形に近い

不整形かも知れな

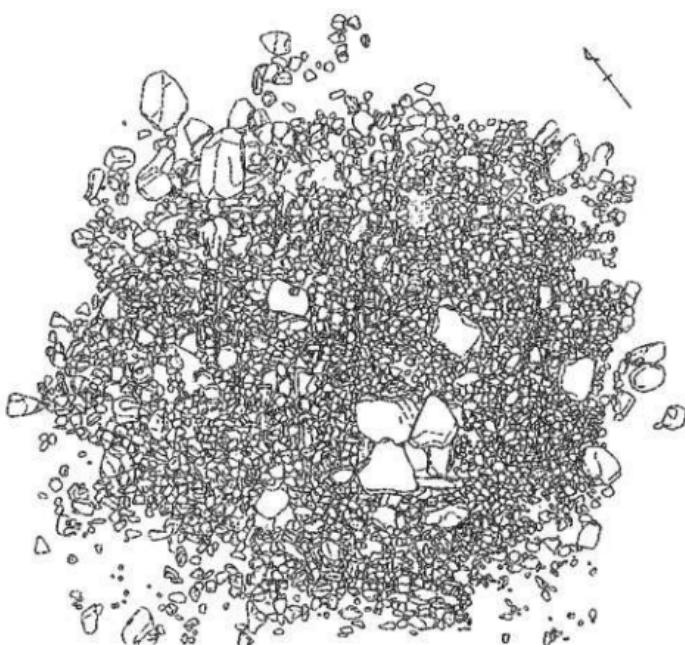
い。また2段築成

の可能性もある、

というのが現状で、保存を前提とした詳細な調査がされることを期待したい。)



第12図 八丁塚1号墳



第13図 大室古墳群225号墳 (文献・注-25より)

(注=今後、上記
のような調査によ
る結果しだいで
は、安坂型あるいは
安坂型的な大型
のものとしての類
型となる可能性も
ある。)

○墳塚型=八丁鎌塚1号
　　墳を尖形とす
　　るもので、円
　　形あるいは円
　　形に近い不整

　　形で、安坂型同様に墳丘に関わるすべてが礫によって造られているもの。その立地は
　　ならかなめ扇状地あるいは平地にある。

例・八丁鎌塚1号墳⁽⁵⁴⁾ (図12)

円形もしくは円形に近い不整形・東西径23m・墳頂部径10m・高さ2.5m・扇状地にある。
(4世紀末葉)から5世紀前半

八丁鎌塚2号墳⁽⁵⁵⁾

円形もしくは円形に近い不整形・東西20m、南北25m・墳頂部径4~5m・高さ3.6~5m・
扇状地にある。5世紀後半から6世紀初頭

○大室型=大室古墳群や吉古墳群などで多くみられるもので、円形あるいは円形に近い不整形
で、安坂型同様に墳丘に関わるすべてが礫によって造られ、その規模は15m以下で高
さも2m程度以下のもの。その立地は山の斜面あるいは山腹にある。

例・大室225号墳⁽⁵⁶⁾ (図13)

円形・東西、南北ともに径約12m・北から南へ下がる細い丘陵尾根上にある。5世紀末葉
あるいは6世紀初頭

大室195号墳⁽⁵⁷⁾ (図14)

円形・径約12m前後・(高さは低平)・谷の緩傾斜地にある。6世紀後半

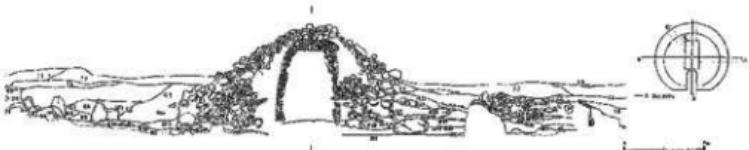
○針塚型=針塚古墳や大室23号墳にみられるもので、円形で、埴輪施設に関わる石やマウンドの
積石・内画りの石組みを土のマウンドとともに造り、そのマウンド全体を覆うように
山石や河原石が多く積まれたもので、外見上は石のみで構築された積石塚古墳とあま
りかわらないもの。

例・針塚古墳⁽⁵⁸⁾

円形・直徑20m・復原高さ3m以上・豊穴式石室・扇状地にある。5世紀後半



第14図 大室古墳群195号墳



第15図 大室古墳群23号墳墳丘断面図（文献・注-24より）

大室23号墳⁽⁵⁹⁾（図15）

円形・直径17.85m×13.23m・高さ2.92m・横穴式石室・扇状地の緩傾斜面が山斜面の急傾斜にかかる交換点の手前にある。7世紀前半

以上、私なりに類型を設定したが、これまでに広い意味で積石塚古墳と呼ばれていたもの、あるいは呼ぼうとするもので、今回積石塚古墳ではないと考えるものを記してみたい。

①マウンドを構築するにあたって土と石を混えたもの。これは積石塚古墳とは切りはなしして考え、土石混合墳とする。

②埋葬施設を構築するための石室材・裏込め石や被石や内回り石などが、墳丘土の崩れ等により露出、あるいはもともと土を盛っていなかったことによって、一見土石混合墳や積石塚古墳に見えるもの。

③墳丘の崩れなどを防ぐ意味での強い葺石として墳丘に石が用いられているもの。

これらの類型設定をもとに、田村亮一氏や金元龍氏などが指摘されているような問題点をふまえて、中国や韓国における積石塚と信濃における積石塚古墳の関連についてみてみたいと考える。

まず集安での積石塚の類型にてらしあわせてみると、その基本形は截頭方錐形を呈し方形プランを基本としている。その概念からすると安形型が最もそれに類似するかも知れないが、しかし高句麗積石塚さらには百濟・新羅地域における積石塚の中に不整形なものや円形的なものが含まれるとすると方形のみにこだわる必要はなくなるかも知れず、王塚型・鐘塚型・大塚型もその類似性は考えられなくはないかも知れない。

また、信濃の積石塚古墳のタイプとは異なるが石村洞3号墳や、あるいは信濃の積石塚古墳に類似していると思われる多富洞古墳群での石柳積石塚をみてみると、土を主体とする墳丘の周間に石をめぐらしたり、石を覆いかぶせるような構築方法をとっていることからすると、構築方法的には針塚型にもその類似性がうかがえる。⁽⁶⁰⁾

さて、このようにみてみると、先にふれた積石塚古墳と考えないものからすると、これまで善光寺平において積石塚古墳という神でくくられていたものでも積石塚古墳とは理解しないものが数多くあるように思われ、逆に設定した各類型を現在知りえる高句麗での李氏のいう積石墓・（方墳積石墓）・百濟での漢江上流域である南漢江、北漢江流域の積石塚・新羅での多富洞古墳群での石柳積石塚とてらしあわせてみると、強い断定はいまのところしえないが、各類型それぞれに類似性がみられなくはないように思える。

高句麗・百濟・新羅・伽耶・倭が形成する東アジアの一角の歴史事象の中での人々の動きとして、高句麗・百濟・新羅・伽耶～畿内～信濃とするのみならず、高句麗・百濟・新羅・伽耶～信濃とする日本海ルートによる直接ルートが考えられるかも知れない。おそらく文献に残された記録以上に人々の往来があったものと考えられる。

そのような人々の往来の中で、習慣として特に保守的な埋葬方法がこの善光寺平に残されたものであろうと考えられ、その初戦が鐵塚1号墳にみられ（4世紀末葉）あるいは5世紀前半とする時期であった。

この東アジアの一角におけるより活発な動きは、やはり4世紀後半から5世紀前半にかけての高句麗の拡張政策に起因するものであり、これをきっかけに高句麗のみならず百濟・新羅そして伽耶を含めた周囲での人々の動きと関わりがあり、倭と密接な関係であった百済の人々のみが多く動いたとする単純なものではなかったことを、積石塚古墳の検討から推測させられる。また考え方によれば、信濃において積石塚古墳が造られた約250年から300年間という長い年月を考えれば、たとえば5世紀に造った人々、6世紀に造った人々、7世紀に造った人々の出身地域のちがいが積石塚古墳の構築にちがいをみせる一因になったとも考えられようか。⁽⁶¹⁾ いずれにしても信濃に入った人々は、結果的に大和政権の東国経営の一端を担うこととなつたものと考える。そしてそれそれが故郷での習俗・習慣を信濃の中に表現した時、朝鮮半島などでみられる積石塚とは多少異った積石塚古墳が出現し、自然条件の中で積石塚古墳を造りうることが可能である地域においては、その伝統が引き継がれ、あえて積石塚古墳を造らなくてもよい地域では、いつのまにか積石塚古墳を造る習慣が忘れ去られていったものと考える。

善光寺平の積石塚古墳については、かつて先学が述べられたような西日本、特に岩渕尾山の環境自生説とは異なり、大陸起源説にその出発をみるものと考えるが、この大陸起源説の中には、これまで述べてきたように、単に高句麗や百済との関係でとらえられるものではないように今は考える。

最後に、あえてわかりうる構造面から信濃の積石塚古墳の変遷の傾向を考えてみると、鐵塚1号墳などの高句麗的なものから、大塗古墳群などでみられるような高句麗積石塚の影響によって造られたであろう百済・新羅地域にみられるものへと時代が下がるにしたがって変わっていたようであり、それは5世紀代に高句麗的なものが多く、6世紀代以降に百済・新羅地域的なものがあらわれてくるように現段階では見うけられなくはない。

III 合掌形石室

ここであつかう合掌形石室とは、石室の天井が圓柱形を呈し、別名を‘押み式’⁽⁶²⁾・‘横口式’⁽⁶³⁾・‘圓柱形天井’⁽⁶⁴⁾ともいわれ、韓国でみられる斜天井石室⁽⁶⁵⁾と同様あるいは類似したものとして認識されている。現在、山梨県の王塚古墳⁽⁶⁶⁾に1例みられる以外の30数例はすべて長野県の善光寺平に集中している。

この合掌形石室の研究史については、中部高地における横石塚古墳とセットとなる形で進められてきたといつても過言ではあるまい。

①日本における研究史

1924(大正13)年、矢沢順道氏は現在の長野市に所在する菅原古墳・空塚古墳の石室例をあげられ、長野県の横石塚古墳の中にこのような石室を有するものがあることを初めて紹介されたのであった。⁽⁶⁷⁾

1926(大正15)年、岩崎長思氏は横石塚古墳にある合掌形石室として金鏡山古墳を紹介され、あわせて現在の長野市に所在するニカゴ塚古墳も紹介されている。⁽⁶⁸⁾

同年、森本六爾氏は金鏡山古墳についての研究の中で「粗製紙合式家型石棺こそ本古墳の示現する文化の地方相の好例」と述べられている。合掌形石室は屋根形天井をなす石棺との関係でとらえようとした。またこの中で、ニカゴ塚古墳について「箱式櫛の如き観あるを否定しがたし」と箱式の合掌形石室と紹介されている。⁽⁶⁹⁾

そして昭和に入ると横石塚古墳の研究同様、さらなる資料の増加に伴い、その起源や系譜についての議論が進められる。

1931(昭和6)年、仁科義男氏は山梨県の前方後円墳(帆立貝形古墳)である王塚古墳の合掌形石室を紹介され、長野県以外にも合掌形石室があり、それも前方後円墳(帆立貝形古墳)にあることなどに注目された。⁽⁷⁰⁾

この王塚古墳例は現在もなお長野県の善光寺平以外での唯一の例となっている。

1934(昭和9)年、栗原英治氏が「1塚双室の合掌石棺」を記され、始めて「合掌」形という言葉を使われた。⁽⁷¹⁾

1936(昭和11)年には蛭部慈恩氏が、朝鮮半島における百濟時代の古墳の石室の構造を類型化され、その第6類型として天井を合掌形にするものとして設定され、その類型として松村里4号墳・松村里1号墳を紹介されている。そしてこれらの石室が、切妻家形玄室であると紹介されている。⁽⁷²⁾しかし中部高地でみられる合掌形石室との関係については何もふれられていない。

1944(昭和19)年、齊藤忠氏は「被葬者の死後の生活を考慮に入れた信仰的な意図や、或は石材の関係による構築上の便宜や、或は又既に森本氏も考察してゐる如くに、家型石棺との関係などもあらためて考慮しなければならぬものであろう。」とされ、また横穴式石室で天井が合掌形を呈するものが百濟の古墳にあることを述べられ、「朝鮮において三国時代の古墳に見られる事実である。」とされている。さらに信濃における合掌形石室を百濟文化と関連づけられ、百濟からの渡来人との関係でとらえようとした。この齊藤氏の論には賛否はありながらも、現在の合掌形石室の研究の一潮流となっていることは事実である。⁽⁷³⁾

1951(昭和26)年、大場盤雄氏は横石塚古墳と合掌形石室がセットとなる古墳をとりあげられ、合掌形石室を有する古墳群が他と異なることを示され、また渡来人との関係、特に高勾麗人と関係で説かれている。⁽⁷⁴⁾

1953(昭和28)年、小野勝年氏はこれまでの横石塚古墳と合掌形石室を関連づけた研究に対し

て、林畔1号墳の例を用いて、積石塚古墳ではない古墳にも合掌形石室があることを紹介されている。⁽⁷⁵⁾

1956(昭和31)年、米山一政氏は1つの古墳に4つ石室(合掌形石室=1・箱式石棺=1・未完成=1)をもつ長野市池ノ平古墳の調査をされた。

そして合掌形石室と箱式石棺のちがいは天井石の差であるとされ、合掌形石室の性格を考える上で貴重な資料とされている。^(76・77)

同年、信濃史料刊行会によって合掌形石室の集成がなされ、36件の資料が集められた。⁽⁷⁸⁾

1962(昭和37)年、大塚初重氏は積石塚古墳に伴う合掌形石室と他型式の内部施設との関係や、合掌形石室自体の考古学的な研究の必要性を説かれ、その中で大室古墳群におけるそれらの存在を、一群墓墳としてとらえるものではなく、信濃全域の古墳群との関係で考える必要を説かれている。そして文献にみえる官牧との関係についても、考古学的にどのような形でとらえていくかなど、今後の研究の方向性について語られている。⁽⁷⁹⁾

1967(昭和42)年、米山一政氏・下平秀夫氏は合掌形石室を分類され、横穴式石室のように渓道を有するものと、竪穴系のものでも側壁が内傾するもの・大形で側壁が直立し天井石が側壁の上端にのるもの・側壁がなく二等辺三角形の断面を示すものの4類に分類されている。⁽⁸⁰⁾

1968(昭和43)年、大塚初重・小林三郎・下平秀夫氏は長原古墳群の調査の中で、波来族との関連について、古墳群形成の中で合掌形石室をもつニカゴ塚古墳が形成初期段階のものと考えるとすれば、この合掌形石室にその関連を求めるであろうことを述べられている。⁽⁸¹⁾

1969(昭和44)年、大塚初重氏は大室古墳群の研究を通して、大室古墳群を構成する各単位支群にはそれぞれ2基から数基の合掌形石室があることをその特色として指摘されている。⁽⁸²⁾この論については、現在毎年調査が進められている明治大学の学術調査によって、さらに詳細に実証されていくことであろう。

1978(昭和53)年、小林秀夫氏は研究史をふまえつつ、合掌形石室を5つの分類にわけられている。

A 金銀山形式=金銀山古墳を代表とするもの。石室は長方形で箱式石棺状である。

B 大室古墳群第1類形式=大室168号墳・365号墳・357号墳を代表とするもの。A類と類似するが側壁は直立し高い。

C 大室古墳群第2類形式=大室112号墳・吉1号墳などを代表とし、側壁はやや内傾気味で、第1類に比較して低い。第1類に比べて粗化している。

D 笹塚古墳形式=横穴式石室のように渓流部と玄室部に分かれているのが最大の特徴。

E 和束古墳形石=側壁らしいものはなく、二等辺三角形状に天井石を組み合わせたもの、プランは長方形である。合掌形石室ではかなり大きい方である。

とされている。

さらに、これらの分類をそれぞれ時代別にIからIV期までわけられ、I期=6世紀初頭・II期=6世紀後半・III期=7世紀後半・IV期=7世紀終末から8世紀前半とされている。

そして、合掌形石室の構築については、大宝古墳群では継続的であるが、他の古墳群については半端的なものであるとされている。

また以下のような指摘をされている。

「大塚博士の指摘されたごとく合掌形石室は2~3基ごとに集中的に分布することは、90基という群集墳である古墳群にも認められる。」とされ、「大宝124号、吉1号墳にみられたような合掌形石室の併列との並を、散材の分布をみせた地域の合掌形石室のあり方と含めて、今後被葬者の性格を考える上で重要な問題と思われる。横穴式石室系の合掌形石室での帷幕、王墓古墳が分布する菟間古墳群にも同様の事実の指摘ができるところに興味深い問題がひそんでいると思われる。」と述べられている。そして善光寺平における分布する地域・分布しない地域への分析もおこなわれている。

そしてさらに「7世紀後半から8世紀にかけて最盛期をむかえるが、尖頭体の分解という内部的な理由以外にも、外的な要因——大和政権の政策によってこの地に派遣された半島からの渡来人の系統の人々の方がこのような独自な墓制を垂行させた——があったものであろうか。善光寺平の古墳の分布をみてもかなりの特色があるこれらの要素は、善光寺平の古墳の独立性ということだけでは解決できない問題であろう。」とされ、また「合掌形石室の系譜の中で初源的なものはむしろ盛土であり、韓国の百濟文化の中にみられた合掌形石室も盛土源である。どのような過程の中で横石塚古墳と呼ばれる古墳と結びつくかは今後の残された大きな問題に発展されようか。いずれにしても大型古墳群の發展の中で横石塚古墳と合掌形石室は非常に関係深いものになる。」と重要な指摘をされている。

最後にまとめとして、合掌形石室に関する6つの要項にまとめられている。

山梨県王塚古墳の1例を例外として、

①、善光寺平にのみ限定的に分布する。

②、善光寺平といえども、ある特定の古墳群に分布する。

③、年代的には6世紀前半から8世紀までという長期にわたって築造されること。

④、地域的——千曲川東岸中央部——に第Ⅲ期の時期にいわゆる横石塚古墳と結びついて盛行する。

⑤、天井石を合掌状に組み合わせて墓制にするという強い意図のもとに、築造方法、形態をかえて形成された。

⑥、このような合掌形石室の起源は、日本の古墳文化の発達の中で考える資料は現在のところない。わずかに韓国の公州地方に限定的に分布する高句麗文化の系統の流れをひく墓制で、百濟文化の横穴式石室の一形態として発達した石室が類似、6世紀前半に善光寺平にもたらされたと推定されよう。⁽²³⁾

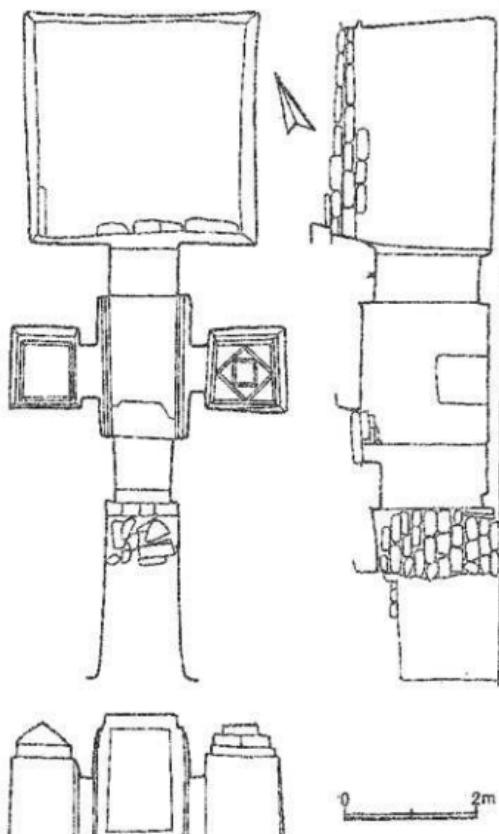
以上であるが、ここ数年来の調査・研究成果から、合掌形石室の初現は5世紀後半以前となっている。しかしこの当時、小林氏が指摘されたことは現在の研究にも引き継がれ、その分析方法・考察については重要な指針を残したものといえよう。

1989(平成元)年、桐原達氏は合掌形石室の研究史をふまえながら、好太王碑文にみられる6世紀後半の朝鮮半島進出に関連づけ、この時期にも渡来系の人々の地方への誘引がありうることから、その結果信濃における合掌形石室や積石塚古墳の成立を求めるようとされている。⁽⁸⁴⁾

1990(平成2)年、長野県埋蔵文化財センターによって大星山古墳群の調査がおこなわれた。この調査によって大星山2号墳が合掌形石室であることが確認された。調査者の土屋職氏によると、大星山2号墳は1辺14m以上の方墳であり、石室については「石室の天井部は完存しないが、残存部分からみていわゆる合掌式の天井部をもち、組合式石棺にも類似するものである。」と報告され、また「善光寺平において最古の部類」と位置づけられている。⁽⁸⁵⁾

1992(平成4)年、大庭初董氏は大宝古墳群の中で「少なくとも石室や石棺の天井石・蓋石を屋根形とする特色は、石室側壁の持送り枝法の採用を別とすれば、5世紀の中頃以後に出現するものと考えられる。」とされ、ムジナゴーロ196号墳の年代を出土資料から5世紀後半期に位置づけられた。合掌形式の石室が善光寺平と山梨県玉坂古墳という限定された地域にのみ分布する特異性についても考究する必要があるとされ、5世紀後半という時期に突然的に当地域に出現することについて、東国古墳文化の変質と画期についてあらためて検討する必要があるとされている。

また「百濟墓制の合掌形石室との歴史的関係が承認されるとするならば、大宝古墳群における5世紀後半代の合掌形石室の登場は、東国における朝鮮半島渡来の集団の移住や、技術の受容を考えなければならないことになる。」とされ、「合掌形石室が高句麗系のものであり、百濟の故地、会州付近でみとめられている事実から、今後の朝鮮半島とくに伽耶



第16図 高山里古墳群7号墳 (文献・注-88の1990年より)

地域の墓制の展開が注目されるところである。」と、これまでの高句麗・百濟への視点に、日本の古墳文化と深くかかわりを持ったと考えられている伽耶地域をもその視点に加えられたことは、これまでの研究史上、なかったものである。⁽⁸⁵⁾

同年、大塚初重氏は長年にわたって調査されてきた大室古墳群での例から合掌形石室の系譜や採用について、「関東地方では家形石棺の出現は、6世紀中頃以後と思われるから、大室の合掌形石室の登場の方が年代が古い。また近畿地方や東海地方で知られているかまど塚との関係も、年代的な差で関係づけることは無理があると思われる。」とされ、また「現段階では韓國の忠清南道公州市で知られている合掌形石室との関係を考えるのが、もっとも穏当な考え方のように思われる。」と述べられながらも、合掌形石室をもつ古墳の開始は、特に百濟あるいは伽耶地域との関係の中で渡来した、馬の飼育専門集団によるものであるとされている。⁽⁸⁶⁾

以上、信濃におけるというよりは、日本における合掌形石室の研究史をふりかえり紹介してみたが、大半の流れとしては、積石塚古墳同様その起源・系譜を朝鮮半島に求めるか否かにあり、さらに朝鮮半島に求める中にも百濟に求められるのか、あるいは他地域にまで求めるのかに論があるようと思われる。今後伽耶地獄までこの墓制の系譜が追えるのか否かは、韓国側の調査・研究に期待するところが大きいのである。

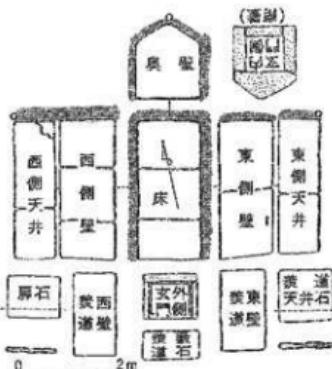
②朝鮮半島の資料に觸れる研究史

さて、次に韓国における合掌形石室（銅天井石室）の研究をみてみることとする。

1972年、金元龍氏は百濟の地公州地方の石室を紹介する中で、「天井が‘八’形に2枚の板石を合掌させてつくったものなど」と示され、この石室について「平安南道大同郡高山里の高句麗古墳（高山里7号墳）⁽⁸⁷⁾（図16）でもみることができ、明らかに百濟の独創ではないことを知ることができる。」⁽⁸⁸⁾とされている。

同年、安承周氏は合掌形火井古墳の構造について、校村里4号墳・鍾町1号墳は構造が完全でなかったことから、詳細な調査をなしえた柿木洞1号墳（図17・図18・図19）、2号墳について図を示され紹介されている。この中で安氏も金元龍氏の考えを受け、高句麗古墳の影響を受けたものとされ、百濟の熊津時代（475年から538年）の初期からつくられたものであろうと推測されている。⁽⁸⁹⁾

1976年、金基雄氏は百濟の熊津時代の石室を分類され、第5類型として合掌形石室をあげられ、やはり高山里7号墳の例から高句麗の影響を受けたものとし考



第17図

公州柿木洞1号墳
(文献・注-88より)

察されている。⁽⁹¹⁾

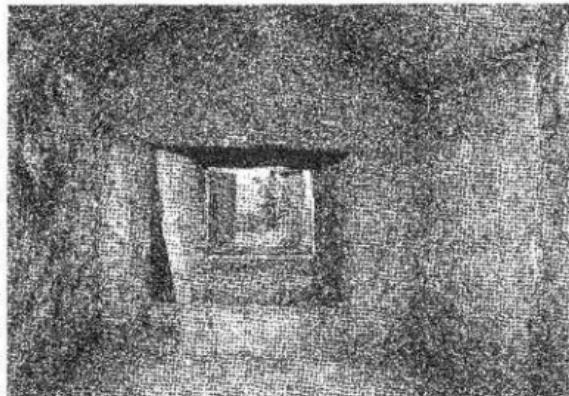
1984年、菱仁求氏は高山里7号墳にふれながらも、「合掌形石室の起源を「百濟のものか高句麗か中國かはまだわからない。」とされている。そして年代的には「公州、扶余地方にはじめて出現した石室墳で、——中略——天井の断面が斜天井になっているのは、建築のトンネル形天井を念頭において作ったようである。しかし石から受ける制約と彫造技術の問題で八形になったものと考えられる。」とされ、年代的にもその初現を6世紀前半とされている。⁽⁹²⁾ (図20)

1989(平成元)年、東湖氏は合掌形石室への年代的位置づけについては直接ふれられていないが、百濟中期の横穴式石室墳の変遷で、合掌形(斜天井)石室である校村里6号墳を6世紀後半以降に位置づけられている。⁽⁹³⁾

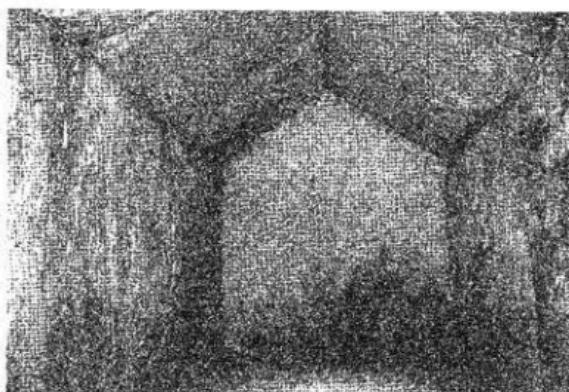
1992(平成4)年、藤井和大氏は百濟南部の横穴式石室について、安承周氏や菱仁求氏らの型式分類をもとに6類に分けられている。この中で合掌形(斜天井)石室墳は公州地域のみにみられるものとされ、高句麗古墳である高山里7号墳の類例から、諸氏同様に高句麗との関係で考えられている。⁽⁹⁴⁾

以上、合掌形(斜天井)石室における韓国側資料の研究状況をみてきたが、全体として2つの流れをみるとみるとできると思われる。

一つは、菱仁求氏などのいわれるように中国南朝の影響による壇塚墳の系譜の中でとらえようとする考え方で、この論からするとその出現は公州(熊津時代)に限定され、早くても6世紀の前半



第18図 公州柿木洞1号墳・石室入口側をみる



第19図 公州柿木洞1号墳・石室奥壁側をみる

以降あるいは6世紀後半以降
というものである。いま一つ
は、金元龍氏などのように高
句麗にその系譜を求めるもの
であり、公州に都が移った頃
より築かれ始めたと考えられ
る。5世紀末葉頃あるいは6
世紀以降にはその出現を考え
ることができうるかも知れな
いといふものである。

いずれにしても、現状にお

いては韓国側におけるより一層の詳細な調査による資料蓄積をしたうえでの検討がなされなければ、厳密な意味での日本の合掌形石室との系譜について語ることについては限界があるといえよう。

③善光寺平の合掌形石室

これまでみてきた信濃善光寺平での資料や朝鮮半島での資料を参考に、資料的な制約から限界があろうが、現時点での考察をおこなってみたいと考える。

まず善光寺平での資料であるが、これまでに合掌形石室の構造的な意味での詳細な分析・検討がおこなわれたのは、小林秀夫氏の論考につきるといえよう。⁽⁹⁵⁾この分析・検討を大筋で踏襲しつつ、私なりの分類を加え、さらに検討をおこなってみたいと考える。

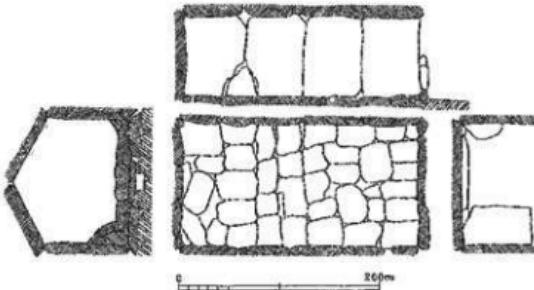
ここではまずいえることは、これまで先学によりいわれてきた「合掌形石室」とする用語の問題である。

古墳時代における埋葬施設の用語の中には、(左)棺・(右)槨・(右)室の用語がある。これらについての規模・構造面での簡単な説明を加えるならば、

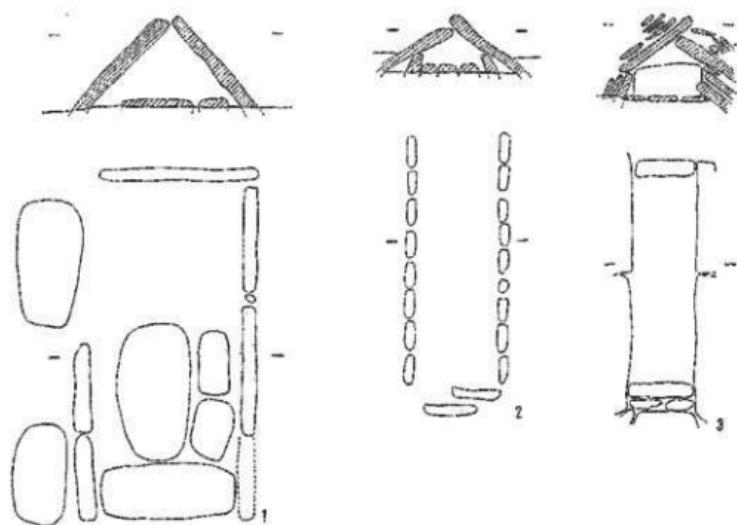
- (右)棺=直接遺骸を納めるもの
- (右)槨=棺を納めるものであるが、基本的には棺が納まる空間しかない。
- (右)室=棺を納めるものであるが、槨とちがい人間が出入りでき、身動きする空間があり、棺を置いた部分以外に副葬品などを置いたりする空間が確保されている。

と考える。

これらの定義からすると、これまでに知られてきた合掌形の埋葬施設には、右棺状のものと石室状のものがあるといえよう。この二形態を基本にしながら分類をおこなってみたいと考える。しかし上記した埋葬空間・施設についての分類は、空間・施設内に棺があったのか、なかったのかなど、どのような埋葬されたのか、調査成果を確認しえなければ、単純にその評価を与えられるものではないことは重要なことである。埋葬行為のあらゆる面を考慮するうえで、あえて「合掌形石室」という用語については、ある意蘊が反映された一つの埋葬形態の専有名詞として用いたいと考える。



第20図 公州校村里B号墳（文献・注-92の1984より）



第21図 1=和栗古墳・2=山梨王塚古墳・3=金縛山古墳（文献・すべて注-77より）

え、以下の分類については埋葬施設の規模・構造面に重点をおいた分類としておきたい。

A. 石室状合掌形石室

○和栗型=和栗古墳のみでしか確認されていない。側壁はなく大きな板石を二等辺三角形状に天井石を組みあわせたもので、平面形は長方形となっている。横穴式石室形態の一類型であろうと考えられる。

例・和栗古墳⁽⁵⁶⁾（墳丘は不明）（図21—1）

長さ3.7m・幅1.5m・高さ0.85m

○山梨王塚型=石室構造的には金縛山古墳（金縛山型）と同形と考えられ、側壁がありやや内傾する。天井石は大きな板石で内傾した側壁にたてかけるようにしてある。石室の規模は本格的な竪穴式石室、あるいは横穴式石室を思わせるほどに大きいものである。これは山梨王塚古墳のみを例とする竪穴式石室の類型である。

例・山梨王塚古墳⁽⁵⁷⁾（帆立貝形前方後円墳）（図21—2）

長さ5.45m・幅1.9m・高さ（推定1.0m）

○管状型=狭道部と玄室部にわかれ、横穴式石室構造となっている。側壁は1段あるいは2段に横積みし、その上に大きな板石の天井石をのせて中央部で合掌状に組合せている。この横穴式石室型の中には狭道がつくもの、つかないものがあるとは考えられるが、遺存状態によってその有無の確認が不確かなものもある。ここでは狭道の有無は問わ

す、和栗型や
山梨王塚型以
外の横穴式石
室構造のもの
を一括して含
めるものとす
る。

以下に示し
た類例とは別
に、森本六爾
氏が示され指
摘された箱式
形とされた二

カゴ塚古墳の合掌形石室も、この型式
に属するかもしれない。

例・竹原篠塚古墳⁽⁹⁸⁻⁹⁹⁾ (積石塚古墳) (図22)

長さ6.8m・幅2.0m・高さ1.9m

桑根井空塚古墳⁽¹⁰⁰⁾ (積石塚古墳)

長さ6.1m・幅1.45m・高さ1.17m

菅間王塚古墳⁽¹⁰¹⁾ (積石塚古墳)

長さ3.5m・幅1.25m・高さ不明

B石棺状合掌形石室

○金銀山型=側壁がありやや内傾する。大きな板
石の天井石は内傾した側壁にたてか
けるようにしてある。平面形が長方
形の箱形石棺状であり、石棺状の中
では大きいほうである。ただし、可
能性として小型横穴式石室、あるいは
石棺状横穴式石室に類似するもの
かも知れない。

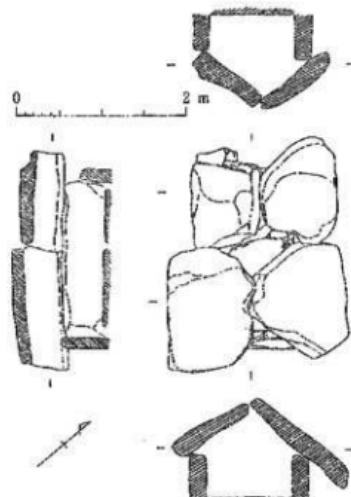
例・金銀山古墳⁽¹⁰²⁾ (土石混合墳) (図21-3)

長さ2.43m・幅0.69m・高さ不明

○大室I型=平面形が長方形の箱形石棺状であるが、金銀山型とちがい側壁は直立し高い。大
きな板石の天井石は側壁直上にのり、中央部で合掌状に組合っている。この型式には、両小口壁の高さのちがうものがあり、一方の高さの高い小口壁は小口壁(奥



第22図 竹原篠塚古墳



第23図 大室古墳群225号墳
(文献・注-25より)

壁) と充分に考えられるが、高さの低い小口壁については、その意識に多少のちがいが見受けられ横穴式石室とまではいわないが、石棺状横穴式石室の入口的構造を意識しているようにも思われる。この構造のものを両小口壁の高いものと別と考えるのならば新たなる一型式を考えなくてはいけないが、現段階では同一型式のものと理解しておく。

例・大室168号古墳⁽¹⁰²⁾ (積石塚古墳)

長さ1.88m・幅0.91m・高さ0.61m

大室225号古墳⁽¹⁰⁴⁾ (積石塚古墳) (図23)長さ1.85m・幅1.0m・高さ1.0m⁽¹⁰⁵⁾

○大室II型=大室I型に類似するが、側壁はやや内傾気味で、大室I型にくらべ側壁および石棺自身の高さが低く、小型で粗形化している。この型式にも大室I型式同様に石棺状横穴式石室的構造を意図しているものがあるかも知れない。

例・大室135号古墳⁽¹⁰⁶⁾ (積石塚古墳)

長さ2.25m・幅0.6m・高さ0.6m

大室221号古墳⁽¹⁰⁷⁾ (積石塚古墳) (図24)

長さ2.1m・幅1.0m・高さ不明

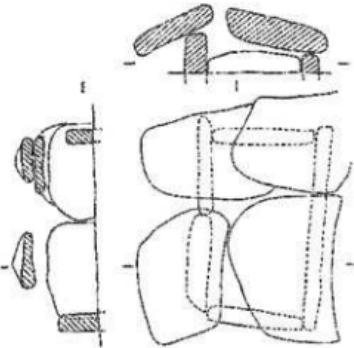
○大星山型=大室I型に類似し、箱形石棺状であるが、合掌形をつくる天井石が、他型の天井石と異なり、小形の板石を多く重ねて合掌形天井をつくっている。

例・大星山2号古墳⁽¹⁰⁸⁾ (方墳) (図25)

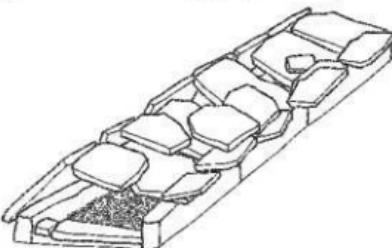
長さ2.1m・幅0.7m・高さ不明

以上私なりに類型を設定したが、これをもとに朝鮮半島との関連や、その系譜などについて考えてみたい。

まず善光寺平における合掌形石室の出現年代については、これまで古くても6世紀初頭頃と考えられていたが、ここ数年奈良の明治大学による大室古墳群の調査において、大室225号古墳が5世紀末葉から6世紀初頭頃のものであることがわかった。また大室196号墳では墳丘横石の間から出土



第24図 大室古墳群221号墳
(文献・注-77より)

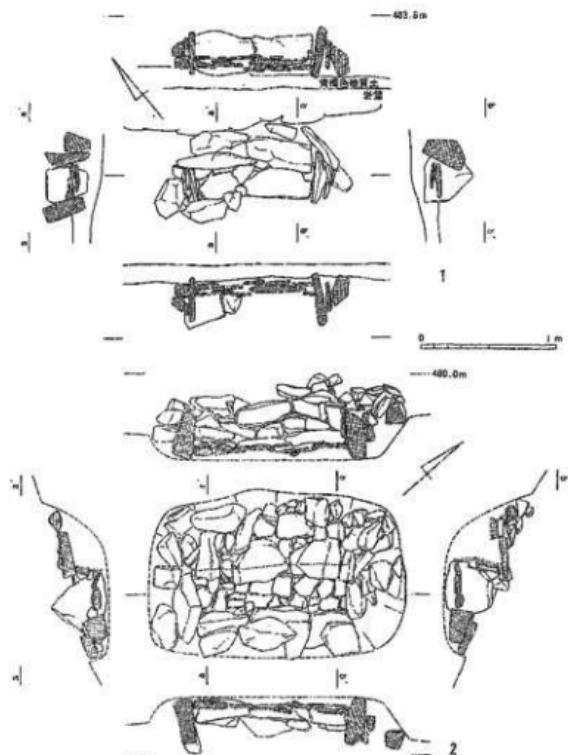


第25図 大星山古墳群2号墳の復原想定図
(鶴田典昭氏による)

した資料から5世紀後半頃のものであることがわかり、さらに出土した須恵器の年代からすると5世紀後半でも第3四半期から第4四半期へ移行する頃のものであろうことが察せられる。⁽¹⁰⁹⁾

また大星山2号古墳においては、石棺内からの出土資料より5世紀中頃から後半とする年代が与えられ、合掌形石室の中で最も古いものと位置づけられることがわかった。⁽¹¹⁰⁾

さらに森将軍冢古墳の調査では、埴丘をとりまくように小型石棺墓群がみつかり、この中にも合掌形石室であろうと考えられるものが含まれていることがわかった。しかし天井石がすでになくなっているものが多く、天井構造については不明な



第26図 1 = 義将草塚古墳・埴塚3号組合式箱形石棺
2 = 同 38号組合式箱形石棺
(文献・注-111より)

部分が多いが、石棺の小口壁の形状から、3号組合式箱形石棺（図26-1）や38号組合式箱形石棺（図26-2）の天井構造について合掌形であろうことを推測させられる。⁽¹¹¹⁾

しかし「組合式箱形石棺群のまとめ」をおこなった宇賀神誠司氏は、「38号石棺のように三角形の小口石ではあるが、側壁構造からは屋根形天井と考えられないものもある。前方部東側隅角付近の石棺群は、総じて粗雑な造りである。こうしたことから、三角形の小口は、石棺構造の粗略さによるものと理解した方がいいように考えられるものである。この蓋石の屋根形天井に構架することについては、なお慎重な検討を要するが、ここでは構造の粗略さを指摘しておきたい。」⁽¹¹²⁾とされ

ていることを記しておきたい。

さて話はもどるが、もし3号組合式箱形石棺の天井が合掌形を呈するとするならば、おそらくは大室II型か大星山型になるであろうし、また38号組合式箱形石棺の天井も合掌形と考えるのであるならば、石棺側壁を小口積みにし、その上に合掌形天井を設けるという新たな一類型（「森型」）になるものであるかも知れない。

それぞれの年代については、出土資料がなく確実なことはいえないが、この小型石棺墓群が善光寺古墳造後から6世紀中頃まで造られたとされているが、これら二つの石棺は大星山2号古墳や大室195号墳のように5世紀中頃から後半とする頃に位置づけられる可能性は充分に考えられる。

さて合掌形石室の系譜であるが、善光寺平での様子をみてみると、側壁を持つか持たないかを別にすると、岸模や合掌の状況から和栗古墳の石室と篠冢古墳の石室や土冢古墳の石室に類似性が求められ、その意図や基本的な合掌技術においてその一連性がうかがえる。おそらくもともとはすべての合掌形石室の系譜は同じであろうが、石室状タイプと石棺状タイプの2系統にその延襲意識においても、技術的側面においても使いわけがなされていたものと考えられる。

それでは、これらのもともとの系譜ということになると、やはり大槻初董氏が指摘されるように家形石棺との関係では、その系譜を求めるよりもなく、これまでみてきたように、石室タイプのみならず石棺タイプの中にも小型横穴式石室のあるいは石棺状横穴式石室のものが存在するならばやはり朝鮮半島での横穴式石室タイプの斜天井石室にその系譜を求めるなければならないよう思われる。しかし朝鮮半島に求めるとしても、現在我々が知りうる資料は、百濟の都公州に5例、そして高句麗の地、高山里に1例があるのみである。その石室の構造について図面や写真、あるいは実際に見学をしてきた所見からすると、たとえば公州柿木洞1号墳・2号墳の斜天井石室をみてみると、「合掌形石室」とするよりはむしろ、日本でいう「家形石棺」式の横穴式石室とでも表現した方がよいような構造をしており、善光寺平での合掌形石室への系譜を直接たどることは非常に危険な部分があろうと考えられ、もしあえてその系譜を求めるとなれば写真・図面からで詳細はわからないが、公州鎮町1号墳や公州校村里6号墳⁽¹¹³⁾に、より類似性が求められるようにも思われる。

ここで高山里7号墳の石室の構造をみてみると、(114) 東側室に三角持ち送り天井を用い、あえて西側室を斜天井（懸樋形）天井にしているところに石室構架に伴う意図的な意識がうかがえ、意識的な側面からすると、高句麗においても善光寺平においても共通性があるようと思える。

百济の都公州での斜天井石室については、武寧王陵でのトンネル形石室からの構築上の系譜をたどれるとする論があるが、これが事実であるならば、斜天井（懸樋形）を構築するにあたっての意識は異なり、その系譜はまったく異なるものとなる。また年代的にも公州に都がおかれて、トンネル形の石室が構築されて以降ということから、早く考へても6世紀前半以降であり、さらには石室構造上の変遷では6世紀後半以降という年代にもなり、善光寺平での合掌形石室の年代よりも後出という状況となる。

また公州での斜天井石室の系譜をさらに考へるならば、もし、斜天井石室の出現が6世紀前半で

あるとすると、高句麗の南下政策により南へ追われた百濟の人々の意識感情からすれば、新たな都にあえて高句麗の墓性の一つを採用するとは思えないという気持もしくはない。しかしいずれにしても、現在知りえる公州における斜天井石室の資料からは善光寺平との関係を導き出すには無理があろうが、基本的には石室の天井を屋根形（合掌形）にする根本的な意識は同じ系譜の中にあるものだと考えている。ここで公州（朝鮮半島）での斜天井石室と善光寺平での合掌形石室を関連づけるにあたっての条件を記してみたい。

- 1 = 現在知られている公州での斜天井石室のみならず、今後発見されるであろう斜天井石室の系譜が、構造上の変遷論のみで語られることなく、その年代も遺物論によって6世紀前半以前にまで遡ること。
- 2 = 屋根形（合掌形）に埋葬施設を造るにあたって、強い意識が反映されているとするならば、高句麗にその系譜を追うこととなろうが、その場合、公州に都が移される以前の資料が確認されること。
- 3 = 日本での初期須恵器が地方県ごとにバラエティーがあるのは、伽耶や百濟から来た工人達の地域差に由来するものと考えるが、同様に善光寺平での合掌形石室の系譜が、現在知られている公州での斜天井石室とは異なったものであり、公州で善光寺平的な斜天井石室が発見されるか、あるいは百濟での他地域か伽耶地域において同じ系譜の石室が求められること。
ここであえて現在しりうる資料から信濃における合掌形石室の変遷の傾向について考えてみると、大窟I型・大窟II型とする箱形石棺あるいは石棺状横穴式石室タイプからしだいにそれらが簡略化し、さらには古墳時代後期の横穴式石室意識の導入による大形化があらわれてくる状況が現状では見受けられる。
以上のことを総括するならば、善光寺平での合掌形石室の系譜を、今現在知られている公州での斜天井石室に求めることには無理があると考える。しかし朝鮮半島、特に百濟や伽耶地域にその系譜を求められることは異論のないところであるが、そのことが明確になるには上記の条件が満たされねばならないと考えている。

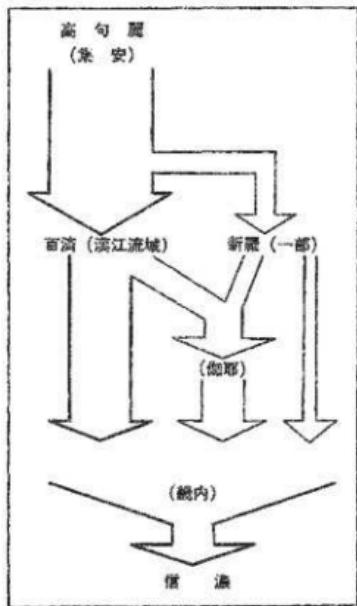
上記の条件が一日も早く満たされることに期待したい。

IV 善光寺平での積石塚古墳と合掌形石室

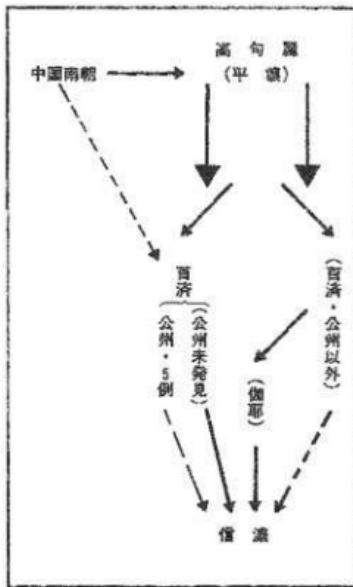
善光寺平での積石塚古墳については、その系譜をこれまでの高句麗～百濟～信濃とするものではなく、より広い視野でとらえるべきであることを述べ、また合掌形石室においても同様の考察となった。

善光寺平を中心に、信濃の地ではまず積石をおこなう埋葬方法が渡来した人々によって伝えられ、さらに若干の時間幅をもって埋葬施設の天井を合掌形にする方法が再び渡来人によって伝えられた。

それでは積石塚古墳と合掌形石室の関係についてはどうであろうか。



第27図 積石塚古墳の系譜（可能性として）



第28図 合掌形石室の系譜（可能性として）

善光寺平での合掌形石室のあり方をみてみると、盛土古墳にも積石塚古墳にも壇墓主体としてつくられている。

朝鮮半島における斜天井石室のあり方をみると、公州においても高山里においても現在のところ積石塚古墳との関連ではなく、すべて盛土古墳につくられている。このことからするならば、特にお互いに関係づけて説明する必要はなく、逆に善光寺平でのあり方に特異性がみられるのではないか。

それはこれまで述べてきたが、4世紀後半から5世紀前半にかけての朝鮮半島における高句麗の南下政策による圧迫によって駆逐をのがれるとするのみならず、朝鮮半島内部における様々な地域の人々の動きが生じたであろうことが察せられ、その動きの中で、積石による墳丘をつくりうる人々や屋根形の石室をつくりうる人々が畿内を経由して信濃へ入って来たり、あるいは日本海側から直接信濃へ入ってきたものと考えられる。(図27・図28)

善光寺平は朝鮮半島における特定の国内外を問わず異なる地域の人々の渡来地であり、それぞれが故郷と思う中で、気持（精神面）として形（物理面）として一番表現したい、そして表現しやすいものとして残したもののが積石塚古墳であり合掌形石室であったものといえよう。

善光寺平での積石塚古墳や合掌形石室にみえること、さらにはこれらがつくられた始まりの4世紀末

信濃の横石塚古墳と合掌形石室

主な形態	1 = 安板型 4 = 大室型	2 = 王塚型 5 = 針塚型	3 = 錐塚型
	3 (2――)註1 4 5	1 (2――)註1 4 5	3 (2――)註1
横石塚古墳	錐塚 1号 <small>(安坂 1号 大室 古墳 2号 2号 大室 23号 王塚)</small>	註4 <small>(安坂 1号 大室 古墳 2号 2号 大室 23号 王塚)</small>	註4 <small>(安坂 4号 大室 23号 王塚)</small>
年代	400	500	600
合掌形石室	錐塚 1号 <small>(安坂 1号 大室 古墳 2号 2号 大室 23号 王塚)</small>	註4 註4 註4 <small>(安坂 1号 大室 古墳 2号 2号 大室 23号 王塚)</small>	註4 <small>(安坂 空 3号 古墳 2号 2号 大室 23号 王塚)</small>
主な形態	2 註3 註3 7	1 4 5 6	3 8 9
	1 = 和葉型 4 = 金蓋山型 7 = 大是山型	2 = 山根王塚型 5 = 大室I型	3 = 帶塚型 8 = 大室II型

註1 = 墓丘の形態とすれば錐塚に近い時期と考えられるが、石室の形態からは
錐塚に近い時期と考えられる。詳細が不明なことから想定

註2 = 資料不足

註3 = 錐塚1・2号墳の石室を合掌形石室と想定した場合

註4 = 先後關係は特に示さず

第28図 信濃における横石塚古墳と合掌形石室の変遷

業から5世紀前半、あるいは5世紀中頃前後以後の相様をみてみると、陶質土器や初期須恵器の用いられ方、そして須恵器生産においても善光寺平は信濃の中でも特別な状況がうかがえることから、(115) 善光寺平は朝鮮半島におけるいくつかの地域文化の集合体が新たな波来文化として、これまでの善光寺平の文化の中に生まれ、同化していったものであるといえるのである。

最後にわかりうる範囲内での資料をもとに、また詳細が不明なものについては推測を加えて、横石塚古墳と合掌形石室の変遷を示してみた。一見したところ、まだまだ不明な事々や矛盾する事々が多いことがわかる。これが公となっている資料蓄積と研究の現状であろうことを述べ、おわりにしたい。(図29)

V おわりに

今回の表題をまとめるにあたって、あえて中国・韓国・朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」という）の資料についてもふれ、まとめてみました。

今回のこのレポートが積石塚古墳や合掌形石室のすべてを語るものでないことはいうまでもありませんが、私がここにまとめた各国の研究史や資料、そして考察をもとに新たな論考を加えていただき、積石塚古墳や合掌形石室の研究がさらに前進すれば幸いと考えています。

またこの積石塚古墳や合掌形石室の研究の進展には日本側・中国側・韓国側・北朝鮮側それぞれの相互理解の中での調査・研究が必要であり、特に韓国における調査・研究の積み重ねに期待するところです。

また今回はそれぞれの分類と系譜を中心に検討をおこない、あえて牧・馬飼育などに関連するであろう渡来人の性格についてはふれませんでした。今後の私なりの課題にしたいと考えています。

最後になりましたが、今回のレポートをまとめるにあたりご教示・ご指導・ご協力をしていただきました大原初童先生・小林三郎先生・趙現健氏・鄭鍾皓氏・小林秀夫氏・土屋穂氏・杉山秀宏氏・青木一男氏・黒岩篤氏・鶴田典昭氏・飯島哲也氏・樋山英史氏の方々に心よりお礼申しあげます。また、入稿まで様々ご迷惑をかけてしまいながらも最後までご協力していただいた編集係の上田典男氏にも心からお礼申しあげます。（1993年3月19日稿了）

追稿

この原稿を提出した後、明治大学考古学研究室の1993年度火童古墳群の調査がおこなわれた。この調査において合掌形石室の構造面や埴丘形態において非常に貴重な調査成果が得られている。また1994年度には須坂市による八丁堀2号墳の周辺調査によっても埴丘構造面で新たな調査成果が得られている。さらには山形県南陽市松沢古墳群にも積石塚古墳で合掌形石室を持つものがあるとここ2年ほどささやかれていたが、1995年4月26日の読売新聞にその事実が報道された。この2年間に埴形面・石室構造面、さらには分布面において新たな大きな成果が得られた。今後、これらの新知見をもとに今回の論の再検討をおこなってみたい。

この2年間の間に、長野市立博物館の山口明氏や須坂市教育委員会の小林宇吉氏、さらには読売新聞社の片岡正人氏に多くの情報やご教示をいただきました。お二人に心よりお礼申しあげます。

註1 佐藤勇太郎「赤枝高松古墳」「東京人類学会報告」第2巻第12号 1887年

註2 坪井正五郎「日本の積み石塚」「東京人類学会誌」第15巻第169号 1900年

註3 穂井新道「石塚の研究」「人類學雑誌」第32巻第1号 1916年

註4 矢沢柳道「黒櫛野天井の石棺を有するケーレン」「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2編 1924年

註5 岩崎長恩「金銀山古墳」「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2編 1926年

註6 森本六賀「金銀山古墳の研究」1926年

註7 横野宗治「須坂高松江清尾山石塚の研究」「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第12輯 1933年

- 註8 笠井新也「信濃國石清尾山の石冢に就いて」『考古学雑誌』第23巻第12号 1933年
- 註9 後藤守一「積石塚の問題」『考古学雑誌』第23巻第12号 1933年
- 註10 梁井英治「一塙及の合掌石棺」「信濃」第1火第3巻第12号 1934年
- 註11 大橋磐雄「信濃國舟井村の積石塚に就いて」『信濃』第11次第56号 1947年
- 註12 水野清一・船山勝康・岡崎敏「対馬一玄海における絶島対馬の考古学的調査」 1953年
- 註13 栗林紀道「信濃考古總覽」 1956年
- 註14 水谷光一・丸井正造「長野県須坂市郷原古墳の調査」『考古学雑誌』第45巻第1号 1959年
- 註15 尾崎真左雄「群馬県に見出る積石塚」「信濃」第11次第13巻第1号 1961年
- 註16 斎藤忠「横石塚考」『信濃』第11次第16巻第5号 1964年
- 註17 大場豊雄・原嘉壽・寺村光晴・桐原健「長野県東筑摩郡坂井安坂積石塚の調査1・2」「信濃」第11次第16巻第4号・第6号 1964年
- 註18 大塚初重・小林三郎・下平芳夫「信濃長原古墳群」 1968年
- 註19 原嘉壽・大塚初重・斎藤忠・大場豊雄・三上次男・森浩一・他「特集 積石塚をめぐる諸問題 長野県考古学会誌」第6号 1969年
- 註20 小林秀夫「喜光寺平における積石塚古墳の諸問題—特に墳丘築造について—」『長野県考古学会誌』第21号 1975年
- 註21 古跡秀一・丸井正道・杉山晋作・桐原 健氏他『特集・積石塚 考古学ジャーナル』No.180 1980年
- 註22 西谷正「高勾麗と古代の日本」「古代を考える」44 1987年
- 註23 桐原健「積石塚と渡来人」 1989年
- 註24 大塚初重「大室古墳群」(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 13 1992年
- 註25 大塚初重「東國の積石塚古墳とその被葬者」「国立歴史民俗博物館研究報告」第44集 1992年
- 註26 西川宏「中国における高句麗考古学の成果と課題」「青丘学術論集」第2集 1992年
- 註27 陳大為「桓仁県考古学を発掘開拓」「考古」 1960年1期 1960年
- 註28 方起東・劉振華「統一の多民族国家の歴史見証」「文物考古工作三十年」 1979年
- 註29 李洪福「集安高句麗研究」「考古学報」 1980年2期 1980年
- 註30 陳大為「試論桓仁高句麗積石塚の類型年代及其演変」遼寧省考古博物館学会成立大会会刊 1981年
- 註31 方起東・林至德「集安興濟溝兩座樹立石碑の高句麗古墓」「考古与文物」 1983年2期 1983年
- 註32 王承礼「吉林・遼寧の高句麗遺跡」「考古与文物」 1984年6期 1984年
- 註33 林正德・耿鉄華・傅桂秋・張雪岩・孫仁偉「集安県文物志」 1984年
- 註34 方起東「高句麗石墓の演進」「博物館研究」 1985年2期 1985年
- 註35 魏存成「高句麗積石塚の類型と演変」「考古学報」 1987年3期 1987年
- 註36 田村亮一「高句麗の積石塚」「東北アジアの考古学」 1990年
- 註37 註26
- 註38 李洪福「青銅器時代から唐代に至る集安地方の墳墓の変遷」「高句麗・渤海の考古と歴史」 1991年
- 註39 田村亮一「高句麗積石塚の構造と分類について」「考古学雑誌」第68巻第1号 1982年
- 註40 呼魯大学校博物館・呼魯大学校考古学科「田村亮清積石塚発掘調査報告、呼魯大学校考古人類学報刊」第6号 1975年
- 註41 金基雄「百濟の古墳」 1976年
- 註42 金元龍「韓国考古学概説」 1984年
- 註43 東瀬・田中俊明「韓国の古代遺跡 2 百濟・伽耶篇」 1989年

- 註44 金元龍「三国時代 高句麗」『韓國の考古学』 1989年
- 註45 林永珍「三國時代 石室（ソウル地区）」『韓國の考古学』 1989年
- 註46 註36
- 註47 朴東九・李慶周・金亨坤「崇谷多富洞古墳群」昌原大学校博物館学術調査報告 第4冊 1991年
- 註48 斎井和夫「東アジアの横穴式石室墓」『新版古代の日本 ②アジアからみた古代日本』 1992年
- 註49 註38
- 註50 註17
柳原健「安原古墳群」『長野県史 考古資料編 全1巻（3）主要遺跡（中・南信）』 1983年
- 註51 註50
- 註52 註50
- 註53 小林秀夫「竹原磐冢古墳・登間王城古墳・桑根井空冢古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻（2）主要遺跡（北・東信）』 1982年
- 註54 註14
永泰光一「八丁路塚1・2号墳」『長野県史 考古資料編 全1巻（2）主要遺跡（北・東信）』 1982年
- 註55 註54
- 註56 註25
- 註57 註25
- 註58 松本市教育委員会『針塚古墳の発掘』 1991年
- 註59 註24
- 註60 大阪府柏原市の茶臼塚古墳はソウルの石村洞4号墳に近いとする指摘からすると、これだけ多くの積石塚古墳がつくられた信濃善光寺平の地に、石材第3号墳や4号墳にみられる積石方法がおこなわれた古墳がみられないことは、たとえば高句麗でみられる積石塚のように、日本に被示した人々の層層差が積石塚古墳にも表現在しているのであろうか。
- 註61 高句麗（B.C. 2世紀～663年）
百濟（313年～663年）
新羅（356年～935年）
これら3国については各時代において国内外での統治、和平のくり返しであったようであるが、そのような半島の状況の中で、各時代における倭との国レベルでの往来、そしてそのレベル以外での多くの往来があったと考えられる。
- 6世紀の後半のことではあるが、588年の法興寺（飛鳥寺）の造営に際しては、「日本書記」には百濟王がおくれた僧や寺工・雑僕工・瓦工・同工らが参画しているようであるが、その瓦の文様は百濟の都城余に建立された軍守星鹿守や東南星鹿守など多くの寺院などにみられ、また御聖配殿については三重堂式とするものであり、やはり扶余の軍守星鹿守や赤跡守等などにもみられる。しかしこの御聖配殿のルーツは高句麗の都城余にある消息星鹿守へ求めることができる。とする状況もある。
- 註62 植松雷蔵「信濃国地図大電古墳群についての一考察」『考古学報誌』第16巻第1号 1925年
- 註63 仁科義則「山梨県大塚古墳」『山梨県史調査会報告』5 1931年
- 註64 斎藤忠「星振形天井を有する石室墳について」『考古学雑誌』第34巻第3号 1943年
- 註65 妻仁宗「百濟古墳研究」 1977年
- 註66 註63
- 註67 註4
- 註68 註5

信濃の積石塚古墳と合掌形石室

- 註88 計 6
- 註76 註63
- 註71 註10
- 註72 韓部忍「公州に於ける百濟古墳」『考古学雑誌』第26巻第3号 1956年
- 註73 註63
- 註74 大場義雄「信濃國の古墳群とその性格」『上代文化』21 1951年
- 註75 小野勝年「下高井地方の考古学的調査」『下高井』 1953年
- 註76 米山一政「長野市上松池ノ平古墳」プリント 1956年
米山一政「地附山古墳・上池ノ平1号古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』1982年
- 註77 小林秀夫「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』 1978年
- 註78 大場義雄「信濃史料1巻」 1956年
- 註79 大塚初重「信濃大室古墳群」『古代学研究』第30号 1962年
- 註80 米山一政・下平秀大「長野県長野市若狭吉3号古墳測量報」『信濃』第III次第19巻第4号 1967年
- 註81 大塚初重・小林三郎・下平秀夫「信濃長原古墳群」 1968年
- 註82 大塚初重「長野県大室古墳群」『考古学集刊』第4巻第3号 1969年
- 註83 註76
- 註84 註23
- 註85 土屋敏「大星山古墳群」『長野県埋蔵文化財センター年報』7 1990年
- 註86 計24
- 註87 註25
- 註88 金元龍「高山里第7号墳」『昭和12年度古墳調査報告』 1938年
朝鮮遺跡遺物団懇親委員会「高山洞第7号墳」『朝鮮遺跡遺物団懇親会句題集』(3) 1990年
この朝鮮遺跡遺物団懇親においては、高山洞(瑪)7号墳の年代を4世紀末から5世紀初とされている。
- 註89 金元龍「韓国考古学概論」 1972年
- 註90 安承周「公州地方の百濟古墳」『百濟の考古学 韓山考古学叢書』5 1972年
- 註91 金遂雄「百濟の古墳」 1976年
- 註92 註65
美仁求「百濟古墳研究」(国内三其訳) 1984年
- 註93 計43
- 註94 註48
- 註95 註77
- 註96 註77
- 註97 註77
- 註98 註77
- 註99 註53
- 註100 註53
- 註101 註53
- 註102 土屋敏「金燈山古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』 1982年
- 註103 註77
- 註104 註25

- 註105 距25内の実測図より計測
註106 距77
註107 距77
註108 距85
註109 距25
註110 距85
註111 齋木一男「3号組合式箱形石棺」「史跡御将軍塚古墳」 1992年
宇賀神誠司「38号組合式箱形石棺」「史跡御将軍塚古墳」 1992年
さらに小林秀夫氏・土屋廣氏・齊木一男氏にご教示いただいた。
註112 宇賀神誠司「組合式箱形石棺群のまとめ」史跡御将軍塚古墳 1992年
註113 距92
註114 距88
註115 西山克己「信濃国で須恵器が用いられた頃」「信濃」第40巻第4号 1988年
西山克己「信州における須恵器出現の頃」「考古学ジャーナル」No.316 1990年

牛と馬と猪と鹿と

—日本古代の動物犠牲をめぐって—

桜井秀雄

I はじめに

古代日本の祭祀を研究するうえで、見逃すことのできない重要なテーマに動物犠牲の問題がある。祭祀にあたって動物を屠殺し、いわゆる「いけにえ」として供するものである。こうした動物犠牲は世界各地にみられるものであり、特に古代日本に大きく影響をあたえた中国や朝鮮半島では一般的な祭儀として認められることからも古代日本においていかなる存在位置を占めていたのかを解明することは、祭祀が「いつの時代にも文化・社会の一端を凝縮したもの」を内包し、その変化を如実に反影してきた⁽¹⁾ことからも、看過できない重大な問題である。

それでは古代日本において、動物犠牲はどのような存在であったのだろうか。文献史料によると、牛、馬、猪、鹿を犠牲として供する祭儀が行われた事例が認められる。

このうち牛や馬を犠牲として供する祭儀の例としては、日本書紀皇極天皇元年七月戊寅条の「戊寅に、群臣相賀りて曰く、『村村の祝部の所教の驥に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を祀る。既に所效無し』といふ。」⁽²⁾や日本靈異記中卷第五「漢神の崇ニ依り牛を殺して祭り、又放生の薺を修して、現に善惡の薺を得る縁」条にみられる「猿津の國の東生の郡施田の村に、一の富める家長の公有り。姓名未だ詳ならず。聖武太上天皇のみ世に、彼の家長、漢神の崇に依りて膳シ、紀るに七年を限りて、年毎に殺し罷るに一つの牛を以てし、合はせて七頭を殺しき。」⁽³⁾という説話、続日本紀延暦十年九月条「斯伊勢。尾張。近江。美濃。若狭。越前。紀伊等国百姓。殺牛用祭禊神。」⁽⁴⁾日本紀略延暦二十年四月条「己亥。令越前國禁斷屠牛祭神。」⁽⁵⁾等にみられており、「殺牛祭神」⁽⁶⁾、「殺牛儀礼」⁽⁷⁾、「殺牛殺馬の祭祀」⁽⁸⁾、「牛馬の屠殺をともなう祭祀」⁽⁹⁾などと呼称され、從来から注目されてきたものである。私はこれを「殺牛馬信仰」と呼ぶのが適当であると考えており、また以前に文献史料を再検討することから、古代日本における殺牛馬信仰のありかたについて論じたことがある。⁽¹⁰⁾その詳細はここでは触れないが、殺牛馬信仰は、「外来信仰」として受けとめられ、また、国家からは禁圧の対象とされるあくまでも「例外的」な存在であり、したがって古代日本においてはひろくいきわたった一般的な祭祀習俗であるとは理解できないことを論じた。つまり、古代日本では牛や馬を犠牲とする「殺牛馬信仰」は社会に根ざした在来の祭祀習俗とは認められず、異質な存在であったといえるだろう。

それではこうした殺牛馬信仰のあり方から考えて、動物犠牲というものは古代日本では採用されなかつたものと理解してよいのだろうか。私は否と考える。一口に動物犠牲とは言つても、牛や馬に関するものと猪や鹿に関するものとは決して同一なレベルで理解することはできないのではある

まいか。

そこで今回は牛馬についてのみではなく、猪や鹿についても視野においてよりひろく古代日本における動物犠牲のありかたについて考えていきたいと思う。

ところで文化人類学的にみると動物犠牲、Sacrificeはさまざまな機会に行われていることがわかる。佐々木宏幹によれば、それは、個人的な病いや罪、穀の祓除、農耕、漁労の開始時、季節の変わり目、建業、工事の開始時、通過儀礼、共同体の大祭、王の就任式、戰闘、進征の開始時などに及ぶという。⁽¹¹⁾古代日本における殺牛馬儀例も①而乞いなどの農耕儀式に関するものと、②崇りをはらうための漢神信仰に関するものとの二種類がみられる。⁽¹²⁾現在の私にはこうしたすべての事象を論じることはできない。そこで今回は農耕に関するものを中心に考察していきたいと思う。⁽¹³⁾

II 猪と鹿による犠牲祭儀

古代日本において猪や鹿を犠牲として供する祭儀の事例をまず文獻史料から探ってみよう。

『播磨國風土記』の讚容郡条にはその地名の由來を説明するものとして以下の記載がみられる。

「讚容といふ所以は、大神妹姫二柱、各競ひて國占めましし時、嫁玉津日女命、生ける鹿を取り臥せて、其の腹を割きて、其の血に稻種き。仍りて、一夜の間に、苗生ひき。即ち取りて殖ゑしめたまひき。爾に、大神、勅りたまひしく、「汝妹は、五月夜に殖ゑつるかも」とのりたまひて、即て他處に去りたまひき。故、五月夜の郡と號け、神を賛用都比賣命と名づく。今も讚容の町田あり。即ち、鹿を放ちし山を鹿庭山と號く。」⁽¹⁴⁾

この郡を讚容という由來は、夫端である大神妹姫二柱の神がそれぞれに先を争って國を占められた時に、妹玉津日女命が鹿を生け捕りにし、寝ころがし、その腹を割いてその血に浸して稻をまかれた。すると一夜のうちに苗が生えてきたので、即座にこれを取って植えさせた。ここに大神は勅して「あなたは五月夜に殖えなさったのか」と仰せられて、すぐに他の場所に去ってしまった。そのため、この郡を五月夜の郡と呼び、神を賛用都比賣命と名づけるのである。現在も讚容町田がある。つまり鹿を切り裂いた山を鹿庭山と呼ぶのである。

これによれば、稻作にあたって、鹿の出血を苗代として稻種を蒔くという肥沃的な方法がとられたことが理解されよう。そしてその際に「其の腹を割きて」とあることから鹿を犠牲としたことがうかがえる貴重な史料である。

また、同じく『播磨國風土記』の黄毛郡雲洞里条にも、

「右、雲洞と號くるは、丹津日子の神、「法太の川底を、雲洞の方に越さむと欲ふ」と爾云ひし時、彼の村に在せる太水の神、辭ひて云りたまひしく、「吾は穴の底を以ちて佃る。故、河の水を欲りせず」とのりたまひき。その時、丹津日子、云ひしく、「此の神は、河を掘る事に怨みて、爾いへるのみ」といひき。故、雲洞と號く。今人、雲洞と號く」という記述がある。これも地名由来談話であるが、右を雲洞と呼ぶのは、丹津日子の神が「法太の流れを雲洞の方に越えさせたいと欲

する」と言った時にその村にいらっしゃる太水の神は辞退して「私は獣の血をもって田を耕しているので川の水は欲しくない」とおっしゃった。その時、丹津日子は「この神は川を渦る仕事にあきてそのようなことをいっているだけだ」といった。そのため、雲霧と呼び、今的人は雲霧と呼んでいるというものである。ここにも猪や鹿などの血でもって稲穂を植えたことが理解される。

つまり、これらの史料は古代日本において、農耕のはじめにあたっては鹿や猪を捕らえて、殺すという犠牲祭儀が行われていたことを如実に示すものであろう。

そして、このように農耕のはじめにあたって鹿や猪を犠牲とする祭儀は民俗例にもその痕跡を多く残しているのである。ここではシバマツリ、シャチマツリ、ブサマツリをその例としてとりあげたい。

シバマツリとシャチマツリについては千葉徳爾によって詳しい報告がなされている。⁽¹⁵⁾ 千葉の報告によつてその祭儀を紹介してみると、鹿児島県大隅半島の先端に近い大根占町池田の旗山神社で行われるシバマツリは

「正月二日から四日まで、三日にわたって行なわれる。まず二日の早朝に部落代表と神職とが、立神という岩のそびえた所に行って神をとり、これに幣をつけて地に立て、そのかわらを木の鉢の形をしたもので耕し、一人が牛、他が馬鉄を操作する者のまねをして土の上を引きまわし、その上に柴を折った苗をさして田植の様子を模する。

さて、さきの柴幣を持ち帰って神社本殿の正面に入れて立てる。三日には、別に神事用にとって来て、本殿前に伏せてあった柴を起し、表を向けて立て、太鼓を打つ。これを合図に各戸では自宅の前に伏せてあった臼を起し、戸主が杵でたたく。これを臼起しといふ。つぎに神職たちが立神から準備して神、神社においてある金幣、鉢、面を付けた竿などを持ち、音楽を奏して壇之内という小高い岡まで行く。そこに神輿を立て、前に人形を紙に描いたものを置いて、その目・口・手・足・腹などを木の枝で突き刺す。悪人をこらしめるのだといわれるが、一種のまじないとみられる。

それから稚の枝を集めて積み、その中に高さ50センチメートルほどの葦で作った猪の形をおく。神職や有志たちが狩人となって弓に矢をつがえ、この稚の葉のヤマを取り西んで狩のまねをする。神官が次の唱えごとをする。

『百匹の虎はケウケウという。千匹のシは逃ぎよう逃ぎようとする。』

狩人たちは猪を見つけ矢を放つ。それから木を集め火をしながら、獲物の毛を焼くといって、持参してあったシトギをあぶって、行ったときと異なる経路を通って帰るが、途中の鳥という場所で、ヤビラキと称してさきに焼いたシトギモチを配分して食う。一部は菴に入れ、シシの肉といて村に持ち帰り村人に配分する。

四日には川の幸をとりに行くといって、高尾山という所に行き神舞を演ずる。この三日がすげれば「山の口があく」といって山仕事をはじめてよい。狩もそれから行なう。つまり、阿蘇神社の下野の狩が終ってはじめて、阿蘇外輪山の山焼きが行なわれるよう、渡山でも神事の狩が行なわれてから、一般住民の狩や農耕の活動がはじまるわけである。現在は猪も少なくなって、猪肉を餅で

代用しているわけだが、古い時代には実際に狩を行なって獲物の一部を捧げ、残りは住民一同が配分したと推定してよいだろう。」ということである。

またシャチャマツリは、「愛知県北設楽郡東栄町古戸では、旧二月初午の日に、タネトリという行事をする。青杉葉で実物よりやや小さい鹿の模型二つを作る。雄鹿は青木の枝で角をつくり、耳と足とは竹筒である。これを宮太夫と別当二名（昔から定まった家柄）で、稻荷社に合併された境内の小社駿跡神社の前に当日朝立てておく。次に稻荷の社地の前の川から水を汲んで来て、社地の中の乳母神の石に供え、鹿の前に蔥を敷いて三人の別当役がすわり、矢取役がその前に立つ。宮太夫は稻荷社の中で祈禱した後合囃の声をあげると、別当三人は弓に矢をつがえ、三々九度に鹿を射る。」

弓は梅のズエに樹皮をよったつるを張り、竹の矢に白紙の羽をつけたものを用い、ハマヤと呼んでいる。昔は藁で作ったという。雄鹿の腹の下に杉の青葉をのせた赤飯の握り飯を置いておく。これももとは苞の中に小豆と白米を炊いたゴクと生糀とをませて入れ、それを鹿の腹の中に納めたというが、今は外に置いたままである。他の集落の例は中に入れるところが多い。

昔は別当が各入九回ずつの矢を射終ると、一人が鹿を抱き上げて腹を裂き、中の苞を出して白米をひろげた。一般の見物客は各自白紙とハナノキ（しきみ）の枝で作った木鉢の模型を準備して会場に出かけており、取り出した白米と境内の土とをませ、白紙に包んで紙に結びつけ持ちかえる。昔は五色みにして五穀の穂といったそうだが、現在は鉢二つ包二つとしている。これに鹿の模型の杉の葉を添え神輿にかざっておき、白米と土を混じたものは田植の時水口に供えあるいは荷袋にまいた。

現在は早川氏の報告にみえないムジナ⁽¹⁰⁾と呼ぶ、竹を組んで白紙を貼った的を大小二つ作り、これに紐をつけて鹿のそばに立てておき、鹿を射た後にムジナを別当が一人一回つまり三度射る。射終ると子供たちが紐を引いて境内をかけまわり、他の子供はめいめい棒でムジナを打って竹組みをバラバラにこわす。おそらくこれがハマの的の原型で、引きまわすのはもとは丸い的をころがしたもののが変わったらしい。ムジナは煙を荒らすから退治するのだと説明している。」と記述され、この儀礼の変形過程を推測している。

また、ブサマツリは、「愛知県遠見郡海老町（現・鳳来町）で正月六日に行なう。その年はじめて狩獵に出、そのときの獲物を山の神に供え、その年の狩の幸を祈る祭。社と社の二頭の鹿を用いたが、鹿がいなくなったので、白旗で鹿を形造り、氏神様の境内で祭を行なう。白旗はオハタキともいって、檜の粉でつくった団子である。この旗を子供たちがかつて村中を駆け回り、その後を勢子が棒を持って追いかける。あとで、お宮の境内にあるツバセンと呼ぶ四角に石で囲んである二間くらいの場所にこの旗を立て、大声で『横原山へ追い込みましたからお願ひします』と呼ぶ。すると福宜が『おうい』と返事し、フク（畜部）が弓を持って出かける。第一矢を鹿より上に、第二を下に放ち、第三矢を鹿の脇に当てる。その鹿の頭に七十五本（山の神の数という）の御幣を挿す。そして腹を割り、肉になぞられた白餅を取り出し山の神に供え、その残りをみなで分配する。世人たちはこれをシャチャマツリともいっている。ブサマツリは奉射祭の意であろう。」という報告がなさ

れている。⁽¹⁷⁾

これらは狩猟祭儀ではあるが、千葉徳爾はこうした民俗例は、「狩の祭儀がそれだけで独立した儀式ではなく、農耕のそれと関連して必要なものと考えられていたらしいこと」も推測されるといい、「実際の農作の豊かなことを祈る目的があった」という。

そして、1 実物の鹿狩をともなったこと、2 腹を裂いて血（内臓）を取ったこと、3 それを田植もししくは苗代に用いたこと、の三点が『倭磨國風土記』にみえる動物供犠の農耕儀礼と類型を同じくすることを指摘する。そしてここには「古代農耕の祝術的な祭の残存が今日のこれら祭儀となっていると結論して差し支えあるまい」⁽¹⁸⁾という。もちろんこのような民俗例から古代の祭儀の様相を理解することには十分な慎重さが必要ではあるが、私もこうした民俗例は鹿や猪を犠牲として供する古代祭儀の残影を示すものと考えてよいと思う。

また、横田健一は「豊後國風土記」速見郡頸峯条の記述⁽¹⁹⁾も先にあげた説話とは、①鹿とその捕獲、②苗をうえること、③豊作、という三つの要素において共通していることを指摘し「やはり播種祭なしし、田植祭りが鹿の狩猟と供犠を伴った神話の痕跡を有している」⁽²⁰⁾と述べている。

また、鹿や猪を犠牲とする祭儀はこのような播種祭や田植祭といった農耕をはじめる時期に限られたものではない。今昔物語「參河守大江定基出家第二の説話」には、

「而ル間、其國ニシテ國ノ者共風祭ト云事ヲシテ、猪ヲ捕、生ケヤラ下シテケルヲ見テ、弥ヨ道心ヲ発シテ、速ニ此ノ國ヲ去ナムト思フ心付テ」⁽²¹⁾

という記述がある。これは三河国で住民たちが風祭という祭儀を行い、猪をつかまえて生きながら肉を切り裂くのを見て、大江定基がいよいよ深く道心を起こして、すぐにこの国を立ち去ろうという気持ちになったことが記されており、つまりは三河国で住民たちが「風祭」に際して猪を捕まえて生きながら肉を切り裂くという動物犠牲を行っていたことが理解されるのである。「風祭」とは日本古典文学大系本の注釈によれば「風を鎮めるために風の神を祭る行事。茲では秋の収穫を祈るもののものと思われる。」ということであり、また、横田健一によれば「台風シーズンに稻の豊作をさまたげる台風の吹かぬように祈り、豊作を祈る祭り」⁽²²⁾ではなかったかと述べ、「そうした祭りに動物犠牲がともなった」ことを示す史料であるという。このような農耕に關係する祭儀に際して動物犠牲が伴っていることは古代日本において鹿や猪の犠牲祭儀がかなり一般的なものであったことが理解されよう。⁽²³⁾

さてこのように古代日本においては猪や鹿を犠牲として供する犠牲祭儀は農耕と密接に結びついたひろく一般的なものであったことが理解されるのである。

ところでさきに牛馬を犠牲とする殺牛馬信仰は古代日本においては国家によって禁じられる対象であり、決して一般的な祭儀ではないことを指摘したわけだが、同じ動物であってどうしてこのような差異がみられるのであろうか。そしてこれは動物犠牲に限ることではなく、他にも牛・馬と猪・鹿とでは様々な相違点がみられるのである。そこで次に牛・馬と猪・鹿とにみられる相違点をまとめてみたい。

III 牛・馬と猪・鹿との相違点

(1) 犠牲禁止令および肉食の問題

日本書紀天武天皇四年四月庚寅条には、

「諸國に詔して曰く、「今より以後、諸の漁獵者を制めて、櫛舟を造り、櫛槍の等き類を施すこと莫。亦四月の朔より以後、九月三十日より以前に、比彌沙伎理、梁を置くこと莫。且牛・馬・亥・猪・鶏の穴を食ふこと莫。以外は禁の令に在らず。若し犯すこと有らば罰せむ」とのたまふ。」という記事がある。これによると今後は、四月一日から九月三十日までの間以外には、梁をつくって漁労をしたり、落とし穴をつくって狩猟をすることを禁止し、さらに牛・馬・犬・猪・鶏の肉は食べてはならないとし、違反した場合は罰することである。⁽²⁴⁾

ここで注意したいのは食べるのを禁じた動物の中に猪と鹿は入っていない点である。つまり、猪と鹿はこの法令においても食べることは禁止されてはいないわけである。猪や鹿に関しては一年を通して狩猟し、その肉を食べることはこの法令によっても禁止の対象とはなっていないのである。

古代日本において猪や鹿の肉を食することは何ら抵抗がなかったことは、「齒固」の儀式からも理解できる。「齒固」は正月元日より三月にわたって宮中において行われた儀式であり、年頭にあたり、天皇が延命のために食前に祝儀であって、平安期から行われた行事である。歯は齧に通じ、齒固とは歯を固めるという意味であり、それによって年を延ばして歳を固めるものである。⁽²⁵⁾さて、この齒固の儀式では「蘿蔔味噌漬豆、鹿丸、猪丸、押鮓、煮塩鮓、芭籠七口、高粱一斗。」⁽²⁶⁾とあるように、大根、瓜、鮓の他に、鹿と猪の肉を天皇の食前に供じたわけである。

また、続日本紀天平宝字二年七月四日には
 「甲戌。勅。比來皇太后寝膳不安。御經旬日。朕思。延年濟疾。莫若仁慈。宣令天下降謹。始自今日。迄今年十二月卅日。禁斷殺生。又以猪鹿之類。永不得進御。」とあり、皇太后の病気がおもむしくないため、仁慈の行いをするべく、今日から今年の12月30日までという期限付きながら殺生を禁止することとなる。猪や鹿の類を供御として貢進することを永久に禁止する命令が出されている。つまりこのことから天皇は年頭の「齒固」以外にも猪や鹿の肉を食していたことがわかるだろう。このようなことからみても鹿や猪についてはその肉を食べることに禁忌があったとは考えられず、当時、かなりその肉が貰へられていたことも十分に推測できよう。

一方、牛・馬については、先にあげた天武紀四年四月庚寅条においてその肉食を禁じられた動物であり、また続日本紀天平十三年二月戊午条には

「馬・牛は人に代りて、勤しみ勞めて人を養ふ。茲に因りて、先に明き制有りて屠り殺すことを許さず。今聞かく、「國郡禁め止むこと能はずして、百姓猶屠り殺すこと有り」ときく。其れ犯す者有らば、族譜を聞はず、先ず決杖一百、然して後に罪科すべし。」という記事がある。これは馬や牛は人間に代って働き、養ってくれる有用なものなのだから、屠殺してはいけないので、國郡ではいまだに禁止することができないでおり、いまもって屠殺する農民があるという。そこで違反す

るものには薩や腰の特権をもっているかに間わず、まず杖で百回打ち、そのあとで涙を諒するようにせよ、という内容である。「明き剣」とは前に触れた天武紀四年四月庚寅条の法令である。ここで牛や馬は屠殺してはならないものだという思想が理解されるわけである。ここに猪や鹿の場合とは大きな相違がみられるのである。⁽²⁷⁾

(2) 埋葬された馬

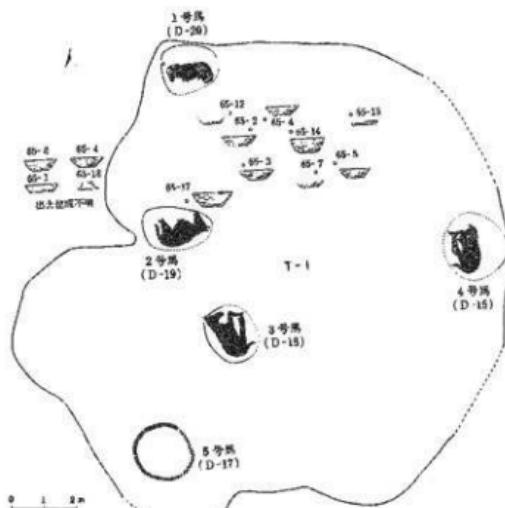
猪や鹿にはみられないものに埋葬馬の存在がある。その代表的な遺跡としてまず、野火付遺跡をとりあげたい。

野火付遺跡⁽²⁸⁾は長野県御代田町に所在し、浅間山の裾野の最東部の平地面に立地する鉄師屋遺跡群のひとつである。このうちT-1号特殊堅穴状造構のエリア内において5基の埋葬馬土壙墓群が検出された。T-1号特殊堅穴状造構の一部は床面のように堅く繋まり、環17点が検出され、これらは埋葬馬に伴って供献されたものと考えられ、平安時代前期の9世紀前半に比定される。

D-16号土壙墓（4号馬）はT-1号特殊堅穴状造構の東端に位置し、その上部を溝によって破壊されており、ほぼ円形と推定されるがはっきりしない。馬骨は下顎骨、肋骨、大脛骨、臼歯、門歯などが出土している。後足は前方にまっすぐ伸びた状態で土壙内に埋葬されたものと考えられる。頭部はほぼ北方を、背は東方を向いていた。副葬品は認められなかった。10才前後と思われる。

D-17号土壙墓（5号馬）はT-1号特殊堅穴状造構の西南コーナーに位置するがそのプランは明確にとらえられず、馬骨もわずかに臼歯4点が検出されたのみである。5才程度と思われる。

D-18号土壙墓（3号馬）はT-1号特殊堅穴状造構のほぼ中央部に位置し、長軸1.8m前後を測る隅丸方形のプランを呈する。馬骨は下顎骨、肩甲骨、大脛骨、門歯、臼歯などがみられ、頭蓋はすでに存在しなかった。背を西に、頭を北に向けて埋葬され、後足は前方へまっすぐ伸びたままの状態で、前足は軽く折り曲げた状態であり、副葬品は認められなかった。



第1図 野火付遺跡 埋葬馬と供獻遺物の配置概念図
註28文献より

20~30才程度と思われる。

D-19号土墳墓（2号馬）はD-18とD-20の中間に位置し、長軸がほぼ東西を指す不整横円形を呈する。馬骨は下顎骨、肩甲骨、大腿骨、臼齒、門歯などであり、頭蓋は残存していなかった。背を南に、頭を東に向けて埋葬されたものと考えられ、首は土壙の壁に接してやや立ち上がっていた。肋骨の部分から土師器破片1点が出土した。4~5才程度と思われる。

D-20土墳墓（1号馬）は、T-1号特殊竪穴状造築の西北コーナーに位置し、平面は横円形、断面は偏平なカマボコ形を呈する。馬骨としては下顎骨、大腿骨、臼齒、門歯などがあり、背を北に、頭を西に向けて埋葬されたものとみられる。須恵器壺が1点出土した。10~12才程度と思われる。

これらの馬は横位に頭部が前脚近くに置き、前後脚ともほぼ揃えて丁寧に安置されており、またいずれも馬体が切断された痕跡は見いだしにくいことからそのまま埋葬されたものと思われ、人の手によって殺されたものではないと報告者の推論は指摘している。⁽²⁹⁾この付近には塩野牧と長谷牧という官牧や養蚕駅が存在したと予測されていることから、このような埋葬馬は牧や駅家と関係したものでおそらくは死後に埋葬されたものと考えるのが妥当であろう。

また、更埴市に所在する五輪堂跡からも同様な埋葬馬の事例が報告されている。⁽³⁰⁾馬骨は地表下40cmの所に140cm×180cm、深さ50cmの横円形を呈する土壙に、ほぼ完全な形で出土した。北側に頭部があり、首を折り曲げるよう南側を向いており、東側に背骨が南側の背部に競き、西側に前足と後足が交差し、共に折り曲げている。後世の溝により、頭蓋骨は下顎骨、上歯を残すのみで切り取られている。背骨、肋骨等は腐食して残っていない。他に6世紀中葉の窓坏、甕形土器、丸い棒状の青銅製品、鉄製品も出土し、土壙上部には掘りこよし大の河原石が集められていた。これは圓筒形とともに明らかに埋葬されたものと報告者の矢島宏雄は推定している。

このように埋葬された馬は、他にも兵庫県姫路市の天神遺跡、大阪府東大阪市の日下遺跡など全国的にかなり多くの例がみられている。⁽³¹⁾

（3）殉葬された馬

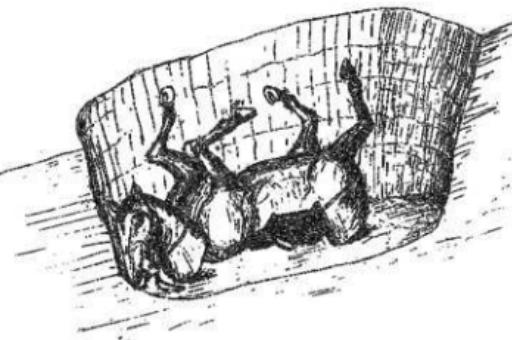
日本書紀孝德天皇大化日年三月甲申条にはいわゆる大化薄葬令がおさめられており、そのなかには「凡そ人死亡ぬる時に、若しは自を絶きて死ひ、或いは人を絞りて死はしめ、強に亡人の馬を死はしめ」という記述があり、人の殉死とともに馬の殉葬を禁止することも含まれている。森吉一によれば、こうした馬の殉葬はすでに「いわゆる大化前代におこなわれていたのではないか」⁽³²⁾と考えられるという。そして殉葬の痕跡は考古学的にも確認できるのである。

千葉県佐倉市に所在する佐倉大作遺跡では、⁽³³⁾第31号墳の周囲の外側に接して2基の土壙が発見された。このうちの1号土壙は長さ約2.5m、幅1.2m、深さ約1.4mを測るもので、馬が一頭が充分に入る大きさをもつ。6世紀前後の時期と考えられる。ここから出土した馬の遺存体は、齒が土壙の北西コーナー際の底面近くから検出され、歯を咬んだ状態で出土し、やや離れた東側から鞍金具である鞍、鉄具等が出土している。馬歯の位置から、馬の頭部は北側の壁に接する位置に吻部を下に向か、鼻が西側を向いた状態であることが分かる。鞍2点は共に頭部を北側（馬の頭部側）に

向け、刺金を下にした状態で出土している。2点のみの場合、鞍の後輪に装着される例が多いことから、鞍の状態から鞍が下向きであったか、あるいは遺骸の腐食により鞍の原位置が変わったことが想定され、報告者は前者のように鞍を装着した状態が自然であるとし、頭部側が後輪側であることから、頭部の向きと胴部の向きがそれぞれ反対方向を向くことになる状況を想定する。つまり、この馬は馬具を装着し、頭部と胴部が逆向きであることから、それそれが切り離され、頭部は土壇北側にもたれかかるように、胴部は東壁寄りに背を下にした仰向けの状態で、1頭分が埋葬されたと推察されるという。これは殉葬されたことを示す非常に良好な事例である。

また、飯田市塵光寺に所在する新井原遺跡では、新井原12号墳と新井原14号墳にはさまれて5世紀末から6世紀前半の「馬塚」がみられる。⁽³⁴⁾馬墓は上部での幅1.1m、長さ1.8mの隅内長方形を呈し、深さは0.6m、底部での幅は上部より10cm位狭くなっている。その土坑の中より馬の骨、馬具の出土をみた。馬骨には良好に残存した頭部と四肢がみられ、馬体のすべてが埋葬されたものと考えられる。馬長は轡、杏葉などの種類がみられており、報告者の小林正春は「馬具を装着したままであるいは意識的に装着して埋葬されたもの」と理解するが、副葬品としての性格も否定できないと述べている。桐原懿は古墳祭祀における生馬の供獻の可能性とともに、「殉葬される馬は被葬者生前の乗馬なので、冥界においても当然に同様の役を果たさなければならない」ために、「裸馬では人を乗せ得ず、そのためには轡、鞍、鎧を装着した飾り馬の態がとられ」るのであり、したがって「馬を殉葬する際にも、その後埋葬する場合にも最小限度の馬具は装着されていたとするべき」だという観点から殉葬された可能性も指摘している。⁽³⁵⁾おそらくこれは殉葬された馬の墓と考えてよいだろう。

佐倉大作遺跡のように明確な事例は極めて少ないものの、殉葬はかなり一般的な習俗であったと考えられる。⁽³⁶⁾



第2図 佐倉大作遺跡 31号墳 1号土坑

馬埋葬状態復原図

註33 文献より

IV 日本列島における牛馬の起源

前章においては、牛・馬と猪・鹿とでは様々な相違点がみられることを主に3点にしほって考察してきたわけだが、それでは果たしてそのような相違点は何に由来するのであろうか。ひとつの要

因としては、牛馬がこの日本列島にいつから生息していたのかという起源の問題があろう。

直良信夫、芝田清吾、林田重幸らは、縄文時代の遺跡、特に貝塚から牛馬遺存体が少なからず出土していることを大きな論拠として、牛馬は縄文時代にはすでに日本列島に存在していたと主張する。⁽³⁷⁾しかし松井章は馬に限定しての発言ではあるが、このような論識に使用された資料は「正式の発掘によるものは少なく、表探資料や考古学の非専門家の発掘資料などによるものが多く、層位、出土状態のはっきりしているものは少なかった」のであるという。そして、1960年代後半からの大規模開発にともなう発掘件数の急増にもかかわらず、縄文時代の馬の出土例は逆に極めて少なくなっていることから、「これまで縄文時代や弥生時代とされていたウマやウシの出土例も層位が疑問視されるようになってきた」と指摘し、また、近年になって通化学分析によってその骨の年代を推定する方法が試みられるようになり、その結果、今まで縄文時代といわれていた馬も「後世の混入であった可能性が強い例が多くなった」⁽³⁸⁾ことを論じている。

このように現在では縄文時代の牛馬の存在はかなり疑問視されており、やはり「今のところ、確實な資料で古く遡れる骨は、牛の場合、東京都港区の伊豆子貝塚の弥生時代後期とされているものであり、馬の場合は少し遅れて、4世紀末～5世紀に該当し、岡山県百間川沢田遺跡、奈良県天理市布留遺跡、和歌山市鳴神遺跡、和歌山県田屋遺跡などで出土している」⁽³⁹⁾という工楽普通の見解に私は賛同したい。

つまり、牛・馬は弥生時代後期から古墳時代という比較的新しい時期に渡来してきたものなのである。このことからまず、猪・鹿が縄文時代から狩猟の対象とされてきた動物であったこと⁽⁴⁰⁾と大きく異なり、牛・馬が野生動物ではなく、当初から家畜として移入されてきたことが理解されるであろう。⁽⁴¹⁾

V 古代における牛・馬の利用

そこで、古代日本において家畜としての牛・馬がどのような利用をされていたのかをここで考えてみたい。牛・馬は5世紀以降から急速に普及するようになり、屯倉や地方豪族の私牧もみられはじめていく。そして律令体制が成立すると牛・馬についての行政も整備されるようになる。

官牧が確立され、兵部省の兵馬司が監督し、軍團や駅馬に用いられた。これはのちに変質して、延喜式では御牧、近都牧、諸國牧という形態になっている。御牧とは左右馬寮に属し、皇室の使用する馬を供給する。近都牧も左右馬寮に属するが、中央とその近隣地域に設置されていて、諸國牧からの貢馬牛を一旦近都牧で放牧飼育してから貢上するものである。そして、諸國牧は、兵部省兵馬司に属し、諸国にひろく設置されたものである。

さて、律令体制下での牛馬はどのような利用をされていたのであろうか。ここで少しまとめてみよう。まず、馬だがこれは、軍馬、騎乗馬、伝馬、駿馬などが中心であるが、他に朝廷儀式に用いられたものもみられる。

牛は、戰時には物資輸送の際に用いられることもあるが、馬のように直接軍事用に使用されるこ

とはなかった。主に牛は農耕用と駆用として使役される場合が多かったし、貴族の牛車のような用いられたものもあった。また、乳牛の飼養と搾乳も認められる。さらに牛乳を原料として、「蘇」と呼ばれるバターやチーズの類もつくられていたのである。このように牛・馬は生活のなかで非常に重要な位置を占めるものであったのである。

ここで注意を引くのは、牛・馬が主として軍事用、農耕用、駆用として利用されており、一部が乳用されてはいたものの、肉用としては用いられないなかった点である。つまり牛・馬は当初から非食用家畜として移入されていたのである。さきに触れた縦日本紀天平十三年二月戊午条には牛馬の屠殺禁止の理由として「馬・牛は人に代りて、勤しみ勞めて人を養ふ」とあり、ここからも牛・馬が食用家畜としては認識されていなかったことが理解されるであろう。3章にて牛・馬と猪・鹿との相違点を指摘したわけだが、ことに殺生禁止令や肉食の忌穀などはまさしく牛・馬が非食用家畜であったことに由来している。⁽⁴²⁾

このように牛・馬と猪・鹿との間にいくつかの相違点がみられるのは、牛・馬が弥生時代後期から古墳時代という比較的新しい時期に、軍事や農耕、駆用などのような非食用家畜として移入されてきたことに由来するといえるのではなかろうか。

VI 小結 日本古代の動物犠牲について

以上、日本古来の動物犠牲について牛・馬・猪・鹿をとりあげて考察してきた。そして、一口に動物犠牲とはいっても、猪・鹿と牛・馬とではその存在のありかたは大きく異なっていることを指摘した。

つまり、猪・鹿による犠牲祭儀はひろくおこなわれていた一般的なものであったのに対して、牛・馬を犠牲とする祭儀は古代日本では採用されなかった習俗であり、あくまでも例外的なものであったのである。したがって、日本古代の動物犠牲について論じる場合には牛・馬の場合と猪・鹿の場合とを十分に区別して議論するべきであり、両者を混同して論じることはできないのである。

それではいったいなぜにこのように動物犠牲に関して牛・馬と猪・鹿とではそのあり方が異なるのだろうか。

前章において牛・馬は日本列島には非食用家畜として移入されてきたことを指摘し、殺生禁止令や肉食の禁忌などもそのことに由来するものであると論じたわけだが、動物犠牲についてもこのことが非常に大きな要因となっていると考えられる。佐原真は、

「食用家畜をもつ文化においては、帝王の即位、天神・地神をまつる祭祀、祖先をまつる祭祀、取穂祭、雨乞い等々の重要な祭祀に際して祭壇の前に家畜を屠殺して犠牲をささげることが広くおこなわれた。國家的規模の祭祀から村や家の祭祀にいたるまで犠牲がつきものであった」⁽⁴³⁾ことを指摘している。これは非常に重要な指摘である。古代日本において牛・馬を犠牲として供する祭儀が採用されなかったのは、やはり牛・馬が非食用家畜として当初から移入されてきたことに大きく関連しているのである。

しかしながら一方では猪・鹿による犠牲祭儀は一般的なものとしてひろくいきわたっていたことはどのように理解したらよいのだろうか。私は猪・鹿が縄文時代以来の狩猟動物であったことに注意したい。動物犠牲は農耕民や牧畜民ばかりのものではない。狩猟採集民にもみられる祭儀である。アイヌの熊祭りなどはその良い例である。播磨風土記の事例やシャチマツリ、アサマツリなどの民族例は狩りの祭儀と農耕の祭儀が結びついた犠牲祭儀であると思われる。佐々木高明はシバマツリやシャチマツリは、「この種の儀礼的狩猟の慣行については、私はもともと狩猟民が狩りの獲物の豊かなることを山のカミに祈願した儀礼を原型とするものだった」⁽⁴⁴⁾という。また、横田健一は「狩猟が農耕に豊作をもたらす呪術として行なわれるようにになったのは、古代の一時期であろうが、日本には弥生文化が稻を主体とする農耕複合文化体系としてはいって来た時に、おそらく東南アジア大陸から、稻作とともにいって来たものではないかと思う。」といい、「そして日本人は、それ以前に縄文文化の時代に狩猟を主生業としており、その段階でも狩猟の豊饒を祈る予祝儀礼ないし呪術を行なっていたので、比較的スムーズに、そうした呪術的農耕儀礼をうけいれることができたのではないだろうか」⁽⁴⁵⁾と述べている。横田がいうようにこうした儀礼が農耕複合文化体系として、東南アジアからはいってきたものであるのかどうか判断する用意は現在の私にはない。しかし、鹿や猪を犠牲とする祭儀が縄文時代からみられた狩猟に関係する動物犠牲につながるものであることは言えるのではなかろうか。

古代日本には猪・鹿による犠牲祭儀は一般的な祭祀習俗として農耕儀礼のなかにもみられている。しかし、牛・馬を犠牲に供する祓牛馬信仰は一般的な祭祀習俗としては採用されなかったのである。そこには牛・馬、猪・鹿の歴史的な有在位置の違いが反映していることが理解できるのである。したがって、牛・馬と猪・鹿の区別なしに日本古代における動物犠牲を論じることは不可能なのである。

以上、拙い論を重ねてきたが、このように動物犠牲の研究は単に祭祀の問題にとどまらず、古代日本の文化、ひいては社会構造の問題にまで普及する重要な課題なのである。今後はさらに世界的な視野のもとで追求していきたいと考えている。
(平成4年9月末日稿了)

註1 寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』16、1986

註2 日本古典文学大系「日本書紀 上・下」岩波書店、1965、以下日本書紀の引用はすべて本文部による

註3 日本古典文学大系「日本書紀」岩波書店、1967

註4 新訂増補国史大系「続日本紀」吉川弘文館、1988以下続日本紀の引用はこれによる。また、読み下し文は新日本古典文学大系「続日本紀 一・二」岩波書店、1989、1990による。

註5 新訂増補国史大系「日本紀略」青川弘文館、1985

註6 佐伯有清、栗原信也らの呼称。佐伯有清「八・九世紀の宮における民間信仰の史的研究—祓牛馬神をめぐって—」(『歴史学研究』234号) 1958、栗原信也「猿坐龍についての一考察」(『福井博士頌寿記念東洋文化論集』所収)、1969

註7 井上光貞の呼称「日本古代の王權と祭祀」東京大学出版会、1984

註8 土肥原の呼称、「日本古代における犠牲馬」(『文化財論叢』所収)、1984

- 註9 荒木敏夫の呼称「古代國家と民間祭祀」(『歴史学研究』560号)、1996
- 註10 摘稿「殺牛馬信仰に関する文献史料の再検討」(『信濃』44-4)、1992、なお拙稿「井戸から出土する牛馬遺存体について」(『考古学研究』39-2)も参照していただきたい。
- 註11 佐々木宏幹「供職」(『文化人類学事典』所収、弘文堂)、1987
- 註12 佐伯前掲文
- 註13 農耕儀礼としての殺牛馬信仰については以前論じたことがある。拙稿「殺牛馬信仰の世界—農耕儀礼としての牛殺し・馬殺し—」(『佐久考古通信』No.55) 1992
- 註14 日本古典文学大系「風土記」岩波書店、1958、以下風土記の引用はこれによる
- 註15 千葉藤爾「狩獵伝承」法政大学出版会、以ト千葉の引用はすべてこれによる
- 註16 三河高原の山村にみられるシャチマツリ等についてはすでに大正年間の末に早川幸太郎が調査して報告したものがある。千葉は早川の業績を踏まえつつ、さらに自ら調査した成果をこの報告にまとめているのである。なお早川幸太郎の狩獵伝承研究については、「早川幸太郎全集」第4巻、未来社刊に詳しい。
- 註17 柳田国男編「分類祭祀俗語集」丸善書店、1963
- 註18 千葉前掲書
- 註19 「豊後風土記」速見郡頬半条は「頭の峰。此の峰の下に水田あり。本の名は宅田なりき。此の坂の苗子を、鹿、獐に喫ひき。田主、櫛を造りて何ひ持つに、鹿到来たりて、己が櫛を擧げて、櫛の間に容れて、即て苗子を喫ふ。田主、拂櫛りて、其の頭を斬らむとしき。時に、鹿、精ひて云ひしく、「我、今、聖を立てむ。我が死ぬる罪を免したまへ。若し、大忌を垂れて、更存くことを得ば、我が子孫に、苗子をな喫ひそと告らむ」といひき。田主、ここに大く恥臭と懲ひて、放免して斬らざりき。時より以来、此の田の苗子は、鹿に喫はれず、其の實を獲しむ。因りて頬田といひ、衆、峯の名と為す。」という説話を記している。
- 註20 横田健一「神話の構造」木耳社、1990、以下、横田健一の引用はすべてこれによる
- 註21 日本古典文学大系「今昔物語集四」岩波書店、1962
- 註22 横田前掲書
- 註23 諸説大社上社の御頭祭(西の祭り)においては婆羅の儀式に御賛薦として鹿の頭75を奉納するがこれも鹿の犠牲祭儀の一例であろう。宮坂光昭によれば、現在は西の日の夕方の奉納品としては「鹿七十五頭をはじめ、猪(いのしし)・兔(うさぎ)・雁(かり)・鶴(こい)のほか海産物のアワビ・塩エビ・ボラ・サメ・ヒグラ・タコ・ワカメ等」がみられ、「酒は三石四斗余、土器千枚が用意されて婆羅の儀式が行なわれ、多金の氏子にも供され、「神入相害(あいなめ)」を楽しむ」といい、また「『西洞』には「禽獸ノ高モリ魚類ノ調味 美ヲ尽ス」とあり、のち武田信玄の「諫防上下官祭禦再興大第」によると、「鶴之抱行器・同兔・翼鳥・誠誠・同板百二十帖と置物の鶴・雁・鹿の頭・海産物。このほか史服八膳・肴數十八・一つ袋三百余膳・酒。引出物には、太刀・弓矢・盾・むかばき・鹿脛・馬等と定めて」であると論じている。(宮坂光昭「諸説大社の御柱と年中行事」郷土出版社、1992)
- 註24 この条の原文には「亦四月朔以後、九月卅日以前、莫置北猪沙伎理・樂。且莫食牛馬犬猿鷦之宍。以外不在禁例。若有犯者罪之。」とある。一般的には「以外不在禁例」の「以外」とは、「牛・馬・犬・猿・鷦之宍」以外の鹿や猪などの肉はかまわないという見解である。ところで佐伯有潤はこれとは異なる見解を示している。佐伯はこの「以外」とは、四月一日から九月三十日までの農耕期間以外のことと指しているのであって、通常は牛や馬の肉は食べられていたのだという解釈である。(佐伯有潤「牛と古代人の生活」至文堂、1967)しかし、いずれにせよ、鹿や猪は「牛・馬・犬・猿・鷦之宍」のなかにははいっていないのだから、牛や馬などとは異なった扱いを受けていたことは言えよう。
- 註25 山中裕「平安朝の年中行事」筑書房、1972
- 註26 新訂増補国史大系「延喜式」吉川弘文館、1988

- 註27 「古語拾遺」御歳神条には牛肉についての記述があり、これをもって古代日本においては牛肉を食する風習があったと論ずる向きもかなりみられるが、私はこの史料からそのような理解はできないと考えている。詳細は前掲註10および註13の拙稿を参照していただきたい。
- 註28 御代田町教育委員会「野火付遺跡」1965
- 註29 堤路「野火付遺跡における平安時代の埋葬風をめぐって」(『信濃』38-4)1986
- 註30 矢島宏雄「馬骨を出土した更地市五輪堂遺跡」長野県考古学会誌31、1978
- 註31 森悟一「大化革新令の馬の角設について」(『古代史論叢 上巻』所収)1978
- 註32 藤原経隆文
- 註33 千葉県文化財センター「佐倉大作遺跡」1990
- 註34 小林正泰「新井原遺跡の馬の墓」長野県考古学会誌37、1980
- 註35 桐原健「新井原遺跡発見馬骨の性別」(『伊勢』29-6)、1981
- 註36 馬の発現については森前持論文に詳しい
- 註37 渡良信次「日本および東アジア発見の馬車・馬骨」中央競馬会、1971
- 芝田清吾「日本古代家畜史の研究」学術書出版社、1969
- 林田重幸「日本在来馬の源流」
(『日本古代文化の探求—馬』所収、社会思想社) 1974
- 註38 松井章「動物遺存体から見た馬の起源と普及」
(『日本馬具大綱』古代上)所収、吉川弘文館) 1991
たとえば、近藤寛、松浦秀治、中井信之、中村俊夫、松井章「出水貝塚出土ウマ遺存体の年代学的研究」(『日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集』所収、1992)によると、鹿児島県出水市上知郷に所在する出水貝塚からの発掘されたウマ遺存体は縄文時代のものと確定的な証拠として引用されてきたが、骨のフッ素による相対年代判定と加速器法を用いたC₁₄年代測定を試みると、今まで縄文時代のものと考えられていたウマ遺存体は、おおよそ縄文時代末から室町時代初期にあたることが指摘できるという。
- 註39 工業管道「水田の考古学」東京大学出版社、1991
- 註40 弘生時代の狩猟については町田勝則の論考がある。
町田勝則「信濃に於ける米作りと狩り」「人間・達摩・遺物—わが考古学論集2」発掘者談話会 1992 この中で町田は「弘生時代の信濃は、飛鳥時代から狩猟対象獸となっていたシカを逐して狩猟乃至は農耕の儀礼が実施されていた可能性が高い」とことを指摘している。
- 註41 牛・馬が家畜としてみなされていたことは日本書紀神代卷四神出生の段からも理解できる。これは、『伊弉諾尊、三の子に勤任して日はく、「天照大神は、高天之原を御すべし、月夜見尊は、日に配べて天の事を知すべし。紫微星尊は、蒼海之原を御すべし」とのたまふ。供食神の神に御りたまふ。保食神、乃ち昔を離して面に横ひしかば口より飯出づ。又海に衝ひしかば、鰐の腹・鱈の頭、赤口より出づ。又山に横ひしかば、毛の鳥・毛の兔、赤口より出づ。夫の品の物忌に備へて、百目に肝へて髪たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿然り作色して日はく、「穢しきかな、鄙しきかな、家ぞコより仕れる物を以て、敢へて我に愛ふべけむ」とのたまひて、面ち御を放きて擊ち殺しつ。然して後に、復命して、具に其の事を書したまふ。時に天照大神、怒りますこと甚しくして日はく、「汝は是惡しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔て離れて住みたまふ。是の後に、天照大神、復天無人を逐して往きて審めたまふ。是の時に、保食神、實に已に死れり、唯少翁の神の頭に、牛鳥化ある有り。頭の上に卵生れり。頭の上に卵生れり。頭の中にも卵生れり。腹の中に卵生れり。陰に卵及び大小豆生れり。天照人、恐に取り持ち去きて奉退る。時に、天照大神召びて日はく、「是の物は、顯見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち攝神彦豆を以

ては、駄出種子とす。都を以ては水田種子とす。又刈りて天色若を定む。即ち其の種類を以ては、始めて天狹田及び長田に殖う。其の秋の豐歉、八握に莫衷然ひて、若だ快し。又口の處に賣合ひて、便ち絲抽くこと得たり。此より始めて蒙藏の道有り。保食神、此をば宇氣母知能加瀬と云ふ。顕見蒼生、此をば宇都志积阿鳥比等久佐と云ふ。』という五穀生成神話であるが、鈴方真亮は、①「毛鹿毛柔と牛馬とを明かに區別してゐること」と、②「牛・馬を五穀生成と同じ範囲に入れてゐること」を指摘する。そして「毛鹿毛柔」とは「山野に棲息してゐる動物、即ち、野生動物を意味する」と考えるべきであり、牛馬がこれらと区別されていることは、牛馬が野生動物としてではなく、家畜として理解されていたことを示し、また五穀生成と同じ範囲に属しているのは、「牛・馬を以て農耕關係の家畜」として理解していたからであろうと論ずる。(鈴方真亮『改訂日本古代家畜史』有明書房、1982) ここからも牛馬が農耕等に用いられた非食用家畜であったことがわかる。

註42 佐原真は「西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、中・南アメリカ、インド、東南アジア、中国、朝鮮半島北部においては、農耕開始と同時に、あるいは古い前後して食用（肉用あるいは内、乳肉用）家畜の飼育を開始した」のに対して、「北アメリカ、朝鮮半島南部、日本列島では、作物の栽培のみをおこない食用家畜をもたらなかつた」ことを指摘している。(佐原真「総論—原始・古代の衣食住と習俗」「岩波講座 日本考古学4」所収、1986)

註43 佐原前掲論文

註44 佐々木高明「福作以前」日本放送協会、1971

註45 横田前掲書

(追記)

本稿を脱稿してから2年半がたった。この間、動物犠牲について論じられる機会が著実に増えてきている。そこで補足として近年の研究成果のうち注目すべき論考について私見を述べたい。

(1) 桃崎祐輔の研究

桃崎は1993年に「古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中國東北地方の事例を比較して—」(「古文化談叢 第31集」所収)を発表した。これは古墳に伴う牛馬骨を日本列島のみならず朝鮮半島や中國東北地方まで広く視野に入れて集成し、「牛馬供犠」を考察した労作である。桃崎によれば、古墳に伴う牛馬供犠は宮崎県から青森県の範囲に80例以上みられるという。そして牛馬骨の出土位置は、

墳丘内（1類）の出土には 1 a. 積穴系埋葬施設から出土するもの

1 b. 橫穴系埋葬施設から出土するもの

1 c. 墳丘盛土・積石内から出土するもの

墳丘外（2類）の出土には 2 a. 古墳周辺の土壌より出土するもの

2 b. 周溝内より出土するもの

2 c. 周溝内土壌より出土するもの

2 d. 墓壙から出土するもの

の7種類に大別されるという。

また出土骨の部位のありかたは①全身骨が残っていたもの、②馬頭骨・牛頭骨が残っていたもの、③上下臼歯列が残っているもの、下顎臼歯列のみ残っているもの、遊離歯のみ残っているもの、④

四肢・胴体部の部分骨のみ残っているもの、⑤様々な部位が散乱して出土しているもの、⑥出土部不不明、⑦馬骨消滅、に仮分類している。そしてこの他、年齢や馬具等の検討も含め、古墳に伴う牛馬供犠には、①役畜的側面の「殉葬」、②非役畜・非日常的側面の「犠牲・生贋」、③食肉的側面の「食肉供獻」、④呪物的側面の「呪物供獻」、⑤斎死的側面の「追葬・合葬」の5つの側面に理解できると論じた。

古墳に伴う牛馬遺存体のもつ多様な属性をはじめて本格的に分析を施した論考であり、その論調は高く評価される。なかでも「牛馬供犠を伴う古墳が古代故比定地と隣接している例が多く認められ、牛馬飼育集団と牛馬の供犠に相互関係があると考えられる。おそらく殺馬殺牛儀礼は牛馬飼育集団のアイデンティティを高揚する機能を果たしていたのであろう。」という指摘は奥味深いものがある。私は古墳に伴う牛馬遺存体は、A犠牲によるもの、B死葬によるもの、C彼葬者の愛馬がその後に主人の傍らに葬られたもの、D単なる廻葬によるもの、の4つの形態に大きく分けられるのではないかと考えているが、この柄分類は今後の研究の一指針となりうるものであろう。

しかしながら「殉葬」と「犠牲」を同じ「供犠」の範疇でとらえることには私は反対である。この2者は「似て非なるもの」であり、別々の範疇で理解しなければならないものなのである。

そこでまず、犠牲とは何であるのかを明確にしておきたい。佐原真は「誰に、何のために犠牲を捧げるか」を、(1)天神・天帝へ、(2)豊作を祈って、(3)土地の神、五穀の神へ、(4)厄乞い、(5)日食・大水を嫌って、(6)河の決壊地点を修理するために、(7)名山・大川・八神(天主・地主・岳主・陰主・月主・日主)へ、(8)氷が解ける祭り・氷が張る祭りに、(9)駆除節度任祭礼に、(10)大昔の特定の人を祭って、(11)祖先を祭って、(12)祟りや毒氣を祓って、(13)守護を頼って、(14)市場祭りに、(15)孔子に、(16)天と地を祭って、(17)王朝の祖に対し、(18)即位儀礼で、(19)死者に捧げるため、等の19項目に分類している。(『駿馬民族は来なかった』NHKブックス、1993) このように犠牲はその機会も目的も対象もさまざまである。

したがって、犠牲が单一な原始的形態に基づくことを前提としていた、タイラーやスペンサーらの贈与説やスマスラによる交流説を代表とするかつての犠牲起源探求論は現在の犠牲研究にはあまり実効性をもたない。エヴァンス・ブリチャードはヌア一族の供犠について、「ヌアーの贖罪のための供犠の意味を一言で要約することは、それらが表している非常に複雑な諸概念を正当に表現したことにはならない。ヌアーの供犠について述べるには、多様な言葉を必要とすることはすでに述べたとおりである。蓋的交流、贈与、厄払い、取引き、交換、身代金、排除、放逐、浄化、瘦い、慰撫、身代り、自己犠牲、哀歎などである。状況と目的に応じて、この意味複合のうちの一要素がある供犠で強調され、別の供犠ではまた別の要素が強調されることになる。」と報告しているが、(向井元子訳「ヌア一族の宗教」、平凡社、1995) これはヌア一族のみに限らず供犠一般に通用することであろう。(ちなみにヌア一族が犠牲を供するのは、「病気のとき、罪を犯したとき、妻が不妊のとき、第一子が生まれたとき、双子が生まれたとき、息子が成人式を受けるとき、結婚式のとき、埋葬や喪明けの儀式のとき、殺人を犯したときや報復闘争が終結したとき、たくさんある結縁や父の死靈へ定期的供養をするとき、職に出かけるとき、人や物が落雪に会ったとき、疫病や飢餓に

やられたとき、大規模な漁獵活動に携わるとき、死靈が出現するとき、等々」に及ぶという。)

このように複雑な諸觀念をもつ供犠の本質をとらえるには、供犠の機能を重視した社会学者のマセル・モース（デュルケムの甥）とアンリ・ユベールが19世紀末に唱えた説が今もなお最も有効であろうと思われる。（「供犠」法政大学出版会、1963）

モースとユベールは、「供犠は、呪術的儀式や同時に恩寵、請願、神の憐れみを乞うことの三つに役立つ祈禱と同じく、同時に非常に多様の機能を果すことができる」が、その最も本質的なことは「実際は、そのとる形は多様ではあるが、つねに、同一の手続きからなっていて、その手続きが、非常に多種多様な目的のために用いられているからなのである。この手続きは、犠牲という媒介によって、つまり、儀式の中で破壊される事物の媒介によって、聖なる世界と世俗の世界の間の伝達を確立することにある」のだ。つまり、供犠儀式において重要なことは、その起源を知ることではなく、供犠そのものの儀礼体系やその意味・機能の理解であるというわけである。供犠の宗教性という「そうした特性を付与するのはむしろ供犠そのもの」なのであり、したがって「供犠は犠牲にきわめて多種多様な神力を与え、そうして、種々の儀式においても、同じ儀式においても多種多様な機能を果たすのに適したものにする」のである。

このモースとユベールの論によれば、犠牲において最も重要な要素は、「動物を殺すこと=破壊すること」であることが理解できるだろう。

私も犠牲の最も本質的なことは「動物を殺し、そして斬ること」にあると思う。東洋史学者の栗原朋信も「犠牲」と称される供御は、生きている動物を「殺す」ことが、儀禮の一部として重要であったと論じている。（『犠牲禮についての一考察』『福井博士頌寿記念東洋文化論集』所収、1969）また田村克巳は「供犠の殺害行為は、力の驯化とともに、肉体=〔形〕の破壊によって、力=霊的なものを解放するものとみられないだろうか。それは、物を靈に転化する過程である。」（『物と靈』「文化人類学へのアプローチ」所収、ミネルヴァ書房、1988）と述べているが同意である。

犠牲とは祭祀の一形態である。したがってそこには「超自然的存在に祈り、そして願う」ことが前提として存在している。そしてその祭祀には「動物を殺し、超自然的存在に捧げること」が必要とされるわけである。つまり、犠牲を供する祭儀=供犠とは「超自然的存在に対する祈願の表われとして動物を殺し、これに捧げる祭儀」なのである。そしてさまざまな機会において、この儀式を執り行うことによって、さまざまな目的を達成しようとするものなのである。これが「犠牲」の思想である。（ところで、三浦祐之は「縄文時代にはイケニヘ頭は存在しなかったし動物供犠もおこなわれていなかったということは、断言してもよい」と述べ、縄文時代の猪などによる犠牲やアイヌの熊祭りにおけるものは「靈送り」であって「犠牲」ではないという発言をしているが、これは全くもって理解に苦しむところであり、犠牲研究に混乱を招くばかりである。よってここに批判しておく。『イケニヘ頭の発生』赤坂憲雄編「供犠の深層へ」所収、新曜社、1992）

しかしながら一方の殉葬については、「犠牲」と同じ範疇のものとして理解することはできない。殉葬は殉死の一形態なのである。殉死とは大林太良の言葉を借りれば、「ある死者のあとを追って

他の者が自発的に、あるいは強制されて死ぬのが殉死であり、死者とともに殉死者も諱る習俗を殉葬」(『殉死・殉葬』「世界考古学事典」所収、平凡社、1979)であるといえよう。そして本稿でも述べたが、殉葬は殉死とともに古代日本においても文献史料および考古学資料から認められる習俗であったことが理解される。

たしかに「殉葬」も「犠牲」も動物の殺害は伴ってはいる。しかしその思想は全く異なるものなのである。殉死には、明治天皇の死に際する、乃木大将の例などがあり、さまざまな側面をもつものではあるが、基本的には、「古代には人の死後も生前と同じ生活を他界で行う」という概念に基づき、「死者にあの世でも仕えさせるため」に行うものである。

西島定生は、古代中国では「生前の世界と死後の世界とは、同質であり、死者は死後においても生前の世界を再現して生活する」思想のあることを唐代駢画墓から読み取っている。また「秦漢時代以降、墓中に豊富に埋納されている明器類を見ても、始皇帝陵の兵馬俑坑はもとより、漢代の明器には人俑をはじめ、馬や牛などの家畜、家屋や倉庫、脱穀製粉の作業場、井戸や竈、猪圈(アタ小屋のこと)や便所などまで、あらゆる生活の道具が完備されていて、それはことごとく現実社会の模倣であって、空想の産物ではない。南北朝や隋唐時代の人馬俑などの明器も同様である。死者は迎導された後も、これらの明器を使用して、生前と同じ生活をするもの」である想定している。

(『装飾古墳と死後の世界』「新版古代の日本2 アジアからみた古代日本」月報5、角川書店、1992)

西島は古代日本ではこうした中国の死後の世界の想定が微妙に相違していることを指摘するが、殉葬の思想が理解できるであろう。殉葬は、犠牲の思想とはその概念が全く異なるものなのである。したがって「犠牲」と「殉葬」を混同することは、今後の動物犠牲研究に混乱を招いてしまう危険性があるのでなかろうか。両者ははっきりと区別するべきものであることを強く主張したい。

(2) 上田正昭の研究

1993年にはまた上田正昭の「殺牛馬信仰の考察」(『神々の祭祀と伝承』所収、同朋舎出版)も発表された。上田は「神祇令」に動物供犠をめぐるさだめかほんどないことはたしかだが、その故に民間の習俗あるいは民間の信仰のなかに、動物供犠が皆無であったとみなすわけにはいかない。日本の「神祇令」では意識的に動物供犠が排除されているのであって、後述するように民間の習俗や信仰のなかには明確に動物供犠の習俗は存在した」と述べて、動物犠牲が民間レベルにおいては極めて一般的な習俗であったことを論じている。その根拠としては、①文献史料、②雨乞い儀礼、③考古学及び民俗資料、の3点をあげて考察しているが、それぞれに納得できない点が少なからずみられる。その詳細については『殺牛馬信仰を再び考える—上田正昭博士に異議あり!—』(『佐久考古通信No62』、佐久考古学会、1994)において論じたことがあるので参照してもらいたいが、上田の論で最も異議のある点は、上田が古代日本において殺牛馬信仰が盛んであった論拠として民俗例には「牛馬以外にも祭りのおりに、熊や鹿などの首を供える例もある」ことをあげていることである。本稿でも述べた通り、牛と馬に関しては、猪や鹿などとは同一なレベルでは論じること

とができないからである。また、食用家畜をもたなかった古代日本における殺牛馬信仰について食用家畜を有する他地域での事例から安易に類推することは、あまり有効な方法とはいえないのではなかろうか。

殺牛馬信仰は古代日本にも確かに存在はしていた。しかし文献史料からみれば、一般的な祭祀習俗であったとは認められない。殺牛馬信仰をうかがわせる考古学的痕跡も徐々に増えているが（たとえば当センターで調査した星代遺跡群新幹線地点では、水田址の大畔畔の「テラスよりの盛土中からは、徹頭骨が礎を伴って出土」しているという。『長野県埋蔵文化財センター年報10』、1993）、その存在は相対的には少數に留まるのではないかと私は考えている。

近年、動物犠牲研究が進むにつれて、動物犠牲のとらえかたやその理解には若干の混乱がみられているように私には見受けられる。屋上屋を架するかの如き本稿執筆の動機もここにあった。今必要とされるのは、犠牲とは何か、その定義をまずははっきりさせることと、犠牲に供される動物の種類を正確に把握することであると考えている。

（平成7年6月6日）

銅 鏡 考

—長野県の奈良・平安時代を中心として—

原 明 芳

はじめに	(1) 7世紀後半から8世紀前半の段階
I. 銅鏡と出土遺跡	(2) 9世紀後半から11世紀代
II. 時期、出土遺跡・遺構の性格	(3) 中世
III. 銅鏡の分類	VI. まとめ
IV. 焼物との関係	おわりに
V. 銅鏡の受容とその背景	

はじめに

銅鏡を最初に手にしたのは、昭和59年の秋の長野県考古学会地区会の会合後に立ち寄った、松本市教育委員会が整理作業場所としていたあがたの森文化会館の一室であった。その見事な光沢に目を見張ったのを覚えている。それまで、銅鏡といえば漠然と仏具という認識しかなく、なぜ寺院と関係のない整穴住居跡から、都と遠く離れた松本平で、などさまざまな疑問が浮かんだ。⁽¹⁾しかし銅鏡は、間もなく始まった高速道路開通の松本平の調査で、大規模な遺跡から少墨ではあるが必ず出土する状況がみられ、近年では松本平以外の地域でも出土が報告されるようになってきている。

筆者は、焼物を中心に古代の食膳具研究を行ってきた。⁽²⁾そのなかで、松本平の奈良・平安時代の食膳具が大きく三段階に変化し、その背景には西弘海氏の描き出した畿内中枢の食膳具様式の変化への対応があったと考えた。⁽³⁾特に第一段階とした8世紀代の食膳具は、西氏の指摘する「金属器指向型」の基調のうえに成立している可能性が強いと結論づけた。しかし、その時点で、松本平では金属器を頂点とした様式が成立したのではなく、畿内で焼物によって実現した「金属器指向型」の食膳具様式を、受け入れた結果と考えた。ところが、多数の銅鏡が出土している現在、その考えを変える必要が生じてきた。また長野県教育委員会が実施した海外研修の第一期生として、韓国に派遣していただき、現地で出土した多数の銅鏡を見学することができ、さらに現在の日常生活の中で金属器の食膳具が使用されているのにふれ、大いに刺激を受けた。そこで、7~8世紀の食膳具の頂点として西弘海氏が指摘する金属製の鏡が、なぜ長野県内に多数みられるかの疑問を出発点に、これまで機会を見つけて食膳具研究の一貫として集成をはかけてきた。

ここでは、長野県内出土の銅鏡を取り上げ、それがどのような背景を持って受け入れられたのか、遺跡の性格、時間的な変化、焼物の食膳具などとの比較によって考えてみたい。

I. 銅鏡と出土遺跡（第1・2・3図）

1. 諸訪市塚原古墳（1）⁽⁴⁾2. 茅野市大塚古墳（2）⁽⁵⁾

1、2ともに横穴式石室の副葬品であり、いずれも完形である。1は丸底で、口径17.1cm、器高7.8cmを測り、口縁は肥厚しやや外反する。2は1と同様な形態で、口径12.6cm、器高5.9cmを測る。

3. 伊那市山の根遺跡（3）⁽⁶⁾

9世紀後半の5号住居址

の覆土中より出土。推定口径16.2cmを測り、端部が筋鉢状に肥厚する口縁部の破片である。

4. 塩尻市吉田川西遺跡

(4~8)⁽⁷⁾

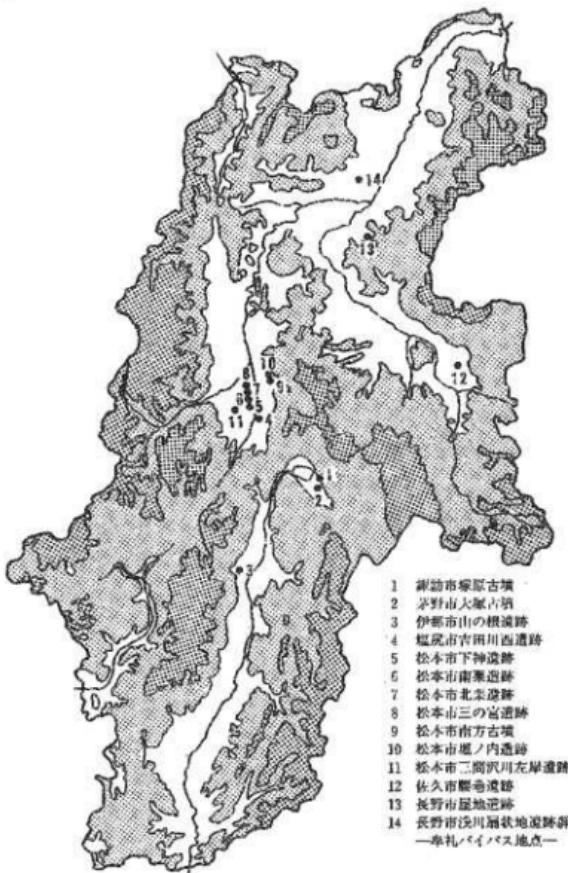
遺構ごとに取り上げたみたい。

SB32

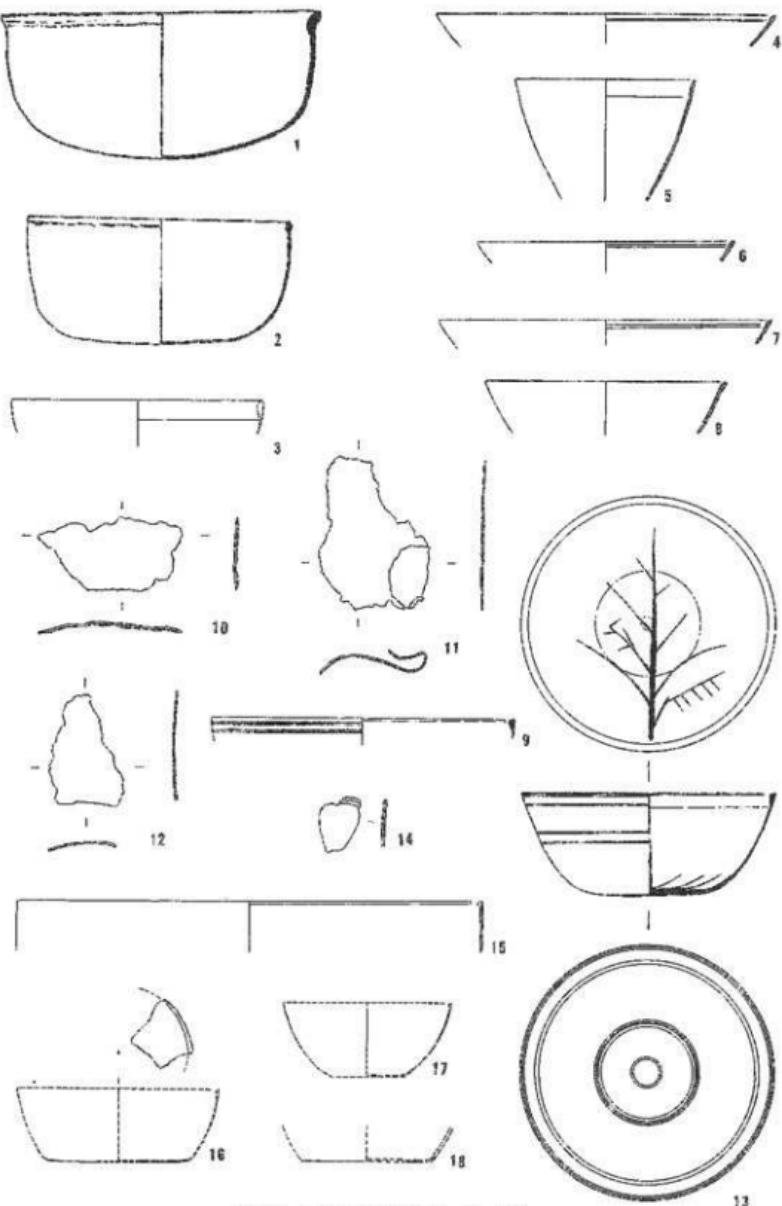
ピット9内より、同一個体と思われる紙のように薄い破片が5点出土している。底部から胴部にかかる一点を除き、他は胴部片である。いずれも細片のため図示できない。時期的には、11世紀中頃と思われる。

SB71(4)

口縁部の細片で、胴部は0.5mmと薄いが端部は1.2mmとやや肥厚する。内面の肥厚部下部に、浅い一条の浅い沈線が入れられる。時期的には11世紀後半と思われる。

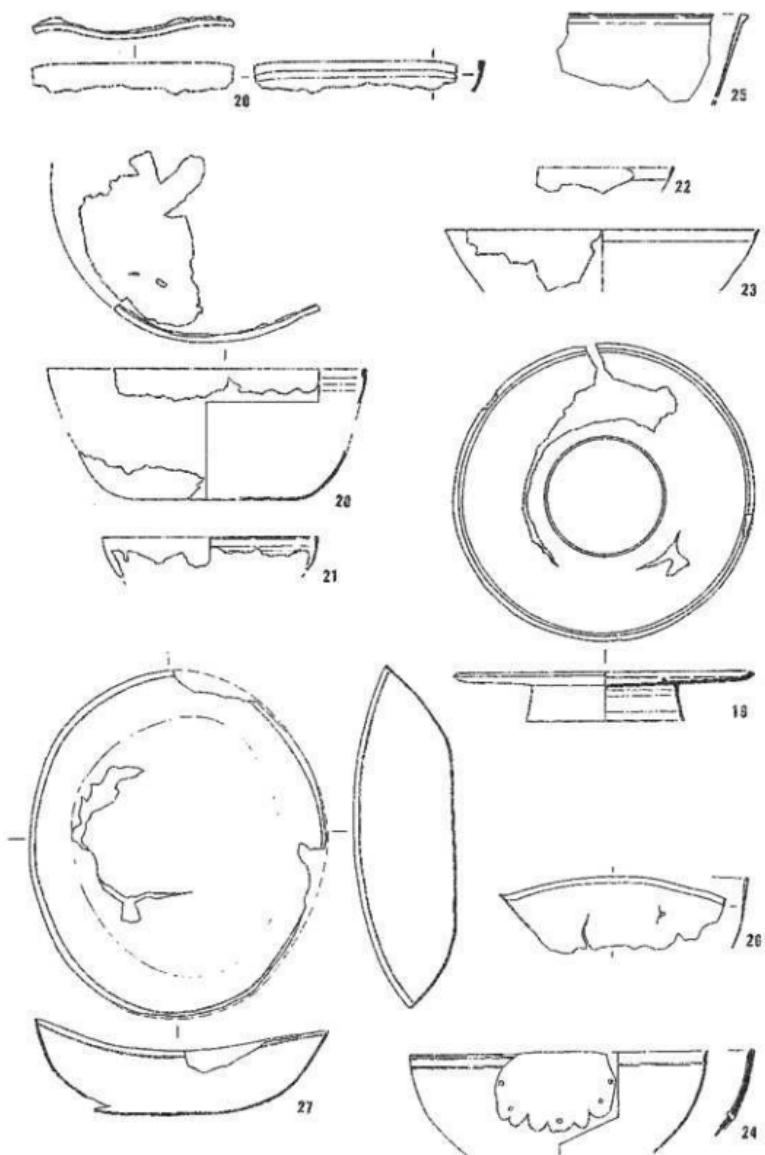


第1図 銅鏡出土遺跡



第2図 長野県出土の銅鏡1 (1:3)

(出土遺跡は本文中と対応)



第3図 埼玉県出土の銅鏡2 (1:3)
(出土遺跡は本文中と対応)

SB125 (5)

口縁から胴部にかけての破片である。胴部は0.7mmと薄いが、口縁は内面に肥厚し1.4mmを測る。肥厚部下部に浅い沈線が一条入れられる。時期的には、9世紀末と思われる。

SKJ023 (6)

中世の造様からの出土であるが、古代の造様からの混入の可能性が強い。紙片で、口縁端部がやや肥厚し、内面に浅い沈線が一条はいる。

造様外2点 (7・8)

時期的には古代から中世前半と考えられる層から出土している。1は口径が大きく、浅い器方が推定される。胴部は厚さ0.5mm、口縁端部は肥厚し1.5mmを測り、比較的太い沈線が一条内部に入れられる。2は口縁がやや外反する際めの鏡が予想される。胴部は0.5mm、口縁はやや肥厚する。

5. 松本市下神遺跡 (9)⁽⁸⁾

9世紀中頃の9号住居址 (SKS) の北西隅より、同一個体と思われる口縁部の破片が2片出土する。推定口径は16.3cm、口縁部は厚く内面に筋型に仕上げられている。外面に二本単位の細い沈線が二組施されている。

松本市下神遺跡 (10~12)⁽⁹⁾

9世紀中頃の遺構より出土している。10は133号住居址、11~12は区画溝1からの出土で、該期の集落の中心部分に位置する。いずれも薄い体部の破片と考えられ、変形が著しい。

6. 松本市南栗遺跡 (12)⁽¹⁰⁾

8世紀前半の堅穴住居址 (第6号住) 床下より出土する。直径25cm、深さ15cmの小さな穴を掘り、正面の状態で置き、その上に床を張っている。銅鏡はほぼ完形で、口径13.7cm、器高5.5cmを測り、体部との境を明瞭な境をつくらない平底である。器厚は全体に1mmと薄いが、口縁は肥厚し端部は平坦に内傾するように仕上げられ、3mmと厚い。外面には、二本単位の沈線が底部を含め4ヶ所に入れられる。底部内面には、樹木の文様が浮き出されている。

松本市南栗遺跡 (14~15)⁽¹¹⁾

14は10世紀後半の91号住居址より、被熱を受けた八稜鏡とともに出土している。体部は薄く、口縁は外側に正円状に肥厚する。15は11世紀後半の93号住居址より出土している。歪みが著しく小さくなる可能性を残すが口径25cmに復元されている。口縁端部は内面に折れ曲がるように肥厚する。

7. 松本市北栗遺跡 (16~17)⁽¹²⁾

4点あるが銅鏡以外の可能性もあり、2点を取り上げる。16は11世紀後半のSB72より出土した体部破片である。17は時期的に不明であるが底部の破片である。

松本市北栗遺跡⁽¹³⁾

11世紀前半のV4号住居跡から図示できないが底部・体部の破片が8片出土しており、同一個体と思われる。

8. 松本市三の宮遺跡 (18)⁽¹⁴⁾

2点出土している。このほか11世紀中頃のSB97より底部網片が出土している。18は9世紀中頃

のSB151より出土した径70mmに復元される平底の破片である。

9. 松本市南方古墳 (19~21)⁽¹⁵⁾

合計3点が横穴式石室より出土している。出土位置より、追葬時期が異なり、19は7世紀中頃から後半、20・21は7世紀末から8世紀初頭と思われる。1は、一部を欠損するがほぼ完形の承盤で、比較的高い高台を持ち、口縁端部を断面三角形に仕上げ、直径16.3cm、器高2.7cmを測る。県内で唯一の例である。20は、平底で無台で、大きく欠損するが口径17.2cm、器高7cmと全体の形態が推定できる。口縁端部は内側に折り曲げられるように肥厚する。また同一個体と考える口縁が出土しているが、蛇行するように人為的に折り曲げられている。21は、口縁のみであるが、口径16.2cmを測る。口縁端部は肥厚し断面三角形に仕上げられる。報告者は、承盤とのセットと考えているが、追葬時期に相違があり可能性は薄いと思われる。

10. 松本市堀の内遺跡 (22・23)⁽¹⁶⁾

11世紀後半の第9号住居址より、口縁部の破片が2点出土している。報告者は、別個体と考えているが、形態はよく似ており同一個体の可能性もある。端部は筋鉢状を呈しており体部は薄く仕上げられ、その境界は一条の沈線状になっており、22の口径は推定17.2cmを測る。

11. 松本市三樹沢川左岸遺跡 (23)⁽¹⁷⁾

10世紀後半の68号住居址をくるピット内より、6片に別れて出土している。やや歪むが口径16.0cmを測り、器壁は1mmと薄く、端部は内面がやや筋鉢状に膨らみ、その下部に沈線が一条ある。外面には三本単位の沈線が二条入れられる。特筆すべき点は、花弁状に切った銅板を当て5ヶ所を継で打った補修痕があることである。

12. 佐久市藤巻遺跡 (25)⁽¹⁸⁾

1号住居址より、口縁部の破片が出土している。歪みが著しいため、法量ははっきりしないが、口縁はやや肥厚し外反する。時期的には、羽釜片の出土より、10世紀代と考えられる。

13. 長野市屋地遺跡 (26)⁽¹⁹⁾

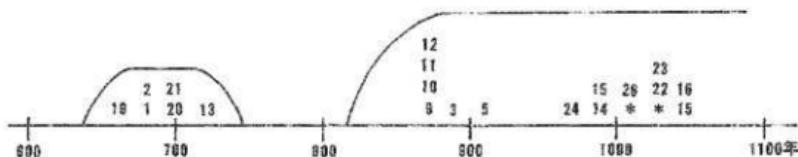
11世紀前半のB17号住居址の、北東隅に掘り込まれた径1.4m、深さ45cmの不整円形のピットから、多数の食器類とともに出土している。ピットは住居に付属すると考えられる。鏡は口縁部の破片で、端部はやや厚くなり筋鉢状に肥厚する。法量は歪が大きく不明である。

14. 長野市浅川扇状地遺跡群—牛札ハイパスC地点— (27)⁽²⁰⁾

11世紀前半の竪穴住居址C地点1号住の北壁に貼り付く状態で出土する。一部を欠損し大きく歪んでいるが、ほぼ完形である。法量は平均値を取った場合、口径17.5cm、器高5.5cmとなる。形態は、平底で体部は底部と明瞭な境をつくらず緩やかに湾曲しながら立ち上がる。体部の厚さは1.5mmを測り、口縁はやや肥厚する。口縁内部には細く浅い沈線が一条入れられる。

II 時期、出土遺跡・遺構の性格

出土した遺構の時期は、第4図に示すとおりである。横穴式石室をもつ古墳の終末である7世紀



第4図 銅鏡の時期別分布1（番号は第2・3図に対応）

後半から8世紀前半に集中し、8世紀後半から9世紀前半はみられない。若干の空白をおいた後、9世紀中頃から11世紀に再び多くなり、12世紀には再びみられなくなる。ただし、銅鏡はほとんどが破片であり混入とも考えられ、時期決定に用いた土器群と、使用時期とは開きがある可能性は否定できない。また、伝世についても考慮にいれなければならない。これらの問題はあるが、銅鏡が使用された時期は、7世紀後半から8世紀前半と、9世紀後半から11世紀に、大きく分けることが可能であろう。

次に出土した遺跡は、從来多いとされてきた古墳のほか、集落からも多數出土していることが特徴である。出土時期と重ねあわせると、7世紀後半から8世紀前半は古墳からの出土が圧倒的に多く、9世紀中頃以降は集落がほとんどである。ただし、寺院と考えられる遺跡からの、銅鏡の出土はない。⁽²¹⁾

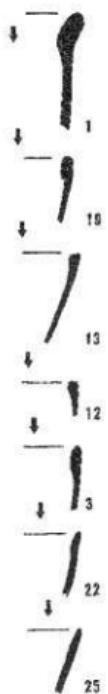
次に古墳と集落を、それぞれについてみてみたい。古墳からは、今回銅鏡を図示した三基以外にも、下伊那地方を中心に四基からの出土が知られており、合計7基となる。⁽²²⁾地域的にみると中南信に偏るが、それを地域性とするには資料が少ない。いずれも、時期的には7世紀後半から8世紀初頭の横穴式石室を持つ古墳であり、銅鏡の出土以外、これといった特徴はない。立地についても、古代寺院跡が近隣にある例はない。なお、7基の中で出土状況がはっきりしているのは、松本市南方古墳のみであり、埋納の方法から銅鏡の特徴を考えさせる資料はない。ただ、須恵器の食膳具と一緒に埋納され、完形が多いことが特徴ともいえる。集落については、縦続して営まれている場合が多く、銅鏡が出土した時期について統てみてみることにする。出土した遺跡の分布は、ほぼ全県的にわたっているが、特に松本平に集中している。しかし、これをもって銅鏡の保有及び使用の多さを、松本平の特質とすることはできない。理由としては、特に出土が多い10世紀以降の集落遺跡の調査が、松本平に多いことがあげられる。そのため、今後他地域で増加する可能性が高い。集落の特徴をみると、塩尻市吉田川西・松本市三間沢川左岸遺跡のように、多量の綠釉陶器や越州窯青磁、初期の白磁が出土し、周辺の集落まで影響を及ぼしたと考えられる有力な「拠点的集落」や、松本市下神遺跡のように初期莊園「草庄」の中核をなすと考えられる集落がある。いずれも、中央との結び付きをもった有力者の存在を、強く感じさせる。しかし、それ以外の遺跡は、多數の住居跡が発見された集落もあるが、山の根遺跡のように山間部に展開する小集落遺跡も多い。これらのことから、9世紀後半から11世紀代の銅鏡は、特定の有力な集落に必要とされるものでも、特別な性格を持った、例えば寺院に必要とされたのではなく、ある程度普遍的に各集落で保有

されたとすることができよう。次に、その出土状況をみてみたい。南葉遺跡 6 号住例を除き、造縫の壇上からの出土がほとんどであり、それも破片であり、最終的には鑄としての使命を終了して廃棄されたと考えられる。特に竪穴住居跡からの出土が多いが、他の遺物と同様に、その住居で使用された可能性は少なく、竪穴住居の埋没途上の凹地に入り込んだと考えられる。いずれの場合も、銅鏡が使用された建物や施設も特定できるような出土状態ではない。また、銅鏡の性格を考えさせるような遺物は伴出していない。ただ一つ意図的に埋納されたと考えられる南葉遺跡 6 号住例は、開放された遺縫ではなく、上部に床が張られており、使用状況と言うより、なんらかの理由で埋納されたと考えられる。次に、銅鏡の出土量をみると、どの遺跡においても、焼物の容器と比較すると、その割合は限りなくゼロに近い。銅という素材自体が再生が可能であり、焼物とちがい破損即廃棄という図式は成立しないと思われるが、集落内での絶対的な使用量は少なかったと思われる。⁽²³⁾ このほか、22 のように補修を施した例は、入手が困難のためと考えられるが、補修してまで使用された可能性を示している。また、破片が多いことは、素材自体が焼物に比較して強度があることから、使用頻度の高さを物語っているともいえる。⁽²⁴⁾

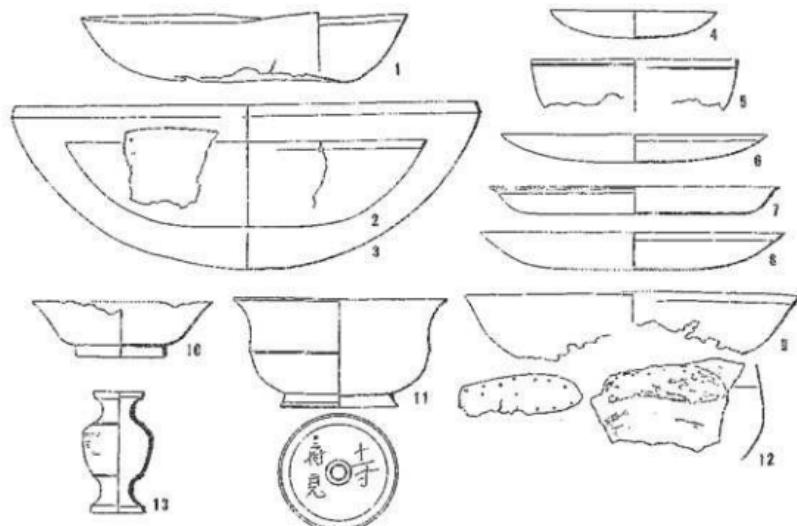
III 銅鏡の分類

破片が多く、形態の判明する例は少ない。毛利光氏は、古墳の出土品を取り上げ、大きく無台鏡と高台付鏡、高脚付鏡の三種に分け、さらにそれぞれを細分している。それを参考に分類してみたい。

出土した銅鏡は、全体の形態がわかる例をみると、無台鏡が多く、13・20・27 の平底（A類）と 1・2 の丸底（B類）の二種に分けられる。高台付鏡・高脚付鏡はみられないが、それらとセットをなすと考えられる承盤（21）がみられる。このほか、口縁部をやや内面に肥厚させる多くは、無台鏡と考えられる。これら無台鏡について、その口縁の変化についてみてみたい。7～8世紀にかけての口縁は、1 のように大きく、あるいは 2 のようにやや肥厚し外反する例と、13 や 20 の例のように内側に大きく断面三角形あるいは方形に肥厚する例がみられる。8世紀後半以降は前者はみられず、後者のみとなり、9世紀中頃の 3・9 もやや肥厚し断面方形となっている。これに対して、10世紀後半の 24 は口縁部を内部にわずかに紡錘状に肥厚させ、11世紀代の 27 はほとんど肥厚させずに直線的に立ち上がる。これらを整理すると口縁部の変化は、第 5 図のようになる。大きな傾向としては、装飾的な理由か、铸造の際の技術的な理由かははっきりしないが、口縁は厚さを徐々に薄くする傾向がある。口縁内部の沈線は、徐々に口縁底部が薄くなっていく過程でみられる。最も早い例としては、9世紀後半の 5 をあげることができる。そ



第 5 図 無台鏡の口縁の変化（1：2）



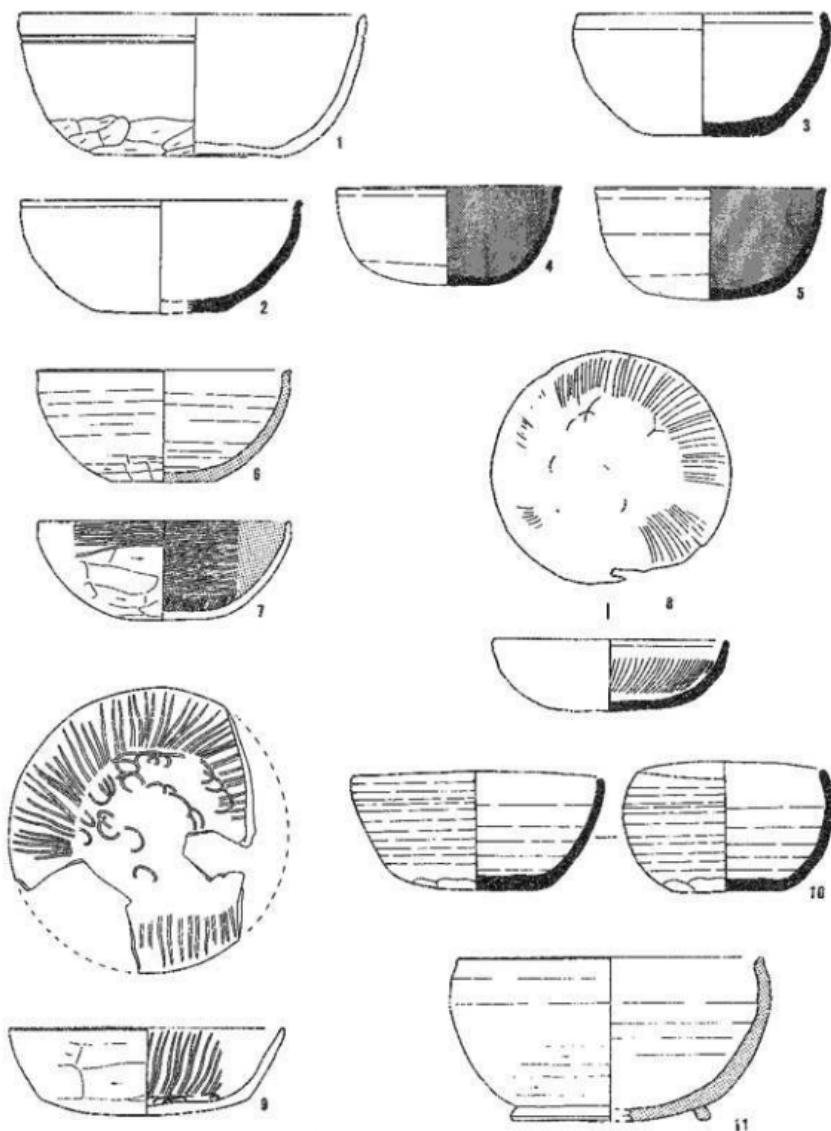
第8図 日光男体山出土の銅鏡及び仏具（1：3）

そのため、沈線は装飾の可能性もあるが、口縁端部の肥厚部分の焼が仕上げの際の技術的な問題から沈線状に残されたとも考えられる。しかしこの変化の背景には、徐々に変化したというより、10世紀代に新たな形態の鏡への転換があった可能性もある。装飾についてみると、13の内面に樹木の文様を浮き上がらせているが、他にこのような具象例は見あたらない。この他の装飾例として、内外面の沈線がある。時間的には、8世紀前半の13は外面上に二本単位の沈線が4ヶ所入れられ、9世紀中頃の12は外面上の口縁近くに2ヶ所入れられるが、10世紀以降では口縁直下に一条の沈線が入る例がある以外、ほとんどみられなくなる。この点は、毛利光氏の装飾の省略化の傾向があるという指摘と一致する。⁽²⁶⁾ 第2図8は、県内に類例はないが、毛利光分類の高台付鏡C類になる可能性がある。

法量は、比較的残存率の高い口縁の破片をみても、材質の特徴から亞みが大きく、口径や高さなどを復元することは難しい。このことは、全体の形態がわかるいくつかについてもいえる。

県外の平安時代の銅鏡をみてみたい。集落出土例を無視するに至っていないが、多量に出土した日光男体山の例をみてみたい（第6図）。⁽²⁷⁾ 大きくは無台鏡（1～9）と高台付鏡（10～11）の二種に分けることができる。さらに前者は深浅の二種、丸底（A類）と平底（B類）の二種に分けることが可能である。口縁の形態をみると一点を除き、ほとんど肥厚せずに立ち上がり、口縁内部の沈線も多くみられる。なお法量の大きい3は、口縁近くに穂をもちいわゆる鉄錐状である。高台付鏡は、C類（11）と毛利光分類にない鏡（19）の二種がみられる。このほか花瓶（13）が一点みられ

銅鏡考



第7図 長野県内出土の銅鏡模倣の焼物の鏡 (1:3)
(遺跡は本文中)

る。しかし高台付鉢A類・高脚付鉢A類はみられない。これらの遺物の時期の特定は難しいが、大きく平安時代中頃（10世紀代）におかれている。県内の出土例と比較し、口縁の肥厚していない例が多いことは矛盾していない。これらが埋納された目的は、仏教的な祭器に用いられたと考えられている。⁽²⁸⁾

IV 焼物との関係

銅鏡を焼物で模倣したと考えられる例がいくつかみられる。⁽²⁹⁾ただし、それらは次のように、二種に分けられる。一つは、直接的な模倣であり、もう一つは畿内で製作された金属器を模倣した焼物を通して間接的な模倣である。実際にはこの区別は難しいが、後者の例としては、8世紀の食膳具の一翼を扭う杯Bを代表例としてあげることができる。いくつかを第7図に取り上げて、みていきたい。⁽³⁰⁾

無台の銅鏡を直接模倣対象にしたと考えられる杯には、平底（1・3・7・11）と丸底（4・5・8）があり、さらに口縁の形態はやや外反（2・4～8）と内湾気味（1・3・11）の二種に分けることができ、銅鏡の形態のバラエティと一致する。この分類は須恵器（3・8・11）と土師器（1・4・5・8）という焼物の種類を越えて可能である。時期的には7世紀後半から8世紀前半に集中してみられる。以前、これら器形は、畿内の金属器を模倣した焼物を通して間接的に受け入れたと考えていた。例えば、口縁をやや外反させる器形は、金属器模倣の藤原京の飛鳥I段階の杯Cと類似する。しかし、年代的には直井氏が指摘するように、県内例とは半世紀から一世紀の開きがみられる。このことから畿内の土師器の模倣をもって、この器形の成立とするには無理がある。⁽³¹⁾銅鏡そのものを模倣対象とした可能性が高い。高台付鉢を模倣したと考えられる例は、10の須恵器である。対象となったのは、県内では出土していないが、A類あるいはB類とすることができよう。⁽³²⁾なお、この器形は佐久地方にみられるが、他の地方にはみられない。また、現在出土していないが高台付鉢C類（第6図11）も模倣対象になった可能性がある。⁽³³⁾このように直接銅鏡を模倣した食膳具類は、時期的にみると、7世紀後半から8世紀前半に集中しており、8世紀後半に杯Aと杯Bを主体とした須恵器による第一段階の食膳具構成が確立すると消滅する。⁽³⁴⁾

次に、畿内の銅鏡を模倣した焼物を通して、間接的に模倣したと考えられる例を取り上げてみよう。杯Bは、7世紀後半からみられはじめ、8世紀中頃より食膳具の主体の一つをなすようになり、9世紀中頃までに消滅する。このほか、比較的金属器の模倣としてよく取り上げられる鉄鉢がある。その形態は直接の模倣とも考えられ、ほぼ全国的に少量ではあるが出土し、9世紀前半までみられる。このほか、いわゆる畿内系の暗文杯は、畿内品と考えられた時期もあるが、現在では畿内の土師器の模倣と考えられている。⁽³⁵⁾時期的には、8世紀前半に集中し、ほぼ全国に渡って量の多いはあるが出土し、後半になるとみられなくなる。これらの間接的な模倣と考えられる焼物の食膳具は、暗文杯を除いて時期的には9世紀前半までみられる。特に杯Bは、食膳具構成の主一つとなるが、畿内特に平城京において成立した食膳具様式が地方に浸透する際に採用されたと思

われる。

これに対して、長野県内で集落遺跡から銅鏡が多く出土する9世紀中頃以降は、焼物による銅鏡の模倣がみられなくなる。在地産の焼物の食膳具は、新たに施釉陶器の椀・皿が模倣対象となる。

以上のことから、7～9世紀前半は、金属器を模倣した食膳具が必要とされたことがわかる。それも銅鏡の出土の多い7世紀後半から8世紀前半は、金属器の直接的な模倣が要求され、金属器そのものを頂点にすえた、焼物による身分をあらわす食膳具構成が成立していた可能性が高い。このことは、逆に銅鏡も限定された場面では実用的な食膳具であった可能性を考えられる。これに対し、9世紀後半以降の銅鏡の形は、日常で使われる食膳具の中にみられなくなり、この段階の銅鏡が食膳具ではなくなりたった可能性を示している。

V 銅鏡の受容とその背景

銅鏡が出土した遺跡をみると、墳墓と集落遺跡に分けられる。時期的にも、大きく7～8世紀前半と9世紀後半に分けることができる。また焼物との関連からは、模倣が行われる7～8世紀と、行われない9世紀後半以降に分けられる。これらのことから銅鏡の受容の背景が、古墳への埋納に代表される7～8世紀前半と、集落遺跡出土に代表される9世紀以降では異なる可能性が高い。

金剛界文 内密蓋	金剛 毘	金剛 指輪	商 法	金剛 的	護摩 壇	護摩 爐壇	輪	盤	輦	輪	塔	五 鉢	三 鉢	三 昧耶 杵	五 鉢	三 鉢	獨 鉢		
算	輪	螺		杓		樣		予	輦	寶	鉢	鉢	鉢	杵	杵	杵	杵		
									二	二	一			一	一		最晩		
		一				四	一	四	西	一	一	一	二	一	一	一	一	最薄	
						一 五								一	一			當晚	
			一					四	四	一	一	一	一	一	一	一	一	四行	
														一	一	二		一	
	五	一	一	二	二	三			八	四	二	一	二	三	一	四	二	惠遇	
										四	西		一		二			円珍	
										四			二	二	一	三	二	宗教	
5	1	2	5	2	3	15	4	1	20	22	6	2	10	7	2	10	10	7	計

第1表 入唐八家の請來法具一覧表

それについてみてみたい。

(1) 7世紀～8世紀前半の段階

この時期の東国への銅鏡の普及については、古くから東国への仏教の伝播としてとらえる金井潔良一氏をはじめとした一連の研究がある。⁽³⁶⁾しかし、ここまで述べてきたように、古墳の副葬品の中に銅鏡以外に仏教に関係する遺物はなく、あえて銅鏡を仏具とする必要はなさそうである。この場合、毛利光氏の研究の成果が参考になる。氏は、7世紀代の畿内では律令体制の宗教政策として寺院建立が盛んに行われ、銅鏡が仏具という意識で用いられていたのに対し、7世紀代の東日本では古墳に銅鏡の出土が集中しており、畿内政権の地方豪族把握、すなわち律令体制への組み込む手段として、仏教的雰囲気を嫌わせた銅鏡が忌避され、最終的に古墳に埋納されたとした。⁽³⁷⁾その後、銅鏡の仏具として位置づけを、変化させている。それは、銅鏡の受容が仏教導入以前の6世紀代に遡る可能性があり、当時の中国や朝鮮半島では日常の生活のなかで銅鏡が使用されることが多いことから、日本でも銅鏡が金属製の箸や匙などとともに、仏具としてではなく、貴族層の日常生活の中で使用された可能性が高いとした。そしてその習慣が地方へ広がるとともに、東日本では豪族の墳墓からの古墳に埋納されたとした。⁽³⁸⁾このように、銅鏡の受容は、仏具としてではなく、箸や匙の使用を含めた新たな食生活様式の受容の結果と考えている。この考え方には、西弘海氏や宇野隆夫氏の食膳具研究の成果と共通する。⁽³⁹⁾また、9世紀前半にみられる人唐八家の請來した密教法具をみても、金属製品の飲食器と考えられる「闘加盞」は空海が4口持っているのみで、他は持っていない(第1表)。⁽⁴⁰⁾このことは9世紀前半の段階でも、金属製品の飲食器が、まだ仏具としての性格を持っていなかったことを示していると思われる。⁽⁴¹⁾

長野県の状況をみると、銅鏡は古墳に副葬され、集落からの出土が少ない。このことは、銅鏡が有力豪族層の所有物であった可能性を示している。また、7世紀後半は銅鏡を直接的あるいは間接的に模倣したと考えられる焼物の食膳具が、従来の伝統的な食膳具群の中に加わる時期でもある。その模倣対象となった銅鏡自体も、有力豪族層によって限られた場面で、一般的な食膳具として使用された可能性がある。このようにみてくると、7世紀後半から8世紀前半の信濃における銅鏡の受容の背景は、仏教を受け入れた結果ではなく、畿内の律令政権の貴族層の食生活習慣の影響を受けたことによる、古墳の被葬者に代表される有力豪族層が日常食器の一つとして受け入れた結果とすることができるよう。このことは新しい食膳具様式、金属器の鏡を頂点とした身分秩序を受け入れることにより、中央政権との結び付きを強め、そのもとに地方有力豪族層が組織化されたと考えることができる。この金属器を頂点とした食膳具様式は、最終的に、焼物によって模倣され、末端の集落まで浸透することになり、地方集落の再編成につながったと考えられる。

(2) 9世紀後半から11世紀代

前段階と比較して集落からの出土量が増大する。遺跡の特徴がひとにぎりの有力集落や、宗教色の強い遺物が多数出土する集落のみでなく、特徴のない一般的な集落からも出土する。このことから、銅鏡は少量ではあるが、一般の集落に必要とされたことを示している。さらに前段階が墳墓からの出土がほとんどであったのに対し、この時期の墓には入れられない。墓に多数入れられた一般

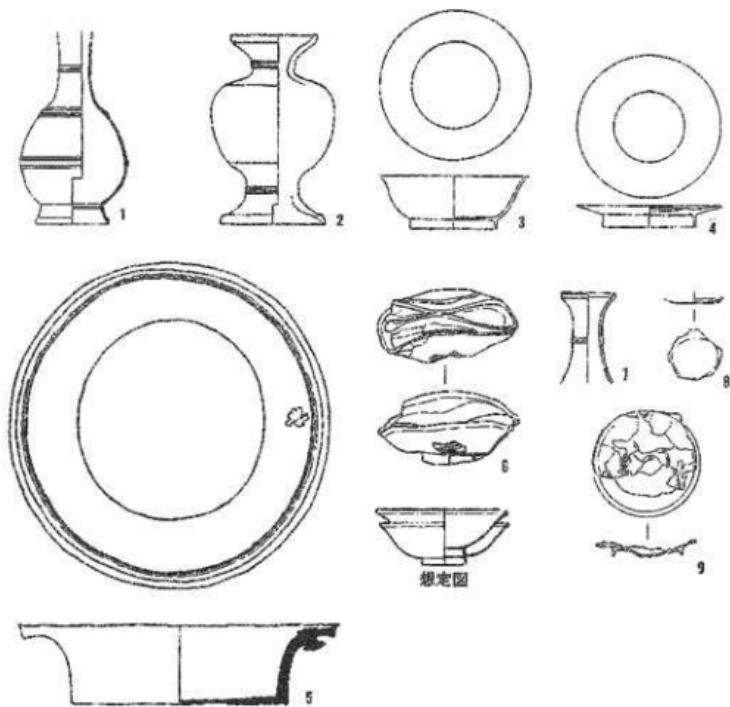
の食器具とは異なった性格を持つようにならんと考えられる。⁽⁴²⁾ また焼物との関連を考えると、前段階が「金屬器指向型」の食器具様式の頂点として銅鋸があり、焼物の模倣対象になっていた。しかしこの段階の食器具群は、新たに畿内で成立した施釉陶器の器形を模倣しており、出土している銅鋸を模倣していない。すなわち銅鋸は、食器の頂点としての地位を無釉陶器あるいは越州窯青磁や白磁に譲り、実用としての食器ではなくなっていたと思われる。またこの時期の銅鋸は有力な集落以外からも出土することから、その所有は富の象徴としての性格を失ったとも考えられそうである。それでは何に用いられたのであろうか。

10世紀代に編集された「延喜式」には、宮廷の元旦や節会の際の食器として、金銀の器が三位以上が使用される器として記載されている。⁽⁴³⁾ この段階においても一種の有力者の食器として使用された可能性が高いが、日常の食生活からはなれて、特別な祭事の場面などに用いられたと推測される。県外では、日光男体山などの仏教関連遺跡、⁽⁴⁴⁾ 石川県福水ヤシキグ遺跡では銅三筋鏡や銅錫杖頭などの密教系の遺物との共伴、⁽⁴⁵⁾ 莺島県山王鹿寺での出土がある。⁽⁴⁶⁾ このように、仏教信仰に関連した遺跡から銅鋸の出土がみられるようになり、仏具としての性格を持つようになったと考えられる。

県内の集落への仏教の浸透について簡単にふれておきたい。仏教の導入は、国分寺をはじめとしたいくつかの寺院址の存在から、奈良時代までは確實に遡る。しかし集落遺跡を調査して仏教的な遺物が認められるようになるのは、9世紀以降である。8世紀後半から9世紀末まで盛んに土器に記されると墨書きにみると、「西寺」「文口寺」(塩尻市吉田川西遺跡)、「□口寺」「□色寺」(塩尻市丘中学校遺跡)、「小□口寺」(塩尻市田川端遺跡)などのような寺名や、「寺」のみを記した例がみられる。⁽⁴⁷⁾ このほか、「祀」を記した例もある。仏具をみると、塩尻市喜瀬遺跡の11世紀の土壙臺から鉢口や、箕輪町木下北城遺跡の9世紀後半代の堅穴住居址からの柄付香炉(第8図5)、いくつかの遺跡から瓦塔の出土がある。⁽⁴⁸⁾ このようにわずかではあるが、仏教に関連する遺物がこの段階の集落内から出土する。それらから考えられる仏教の特徴は、「財富加」「財聚」など墨書きにみられるように、現世的利益を求める呪術的色彩が強い。⁽⁴⁹⁾ このほか、呪術に関連した遺物としては、鉄鍔、人形や畜生などがみられる時期もある。このことは、それまでの伝統的な呪術のなかに、さまざまな呪術が加わりはじめ、その一つとして仏教を取り入れられたと考えられる。⁽⁵⁰⁾

このような状況の中で、8世紀代まで地方豪族層の高級食器であった銅鋸は、その価値を失い、村落内での仏教信仰の専用の道具、すなわち現世利益を得るために呪術の道具の一つとしての仏具となつたと思われる。ただし、それは一般農民というよりは、その出土量に少なさから、有力者層、すなわち集落の祭を司る指導者の所有であった可能性は強い。鉢口や柄付香炉も、体系的な仏教信仰に用いられたというより、集落内の仏教呪術のシンボル的な用具として用いられた可能性が強い。この時期に受け入れられた仏教をはじめとしたさまざまな呪術は、それまでの伝統的な共同体祭祀を変質させ、変動が始まった村落内の精神的な結び付きに大きな役割を果たした可能性が強い。⁽⁵¹⁾

(3) 中世



第8図 古代から中世の鏡器 (1:3)

1 塙尻市丘中学校遺跡 2~4 戸隠村戸隠西窟 5 美輪町木下北城道路 6~9 松本市南糸遺跡

銅鏡の12世紀以降の状況を簡単にふれてみたい。古代から数多くみられる無台の銅鏡は、わずかに高梨氏居館跡にみられるのみである。⁽⁵²⁾ 形態は11世紀代にみられるように口縁を肥厚厚さずに立ち上がる。それに変わって出土がみられるのは、高台付鏡と環状の受け部をもった皿とセットになるいわゆる六器類(第8図3・4)であり、他の仏具として、花瓶などがある。⁽⁵³⁾ これらは、完成された密教法具と見えられ、11~13世紀に営まれた群集経蔵の金峯山経蔵や、12世紀~16世紀の経蔵群である那智山経蔵から無台鏡を伴わずに出土している。これらから定型化した密教法具が、平安時代後期、遅くとも11世紀には成立していたと考えられる。県内をみても、中世の仏具の出土量はそれほど多くないが、松本市南糸遺跡の中世の小堅穴から、六器の銅鏡・皿(第8図6~9)が出土している。このことは、11世紀まで仏教が集落内の現象的な一つの面を扭っていたのにに対して、中世に至って体系的な教義を持った仏教が集落内にも浸透してきた可能性を示している。

VI まとめ

銅鏡は、7世紀代に畿内中州が受容した金属器を頂点とした大陸の食膳具様式を、信濃の有力豪族層が導入する際に、最も高級な食器として持ち込まれる。さらに、焼物で銅鏡を模倣した食膳具がつくられ、食膳具様式は一般層まで浸透する。9世紀後半になると、新たな共同体を維持するための精神的支柱の一つとして仏教現行が受け入れられ、その道具として銅鏡は用いられたと考えられる。

7世紀から8世紀の銅鏡は身分秩序を表す食膳具の頂点としての価値をもち、有力豪族層の所有物であった。かれらは、また律令体制の宗教政策として仏教も受容していた。銅鏡は、9世紀になり高級食器としての地位は施釉陶器に譲ったが、仏教との結び付きを強め仏具としてのみ残されたと考えられる。このことは、中野正樹氏の本来日宮の飲食用具であった金属器の食膳具が仏教の中で供養具として取り上げられていったという指摘や、毛利光氏の一連の研究とも一致する。⁽⁵⁴⁾ この銅鏡の価値の変質は、一地方の信濃での現象ではなく、中央の変化を受け入れた結果と考えるのが適当であろう。

おわりに

今回取り上げた資料のはほとんどは、1980年代の中頃から始まった大規模開発とともに発掘調査で得られたものである。本稿もその上に成り立っている。記録保存のために日夜、発掘調査や整理作業に力を振り絞って努力している、埋文調査担当者の苦労の上にできあがっていることになる。敬意を表したい。筆者も埋文センターに在籍して10年になり、いくつもの調査を手掛けってきた。しかしそれらの遠跡はあとかたなくなっている。その破壊した遠跡へわずかでも責任を果たすために本稿を草したわけである。

最後に、本稿を草するにあたり多くの方々にお世話をになった。お名前を記してお礼としたい。

直井雅尚、出河裕典、伊藤友久、小平和夫、西山克己、矢口忠良、壹原正、市川隆之、小畠望

註1 長野県考古学資料の集大成とも言える「長野県史」においても、何の疑いもなく仏具として記載されている。

長野県史刊行会 1988 「長野県史 考古資料編 遺構・遺物」

註2 最初に原1987aで松本平の平安時代の食膳具の大きな流れを示し、原1990cで中世への転換期を補った。また古墳時代から中世の大きな流れは原1987bで示し、原1989aでは事例を通じ変化を実証し、原1990aでは松本平の変化が県下で通用できること、原1990bで平安時代の黒色土器について考えた。

原 明芳 1987a 「松本平における平安時代の食膳具」付録29-4

1987b 「信濃における食器の系譜」 文化財信濃14-3

1989a 「吉田川西遺跡における食器の変容」

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 吉田川西遺跡

- 1990a 「長野県の9世紀後半から12世紀の食器の様相」
長野県埋蔵文化財センター紀要 第2号
- 1990b 「信濃における平安時代の黒色土器」東日本土器研究第3号
- 1990c 「信濃における中世的土器様相の成立」
シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」
- 註3 西 弘海 1979 「西日本の上野邊」世界地図全集2 日本書代
1982 「土器様式の成立とその背景」考古学論考 小林行雄著 古希記念論集 平凡社
- 註4 嶋崎栄一 1939 「信濃郡訪跡古墳の地域的研究」考古学10-1 (古墳の地域的研究 学生社 所収)
- 註5 註4と同じ
- 註6 長野県教育委員会 1973 「山の古道跡」昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—伊那市西春近地区
- 註7 勧長野県埋蔵文化財センター 1989 宮田川西遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 註8 松本市教育委員会 1984 「松本市下神・町井遺跡」
- 註9 勧長野県埋蔵文化財センター 1990 下神遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 註10 松本市教育委員会 1984 「松本市島立南草遺跡」
- 註11 勧長野県埋蔵文化財センター 1990 南草遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 註12 勧長野県埋蔵文化財センター 1990 北草遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 註13 松本市教育委員会 1990 「松本市北東遺跡IV・V」
- 註14 勸長野県埋蔵文化財センター 1990 三の室遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 註15 松本市教育委員会 1990 「大坂古墳・南方古墳・南方遺跡」
- 註16 松本市教育委員会 1992 「松本市場の内遺跡」
- 註17 松本市教育委員会 1988 「三間沢川左岸遺跡」
- 註18 佐久市教育委員会 1988 「腰巻・西大久保II・泊尾II」
- 註19 長野市教育委員会 1990 「温地遺跡(2)」
- 註20 長野市教育委員会 1986 「浅川扇状地遺跡群—幸札バイパスB・C・D地点—」
- 註21 県内で、寺院跡の調査例は少なく、遺物等の検出はわずかである。また瓦等の出土のみで比定されている例も少なくない。今後、県内の寺院跡は再検討されるべきだとと思われる。
- 註22 図示しなかった3基は以下の通りであるが、いずれも形態・出土状態等ははっきりしていない。
茅野市能郷古墳 柳原 健 1999 「須稚大刀鉄用者の件」古代学研究56
松川町扇状地古墳 嶋崎栄一 1966 「古墳文化の地域的特色—中部高地—」日本の考古学IV
高遠町武勝地1号古墳 長野県史刊行会 1981 「長野県史 考古資料編 遺跡地名表」
飯田市秋葉塔の堅古墳 倉渕史料刊行会 1966 「信濃史料 第一卷」
- 註23 実際に松本市南栗遺跡で11世紀後半の豊穴住居跡から、銅を練出した遺構及び、銅片が見つかっている。原料等は不明であるが、銅製品を再利用した可能性もある。
- 註24 長野県埋蔵文化財センター 1990 南栗遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 註25 日光男体山出土例の中にも、鉄を打って補修した例がいくつみられる。頻繁に補修して使用されていたことがわかる。
竹野大和 1963 「御殿客屋」日光男体山 角川書店
- 註26 銅鏡の分類は、小田萬士雄氏、毛利光後彦氏によって行われている。
小田萬士雄 1975 「日本の古墳出土の銅鏡について」百済研究 第6号
毛利光後彦 1978 「古墳出土銅鏡の系譜」考古学新説 64卷1号

- 毛利光俊彦 1991 「青銅製容器・ガラス容器」 古墳時代の研究 8 雄山閣
 今回は毛利光氏の分類に従うが、1978年発表と1991年発表に大きな変わりはない。
- 註26 毛利光俊彦 1978 「古墳出土銅鏡の系譜」 考古学雑誌 64巻1号
- 註27 佐野大和 1963 「銅製容器」 日光男体山 角川書店
 遺物は、奈良時代から江戸時代までさかめて長い時期にわたってみられるが、平安時代後期から鎌倉時代が主体を占める。
- 註28 燐杖、独柱杖、経筒、御正鉢、鏡口などの、仏教に関連した遺物が多数みられる。
- 註29 金属器鏡の焼物による模倣は、前回でもみられることは李蘭英氏により指摘されている。
 李 蘭英（武末純一訳） 1983 「統一新羅の銅製器皿について」 太宰府古文化論叢
 また韓国の慶州国立博物館で多数の金属器の食器をみるとことができたが、それとともに多枚の金属器を模倣した焼物の食器が存在することに驚いた。
- 国立中央博物館（韓国） 1980 「雁鳴池」 雁鳴池出土遺物特別展図録
- 註30 図の出展は、以下のようである。
 2, 3, 4, 5, 8 塩尻市中淡遺跡 塩尻市教育委員会 1988 「一般探査20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財発掘調査報告書」
 6, 7, 9, 11 御代田町十二遺跡 御代田町教育委員会 1988 「十二遺跡」
 10 長野市塙崎遺跡群 長野市教育委員会 1980 「塙崎遺跡群II」
 1 松本市南栗遺跡 勝長野県埋蔵文化財センター 1990 「南栗遺跡」 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 註31 直井龍作 1988 「松本平における内黒クロク土器の出現と展開」 信濃 第40巻4号
- 註32 毛利光俊彦 1978 「古墳出土銅鏡の系譜」 考古学雑誌 64巻1号
- 註33 本報告ではあるが、勝長野県埋蔵文化財センター・調査の長野市松原遺跡で出土している。
 勝長野県埋蔵文化財センター 1991 「松原遺跡」 長野県埋蔵文化財センター年報7
- 註34 原 明芳 1987a 「松本平における平安時代の食器具」 信濃39-4
 1990c 「信濃における中世的土器様相の成立」 シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」
- 註35 いわゆる巣内系神文杯については西山克巳氏の御教示によるとこうがおおきい。
- 註36 金井塚良一 1977 「推古朝と北武藏の銅鏡」 古代東園史の研究
 金井塚良一 1987 「埼玉精草山古墳の性格をめぐって」 埼玉の考古学
 大谷 徹 1991 「北武藏出土の銅鏡」 埼玉考古学論集
- 註37 毛利光俊彦 1978 「古墳出土銅鏡の系譜」 考古学雑誌 64巻1号
- 註38 毛利光俊彦 1989 「鏡の系譜」 古代史復元9 講談社
 毛利光俊彦 1991 「青銅製容器・ガラス容器」 古墳時代の研究 8 雄山閣
- 註39 西 弘康 1982 「上器様式の成立とその背景」 考古学論考
 宇野隆夫 1985 「古代的食器の変化と特質」 日本史研究 第280号
- 註40 石田虎作 1928 「密教法具」 仏教考古学講座 雄山閣
- 註41 前川要氏は、望月謙弘氏の研究を引用しながら、飲食器の少ない点は缺點で補ったとしているが、実際には5世紀前半の段階では、まだ飲食器がはっきりと密教法具に組み込まれていないか、第1表をみると裏りばらつきがあり密教法具が確実なものとして成立していないかったと考えられる。
- 前川 要 1987 「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」 中近世土器に基礎研究III
 望月謙弘 1985 「伊豆修善寺発見の密教法具」 望月謙弘と考古学

- 註42 土塹墓に代表される9世紀後半から11世紀の墓には、多数の食器がみられる。それらは棺外にあり、死者に供えられたとも考えられるが、その数の多さから、死者を送る儀式の際に用いられ、埋納したとも考えられる。
- 註43 危子祐之 1985 「古代の食器」 日本の美術No.235 美文堂
伊野近富 1982 「「秦鏡」「獣鏡」考」 京都府埋蔵文化財情報 第5号
- 註44 佐野大和 1963 「日光男体山」 角川書店
- 註45 桜井善一 1963 「福永出土の占吉鏡仮面からみた能登の山林宗教考」 北陸の考古学 石川考古学研究会
- 註46 梶乳家昭 1971 「鏡和水鏡とその作出遺物」 郡馬県立博物館報 第6号
- 註47 灰書土器については、金原正氏の御教示によるところが大きい。
金原 正 1989 「奈良土器」 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 吉田川西遺跡
- 註48 塩尻市教育委員会 1991 「高瀬川遺跡」
安曇町教育委員会 1973 「木下北越遺跡」
瓦塔については、出河裕典氏の御教示による。
- 註49 47同じ
- 註50 鬼頭清明 1984 「古代開拓と仏教思想」 諸國日本歴史2 古代2 東京大学出版会
- 註51 松本平の9世紀後半は、從来から継続してきた墓葬の形態、新たな地への墓葬の形成、鏡和陶器の盛の差にみられる差時間の格差の拡大、堅穴住居の塗場にみられる墓葬内室の変化など、大変動の時期である。
原 明芳 1989 「吉田川西遺跡の歴史的特質」 時長野県埋蔵文化財センター 1989 吉田川西遺跡 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 小平和夫 1990 「古代の墓葬」 鈴長野県埋蔵文化財センター 1990 熊谷編 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 註52 中野市教育委員会 1990 「高梨居塚跡」
- 註53 松本市教育委員会 1985 「松本市南栗遺跡」
塩尻市教育委員会 1986 「丘中学校遺跡」
信濃毎日新聞社 1956 「戸隠」
- 註54 中野正樹 1978 「密教法具」 仏教考古学講座X
毛利光俊彦 1989 「鏡の系譜」 古代史復元9 編談社
毛利光俊彦 1991 「青銅鏡容器・ガラス容器」 古墳時代の研究8 岩山編

瓦塔の生産

—塩尻市菖蒲沢窯跡の資料の検討を通して—

出 河 裕 典

- | | |
|------------------|----------------------|
| I はじめに | IV 各地の瓦塔焼成造縛（窯） |
| II 研究史と本稿の視点 | 栃木県 熊谷市 富士見町 石川県 福井県 |
| III 菖蒲沢窯跡の瓦塔と須恵器 | 岐阜県 岐阜市 愛知県 三重県 福島県 |
| (1) 松本平の須恵器窯 | V まとめ |
| (2) 菖蒲沢窯跡の概要 | |
| (3) 器種構成の特徴について | |

I はじめに

長野県内の瓦塔出土遺跡は、管見によれば現在14地点にのぼっている。⁽¹⁾ 従来、県内においては寺院跡に多いとされてきた瓦塔であるが、⁽²⁾ 近年の大規模な発掘調査により、集落遺跡や窯跡からの出土も徐々に増えつつある。

本稿でとりあげる塩尻市菖蒲沢窯跡は県内で唯一の瓦塔の生産遺跡である。完形に復元された瓦塔は企画的にみても数少なく、県内出土例の中では最も遺存状態がよいとされ注目を集めている。⁽³⁾

筆者は菖蒲沢窯跡出土の須恵器についてまとめる機会を与えられたが、瓦塔の出土もさることながら、須恵器の器種構成が県内の他の須恵器窯跡にみられない特徴をもつていて注目した。この特殊な器種構成は瓦塔の焼成と何らかの関係があるのか、また、瓦塔を焼いた窯跡に共通する特徴はあるのかという疑問が瓦塔と須恵器窯の関係について考えるきっかけとなった。

本稿では菖蒲沢窯跡の資料を、他県の瓦塔出土窯跡と比較しながら再検討することにより、菖蒲沢窯跡の瓦塔・須恵器生産の特質に迫ってみたい。

II 研究史と本稿の視点

瓦塔が須恵器の窯跡から出土することは広く知られてきたが、出土する窯跡が全国的にどのように分布しているのか、また他の須恵器窯跡と違った特徴をもつのか、というような問題についてはこれまであまり論じられることがなかった。それは窯跡からの出土数がそれほど多くなく、発掘調査によって窯の様子や伴出遺物が明確に分かるような例が少ないこともあるが、その性格を考えると上での窯跡の瓦塔があまり重要視されなかったことにも大きな原因がある。石村喜英氏は「瓦塔設立

の意趣—墳墓標識説私考一」(1966年)⁽⁴⁾の中で、出土地の性質を寺院址・墓址など5つに分類し都道府県別の一覧表にまとめている。このうち「墓址」は21箇所と全体の二割を占めるにもかかわらず、瓦塔設立の意趣を解明する上で「…墓跡、その他（性質不明地）についてはひと先ず捨き、問題は「寺院及び寺院址」「寺院址及び墳墓跡」「墳墓及び古墓址」「神社境内」等に關係あるもののみを事實上の対象としなければならない…」として、廻新出土の瓦塔を考察の対象外としている。⁽⁵⁾

高崎光司氏によれば、昭和40年代までの瓦塔の研究は石村氏を中心に、瓦塔の性格をめぐっての議論が主であった。⁽⁶⁾ そうした中で、生産地である廻新出土の瓦塔は、その性格を考えるには不向きな資料として、積極的に評価されることが少なかったといえよう。

廻跡から出る瓦塔については調心が低かったものの、この間、須恵器痕跡の調査・研究の進展に付随する形で、瓦器が特殊な伴出遺物として取り上げられる例が増加していく。

坂詰秀一氏は1950年代後半～60年代前半にかけて、東國の須恵器痕跡の調査を精力的に行い、いくつかの報告・論考を発表している。⁽⁷⁾ その中で埼玉県の南北企窓跡群において須恵器・瓦に伴って瓦塔を出土する痕跡が多いことに注目し「南北企窓跡群の性格を特徴化ならしめているのは瓦塔の生産を施行していた点である。」とし、同窓跡群発展の一つの要因に瓦塔の生産をあげている。⁽⁸⁾ ただしこでの考察の中心は瓦や須恵器にあり、瓦塔の特徴や伴出遺物の傾向については言及されてはいない。

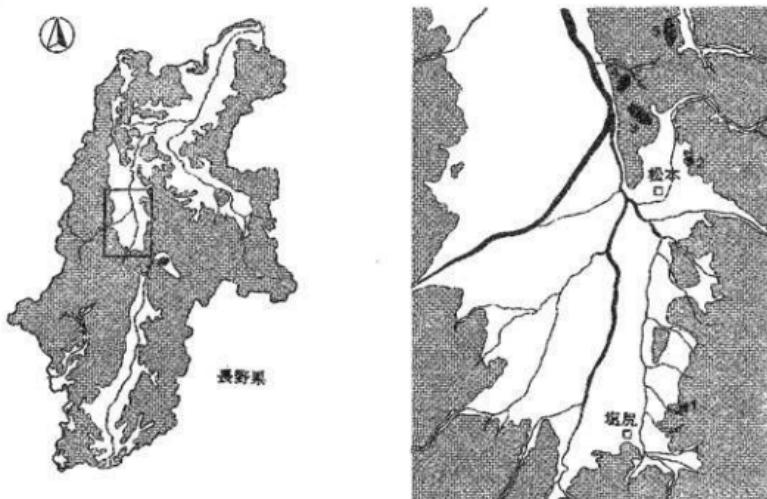
またこのころ、三重県四日市市の岡山1号窓跡（1960年）、富山県砺波市の福山窓跡（1962年）、福岡県北九州市のトギバ窓跡（1967・68年）石川県七尾市の池崎窓跡（1969年）、等でも発掘調査が行われ、瓦塔が特殊な遺物として注目されている。⁽⁹⁾

70年代に入り、石村喜英氏はこれまでの出土資料をまとめる形で、瓦塔についての概説を試みている。⁽¹⁰⁾ 瓦塔の全国的な分布については、従来の都道府県別の一覧表を示し、関東、東北、北陸、近畿、九州の5つの地域圏に大別している。この5つの地域圏はいずれも窓業の発達が著しく、瓦塔の生産城もそうした窓跡を中心とした地域にあるとした。また石村氏は埼玉県の瓦塔についてまとめた論考の中でも、「窓業の旺盛な生産活動を無視しては瓦塔の受容は到底考えることはできない。」として、須恵器生産の発達と瓦塔の生産が密接な関係にあることを指摘している。

80年代に入ると、関東地方の窓跡遺跡を中心に瓦塔の出土例が増加するとともに、瓦塔についての研究がこれまでとちがった形で進展する。⁽¹¹⁾

第一に、これまであまり注目されていなかった瓦塔の形態や製作技法の特徴が問題とされ、瓦塔の時系列的変化（縄文）や地域差がしだいに明らかになってきた。これらは松本修自氏や高崎光司氏の研究によるところが大きい。両氏とも瓦塔を小建築としてとらえたうえで、その製作については窓業工人ではなく陶器工人（須恵器工人）があたったとしている。⁽¹²⁾

第二に、瓦塔の出土例の増加にともない、各県での瓦塔の集成が進み、全国的な出土遺跡の分布についても、しだいに明らかになってきたことである。⁽¹³⁾ これまでも石村氏の集成があったが遺跡数のみで、出土地点については必ずしも明確ではなかった。飛鳥資料館による1984年の集成では



第1図 菖蒲沢窯跡の位置と松本平の須恵器窯

(1 : 菖蒲沢窯跡 2 : 大村地区的窯跡(群) 3 : 田溝・山田窯跡群
4 : 上の山・菖蒲平窯跡群 5 : 金田盆地窯跡群)

155例の出土地点が報告され、このうち、窯跡出土例は9県13例となっている。⁽¹⁴⁾ こうした窯跡の分布から瓦塔の生産を集中域（埼玉、愛知など）と集中域以外（長野、福岡）に分ける考え方も出てきている。⁽¹⁵⁾

瓦塔の生産をめぐる研究の歩みについて簡単にふれてきた。本稿では菖蒲沢窯跡の資料の検討を中心として、これまで、あまり顧みられなかった窯跡の瓦塔に視点をあてて考察を進めていきたい。

瓦塔の生産という場合、瓦塔の製作技法からはじまって焼成、窯の分布、工人の問題と視点は多岐にわたり、本来ならばそれらすべてにふれるべきであるが、筆者の力不足から本稿では瓦塔の伴出遺物に焦点を絞り考察を進めていきたい。⁽¹⁶⁾

なお、資料の集成にあたって、実見したものは数例であり、大部分はそれぞれの報告書の依拠している。また、窯跡の年代・器種名等についても基本的に報告書によっており、他の文献によった場合には、註に文献名を記した。

また、瓦塔の用語等については高崎光司氏の論考にしたがっている。⁽¹⁷⁾

III 菖蒲沢窯跡の瓦塔と須恵器

(1) 松本平の須恵器窯

菖蒲沢痕跡についてふれる前に、松本平の須恵器窯について概観してみたい。

当地方の須恵器窯については、東筑摩郡豊科町から松本にかけてのいわゆる「芥子坊主山窯跡群」が、かねてより国府所在地に位置する窯跡群として注目されてきた。これらの窯跡群については、すでに1960年代から河西清光氏、遠藤泰典氏によって1基～数基程度の調査が行われてきたが、⁽¹⁰⁾ 1980年代後半以降、当地方の須恵器の調査・研究について新たな動きがみられる。

第一に、豊科町に存する上ノ山・菖蒲平窯跡群の調査があげられる。県考古学会、各大学などの参加・協力によって県内でも最大規模の窯跡群の調査が進められた。未報告のため詳しく述べないが、窯跡群規模での調査は県内ではほとんど前例がなく、須恵器の定期的な変化、窯跡群の動向、消費地である集落遺跡との関係などの解明が期待される。

第二にこれまで須恵器窯の存在が知られていなかった地域に須恵器窯の存在が確かめられたことである。本稿で取り上げる菖蒲沢窯跡もその一つである。

松本平の須恵器窯跡群は東筑摩郡四賀村の会田盆地の窯跡群、同郡豊科町から松本市にかけて広がる、上ノ山・菖蒲平窯跡群、田浦・山田窯跡群、松本市大村地区の窯跡群など盆地の北縁部に分布し、それ以外の地域には窯跡の分布は確認されていなかった。

ところが80年代後半以降、菖蒲沢窯跡をはじめとして、松本市中山地区にも数基の窯跡の存在が明らかになってきており、筑摩山地西麓沿いに、須恵器窯跡が点在する可能性もある。これらの窯の数が将来的に増えることも考えられるが、現状では北部の窯跡群に比べると小規模で、継続性に乏しいといえよう。ことに菖蒲沢窯跡は最も近い中山地区の窯跡から直接距離にして約8km離れており、上ノ山・菖蒲平窯跡群からは20km以上も南に位置するのである。窯跡の分布から見ても菖蒲沢窯跡は松本平の須恵器窯の中でも特異な位置あるといえよう。⁽¹¹⁾

(2) 菖蒲沢窯跡の概要

菖蒲沢窯跡は1987年、造成工事中に発見・調査され、

すでに調査報告がなされている。ここではまずその報告書をもとに、窯跡の立地等についてふれておく。

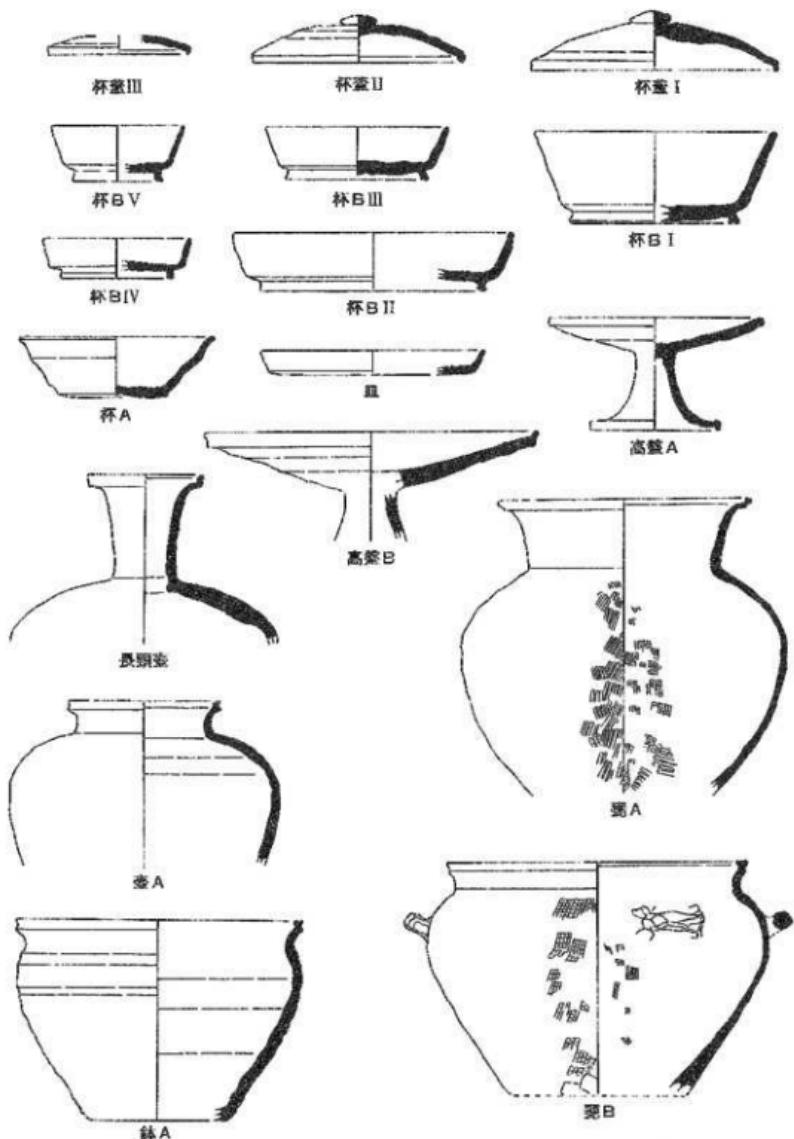
窯跡は塩尻市大字片丘北熊井に所在する。塩尻市の東方に南北に延びる片丘丘陵は諸河川によって、いくつかの尾根状の台地が西方の盆地の方角にむかって並びている。菖蒲沢窯跡はこうした台地の一つ、大沢川と牛亮沢川によって挟まれた台地の南斜面に設けられている。窯跡の斜面は15°急勾配で、窯跡の南側斜面下には4mの比高差をもつ、「菖蒲沢」と呼ばれる沢筋がある。この沢沿いは、绳文時代と平安時代の複合をなす菖蒲沢遺跡がある。菖蒲沢からは良質の粘土を採取することができる。

発見された遺構は登窯1基、竪穴住居1軒、墓塚1

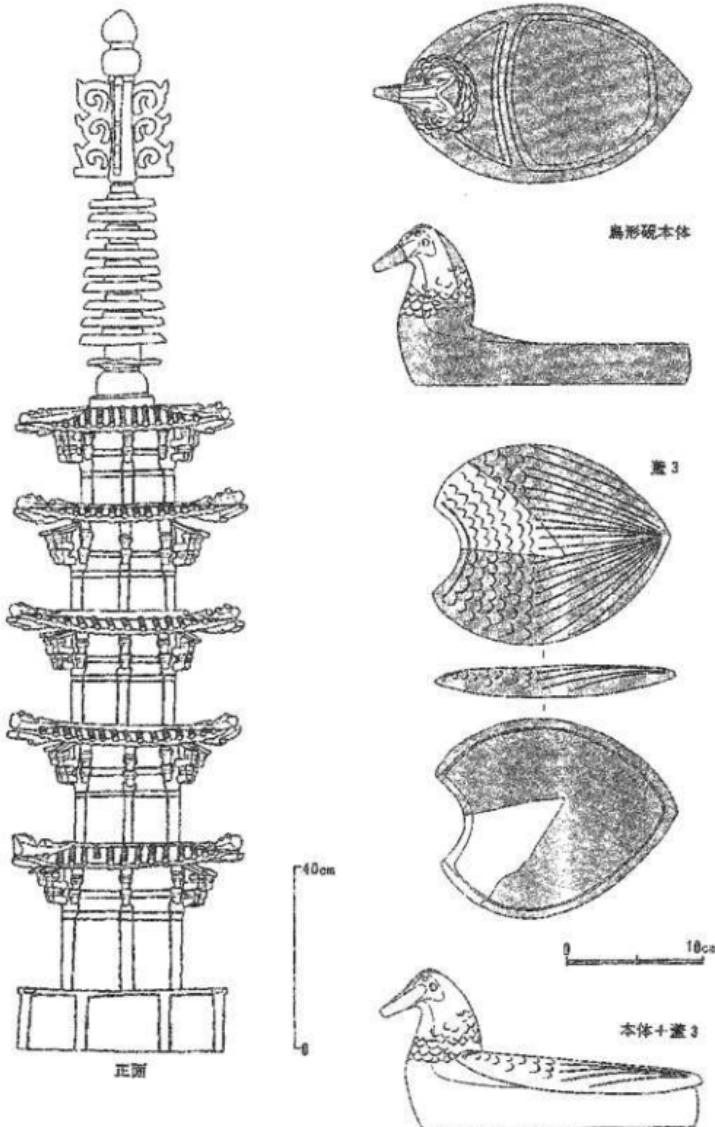
機種	個体数	%
杯 A	66	12.0
杯 B	268	48.9
杯 瓷	162	29.6
高盤 A	19	
高盤 B	4	
皿	9	1.6
鉢 A	8	
鉢 B	2	
長頸壺	8	3.7
甕 A	1	
甕 B	1	
合計	548	100

第1表 菖蒲沢窯跡の器種構成比(灰原)

〈口縁部の1/3以上残存するものを1個体として個体数を出した〉



第2図 萩蒲沢窯跡の主な器種構成 (窓A、Bのみ1/6他は1/4)



第3図 高瀬沢窯跡出土の瓦塔と鳥形硯

基である。豊穴住居の床面をきる状態で検出された墓壙は平安時代後期のもので、窯跡とは時期を異にする。

まず、登窯であるが、窯体は半地下式で全長6.4mを測る。特徴的なのは、側壁に偏平な礫を立て並べて、壁面をつくっていることであり、礫の大きさは窯道部に近い上方になるに従い小型になっている。窯体の前面にはすり鉢状のビットがあり、このビットから下方に向かって屋形に灰原が広がる。窯体の床面には複数回の焼成面などは確認されてはいない。

つぎに、豊穴住居跡であるが、登窯の5mほど西側に検出された。床面の中央付近と南東側には粘土層の広がりが見られ、報告書では登窯に関係した工房並ではないかとしている。また、瓦塔もこの住宅跡の西側床面上から、圧し潰されたような状態で出土した。破片数は数千片にも及び、瓦塔はこの地点から最も多く検出されている。

なお、本窯跡の時期および所属年代については、出土した須恵器の特徴から、松本平の集落遺跡の土器編年である「総論編」の3～4期、⁽²⁰⁾ 8世紀の中頃から後半にかけての時期に位置づけている。また、各遺構の須恵器の間に大きな時期差はみとめられず窯・住居は窯業遺跡として一体であったと考えられる。

(3) 器種構成の特徴について

出土遺物は大きく分けて、須恵器・瓦塔・硯（円面硯、鳥形硯）3種類である。これらの器種構成の特徴についてふれる際、同時期の県内の窯跡出土資料に器種構成比などが明確にわかるものが少ないため、主に、松本平の集落遺跡の資料と比較しながら考えていきたい。

須恵器

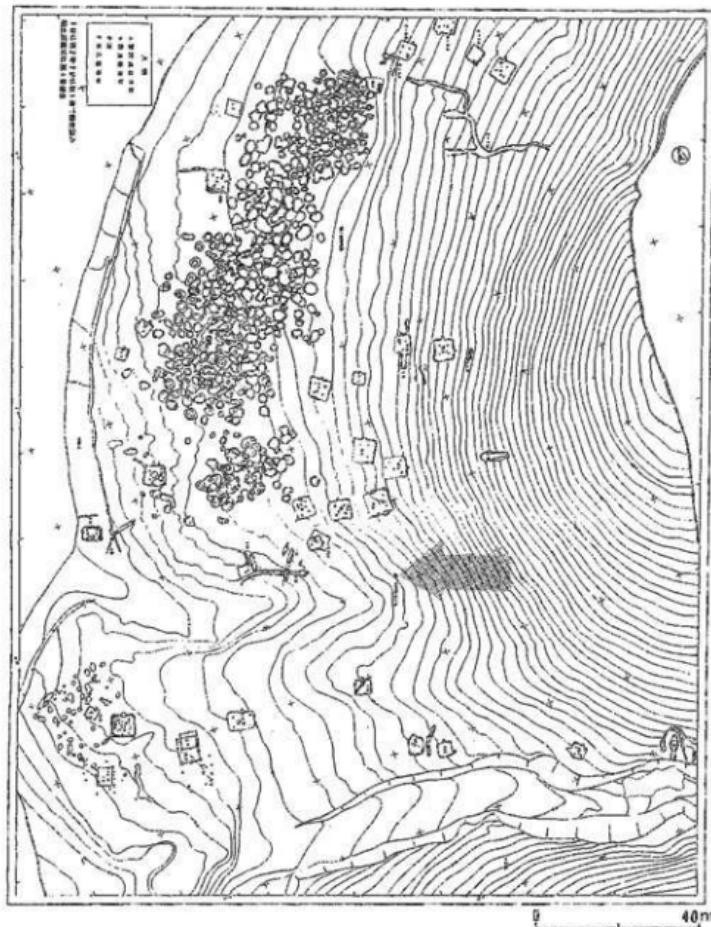
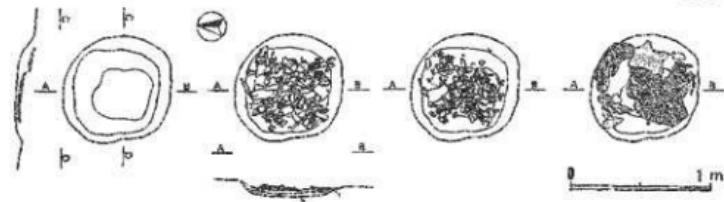
須恵器は杯A、杯B、杯蓋、高盤、皿、長頸壺、短頸壺、鉢、甕などの器種が出土している。最も多く出土した灰原を中心に、その器種構成の特徴についてみてみたい。

まず、第一に杯B・杯蓋の割合の高さがあげられる。杯Bは全体の50%ちかくをしめ、セットとなる杯蓋をあわせると80%ちかくになる。集落遺跡での成果をみても、8世紀の後半段階では杯Bは最も法量分化がみられ量的にも増加する段階とされているものの、食膳具の中心をしめるのはやはり杯Aであるとされている。⁽²¹⁾ また、上ノ山・菖蒲平窯跡群では各時期を通して杯Aが量的多いとの指摘もうけており、窯跡群の位置、規模などとともに興味深い相違である。⁽²²⁾

第二に、高盤A・高盤B、皿というような、松本平においては出土量が極めて少ない食膳具が認められることである。

高盤A・高盤Bともに脚部をもつ食膳具である。体部がやや深めの古墳時代以来の高杯と形態があきらかに異なり、体部は浅く偏平である。口径15cm前後の高盤Aは口縁部が真っすぐ外にのび、口径22cm前後の高盤Bは口縁部を短く折り返す。高盤Bについては時期がやや下るもの、下神遺跡のSB92で検出されている。下神遺跡の6、7期はこの高盤ほか大形の杯Bや赤彩土器など同時期の松本平の遺跡とは違った土器様相を示しているとされており、⁽²³⁾ 菖蒲平窯跡の高盤Bについても、ある程度限定された消費地への供給も考えられる。

瓦塔



第4図 燐山窯跡群柳原A瓦塔焼成土坑（上）と柳原A全体図（下、矢印部分が瓦塔焼成土坑）

冒頭でも述べたように県内での瓦塔の出土例は10数例が報告されているが、窯跡からの出土は本例が唯一のものである。

瓦塔の詳しい形態、技法などは報告書に詳細に報告されている。⁽²⁴⁾ 破片は数千片に及び、焼成は土師質、須恵質の両者がある。復元の結果少なくとも2基分の瓦塔が焼かれていたと考えられる。そのうち土師質の一基分が五重塔に復元されている。

松本平の瓦塔出土遺跡は從来、明科町明科廃寺、松本市城ノ腰遺跡、塩尻市大門遺跡が知られてきた。80年代後半に入って、吉田川西遺跡、北原遺跡などの集落遺跡でも出土している。しかし、いずれも、明確な焼縁にともなった例が少なく、伴出遺物の特徴などについては不明であり、本窯跡とは比較できない。なお、上記の出土例の中で菖蒲沢窯跡出土の瓦塔と全く同じ特徴をもつ瓦塔は確認されていない。

硯

灰原から鳥形硯が4個体分と円面硯の破片が1片出土している。いずれも須恵質である。円面硯については、県内の8世紀から9世紀前半の集落遺跡を広範囲に調査すれば、まず確認できる遺物であるが、⁽²⁵⁾ 鳥形硯については県内では初めて確認されたものであり、極めて特殊な硯である。⁽²⁶⁾

その他

瓦塔のほかには「仏教的遺物」といえるようなものは検出されていない。また須恵器についても、鉢形の鉢Bが窯跡内から1点出土しているが、その他、いわゆる仏教的な器種（銅鏡模倣の杯）などは検出されていない。瓦の出土もない。

以上、菖蒲沢窯跡の器種構成の特徴についてみてきたが、ここでもう一度、簡単にまとめておきたい。

①杯B・杯蓋の出土量が非常に多く、両者をあわせると、80%ちかくにもなる。

②高盤A、高盤B、皿など松本平の一般の集落遺跡ではみられないような特殊な食膳具もみられる。

③瓦塔、鳥形硯など県内の須恵器窯では他に類例のない遺物が出土している。

④瓦は出土していない。須恵器にはいわゆる「仏教的」な器種などはほとんどみうけられない。

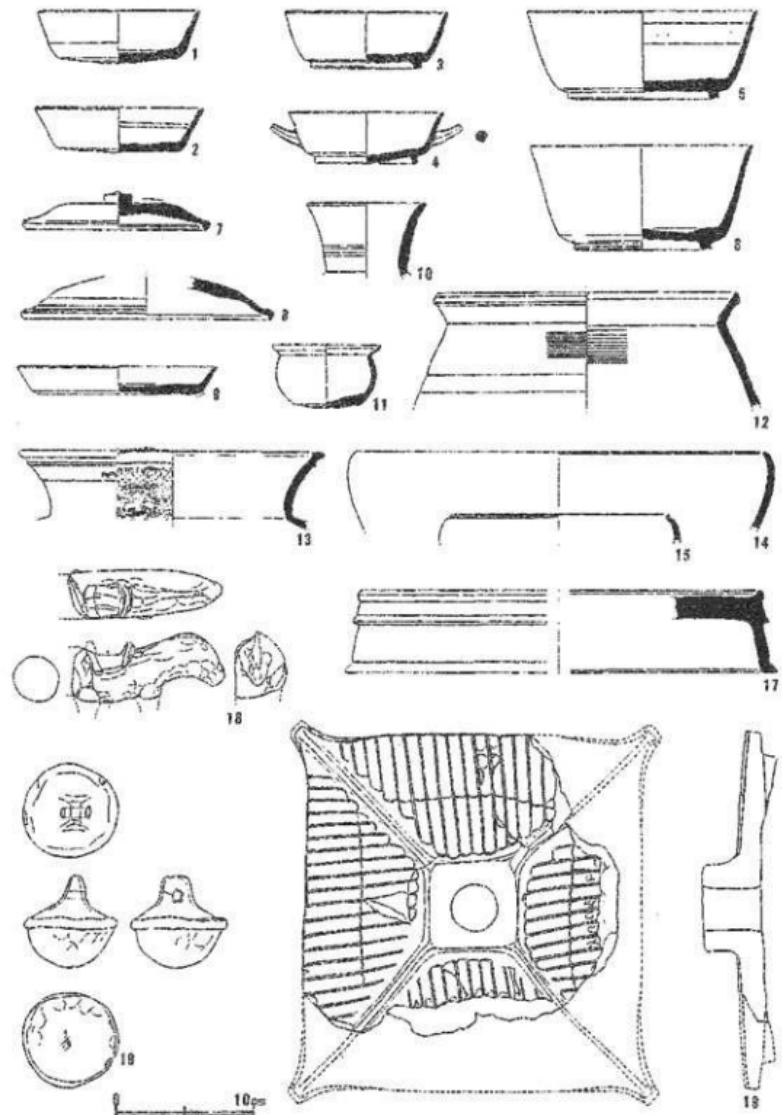
IV 各地の瓦塔焼成遺構（窯）

菖蒲沢窯跡の器種構成を中心にその特徴について述べてきたが、ここでは、県外の瓦塔を出土した窯跡の伴出遺物の特徴や窯跡の分布について考えてみたい。

飛鳥資料館による1984年の集成などを参考として、管見にふれた窯跡数は9県20窯に及ぶ。(第2表) ここに掲げた窯跡は発掘調査された資料だけでなく表探査料も含んでおり、報告書等により出土地点などが確認できたもののみをあげてある。依拠した文献等については註に記した。

栃木県

(1) 欠ノ上窯跡



第5図 福山塚跡の主な出土遺物

(1・2:杯A 3~6:杯B 7・8:杯蓋 9:盤 10・11:壺 12:長柄鏡 13:鏡 14:15:鉄鉢 16:土馬 17:円底硯 18:土鉢 19:瓦塔 9・14・15のみ表探資料)

瓦塔の生産

「栃木県生産遺跡分布調査報告書」⁽²⁷⁾によれば、欠ノ上窯跡と同じ丘陵上の西方約100mの場所に須恵器片を中心に瓦塔片が採取された地点がある、とされている。瓦塔の焼成については須恵質なのか土師質なのか不明である。欠ノ上窯跡の須恵器も表抜資料であるが、杯、高台杯、杯蓋、壺、壺の器種がみられる。欠ノ上窯跡については出土遺物の特徴から8世紀後半に位置づけられる、とされる。

埼玉県

(2) 南北企窯跡群(新沼窯跡、虫草山A 1号窯跡、山田A 1号窯跡)

南北企窯跡群は埼玉県北企都鳩山町、嵐山町、玉川村一帯に広がる、一大窯跡群地帯である。窯跡群は幾つかの支群に分かれしており、6世紀前半の櫻山窯跡群の出現にはじまり、その後9世紀代に至るまで、中心となる谷を移動しながらほぼ継続的に操業が続くとされる。⁽²⁸⁾須恵器とともに瓦を焼く瓦陶兼業窯が存在することでも知られている。近年の鳩山窯跡群の調査などによって、工人集落のあとなども発見されており、⁽²⁹⁾東日本でも有数の窯跡群として注目されている。

ここに掲げた新沼窯跡、虫草山A 1号窯跡、山田A 1号窯跡はいずれも昭和30年代に坂詰秀一氏を中心とする立正大学考古学研究室による一連の調査が行われたものである。

新沼窯跡

鳩山町泉井地区に所在し1959年に立正大学考古学研究室によって調査された。⁽³⁰⁾郡名瓦が多量に出土したことで知られ、瓦のほかに須恵器、壺、瓦塔が出土している。須恵器の具体的な器種など

は不明である。高峰光司氏の論考によれば、瓦塔の全く同一の墨蓋に土師質と須恵質の両者がある、とされる。⁽³¹⁾8世紀中頃から後半の操業が考えられている。

虫草山A 1号窯跡

鳩山町大橋地区に所在し、1960年に調査された。A、B両群からなりA群の1号窯跡から瓦、須恵器に伴って、瓦塔が出土したとされる。須恵器の詳しい器種構成は不明であるが高杯、片口鉢などが出土している。8世紀の後半から9世紀の前半に位置づけられている。⁽³²⁾

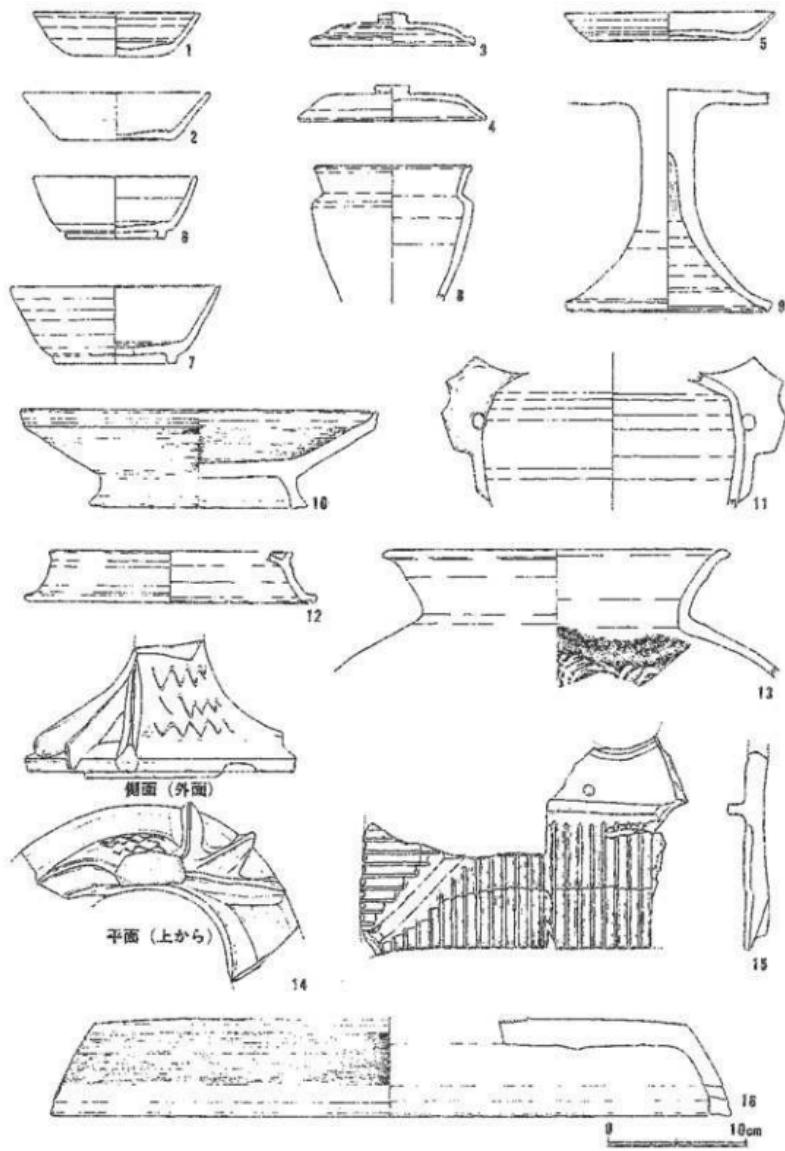
山田A 1号窯跡

鳩山町赤沼地区に所在し、1961年に調査された。A、B、Cの3群からなりA群の1号窯跡から、文字瓦などの瓦、須恵器とともに、瓦塔が出土。須恵質か土師質かは不明。また須恵器の詳しい器種についてはやはり不明であるが、杯、壺、鉢などが出土している。8世紀後半から9世紀前



第8図 池崎窯跡の位置と加賀・能登の須恵器窯

(黒塗り部分が窯跡(群))



第7図 池崎塚跡の主な出土遺物

(1・2・5:無台杯 3・4:杯蓋 6・7:有台杯 8:壺 9:高杯 10:有台杯 11:甕
耳瓶 12:凹面鏡 13:鏡 14:鳥形土器 15:瓦塔 16:九輪)

瓦塔の生産

半に位置づけられている。⁽³³⁾

以上、南北企窓跡群の3つの窓跡については瓦塔の出土状況や所属年代など不明な点も多いが、次に述べる鳩山窓跡群の1例も含めて、瓦塔の生産窓跡が他の地域に比べ、かなり集中してみられることは確かであろう。器種構成などについても詳しくは分からぬが、瓦塔、須恵器とともに瓦を併焼している点が大きな特徴であろう。

(3) 鳩山窓跡群柳原A瓦塔焼成土坑

鳩山窓跡群は南北企窓跡群の東寄りにあって、その一支群を構成している。1984~85年に発掘調査が行われた。遺跡は大きく、小谷、広町、柳原、虫草山などの5遺跡7地区にわかれしており、それぞれの地区で須恵器窓跡のみでなく、須恵器生産にかかわる工人集落跡や粘土採掘坑などが発見されている。⁽³⁴⁾

瓦塔焼成土坑は柳原A地区の丘陵緩斜面の中腹に位置する。柳原A地区は窓も2基存在するが、豊穴住居跡と粘土採掘坑によって構成される工人集落跡を中心とする地区である。

略円形の土坑は他の遺構からやや離れた位置にあり孤立している。規模は長径0.83m、短径0.76m深さ10cmを測り、皿状に掘り込まれてまでいる。瓦塔は細片となって土坑上面に露出しており、その下に焼土層が形成されている。

瓦塔は塔に属するものと堂に属するものに分けられ、いずれの破片も焼成は上部質である。遺物の所属年代については9世紀前半に位置づけられている。⁽³⁵⁾須恵器照と違い、伴出遺物等はない。

埼玉県では以上の庄北例のほかに木部窓跡、姥田窓跡、上高岡窓跡で瓦塔が出土している。鈴木德雄氏の埼玉県内の瓦塔出土遺跡の集成によれば、⁽³⁶⁾姥田、上高岡の出土例については須恵質であり、3窓跡とも伴出遺物として瓦をもつらしい。

富山県

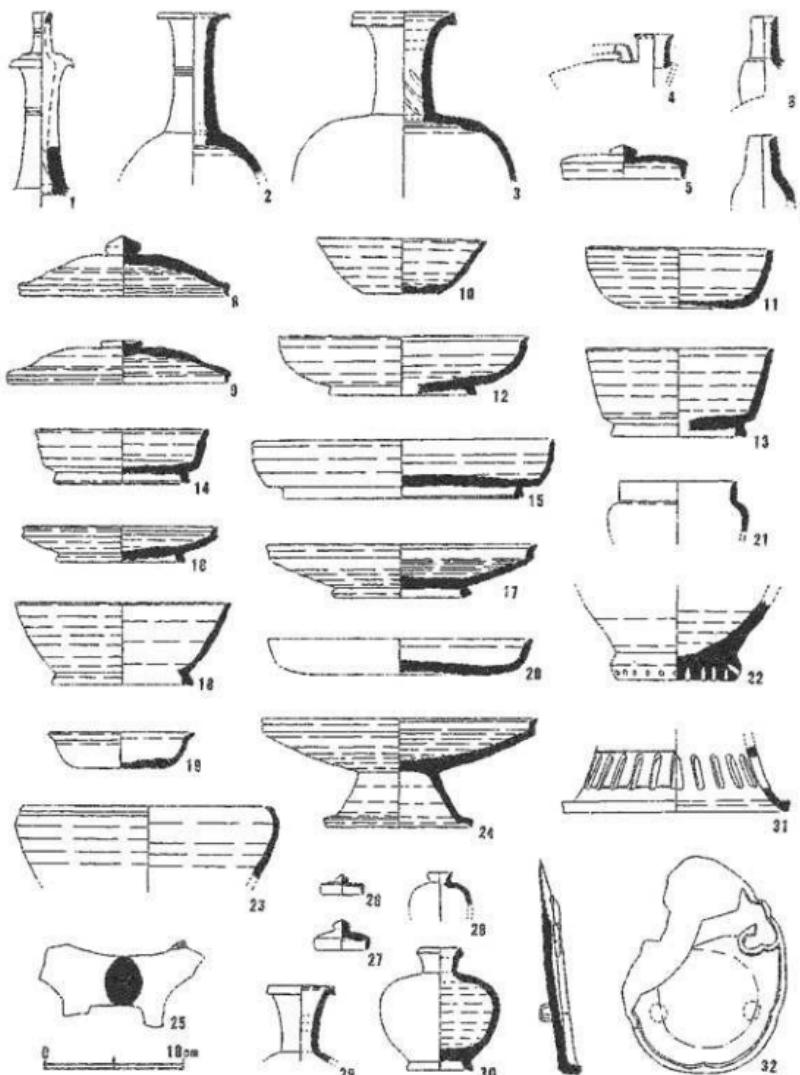
(4) 福山窓跡

砺波市の東部、庄川の河岸段丘から東側の丘陵にかけて梅塙野窓跡群がある。福山窓跡はその段丘南端に位置し、南側にもう1基(2号窓)窓跡が存在するらしい。他の窓跡からは多少距離をおく。砺波市史編纂委員会などによって、昭和30年代までに数回の調査が行われている。⁽³⁷⁾

窓体は半地下式の登窓で、窓体内、灰原から大量の須恵器、瓦塔が出土している。須恵器には杯A、杯B、杯蓋、鉢、壺、甕などがあり、双耳杯が1点出土している。こうした須恵器のほかに瓦塔(水煙部、屋蓋部、袖部、基座部)、凹面鏡、土馬、土鈴などの遺物が出土している。所属年代については8世紀の第3四半期から第4四半期にかけての時期に位置づけられる。⁽³⁸⁾

(5) 明神遺跡II地区

明神遺跡は、富山市西南部から小杉町にひろがる射水丘陵の東寄りに位置する。同丘陵は須恵器窓だけでなく、炭焼窯、製鉄炉など、古代の生産遺跡がかなり密集して存在し、須恵器窓についても7世紀から10世紀に至るまで窓跡が確認されている。⁽³⁹⁾明神遺跡II地区は富山市教育委員会によって1990年に調査された。⁽⁴⁰⁾未報告であるので詳しくはふれられないが、2基の半地下式の登窓が確認され、この須恵器窓からは杯A、杯B、杯蓋、高杯、甕、壺などが出土している。瓦塔は須恵



第8図 折戸80号窯の主な出土物(灰釉陶器、1:淨瓶、2:水瓶、3:長頸瓶、4:平瓶、5:短頸壺(蓋)、6・7:多口瓶 瓢箪器、8・9・12~15:蓋杯、10・11:余切り碗、16・17:盤、18:碗、19・20:皿、21:短頸壺、22:摺鉢、23:鉄鉢、24:台付壺、25:陶馬、26~30:ミニチュア品、31:円筒鏡、32:宝珠鏡)

瓦塔の生産

質で、2号窯の北約2mに位置する段状遺構と灰原から出土している。須恵器の器種構成、製作技法など北陸地方の一般的な様相を示しており、とくに変わった器種があるとか、ある器種が量的に多いということはない。⁽⁴¹⁾時期的には9世紀の初めに位置づけられる。

富山県では以上の出土例のほかに上末窯でも瓦塔が出土している。⁽⁴²⁾

石川県

(6) 池崎窯跡

七尾市池崎に位置する。池崎窯南約5kmに能登最大の須恵器窯跡群である鳥屋窯跡群が存在し、同窯跡群の支脈の一つとしてとらえられているが、現状では他の窯跡群から孤立して存在する。⁽⁴³⁾窯跡数は調査された1号窯1基のみであるが、付近に瓦塔が採取された地点もあり、単基ではない可能性もある。⁽⁴⁴⁾

七尾市史編纂の一環として、1969年に灰原のトレンチ調査が行われ、1984年には七尾市教育委員会によって、灰原の約1/3が調査された。⁽⁴⁵⁾

須恵器の器種構成は杯蓋、杯（無台、有台）双耳瓶を中心とする壺瓶類、壺類（貯藏形態）、煮沸形態の壺、盤などが出土しており、高杯、有台鉢、円面鏡などもある。

さらに、この潔勝の大きな特徴として、特殊遺物の存在があげられる。瓦塔をはじめとして、九輪、鳥形土器などが出土している。

なお、池崎窯の製品の供給先については能登国分寺が有力視されてきている。本窯が能登国分寺の最も至近距離にあること、廻遺跡の瓦塔の形態等に類似点がみられることが大きな理由である。同寺からの特注品として瓦塔、鳥形土器などとともに軸器類も生産された可能性もある。いずれにせよ、瓦塔の供給先を推定できる遺跡がほとんどないことを考えれば、池崎窯と能登国分寺の資料は瓦塔の生産と供給を考える上で重要である。池崎窯跡の所属年代については9世紀中葉に位置づけられており、能登国分寺の設置年代とはほぼ一致している。

(7) 花見月遺跡、花見月N地点

花見月遺跡は島屋町花見月に所在する。能登最大の須恵器窯跡群である鳥屋窯跡群の支群である花見月支群の一角にあたり、伊久留川の南東斜面に位置する。花見月支群は須恵器、窯壁片の散在地点が点在し、平安時代を中心とする窯跡が少なくとも13基以上存在すると想定されている。

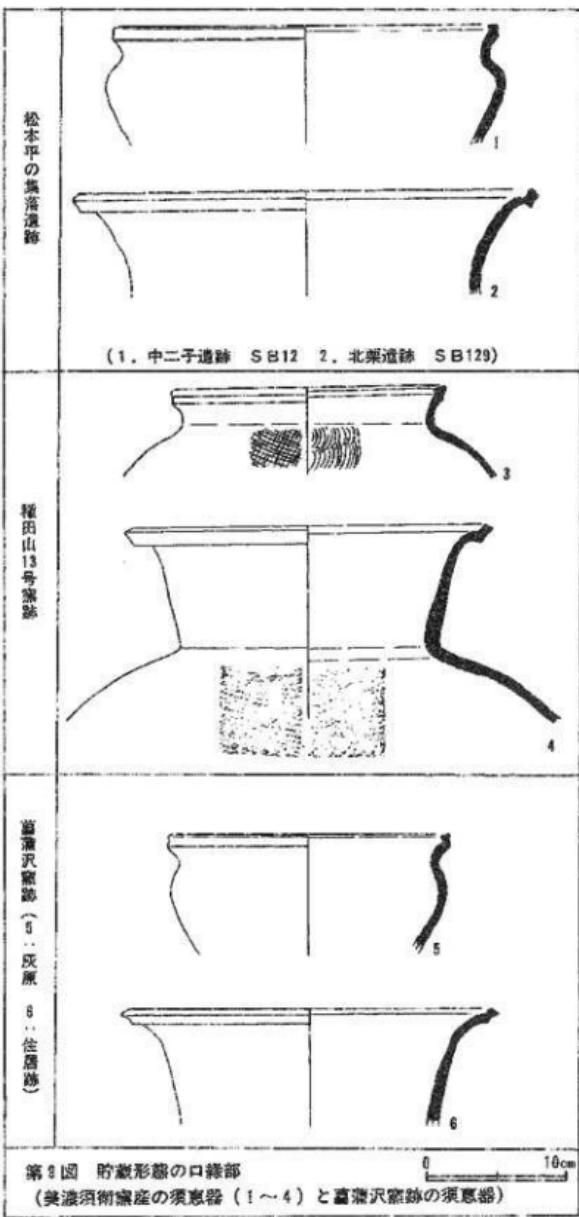
花見月遺跡は1982年に石川県埋蔵文化財センターによって、試掘調査が行われた。⁽⁴⁶⁾窯跡、灰原等は調査区に含まれなかつたが、須恵器、瓦塔の破片が出土しており、斜面上方からの転落などによるもので、付近に瓦塔を焼成した痕跡が存在したらしい。瓦塔は6点検出されている。いずれも須恵質で、共伴する須恵器大甕の胎土と同様である、とされる。從来、能登国分寺出土の瓦塔については、池崎窯跡において生産された可能性が高いとされてきたが、鳥屋窯跡群花見月支群の瓦塔の発見で生産地が複数存在する可能性も出てきている。

なお、花見月遺跡の対岸の斜面においても、須恵器杯とともに瓦塔片が採取されており、窯跡の存在が想定されている。（花見月N地点）

(8) 若緑イナバ山2号窯跡

番号	遺跡名	縦横群	都道府県	市町村	件出遺物	瓦塔の焼成	所属年代
1	矢ノ上窯跡		栃木県	宇都宮市	不明	不明	不明
2 a	新沼窯跡	南北企窯跡群	埼玉県	鳩山町	須恵器 塗瓦	須恵質・土師質	8 C 中頃～後半
b	虫草山A 1号窯跡	#	埼玉県	鳩山町	須恵器 瓦	不明	8 C 後半～9 C 前半
c	山田A 1号窯跡	#	埼玉県	鳩山町	須恵器 瓦	不明	#
3	柳原A 瓦焼成土坑	鳩山窯跡群	埼玉県	鳩山町	なし	土師質	9 C 前半
4	福山窯跡	猪俣野窯跡群	富山県	砺波市	須恵器 円面鏡 土馬 土鈴	須恵質	9 C 初頭
5	明神達跡田地区	船水三段東端窯跡群	富山県	富山市	須恵器	須恵質	9 C 中葉
6	池崎窯跡	(鳥屋窯跡群)	石川県	七尾市	須恵器 円面鏡 九輪 鳥形土器	須恵質	9 C 中葉
7	花見万遠跡	鳥屋窯跡群	石川県	島田町	(須恵器)	須恵質	不明
8	若狭イナバ山 2号窯跡	高松・押水窯跡群	石川県	高松町	不明	不明	不明
9	佐々生窯跡	舟生窯跡群	福井県	明日町	(須恵器)	不明	8 C 前半
10	越田山11号窯跡	美濃須衛古窯跡群	岐阜県	各務原市	須恵器	須恵質	8 C 中葉
	13号窯跡	#	岐阜県	各務原市	須恵器 円面鏡 陶(土)馬	須恵質	8 C 後半
11	NN286号窯跡	猿投山西南麓古窯跡群	愛知県	名古屋市	須恵器	須恵質	8 C 晩～9 C 初頭
12	折戸80分窯跡	#	愛知県	日進町	須恵器 灰釉陶器 ミニチュア土器 円面鏡 宝珠鏡 陶(土)馬	須恵質	8 C 後半
13	岡山1号窯跡	岡山古窯跡群	三重県	四日市市	須恵器 視 瓦	不明	8 C 後半
14	トギハ窯跡		福岡県	北九州市	須恵器	(須恵質か?)	8 C 後半
	御柱神社・山方畠窯跡		福岡県	北九州市	(須恵器)	(須恵質か?)	8 C 中葉・8 C 後半
※	高瀬沢窯跡		長野県	塩尻市	須恵器 円面鏡 鳥形鏡	須恵質・土師質	8 C 中頃～後半

第2表 瓦塔焼成遺構(窯)一覧



若緑イナバ山2号窯跡は河北郡高松町に位置する。能登、加賀両地域にまたがる高松・押水窯跡群は7世紀中葉から10世紀にいたるまで継続的に須恵器生産が行われており、同窯跡はその中でも最も窯跡が集中する若緑地区に位置する。瓦塔は灰原から採集されており、⁽⁴⁷⁾詳しい器種構成などは不明である。

福井県

(9) 佐々生窯跡

丹生郡朝日町佐々生の北浙部丘陵に位置する。佐々生古窯跡群は鯖江市西部から丹生郡明日町、同郷田町、官崎村広く分布する丹生古窯跡群の一支群であり、構成基數は3基である。採集資料が少ないため、詳しい器種構成は不明である。瓦塔の水槽部が採集されている。8世紀前半位置づけられている。⁽⁴⁸⁾なお、「北壁の古代手工業生産」⁽⁴⁹⁾によれば、同じ丹生古窯跡群の小曾原支群においても瓦塔が検出されている。

岐阜県

(10) 稲田山古窯跡群

(11号窯、13号窯)

各務原市須寄地区に位置する。稻田山古窯跡群は古代美濃国における須恵器生産の中心地である美濃須寄古窯跡群の一支部で、1974年に各務原市教育委員会によって16基の窯跡が調査された。⁽⁵⁰⁾ そのうち13基が須恵器窯であり、11、13号窯より瓦塔が出土している。

11号窯の須恵器の器種には杯（無台、有台）、杯蓋、榠、盤、皿、高杯、弦頸、鉢類、瓶、燒類などで構成されており、その他に円面鏡、陶馬（土馬）などが出土している。13号窯跡は8世紀後半に位置づけられる。瓦塔の焼成については、11号、13号ともに生焼けにちかく、灰白色を呈する。

美濃須寄古窯跡群では稻田山支群の他に、天狗谷古窯跡群、寒洞古窯跡群などでも瓦塔を焼成した窯が存在する。いずれも併出遺物に他の窯跡と異なるような堅立った特徴などは認められない。⁽⁵¹⁾

愛知県

(11) NN286号窯跡

名古屋市緑区鳴海町に位置する。猿投山西南麓古窯跡群の鳴海支群に属する。1985年に名古屋市教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。⁽⁵²⁾

出土遺物には杯（無台、有台）、杯蓋、榠、鉢、瓶などがある。最も多いのが杯類で過半数を占め、次いで長頸瓶が多い。瓦塔は墨蓋の破片などが10片ほど出土しており、須恵質である。

本窯跡は8世紀末から9世紀初頭に位置づけられている。

(12) 折戸80号窯跡

愛知郡日進町に所在し、本窯跡周辺は猿投山西南麓古窯跡群の折戸地区の東端にあたる。同じ谷筋には81号、82号が存在し、愛知池を越えた東南側には黒笹地区の14、90号窯跡などが存在する丘陵がある。猿投山西南麓古窯跡群のなかでも焼跡が集中する地域の一つである。

本窯は1978年に日進町教育委員会によって調査された。⁽⁵³⁾ 遺物は灰釉陶器はそのほとんどが瓶類で冷瓶、水瓶、長頸瓶などがあり、注目すべき器種に多口瓶がある。須恵器は蓋杯、皿、盤、高盤、榠、鉢、瓶、壺などの日常生活器類が大部分であるが、特殊品として鏡（円面鏡、宝珠鏡）、瓶類のミニチュア品、陶馬、陶瓦（瓦塔）なども豊富にみられる。⁽⁵⁴⁾ 瓦塔は須恵質である。

本窯跡は折戸10号窯式の古い段階に位置づけられており、その所属年代については8世紀後半に位置づけられる。

三重県

(13) 岡山1号窯跡

岡山古窯跡群は四日市市の西部、上海老町の「岡山」丘陵地に位置し、7基の窯跡が存在する。窯跡は6世紀後半から認められ（6号窯）四日市地区の古窯跡群のなかでも一中心地となっている。1号窯は1960年に三重大学歴史研究会が中心となり発掘調査されている。出土遺物は杯、榠、皿、盤、高杯、鉢、瓶、壺などのほか、鏡、陶塔（瓦塔）平瓦、などが発見されている。⁽⁵⁵⁾

窯跡の所属年代については、1号窯の器種が猿投窯の鳴海32号窯式にきわめて類似することなどから、8世紀後半に位置づけられる。

福岡県

(14) トギバ窯跡（御祖神社窯跡、山方里窯跡）北九州市小倉南区朽網に位置する。天鏡寺山窯跡群の南方山麓にあたり、付近には御祖神社窯跡、山方里窯跡、洗子窯跡など8世紀以降の須恵器窯跡が集中して存在する。御祖神社窯跡、山方里窯跡は未調査であるが瓦塔が表記されている。

1967、1968の両年にわたって、小田富士雄氏らが中心となり発掘調査が行われた。窯跡の報告は1977年の天鏡寺山窯跡群の調査報告書に、他の朽網地区の窯跡の資料とともに取り上げられている。⁽⁵⁶⁾

トギバ窯跡群は3基の窯跡の存在が確認されている。瓦塔を出土した窯跡は第3号窯跡であり、窯体、灰原が完掘された。窯は第1次床面と第2次床面にわかれ、瓦塔は上層出土遺物（第2次換窓面）に含まれる。上層出土の須恵器には杯（無台）、枕（有台）、皿、盤、瓶、片口などがある。瓦塔は円形、方形の屋蓋部の破片がある。断面方形の粘土紐を中央の凹孔から放射状に貼り付け、丸瓦列を表現している。特異な形態を持つ瓦塔であり、この形態は御祖神社窯跡、山方里窯跡の表記資料にも共通した特徴である。

本窯跡及び山方里窯跡の所属年代については8世紀後半に位置づけられており、御祖神社窯跡については8世紀中葉の操業が考えられている。⁽⁵⁷⁾

以上、瓦塔を焼成した窯跡について、主にその器種構成に注目しながら概観してきた。從来から知られてきた遺跡が多いが、このようにしてまとめてみるといくつか興味深い点が浮かび上がってくる。

まず第一に、これまで指摘されてきたことであるが、窯跡の分布は瓦塔そのものの集中域である関東・北陸・東海地方に多いということ。ただし瓦塔を出土した窯跡の絶対数が少ない現在では全国的な窯跡分布の傾向などについては不明な点が多い。

第二にこれまで知られていなかった地域に瓦塔を生産した窯跡の存在が確認される例が増えてきていること。宮蒲沢窯跡は長野県内ではじめての窯跡の発見であり、石川、富山などでは從来、池崎窯や坂山窯が知られてきたが、鳥屋窯跡群の花見月遺跡や射水丘陵の明神遺跡などが調査されるに及んで、同じ地域内でも複数の生産遺跡が存在することが分かってきている。

第三に所属年代については8世紀後半から9世紀前半に位置づけられるものがほとんどであること。

第四に須恵器窯での生産がほとんどであるが、一例のみ土坑での焼成が認められること。瓦塔が須恵器の窯跡で焼かれるということは從来当然のこととして考えられてきた。今回まとめた資料でも須恵器窯跡から須恵器とともに出土したもののが圧倒的に多い。焼成についても報告書により知ることができるものについては須恵質の瓦塔がほとんどである。高崎氏の瓦塔の經年によれば9世紀以降（III期以降）の瓦塔は土師質のものが主流となるが、土師質の瓦塔の生産（焼成）については

これまでほとんどふれられることができなかった。

ここで注目されるのが、焼山発跡群原A瓦塔焼成土坑である。管見によれば、須恵器窯以外の瓦塔の焼成遺構としては唯一のものであり、出土した瓦塔は土師質ある。塔と窓の破片があり瓦塔以外の遺物は検出されていない。類例がなく、本遺構のみで判断することはできないが、ここでは、瓦塔の焼成が須恵器窯に限られるものでないこと、土師質の瓦塔の焼成については構造的な登場をつかわず、土坑等の施設で行われた場合もあることを指摘しておきたい。⁽⁵⁸⁾

第五に伴出遺物についてである。須恵器窯であるので当然であるが、いずれの窯も食器類をはじめとする須恵器が中心をなす。瓦を併焼する窯は少なく、埼玉県南比企窯跡群、三重県岡山1号窯跡などに限られる。(埼玉県内の窯跡では南北比企窯跡群以外の窯跡でも瓦を伴う例が多く、他地域に見られない特徴である。) さらに、池崎窯跡の九輪などの例を除けば、伴出した須恵器に仏龕写しの器種が多いとか、仏具が出土しているというような例は少ない。むしろ、土馬・土鈴などの祭祀具をともなう例が目立つ。(福山窯、稻田山13号窯、折戸80号窯など) 瓦塔がこのような祭祀具と一緒に施かれていた点が興味深い。⁽⁵⁹⁾

V まとめ

最後に、これまでみてきた他県の窯跡の資料をふまえ、菖蒲沢窯跡の瓦塔・須恵器生産の特質について考えてみたい。

菖蒲沢窯跡との関連でいえば、石川県池崎窯跡、富山県福山窯跡、愛知県折戸80号窯などの特殊な器種構成は注目に値する。池崎窯跡は瓦塔のほかに鳥形土器、九輪などを焼いており、須恵器についても、高杯、有台鉢などやや特殊な器種がみられる。福山窯跡についても、土馬、土鈴が瓦塔とともに出土しており、その特殊な器種構成から、同じ郡内の窯跡群のなかでもことなった役割をもつ窯であるとの指摘もある。⁽⁶⁰⁾ 折戸80号窯はミニチュア土器、多口瓶などに代表される豊富な器種構成をもつ。池崎、福山窯については、いずれの窯跡とも同一地域内の他の窯跡からやや距離をおいている点も興味深い。

しかし、瓦塔を焼いた窯が特殊な器種構成をもつ例ばかりではない。美濃須衛古窯跡群や明神窯跡などでみたように、同地域の同時期の窯とはほとんど変わらない一般的な器種構成をもつものもある。また、特殊な器種構成をもつからといってただちに供給先を寺院等に限定できないであろう。⁽⁶¹⁾ 菖蒲沢窯跡をはじめ各地の瓦塔焼成遺構をみても瓦塔以外に瓦、仏具や仏器が確認されているような例は少ない。近年、長野県内においても集落遺跡からの瓦塔の出土例が増えてきており、菖蒲沢窯跡の場合もその遺物の供給先については寺院等に限定せず、集落遺跡も含めて考えていく必要があろう。

地域も時期も異なる遺跡を瓦塔の出土という点のみで、簡単に結び付けることは危険である。しかし、瓦塔のような一般の食器類と異なる特徴品(大量に生産せず消費地がある程度限定されるもの)については、短期的な需要に応えるような、生産地が存在することは大いに考えられる。瓦塔

とともに焼かれた須恵器についても、このような特別な需要を想定するならば、ある器種の割合が高かったり、他にみられない特殊な器種が存在する場合も出てくると思われる。

貯蔵形態の独特な口縁帯をはじめとする、菖蒲沢窯跡と美濃須衛古窯跡群の須恵器の類似性についてはすでに述べてある。⁽⁶²⁾また、渡辺博人氏によれば、菖蒲沢窯跡の大部分の須恵器については美濃須衛窯の須恵器工人の直接的な移入を想定しなければならないほど技法、形態上の共通点が多いことが指摘されている。⁽⁶³⁾瓦塔、須恵器などの短期的な需要のために、美濃須衛窯の工人が招来され、その生産にあたったとも考えられる。このような菖蒲沢窯跡の在り方は、地方における須恵器窯成立の背景を考える上でも、一つの特徴的な例として注目されよう。

以上、菖蒲沢窯跡について、「瓦塔の生産地」という側面から検討してきた。筆者の力不足からその器種構成に限定して、他の瓦塔生産窯と比較しながら考察を進めてきたが、今後、窯の構造や瓦塔の特徴などについても注目しながら、窯の系譜等について再検討していくなければならないと考えている。

最後に、小稿をまとめるにあたっては多くの方々にお世話をになった。とくに、菖蒲沢窯跡の資料についてまとめる機会を与えてくださった塩尻市平出考古博物館の小林康男氏、島羽臺彦氏、日頃から指導・助言をいただいている牛山佳幸先生、鶴長野県埋蔵文化財センター諸氏に感謝申しあげたい。また、以下の方々からご教示・ご協力をいただいた、お名前のみを記してお礼をしたい。

小林高航、佐伯安一、岡本淳一郎、土肥富士夫、善端直、渡辺博人、藤枝裕昌、井原今朝男、岩沢浩、原明芳、川崎保、広田和樹、山田真一、小平和夫、千野浩、久田正弘

註1 出河裕典 1992年「駿河遺跡出土の瓦塔について」『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・木澤遺跡・柳田遺跡・稻添遺跡』長野市教育委員会

近年の調査で北信地方を中心に出土例が増加しており、未報告例を含めると現在14地点をこえている

註2 林和男 1985年「信濃の瓦塔」『信濃』37—4

註3 塩尻市教育委員会 1991年「菖蒲沢窯跡」

註4 石村喜英 1966年「瓦塔破片の意義—埴輪標識説私考—」『日本考古学論叢』

註5 瓦塔の性質をめぐる論議では、石村氏の埴輪標識説に批判的な坂詰秀一氏も「瓦塔についての一考収」(『貝塚』79—1958年)では「…その意義に関する考察の場合には無性出土例はさして問題にする認めず…」として、まず寺院跡などの出土例から考察を進めるべきであるとしている。

註6 高崎光司 1985年「瓦塔小考」『考古学雑誌』74—3

註7 坂詰秀一 1950年「比企丘陵における密集閑保遺跡の調査」『歴史考古学の視角と実践』によれば、立正大学考古学研究室による南比企駒跡群の発掘調査は1957年から61年にかけて、龜の原(玉川村)、新沼・虫草山・山田・宮の前(湯山町)などの各密集遺跡で行われた。

註8 坂詰秀一 1964年「東国における須恵器の生産とその背景についての考察」『立正大学文学部論叢』19

坂詰秀一・倉田芳郎 1967年「古代・中世窯業の地域的特異(東北・関東)」『日本の考古学』VI 歴史時代上

註9 四日市市教育委員会 1960年「岡山・弓削窯窯跡調査報告」

1965年『砺波市史』

1970年『七尾市史』

北九州市埋蔵文化財調査会 1977年『天惠寺山系跡』

註16 石村喜英 1973年『埼玉県内における瓦塔(下)』埼玉文化史研究5

石村喜英 1976年『瓦塔』『新編仏教考古学講座』第3巻

註17 特に埼玉県児玉郡美里村の東山道跡をはじめとして、斯とともに「堂」形状の製品が検出される例が増加している。

横川好富 1990年『埼玉県美里村出土の瓦塔』『考古学雑誌』66-2

註18 松木修吉 1993年『小さな建築』『文化財論叢』

註(6) 文獻

註19 計(2) 文獻、鈴木健雄 1987年『平安前期の開墾と瓦塔』『秋山京遺跡』など

註20 奈良国立文化財研究所飛鳥資料室 1984年『小地図の世界』

註21 上村和直 1991年『瓦塔の性格』『學刊考古学』34

註22 高崎氏によって、瓦塔にも考古遺物特有の形態や技法の地域差がみられることが明らかにされている。(註6文獻) 瓦塔の供給範囲や工人集団の特色等を考える上で、この地域差からのアプローチは特に重要である。

註23 計(6) 文獻

高崎光司 1990年『瓦塔資料』『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』7

註24 中島豊晴・河西清光 1964年『松本市田原町の古窯跡の調査』『信濃』16-4

河西清光 1966年『長野県松本市田原町の沢古窯跡の調査』第8・24古窯跡発掘』『信濃』17-9

盛源藤原昌 1969年『長野県松本市田原町区田原池における瓦窯跡発掘の調査』『信濃』21-12

註25 松本平の須恵器縫の分布等については庄田和穂氏の御教示による。

註26 小平和夫 1990年『古代の土器』『中央道長野鉄道文化財発掘調査報告書』4

註27 計(20) 文獻

註28 山田真一氏の御教示による。

註29 長野県埋蔵文化財センター 1990年『中央道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書』6

註30 瓦塔の形態の特徴について簡単に述べておきたい。まず、基盤は上部の四辺に菱形の孔が施され、透子状の縫を組み込める他に例のないつくりになっている。また勿層軸部は一般的には方三間で中央に入口部をもつが、本例は方二間で開口部(入口部)が全くない。斗模は半干部分が写実的に表現されている。一手目、二手目、尾垂水が僅削に作られ縫部の縫に組み込まれている。屋蓋は柳状粘土を貼りつけ丸瓦を表現している。裏面は二重構成である。

註31 原明芳氏の御教示による

註32 奈良国立文化財研究所 1993年『埋蔵文化財ニュース』41による硯の基礎によれば鳥形町は高砂県小杉流通、高砂町は高砂4号窯、篠岡6号窯、奈良県平林宮、左京八条三坊、興福寺、慈妙寺、圓山県邑久1・2号窯、などからの出土が報じられている。(註3文獻による)

註33 栃木県教育委員会 1988年『栃木県生産遺跡分布調査報告書』

註34 烧山町教育委員会 1991年『遺跡の立地と環境』『需追跡』

高橋一夫 1991年『埼玉における古代窯窯の展開』『埼玉考古学論集』創刊号

註35 烧山町教育委員会 1988年～1992年『焼山窯跡群』I～IV

註36 計(7) 文獻

註37 計(7) 文獻には瓦塔の特徴等についての記載はない。計(6)文獻による。高崎氏によれば、「本來須恵器に焼かれるべきものが何らかの原因により逆元炎焼成に至らなかったため土御賀になったと考えられる」としており、土御賀を土御器のイメージでとらえるべきではないとしている。

註38 計(28) 文獻(焼山町教育委員会1991年)による

- 註33 註(28)文献(福山教育委員会1991年)による
- 註34 註(29)文献
- 註35 高崎光可 1991年「瓦塔焼成土坑」「福山窯跡群」III
- 註36 註(13)(鈴木1987年)文献
- 註37 西井龍信・安念幹俊 1990年「福波市史資料編I 考古」
- 註38 註(37)による
- 註39 射水丘陵地域研究会 1992年「射水丘陵地域研究報告」「大鏡」14
- 註40 小林高範 1991年「富山市明神遺跡出土の瓦塔について」「富山市考古資料館報No21」
- 註41 小林高範氏の御教示による
- 註42 註(40)文献
- 註43 水立雅朗 1988年「鳥屋窯跡群の概要」「能登のその他の窯の概要」「シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題 資料編」木立氏によれば「七尾市池崎窯は島原窯跡群から5km北側にあるため、同じ窯跡群の一つと考えができるかもしれない。しかし、分布状況からは今のところ孤立窯と考えざるをえない。」とされ、9世紀後半以降の「窯の拡散化現象」によるものとされている。
- 註44 土肥富士夫氏、普端南氏の御教示による。
- 註45 七尾市教育委員会 1985年「池崎窯跡」
- 註46 石川県立埋蔵文化財センター 1984年「花見月遺跡」
- 註47 註(46)文献。
川知誠 1897年「高松・押水窯跡群について」「宿京山遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 註48 田中照久 1988年「井生窯跡群」「シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題 資料編」
- 註49 北陸古代手工業生産史研究会 1989年「須恵器窯地名表」「北陸の古代手工業生産」
- 註50 各務原市教育委員会 1981年「福田山古窯跡群発掘調査報告書」
- 註51 被辺博人氏の御教示による
- 註52 名古屋市教育委員会 1986年「NN286号窯発掘調査報告書」
- 註53 日進町教育委員会 1978年「愛知県日進町折戸80号窯発掘調査報告書」
- 註54 報告書では、「灰釉多口瓶は彩繪陶器の花瓶の系譜をひくもので、仏器としての花瓶でというべきものであろう」としている。また、陶馬、附塔、ミニチュア品等を含め、宗教用具、祭祀用具が豊富であると指摘されている。
- 註55 四日市市教育委員会 1965年「岡山第3号窯発掘調査概要」
同 1971年「岡山古窯址群発掘調査報告書」によった。
報告書では1号窯、2号窯は、瓦、陶塔(瓦塔)、陶瓶などの出土から「古代寺院経営に密接した古窯」と考えられるとされている。
- 註56 北九州市埋蔵文化財調査会 1977年「天觀寺山窯跡群」
- 註57 佐藤浩司 1987年「奈良時代の須恵器と土師器—旧豊前園を中心として—」「東アジアの考古と歴史下」
- 註58 註(10)文献(石村1973年)において石村喜美氏は「土師製褐色瓦塔の場合も、恐らくこれらの窯工場がその窯業地において、別に窯を密閉しない焼成法窯による土師窯を構築して、焼成作業に從事し、その製品化を計った…」として、須恵器工人による登窯によらない瓦塔の焼成の可能性について言及している。
- 註59 土馬・土鈴については以下の文献を参考とした。
金子裕之 1985年「平城京と祭場」「國立歴史民俗博物館研究報告」7
金子裕之編 1988年「律令期祭祀遺物集成」
なお、註(53)文献によれば、折戸80号窯のミニチュア品についても祭祀用具とみられている。

- 註60 安念幹倫 1986年「佑德野窯跡群の摘要」「シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題」
- 註61 長野県内においては古代寺院の開墾例が少ないため、寺院における土器様相がいかなるものか明確ではない。よって瓦などがある場合を除いて出土遺物から窯の製品が寺院に供給されたかどうかを判断することは難しい。また、原明芳氏のご教示によれば、陶機を模倣した土器群、窯底盤は奈良時代を中心に県内の集落遺跡からある程度普遍的に出土しており、このような土器が直ちに寺院との関係を示すものとは思えないと。
- 註62 註(3)文獻
- 註63 渡辺博人 1992年「岐阜県美濃須賀古窯跡群の摘要」「大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の認問題」

挿図出典

- 第1図 長野県埋蔵文化財センター 1990年「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 結論編」の松本筑地の遺跡分布図を参考にし作成。なお、窯跡の分布については広田和穂氏のご教示をいただいた。
- 第2図 註(3)文獻より再トレースし作成。
- 第3図 註(3)文獻より作成。
- 第4図 註(29)文獻より作成。(一部改変)
- 第5図 註(37)文獻より作成。
- 第6図 註(43)文獻より作成。(一部改変)
- 第7図 註(45)文獻より作成。
- 第8図 註(53)文獻より作成。
- 第9図 長野県埋蔵文化財センター 1990年「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5 神戸・上二子・中二子遺跡」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 北条遺跡」
註(50)、(3)文獻より作成。
- 第1表 註(3)文獻より作成。
- 第2表 筆者作成。

追記

脱稿後2年以上経ており、瓦塔についての新たな発見や論考も多数発表されている。長野県内に限っても、瓦塔の検出例は著実に増え、現在20遺跡で確認されている。(拙稿「信濃の瓦塔再考」「信濃」47-4(1995年)ここでは、本稿でふれならなかった瓦塔の生産に関する報告・論考について簡単に記しておきたい。

- (1) 脱稿後、河西克造氏を通じて坂詰秀一氏より「瓦塔の製作年代」(『立正考古』19号1961年)を送っていただいた。坂詰氏はこの中で「従来、窯址より出土する瓦塔はその性格を論じる場合等開拓されてきたが、かかる態度は当をえていない」とし、その理由として「瓦塔出土窯址そのものの性格が、瓦塔注文者の性格を反映していると考えられる」からであると述べている。氏も窯跡を視野にいれた瓦塔研究の重要性について指摘されている。
- (2) 愛知県三好町歴史民俗資料館の安田幸市氏より、未発表であるが黒塗31号窯(O-10号窯式～I G78号窯式期)でも瓦塔が検出されていることを御教示いただいた。

瓦塔の生歴

(3) 三重県上野市教育委員会の中浦基之氏より1993～94年にかけて調査された御墓山跡の陶製仏殿（厨子）について御教示をいただいた。7世紀後半に位置づけられるとされるこの遺物が瓦塔と直接つながりをもつものなのか、今後注目すべき資料であろう。

中世四宮荘北条における居館と用水

—塙崎桟下居館址の発掘の成果と地籍図調査から—

宮脇正実

I はじめに	(2) 明治期の地籍図から見た「四宮荘」
II 桟下の方形館	(3) 「向塙」の想定ルート
(1) 発掘の成果	IV 「四宮荘」地域における水利の歴史
(2) 現在の字名・地割りから	と居館の位置付け
III 「桟下」方形館と「四宮荘（北条）」	(1) 字名から見た「四宮荘」
	V おわりに

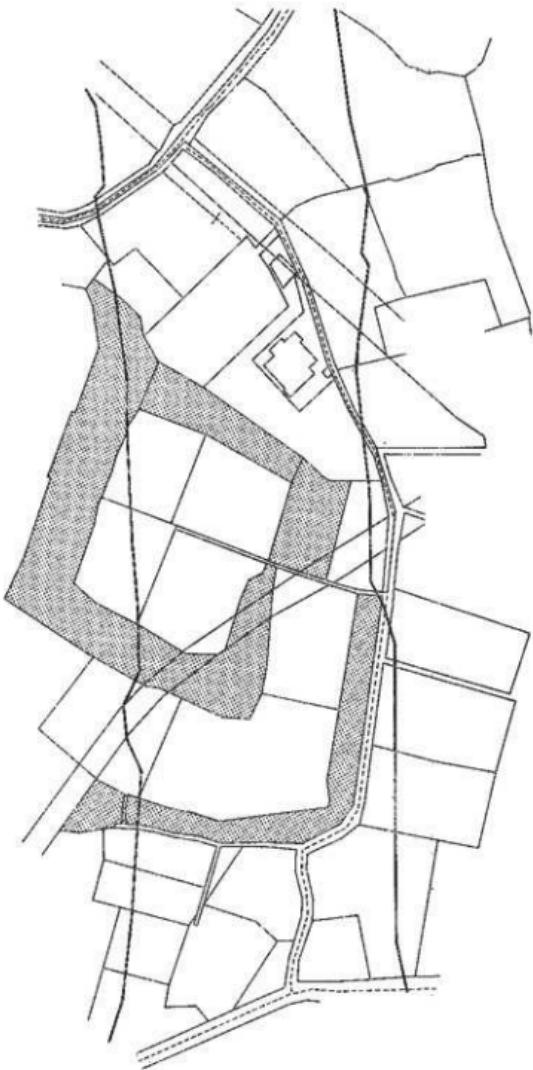
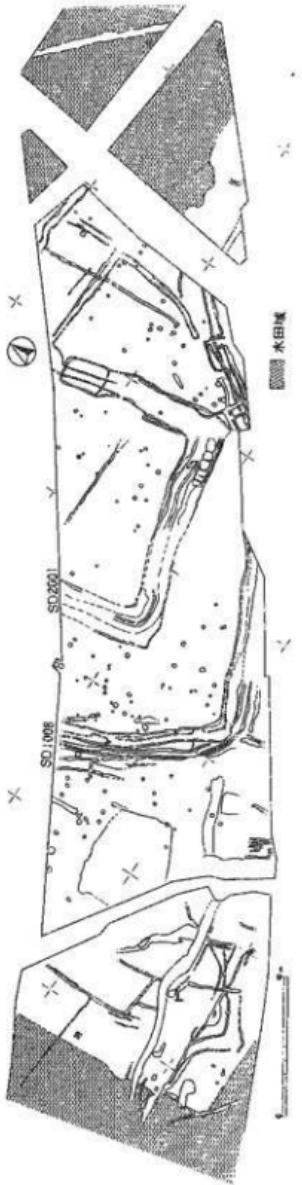
I はじめに

1988～1989年にかけて長野県埋蔵文化財センターで発掘調査を行なった石川糸里遺跡は、千曲川自然堤防西側の後背湿地部分に低湿地と若干の微高地をもつ地形が確認され、低湿地部分からは弥生時代後期以降連続と營まれた水田跡、また、微高地からは縄文時代・古墳時代・中世の3時期の居住域・祭祀域が検出された。

このうち、微高地の遺構については、古墳時代前中期（4C末～5C初）の祭祀域が検出され、堀10m以上の溝・土坑からは、おびただしい数の供獻用土器をはじめ車輪石・石鏡・匂玉・管玉・ガラス小玉等数多くの石製品を出土するなど、関係者の注目を集めめた。このような古墳時代の発掘の成果は各種の研究会でも取り上げられ、その性格についても多くの方々にいろいろな角度からのご意見・ご教示をいただき、調査報告書はいまだ刊行されていないまでも、その研究は進展してきているように思う。

しかしながら、この微高地の同一地点で營なされた中世の館跡についての研究は、県内ではまれな調査例であるにもかかわらず、まだほとんど行なわれていないと言ってよい。中世の居館、とりわけ方形館というと、小山清憲氏や峰岸純夫氏など文獻史学の研究者が指摘してきたように、灌漑用水支配の中核機能をもつものである、という見解が定説となってきた。もちろん、遺物・図面等も整理途上という中であるので、使える資料も限られてはいる。しかし、中世ということで、古地図・今まで残る字名等の地名など考古学以外の研究も合わせて考えることで、この微高地上（塙崎字桟下）で營なされた方形館の役割・館をとりまく社会的な背景、とりわけこの「桟下方形館」と用水について言及できないかと考え、本稿をおこした。

平安以後の遺跡



第1図 石川条里遺跡（左）と土地測量図（右）

II 拼下の方形館

(1) 発掘の成果

それでは、まず、発掘調査によって明らかになった点を整理してみたい。(第1図)

御長野聚落埋蔵文化財センター年報5・6の所見によれば、中世前半(12~14c)と中世後半(15~16c)の2時期に分けられる。中世前半においては「流水の認められる溝が確認」され、「大規模な水路回し事業が行なわれた可能性」を示唆しているが、方形館としては成立していない。そして、中世後半になって、「防衛のためと考えられる溝をもった館が建築され、方形館が成立」したのではないかとしている。これは、横口定志氏の東園において「方形館が一般化するのは15世紀に入ってからである可能性が高い」⁽²⁾という見解にも通じるところがあり、興味深いところである。

この館跡は、二重の溝に区画される。内側の溝(SD2001)は上幅約10mを測り、ほぼ方形を呈している。その外側を、幅約4mの溝(SD1008)が取り巻くが、こちらは不整形である。また、このSD2001の区画内及びSD1008とSD2001との間には多くの井戸址や柱穴を検出している。柱穴等遺構の総合的な分析がされていないので、どの程度の建物が存在したかは不明であるが、梯子等の木製品、青磁碗、白磁皿、また、古瀬戸瓶、内耳錦、カワラケ等が出土し、有力な主の存在を想像させる。

(2) 現在の字名・地割から

そもそも、この方形館の存在した「拼下(くねした)」とは、どういう意味を持つ字名であろうか。

『塙跡村史』によれば、「くね、つまり木の櫛のことで、垣、やらいの意であった」らしく、「中世小笠原駿屋敷や、源氏氏屋敷等の櫛のまわされていた所にあたる」とされている。また、字「拼下」の中の小字に「壠ノ内」が存在する。字名の中には、その語源が古代・中世に遡り、当時のその地の様子を語ってくれることがあることはよく知られていることではあるが、この「拼下」及び「壠ノ内」は発掘調査の成果により、その地名の意味を具体的に示されたわけである。

さらに発掘直前の地割りを示す土地測量図を覗ねてみると、発掘直前の水田の地割と中世方形館のプランがほぼ一致することがわかる(第1図)。このことから、塙跡池区においては、中世景観を示すソイルマークが良好に残存しており、これと中世のなごりと思われる字名を手懸かりにすれば、「拼下」の方形館が存在しただろう「四宮莊」の一部が復元できないだろうか?

III 「拼下」の方形館と「四宮莊(北条)」

(1) 字名から見た「四宮莊」

四宮莊の領域内の様子を考えるにあたって、現在残っている団扇で最も古いだろうと思われるものは、法務局に保存されている明治23(1890)年に作成された地籍図である。もちろん「拼下方形

館」が存在しただろう15~16世紀から400~500年ほどの時間的な隔たりは大きいと思うが、それにしても中世における農村風景を復元できる要素はありそうである。

方法論としては、まず第一に、字名を手帳かりにすることで、城館開連字名を中心にして、前面に当時の様子を推察できるソイルマークが残されているいかを探すことである。

もう一つは、中世四官莊の水利を、これまでの水利の歴史を遡ることで明治期の水利の状況をもとに推察できないかということである。.

それでは、まず、四官莊の字名はどのようにになっているだろうか。

第2図は、明治10年に作成された塩崎村の絵地図に筆者が一部加筆したものである。スクリートーンが示しているのが四官莊北条にあたる地区で、館に開連がありそうな字名である。このうち、6で示されたのが「耕下」である。

1~4は直線状にそろなっているが、これらは千曲川の自然堤防上にあたり、集落域となる。発掘の成果で弥生時代より集落が形成されていたことがわかってきており、3の「殿屋敷」あたりは、中・近世にわたり有力な武士の屋敷地となっていたのだろう。

また、5、4、7、8と開連させてみると、いずれも聖川岸に位置し、中でも5の「堀ノ内」は聖川と千曲川との合流点に位置する。千曲川が大きく屈曲する部分でもあり、千曲川の水運に開連がありそうな地點である。井原今朝男氏や海津一朗氏も指摘されているように、5の「堀ノ内」はまさに「大道や河川など外界に通じる結節点にあたる部分に立地」しており、「水陸交通機能の要衝であり、市や宿がたち、職人・技術者が集住する町場であった」⁽³⁾のだろう。

それでは、6の「耕下」は、どのような視点で考えることができるだろうか。筆者は7の「堀内」、8の「西沖(小字〔堀ノ内〕)」と開連してとらえたい。第3図からわかるように、中世四官莊は、7、8の地点から聖川より水を引き、「向堀」として四官莊北条の多くの部分を潤していたのである。「耕下」から辺が約50mの方形館が検出したことにより、この館が堀水、とりわけ「向堀」と関連したものであるという視点から考えてみたい。

(2) 明治期の地籍図から見た「四官莊」

第4図は明治23年当時の四官莊北条にあたる地区的地籍図⁽⁴⁾である。これを見ると当時、「耕下」方形館の発掘された場所は、中世の方形館の面影をよく残した池割りになっていることがわかる。二重の溝の部分は細長い水田として利用され、溝で区切られた部分は若干高いためであろう、古くは畠として使用されていたようである。

それでは、その他の中世の館等の面影を地割りに残しているところはないだろうか。

筆者は、まず、「向堀」のルート上でもある「堀内」地籍を挙げたい。「堀内」の南西隅にやはり



写真1 塩崎城見山蔵から見た「耕下」地区



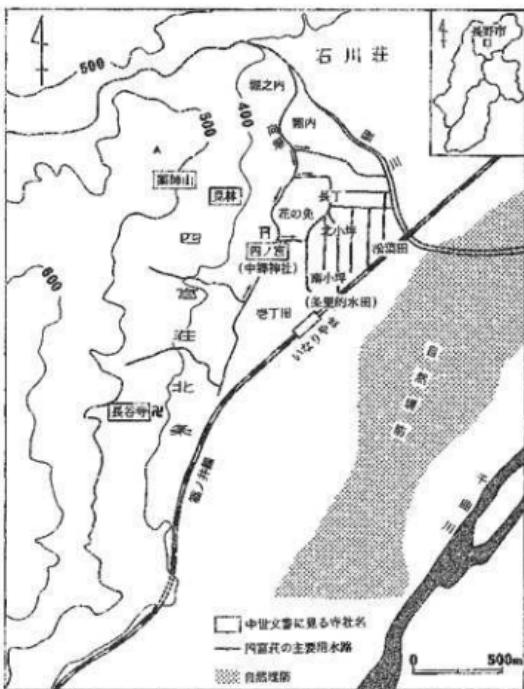
第2圖 仙崎村字區面圖

明治10年当時の絵地図に加筆「長野県町村絵地図大鑑」より

細長い区画の水田で囲まれた部分が確認できる。南半分は「池下」地籍に入り、区画もそのような姿を呈しないが、筆者の考えでは、1695（元禄8）年に川越池が築造されたおりに池の真下である南部分の地割りが大きく変わったものと思う。そう考えると、一辺が約50mほどの方形状の区画が

想定でき、これが方形館ではなかったかと考えられる。

次に、この「園内」と隣接し、「向堰」の取水地点にも極めて近かったと思われる「西沖」地籍を挙げたい。筆者は、館が存在した所を「西沖」の西奥のところに想定したい。現在そこに住んでいる方にお聞きしたところでは、「西沖」の西部にあたる山手が「堀之内」という小字をもったところだと言う。また、地割りを見ても細長い区画の水田に囲まれた一辺が約50mほどの部分を想定できそうである。さらに、その部分のすぐ上を明治23年現在で用水路が通り、それをたどっていくと先ほどの「園内方形館」の候補地の真上につながっている。筆者は、これを中世にも存在していた「向堰」と考え、さらに行けば「城下方形館」につながっていったのではないかと考える。



第3図 四宮莊北条の復元図（長野市篠ノ井）
山麓に莊鎮守など寺社が位置し、その前方の湿地に条里的水田が分布している。

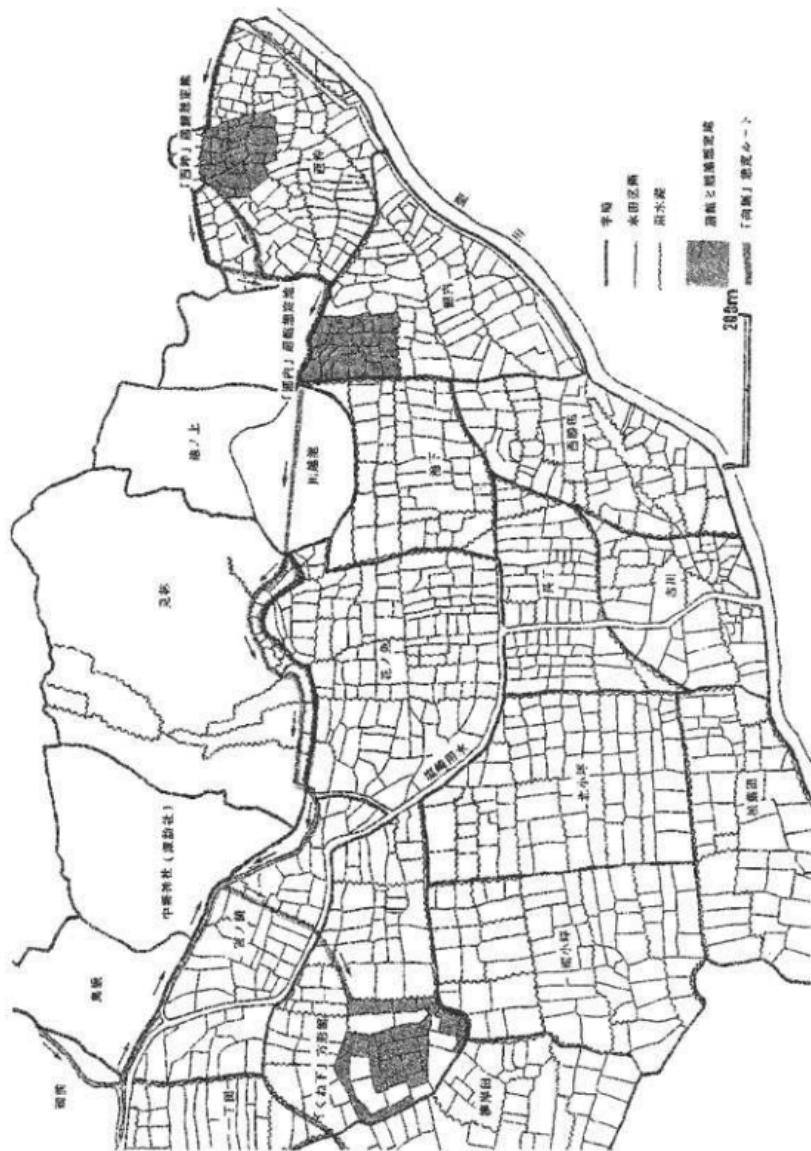
「長野県史 通史編 第2巻中世！」より



写真2 篠川（取水口付近）



写真3 篠川の塩崎地区への取水口



第4図 明治23年当時の水田区画と用水

(3) 「向堰」の想定ルート（第4図）

「向堰」の想定ルートとして、まず、聖川取水口から明治23年当時も用水路として使用されている「西沖」地区の西境を通る。そうすると、「西沖」方形館にまず、流れ込むことになる。そこから、明治23年当時の用水路に従って南及び東にたどっていくと、「内内」方形館の想定地に流れ込むことになる。そこから、現在の川越池を通り「見林」地区の東境の水路を通り、ここで、沢底を流れる小流路の水をも集めて中郷神社の東、「宮の前」へ流れ出る。ここで、南の白井沢から北へ向かって流れてきた用水と合流し、「耕下」方形館の方向へ流れて行ったのではないか。残念ながら、明治23年当時はすでに塩崎用水（1826年築造）によって水系が大きく変化しており、塩崎用水以東についてはルートが想定できないが、「耕下」方形館が存在している以上、「宮の前」から「耕下」へ用水路を引いたことは十分に考えられる。

また、複数の居館が用水によって結ばれている事例として、橋口定志氏が、群馬県高崎市の寺ノ内館と矢島館の例を挙げており、「居館と灌漑用水との密接な関係があることは疑う余地がないものと思われる」⁽⁵⁾と述べている。

IV 「四宮莊」地域における水利の歴史と「耕下」方形館の位置付け

次に中世四宮莊（北条）の水利の様子を考察してみたい。

かつて「塩崎三千石」といわれ、大郷・大村であった塩崎地区であるが、用水にはかなり苦労したようである。それは、近世になり世の中が安定すると、この地区に次々と堰や溜池を構築し灌漑に並々ならぬ力を注いだ歴史を見てもわかる。

- ・1618（元和4）年 松節地区開墾
- ・1656（明暦2）年 明暦用水築造
- ・1660（万治3）年 子の年堰築造
- ・1663（寛文3）年 刈年堰築造
- ・1667（寛文7）年 新堰築造
- ・1680（延宝8）年 猪平池築造
- ・1695（元禄8）年 川越池築造
- ・1706（宝永3）年 稲荷山堰築造
- ・1826（文政9）年 塩崎用水築造

（以上、「塩崎村史」より）

「塩崎村史」によれば、これは5口の新堀で24石、猪平池で約5石、川越池で約10石の澄紙がなされたとしている。それ以前の近世の初めでは、「田方900石およそ90町歩」であり、「塩沢堰と猪平の湧水と他は天水に頼るばかりの旱損の村であった」ようである。

その塩崎地区の北部分を占める中世四宮莊（北条）の水田を潤していた水系は、聖川から引かれた向堰と、長谷寺北側の白井の尾根を流れる水系の2つに分けられるようである。しかし、聖川は

別名「石川」と呼ばれるほど水量の少ない川で、特に夏期は渇水となることが多い。この聖川から、西宮地区の他に、対岸の上下石川・二ッ柳地区へも用水が引かれていたので、しばしばその分水をめぐっての争いがあるほどで水不足は深刻であった。1617(元和3)年の水争いで塩崎の者一人が殺され、その結果分水の割合を変えたという歴史を持つほどである。

また、白助の尾根を流れる水にしてもその水量は微々たるもので、「石川条里」の南を占めるこの地区を潤せたとはとても言えない。

こう見て來ると、中世聖川より引いた「向堀」に沿って居館に関する字名が存在するのも理解できる。中世西宮莊にとって、この「向堀」は生命線であり、各地に置かれた居館は限られた用水の分水をコントロールしていたのではないだろうか。「西沖」方形館は、聖川よりの取水を管理し、また、「西内」方形館は「向堀」を東方と南方へ分水する役目があったのではないか。元禄期になってこの地に川越池が築造されていることも、この地が水を集めやすく、また、用水の分配に関わる場所だからではないだろうか。そして、この「桟下」方形館も、「向堀」の最後の管理場所として、また、「白助水系」の管理場所として位置し、両用水を統合的にコントロールしていたのではないかと考える。そして、この築高地に營なまれた「桟下」方形館に集められた水は、さらに東方の「南小坪」や「柳岸田」地区の水源となり、用水として送られていったのではないかと考える。

さらに、井原氏や海津氏が指揮されているように、⁽³⁾交通の要衝という面から考えた場合、3ヶ所とも街道のルート上にあり、特に「桟下」は鳥坂峠との合流地点に位置し、また「西沖」も健坂との合流地点に位置している。この2地域はともに「堀ノ内」という小字を持っており、ここに存在した館は峠と幹線道路とを結ぶ、交通の要衝であったことも興味深い。

V おわりに

塩崎地区は、御長野県埋蔵文化財センターの大規模な発掘調査の結果、その水田耕作は弥生時代の中期にまで遡ることが確認されている。しかし、水田耕作の歴史が古いにもかかわらず、中・近世において、なお、その水田に苦労している歴史がある。この稿では、なぜ、「桟下」にあのような「方形館」が營なまれたのか、現在でははっきりしていない当時の幹線水路の「向堀」の流域ルートを想定して、「方形館」と「向堀」との関係を割り出そうと試みた。塩崎居水等の用水や溜池の築造により、塩崎地区の水系も大きく変化はしているものの、塩崎用水以西はそれほど環境の変化がなく、ほぼ中世以来の景観をとどめているのではないかと思う。

しかし、資料の不足と筆者の勉強不足により、不十分な展開になってしまったことは否めない。特に、中世西宮莊に関する文献にあたることができず、この「桟下方形館」が成立していただろう15~16世紀の西宮莊の歴史的背景に触れることができなかった。このことは、現在論争になっている東園における方形館の出現時期にも関わる問題⁽⁶⁾であろう。また、近在する塩崎城・赤沢城・近年全面発掘された見山砦等、山城との関係も興味深いところである。今後、御長野県埋蔵文化財セ

ンターの「石川条里」遺跡に関する調査報告書等が刊行されることによって、各時代の水田経営の実態も次第に明らかになっていくであろうし、中世における、西宮莊北条の景観も明らかになっていくものと思われる。

最後に、このような拙拙な内容で記念論文集の紙面を汚してしまったことに恐縮しながらも、筆者が当センターに在職中に発表調査に携わることができた「堀下方形館」について論及する機会を与えていただいたことに深く感謝している。また、井原今朝男・牛山住幸・根島正樹各氏はじめ中世勉強会の諸氏、また、河西克造氏はじめ御長野県埋蔵文化財センターの諸氏には、貴重な御指導・御教示をいただいた。末筆ながら、感謝の意を表わし、本稿の結びとしたい。

- 註1 小山靖彦氏は、「鎌倉時代の東国農村と在地領主制」(1968) のなかで常陸國真壁郡の事例をもとに、また、峰岸純夫氏は、「東国武士の基盤」(1973) のなかで上野國新田莊の事例をあげて、「堀之内体制」論を展開した。これにより、「中世前期東国村莊の中堅には在地領主の居館(=方形館)が占地し、その堀は基盤用水とつながって、村落に対する推進用水支配の中枢機能を持つもの」と位置付けた。
- 註2 桥口定志氏は、一連の論文の中で考古学的な事例をもとに、「方形館=中世前期武士居館=堀之内」という従来の定説(=「堀之内体制論」)に疑問を投げかけ、東国における方形館の出現を「14世紀とあたりを転換期として、それ以後に方形館の本格的な層面を考えるが、現時点では最も確かな理解のしかたである」とし、「(方形館)一般化するのは15世紀に入ってからである可能性が高い」「(方形館)はいかに成立するか」(1992)としている。
- 註3 井原今朝男氏は、「(堀之内の)景観は周囲に水堀を伴うというよりも、堀や用水堀に接しながらも大道や阿川などの交通機関との関連が密接であった」(『中世城館と民衆』1988)としている。また、海津一朗氏も、東国武士の堀之内と村落との位置関係について「その多くは村落の境界にあり、それも大道や河川など外界に通じる結節点にあたる部分に立地している」とし、さらに、「これら結節点は水陸交通機関の要衝であり、市や宿がたち、商人・技術者が集まる町場であった」(以上、「東国・九州の郷と村」1990)としている。
- 註4 これは、長野法務局に保管されている明治23年の地籍図を写真に撮り、それをもとにトレースしたもので、若干の誤差を含んでいる。
- 註5 桥口氏は、「方形館はいかに成立するか」(1991)で、西上野長野病院のこの2つの居館の外堀が灌漑用水によって結ばれていることを挙げ、「中世後期の東国における方形館を核とした地域支配体制を軍事的側面からのみ一面的に捉えることはできない」とし、居館と灌漑用水との密接な関係を示唆している。
- 註6 桥口氏の一連の論文(註2) 参照。

参考文献

- 石井 進 1977 「中世居館と河川」 千曲15号
- 井原今朝男 1986 「中世村莊の形勢」「長野県史」 通史編中世1 第6章
1988 「中世城館と民衆生活」「月刊文化財」 301
- 海津 一朗 1990 「東国・九州の郷と村」 日本村落史講座2「景観」 雄山閣
- 小山 靖彦 1968 「鎌倉時代の東国農村と在地領主制」「中世村莊と莊園経営」 京大出版会
「塙崎村史」 1971
- 御長野県埋蔵文化財センター 1988・1989 「御長野県埋蔵文化財センター年報5・6」
- 長野市教育委員会 1992 「石川条里遺跡調査報告書(5)」

- 橋口 定志 1986 「絵巻物に見る居館」「生活と文化」豊島区郷土資料叢書
1987 「中世居館の再検討」「東京考古」
1988 「中世方形館を巡る翻訳題」「歴史評論」
1990 「中世東国の中世居館とその脈絡」「日本史研究」230
1991 「方形館はいかに成立するのか」「争点日本の歴史4」新人物往来社
1992 「中世方形館の形勢」「季刊考古学」39号 墓山閣
- 橋口定志・広瀬和雄・峰岸純夫 1990 「解説中世居館」「季刊自然と文化」30
- 広瀬 和雄 1986 「中世への胎動」「岩波講座日本考古学6 岩波書店
- 峰岸 純夫 1973 「東国武士の基盤」「莊園の世界」東京大学出版社
- 八巻與志夫 1981 「水利慣行と地」「日本雅史398号

善光寺平（西南部）の中世城郭

—縄張りによる構造的把握と武田・上杉氏の影響について—

河西 克造

I.はじめ	①唐崎山城 ②鷺尾城
II.本稿の目的と方法	VI.城郭の特徴から見た戦国期、武田、上杉氏侵攻の前後
III.地形と中世城郭の立場	1.城郭の特徴と外部勢力の影響 2.信濃国人系城郭と武田・上杉氏の城郭改修
IV.善光寺平（西南部）の歴史的背景 —15・16世紀—	VII.おわりに
V.縄張りから見た中世城郭の構造 ④塙崎城 ⑤塙崎城見山城 ⑥赤沢城 ⑦小坂城 ⑧屋代城	

I はじめに

奈良国立文化財研究所で地方公共団体の職員などを対象に、埋蔵文化財に関する技術的な研修を毎年実施しているが、最近この研修のなかで中・近世の遺跡関係、とりわけ城館遺跡の課程には他課程を卓越する希望者がいることを耳にした。このことは、各地で比較的大規模な城盤跡（城郭）の調査が全般なくされ、日本考古学における「城郭遺跡」の占める比重が増えつつある状況を表わしている。また、従来の原始・古代を中心とした研究姿勢が「中世城館跡の認識不足」を生み、発掘担当者の「城盤跡調査の方法論の会得」という反動で如实地に表われた事実を指摘できる。⁽¹⁾

城郭に発掘調査というメスが加えられ、その成果が城郭研究に及ぼす影響が大きいことは、城郭研究の中核を担ってきた村田修三氏が、「少なくとも十年後には城郭研究の主な担い手は考古学者に移ると思います。そして城郭研究家は後景に退くであろうと思います。」⁽²⁾と述べたことに代表される。しかし将来、発掘調査が城郭研究の主たる担い手になる状況下となつても、城郭研究者による縄張り研究（論）の存在価値が減少することはなく、むしろ、両者により充実すると考えられる。

また今日の城郭研究は、従来の個別実証的な研究姿勢と異なり“城郭・城下町の一体的把握”により、縄張り図、文献史料、絵画資料、地名、地図などを用いて、城郭の構造と城下町の地割りなどを解明する方法が一般的になりつつある。⁽³⁾これがいわゆる「学際的研究」である。したがって城郭の研究は、城郭史（縄張り研究）と文献史学により城郭の構造を把握し、発掘調査でその実態を解明する方法論が普遍的になるとと考えられる。

II 本稿の目的と方法

このような、中世城郭研究の新たな波が寄せるなか、筆者は平成3年度に長野市篠ノ井塙輪に所在する塙崎城見山砦の調査を担当した（第4・5図）。城郭は尾根先端部に土堤が全周する主郭を縱く、いわゆる「小規模城郭」に類し、本城跡で中世山城の全面発掘という貴重な経験をした。現在、報告書刊行に向けての整理作業中であるため、調査の成果については報告書を参照されたく、⁽⁴⁾本稿では、本城郭が立地する塙崎地域とそれを取り巻く善光寺平西南部に立地する中世城郭（山城）の構造を、網張りから把握して特徴を抽出したい。

最近、学際的研究の成果により、城郭の構造と地域性が解明されつつあるが、本県（信濃）では周辺各地と比較できる程の資料の蓄積がなく、城郭の全体像と地域性は未だに把握されていない状況である。⁽⁵⁾そのため、本稿は地域性を導くための一手段であり、善光寺平を対象とした城郭の解明に向けた試論である。

さらに、本来ならば善光寺平全体を対象



第1図 善光寺平（西南部） 石川・塙崎地域周辺の
全景
(左上・塙崎城見山砦)



第2図 善光寺平（西南部）の城郭分布図

- 1 小坂城 2 赤沢城 3 塙崎城 4 塙崎城見山砦 5 五代城 6 鹿尾城 7 廣崎城
- 8 稲荷山城 9 石川条里遺跡（居館） 10 石川城 11 東の城 12 西の城 13 和田城 14 大塔城
- 15 生仁館 16 屋代古城 17 天城城 18 鞍骨城

として城郭の構造と歴史的背景との関連性を論すべきであるが、現在、筆者がこの地域での網張り調査を実施している段階であり、不明な点も多々あるため、これについては別稿に期す、ことにして、本稿はその序文的な位置づけとしたい。

なお、網張り図作成のための踏査は、平成3年11月から平成5年1月までの間で実施し、踏査では、基本的に長野市・更埴市の都市計画図（1:2,500）を使用した。

III 地形と中世城郭の立地

善光寺平西南部は、上田・佐久地域より北上する千曲川が善光寺平へ入る喉頭に当たる。特に南端のせり出した尾根には赤沢城・屋代城が立地し、善光寺平南部の出入口を監視する意味を持つ。

千曲川両岸には山塊から派生する幾筋もの尾根があり、尾根の先端には比較的小規模な山城が所在する。山城は千曲川を挟んだ両岸ではほぼ同じ立地状況を示し、千曲川を中心とした沖積地を取り囲むように分布する（第1・2図）。

千曲川を挟んだ両岸の様相を見ると、左岸の塩崎地域では、篠山々系から東に派生する尾根頂部と先端部に山城が立地する。なかでも最奥地には、応永年間より戦国期に至るまで塩崎地域の中核的役割を果した塩崎城があり、突出した北方の尾根には塩崎城見山砦・南方には赤沢城が所在する。さらに塩崎南方の桑原地域では、尾根先端部に小坂城があり、稻荷山には戦国末期に築城された稻荷山城と城下町がある。千曲川左岸における尾根先端部の山城は、拠点的城郭⁽⁶⁾・非拠点的城郭ともに比較的小規模で、山麓とさほど比高差がない。その点で塩崎城は立地・規模ともに異なる。また、平地には石川条生遺跡（桑落城）に代表される方形の館・塀の存在が數か所伝えられているが、多くは位置が確定しない。⁽⁷⁾

この地は、信濃守護小笠原長秀と信濃国人衆による大塔合戦（応永7年）の舞台で、小笠原氏がたて築いた「塩崎城」を塩崎城に当てる説が多いが、赤沢城とする説もある。さらに、千曲川が屈曲する北では、武田晴信が川中島合戦の際に陣したと伝えられる茶臼山がある。一方、右岸の更埴地域では最奥地の尾根頂部に鞍骨城・天城城、尾根先端に唐崎山城・鷺尾城・屋代城などの山城と妻女山（陣城）、さらに東方に海津城などが所在する。最も比高差があり、尾根頂部に立地する鞍骨城と天城城が左岸の塩崎城と対峙する様相をなし、この尾根から派生する尾根先端部に立地する山城が、小規模である点は右岸と同様である。なお平地には、城の内遺跡（屋代古城）・生仁館が存在する。

IV 善光寺平（西南部）の歴史的背景—15・16世紀—

塩崎地域とその周辺は、在地の国人層による数回の争乱と戦国期の武田・上杉両氏による川中島の合戦などがあり、中世を通じた古戦場で、多くの戦いに関与した地域であった。

信濃守護に任せられた小笠原長秀は、京より信濃に入部するが、村上満信と仁科・竹達・香坂氏

ら国人一揆衆が連合して入部を阻止し、更級郡四宮で戦った。これが応永7年（1400）の大塔合戦である。この争いは信濃全城を上げての抵抗であったことは、参加した国人衆の名を見ればわかり、ここでは合戦の様子を『長野県史』⁽⁸⁾の記載から見ることにする。

四宮での激突で敗れた小笠原軍は長秀が塙崎城、坂西・古米・櫛木氏らは大塔の古要害に逃げ込んだが、大塔古要害での籠城の有様は食糧を欠いて惨憺たるものであったようである。大塔を攻め落とした国人衆は塙崎城に向かったため、長秀は危機的状況となったが、佐久郡大井氏と村上氏の譲合の結果、国人衆を撤退させ、長秀は京に逃げ帰っている。

大塔合戦の翌年には小笠原長秀が信濃守護を罷免され、代わって斯波義将が再任されている。斯波氏は大塔合戦の混乱を收拾し治安の回復に努め、応永9年（1402）に幕府は信濃を領国（直轄領）としている。翌年には幕府の信濃代官相川滋忠が入部するが、小笠原氏と同様、信濃勢の抵抗があり、村上満信・国人らと塙原で戦っている。その際に、細川軍は村上氏らの「塙崎新城」を攻め落としている（市川氏貞草息状）。その後、細川滋忠は市川氏貞らと水内郡などを攻めるなど、信濃国人の抵抗が続いているが、応永22年（1415）、代官に属した市川越中守が須田為雄を討伐したこと、北信の国人反抗は終焉となる。

応永32年（1425）には小笠原政康（長秀の子）が信濃守護に補任され、政康に芦田氏が降り、村上氏と戦い勝利した永享9年（1437）に政康は信濃を統一した。この政康死去後には遺訓をめぐつて相続争いが起こるが、文明5年（1473）に小笠原定基が信濃守護に任じられ、一応の落ち着きを見る。

信濃国人の有力豪族である村上氏はこの頃、東信で勢力をのばしたが、北信濃には村上氏のほかに島津・高梨・須田・井上氏らの支配が及んでいたため、村上氏の一円的支配ではなかったようである。このように北信濃では村上氏の間接的支配の地域もあるが、磐光寺平において村上氏の支配権が大きかった状況がうかがえる。東北信地域での支配権がほぼ確定した頃に、甲斐の武田氏が佐久郡に進攻したようである。また越後守護代長尾景虎（上杉謙信の父）が守護上杉定実と争った永正10年（1513）には、北信濃の武士は高梨・村上の2派に別れて戦い、大永4年（1524）には長尾景虎が北信濃も鎮定している。4年後の享禄1年（1528）には、武田信虎が駿助郡に侵入し駿助氏と境川で戦ったことを皮切りに武田氏の信濃攻略が始まり、その後武田信虎は、天文17年（1542）に駿助領主を上原城に攻め、駿助郡を平定。さらに、天文16年（1547）には佐久を平定。天文19年（1550）には小笠原長時を破り府中（松本）に入り、天文21年（1552）には小笠原氏の旧領を支配した。この段階以降、武田氏の残る信濃支配は北信濃に限られることとなる。

北信濃進攻の手始めとして上田原合戦の翌年、駿代政國・塙崎氏らを味方につけ、村上義清を居城の葛尾城に攻めている。村上義清が越後の長尾景虎を頼った後、北信濃で武田・上杉両氏の數度にわたる衝突が始まると、これを縫合したものがいわゆる川中島の合戦である。

この合戦については、頼山陽の『日本外史』、甲斐軍学書『甲陽軍鑑』などで合戦の経過が後世に伝えられているが、史料的には不明な点が多い。これも『長野県史』⁽⁹⁾によると、同年長尾景虎が村上義清らを教授する目的で信濃に入り、更級郡八幡で武田軍を破っている（第1回）。この争

いで争奪の対象となったのは葛尾城・荒砥城などで、長尾景虎は武田勢を更級・埴科地方の南部でくい止めたため、川中島の地は未だ村上氏の勢力下にあった。さらに、弘治元年（1555）川中島での衝突（第2回）、弘治3年（1557）水内郡での戦い（第3回）を経て、永禄年間には武田晴信が川中島地方をほぼ掌握し、同年信濃守護に補任されている。この頃、海津城築城に着手し、最も激しい衝突となった永禄4年（1561）の合戦の結果、武田軍がほぼ信濃を制圧することになる。その後、武田軍は越後に侵入するが、永禄7年（1564）に更級郡塙崎に出陣して上杉輝虎（謙信）との対陣（第5回）を最後に両氏の直接的な争いは終止符を打つ。

武田信玄と上杉謙信が死去した後は、武田勝頼と上杉景勝が甲越同盟を結び武田氏が信濃全城を領したが、天正10年（1582）に武田氏が滅ぼしてからは、上杉氏が北信濃に進攻し前線基地として猪荷山城を築き、更級郡で小笠原貞慶と争い、天正13年（1585）に北信濃四郡を平定している。

以上が北信濃における武田・上杉・信濃勢の動向である。戦国大名が成立しなかった信濃では、この3者による攻防が絶え間なく続き、中世後期では安定した支配が行われなかった地域である。

しかし文献史料では、信濃国人間の小規模な衝突は不明な点が多く、善光寺平では拠点的城郭を除き、築城主体者を城郭の構造から想定する方法が大きな意義を持つといえよう。

V 繩張りから見た中世城郭の構造

③ 塙崎城（第2図3）

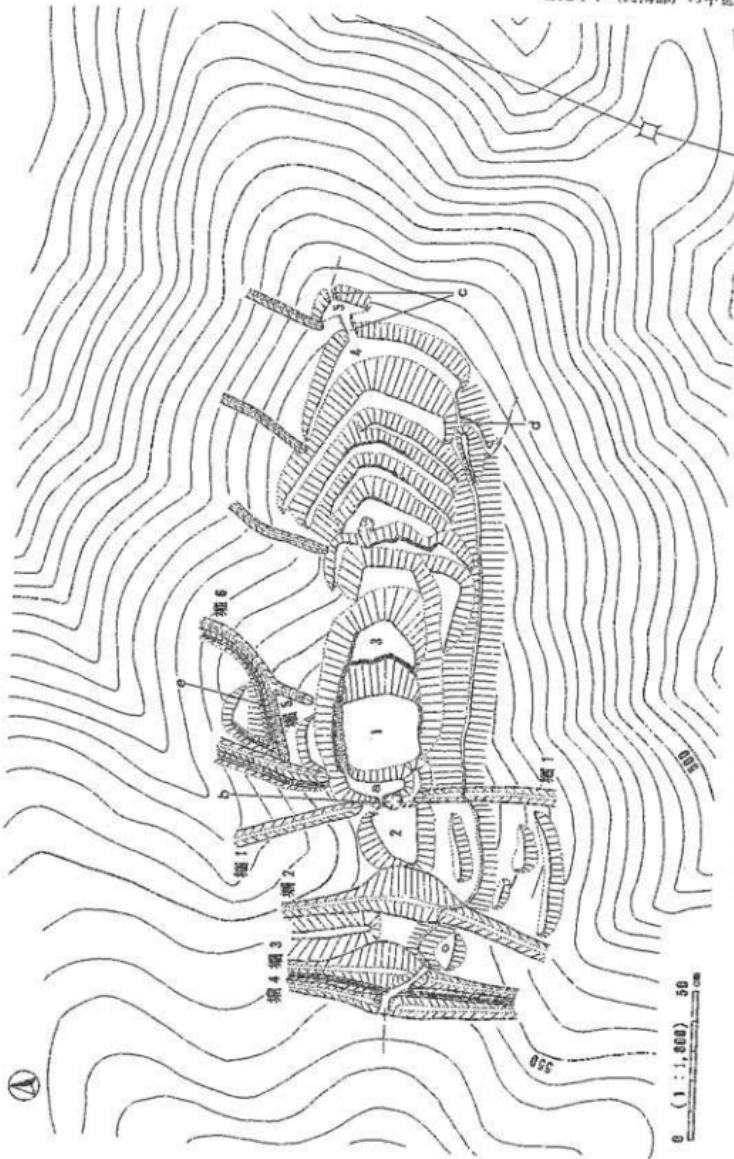
・位置と環境

城跡は長谷寺西方の泰山、標高569mの尾根に立地する。長谷寺との比高差は200mで良好な眺望であるが、やや奥まった尾根に占地するため、千曲川・街道などとの直接的な連絡は不便である。本城跡の歴史的位置づけについては、從来、応永7年（1400）の大塔合戦の窓、信濃守護・小笠原長秀が築いた「塙崎城」と比定されてきたが、これを赤沢城とする説もある。⁽¹⁰⁾その後、本城郭が文獻に登場するのは永禄7年（1564）の第5回川中島合戦で、武田軍が本陣としたようである。⁽¹¹⁾このことから15世紀に存在した本城郭は、16世紀中頃に武田氏により改修を受けた可能性がある。

・繩張り（第3図）

地表面調査で確認される郭と堀であるが、尾根の頂部付近に東西約25m・南北約25mの主郭（1）があり、西側にのみ大規模な土星（a）が存在する。土星の西には台形状の郭（2）とを連絡する土橋（b）があり、斜面には堀切（淵1）が設けられている。この郭（2）と主郭土星が本城郭で最も高いため、土星は削り残し構造と思われる。反対に東側はスロープ状に傾斜して郭（3）に連絡する。塙崎城では、郭1～3が主郭部であり、主郭の縁辺部北側には石垣が見られるが、右垣は主郭を越えて郭3まで連続するため、後世の構築物といえる。

全体的に郭は、長谷寺に向かう東側を主体に配置されており、郭4・5の中央部（c）と郭4が収束する南東方向（d）の2カ所が虎口として想定できる。この状況から、本城郭は千曲川を望む



第3図 塩崎城縄張図 (1922. 4. 17 中田氏綱著西に河町が加筆・修正)

東側が防衛の要点で、ここに虎口設けられた構造である。

主郭後方、篠山と続く尾根筋には3条の堀切（図2・3・4）があり、規模は堀2の幅が尾根筋で17mと卓越する。3条とも尾根筋で広がる状況は、後方を遮断する目的を有し、西側を執拗に意識した結果であろう。斜面では、北側で等高線に直交する数条の堅堀がみられ、さらに主郭に近接した地点に唯一、横堀（堀5）が存在する。最終的に豊堀（堀6）に収斂するが、豊土塁と連続する横土塁（e）が存在する点も本城郭の特徴であり、堀の配置から塩崎城見山砦と島坂峠が位置する北側を意識した状況が推察できる。

網張りの特徴として、構築する城郭では顕著な堅堀が確認されず、概して堀は尾根筋の遮断が主目的であるなかで、本城郭の堅堀と横堀は特異であり、両者の構築は本城郭が外部勢力の影響を受けた結果と考えられる。なお、石垣が主郭と東側の「く」字状の郭の縁辺部に見られるが、両者とも後世の模擬物の可能性がある。従来、奥地に立地するため遺存状況が良好と思われていた本城郭は、りんご畠などの農作風により当時の姿をとどめていない箇所が多いことが判明した。

本城郭は尾根の最高所に主郭土塁と郭2が存在し、一段さがり主郭が位置ことから、この網張りが築城当初の姿とは解釈できない。むしろ堀1がなく、郭2と主郭土塁が連続して同一平坦部を形成していた段階が戦国期以前の主郭であり、背後に堀切が掘削された網張りが、大塔合戦改修の姿であろう。この姿が改修後、最高所の平坦部に堀を掘削して郭2と主郭土塁とに機能を分化させ、現在の主郭に推移したと想定できる。

以上のことから、本城郭は遺存状況が良好でないが、堀の配置方法から武田氏により改修を受けた武田氏系城郭⁽¹²⁾といえ、その時期は文献と照合して永禄7年（1564）の第5回川中島合戦時と比定される。さらに、それ以前にも存在していた形跡も確認でき、それを大塔合戦の「塩崎城」と認識できる。

⑥ 塩崎城見山砦（第2図4）

・位置と環境

本城跡は、塩崎城と沢を隔てた北側に位置し、塩崎城が立地する山塊から派生する最も張り出した標高471mの尾根の先端部に立地している。山麓の集落とは比高差が110mとさほど要害性がなく、集落から容易に仰視できるため、両者の密接な関係を指摘できる。

さらに塩崎城見山砦の北には聖川中流域から塩崎に至る島坂峠が通る。これは更級郡西部と普光寺平南部を結ぶ交通路であり、中世段階に遡る峠と推定される。また、中世では北国西街道より山側の山裾をほぼ南北に通る道が存在したようで、交通の要衝に立地する。⁽¹³⁾

本城郭は周知の遺跡ではなく、長野・上信越自動車道建設に伴い、平成2年度に確認された新発見の遺跡である。さらに、本城郭に関係した文献史料は皆無で、唯一『塩崎村誌』に掲載された図の遺跡該当箇所に“見山砦”という名が認められる程度である。

・網張り（第5図）

尾根先端部の頂部には主郭（1）が築かれ、縁辺部には土塁（a）が全周する。土塁が郭を取り

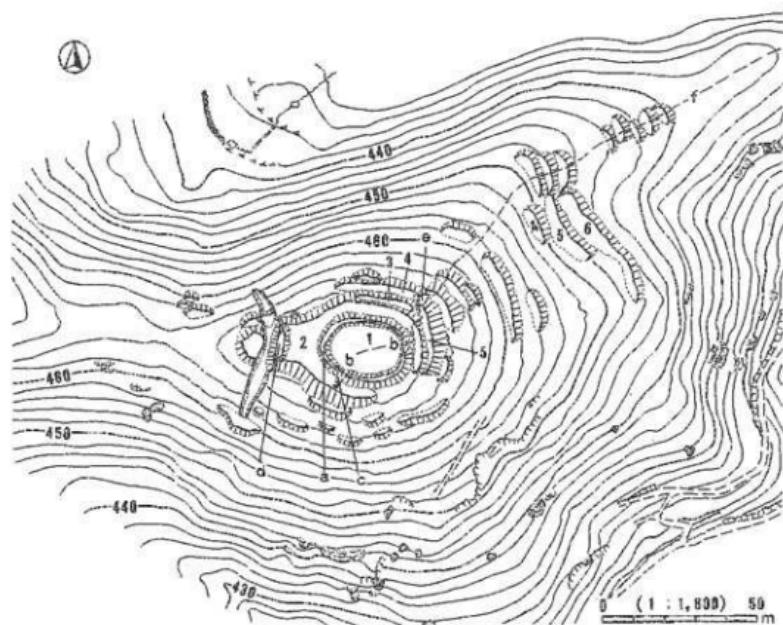
巻く状況は主郭に限られ、土塁は主郭後方西側が最も大きく、主郭前面の東側と南側の2カ所に出土口（b）が存在する。主郭背後には方形をなす副郭（2）があり、主郭の後備的性質を有す。

副郭は主郭の北と南側の帯郭を連続し、主郭を取り囲む様相を呈す状況から、主郭周囲を防御して、兵士が横の連絡をした空間と想定できる。さらに、南側で主郭と帯郭を結ぶ土橋（c）が認められた。副郭の防御施設では、土塁（d）が隅に面した西側一方で確認されたのみである。七星の構築状況から、主郭が本城郭の中枢的位置を占め、城郭の主たる機能は主郭が担っていたことを指摘できる。また、主郭周囲には経長い付属的な郭（3～5）が北側斜面に頻繁に配置され、主郭土塁の傾斜は相対的に同方向が急で、ほぼ垂直をなしている。こ



第4図 塩崎城見山砦の遠景

（烏坂峠より望む見山砦の背後に塩崎城が立地する）



第5図 塩崎城見山砦縄張図（1991.7.7 河西作図 1992.3.17一部修正）

の点から、本城郭の防御の要點がこの方面にあることを示しており、本城郭と沢を隔てた北方に位置する島坂跡を意識した結果と考えられる。また虎口（e）は、郭3・4・5の縁辺部が近接する北東方向に設けられ、坂虎口で特に防られる。

本城郭の南方には沢を隔てて塙崎城が立地するが、南側では特に意識して郭を配置した様子は見られない。このことから、塙崎城と密接な関係があり、戦国期に本城・支城として同時存在したことを探査できる。

主郭部以外では、東側斜面に配置された郭（4～6）が主郭部に次ぐ規模を有するが、防御的機能の点では主郭部に劣り、主郭と同機能を有した空間ではない。機能的には主郭部を補う施設で、小屋的な建物が存在していたといえるが、全体的に本城郭は、郭の機能分化が明確化していない。

次に阻塞類では、主郭後方に一条の堀切（溝1）が存在する。これは尾根筋を遮断しつつ斜面にのび、中腹付近で終る形態である。主郭部と後方の尾根とを分断する役割を具備するが、豊堤に発展する様相はない。

本城郭の時期を網張りから判断すると、16世紀に位置づく。戦国期は斜面に阻塞類を設ける時期であるが、本城郭の斜面には豊堤・横堀・敵空堀群がまったく認められない。善光寺平の中世城郭の実態が解明されていない現段階では判断できないが、塙崎城見山砦のみならず総じて善光寺平という地域では、敵空堀群が普遍的には用いられていないかと推測できよう。

なお、本城郭の城郭施設は突出した尾根先端部に集約されている状況で、塙崎城見山砦の機能はこの尾根で完結していたといえる。さらに、城内での通路・虎口についてであるが、本城郭の出入口（大手口）は北東にのびる尾根（f）の先端、四野宮の集落に極めて近接する位置に存在する。したがって、大手から主郭へは北東にのびる尾根上につくられた登城路として利用したと推定され、主郭後方では尾根筋と堀底を利用したようである。

以上の構造を呈する塙崎城見山砦は、いわゆる「小規模城郭」に類し、山城と居館というセット関係が成立しない。集落と近接する関係から「着」・「物見台」的性格を持ち、城郭の維持・管理は眼下の集落（四宮）が担っていたといえないとどうか。また、単郭式を呈し、複雑化した防御的施設を施していない点で「撃点的城郭」と大きく異なる。

発掘調査によって主郭から3棟の建物跡が検出され、帝郭から主たる遺構が確認されない様子は主郭が本城郭の機能の大半を担っていたことを示している。本城郭の特徴は、主郭を土塁が全周する点で、このことから地表面観察で確認される姿は16世紀の所産⁽¹⁴⁾であるが、発掘調査では先行する遺構が確認された。出土遺物から城郭の初源を15世紀中頃に比定すると、15・16世紀において3段階の変遷が想定でき、着的性格の城郭が戦国期に草創の要素を強化する発展段階を把握できている。また推測の城を跳ねないが、16世紀の塙崎城見山砦は、塙崎城の出城（物見台）として機能しており、在地の国人層を築城主体者に想定できる。

◎ 赤沢城（第2図2）

・位置と環境

本城跡は、塩輪地域で最も突出する尾根先端部に立地し、対岸の星代城とともに善光寺平の出入口を抑える役割を果していたようである。標高480mの尾根頂部に主郭が築かれ、眼下の集落とは

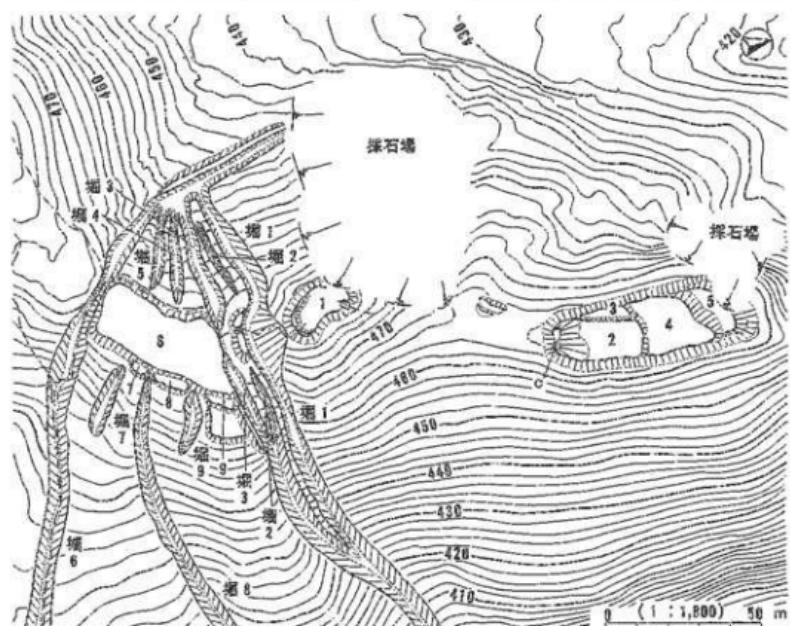
比高差119mで、堀崎城見山砦と同様さほど要害性はない。集落の中央部には鞍馬木期に築城された都荷山城があり、近接する状況から両者の関連性を指摘できる。

・縄張り（第7図）

城郭は尾根筋を中心に築かれており、施設は主郭周辺で顕著に認められる。さらに、尾根先端の郭2・3・4付近から郭6付近までの範囲が、城域と推定される。城域では、主郭の前方と後方に防御的役割を持つ郭が配置され、尾根上が郭の構成の主



第6図 赤沢城西斜面の歎状空堀群



第7図 赤沢城縄張図 (1991.12.3、1992.4.17 沢西作図)

たる空間を示す様子がわかる。また、斜面部では郭6付近に堅堀が集中する特異な区域があるが、全体的に見ると、斜面部に郭が確認されることは、防御的機能を自然地形に多く依存したことがわかる。

主郭（1）は、隅丸長方形で20×10m（一部崩落）の規模を有し、北西側で坂虎口（a）が認められ、反対側では土塁中央部に出入口がある。土星（b）はこの部分と一部東側に残存し、土星に石垣を用いた形跡はない。付属郭としての郭2・3・4と郭6は、ほぼ同規格である。しかし、郭6は本城郭でもっとも広い平退部であるが、防御的施設はなく積極的に城郭施設と認定できない。さらに、郭2・3・4は若干高低差を持つ南北に長い郭で、主郭と同様で南側一角に土塁（c）が認められる。斜面部に構築される郭は、郭2・3・4のさらに尾根先端部（三日月形）に確認できるのみで、斜面で郭を多用していない状況は、赤沢城の特徴といえよう。郭6の東側直下には長方形状の郭（7・8・9）が見られ、郭間には堀が築かれているため連続しない。このような堀は、反対側には存在しないため、この方向を意識した結果であろう。

堀については、主郭後方に集中する堅堀のなかで堀1と堀3南端の堀6の3条が比較的規模が大きい。3条の堀は最も広い箇所で幅8～9mを有し、基本的にこの堀が尾根上から山裾までのびるが、斜面途中で収斂し最終的に1～2条となる。3条の堀間に尾根筋直下から始まり山裾で収斂する前者の堀と、形状が異なる堀4・5・7・8が認められる。このことは、堀1・3・6が堀切の基本的配置を構成し、本城郭ではこれが主たる防御施設であったと推定される。さらに、堀間に複数築時に発生した土を盛り上げた土堤（堅土堤）が堀に並走する形で認められ、堀とともに斜面の防御を強化する役割を果したといえる。

網張りの特徴を要約すると、郭は尾根上に顯著に認められ、堀は城域の南側一角に集中する。城郭の性格が異なるので一概に比較できないが、塙崎城のように山のほぼ全城を防御した形跡はない。本城郭の郭は、防御的・土木技術的侧面で見ても單純で、多様化した施設ではなく、あわせて郭の配置が尾根に限定される状況は、基本的に網張りが複雑化する戦国期以前の様相を呈していると推定される。しかし、堀は尾根の遮断と斜面の防御を目的としての大規模な堅堀が配され、斜面を放射状に走る鉄状空堀群の要素が確認できる。近年、松本平の小笠原系城郭では「長大な堅堀」・「中腹で密集・収斂する堅堀」などが特徴として指摘されている。¹⁵⁾ 規模的には大きく異なるが、本城郭の堀の配置と小笠原系城郭を比較すると、同様な様相として把握できないまでも、類似点を抽出できる。少なくとも、武田系の網張りを表出してはいない。

要するに、赤沢城は、郭と堀が時期的に異なる様相を示している点が特徴であり、戦国期前半の様相を郭が、或は後半の様相を堀が表出し、16世紀末になって部分的改修（堀）が行われたことを指摘できる。すなわち、総体的に16世紀後半武田氏滅亡直後の様相を表出している。

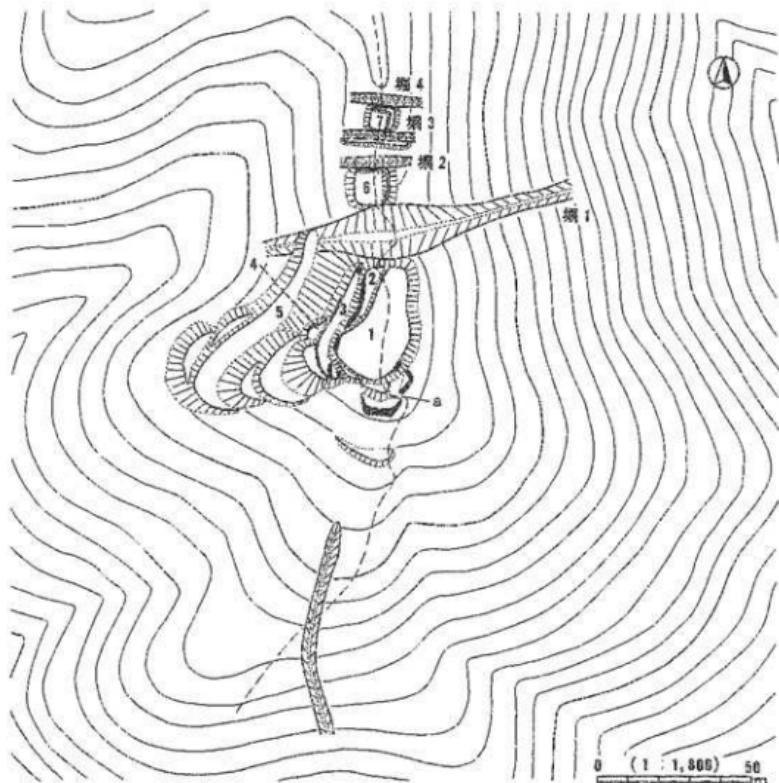
本城郭の築城主体者については後述するが、塙崎地域を含む善光寺平の16世紀は、武田・上杉・朝倉による北信濃攻略の最前線で、耐えず衝突していた状況がある。したがって、本城郭がこの攻防に深く関係したことは城郭の構造から推察できるが、地表面観察で確認できる赤沢城は、堅堀の配置に武田系の要素が若干具備されていない、武田氏とは別系統の外部勢力の築城主体者を想定でき

る。なお、戦国期以前の本城郭を遺跡名が示す「赤沢氏」の築城と推定して良いか否かについては、赤沢氏の実態が明確でない現在、今後の課題として残る。

④ 小坂城（第2図1）

・位置と構造

本城郭は、穂山々系の一支脈、小坂山から南に派生する尾根先端部に立地する。現・龍洞院の裏山に位置し、標高575mの尾根頂部に主郭が築かれ、山麓との比高差は156mである。城郭に関係した文獻では、「桑原村誌」に武田氏侵攻後、家臣の保科正義昌が小坂城を管轄していた記載が見られるが、史料的な裏付けはない。史料上確認できる事項では、武田氏滅亡後に猪荷山城を築いた上杉氏が、保科信後守に桑原（半分）を与えた、同城に左城させていることが唯一である。したがつ



第8図 小坂城（主郭部）縄張図（1992.9.27、1992.11.3 河西作図）

て、城名が登場する史料はなく、城郭の歴史的背景については、不明な点が多い。

・網張り（第8・9図）

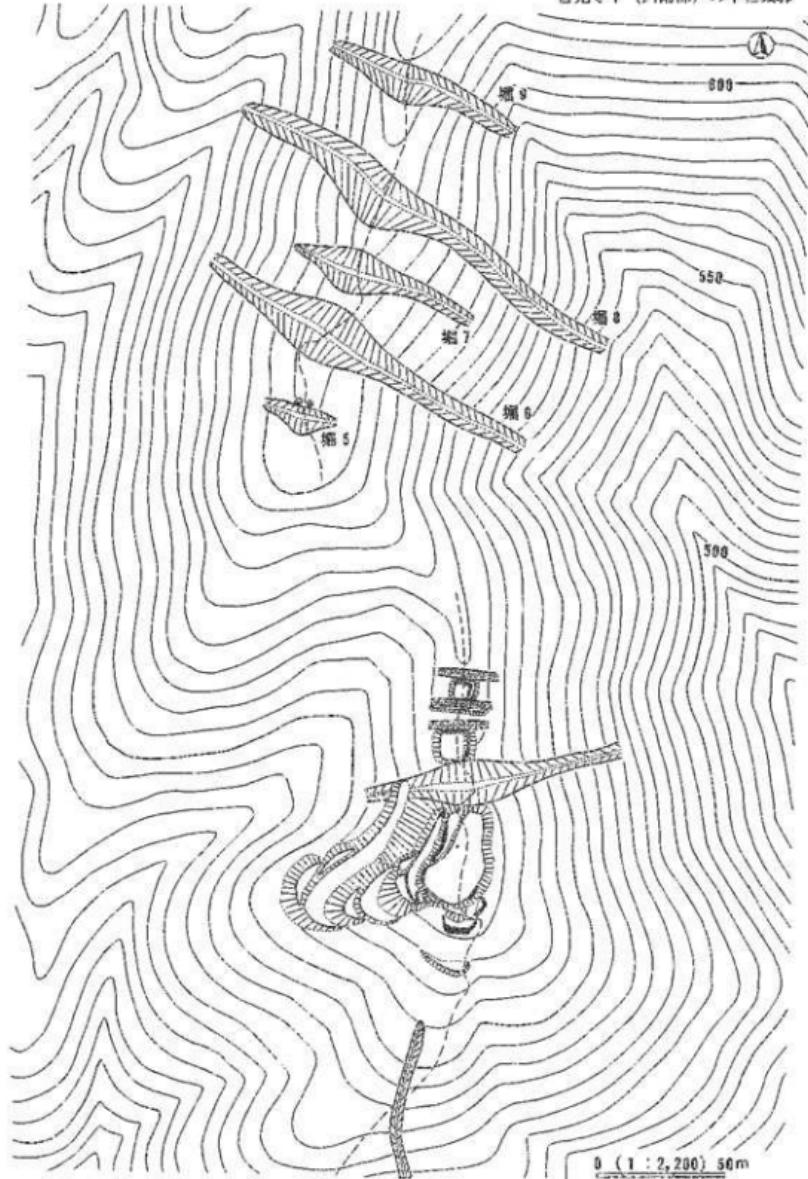
主郭（1）の規模は南北約35×東西約19mで、一部崩壊しているが長方形に近い形状をなす。北西には三角形状の平坦部（2）が見られるが、西側縁辺の石垣が連続するため、両者を合わせて主郭の機能を果していたといえる。主郭周囲の状況は、主郭後方に尾根筋を切り、主郭と北側に続く尾根とを遮断する目的の堀切（堀1）が存在する。堀切の幅は尾根筋で約15m、斜面で約7mを有し山腹にのびるが、山腹で取締し山腹まで到達していない構造である。

主郭が位置する尾根頂部から南西にのびる尾根には帯郭が配置されており、形状は三日月形が多い。等高線に沿う細長い形状を示す平坦部（3・5）が存在し、西側の防衛と城兵の移動を可能とする目的を持つが、西側を防衛の要点とした状況は、主郭（西側）と郭3・4の辺縁部で石垣が確認される点が証明している。このほかに、石垣は主郭南側で現登山道が蛇行する虎口（a）の壁面に施されており、横矢掛けを目的とした石垣であろう。虎口が位置する城郭前面は、薪のため郭の形態が確認できない箇所があるが、虎口付近には若干の帯郭が配置されているにどまり、防衛機能の強化を主目的とする帯郭が築かれてはいない。この状況は、塙崎城・塙崎城見山砦・屋代城と異なる様相である。また、虎口側には斜面に堅堀（堀10）の形態を示す凹みが見られたが、全体的に不明瞭で城郭施設と捉えて良いかは検討が必要である。

一方主郭の後方には、3条の堀切（堀2・3・4）が見られるが、斜面にまでのびなく、堀1とは規模・形状が異なる。堀間の尾根筋には北・東側縁辺部に土塁を持つ郭（6・7）と堅土塁が認められ、その背後には尾根筋を遮断する大規模な堀切が存在する。このほかに、尾根先端部（主郭部）と小坂山が連続する尾根筋には5条の堀切（堀5～9）が存在し、軌跡に尾根筋を遮断する構造は本城郭の特徴である。この5条の堀切は、尾根筋の遮断を主目的として配置され、なかでも堀6・8は幅約10mと大規模である。両者は尾根の画側にある深い谷までのびる構造であり、堀5・7とは機能的に異なる。尾根筋では斜面より堀が広がるが、ここでは主郭部側を多くカットしているため、尾根筋と塙底との高低差は主郭部側が大きく、この様相は小坂山からの攻撃の意図したためであろう。

以上の様子から本城郭は、機能的に尾根頂部の主郭周辺と小坂山に続く北側の堀切部分の？カ所にわけられる。この両者が築城当初から存在して同一城郭として機能したとは捉えられず、以下に記すが、堀切は改修により構築されたものといえよう。

小坂城は、主郭部の構造が単純であるにもかかわらず、小坂山方面を意識して堀切を築く状況は、赤沢城と同じく郭と堀の構造に不整合が生じており、この網張りは同一築城主体者による築城ではなかろう。すなわち、主郭に初源の形態が見られ、後に堀が改修されたことを指摘でき、網張りから時期を推測すると、大規模に堀切を築く行為と技術は、戦国期、武田氏侵攻に備えた軍事的緊張段階、もしくは侵攻後の所産で、郭は戦国期、武田氏侵攻以前の信濃国人層による所産と位置づけられよう。



第9図 小坂城跡図 (1992.9.27 1992.11.3 河西作図)

◎ 尾代城（第2図5）

・位置と環境

本城郭は、千曲川右岸の有明山から北西方向に細長くのびた、通称「一重山」に立地する。主たる城郭施設は2カ所の尾根頂部を中心に配置されているが、主郭背後は土取りのためすでに存在していない。

尾代城は、村上氏の一族といわれる尾代氏が居を置いたと推定されており、尾代氏は天文22年（1553）武田氏の侵攻時に塙崎氏とともに村上氏を寝返っている。その後、武田氏に属すが、天正10年（1582）同氏滅亡後には織田方の森氏に、さらに本能寺の変後は上杉氏の勢力下に入っている。上杉氏の後、徳川氏に走るなど、尾代氏は武田・織田・上杉・徳川氏に属しつつ戦国期の動乱を生き抜いた様子がうかがえる。^[16]

・縄張り（第10図）

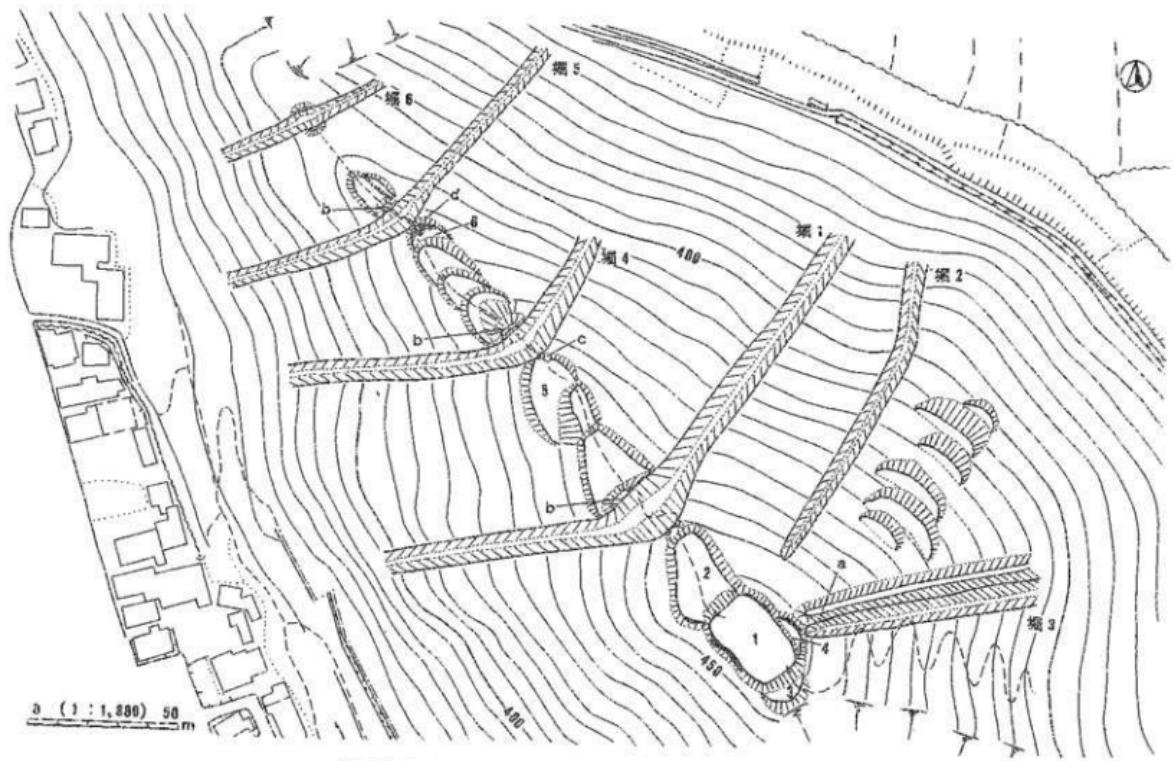
一重山の先端部は公園化され、地表面観察では明瞭な城郭施設が確認されない。したがって、ここでは主郭が位置する尾根頂部を中心に触ることとする。

主郭（1）は標高456mの尾根頂部に築かれており、28m×18mの長方形をなしている。一重山北東に近接する更埴条里遺跡との比高差は約100mとさほど要害性はなく、平地から容易に確認できる。

郭は主体的に尾根筋を利用して配置されており、斜面全体に帶郭が展開する様子はない。しかし、主郭北東の豎堀間に東側斜面の一部には付属郭（帯郭）が存在する。^[17]主郭は28×17mの長方形を呈し、西側を中心に石垣が存在する。これは、西側が比較的急傾斜で千曲川に面していることに起因して構築されたものであろうが、主郭縁辺部に防衛的機能を持つ土塁は確認されない。

主郭周囲には主郭北側に続く郭（2）と三角形状の郭（3・4）が配置されているが、主郭と郭4のはほとんど高低差がない。また、郭4の直下から豎堀は始まり、郭の縁辺部と豎土塁が連続するため、郭の機能は主郭と豎堀との連絡を拒っていたと推定される。さらに、郭2の北西方向には幅17mの大規模な堀切（堀1）があり、山腹にのびる。東斜面では主郭直下から山腹に豎堀（堀3・4）が2条あり、一方には豎土塁（a）が伴う構造である。さらに、豎堀間には6段の郭が存在している。反対に主郭南側では、有明山とを遮断する堀切が存在したと推定されるが、土取りのため城郭施設は確認できない。この状況から、主郭背後から堀1までが主郭部をなし、城郭の中盤の役割を示したといえる。

主郭部から先端の様子は、尾根筋に三角形状あるいは三日月状の郭が連続し、東側斜面には数段の平坦部が確認される。平坦部の様子と主郭縁辺に築かれた石垣の状況から、本城郭の主たる防衛の要點は東側である点を指摘できる。尾根筋の郭は、3条の堀切（堀4・5・6）により分断され各々が群を形成する。主たる堀切である堀1・4・5では、一重山先端部方向に土塁（b）が頗著に確認される。これは、先端部から主郭を防衛するための施設であるが、主郭の反対側に築かれている点と、土塁が郭の縁辺部には築かれていない点が特徴である。また、堀の機能が尾根筋の遮断を主目的とすることは、土塁の存在が堀の周囲に限定されていることが示している。しかし、堀切



第19図 屋代城縄張図 (1992.9.3 河西作図 絵面・未完成)

は山腹で収斂せず、山裾までのびる構造は、堅堀的性格を多分に具備していると解釈できる。

堀の規模は堀4・5の幅が10~12m、堀6が7mと主郭からはなれ、尾根鞍部に近づくにつれ小規模になる傾向がある。屋代城が尾根鞍部を境として2分され、城郭は両側の頂部を利用した構造と推定でき、尾根鞍部から主郭後方までが主たる城郭であったことがわかる。また虎口では、郭5で坂虎口（c）、郭6で折れと土塁を持つ喰違い虎口（d）があり、城郭内での連絡は、尾根先端部から尾根筋の郭を通過して主郭に至る通路を利用していったものといえる。

次に縄張りの特徴に触れてみる。郭は尾根筋を主体として配置され、土塁が普遍的に存在しない構造は、戦国期（前半）、信濃国人系の様相を示している。しかし、堀切が堅堀に発展し、一部で堅土塁が出現する構造から、戦国期（後半）、武田氏の縄張りの特徴を示していると解釈できる。

以上を要約すると、屋代城は屋代氏の築城の後、堀の改修により赤沢城と同様に郭と堀の構造的アンバランスが生じたといえる。

① 唐崎山城（第2図7）

・位置と環境

本城郭は、屋代城の東方、天城城が立地する尾根頂部から西にのびる尾根に位置する。

主郭は標高479mの尾根先端部に築かれ、山裾の生仁館との比高差は約120mで、屋代城と同様さほど要害性はない。本城郭と生仁館はいわゆる山城・居館として有機的な関連性が指摘されているが、詳細は不明な点が多い。

生仁館は守護と信濃国人層の抗争のなかで、至徳4年（1387）と応永10年（1403）の2度、国人側の拠点として利用されるなど、その重要性がうかがわれる。その反面、本城郭については文献史料が皆無なため、今まで積極的に論じられた機会がなく、「市河文書」に登場する生仁城を本城郭にあてる説⁽¹⁰⁾がある程度にすぎない。

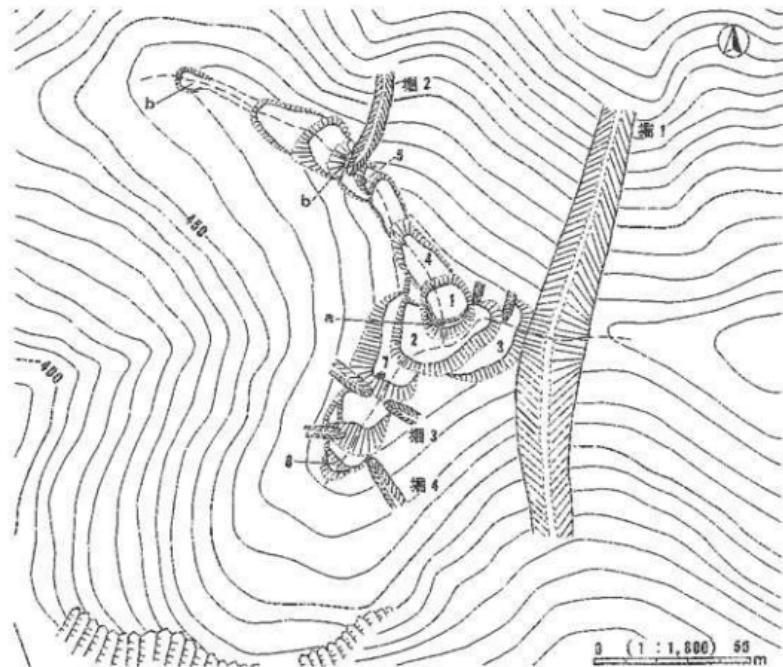
・縄張り（第11図）

頂部に位置する主郭（1）は、13m×12mと比較的小規模で、隅丸正方形をなす。中央には「井泉」と書かれた看板があり、現在でも水を溜めている。施設では、主郭後方にあたる南側を中心に「L」字状の土塁（a）が築かれており、「井泉」を取り巻く形で土塁が認められため、主郭内はより狭く感じられる。

主郭周囲には郭（2）が存在する。ここは主郭の周囲を城兵が横に移動する空間で、主郭の防御と後衛的性質を有した重要な郭である。この郭の西側には、天城城に続く尾根を遮断する大規模な堀切（堀1）があるが、堀切のラインは不明瞭で、自然地形の凹みに若干手を加えた感じで技術的には未発達である。堀切の西端には、堀切端の尾根筋から攻める敵を射撃する目的で三日月形の郭（3）を築いている。堀切の東側の尾根筋には城郭施設は確認されないため、この堀切が城郭を画する意味を持つようである。主郭周囲の郭では、主郭を駆き土塁は確認されない。また、北東の急峻な斜面には、郭2・3の北側隣接部から始まる2条の堅堀が堀1と平行して存在する。これ以外には、斜面に帯郭などは確認されず、主郭から2方向にのびる尾根筋に限定される。この状況は

付近の城郭、特に屋代城と異なる。まず、主郭から北西にのび、登山道が作られている尾根では、長方形もしくは三角形を呈する縦長の郭が連續して配置されている。登山道を作る際にある程度の礎塊があり、現在では明確に虎口を確認できないが、郭4・5・6の先端に坂虎口が存在していたと推定できよう。郭5の先端では、斜面が急峻な北側片方にのみ堀切（堀2）が、また堀切の北には主郭以外で唯一確認できる土塁（b）が認められる。もう一方の南西にのびる尾根で、郭2の西側に位置する郭7は、城郭前面である西側の状況を把握する物見的性を持ち、西側斜面防衛の最前線の郭といえるが、土塁・石垣を施していない。郭7がある尾根筋には2条の堀切（堀3・4）があるが、構造的に複雑な郭がなく、また、郭6と郭8より先端には城郭施設は確認されないため、堀1、郭6、郭8までが城郭として機能した範囲と把握できる。

網張りの特徴を抽出すると、郭は尾根筋を中心に架かれ、斜面に帯郭が展開する様子はない。土塁は主郭と北西の尾根筋の一部で確認されたにとどまり、基本的に郭の縁辺部に土塁を持たない構造である。また、堀は後方の尾根を遮断する堀1が大規模であるほかは、規模的には統じて小さく、尾根の遮断を目的として、豊頃に発展して塔により斜面での横の移動を阻止する様子もうかがえない。本城郭は、頂部に主郭を築き、後方を堀切により遮断し、主郭周囲に郭と塔を配する



第11図 唐崎山城調査図 (1992.10.17 河西作図)

究めて単純な構造である。城郭は非拠点的城郭を除き、本稿で扱った地域のなかでは最も小規模である。構造的に未発達の本城郭に外部勢力の要素は見出せず、むしろ戦国期（前半）の様相を残していると解釈できる。

本地域で15世紀の繩張りを残す城郭が確認されていないため、本城郭が生仁館存続時まで遡るかは、細部にわたる比較検討ができない。しかし、15世紀代の繩張りを表出し、生仁館と同時存在した可能性が高い城郭と推測するにとどめたい。

⑧ 鷲尾城（第2図6）

・位置と環境

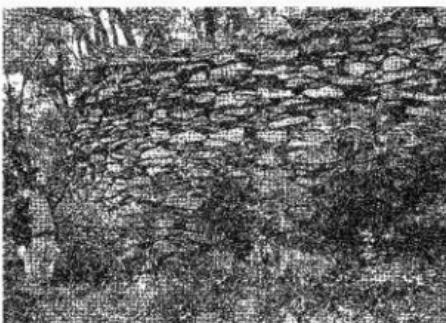
千曲川右岸では、天城城が最高所に築かれており、ここからは千曲川に向かい尾根が2方向に派生している。西にのびる尾根先端部には唐崎山城が、もう一方の南では、尾根筋に倉科将軍原古墳が立地し、本城郭は尾根先端部に位置する。平地から望むと、頂部の天城城から派生する尾根筋に鞍骨城、先端部に唐崎山城・鷲尾城が立地する様相がわかり、4カ所の城郭が有機的関連性を持ち、一体をなしていた状況をうかがえる。

本城郭は標高518mの頂部に主郭を築き、平地との比高差は162mを計る。周辺の城郭と同様、山裾の集落からは容易に仰視できるが、唐崎山城・屋代城と比べて比高差を有し、斜面が急傾斜である点が異なる城郭である。

文献的には、『埴科郡志』（明治43）に村上氏の支族である倉科氏がここを居城とした記載があるが、伝承をもとにしてもり史料的確証はない。立地的に見ると、鷲尾城は鞍骨城と尾根伝いに連絡できるため、鞍骨城の出城的性格を有したと解釈でき、鞍骨城を本城とした滑野氏との関連性が指摘できる。しかし、南北朝期から戦国期を通して史料上に城名が表われず、比定される争乱もない。したがって、築城主体者の想定もさけることながら、城郭の構造と文献史料的裏付けは不明な点が多い。

・繩張り（第13・14図）

本城郭の中核的役割をはたす主郭（1）は、東西27m・南北22mの規模を有す不整形である。主郭の外壁には石垣（石積み）が施されている点が特徴である（第12図）。主郭が不整形をなす理由は、主郭構築が地山を大規模に造成しなかった結果^[19]で、石垣の構築は、防御機能の強化より、むしろ主郭外壁の保護と土留めを目的としたものであろう。石垣は約3mの高さまで削り石を用いた小口積みで構築されており、部分的に崖

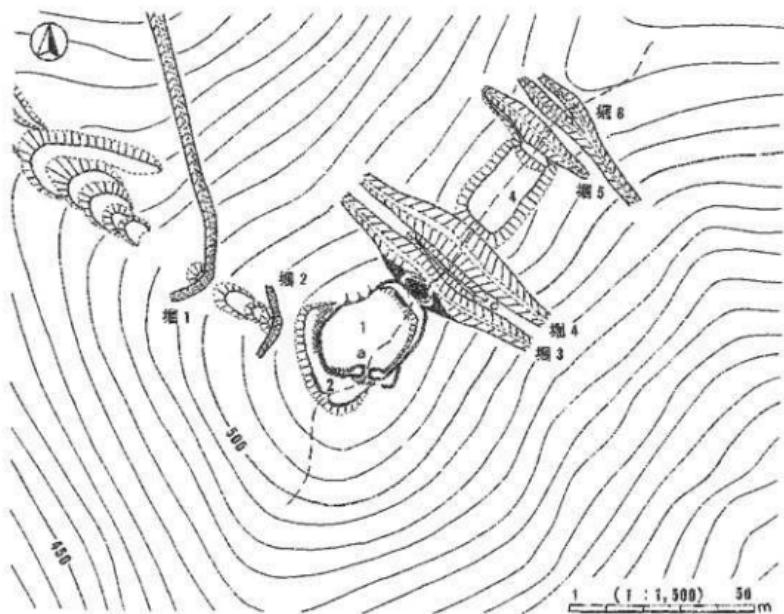


第12図 鷲尾城主郭外壁（外壁）の石積み

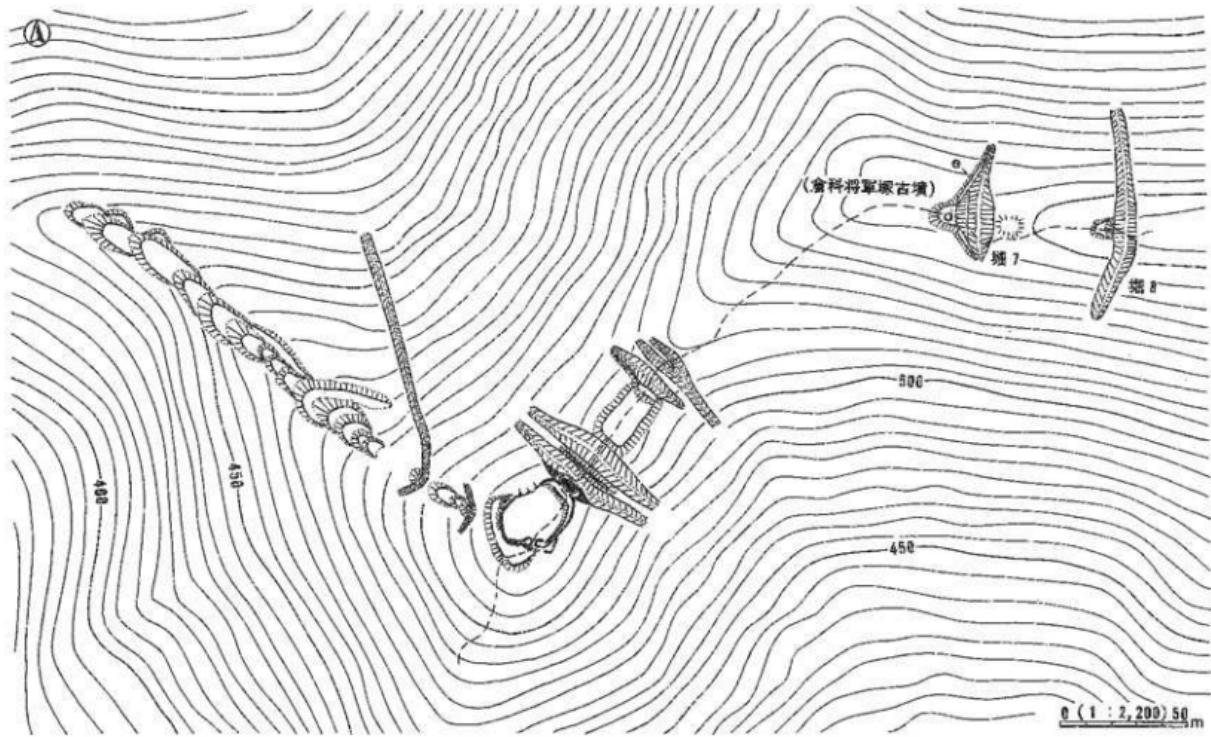
落しているが基本的に主郭を全周し、南面する虎口（a）の両側縁辺部には「コ」字状に配されている。本地域で主郭虎口に石垣を用いる城郭は確認されていない点で特異である。さらに、石垣は虎口を複雑化するためではなく、構造的には単純であるため、土留め的機能が主目的であろう。

主郭内部では、東側を中心にならかに走っている土塁は南側縁辺部にのびるが、虎口西側では確認されなくなる。また、外壁の石垣は土塁が構築された方向に顕著に確認されたため、南と西側を防御の要點としていたと考えられる。土塁の構造は、東側・南側とともに主郭側壁面で石積み（切石）が築かれており、上部に円錐を積み上げた構造である。本地域で土石混合の土塁は確認されるが、石垣を作り土塁は少なく、この点でも興味深い。

主郭前面では、虎口（b）がある郭（2）と、虎口受けの郭（3）が配置されている程度である。両者とも外壁に石積みが施されている点で主郭と共通し、主郭と城外とを連絡するための郭であるが、これ以外に主たる郭が存在しない。しかし、主郭から北西にのびる尾根筋には三角形状の郭と「く」字状の整堀（番1・2）が配置されており、北方に位置する唐崎山城の郭群の構相に類似する。堀は、堀1が左右対称をなさず、北側のみ斜面にまでのびる構造である。郭の規模は一様ではないが、郭は尾根筋の傾斜を利用して階段状に連続する。また、登山道で破壊されているが、



第13図 慶尾城（主郭部）調査図（1992.11.13、1993.1.23 河西作図）



第14図 鶴鹿城調査図 (1992.11.13、1993.1.23 河西作図)

虎口の形跡が確認されたため、大手はこの尾根先端部に存在したと推定され、主要な通路は、主郭から北京にのびる尾根筋の郊群に存在したといえる。一方、主郭後方では、尾根筋を遮断する2条の堀切（堀3・4）があり、中央部には土壘状の高まり（c）が見られる。堀3に切られる主郭東側斜面でも、主郭外壁と類似する切り石を用いた石積みが確認され、倉科将軍塚古墳にかけての尾根筋には堀4と堀切（堀5・6）が存在する。郭4には土壘（d）があり、縁辺部が明瞭である点で城郭施設としたが、積極的には捉えられない。

尾根筋を遮断する堀切は、堀3・4と同様、斜面にのびる構造ではなく、中央部に高まりを持つ。特に堀6は、尾根筋では2条であるが、南側斜面では1条となり、北側では取巻する形態で、これも中央部に高まりを持つ。堀の構造は、基本的に堀3と4、堀5と6は一体として捉えることができ、中央部の高まりは地山が礫のため掘り残して、二重堀の役目を持っている。さらに、堀3と5の南側、堀4と6の北側が顕著に尾根筋をカットしている状況からも、両者は一体として構築したといえよう。

堀6の先には倉科将軍塚古墳が立地する。全長73mの前方後円墳（前期古墳）であるが、前方部の東側には幅約15m、深さ約6mと大規模な堀（濠）が掘削されている。この施設（堀7）が城郭と古墳のどちらに帰属するか難しいが、この点を岩崎卓也氏は、「前方部と後円部の比高は50cmほど前方部が高くなっているが、これは城郭築成時にやや高められた結果とみられるふしがある。それとともに、前方部前面の丘尾切断部の下底もその折に深められたようみえる。」⁽²⁰⁾と指摘している。今回の踏査では、前方部の頂部で多量の石を含む土壘状の高まり（d）と堀に並走する竪土堤（e）と堀ラインのシャープさが確認された。さらに、この先にも堀（堀8）が存在することから、倉科将軍塚古墳も城域に含まれると考えられる。なお、堀7は、城郭橿原時に存在していた堀（濠）を拡張したと察定でき、その際に前方部に土壘を構築したといえる。また、倉科将軍塚古墳の後円部は上部を削平されているが、これは鷲尾城を見おろす位置にある後円部を城郭施設として利用したためと考えられる。

堀張りを要約すると、本城郭は石（石垣・石積み）を多用している点が特徴で、主郭周辺の施設は石で構築されているといって過言ではない。技術的に発達した城郭を想定しそうであるが、石積みを伴う虎口の構造は究めて単純で、本城郭での石の意義は、防壁と土留めである。さらに、切り石を用いた小口積みが土と同様に採用されていたと考えられ、施設の複雑化を目的に石を利用する城郭とは性格が異なり、このことは鞍骨城でも同様であると推定される。また、繩張りは府崎山城と類似して比較的単純で、堀は尾根の遮断を主目的とした頭切に終始し、竪堀に発展していない。主郭から北西にのびる尾根筋に築かれた郭と堀は、城郭の前面である西側を意識した施設であり、「く」字状の堀は、斜面にまでのびることで主郭後方の堀切と性格的に異なる。これは竪堀としての性格を持つと考えられるが、星代城・坂崎城のように斜面の一定範囲を区画する意味ではなく、このような形狀の堀が天城城と鞍骨城でも確認されるため、天城城を中心とした城郭群の特徴として把握できる。また土壘は、主郭と郭（4）とも郭の後方側一方に構築され、虎口形態は仮虎口であり、両者とも構造的に単純である。

以上の状況をまとめると、尾根筋を大規模に切る堀切と、基本的に豊浦に発展しない堀の存在は小坂城と共に通している。

最後に城郭について触れてみると、従来、本城郭の跡査は主郭周辺の石積みに視点が置かれ、尾根筋の施設についてはその存在すら知られていないかった。しかし今回、鷺尾城の城郭は北西方向の尾根筋から倉科将軍塚古墳のさらに東方まで広がることがわかった。このことから、鞍骨城との関連性を再検討する必要性が生じたことを指摘できるが、本城郭は武田氏侵攻以前に、村上氏が善光寺平を広範囲にわたって支配した戦国期の様相を呈していると解釈できる。

VI 城郭の特徴から見た戦国期、武田・上杉氏侵攻の前後

1 城郭の特徴と外部勢力の影響

本稿では、善光寺平（西南部）に立地する7カ所の中世山城を扱った。この城郭は、鞍骨城（第15図）と天城城が尾根の頂部に立地するほかは、大半が尾根頂部からのびた先端部に立地する。鞍骨城と天城城は、この地域で最も高い標高に築かれており、立地的に見て一種特異であるため、尾根先端部に位置する山城と比較する意味で不可欠である。しかし、本稿執筆までに網張り図の作成が間に合わず、資料提示ができなかったことは非常に残念である。したがって、ここでは両者を除き、各城郭の特徴に触れて外部勢力の改修を受けなかった城郭と改修された城郭の2者を示したい。また改修された城郭から、武田氏・上杉氏の要素を抽出して、信濃国人系城郭と比較して、外部勢力の影響を垣間見たい。

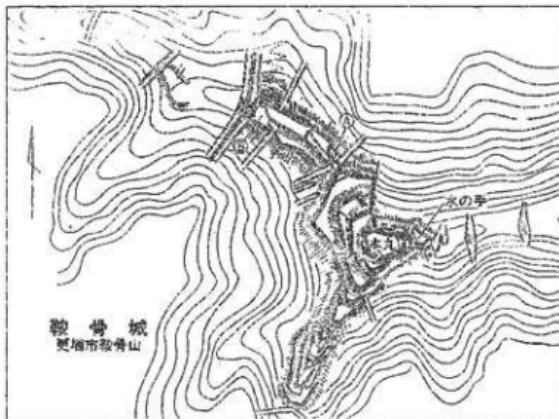
・立地

塙崎地域でやや奥まった尾根に立地する塙崎城は、標高569m・比高差200mで対岸の鞍骨城・天城城とともに梯形を表しているが、城郭の大半は、標高が500m前後、比高差は100m前後の範囲である。さらに、眼下の集落から容易に审视でき、さほど要害性がない城郭が多い点もこの地域の特徴である。非拠点的城郭では、烽火台の要素がある塙崎城見山砦が集落に近接する要因として、眼下に見える集落に危険を知らせることと、烽火台の維持・管理は集落の人々に寄ったためと推察される。

・郭と堀

塙崎城・屋代城に代表されるが、郭が斜面部にまで配置される城郭と、赤沢城・小坂城・唐崎山城・鷺尾城・塙崎城見山砦（非拠点的城郭）のように、基本的に郭が尾根筋に限定される城郭にわかれる。両者の相違点は、豊浦の存在と密接な関係があると思われ、特に屋代城で顕著であるが、豊浦を配置する目的には施設の構築を尾根筋に限定せず、斜面部をも利用する意味の表われと考えられる。さらに、斜面に沿って山麓までのびる豊浦は、斜面部を区画し、豊浦間の面積をほぼ一定に保つ目的を持つためでもある。このことから豊浦は、尾根全体を城郭化する軍事的緊張状態での所産ともいえる。さらに、豊浦の多用は武田氏の改修を受けた城郭で顕著に認められる傾向があり、これを武田氏築城技術の一端と解釈できる。⁽²¹⁾ 武田氏の築城技術として挙げられる横堀は、唯

一塙崎城で確認されるのみである。横堀は主郭直下に存在するが、郭を取り巻く構造ではなく、豎堀が顯著に見られる北側斜面の1カ所で、並走する横土塁を伴い豎堀と収斂する。この横堀は、豎堀と組み合った一体化した武田氏の横堀とは若干様相を異にするため、塙崎城を典型的な武田氏の縦張りとして把握できないが、豎堀と横堀の存在から、武田氏の改修を受けた



第15図 鞍骨城縦張図（註11文献より引用）

城郭（武田氏系城郭）としては位置づけられる。

堀では、斜面部の豎端以外に、尾根筋を分断する堀切と歯状堤群（歯形堤塞・連続豎堀群）が見られ、堀切は構造的に2者にわけられる。前者の堀切は、塙崎城・小坂城に顯著であるが、尾根筋を執拗に分断し、幅が尾根筋で約15~20mと大規模な堀切である。しかし、基本的に斜面部で堅堀に発展する様子はない。両城ともこの堀切は、主郭背後と猪平方向に続く尾根筋に設けられているため、この方向からの攻撃を意識していた状況がうかがえる。また、対岸の鷲尾城では、主郭から約200m奥まった倉科將軍塙古墳の前方部背後に、同規模の堀切が存在し、尾根続きの天城城方向から主郭を防衛する目的を持つ。鷲尾城の堀は、二重堀が基本的な構造で、本地域では唯一の事例で、石積みの存在とともに特徴的で、ここでも戦国期の要素がうかがえる。

この堀切の規模は、縦張り調査の実施で最も感銘を受けたことである。全國にはこれを上回る堀切があると思われるが、幅約20mの堀切が連続する様子を見たときは、“怒氣もを抜いた”一言に尽き、ここまで鋭敏した技術には驚くばかりであった。この大規模な堀切は、戦国期、外郭勢力である武田氏の侵攻以前もしくは直前の軍事的緊張状態の所産として位置づけられよう。堀切ラインのシャープさなど一般的な堀切とは様相を異にするこの堀切は、村上氏が指揮⁽²²⁾する、戦国期に表われる“堀切の大規模化”に比定される。信濃・東北信地域では、15世紀末~16世紀初頭に村上氏が勢力を伸ばし、善光寺平では同氏の支配圏が大きく占めていた歴史的背景がある。善光寺平は、16世紀（中頃）に武田氏の侵攻を受けるが、戦国期、村上氏の勢力拡大と、堀切の大規模化は関連性があると考えられる。村上氏は東北信地域で最も勢力を有する有力国人層であり、同氏の勢力拡大と支配圏の確立は、武田氏とは比較にならないまでも、善光寺平で築城技術の発展がなされ、堀切の大規模化はその具現化された姿と解釈できる。さらに磨崎山城に代表されるが、明確に掘削された痕跡が見られず、多くを自然地形に依存し、シャープさに欠ける堀がある。前者と同様な規

模を持つが、構造的には粗雑で、掘削・防御ともに不十分である。この堀は、戦国期に先行する時期、15世紀代の所産と位置づけられよう。

堀の前技術が頂点に到達した歴史的空堀群は、唯一赤沢城で確認できる。赤沢城の護城りは、本地域でも特異であり、堀の配置と構造に表出されている。尾根筋を分断した堀は、東西両側の斜面部にまでのび、山麓で収斂する構造である。さらに、空堀間に斜面の途中で始まり、山麓までのびない堀が数条存在し、並走する豊土星が認められた。この様子は、最近、三島正之氏が調査した松本平の小笠原系城郭⁽²³⁾と類似するが、詳細に規模と構造を比較すると同系列としては認識できない。善光寺平では、頗る歴史的空堀群が確認される城郭が現段階では皆無で、類例的把握ができないが、武田氏とは別系統の外部勢力により築城されたことを示唆でき、ここでは、上杉氏系の築城技術と解釈したい。⁽²⁴⁾本地域では、確切で終る城郭と豊土星に発展する城郭に分けられるようである。また、堀の構造から本地域の城郭には、信濃国人、武田氏、上杉氏の要素が具备されていることを指摘できる。

郭の様相では、尾根筋に限定される城郭のなかで、小坂城・唐崎山城・赤沢城の共通点は、城郭が郭の数と比較して広く、尾根先端の頂部に位置する主郭が狭いことである。さらに主郭を含めた郭全体を見ても、単に削平したに過ぎない平坦部が多く、複雑化の様相を呈していない。これは主郭の規模が広い鷲尾城も同様である。また、堀は堀切にとどまるため、堀との連絡により防御機能を強化した様子も見られない。反対に、斜面部にまで郭が配置されている屋代城でも、郭の構造は複雑ではなく、むしろ単純で、豊土星と一体化する様子は見られない。尾根筋に主要な郭が連続して配置され、斜面部には豊土星とともに斜面を防御する付属的な郭が存在する。一方、塙崎城では主郭の前後に郭が展開し、特に前面は細長い郭が段状に配置されており、ここで抜いた城郭のなかで最も防御性を重視した繩張りである。しかし、これは武田氏が塙崎城を改修したためであり、戦国期に存在したほかの城郭と比較して、繩張りが卓越していることは、外部勢力の影響を受けたために他ならないと解釈できる。前記したが、塙崎城での改修前の繩張りを想定すると、頂部の郭（主郭）と周囲の付属的な郭、さらに主郭背後の堀切が基本的な姿で、この様子から、16世紀に先行する大塔合戦の頃の本城郭は、要害性を重視した防衛的に未熟な城郭であったと考えられる。

以上、堀と郭の配置について触れたが、塙崎城を除き大半の城郭は、堀が多様化する反面、郭の構造が比較的単純であることが明らかとなり、前章では赤沢城と屋代城で郭と堀のアンバランスを指摘した。この様子を信濃国人系の城郭が戦国期に至り、外部勢力である武田・上杉氏が城郭を改修する際、城郭全体を改修せず、堀を中心に行った結果と解釈したい。

・土塁・虎口・石垣（石積み）

山城の中軸的役割を果す主郭で土星が存在する城郭は、塙崎城・塙崎城見山砦・赤沢城・唐崎山城・鷲尾城である。構造的には、主郭の背後である尾根鞍部側の一方に築かれている塙崎城・赤沢城・唐崎山城と、基本的に主郭を全廻する塙崎城見山砦・鷲尾城（一部崩落）にわけられる。

前者では、削り残し構造で築かれている塙崎城の土星が規模的に卓越するが、土星上部が郭と連結する通路となる状況は共通している。後者では、烽火台に位置づけられる塙崎城見山砦の土星が

主郭の縁辺部を全局する構造で、規模は虎口反対側の尾根鞍部側が最も大きい。鷲尾城の土塁も同じ傾向で、背後に堀切を持つ側の規模が體的に大きい。兩城郭の相違点は、塩崎城見山砦が土、鷲尾城が石もしくは土石混合による土塁の構造であることで、さらに鷲尾城は割り石による石積みが施されている点である。主郭以外では、堅堀および堀切の掘削で生じた土を盛り上げて構築した土塁が、尾根筋に存在する例として屋代城・小坂城・高崎山城がある。堅堀渠である土塁は、堀と合わせて尾根筋での防衛の機能の強化を目的としたものである。

虎口では、屋代城で喰違い虎口が見られるが、坂虎口が一般的である。主郭の虎口も坂虎口が多く、「折れ」・「空間」を設定して防御を強化する様子は見られない。また、鷲尾城は石積みを作り虎口が特徴的であるが、構造的には單純で虎口構造を複雑にする役割ではなく、むしろ土より石が豊富であることに起因していると考えられる。このことから、基本的に虎口に石積みを用い、虎口を複雑化する技術は戦国期に至っても普遍化していないといえる。

すでに鷲尾城の虎口で触れたが、最後に石垣（石積み）の使用について様子を見たい。石垣は土留めと建築物の耐久性が主な目的であるといわれる。塩崎城・小坂城・屋代城・鷲尾城で主郭縁辺部と周囲の郭に石垣（石積み）が用いられている。なかでも塩崎城が石垣を多用しているが、後世の開墾時につくられた石垣であり、中世段階の姿は残していない。⁽²⁵⁾

以上、構造をまとめると、主郭に土塁が存在する城郭では、背後に堀切を持つ尾根鞍部側一方に築かれる傾向がある。塩崎城見山砦に代表されるが、主郭で土塁が全局する城郭には非換点的城郭が多く、土塁間みは烽火方法に起因すると考えられる。虎口は屋代城で喰違い虎口が確認されるが、全般的には坂虎口が主体を占め、屋代城を除き城郭のなかで異なる構造の虎口が存在する例はない。また、石垣を用いて複雑化する様子は見られなく、明確な折形虎口は確認されない。さらに石垣では、基本的に城郭築城に石垣は用いず、石垣（石積み）が認められる城郭でも、石の使用は主郭部に限定され、土留めの目的にとどまるようである。

2 信濃国人系城郭と武田・上杉氏の城郭改修

前項では、城郭の特徴を列記し、城郭に表われた信濃国人の要素と外部勢力の要素についてを触れた。この様子をまとめたものが第16図であるが、ここでは大塔合戦が展開した15世紀から、上杉景勝が御荷山城を築城した16世紀（末）までの間、本地域に立地する城郭（山城）の様相を段階的に捉え、武田・上杉氏が与えた影響を垣間見たい。

・第1段階（15世紀代）

唐崎山城・小坂城（尾根筋の堀切を除く）、塩崎城（改修前）の絶張りがこの段階の様相である。尾根先端部の頂部に狭い主郭が築かれ、周囲に付属的な郭が配置されるにとどまり、斜面に帯郭が築かれない。さらに、基本的に郭には土塁が構築されない。堀は主郭背後に堀切が掘削される程度で防衛的に未熟な堀切に終始する。また、堅堀は出現しない。

大塔合戦改修の城郭と戦国期以前、屋代氏などの信濃国人の居城はこのような構造であろう。

・第2段階（15世紀末～16世紀初頭）

星代城（郭の配置）・鷲尾城・小坂城（堀切）・塩崎城（堀切）・塩崎城見山砦（出現期）・赤沢城（郭の配置）の繩張りがこの段階の様相である。

第1段階との顕著な相違点は、主郭背後にシャープなラインの大規模な堀切を持つ点と多重堀の出現で、小坂城のように尾根筋に軌跡なまでに堀切を配置する様子もこの段階である。郭は尾根頂部にとどまらず尾根筋に展開する様子は、第1段階と異なり、城域の拡大がなされた段階である。また、星代城のように斜面部に付属的な郭が築かれる城郭が出現する。非挺立的城郭では、塩崎城見山砦のように、築城技術の発展により土塁組みの城郭⁽²⁾が表われる。

この段階は、村上氏が東北信地域で支配圏を拡大し、同氏の支配が善光寺平の大半を占めた時期にあたる。国人間での長い闘争の結果、村上氏が支配圏を拡大したことと、武田氏侵攻を意識した軍事的緊張状態により、城郭の築城技術が発展したと解釈できる。

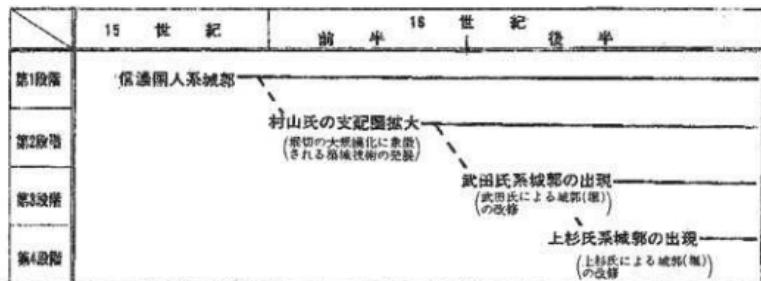
・第3段階（16世紀中頃）

塩崎城・塩崎城見山砦（廃城期）・星代城の繩張りに代表される。第1・2段階が信濃国人による築城であるが、この段階は外部勢力である武田氏が本地域に進入し、村上氏の勢力が一掃され、城郭の改修がなされた時期である。

武田氏は塩崎城を改修し、特に主郭の移動・豎堀の掘削・横堀の出現など従来の繩張りが一変している。また堀切にも手を加えたと考えられ、堀切の大規模化がなされたといえる。しかし、本城郭が同氏の典型的な繩張りを表していない理由は、武田氏が塩崎城を善光寺平での挺立的城郭として位置づけたのではなく、むしろ陣城としても利用したためであろう。なお、星代城で見られる豎堀は、塩崎城と形態的に異なる様相を示している。塩崎城見山砦は非挺立的城郭であるため、城郭の特徴が表れにくいが、塩崎城と沢を隔てて近接する様子は、塩崎城と一体をなしていたといえる。見山砦は、塩崎城で果せない眺望と時の監視を担い、武田氏が塩崎城を利用した際、砦・出城的性格を有して機能したと考えられる。このことから、塩崎城見山砦は15世紀後半に築城され、この段階で改修がなされ、城郭機能の多様化と軍事的機能の強化がはかられたといえる。

・第4段階（16世紀後半）

赤沢城（堀）の繩張りに代表される敵状空堀群（敵形阻塞・連続豊堀）は、尾根筋を分断し斜面



第16図 善光寺平（西南部）における城郭の改修

部に蛇行してのび、山腹付近で収斂するこの堀は、武田氏構築の堅堀とは明らかに異なり、松本平の小笠原系城郭に認められる堀と類似する。しかし、赤沢城の改修は後期小笠原氏によるものとはいせず、赤沢城は斜面部で堀を多用する上杉氏の影響を受けたと解釈できる。上杉氏の影響が入り込む時期としては、武田氏滅亡後、上杉景勝による福荷山城の築城があり、福荷山城の結城的性格を持つ赤沢城はこの時期、上杉景勝による改修を受けたものといえる。

以上、4段階にわけて城郭の様相を捉えた。

第1段階とした信濃国人の居城は、後に改修されなく現在に至る城郭と、改修される城郭にわかる。後者は第2段階に築城技術の発展、第3段階に武田氏の改修、第4段階に上杉氏の改修を受け、近世に至る過程が把握できた。また、武田・上杉氏の改修は、基本的に堀の多用という形で行われており、外部勢力の城郭への影響は堀に見出せることがわかった。

VII おわりに

本稿では、武田氏の侵攻が信濃の城郭史のなかで画期に位置づけられることが示唆できた。しかしその反面、対象とした地域を善光寺平でも西南部に限ったため、資料に限界性があり、特に第3段階以降における撲点的城郭の様相と周辺各地への派生について触れることができなかった。今後の課題とし、善光寺平における中世城郭像の把握に向けてさらに一步進みたいと思う。

塙崎城見山脇の調査は、昭和48年調査の小坂城跡に繼ぐ中世山城の全面発掘で、筆者が“中世城郭”と本格的に対話した貴重な経験となった。4ヶ月の調査で印象に残ったことは、主郭からの眺望である。北は須坂・南は上田方面を遠望でき、眼下では施行する千曲川と周辺に張詰している集落を手に取るように眺めることができた。この調査が、アイールドを設立した城郭調査の意欲を抱かせ、從来あまり調査の手が及んでいなかった塙崎地域に所在する中世城郭を、縦張り調査により解明したい意識に発展したのが、本稿の発端である。

本稿は善光寺平における中世城郭解明の一試論であるが、平成3年12月に始まり約1年を費やした踏査と縦張り図の作成は、“城の見方・図面表記法”と“城郭調査の方法論”、について多くを学ばさせてくれた。これは中世城郭を一層理解するためによい機会となった。今後に生かしたいと思ったことが多々あるが、ここで得た教訓は、山に登り一日中、木々のなかを尾根・谷を走りまわり、自分で縦張り図を書かなければ、中世城郭を本当に理解できない、と痛感したことである。

城郭を地城史解明の史料として位置づけ活用する必要性は、12年前に村田篠三氏⁽²⁶⁾が提唱した。しかし、その後の研究が踏査と縦張り図をベースに城郭の構造・特徴と歴史的背景の関連性を論ずる方向に進展しなかったことは、縦張り図を“必要最小限度の資料”と明言した村田篠三氏が、「この当り前のことが今まであまり行われなかつたことに、城に対する認識の低さが表われている。」⁽²⁷⁾と痛烈に表現した一文に代表されよう。

信濃については、未だ中世城郭の実態を解明する際に、縦張り図の作成が必ずしも著退化していない状況である。さらに、縦張り図による構造的把握が基礎的な研究として位置づいていないこの

地域には、この村田氏の首句は的確に当てはまり、中世城郭に対する理解度の低さを象徴しているよう。さらに、縦張り調査の本格的な実践例が皆無で中世城郭（山城）は未開拓な地といえるなかで、最近、三島正之氏が松本平をフィールドとして、城郭の特徴から小笠原系城郭の構造と武田氏との関係を論じたことが唯一挙げられる。⁽²⁸⁾ 三島氏は、戦国大名が成立しなかった信濃で、侵攻者武田氏と後期小笠原氏（小笠原貞慶）の影響力を示唆し、外部勢力が如何に改修という形で城郭に反映したか、を如実に表わした点で意義深い。現在の中世城郭（山城）研究は、松本平で三島氏が実施した踏査を皮切りに、中世城郭の独自性と地域性を導くため、信濃独自の方法論確立を目指して模索している段階である。

また、中世城郭研究の方向性については、最近、郷道氏が郷土史と中世城館との関わりについて論じている。ここで氏は「中世城館はいつまでも私も含めて愛好者のものであってほしいとも思う。」⁽²⁹⁾ と述べている。確かに今までの研究が、在野の研究者もしくは愛好者による意欲的な努力に支えられていたことは否めない事実である。しかし縦口氏も戦後の城郭研究が「『郷土愛』のレベルからしか城郭を取り上げることができなかった」⁽³⁰⁾ と指摘しているように、「郷土愛に出発する郷土史」に終始した研究を今日、その反省と研究姿勢の見直しという形で再編成しつつある動向も、研究者は率直に受け止める必要がある。さらに、構造的把握から出発する城郭研究は、構造論に終始することなく、「学際的研究（復眼的視点）」と相まって、従来の研究とは比較にならない成果をもたらすことであろう。⁽³¹⁾ 今後の発展に期待したい。

ここで、中世城郭と埋蔵文化財を比較してみたい。発掘調査では、見つかった遺構・遺物を自由に目にできるのは、調査に偶然携わった人々に限られる。一般の方々への公開は、現地説明会という形で行われるが、残念ながら市民権を得ているとは必ずしもいえない。その点城郭は、研究者・一般市民の隔たりなく「山に登れば容易に見る」ことができる。このことは、非常に重要なことであり、さらに研究者が“中世城郭”的特徴と地域性を導き出した後、一般市民に還元できる文化財でもある。

再述するが、城郭と民衆との調適性を論じた「山小屋論争」の火付け役である信濃では、今後研究者の意欲的な踏査により、南平地（郭）・堀などの構成を把握し、中世史解明の史料として位置づける方法が普遍化して、地域単位で具体的に進行する姿を望むことで筆を置きたい。

最後になってしましましたが、本稿執筆に際して更埴市教育委員会の佐藤信之・矢島宏雄両氏には、「都市計画図」の便宜をはかつて頂き、城郭についての教示を賜った。また、縦張り調査に同行してくれた小山丈夫氏には、善光寺平の歴史的背景と関係する文献について多くの教示と指摘を頂いた。ここに感謝の意を表す次第である。

- 註1 國立歴史民俗博物館・千里道傳氏の活躍に代表される。さらに、十分資料化がなされていない報告書を目にすることも、その表われである。
- 註2 村西修三 1986 「最近の城郭史研究の成果と課題」(『北陸歴史研究会報』21号)
- 註3 新完全では「金沢城郭研究セミナー」、論文集では村田修三編 1990 「中世城郭研究論集」・石井 道・萩原三雄編 1991 「中世の城と考古学」などがある。
- 註4 河西 1992 「塙崎城見山砦」(『長野県埋蔵文化財センター年報』8)で成果の概要を報告した。
- 註5 押横 1992 「甲信地方における最近の中世城郭調査」(『考古学ジャーナル』第353号)でも触れた。
- 註6 一般に「撫点的城郭」とは、侵入した外部勢力が支配権の確立と拡大を實現して無く城郭を構す。例後では特に武田氏が築いた城郭が相当するが、武田氏侵攻以前、小堀城を支配した信濃国人の居城も典型的城郭に類するといえる。したがって、2者の撫点的城郭が存する。
- 註7 塙崎村史刊行会 1971 「塙崎村史」所収の「中世遺跡所在図」には、今日では標記されない城郭・岩陰が記載されている。しかし、位置は伝承をもとに比定しており、史料的裏付けは皆無である。
- 本論稿で宮藤氏は、最近塙崎地域で発掘調査がなされた方形館を、池輪型を用いて居館と用水との関連性を指摘し、この地域での居館・屋敷の立地について論じている。
- 註8 長野県史刊行会 1987 「長野県史」・通史編・第3巻 (中世2)
- 註9 註8前掲文
- 註10 「塙崎」という名前がつく城郭は、「塙崎城」・「塙崎新城」の2カ所があり、文献史料にもこの城郭が登場する。現在、城郭と文献史料の間に混乱が生じており、研究者により見解が異なる。本稿では前者、長谷義幸の裏山、白鳥地蔵に存在する塙崎城を、大塔合城の「塙崎城」とする説をとる。
- 註11 中田正光 1988 「戦国武正の城」
- 註12 城郭に外郭勢力の特徴が表れる原因是、直接的な攻撃と築城技術の伝播、の2要素があり、武田氏の特徴が存在する城郭を武田氏の施設と判断はできない。したがって、本稿では外部勢力の影響を受け、武田氏・上杉氏の要素が併存している城郭を「武田氏系城郭」・「上杉氏系城郭」と呼ぶ。なお、外部勢力の影響を受けない城郭を「信濃国人系城郭」と呼ぶ。
- 註13 矢崎憲之 1973 「塙崎における古道への懷想」(『長野』第61号)
- 註14 村西修三 1987 「林城」(『図説中世城郭事典』第2巻)では、「土塁籠み」の出現を16世紀前半としている。
- 註15 三島正之 1988 「小笠原領域の山城と武田氏」(『中世城郭研究』第2号)
- 註16 林 博好 1990 「尾代氏覚え書」(『信濃の歴史と文化の研究』2・黒坂周平先生喜寿記念論文集)
- 註17 今回の調査団には、斜面に築かれた帝都を後記できなかったが、井原今朝男 1983 「廃帝城をめぐる中世の更埴地方」(『ちゅううま』第4号)に掲載されている調査団で確認される。
- 註18 「更埴地科地方志」第2巻・中世編(1987)・「日本城郭大系」第8巻(1980)
- 註19 「鷹尾城」(『日本城郭大系』第8巻)
- 註20 宮崎卓也 1973 「善光寺平南面の古墳」(『長野県森将軍塚古墳』)。また、中世段階で手が加わっていることは「地底研究報」第13号・1969(長野県星代高等学校地質組)でも触れている。
- 註21 三島正之 1990 「黒川城をめぐって」(『中世城郭研究』第6号)では、「主郭部を取り巻く環濠」と「放射状の堅堀」を武田氏の築城技術として挙げている。
- 註22 村西修三 1987 「城の発達」(『図説中世城郭事典』第2巻)
- 註23 註14前掲文
- 註24 上杉氏が築いた城郭の特徴が把握されていないが、ここでは「斜面部で規則性のない縦の多用」と「扇状空堀群の存在」を特徴とした。

- 註25 村田修三氏の現地指導による（1992年1月13日）。
- 註26 村田修三 1980 「城跡調査と戦国史研究」（『日本史研究』第21号）
- 註27 村田修三 1987 「諸張団の世界」（『図説中世城郭事典』第3巻）
- 註28 註25前掲論文
- 註29 郡道哲章 1992 「郷土史と信濃の中世城館」（『古代・中世の信濃社会』源木 学先生退官記念論文集）
- 註30 柳口定志 1992 「中・近世一城館をめぐる調査・研究ー」（『考古学ジャーナル』No347号）
- 註31 梶橋 1992 「最近の中世城郭研究から」（『信濃考古』第126号）では同様な指摘と基礎資料作成の必要性を記した。

追記 1

本稿執筆中に、興味深い2つの論文を目にした。ひとつは井原今朝男「『いくさ』と民衆」（『歴史評論』第511号）である。いわゆる“山小屋論争”は、井原氏が「山城と山小屋の階級的性格」（『長野』110号・1983）を執筆したことに関連するが、ここで氏は、この論争が本人の意志と全く無関係に一人歩きしたことを述べ、合わせて現在の城郭研究の動向に触れている。この論文は、信濃国伊那谷における武田氏の防衛体制（元亀3年）を考察し、中枢的な城郭・防衛機能を持つ諸城群・小規模城郭群・山小屋が道路網とセットで地域防衛機能を果たしたと論じたものである。ここで井原氏は戦時下での城郭と民衆の関わりを、エンゲルス、ボーグエン・ザップを基礎として論じている。筆者が浅学なため、残念ながら氏の意図することをすべて理解できないが、その視点には大いに学ぶべき点がある。論旨の最後に氏は、繩張り研究が特徴的な繩張りを表出する城郭を“典型的な城郭”とする状況を指摘し、城郭の構造論・バーツ論に終始している現状を批判している。これは確かに的を得た指摘ではあるが、井原氏が言う“個別城郭の調査研究”の成果によって、城郭構造の多様性と支配地での外部勢力の城郭改修が浮き彫りにされたことは明らかである。さらに、文献史料ではアプローチできない事象を捉えた事実を考えると、氏が言う“有効性を失う方法”論ではないと思われる。筆者は、構造的把握を城郭実態解明の第一義的な基礎的作業と考え、後に地域支配の実態と本城・支城網の把握に進展する姿勢である。したがって、現段階では異なる立場であるが、最終的には井原氏と同様を視点で、中世城郭をさらには城郭と民衆との関連性を論じることになると思われる。

もうひとつは三島正之「青柳城をめぐって」（『信濃』第44巻・第11号）である。ここで三島氏は、青柳城の構造を小笠原貞慶が天正年間に直接支配に乗り出す事象と結びつけています。さらに麻績・青柳地域における城郭の近世化は、小笠原貞慶による城郭改修に位置づけているなど、戦国期から近世初頭段階の移行期の様相を考察した論文である。三島氏のような繩張り調査が進行する上で外部勢力が信濃の城郭に与えた影響力が明らかとなって行くと推察され、信濃における城郭の姿が浮き彫りになる日もそう遠くないと思われる。

追記 2

本稿は、脱稿後約3年を経過している。その間、塩尻城見山砦の報告書が刊行され、遺跡の評価

が若干変わった。さらに、城郭調査の成果と多くの論文を目にしたことにより、現在は若干異なる見解となっている。このことを明記するとともに、新しい資料を加えて別稿に期す予定である。

—自然からのおくりもの—

松原遺跡を主とする昆虫遺体をめぐって

興水太仲

I 廃土中の食糞性コガネムシ

①ツノコガネ

Liatongus phanaeaeoides (WESTWOOD).

第3図

②マエカドコエンマコガネ

Caccbiurus jessoensis HAROLD

第2図

③ヒメコエンマコガネ

Caccbiurus brevis WATERHOUSE

現生種体長 3.5-5.5mm

④クロマルエンマコガネ

Orthophagus dfer WATERHOUSE

第1図

⑤コブマルエンマコガネ

Onthophagus atripennis WATERHOUSE

第4図 5.0-9.0

これらは松原遺跡で環濠の深堀りをした折、低湿地の廃土中から採取した数多くの昆虫遺体片を種同定したものの一例である。(コガネムシ科ダイコクコガネ亜科)

◎ 現世生物・昆虫類・甲虫類

現在、地球上に生存する全生物のうち最大種数を占めるのは昆虫類である。その昆虫類のうち、カブトムシやコガネムシのような、鞘翅目昆虫(甲虫類)は現在約37万種記録されている。しかし毎年1,500種～1,800種が追加されているので、実数は74万種以上になるだろうと推定されている(1986)。一方別な推計では、全昆虫300万種、うち甲虫類100万種との説、また500万種との考えもあり、その実数は未知の現況にある。日本の甲虫類はこれまでに約8,800種が知られている。いずれにしても地球上の全生物中、4分の1は甲虫類が占めている。

◎ 食糞性コガネムシ

日本産コガネムシは約400種が知られ、これらは食性から食糞と食植性群の2大群する。

J.A. ファーブルが40年もかけてその習性を詳しく調べた“タマオシコガネ”(ヒシリタマオシコガネやイスパニヤダイコクコガネ)は世界に知られた有名な食糞コガネムシである。古代のエジプト人たちも、タマオシコガネの習性は知っており、炎天下に糞玉を転がす知恵者に、神の存在を感じ尊敬し、石や歎玉、時には粘土で彼らの模形を造り、神殿に納めたり身に付けたりしたと云う。更にエジプトの王は、世の最下位の魔物である糞塊の中から“太陽の光を持った虫”的出現に神を見、この甲虫を模した金印を造ったと聞く。これらから“スカラベ”(Scarabaeus)の名が発祥した。

日本産食糞性コガネは、タマオシコガネの親類ではあるが、糞玉をころがすものはない。(ころがすと云う報告もある)ダイコフコガネやエンマコガネは、だ円の糞玉をつくり、この上部に卵室をもうけここに産卵する。

④ 食糞性コガネの体形

世に変わった奴は多いが、このコガネムシも変わり者である。これも神のなせる業でいたし方ない。お陰でこのコガネムシ類の総俗名は“糞虫”であるが、これはまだしも、“マグソムシ”“クソムシ”と下がって“ウンコムシ”に至ってはどうにもならない。しかし彼らは世間の俗称など聞知せずその生活に懸命である。神は彼らに次の様な道具と特点を与えることも忘れない。

①体の大きさは体長28mmが大きい方の種類で、大いには10mm内外、小さいものは2mmである。このことは大形歯がない日本では食物に制限があり、小形であるに越したことはなく、また糞塊中を自由に往行するには体は小形の方がよい。

②体色は黒・茶・褐色系で地味なものが多めであるが、糞塊色にまぎれることは、外敵から身を守ることになる。

③脚力は極めて強く、糞塊の中や糞下の地面を往行するには、ブルドーザー的エネルギーを必要とするので適している。

④前脚の外側には突起があり、これで糞塊を自在に細蹴とする。いわばツルハシの役をなす。

⑤頭は平板状で、先が尖り、ショベルの役をなす

⑥眼は頭の基部にあり、ショベルの上下が見えるよう上、下面にまたがる様についている。

⑤ 食糞性コガネの性格

地表に糞塊が落ちると、その香気が風によって四方に拡散する。この香気はコガネムシの触角にある趙ミクロの感覚器によって感知される。この時香氣の流れ来る方向は無論、食べてすして味もわかる様になっている。従って臭と味が己の好みであるか否かはその時点での識別され、好みとする場合は即刻行動を開始する。ちなみに前記5種体の好みとする傾向は、

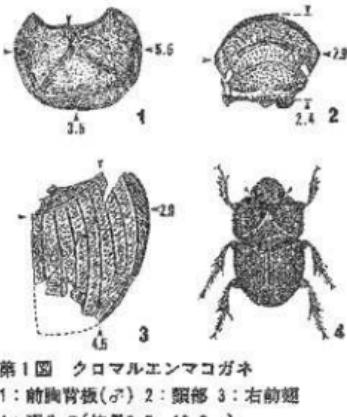
- ①ツノコガネ
②マエカドエンマ

} 糞質。

- ③ヒメコエンマ
④クロマルエンマ
⑤コブマルエンマ

} 蛋・人糞のほか腸肉。ク
ロマルはこのほかに腐敗
植物等。

である。



第1図 クロマルエンマコガネ

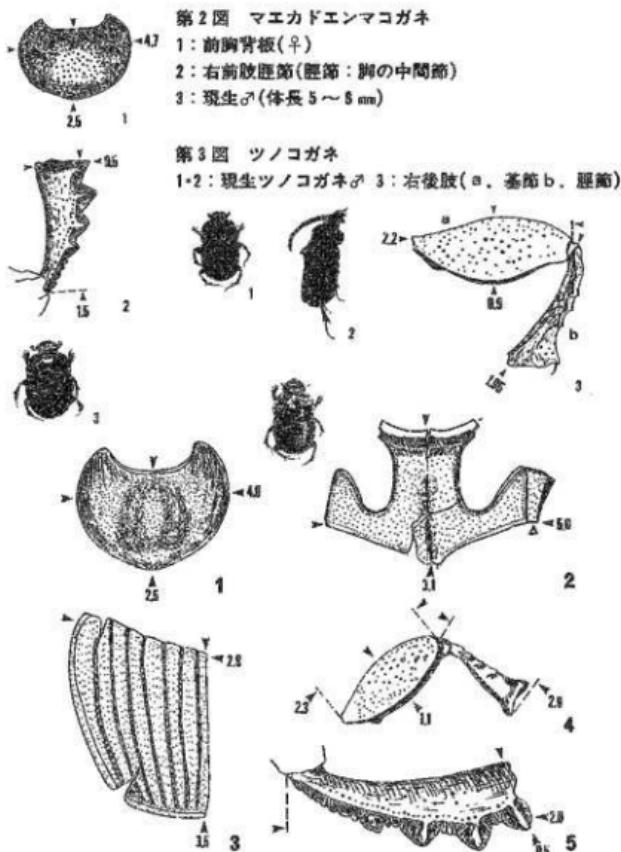
1: 前胸背板(♂) 2: 頭部 3: 右前翅
4: 現生♂(体長8.5~10.0mm)

*図中の数字は検体の長さ(mm)

1~3の出土検体は1個体の3片ではなく別

糞に集まるまでには、ある時間が経過する。この時間(以下の場合)

時間経過は真新しい糞の温度低下をさせると共に糞



敗をもたらしたり、適度の乾燥をもたらす。従って数日後からコガネが集まりはじめ糞が完全に乾燥したり、雨水でこわれたりし、半ば土化して糞塊の原形を止めなくなるまで生活して、また新しい糞を求めて移動する。この間に糞下の地面や地中に糞を貯える室を作り、これに糞を運び入れ、その上部に卵室をつくり産卵する。卵は幼虫になるとその糞を食べ育つのであるが、卵のために貯えた糞を食べ終える時、幼虫は蛹になる時が来るようになっており、そのままそこで孵化し、成虫になるのである。

◎ 梗体の齧るもの

廃土から採取した多くの昆虫遺体片のうち、食肉性コガネムシについて概記したが、このことをもって松原遺跡古環境復元をするにはいさか早計であるが、その一端を読みとることはできる。

- 昆虫遺体を多く含んだ塗の一帯にあたる地層には大小無数とも云える焼鉄塊が散在し含まれていたが、それらの核は皆骨片であったことで、ここには当時多くの歯骨片が投棄されていた。あれだけの骨片が投棄されるには、相当の歯類が解体され、それにともなう消化管内容物も多く投棄されたであろう。
- これらが投棄されるいわゆるゴミ捨て場であったとすれば、人鶴、獸鶴、人間の残骸類もまた多かれ少なかれ投棄されたに相違ない。
- 現生昆虫の量的分布の推測に、一頭(匹)の昆虫を採取した場合、その付近には100頭の同種個体が生息する推測がされている。
- 一個の化石が出来る場合、条件にもよるが、時として1万分の1の残存率とも云われる。
- 推測をより確実に近づけるためには、より多数の検体を必要とするが、各種別ごとの個体分は採取しているので、当時かなりの数の昆虫が群れていたにちがいない。
- かなりの広範囲にわたり、且つ厚い層のいたるところから採取されるについては、長年月ここが昆虫の誘引をしていたであろう。從って平地性のものは無論、山地性のものも生息し、ここで発生を繰り返していたに相違ない。

II 昆虫遺体の採取と処理

石化したいわゆる昆虫化石の処理は問題ないものの、近年発掘が盛んになるにともない出土する昆虫化石(遺体)の扱いは未だ日浅く、その方法は安定していない。たまたま野尻湖発掘で出土した検体の処理を、昆虫担当の野尻湖昆虫グループが創始的にまとめてはいるが、試行段階での公開と聞く。最近昆虫学が発展へ進出の動きが本格化し出したようであるから、その処理法もまたこれから定着するであろうが、私的処理の経過を記す。

① 昆虫遺体の採取

土塊または土層の中にある昆虫遺体は、それが出土した時点では多くのものが光って見える。^{mm} 単位の大きさのものであるから注視を要するが、この光った部分を中心にして周囲の土も含めて削り取るか切りとり、これを一塊ごとに小箱か、写真フィルムのケースに収納し、乾燥をさける。

昆虫の体は鏡のように硬い部分片の組み合わせ構造(体節の集合構造)になっており、節間は薄皮で連結しているため、土中に埋没していたものは節分離していることに配慮した採取をする。

② 遺体片の取り出し

採取した土塊は、これをペトリー皿にのせ、拡大鏡を用い土塊をくずしつつ遺体片を取り出す。取り出しにくい時は土塊に水を与えると容易になる。取り出す際、多くのものは一節片のみであるが、近接して数片がある場合は、これが同一個体の可能性があるので一括しておき、他と混同しないようにする。

③ 水洗

取り出した体節片はその大きさにもよるが、数滴の水中で、細筆をもって検鏡しつつ洗う。この時筆の毛一本が資料を破損する様な被災なものあることを承知し、高周波洗浄などの使用は禁物である。

多くの場合、節片の裏側に植物の毛根や網土砂が付着していたり、表側の微毛間や凹部などについた土が、思う様に離脱しないが、根気よく除去する。

◎ 保存

水洗した資料の保存法について、多くは保存液による液漬け保存をしているようであるが、野尻湖昆虫研究グループは合成樹脂による封入法をとった。しかしこれも確信は持てない由のコメントを得ている。現時点では最良の方法はない模様である。

試みに現在昆虫液漬保存液として用いるFAA液（アルコール70%68+フォルマリン30+サクサン2各容量混合）で、サンプルピンに保存してみたが、液の振動により資料の破損があるほか、必要に応じ、資料の取り出しに困難であったり、そのためには破損することがままあつたので取り止め、今はサンプルピンに脱脂錠を入れ、ピンの内壁と脱脂錠との間に資料と鉛筆書きしたデーターとを共にはさみ込み、少々のFAA液を注入し保存している。

◎ 同定

物を類別しようすることは人間の本能的所作で、生物分類の祖は古くアリストテレスにはじまる。その後幾多の試みと觀點が唱げられつつ15世紀には分類の最盛期になり、多くの学者が諸説を提案した中で、リンネ（Carl von Linné 1707-78、スエーデン）はその著「自然の体系」で“種”（Species）を分類の基本単位とし、名前に二名法を採用した。これが今日の系統分類学になり命名については国際命名規約に従って行なわれている。昆虫も例外でなく、名前（学名）によって昆虫類中の系統的位置をも示している。

昆虫の分類は主として外部形態や色彩、光輝、などを基準として来たが、新種の出現に合わせ近似種の分類対応に多様な觀点がとられつつあるものの從来の觀点は重要な役割を占めて記載されている。この配載に基づいて、他個体の判別をするのが“同定”である。

一般に昆虫は1,000年や2,000年の間には何ら変化なく100万年のオーダーでも不足である。従って遺跡出土の昆虫遺体は現生昆虫に対比される。しかし分布の相違は極めてはげしいし、地域差もこれに加わる。

遺跡出土の昆虫遺体は、埋没時以来、土中の菌類や植物根などによって分解消滅が早く、特に軟弱部位ははなはだしいのが常で、1個体100%又はそれに近い数値は皆無で、硬く丈夫な体表皮のキチン質部が100%近く残存すれば最良で、これとて好条件埋没でない限り激少ない。これらのことから出土昆虫の多くは、硬キチン部の多い甲虫類が出土割合の上位となる。しかしそれらも完全でなく破片であったり、体の一部位のみであったりする。さてこの限られた部位をもっての同定は、

○検体部位は、昆虫体のどの部分か？

○色・形・大きさ・性状などからどの群に相当するか？

○昆蟲類のどの目、どの科に属するか？

の過程を経、"科"まで追い込めば50%同定できたも同然である。次に

○最も近い同種を推定し、これと照合する。

この場合その部位が、種分類の重要な観点位置に相当していない限り種の決定はできかねる。この時は、現生近似種をより多く扱い比較部位の微細構造の決定的差異点を見つけ、その部位による種別を試み類別した上で検体の照合をする。この作業が時により気の遠くなる様なエネルギー消耗となる。しかし、多くの場合出土昆蟲の種は現生昆蟲のうち"普通種"と云われるものが多いで、あらかじめこのことも考慮し追求すると、意外に徒労に終始しなくてもよい場合もある。困難するのは、検体と同一現生種がこの地方には分布していなかったり、極めて稀にしか見られないような引き合わせ標本の手持ちがない時である。

現生昆蟲の分類が、昆蟲の体表面構造を分類のために特徴となる部位に限っているのは仕方ないが、発掘昆蟲遺体片をもって分類できるようにならないものかと考える。

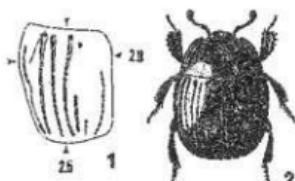
III ゴミ捨て場の昆蟲記

⑤ヒメツヤエンマムシ（第5図）

Hister simplicicornis Lewis

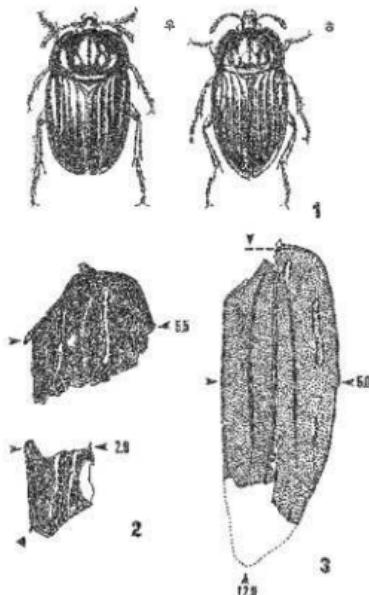
体長4.2-6.5mmの小さな甲虫で、体は極めて厚く頑丈な甲でおおわれ、黒色のつやがある。エンマムシ類は日本に800種ほど知られ、ヒメツヤエンマは普通種である。分布域は本州、四国、九州、佐渡のほか朝鮮半島、濱州島などである。

この甲虫は、家畜糞堆肥の比較的新しいものの下や、腐肉、腐野菜下に好んで集まる。肉食性で、駒肉のほかハエ類のウジを好んで食べる。木材の樹皮下や材穿孔害虫の孔道などにも見られるが、これもそこにすむ害虫の幼虫を捕



第5図 ヒメツヤエンマムシ

1：左前脚 2：現生種（体長4.2-6.5mm）



第6図 オオヒラタシデムシ

1：現生種（体長18-23mm） 2：♀右前脚（△は♀を示す突出） 3：♂右前脚

松原遺跡を主とする昆蟲遺体をめぐって

食するためである。

エンマムシの種別分類観点は、前翅背面条溝のあり方によるので、検体が前翅であったことは半で、別に頭部もあるが、こちらは種の判定はできかねる。

⑥オオヒラタシデムシ（第6図）

Eusilpha japonica (MOTSCHULSKY)

和名の“シデムシ”は“死出虫”又は“埋葬虫”的漢字をあてる。動物の死体腐肉に好んで集まるほか、人糞や獸糞にも集まりこれらを処理するほかマイマイ（デンデンムシ）も食べることがある。便所が現在のように衛生的施設でなかった頃、家のまわりや、畠畠の“野だめ”（肥だめ）や堆肥のまわりで普通に見られた甲虫であるが、今はずっとその数が減り、遠からず稀種になるのではないかとも思われる。

体長18~23mmと大形で、少し背脊を帯びた黒色の甲虫である。分布は学名が示すように、日本特有の種で、沖縄を除く全土に分布している。

この甲虫は前翅端で♀♂の判別がつき、翅端内側に刺状突器のあるのはメス（♀）であり、検体には両者が見られた。

⑦モンシデムシの一種（第7図）

Nicrophorini Sp.

シデムシ科の甲虫は日本に38種が知られ、これを4グループに大別する。モンシデムシはオオヒラタシデムシとは分類上属を異にするが、生活・食性はほとんど異なるところがない。シデムシ科の甲虫のほとんどは全体が黒色であるのに対し、モンシデムシの多くは黒地に黄赤色の帶を持ち、その帶紋の巾や紋中の黒点紋や、触角の形状などで種の区別をする。

ここに記した検体は、モンシデムシの胸部上面の甲（前胸背板）で、分類観点になつていい部位である。大きさでは種の決定はできず、微細構造も差異点が認められず、凹凸は各種同様で加えるに前縁部が欠損しているなどのため「種」の決定は出来かねる。

ソウシ目（双翅目） DIPTERA

イエバエ科 MUSCIDAE

⑧オオイエバエ

Muscina stabulans FALLEIN

第8図3

⑨ヒメクロバエ

Ophyra Leucostoma (WIEDEMANN)

第8図1

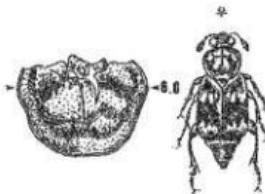
ハナバエ科 ANTHOMYIDAE

⑩クロオビハナバエ

Anthomyia illocata WALKER

第8図4

ノミバエ科 PHORIDAE



第7図

左：モンシデムシ S.P. 前胸背板

右：現世マエモンシデムシ

(体長13~25mm)



第8図 ハエ類の蟠

- 1: ヒメクロバエ 2: ニクバエ 3: オオイエバエ 4: クロオビハナバエ
5: ノミバエ(コシアキノミバエ?)

⑩コシアキノミバエ

Diploneura cornuta (Bigot)

第8図5

現生日本のハエ類は多く、少なくとも50科以上数千種（世界で数万種）が記録されている。ハエ類は一般に衛生上有害昆虫とされているが、これらは一部で10数科約200種である。

ハエの分類は主に成虫を対象とする。出土検体はみな蟠であったため、明らかになったものは少ない。

ハエ類の発生源は一般に獸・人糞をはじめ、腐肉・腐植物質、などで、上記各種もその範中にある。精査により個体数や種数も多くなることからも、検体採取地点がゴミ捨て場様の腐敗物の多い所であった裏付けがされる。

IV 食植性コガネムシ

⑪コクロコガネ

Halotrichia picea WATERHOUSE

第9図3, 4

⑫マメコガネ

Popillia japonica NEWMAN

第10図

⑬コガネムシ

Mimela splendens GYLLENHAL

第9図10, 13

⑭ドウガネブイブイ

Anomala cuprea HOPE

第9図1, 2

⑮サクラコガネ

Anomala geniculata MOTSCHULSKY

第9図9, 12

⑯ヒメコガネ

Anomala rufocuprea MOTSCHULSKY

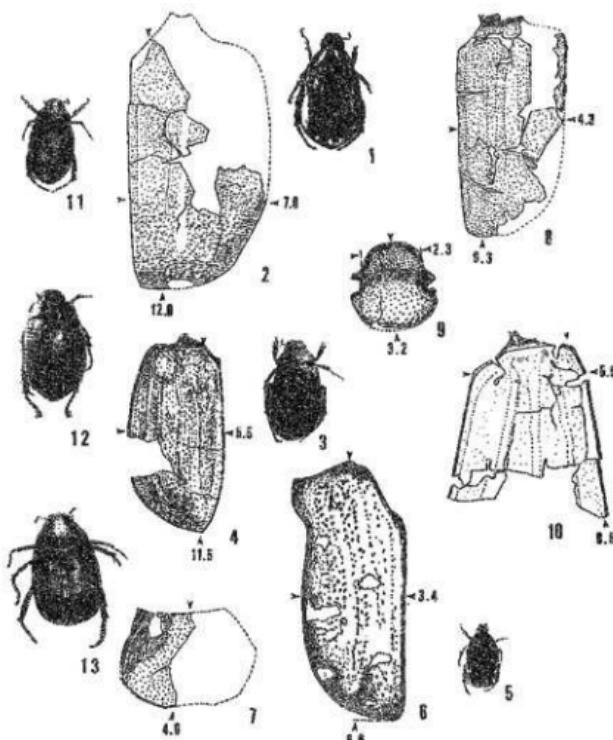
第9図8, 11

⑰コアオハナムグリ

Oxycetonia jucunda (FALDERMANN)

第9図5, 5

以上6属7種のコガネムシが、食植性コガネとして判明した。これらはいわゆるコガネムシ形の



第9図 1: 現生ドウガネブイブイ(体長17~25mm) 2: 同右前翅 3: 現生コクロコガネ(体長16~20mm) 4: 同左前翅 5: 現生コアオハナグリ(体長10~14mm) 6: 同左前翅 7: 同前胸背板左半分 8: ヒメコガネ右前翅 9: サクラゴガネ頭部 10: コガネムシ左前翅 11: 現生ヒメコガネ(体長12.5~16.5mm) 12: 現生サクラコガネ(体長15.5~21mm) 13: 現生コガネムシ(体長17~24mm)

甲虫で、種別に体色は異なるもののつやのある美しいものである。

③はクロコガネ属日本産10種余のうちの1種である。幼虫は畠地や田畑の土手、草叢など、比較的軟かい土質の土中に生活し、草本類の根などを食害するため、ゴルフ場はじめ農業の害虫にもなっている。早春から8月頃にかけて成虫が土中からはい出るので、発芽現象でもまま見掛けことがある。九州以北に分布する北方系の甲虫である。

第10図はマメコガネ属の代表で、他の3種とともに北海道以南に分布する日本独特の種である。近年多く見掛けないが、畑作豆類の葉を食害する大害虫で知られ、1916年頃日本から北アメリカに移

入したものが大繁殖し、畑作物に大害を与える“ジャバニーズ・ピートル”とおそれられたことがある。野生の草本・クズの葉上などで群れているのをよく見掛けることもある。

⑩はいわゆる“コガネムシ”的代表種で、北海道以南、インドシナ半島まで分布する、成虫はサクラのような歓賀広葉樹の葉を好んで食べる。7~8月の螢光に集まることがある。

⑪~⑫はサクラコガネ属日本産40余種のうちに属し、食葉性コガネムシのごく普通種で多くいる種類である。

⑬はコアオハナムグリ属で日本産種は亞種共に約6種はこれに属する。多くの食植性コガネのうちこの種は、バラの花を好みこれに集まり吸蜜したりその花を食べる。

体表面に長い毛が密生している点で他のコガネとタイプを異にする。時により畑作物のネギの花(ネギボウズ)に群れることもある。

以上食植性コガネムシの概要を記したが、これらは林縁部の高木葉上やそこにあるツル性植物のクズ、あるいは畑作物などのあるような所に生活する種であることから、これらの甲虫が出現した時点の周辺環境が、ほんのり想像される。

V 畑地辺の甲虫

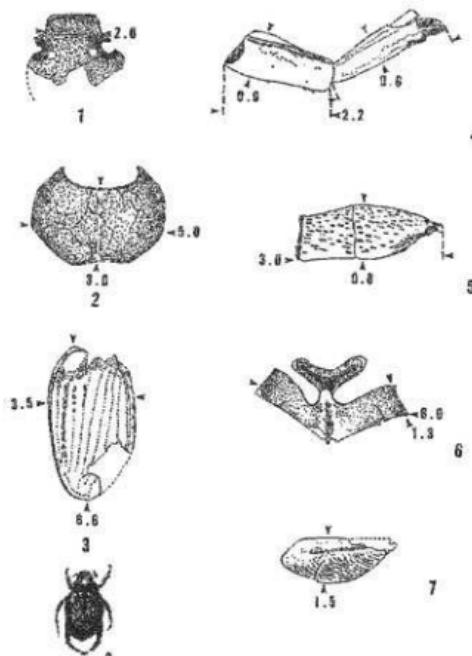
⑭ナミテントウ (テントウムシ)

Harmonia axyridis (PALLAS)

図版番 現生種体長 4.7~8.2mm

甲虫類でよく知られ、親しまれている可愛いテントウムシの代表種がこれである。

日本のテントウムシは160種以上が知られ多くはアブラムシやカイガラムシを食べることから益虫とされるが、一部には食植性のものがあり、これを害虫としている。



第10図 マメコガネ

1:頭部前半分 2:前胸背板 3:右前翅 4:左前脚(左・腿節
右・脛節) 5:左中肢基節 6:後胸腹板 7:左後肢基節 8:現
生マメコガネ(体長8.0~13mm)

松原遺跡を主とする昆蟲遺体をめぐって

ナミテントウは背面黒地に2赤紋を配した最も普通のものから4、12のものや、黄赤色地に黒紋18を配したものなどの遺伝的斑紋型のものがある。

検体は発見当初、ツヤのある黒色翅で、中央部が大きく円形に欠損しているもので、欠損部を埋めた時、翅形、色、ツヤなどの点で該当する種が無く、困惑のまま長期除外して置いたが、その後再検の折、中央欠落部の一部に極小の黄色部の残存することを発見し、一気に解決した検体である。このことによって、腹端節も同種であることが導き出された。昆蟲遺体の同定には、このような夢想がしばしばで、困惑の上旬、長時間放置し、その間にふと該当する種を想起しては再検に再検を重ね、ひどいのは半年・1年、かかる場合もある。この様な多くし解決した上旬がしごく半近なものであることが多い、都度“虫好きが虫も見れず”とさいなむ。

④オオニジュウヤホシテントウ 第11図

Epilachna vigintioctomaculata

MOTSCHULSKY

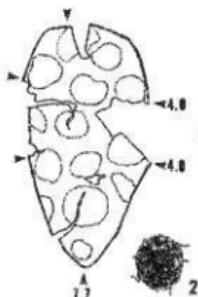
“テントウムシダマシ”的呼称の方が知られているかも知れないが、ジャガイモをはじめ、ナス科植物を食害する衆知の害虫である。

この検体も少なからず振り廻された上旬の同定であるが、黄褐色の地色が黒褐色に変色し、これに黒紋の黒が加わり全體面黒褐色に見えたからであった。

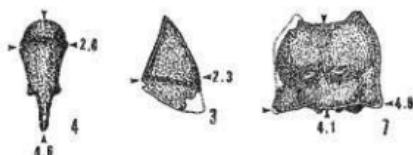
⑤ホソサビキコリ

第12図

Agrypnus fulliginosus (CANDEZE)



第11図 オオニジュウヤホシテントウ
1：右前翅
2：現生オオニジュウヤホシテントウ
(体長6.8~8.2mm)



第12図 ホソサビキコリ

1~2：現生ホソサビキコリ(体長13~20mm) 3：前胸側板 4：下唇基節 5：後胸腹板 6：腹節板(上より後脇基節・第1~第5腹板) 7：前胸背板 8：左前翅

コメツキムシは“叩頭虫”と書くように、ひっくり返し、背を下にして机上等に置くと、器用にはねて起き上がる虫で、コガネムシやテントウムシと共に良く知られている甲虫である。

日本産現生種は約600種が知られ、体長1mmほどの微小種から80mm（日本産ではない）位のものまであるが一般には10mm前後である。分類の困難な種の多い一群である。

検体はサビキコリ族6属中のホソサビキコリ属の一一種で、外見よく似た仲間が数種いる。現生ホソ

サビキコリの幼虫は土中生活で、成虫は畠地やその周辺の土手、開けた裸地状の地面や、あまり高くない草木上を生活圏としている。そのため体表に土の付着したものをよく見掛ける。

以上テントウムシ、ホソサビキコリなどの検体から、畠地や人里から遠くない林縁の裸地のある古環境が想起される。

VI 水生甲虫

②ゲンゴロウ

Cybister japonicus SHARP

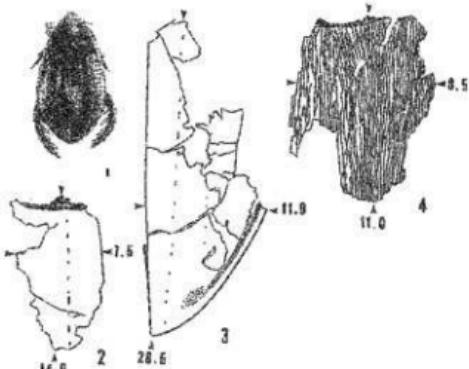
③ゲンゴロウモドキ

Dytiscus douricus GEBLER

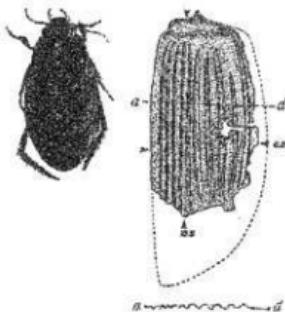
昆蟲類の一部には進化の過程において、二次的に水中生活を選択したもの、一生を水中で過ごすものはいないし、また深水中で生活するものもない。

ゲンゴロウは水生甲虫類の代表種であり、一般によく周知され親しまれて来たほか、二次世界大戦時には食糧ともされ、現在も“珍食”に供されているところがあると聞く。しかし近年自然環境の急変に追いつかず、全国的に減少し絶滅危惧になりつつある。日本産現生ゲンゴロウは約90種が記録されている。

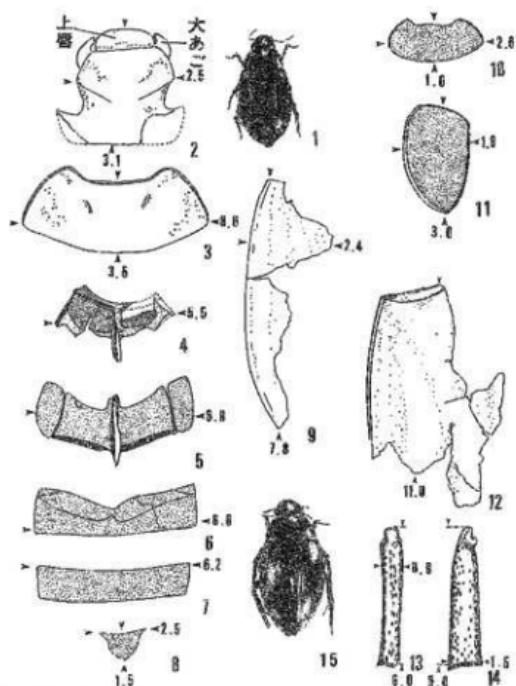
検体は翅片で、現生のそれと比較にならぬ明黄色に変色していた。この色彩のために同定を困難



第13図 ゲンゴロウ
1：現生ゲンゴロウ♂（体長30～39mm）2：♂左翅（右上端部）
3：♂右翅（左寄中央部）4：♀左翅（中央上部）



第13図 第14図 ゲンゴロウモドキ
左：現生ゲンゴロウモドキ♀（体長31～35mm）
右：♀左翅（下：断面略図）



第15図 ガムシ類

1～9：コガムシ

1：現生コガムシ（体長16～18mm） 2：頭・口部 3：胸部背板 4：前胸腹板

5：後胸腹板・側板 6：腹部腹板基節 7：同中間節 8：同端節

9：左前翅左縁部 10～11：セマルガムシ

10：前胸背板 11：右前翅

12～15：ガムシ

12：左前翅左上部 13：左前肢脛節 14：右中肢脛節 15：現生ガムシ（体長33～40mm）

る。

②セマルガムシ

Coelostoma stultum (WALKER)

③ガムシ

Hydrophilus acuminatus MOTSCHULSKY

④コガムシ

にした。しかし翅端縁部に残るわずかな黄帯で判別できたのが♂で、♀は変色もなく翅面に特有の線状痕があることで判別できた。

翅縁の黄帯はゲンゴロウ特有のもので、体形のよく似た次記種“ガムシ”とは全くの別種であるのに混同されることがままあるので、要注意。

ゲンゴロウモドキは、これを求めて県内を探すこと30年余の、感激的初対面の♀標本であった。

この標本が、図の半分大であつたり♂標体のものであると、同類の別種3種と区別することが極めて困難になるところであったが、端部数mmの残存により大難からまぬがれ、長野県産最初記録とすることができたことを嬉びとする。

同属の近似種3種と共に日本の現生種分布域は新潟県（佐渡）以北にある北方系種であるが、ゲンゴロウモドキの旧分布域は長野県にも及んでいたことの実証標体でもあ

現生種体長

第15図 4～5mm

第15図

Hyalocord affernia (Sharp)

第15図

ガムシ類の大形種は一般に、前記ゲンゴロウと混同されるが、分類上“科”を異にし、全くの別種であり、ゲンゴロウの肉食性に対しガムシは雑食性で♂の前脚に吸盤もない。

現生セマルガムシはツヤのある黒色の小さな半球形の甲虫で、急流でない清流の砂質底のような流水域の水辺を好み、ここに石下やごみだまりの下などで生活している。

ガムシは一般にゲンゴロウと混同される甲虫で、近年ゲンゴロウ同様に漸減している。ゲンゴロウと同様に静水域を好み、池や沼、水田などの水域で生活する。

コガムシはガムシとよく似るがガムシより小形である。生活習性はガムシ同様である。

ガムシ類はゲンゴロウ類に比べ北海道以南、朝鮮半島から中国、台湾以南にわたる南方までに分布域をもっているものが多い。

毛翅目 TRICHOPTERA

ケトビケラ科 SERICOSTOMATIDAE

②マルツツビケラ (筒巣)

Micrasema quadriloba MARYNOV

第16図

毛翅類とは俗稱“ザザムシ”、成虫を“モドロ”と呼び、夏の夜川辺に立つ衛星などに、時として大群が群集乱舞する昆虫の一一群を指す。この幼虫はみな水中生活をし、種別に好みとする水中の巣材を糸で織って巣を作り、この巣の中にひそんで生活する。巣は流水中の石下などに附着したものや移動できるものなど種によって異なる。

検体のマルツツビケラの巣は円形に開口し、全形は円錐形で頂部に向て弱く弓形に曲がる。表面は底面の細砂を不規則に積み重ねたように糸で織るのが普通であるが、粗砂に混じり相当量の微木炭粒を巣材にしているのが特異である。これはこの検体が生活していた流水底の様子を推測できると共に木炭粉を流下させた微気象や人の生活の様子が類推できてももしろい。また巣材に輝銀岩、石英粒なども見られるが、この解釈により水源や流路が読みとれないとどうか。

現生マルツツビケラは巣材選定からもわかるように礫小砂粒のあるような水域に生活する。つまり流速は遅からず流量も多からず微砂粒が常に洗われているような流れで、總じて清流である。

管巣の中には幼虫が複数、移動時には巣も共に移動し、外敵が現れると素早く管巣の中に引っ込み難をのがれる。この時流れるようなところには生活していない。

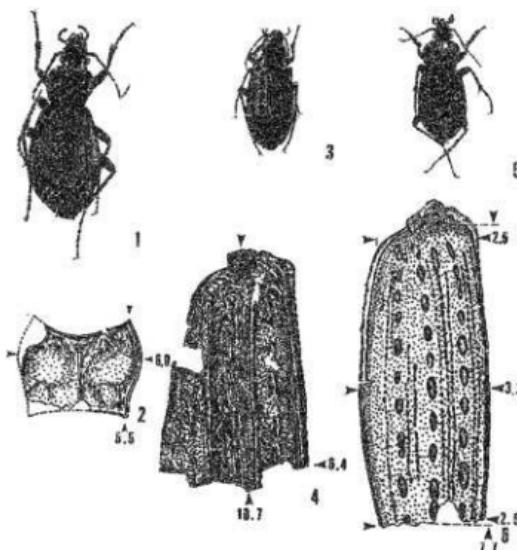
以上水生昆蟲7種について記したが、ここで流れや池水状況を推測するに

- ・流水は當時おだやかな清流で、水質は良質であったろうこと。

- ・ゲンゴロウの餌となる他の水生小動物が多くいただろうこと。



第16図 マルツツビケラ
(筒巣)



第17図 1: 現生アオオサムシ(体長22~33mm) 2: アオオサムシ前胸背板
 3: 現生マークオサムシ(体長25~32mm) 4: マークオサムシ左上翅(上半分)
 5: 現生セアカオサムシ(体長16~22mm) 6: セアカオサムシ左上翅(上 2 /
 3)

・流水や池状域にゴミはあっても、それがガムシを飼養するに満足なよごれの程度であったろうこと。
 などが考えられる。

VII 地表歩行性甲虫

②アオオサムシ

Carebus insulicola CHUDOIR

第17図

③マークオサムシ

Apotomopterus maeckii aquatilis (BATES)

第17図

④セアカオサムシ

Hemicarabus tuberculatus (Dejean et BOSOUVAL)

第17図

⑤ニセツマキミズギワゴミムシ

Bembidion somilunium NETOLITZKY

第18図

⑥オオゴミムシ

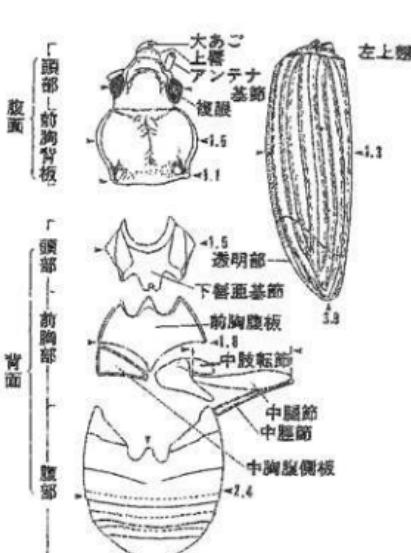
<i>Lesticus magnus</i> (MOTSCHULSKY)	第19図
⑩オオキンナガゴミムシ	
<i>Pterostichus samurai</i> (TUTSHNIK)	第19図
⑪ヒロムキナガゴミムシ	
<i>Pterostichus dulcis</i> (BATES)	第20図
⑫ゴミムシ	
<i>Anisodactylus signatus</i> (PANZER)	第20図
⑬マルヒメゴモクムシ	
<i>Bradycealus timbriatus</i> BATES	第20図
⑭キボシアオゴミムシ	
<i>Chlaenius hasticalis</i> MOTSCHULSKY	第21図
⑮オオトクリゴミムシ	
<i>Oodes vicarius</i> BATES	第21図
⑯トクリゴミムシ	
<i>Hachnacrepis hrolixa</i> (BATES)	第21図

以上は昆蟲分類上“オサムシ科”に属するものである。世界で30,000種、日本では約1,000種が記録されている。分類については見解が分かれ、問題もあるうえ、生態的な研究には未だなことがある。

アオオサムシは畠地周辺の草本植物の密生した疊同や、枯葉物の堆積下などに見られ、普通金緑色に光る美しい甲虫である。

現生アオサはフォッサマグナを境とし種分化の相違があり、興味深い種であることから、より多くの検体があれば、日本のオサムシ群族分布にも話題の提供がされよう。

マークオサムシはBATESがShimonosuwa Lake (諏訪湖) を基産地として*C. aquatilis*として記載したのがはじめてで、湖岸に浮いていた水藻を押して多数採取した



第18図 ニセツマキミズギワゴミムシ
現生種体長 5 mm内外

(G. LEWIS)。その後青森・秋田・山形・福島・宮城・岩手県の主として泥炭地帯で採取された。(中根: INSECTA JAPONICA) 長野県にゆかりの深い甲虫であるが、検体は長野県で稀な記録である。

現生種は主として東北地方に限られた分布をしている。これら旧甲虫分布や旧気候の考察資料とし興味深いものがある。

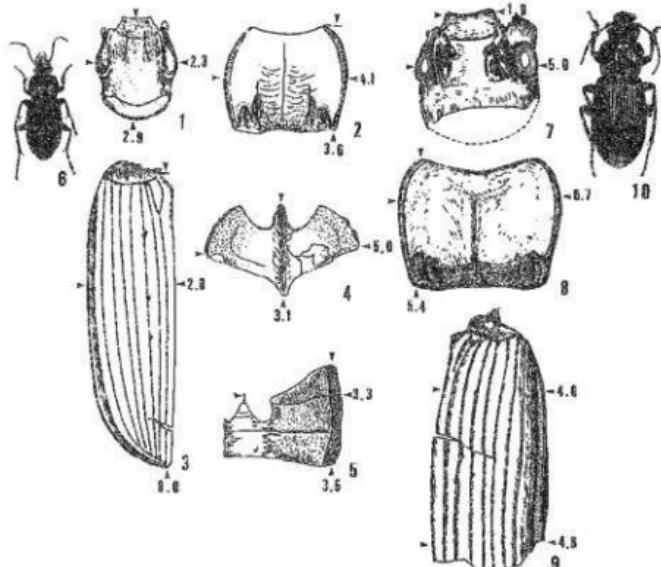
セアカオサムシは背面赤銅色をした美しいもので、アオオサと同様な環境下に生活するが、個体数はずつと少ないようである。

ニセツマキミズギワゴミムシは名の示すように水辺や湿性地の石下などを好んで生活の場としている。検体は川底が砂であったと思われるような砂質土の中から見出されたことから、当時の流れにそう湿性地に生活していたであろう。

オオゴミムシ、オオキンナガゴミムシは畑地などにもいるが、多少林辺に近い穀地状のところに見られる。

ヒロムネナガゴミムシはミズギワゴミムシと同様な湿性地を生活の場としている。

ゴミムシは極めて普通の種でいたるところの畠地などに多いがマルヒメゴムクムシは小形でもあつ



第10図 1~6: オオキンナガゴミムシ(1: 頭部 2: 前胸背板 3: 左上翅 4: 中胸腹板
5: 後胸腹板 6: 現生種・体長13.5~17mm)
7~10: オオゴミムシ(7: 頭部 8: 前胸背板 9: 前翅右2/3)

て、目立ちにくい。

キボシアオゴミムシも畠地の周辺状の地を好み背の黄紋が目立つ甲虫である。

オオトックリ、トックリゴミムシは草の生えた路端や畠地による見られる黒くて素早い動きをする甲虫である。

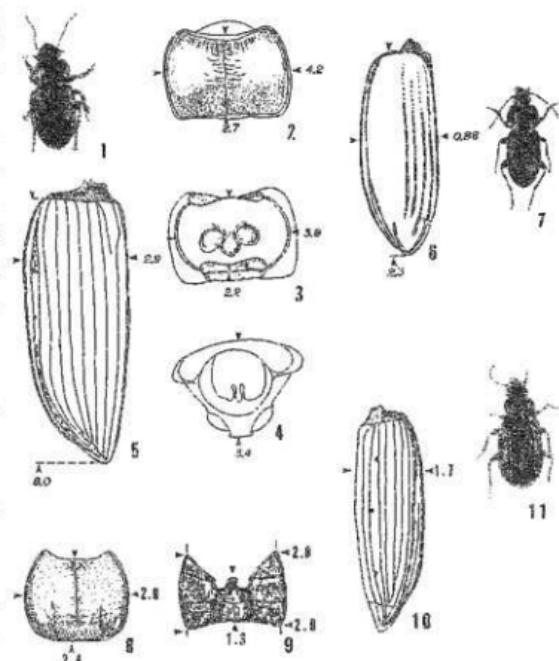
現生ゴミムシ類の分布はオオゴミムシの台湾にも見られることを別とし、どれも日本及び朝鮮半島・中國以北・シベリヤ方面の北地分布系の甲虫である。また生活場所は川端や水田などの湿性地、畠地や林縁地などであり、広く見れば人の生活地域及びその辺縁に分布している。

VII 考古学と昆虫学

自然科学と考古学の有機的関連の必要が呼ばれてから久しく、遺跡探査に発掘に、保存処理に等考古研究に果たしている自然科学の役割は目を見張るものがある。動植物もかなりの成果をあげてはいるものの昆虫学のそれは決して目ざましいとは云い切れない。昆虫学のうち甲虫に関する学問と考古学との接觸は、他分野の昆虫学に比べ出土昆虫遺体の頻度上からも密接することが重要と考える。しかし、

現在日本の甲虫研究は多方面にわたって進められてはいるものの、基礎的な“分類”が未だ完全に確立していない。分布については大筋はとも角細部に至ってはほとんど未知で、長野県のそれも例外でなく未知のことが多い。

この様な現況の中で日本各地の発掘が盛況を極める中、低叢地を持つ遺跡では多數の昆虫遺体が出土しそ

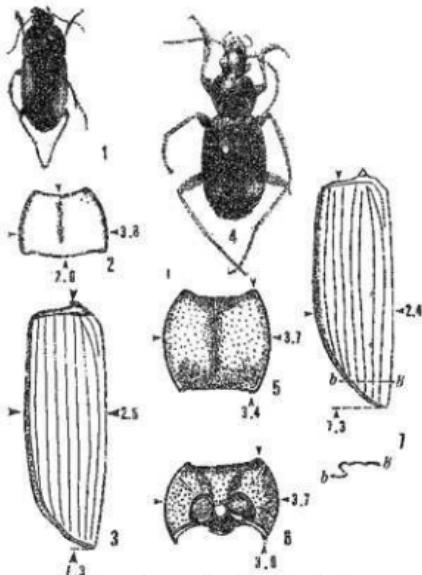


第29図 1～5 ゴミムシ(1: 現生種。体長11～13.5mm 2: 前胸背板
3: 前胸腹板 4: 前胸部前側面 5: 左上翅) 6～7 マルヒメゴモク
ムシ(6: 左上翅 7: 現生種・体長3.0～3.9mm) 8～11 ヒロムネナガ
ゴミムシ(8: 前胸背板 9: 後胸腹板 10: 右上翅 11: 現生種。体長9
～10mm)

の解明を待っている。多くの研究者や研究機関では遺体の同定に多忙を極めているとも聞く。こうした中で、“化石”とも、自然の残した“遺物”ともとれる昆虫遺体を、古生物学の面から、考古学との関連から、本来の昆虫学の立場での何れにせよ研究を進めねばならない。たまたまその気運が一部ではあるが近年盛り上がり実施されつつある。おくればせながら嬉しい次第である。

このような動きの中で、全国的にみて長野県はこの資料に乏しい県となる。本県は山岳県のため河川は急流域が多く、火山県のため透水性土質に富むなどで、低湿地遺跡と呼ばれるところも少なく、あっても狭小域であったり必ずしもそこが昆虫遺体包含の約束ではなく、長野県での昆虫遺体は極めて貴重なものとなろう。現に“中部高地の昆虫”としてその筋の注目も集めつつある。

この稿の資料は発掘に不必要的廃土の中に光った一片の甲虫片を、“貴重な宝物”とも、かけがえのない“自然からの遺産”と考え考古のみならず昆虫、古生物学にも活用したいとの懇願をしたところ、組織やこむつかいらしい筋論や手続きの中にはあって理解ある協力者の助力を得てようやく採取の実現となり、廃土の中から懸命に拾い出したもの的一部である。見落しはとも角、初期の段階



第21図 1～3：トクリゴミムシ(1：現生種・体長10.5～11.5mm 2：前胸背板 3：左上翅) 4～6：キボシアオゴミシ(4：現生種・体長12～13mm 5：前胸背板 6：前胸腹板) 7：オトクリゴミムシ左上翅と翅端断面。現生種体長12～13.2mm(体型は1.に似る)

から計画的にこれと取り組んでいたら、数百数千倍の資料収集が出来、これが中部高速資料とし大きく関係學問に寄与したであろうことを想うと、うず高い塵土の中の昆蟲達のうめきが聞こえて来るようではならない。

“長野県埋蔵文化財センター創立10周年”は記念する節目である。共に喜び今後の隆盛を願う一人である。今後“長野県”“文化財”をかけ継ぐにあたっては、広い視野と展望の上に、學問を覺しつつそれに悔なくふさわし内容と実動を期待し止まない。

IX まとめ

これまで幾年月佐久池城を主とする長野県の甲虫類とたわむれて來たが、新たに大量の遺跡出土昆蟲遺体と出相い、苦しみつつも楽しくその解析をこころみるに当たり、各分野・多くの先生方に指導助言、資料恩与など深甚な助力を承ったこととを配し深謝申しあげたい、多少なり参考に共しえれば幸せである。

お世話になった諸先生 奈順不同 敬歎所屬等略

藤山 家徳	(古生物学：昆蟲化石)
大平 仁夫	(昆蟲学：コメツキムシ)
笠原 順磨	(昆蟲学：オサムシ)
長谷川 仁	(昆蟲学：カメムシ)
中根 錠彦	(昆蟲学：甲虫)
宮沢 豊	(昆蟲学：オサムシ)
篠永 哲	(昆蟲学：ハエ)
清水 常夫	(ハエ)
宮武 賴夫	(昆蟲学：カミキリムシほか)
木内 信	(昆蟲学：糞虫)

本文獻略

執筆者一覧

- 赤塙 仁 (あかしお ひとし) 中野実業高等学校
川崎 保 (かわさき たもつ) 長野県埋蔵文化財センター
寺内隆夫 (てらうち たかお) ハ
水沢敏子 (みずさわ きょうこ) ハ
神村 透 (かみむら とおる) 木曾郡町村会
町田勝則 (まちだ かつのり) 長野県埋蔵文化財センター
青木一男 (あおき かずお) ハ
西山克己 (にしやま かつみ) ハ
桜井秀雄 (さくらい ひでお) ハ
原 明芳 (はら あきよし) 長野県教育委員会
出河裕典 (いでがわ ひろのり) 上田市立東小学校
宮脇正実 (みやわき まさみ) 痛ヶ根市立赤穂南小学校
河西克造 (かさい かつぞう) 長野県埋蔵文化財センター
興水太仲 (こしみず たちゅう)

長野県の考古学
越後長野県祖國文化財センター研究論集 I

1996年1月9日発行

編集 研究論集編纂委員会
発行所 越後長野県祖國文化財センター
〒387 長野県更埴市星代 長野県立歴史館内
TEL 026-274-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社